九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

【日記翻刻】奥田八二日記（1990・91年）

中園，敬生
元福岡県職員労働組合北九州西支部長

花田，龍志
元高教組副委員長

藤岡，健太郎
九州大学大学文書館 ： 准教授

https://doi.org/10.15017/2344792

出版情報：奥田八二日記研究会会報. 3, pp.1-322, 2019-09-30. 奥田八二日記研究会(九州大学大学文書館内)
バージョン：
権利関係：

【日記翻刻】

奥田八二日記（1990・91 年）

翻刻　中園　敬生（1990 年）
　　花田　龍志（1991 年）
校訂　藤岡健太郎

凡　例

1. 原文は一部を除き縦書きであるが、横書きに直した。
2. 漢字の旧字体および異体字は固有名詞や漢詩の引用等を除き、常用漢字体または印刷標準字体に直した。また原文に「圣」と記されたものはすべて「経」とした。
3. 明らかな誤字・脱字については適宜修正した。疑問のあるものについては「ママ」を付した。判読できなかったものは「□(不明)」とした。
4. 踊り字のうち「くの字点」は文字に直して表記した。
5. 原文の振り仮名はそのままとした。
6. 原文では句点と読点が明確に判別できない書き方がなされているため、本翻刻においては文脈等から適宜句点・読点を判断した。
7. 〔　〕で記されたものは原文の記述である。
8. 日記本文記入欄以外に記入されたものは【欄外記入】とし、各日の末尾に掲載した。各巻末に記載された記事については【「〇〇欄」への記載】とした。
9. 原文中に差別用語等がみられるが、歴史資料としての意義に鑑み、すべて原文のとおりとした。
10. 日記に貼付または挟み込まれている新聞記事等については、その記事名・掲載紙の情報等を【　】で記し、文面については掲載しないこととした。

1990 年

年頭所感

年末には墓参りとして佐方と刀出、仏壇まいりは佐方と本家と田辺と刀出、そして五郎さんの戦死についての周辺の事情提供と、ずいぶん祖先供養の行動をしたものだ。正月は三社参りなど考えてなく在宅をつづけることになる。年末から一彦一家四人、啓二が元旦に三人で来福するなど、子や孫が顔を見せたので、生きている一族が寄ってはしゃぐことになる。代々つづきのなしうる最善であったろう。佐方には孫娘たちを連れて行ってやりたかった。婆ちゃんが孫の子を見て四代会うことになるわけだが、それはかなわなかった。田辺に行ったらよろこんでくれた。これも私の心の一面があらわれたと思っている。祖先崇拝でも何でもないが、どこか底の方にある心の発露であるが、体調も衰えていて、何となくその気持になったのであろう。ところで新年、今年は国民体育大会の年で平常の業務に大きなプラスがあるし、知事選を来年にひかえて三月頃から、とくに五月以降は周辺がわいわいいい立てるであろう。意思表示は控えたいので避けた発言はするが、周辺がそれを許さなくなるのがその頃だ。そういう意味で騒々しい年ということになる。ひとさまのこと、公的なことはともあれ、体調を維持し、今より悪くならないように努力していきたい。

1 月要記

今年の一月は近頃各年にくらべ寒さが強かったようだ。大寒は二十日からだが、文字通り冷たさ一きわだった。大雪も福岡でみた。盛岡での冬期国体に出向き、雪の町を見ることにもなった。ここでツララをみた。久しぶりである。相変わらず秘書室の日程の組み方は酷だと思う。正月は二日まで暮れは三〇、三一の二日、盛岡ゆきで土曜も日曜もなくなってしまい、そのあと上京は日帰りでギューギュー詰めの日程になっていて疲れた。それに一月は新年会の類がやたらと多い月で、今年も例にもれず、その出席も酷使のうちにはいる。平素から、とくに昨年の九月以降日程上の酷使が感じられる。何のためにそうされなければならないのかわからない。二月にもそれがつづくだろうと思う。秘書室の日程の組み方では酷使のあと、「まだ使えるかな」という具合に済生会病院で点滴をうけるようになっているかの観がある。休養とって検診ではなく、酷使して検診点滴だからである。イギリス型風邪が月なかば以降かなり流行しているようだ。風邪もたまにはひきたいくらいである。

1 月 1 日（月）

おおぜいでにぎやかに迎えた新年

午後啓二が帰福して家族人口が九人。沙理もしゃべる走るでにぎやかになった。夜はスキヤキ鍋を囲む。四畳半のコタツ部屋、並んでさわいで一ぱいになった。これで初詣で代わりと

する。みんな寄って笑うことができればいいとせねばならない。予算陳情で上京した際、啓二に電話で話した中で、車で帰福しないよういっておいたのに、そうしなかったわけだ。二〇時間以上かかったので完全に疲れらしい。私は事故をおこしたり、事故に巻きこまれたらいけないという事の方が強調したかったからだがそれはまぬがれたようだ。危険に近よらないことはいうまでもなく、帰京にまだ問題を残している。コウ氏が来て、直美のことが話題になった。サンフランシスコ地震に逢遇したのだが、彼は早く帰国して結婚をするよう勧めるし、仲介したい人もいると話していた。ともあれ三世帯全員が揃って鍋をつついてはしゃいだというのが今日のすべてであった。晴れてはいたが、空気は冷いらしく、部屋の中もひんやりした一日であった。気になる用件はたくさんあるのに、何もする気にはならない。無為

１月２日（火）

子供の頃の正月

九人がかりの雑煮だが、食べる餅の数は十一個ぐらい。二個たべる者が二人か三人、ごはん抜きでそのくらい。昔はこの数なら二人分か三人分、それも昔の田舎の方が一個が大きい。近頃は米の消費量が減ったといわれるが、昔はそれしか食べるものがない程で今は逆に他にいくらでも食べる物があるからである。米も餅も食べなくなった。他面では栄養が過剰になったともいえる。私自身餅は少年時代一度に六個は食べたと記憶する。今はとても考えられない。昔は大家族でもあったからであろう、直径四～五〇センチもある鍋に一ぱいの味噌汁の中へ餅をどんどん投げ込んでの雑煮。こちらは味噌汁ではない。半ば暗い時刻に起き出て食べて、下駄をはいてお宮に参詣した。着物が正装であった。足袋も新しいのを買ってもらって元旦におろしてはいた。冷いので着物の袖に手を入れた。帰ったら近所の者が数人ずつ集ってコマまわし、パッチン取り、かるた取りをして遊んだ。

１月３日（水）

対向する立場

三ガ日の一日を年始受けに使わねばなくなり、今日の日中の時間を山ノ上ホテルでそれに使った。「正月の三日間ぐらいは自由にさせてくれ」というのが私の言い分、「正月の一日ぐらいは我我にあけてくれてもいいじゃないか」というのが平素遠慮して近よらない古い懇意であった人達の言い分である。では三日の半分をそれに当てようという折れたところで今日の集まりとなった次第。いいのかよくないのか判断したくないが、人間の心理というものは妙なものだ。それがエチケットにも通ずるのだろう。休日というものをどう利用するか、大変ちがった角度から、合致しない考え方が共存しているものだ。テレビではサッカー、ラグビーなど正月にきまって放映される。それでかせぐ人と見て楽しむ人とは逆の立場ながらぴったり共存している。でも今日のは、私にとって自由に使わせてほしい一日であった。

外国旅行する人口が急増しているらしい。息子たち夫婦は孫をつれて帰福したが。

1 月 4 日（木）
国体を失敗させようとする勢力があるようだ
昨年とほとんど同じ年始行事で一日が暮れた。今年は国体があるので私の挨拶の中にその事が強意され織込まれたし、国体事務局に足を運んで訓示めいた挨拶も行った点は例年にないことであった。ただ国体については、募金仕事が加わっていて、これが嫌な面をもっている。林副知事が募金の件で企業を訪問すると、「国体のため企業が協力すると奥田を助けることになるからしない」という例があるらしい。「奥田の失点になるように」という
考えを根にもっている例としてこのほか国立博物館誘致や県庁舎跡地利用意見があることもわかっている。つまり当方は微塵もそう考えてなくても、先方が大きな事柄を政治的にふりかざしてくるのである。おそらくゴリゴリの自民党びいきではないかと思うのだが、今目前にそれが国体募金となってあらわれているときいてガックリくる。小児病的といいたいが、現実だから困ったものだ。国体失敗のため暴力が出てこないとも限らない。

1 月 5 日（金）
確言できない前途
一日中市内のマスコミ各社、銀行、大企業などへの新年挨拶まわりであった。昨年と同じである。昨日よくねむれなくて疲れ気味で半ばやけくそみたいだが、行って茶を出されるとつい話し込んでしまうことになる。各所各社の役員人事が少しずつかわっていくのがわかる。話題は今年の国体、景気、それに激動する世界情勢などである。みんな共通の認識だなと思う。また、日本は激動する世界の中で、どうなるのかということになると、確かなことがいえないという点でも共通している。東欧だけでなくソ連も異変が感じられるという。アメリカもパナマに手を出して矛盾をかくせられなくなっているようだ。日本で二月に予定される総選挙の結果が大事だが、それを予言的にいう人は少い。野党各党は強くないが自民も安全ではない。こんな不確実な状況は私自身にとっても珍しい。何もいえないのである。社会党がこうあるべきだとの注文も出せないでいる。こんなことはかつてなかった。

1 月 6 日（土）
祝宴過剰
迎春の祝賀会や名刺交換会という名の会合がつづき、どの程度で区切られるのか知事出席が要請され出席する。型にはまった挨拶をすることになる。又、今日、明日は消防の出初式が各地で催され、これにも三役など手分けして出席する。これは古い仕来りであること、子供の頃から知らされてきたものだ。あとで飲みながら賀詞の交換にもなる。外国人は驚くだろうと思う。そのほかあれこれの口実で「飲みごと」が一般に多すぎる。ホテル、料理はこ

れがあるとないとで利益がぐっと違うといわれる。結婚式もそのなかに数えられる。やたらと料理を出して捨てることになるのだが、その過剰サービス部分が意味をもつらしい。それぞれの人にはチャンスが多いわけではないかも知れないが、今の私のような立場にあると集中し、引きつづき、一つ一つ応対していると嫌気さえ感ずる。ごちそうには手を出さず、夕食は帰宅の後に、いくらまずいものでもゆっくり食べて味わえるものの方が好ましい。

１月７日（日）

県政研究会の出発

昨日は中食しながら庁議室で九大の知人達が集って県政についてあれこれ問題を提起しあってみた。この集りを県政研究会と名づけようということになった。非公式任意の組織である。県側からは私のほか、安達と松山、家永が加わっていた。学者側の代表格は大屋や徳本。仲好会のメンバーの若返りをはかったものといってもいい。福留、東定、河野、石川らは若手のうちにはいる。カゲの組織として頭脳的役割を担おうとの意欲がみえる。「革新」といわれる県では過去にも今も、もっと強固なものが作られているはずである。県政一般についてみても、わが県は政争の傷跡が深く、産業構造の変化を強く受け、様々な分野で他県にくらべおくれを取っている。役人の殻も相当に堅いものがある。そうした古さをどんどん脱皮すべく努力しなければならないから、こうした頭脳集団ができることはよろこばしく、晩きに失したのではないかとさえ思われる。それは又他面学者の側にも行政や政治の実態を知ってもらうチャンスにもなろうと思う。

１月８日（月）

馬どし、よい事あれ

元号が平成になってまる一年が経つ。依然好景気がつづいている。あと半年という意見があと一年は大丈夫だろうとかわって来た。四年目だろう。解同県連の旗びらき（グランドホテル）で馬が九頭とんでいる絵の冊子が配られ、馬年にちなんで〝馬九行く〟（うまくいく）ともじっている。馬については天馬空を行くというほかは馬鹿に代表されるように、よくない使い方が多い。馬鹿ぐい、馬鹿力、馬耳東風又は馬の耳に念仏、馬子にも衣装といった具合である。実際馬はおとなしく、人間のいいなりになっている愛すべき存在である。落馬した人も馬に踏まれることはないようだ。私は久留米五一連隊にいた頃花畑の踏切りで電車に驚いた馬が前足を急にあげたため落馬、かつ放馬して大変なことになったと思いつつ兵舎に帰ったら馬の方が先に厩舎に帰っていて難を逃れた若かりし頃の経験を思い出す。ほんとうに馬はいい動物だ、だのになぜあなどるようなケースに馬をあてはめて使ったのだろうと不思議である。戦場の馬はかわいそうだ人間の犠牲になる。

1 月 9 日（火）

活気にふれると快い

一月もどんどん過ぎてゆく。何にために忙しく動いているのかわからぬまま他動的に動いていて疲れるだけの毎日である。でもいやいやのなかにでも、元気を出していいこともある。東海大学の学長が知事室にみえ、宗像に二つの（情報、国際）専攻科をもつ短大（各一四〇人定員）を四月から開校するという。国立大ならなかなか固執が強くて考えられないのに、私立だから腰軽く時代に対応しているように思えた。又夜は大川の新春家具展及び新春会に出席したのだが、大川の家具界も最近は全国的に注目されるように、デザインなどに意を注いで伸びて来たといわれ、活気が感じられた。陳情項目も話題に少なからず盛り込まれていたが、活気で相殺され、快い大川ゆきになった。こういうことも多忙の中であってほしい。東海大や大川インテリア産業界が、私の日常のいや気を吹きとばしてくれた一日だった。ひるまの造園業者の集りもまた活気があってよかった。みずから境地をきりひらいていく人達は頼しいし、快いものだ。

1 月 10 日（水）

人間生活の「あいまい」さ

九工大の山川教授と夕方まで二時間〝ぐらふふくおか〟取材の対談をしたが、あとの時間で、彼から日本文化の「あいまい」さの長所について示唆ある話をきくことができて面白かった。「どうもどうも」という言葉がどんな意味にも利用され、相手にいいように響くというのが一つの例。彼は尺八を操作するが音は指の角度でかえられるといっていた。親しい仲ではかんたんな言葉で意思が通ずる。あゝ、うんがそれだし、夫が妻に「一ぱい」といえばすべて関係用件がみたされるというのも例に出た。それをきいて私は「科学」というものが「あいまい」を認めない方向に進む反面人間は元来文化的で、非科学的「あいまい」さをもつものなのだ。人間というよりは自然も、そうした一面をもつものだということが教えられたような気がした。医者の診断処方は科学的でありかつ「あいまい」さを要するようだ。患者との対話も必須のプロセスであって科学万能ではないことがわかる。農作物の施肥など管理も、食味を満足させる調理も「加減」ということで処理されるのがその例であろう。

1 月 11 日（木）

飽きる

「飽きる」ということを考えてしまう。食欲があって、それが満足されて、なお食べつづける状況におかれると「飽きる」といおうか。又毎回毎回同じものを食べる状況にあるが、別に食べるものがあるのにと思うと「飽きる」といえるだろう。食べ止めるなり、別のものが食べえないのであれば「飽きる」ことにはならない。欲が向かないのである。食べることに限らず、時間の使い方、余暇のすごし方、環境、景色、人間関係、衣服、身のまわり品、そ

の他何でもわれわれの欲望の対象になるものには「飽きる」という状況がありうる。無欲、無関心にもつながる。ふと考えると命に関してもそうだろうかとさえ思う。生きていこうという欲は自然であるはずだが、ふと、どうでもいい、どうなるかわからないがそれでいいと思う瞬間がある。若い人にはあろうはずもないのに、私には近頃ふとこういう瞬間がある。現実からの超越でもあろうか、人生に「飽きる」ということなのかなと思うこともある。むずかしくいはないで、欲がなくなったのだといったらいいかも知れない。

1 月 12 日（金）

浮世絵展をみて

毎日新聞社が県立美術館で酒井コレクション浮世絵展をしているので、先日見残したため、今日残りを短時間で再見学した。改めて知る浮世絵だが、百科辞典によってその要点をメモしてみよう。（ブリタニカ、日本語版）絵の主題区分では、役者絵、美人絵が主体だが花鳥絵、武者絵、角力絵もある。形式は木版画と肉筆画がある。形式には大判錦絵、中判、細判、それに柱絵などがある。木版画は絵師、彫師、摺師の工程を通るが、絵師は全工程に深くかかわる。材料は紙、版木、彫刻刀、顔料、刷毛、馬連などがある。何万枚という大量のものが出まわったのだから、使われたエネルギーの巨大さに驚かされる。菱川師宣が一六六〇年頃に開花させ、前期、中期、後期と二〇〇年ほどの歴史の流れがあるが、明治に至って衰亡する。清信も前期の傑物、中期は全盛期で春信、清長、歌麿、写楽などによって円熟した段階を作る。後期は歌川豊国が代表、葛飾北斎も。今回の展示は「錦絵の黄金期、美人画展、歌麿、春信、清長たちの世界」と題され、湖龍斎、英山を加え五人のもの一五〇点、圧倒された次第であった。

1 月 13 日（土）

寒雀にあそぶ

百千寒雀下空庭　　楊万里
小集梅梢話晩晴　　（南宋　一一二四～一二〇六）
特地作団喧殺我
忽然驚散寂無声

寒雀の動きに対する何と鋭い観察と詩表現であろうか。月末に玄羊会の恒例の書初会があるので、出品するために「漢詩日暦」から詩を得ようと思って、その日のページをくってみたら、わかりやすい、すばらしい、このような詩に遭遇することができた。「喧殺我」の部分がわかりにくかったが、「かしましくてやりきれぬ」と解説があった。揚万里は有名な作詩家という。硬い漢字をならべてこんな軽快な詩ができるとは頭がさがるのみ。とてもとてもこのような鋭い小時の現象のキャッチはできるものではない、との直感である。漢詩に対する認識が足りないことはいうまでもない。

1 月 14 日（日）
川越初枝さんから
正月に川南町市納の川越初枝さんが年賀の手紙をくれ、やっと返事を書くことができた。八十歳になったという。字も弱っている。でも長寿会活動で頑張っているとのことであるし、そうした活動の中でやっている短歌を添えてあった。

新春の初日を拝み感謝なし
明るく生きん平成の世を

というのである。「あの人が」と思うが、立派な生きざまである。一つ下の家の内野内さん宅にわれわれは仮営していて経理室を置いていた。そこのアグリさんは入院したり退院したりだが、曾孫の守もするという。大変なことだのに。いつか行ってみたいとは思うが、自由の身でないので叶うまい。思い出すだけで十分というほかない。川越さん宅はわれわれ被服係をおかせてもらっていた。「明るく生きん平成の世を」という気持は敬意に値する。長寿会であれこれ勉強しているから言えるのであろう。

1 月 15 日（月）
時代の激変
一月七日が七草、十四日が子供の頃のとんど、近年は十五日が成人の日、昔は小正月、十六日が藪入りというように年のはじめの行事がつづく。十日がエビスで県庁前は交通規制がおこなわれた。太宰府のウソカエの日は天満宮に行ったが、行事はよく見ないまま帰った。ウソをとりかえっこするという（鷽替と書く）（エビスは恵美寿又は戎と書く）。おにお、おにおい、おにすべという行事も地域的に親しまれてはいるが、今の若い者にはこれら昔の仕来り風習にはなじまぬ生活しかない。それでも成人となる。よしあしは別にして、感ずるのはこの数十年の生活環境の激変ぶりと自然なる風習の破壊である。伝統の保持などいえるものではない。子供の頃遊んだ凧、コマ、羽子板、カルタなど今は社会の片隅、ほんの形だけとなって残されている。今日成人式を迎える人達が子をもつ頃に更にその子たちが別の世界に生きていくことになる。文化や伝統が地域性、季節性をなくし、規範力をなくするのである。雑煮の時代である。

1 月 16 日（火）
青少年非行を規制するにはどうすればよいか
カラオケボックスはまだ見たこともない私だが、最近その密室性が悪用され、青少年非行の場として問題化されだした。今日県の児童福祉審議会から答申があり、規制強化を盛り込んだ答申となっている。深夜の立入りを禁止し、罰金も課すことを内容とする意向である。十八歳未満、十一時から朝四時までの深夜が規制の対象である。対象の場は興行場、遊技場一般であるが、カラオケボックスを例にとると、県内で昨年末一三二店、一三〇〇部屋にのぼ

るという。家族連れで行く人もあるが、密室性を利用して飲酒、暴行その他いろんな非行も随伴している。子が親の制止をきかないというか、親が子を教育できないというか、犠牲になるのは子どもだけではなく、親も受難するというのが現在である。親の教育力がカラオケボックスの安易快適さに負けてしまうのである。子は衝動的に動く、親は衝動を知らない。知っても制止できない。そのさきで犯罪ないし類似のことが起るのである。条例による規制強化もどれほど役立つだろうか。

1 月 17 日（水）

外国人にサービスする方法はないだろうか

アメリカの領事館からの招待があり、誰か他に一ペアをということであったので、福留久大氏に連絡したらよろこんで応じてくれ、六時半から主席領事邸での晩餐会となった。エヴァンス・リヴィア領事、ミチャ夫人、それに八才というエリゼ嬢の三人家族。彼女はインタナショナルスクールに行くことができているということなので、私にとってまずまずであった。「国際化」と盛んにいわれながら、日本の内実は、二〇年前私がロンドンで経験したのとくらべると大変おくれている。子供の教育条件についてまずは安心できるというのでなくては、外国人の日本滞在は無理というしかない。今年九月には新学舎がオープンする運びになるといわれる状況なので幾分改善されるが、まだまだ多くの問題が残っている。県も外国人へのサービス強化を大きく打出さなければならないと痛感する。以前から公用バス一台ぐらいは運行させ、県内観光案内ぐらいはやれないものかと考えているのだが、熟さぬ課題のようだ。一歩ふみ出して提案してみようか、そのほかに何かふみ出しうるテーマはないだろうかと思いめぐらせているところである。

1 月 18 日（木）

急変はじめた国内情勢

あと一ヵ月で総選挙（必至）という。海部総理はヨーロッパ遊説から帰国したが、海部「続投」には与野党双方からクレームが出されている。安倍が盛んに牽制球を投げ、自民の過半数割れを望むかのごとくである。そこへ今日の長崎市長の狙撃である。国内も、海外に劣らず揺れはじめた感じがする。日本の天皇制について海外からも注文がつけられること必至である。それが次の選挙にかげをおとすという。財界はそれなりに危機感をもち、社会党中心の政権にでもなろうなら一ぺんに経済後退があると警告を発しはじめた。みんなピリピリである。福岡の各選挙区には社会党は従来どおり一人しか立候補していないのに、どうなるかわからんとの声がでている。だったら自民が過半数割れするはずはないと思うのに、全国的には必ずしも自民の安定が予見されていない。公、民、共が伸びるという声はきかない。だったらやはり何が起こるか誰にとってもわからないということのようだ。奇々怪々の政局である。九〇年代に入ったとたん、世紀末がはじまったといえる。まずは本島市長問題で

マスコミがどう動き出すかである。

1 月 19 日（金）
北部九州研究学園都市構想
九州地方の相対的地盤沈下が問題となってもう数年になる。一方では東京一極集中が進み、それがオーバーフローして北関東はもちろん、新幹線東北線沿いでの東北の開発が急である。中部、北陸、関西、中国もそれなりに開発テンポは他にフォローしている。九州だけがぐっとテンポがにぶいわけだ。他が東京集中のオーバーフローということが関係するのに、九州まで届かないばかりか、経済効率主義が最優先されるため、石炭につづいて鉄が、そして造船、漁業、農業が世界規模の競争の中で不振である。それらマイナス条件をカバーする活力を新たに作りえないでいるのが九州の現状である。こうした事を背景に、この二年間思案を進めてきた北部九州研究学園都市建設構想を推進する懇談会が発足するところまで漕ぎつけた。県の企画部中心で、各大学や産業界の支援をえて、筑波、関西に次ぐ第三の学園都市を作ろうというもの。但し、筑波のように東京からの疎外型ではなく、アジア諸国との交流研究を中心にするとの特徴をもたせようとの野心を秘めている。理想を高々と揚げたというところ、内実盛り込みが課題。

1 月 20 日（土）
総理になりたい人
もう、総選挙一色になってきた。海部総理はヨーロッパの旅をした外交成果を誇示した施政方針演説をしたかろうが、党の長老たちはさせてはならじと、つっぱねている。野党側は代表質問で、三点セット即ち消費税、リクルート疑惑政治改革、農産物の自由化の諸問題について自己主張をし、国民に訴えて後の「解散」を期待しているのに、これも自民長老たちはさせないで、再開国会冒頭の解散を首相に押しつけているらしい。いってみれば自民内部の指導権争いと、総選挙の争点ボカシをねらっているようだ。これでは逆効ではないかと思うのだが、長老たちの思惑はそうでないらしい。自民の過半数割れがあるかも知れないといわれている現在、かえってそれを望む長老もいるとのこと。過半数割れになると海部に責任をとらせ、次は自分がと思う人、又その次は自分がと思う人が自民の中にうようよいるということなのである。そうまでして総裁、総理になりたいとの心理が私にはわからない。二月十八日の総選挙、近々に又総選挙といわれる。

1 月 21 日（日）
朝市
前の知事車運転手是松氏が来宅、日曜の朝市に行って来たと、アワビ、干鰺、いちごを手みやげにいただいた。近頃、都市近郊の農業地域では朝市がはやっている。是松氏の話では、

珍しくて安いものが何ぼでもあるとのこと。西区、糸島などは畑もの、海のもの、農産小道具類がどっと出てくる。常設的には昔から西新が有名で、午後は歩行者天国の通りになる。卸、小売マージンとくに今の消費税を考えると朝市では売手も買手も得をする。日本では流通経費が大きすぎるとアメリカあたりの指摘もある。買出し気分で車の列ができると是松氏はいう。面白かろう安かろうで人気がでる。日曜の暇つぶしにもなるのであろう。食品に便乗して小物も並べるだろう。これが習いとなると場所代、権利など問題も生ずるに違いない。ともあれ固定投資や税金やマージン割引、それに青空の快適さなど、庶民の日常そのものの自然で自由な発揮ができるのだから、あちこちに朝市が立つのはいいことだと思う。車社会がその背景にあることも事実だ。

1 月 22 日（月）

議員根性ばかりでは

十時からサンヒルズで県青少年問題地域会があった。昨年は宮崎勤事件をはじめ、県でも祖母殺し、コンクリート詰めなど、これに劣らぬ問題が多発したので、県条例の改正が必要だし、行動計画も市町村の現実的意見を取りいれての内容にすべきだとの声が高まってきているので、今日の協議会は重要だった。カラオケボックスの取締り規制も要望されている。私は会長・議長として協議会に臨み、又知事として姿勢も示さねばならない。各委員の中に議会文教委から出てきたのが、こぞって知事追及の立場から発言したのが特徴的。蔵内、大石、井手、原口がそれである。県議会じゃないのだから、他の委員の手前もあろうに、もっとわが身にも責任があるという気持で建設的に発言してほしいと思った。審議しているのに、青少年非行解決に知事は何をしているんだといったような発言を長々とやる。議員根性というか福岡の野党体質というか、いい加減なもんだなと思った。自己顕示欲が先立っている。他の委員は同様に感じたのではないだろうか。

1 月 23 日（火）

人の気持を察する

午後青少年対策課の者が来室し、昨日の会議で原口県議が、平島さんが脳ケッセンで倒れたのに発言を中止せず、まとまりの悪い発言をつづけていたことに対し、一般の委員さん達は気を悪くしていたと私に報告してくれた。平島さんはその後の経過良好との報告のついでの話である。救急車を呼んで倒れた会議中の委員が一般職員から介抱されたあと担ぎ出されているその会場で、協議会の議題審議にふさわしくない発言をタラタラやって･･･良識がない、議会発言みたいに思っている、と他の委員さんはいっていましたよというのである。県会議員がああいう会議に出るとこまりますねともいう。昨日の記録では議員根性と私は書いていたが、他の県議も議会で知事追及のような積りでいたのだ。原口氏は平島委員が倒れたのだから、その瞬間事務官たちが介抱や電話連絡に走りまわり、やや騒然となっていた

のだから、発言を一寸止めるのが良識じゃないかと誰しも思う。ひとの気持を察するということを併せ考えねば人格が疑われるのではないか。

1 月 24 日（水）
雪
今日衆院解散一せいに選挙に突入であるが、それよりも今朝は七二年ぶりといわれる大雪でびっくりさせられた。降ったら前の坂道が危いといっていたばかり。伊良原ダムのことで犀川町に出向く日程は中止となり、おかげで雪かきを一時間余かかって行った。植木の雪落としもした。気温はうちの廊下で五度、外は氷点下、市役所の広報車が水道の氷結に注意とふれまわっていた。車社会だから市内の道路はみるみるうちに雪なしなってしまったが、あちこちの高速道は一せいに通行止めになっている。車の事故も今日は少くないだろう。子供の頃は雪ダルマ、雪合戦などよろこびたわむれるのだが、今はむしろ迷惑。スキー場は待っていましたとばかり張り切ることであろう。冬は一度や二度、こういう厳寒襲来があって当然である。手がかじかんで、着ぶくれして、こたつに入って何もできないことがありえた昔だが、今は煖房を十分にして同じようにせっせと働いている。雪で休ませてもらった私の今日、これは特別。

1 月 25 日（木）
秘書室の人達の集り
私が知事になって七年間に秘書室勤務の経験ある者が、夜金剛園で焼肉パーティを行った。四〇人近く来たろう。しょっぱなに新規秘書室に来たのは近藤、松尾、古沢、三笠の四人という。三笠氏は都合で欠席だった。是松氏はといえば、運転手は系統が別とのこと、はなしは少数与党のため追及ばかり受けた議会、マスコミ、右翼のことに及ぶ。当初にくらべ現時点で落付いて隔世の感ありである。はじめ、六月議会の中での追及で「議会解散か」と書かれたため（毎日新聞）追及が弱くなったことも思い出される。又失策の笑いばなしもある。行橋でのガス欠による公用車ストップ、新幹線博多駅での乗り間違い、九州横断道路朝倉開通祝賀式に参加の時高速で久留米まで行ってしまって十分以上延着になりヘリコプターのガソリン代がひどく余分だったとマスコミから責められたことなど、話の種は尽きない。しかし総じて秘書室は人材が揃えてあって事故が少なかったといえる。右翼に襲撃されること二度、一期目はまことに多難であった。

1 月 26 日（金）
二宮和土氏引退
二宮和土氏が永年の福岡地区労事務局長を退くので、その活動を称える会が大手門会館で六時半から開かれた。古い闘士の面々が顔を列ねていた。古いところで小柳勇氏も。昭和三

〇年代の労働界の激動の中で活躍した人達二〇〇人ほどだったろう。西日本新聞労組のロックアウト首切りの対象となり、彼は地区労入りした。岩崎隆次郎が議長だったか、福岡地区労は他の地区労にくらべ光っていたように思う。私は地区労運動について調査、提言した記憶があるが、二宮氏とダブって思い出される。彼は又住民運動の熱心なリーダーでもあった。私がすすめていた運動である、月隈の彼の住居では立派な活動者、世話人であった。一度その住居を訪ねたことがある。今日知ったのだが林武彦氏が仲人で二宮夫妻が生まれたとか。しかし近頃は労働界も様がわりしている。地区労といっても何ができるだろうか、何をする意志があるのだろうか、どうも休眠期に入ったようだ。新連合の時代にこれがどう蘇生するか、私には先が読めない。

1 月 27 日（土）

盛岡に行く（45 回国体スケートアイスホッケー盛岡大会々場）

盛岡への旅ははじめてであった。空路名古屋乗りつぎだが、往復ともひどく接続に待たされる。北上川の両岸にできた聚落の中心が盛岡といっていい。啄木が好んで使った「山」が東北最高の岩手山、「川」が北上川だとのこと。「川」は道路や線路に切られていていい姿には見えないが、「山」は今でも片冨士らしく雪化粧しててっぺんは雪にかくれている。カリーナホテルの窓からも西にみえた。県の面積は四国全部より大きいという。山ばかりに囲まれ、それらでできた谷の集合らしい。三陸の方は又別の趣があるに違いない。新幹線が盛岡まで延び、東京と三時間ほどで繋がれるとなって、花巻―東京空路は廃止になったという。企業誘致もどんどんあっているといわれる。又除雪は専門的に下請している企業があってほとんどの道は車社会の障害にならないと説明され、羨しくも思った。ただ、道路脇、車自体が被っている泥はどうか、すごい車公害といえる。誰も除こうとしない、美しくしようとしない。山野は美しいのに、川や道は汚い。啄木なら泣くだろう。経済主義いってんばりでスピードの得だけが残る。雪に囲まれた東北であってほしかった。

1 月 28 日（日）

雪国のよさは残せぬか

岩手の田舎に行っても、イロリをもつ農家、防寒頭巾をかぶる子供達は見られないし、藁靴をはく人もいないという。どの道も車がすいすい通り雪国の昔の面影はない。でも軒に下がるツララ、棒を立てて植木の枝を綱でつないでいる姿は見る。工場立地が進んでいるというから東京へ出て行った人達の U ターン、若手及び OB 化した労働力の現地留めおきがだんだん可能になってくる。いわば都市化が進む。それでも雪が降る。雪は野山にはいいが都市にはどうも仕末が悪い。都市化するスピードで、除雪により一そうの努力をしないと景観が汚されて、放置されて目をそむけたくなるところまでいく。ボランティア、義務分担、公共労役何でもいい、雪害から都市の美観を守る努力がなされるか、車規制（スピード、台数）

をするかどうかしてあの泥、雪にふりかけられた泥を除かないといけないし、洗車の回数もふやさないといけないだろう。今はもう儲かればいい、速ければいい、楽で便利ならいいということだけが先んじているようだ。盛岡だけでなく福岡だってそういう反省はいくらでも必要なはずなのだ。

1 月 29 日（月）
書初め会（一月十三日と同じ）
書道岸本教室の書初め会、納めの懇親会（くいだおれ）があった。私は正月休みのうちに書いておいた揚万里の「寒雀」を出した。「漢詩日暦」の一月二十九日にわかりやすいのがうまくのっていたから。

百千寒雀下空庭　　百千の寒雀空庭に下り
小集梅梢話晩晴　　梅の梢に小集して晩晴に話す
特地作団喧殺我　　特地団を作して我を喧殺す
忽然驚散寂無声　　忽然驚き散じ寂として声無し
楊万里（一一二四～一二〇六年）南宋四大家

うまく書けたどころではない。この多忙さ、我を顧るいとますらない日程である。よくあの時書いていたものだと思う。それにしても今日の参加者は八人、半分になってしまっている。岸本先生もますます元気、二枚色紙をいただいた。

○福寿
○何の木の花とは知らず匂ひかな（芭蕉）

1 月 30 日（火）
気に入らない家屋環境
ろうばいも、紅梅（鉢）もシンビジウムも、この暖かさ、花の勢いを保つべくもない。裏のピンクの佗肋もしっかり咲いてほしいのに、何となくみずみずしさがない。前のうちの白サザンカも咲くのはいいが、しばらくするとベットリしぼんで葉にくっついて終っていく。それから入り口脇のツツジはもちろん日にあたらぬので弱々しいが、裏のツツジも
近頃力なく見える。こうみてみると、何もかも勢いがないのに気づく。時期を通りこしたシンビジウムは別としても、多くは日照が少いわが家の環境のせいだろうと思う。ポカポカ一日中日のあたる場所をなぜ選択しなかったのだろうと悔やまれるが、今更その失敗をとり替えて逃がれる努力もしたくない。「車の通らない地点」と思って二十余年前に選んだせいである。だから今でも静寂だし、小鳥がろうばいにやって来る。自分だけの世界になることもできる。近年は家屋のまわりを手を入れた努力をせず放置して荒廃が進んでいるのが気になる。

1 月 31 日（水）

頭ペコペコ下げ廻る

一月はこれで終り。今日は東京へ日帰り、帰宅は十時半頃になってしまった。東京でも三カ所で役割を演じなければならない。正面に立たされるばっかりの立場である。それも、誰彼にかかわらずペコペコ頭を下げるように仕組まれている。懇親会といっても、テーブル式だと各テーブルをまわって頭を下げることを係の職員は欲する。これで普通常識だろうから仕方がない。このことは前々から感じていたのだが、やはり一寸ひどくはないかなと思う程である。知事という立場は尊敬されているのやら疑問に感ずることの方が近頃多い。選挙というものが背景にあるからであろうか、単なる会釈ではないのである。不必要に持ち上げられたり、逆にペコペコさせられたりである。それで礼儀ありということなのかも知れない。ホスト役がケースとして多いから、そう感ずるのであろう。仲間の中では言葉は鄭寧であるのは当り前だが、ペコペコはしなくていい、知事には対等さが見えなくなる。

2 月要記

二月にげるというが、今年もあっという間でしかなかった。とくに総選挙があったからでもあるが、当初予算編成提案という県議会対策で右往左往もさせられた。だが楽しい数日もあった。戦争中、つづいて戦後のしばらくお世話になった川南市納に行くこともでき、ついでに宮崎市の一ッ葉フェニックスリゾートを訪ね、青島に行くこともできた。綾町の照葉樹林もみることができた。一月下旬には盛岡に行けたし、つづいての国内楽しい旅行だった。それからビッグニュースにトヨタの宮田工場団地への進出ばなしがある。耳を疑うような話ではあったが、二月下旬に表面化したわけだ。十五年以上棚ざらしになっていたこの団地に大企業がはりつくことになると、造成目的が実を結んだことになるし、炭鉱がなくなって以後の衰退する筑豊に新しい光明、躍動の芽がみえてきたような感じもするわけだ。生産活動に入るまでにはまだ曲折と時間がかかるが、確かさは読み取れる。自動車生産ということに国際的問題が残らぬではないが、巨大な団地コストをもて余してきた立場からはヒットといえよう。

2 月 1 日（木）

何だか後の事を考える

寒気が強くて風邪がはやっている。私もノドが一寸変だ。昨日上京してトンボがえり、無理な日程となった。床嶋所長が東京新聞の老人性不眠症についての記事をみせてくれた。「やっぱり」と思ったのは眠るに要する力が衰えているとのことである。力を貯えるように努めなくてならないと思うのだが、今の状況ではとても力を恢復する環境はできない。徐々に衰弱していくようにも思う。眠る時には臍に力を入れ思いをそこに集中すればよいとの内容もあったようだが、安定剤をのんでごそごそやっているうちに何とか眠っているのだが、途

中用便のために起きることになる。これが妨げとなっているようだ。身辺まだまだなすべきことが多いのに、整理せずに終ってしまうのではないかと考えることもある。書物をどう処理すべきかも思案である。寄贈の途がないではないが、そのための整理を誰がするかである。昔ならあととりが、弟子がといえるが今はそれもない。頼みになる人を予め指名依頼するのも一方法と思うが、そんなことが今できそうにない。

2 月 2 日（金）

金印について

時間がとれたので、市美術館での南京博物院名宝展を見に行った。中日新聞社の主催という。やはり目を引いたのは兄弟印といわれる志賀島でみつかった漢委奴国王と廣陵王璽の二つの比較であった。（滇王之印の話もきいたことがある。）図録によると、前者は漢にとって外臣、後者は内臣の違いがあるが、寸法大きさはほとんど同じだし、下賜されたのは前者が一年早いという酷似。紐を通すところが、蛇と亀の違いがある。漢魏時代の金印の一覧表がのせてあるのも面白いが、二〇箇あり、竜、羊、駝、のがある。これら印はわれわれの常識のように、紙に押捺するのに用いるのでなく、竹簡、木簡を紐でしばる場合、その紐が封されるように、封泥し、その泥の上に封のしるしに用いる保証印だったと書いてある。字はあっても紙がでてこない時代のものというわけである。駝、羊、蛇など鈕印形は異民族に対するものであるが、蔑視の意味はなかったのではないかと説明されている。後漢光武帝が奴国王に重要な位置にあることを認めた証拠ではないかという。

2 月 3 日

杜甫五語（ママ）絶句

　江碧鳥逾白

　山青花欲然　　（杜甫）七一二―七七〇

　今春看又過　　吉川幸次郎　新唐詩選より

　何日是帰年

光景が出て来たあと自分の思い。「看」の字はまのあたりと解するようであるが、こういう読み方が決まらないと漢詩には理解できないものが多い。われわれも漢字を使いながらそう読めないのは漢字を日本化して使っているからに外ならない。できるだけ共通点を残していけないものかと思うが、国境あり民族ありで言葉も歴史も違っていくのだから仕方がない。外国語を勉強するつもりで接するしかない。前の二句とあとの二句が客観から主観へ、自然から社会へ、環境から個人の思いへと実にうまく移されている。杜甫絶妙というしかないのかも知れない。

2 月 4 日（日）

問われている民主々義

昨日の五党首討論会でもそうだが、自民党は総選挙に臨み、社会党を標的にして「体制選択」ということを強調している。東欧、ソ連、中国では共産主義、社会主義が破綻したのだとの解釈で、全国民にそれを訴えるというのである。マスコミもそれに乗りたいようで、昨日の討論会の司会者も、土井社党委員長に、社会主義の旗は降ろすのかどうかと突き詰めていた。土井さんは民主社会主義という言葉で逃げていた。ソ連もゴルバチョフのもとで同じ言葉での改革を考えているようでもある。その辺ははっきり論議をつくすことが今問われているだろう。社会主義、共産主義を否定するよう迫っている自民党だが、捨てるなら自民党でよいといわんばかりであり、政治改革、消費税、農業問題に益をしようとしている点が指摘されないままである。「体制選択」なのではなく、民主的か否かが、まず東西をとわず、問われているのである。ソ連、中国、東欧に大変動がおこったとしても、資本主義に帰すればよいというものではないし、帰れる筈のものでもない。

2 月 5 日（月）

大坪氏のアルコール中毒

昨日衣笠氏からの電話で大坪君が福岡済生会病院に入院したとのこと。吐血したり、けいれんしたり、混濁があったようで、尋常ではないらしい。今日登庁して杉山君にそのことを話し誰か見舞に行っておいてくれるように頼んでおいた。杉山氏は島津氏と連絡しながら済生会病院に行ったらしい。UCC 管理室に入れられて誰とも面会できない。奥さんが来ていて廊下で立話したという。何年か前にアルコール中毒で肝臓が悪くなり一時は立直ったといわれたのに、又もとに戻ってしまったらしい。肝臓も膵臓もダメにしてしまっているのではないだろうか。東京でひとり暮らししていることが少くなく、奥さんのコントロールも自粛もないことが病状を元に戻してしまう結果になったのではないだろうか。私には、なぜ自粛ができないのか理由がわからない。衣笠に何歳かときいたら一つ上じゃないかと、だから私より十一歳若いのだ。六〇前じゃないか。自己を滅すというのは判らない。

2 月 6 日（火）

自制はむずかしい

検診のため済生会病院に行ったので大坪康夫氏をたずねた。UCC 室に案内してもらった。ガラス越しにベッドに伏しているのを見る以上に出なかったが、前の廊下で奥さんと娘さん、それに中山日出子さんと逢うことができた。東京でたおれていたら処置なしだったかも知れないが、二日市だったので福岡済生会に移すことができたという。東京ではアパートを借りてひとり暮し、外食ばかりですませていたらしい。当然に偏食になろうし、好きな酒に手がでてしまう。自制心が弱いのかなと思う。自分で炊事するという器用さも必要だろうに

それがなかったのだろうか。アルコール中毒というのは私にはわからない。ただ、私は責めるつもりはない。自分の弱点をほんとうに知って常にただしていると自信をもっていえる人は少いだろう。今悪性の風邪が流行している。自分はかからんぞと思って注意はしているが、どうやらかかってしまったらしい。ノドが痛み、声がしわがれている。診察に際しそのための服用剤を追加してもらった。めったに風邪などひかないのに、ひいてしまったらしい。どこが生活上の欠陥なのかわからない。

2 月 7 日（水）

老いたる人は退くがよい

今日のみゆきの誕生日には、秘書室から花を早朝届けてくれたし、アメリカにいる直美から電話が入ったり、一彦も啓二も祝意の電話を入れてくれた。もういい加減な年なのに「誕生祝」とはピンとこないと彼女はいう。人間誰でもそうなるのであろう。私も今日は予算査定の時に住宅課の「老人向け」という予算要求に対し、老人向けとは何だと反撥した。「年寄り扱いしてくれるな」と老人の日にいう人すら少くない。自分で老衰を感じているからこそ、ひとからお祝いをうけたり、老人扱いの発言をうけると反撥したくなるのであろう。誕生祝などは笑ってすまされるけれど‥‥。ところで今日夕方九電、九経連を指導してきた瓦林潔氏が死亡した。八十六歳という。九州財界のドンであった。九電社長になれば誰でもそうなるのだが、電力会社の社長歴の人がドンになる九州はまだまだ力不足といいたい。活況がないからであろう。でも実態がそうだから仕方がない。彼はもう六年ほど病床にいたようだ。年をとったらできるだけ早く引退した方がいいのではないか。

2 月 8 日（木）

女性史編纂について

婦人対策課の二人が女性史編纂について、近く執筆者選定に入りたいとのこと。女性史は神奈川と富山の二県が作っている。前者は戦前の部分、後者は戦後の部分となっている。戦前と戦後ではずいぶん違うだろうから福岡も一冊にまとめないで、篇を分けるか、分冊にするか工夫を積んだらどうかと私はいった。編集方針では一つにしようという方針で予算を立てているので一寸方針が狂う感じだ。又議論の中では「史」にこだわる論者もないではないらしい。私は史論にこだわらないように、さらには主義、思想をふくむ叙述にならないようにといっておいた。行政の立場からそれは避けねばならない基本点である。予算要求の中で、財政課側がきびしい査定をしすぎると苦情がでている、が私の方からは強い要求をすべきだといっておいた。新聞にも取りあげられ、九州でははじめてと説明されている。私は又、女性が突出するような表現意識は避けるようにといっておいた。「生命を生み育てる女」というようなのが一例である。男女平等という言葉の中では、女の逆の突出は許されない。

2 月 9 日（金）

世界一の債権国日本

日本の対外資産残高は一兆四六九三億ドルで世界一だという。一九八八年末の数字である。円高、国内の金余りを背景に、国際的な証券投資、不動産や企業の買収などで三年間に対外資産残高が三倍になったという。日本、イギリス、アメリカという順位らしい。いいことには違いないが誇るべきかどうかいいかねる。生産基盤、生活基盤（インフラストラクチュア）はまだまだ貧弱だ。やたらとゴミが出るが環境浄化の努力は足りない。上下水道の普及率がまだまだ先進国といえないことはひろく知られている。文化施設にいたってはもっとひどかろう。イギリスは日本より数段高いだろうが、国民生活はそうよくないらしい。アメリカにしても貧富の差は大きいようだ。それぞれに欠陥をもちながら対外資産残高が多いというのだから、このことは内部の強弱、貧富、優劣などの差がひどいという蔭の部分をもっているということのあらわれかも知れない。豊かさの実感、うるおい、楽しさをみんなでかみしめうる理想郷というのとは全く別のことのようだ。突出したカネモチがおおいということか。

2 月 10 日（土）

川南に行く方針できる

連休をどう利用するかといっても、予知していないと計画も立てられない。予知していても、いつ急用ができるか予測できないので計画倒れになると大変だというので、遠慮し勝ちになるのだが、今回は総選挙運動の最中なので大丈夫ということで永らく念願していた川南に行くことに決め、数日前から先方と連絡を取り旅行社関係にも依頼し、明日、明後日の二日をそれにあてる計画を決定した。内野宮さんは政夫氏の世帯になっている。正月には裏の初枝さんから便りが届いて最近山ノ上ホテルで正月に撮ってもらったわれわれ夫婦の写真を送り届けてもおいたのである。私供が行くことを知ってみんな驚いているようだが、それだけに当方も緊張している。おみやげを考えてもいい案が浮かばない。色紙は用意した。博多名産の辛子めんたいこも準備した。八女茶もよかろうと思った。総勢八人が来てくれるというのでトロントロンの料亭でまず中食をすることにした。洋服屋の明野さんは息子の時代になっている。知らない人だが参加してくれるという。みんなお世話になった人だ。

2 月 11 日（月）

四四年ぶりで内野宮家の人々に逢う

終戦を迎えた市納の内野宮さん、戦後もしばらくお世話になったところだが、だから四十四年ぶりに、みゆきと共に訪問することができた。全く今浦島で世代がわりである。それでも懐かしかった。当時小学校の三年生か四年生だった政夫君にはもう二人の孫娘がある。アグリさんは七六歳とかで身も不自由、動作も鈍くなっている。もちろん千和子さんも高齢者の

仲間入り、政夫の弟英男が中年の好紳士だ。トロントロンの竹乃屋で中食会をしたあと市納の古き思い出の宅に寄せてもらったが、溝をこえた所にイチゴ畑のハウスがあり、溝も流れがかわっているが、三棟の家屋はそのままのたたずまい。経理室があった部分は若夫婦の居所になっている。軍隊の炊飯釜がひっくりかえったままおいてあるには驚いた。戦争の終りの詔勅をラジオできいたのもこの庭だった。ドラム缶に向けてピストルを放ち、軍刀で竹を切ったのもここだった。敗戦の一種の絶望行動である。米軍が上陸して来たら一週間分ほどの食糧を携えて尾鈴山ごえに逃げようと企画したのも思い出す。大変お世話になった内野宮一家に再会、誠に夢のようだった。

2 月 12 日（月）

宮崎リゾート

昨夜は高鍋の第一ホテルに泊った。九時半に約束の宮崎交通タクシーが迎えに来てくれて一日案内役をつとめてくれた。古墳の西都原、照葉樹林と民芸の綾町、大吊橋も通ってみた。綾城にも行ってみる。雲海焼酎の経営する酒泉の杜も見る。宮崎市に行ってリゾート計画壮大な夢をえがいているフェニックスホテルを一葉松林海岸に訪ねる。ゴルフ場も緑の中にあって繁盛しているようだ。宮崎県は八～九年前に国体を担当した運動公園をもち、競技場も四面の野球コートももつ。今は巨人軍がキャンプを行っていた。ここの日本庭園がまた立派だった。これら諸設備は福岡県も顔負けである。最後に行ったのが青島。洗濯板のような海石の隆起が作る自然の美は驚くばかりである。門前市のような店に寄って日向夏柑をいただいた。特別のもののようだ。ともかく宮崎市を中心とするこの一帯は全国のリゾート指定のトップだけあって景観は最高、集客力はかなりのもの。福岡県の人も少くないようで、私の姿を見てあいさつする人があれこれある。リゾートは今後の世界としても期待がもてそうだ。

2 月 13 日（火）

藤野憲三氏のこと

一昨日の川南での中食会のとき、現地帰農の藤野憲三氏が参加したのが異色であった。彼は高田源清氏と同じ富山高岡高商の出身で高田氏とよく似た人柄、互いによく知った仲だとのこと。同窓会誌も又彼が編集執筆した川南酪農史もみせてくれた。今回の私の川南ゆきを総選挙のための社会党応援ではないかとかんぐったという。高田ほどではないがかなり右翼の政治好きのようだ。鯖江聯隊や豊橋の壕堀りの話も出してきた。唐瀬原落下傘基地跡の開拓地を菊友と部落を命名したのも自分だといっていた。集った人たちに自分は奥田より軍隊の階位が一つ上であると何回もいっていた。名刺にはあらゆる肩書きを裏面に刷り込んでいる。表の名前の上には酪農家と肩書きしている。子孫がないとかで家業の後継者はないのではないか。父母を富山県から呼び寄せたそうだが、今もおられるのかどうか確かめな

かったが、ともかく自己顕示型で、話題を独占したがる人だった。軍隊時代の記憶は私には明らかではない。

2 月 14 日（水）
環境を汚して平気
広報の森山氏らが来て次の「朝の放送」のテーマ内容についてひとしきり話合った。職員向けだから業務に関係したことそのことではなくて日常の生活をめぐる問題についてざっくばらんに語りかけるようにした方がいいとの前提を立てた。話しているうちに、やっぱり環境問題に入っていった。宮崎旅行で感じたことの一つに道路脇のごみがほとんどないということがあった。福岡では海の中道、大濠公園、川ぶちはもちろん、どの道にもゴミが乱雑に捨ててあるのが目立って仕方ないが、共通の感想がそれである。ドライバーがタバコの吸い殻を車の窓から捨てるばかりか、わが車の灰皿まで停車中に脇の道路上に、中をすてて皿だけしまい込む例もある。マナーが悪いといってしまえば簡単ではあるが、どうにも基本ができていない。わが車の中はきれいになるかも知れないが、吸殻を捨てられる道路で公衆が被る迷惑がどんなものか何故に考えないのであろうか。これから花見の季節になる。が持って来た弁当殻やジュース、ビールの空缶その他不用になったものをそのままに置いて去る部族がでてくるに違いない。大県というにははずかしい風がある。

2 月 15 日（木）
社会主義協会の危機
久しぶりに名田氏が来室した。杉山補佐が陪席。何かと思ったら、協会の今後について、私に発言せよとの要望である。大坪君は済生会病院で個室に移ったもののまだ混濁が残っている。大坪はもう協会から手をひくことになる。奥さんの強い要求でもあり医師の意見でもある。だとすると全国・東京をどうするかである。新潟の田鹿、大阪の松本は動かない、とすると福岡から出て中央を握る人が必要だが人材がない。衣笠はどういう意見なのかきいてほしいと名田はいう。自分には発言資格はないし、衣笠は大塚や高崎の意見はきくが、三人とも他の人物にはうまく調子が合わないとのこと。待鳥、岩崎あたりには同一歩調はとれない。かといって衣笠自らが何かまとめようとの気力はなさそうである。多くの協会員はこの段階でのまとめ役を求めているのだが、その人材は見当らない。協会がなくなる事は願ってない。他方社会問題研究所も存続の危機にある。その先も誰も予見できないというのである。

2 月 16 日（金）
大型新企業立地
日産自動車の苅田拡張、トヨタ宮田への進出に次いで夕刊では九州松下の筑後市への移転

拡張が報ぜられ、多くの注目をひいているのが県下の大型企業立地である。東京集中の波が北関東に、さらに東北に及び、次に九州に来たという感じだ。インフラの条件があるならば、あとは地価と労働力が現時点では一つ一つネックになっていて、九州―福岡への立地が盛んになって来たように思える。有効求人倍率は全国で一・三に対し、福岡県は〇・八である。東京圏、中京、関西の主要部分では一・八とか二・〇であるらしい。これでは全くの人手不足である。又これら地域では住宅など長期的にみての居住、通勤条件に見込みが薄いため、U ターン現象も生じている。産業構造の変化に対応しながら、機を見て新規立地にも変化が大幅に進みはじめたようだ。われわれ九州・福岡にとっては新しい受皿として歓迎すべきことで、今後の地域活性化が期待される。福祉や文化の面により多くの行政精力をさくことができる。

2 月 17 日（土）

スペース・ワールド建設

四月二十二日から開園されるスペース・ワールド建設現場視察のチャンスを得て、三時から一時間余、八幡製鉄発祥の地枝光に行った。株式会社で製鉄本社の敷地内の株式会社スペース・ワールドの事務所でまずテレビを使っての説明をうけ、あと現場を一巡した。年間入場利用者二百万人を予定し、多い日は五万人との説明である。まわりの関心の第一は交通アクセスの問題である。鉄道の改良に期待がかけられるが、車の方が心配である。スペース・ワールド自体二〇〇台の駐車場及びその予備を用意しているが、足りないだろうし、アクセスの混雑渋滞である。九州自動車道大谷 IC をおりたところから会場までについて解決を急がねばならない。いずれオープンした後の事情が圧力になろう。第二は八幡東区の現在沈滞状況の改善である。とくに中央街（中央町）は再び活況をとりもどすであろう。他の産業波及効果も期待される。東区が研究、国際などで様がわりするに違いない。一〇〇万人口も減り止まりするに違いない。

2 月 18 日（月）

総選挙

総選挙。注目されていたが、夜十時には三〇〇議席が決まったが、自民が少し減り、それよりも少し多く社会党が伸びるという議席である。過半数（二五七）をこえること確実といわれる、東京、神奈川など明日開票待ちということだが、政治のかわりようがないこと明らかである。公明、民社、共産の三党が減少するようだ。福岡では社会党が各区で一人ずつ立て、うち新人三人が当選したが、議席ふり分けはほとんど変わらない、むしろ期待はずれといいたい。十一時すぎまでテレビにすいとられていた。自民が強いというか、うまいというかびっくりだ。三点セットすなわち、リクルート、消費税、農産物の自由化、に対する批判はするりとかわしてしまった。東欧とくにベルリンやルーマニアのこと、ソ連の民族問題と共産

党独裁問題を並べて「体制選択」を前におし出し三点を隠してしまった、隠すのに成功したといえる。むしろ三点をさかてにとって選挙民をひきつけたといえる、議会制の一つの側面だ。

2 月 19 日（月）
自民勝利後の諸問題
総選挙で自民党の過半数が一時議論になったが、結果は、前回の三〇〇議席（解散時二九五）が二七五になることでおさまり、リクルート問題その他で党籍をはなれた者の当選数を加えるなどすると二九〇ということになった。二七五という標的をクリアーしたわけで、今後は海部首相の続投になるが、宿題が一挙にもちあがってくることも事実。リクルート政治改革にほおかむりする積りだろうがそれを国民が許すかどうか、消費税など参院での少数をどう越えるか。アメリカを先頭にもち出されている構造協議問題（農産物の自由化なども）にどう対応するかである。選挙では野党の不一致を巧みに衝いて勝利した自民党だが、政権は安定継続だが、問題は不安定要素ばかりが残されている。海部内閣が強靭であるとは思えない。揺れつづく政権である。新聞は、県知事選自民知事候補が今後急ぎ決定の方向へ動き出すだろうと書いている。国体遂行に精力を注がねばならぬのが今年の県政。
【「衆院の新勢力分野」（掲載紙・月日不明）の切り抜き貼付】

2 月 20 日（火）
冷い感じの公明党
夕食を兼ねて、公明党対象の県政懇がサンヒルズで開かれた。執行部は一斉射撃をうけた。執行部の提案する項目の中に、事前に「根まわし」がなかったという大型事業があることへの不平である。とくにある議員の発言では、特定の議員には事前に説明意見を求めているのに、われわれにはないという疎外感まる出しの態度も見えた。事前に連絡をとるという事には種々難点がある。議員の利害が見えかくれする。議員によって意見が違った場合に当方の採るべき選択が定まりにくい。民間企業と関連する場合、企業の秘密などにふれ公開してしまうことによって、まとまるべき話も破棄されてしまう等々である。即決を要するような案件については事後的に承認してもらわねばならぬ場合もある。今日の公明党の場合は利害というよりも、疎外感の方が強いとの印象であった。総選挙の結果、議席が減った腹立たしさが残っていたせいもあろう（福岡県の場合、社会党と同数で完勝）。ともかく私には公明党は堅くて冷い感じがする。

2 月 21 日（水）
こまかい行政予算案
県政懇談会ということで、定例県議会に提案の案件についての各派ごとの説明会が今夕社

会党を最後に済んだ。共産党、公明党、自民党、県民クラブ、農政連とさかのぼって六回同じことを当方はくりかえすことになる。財政課からの報告、与党との協議を加えると八回似たような会に出席することになる。簡約しての説明だが、財政課長は六十ページにおよぶ項目ごとの予算案について繰返すことになる。今回の一般会計予算案は一兆一千七百八十億円、思えばこまかい政策の網の目である。道路、河川の公共事業はもちろん、農水、林、商工、教育、警察などこまかいこまかい。深切な行政だなと思う。それでも末端の学校や保健所などに行くと貧しい資金でピーピーしているのが実態。県立大学といっても体面が保てないような「研究費」、これで何ができるというのかといいたいほどでしかない。他方、パーティに使うカネ、県庁で使う事務用品をみると贅沢だといわねばならぬ水準。贅と貧の共存といいたいのが内実。

2 月 22 日（木）

社共と社公民いずれか

総選挙の福岡三区で、県評センターは島津尚純（落選）―民社―の支援をきめた。島津はそのためか一万五千票上積みすることができた。支援を依頼されたのは自治労と全電通だが、下部組合員からはそんなことをすると組織がガタガタになるとの反撥があったという。センターでは来年の知事選に向けて社公民ブロックを考えているようだ。連合福岡もそのようだ。ただ、鷲頭事務局長は「白紙」としながらも全労連、全労協が支援する候補は支持しないといっている。つまり共産党が支持する者には加担しないとの主張である。だんだん選択を迫られる時期にもなりつつある。従来の社共が崩されるか、鷲頭のいう排共の線に変化が迫られるか、マスコミの側ではこれら動きに耳を立てている。立場は違うが自民もそれを注視しつつ自分らの動きを決めようとしている。一〇〇日も待たないで、こうした問題がクローズアップされることになる。二月県議会もそうした先を頭においての論戦になるに違いない。

2 月 23 日（金）

今浦島との感想

松本龍を支援した福岡一区労働組合の人達の敢闘会がソラリアビルで行われ、ドック入院中の私も抜け出して出席した。雨の中歩いて行った。帰りに天神地下街を見物した。変わる天神といわれ、九州各地から観光地の一つにあげられ若者が通ってみたいという地下の街路網である。市役所の地下がこれに加わろうし、旧県庁跡にも施設ができその一端を担う時代がやってくる。ファッション先端を見ることができるので、若い女性が好む。私はその対極にいることになる。今浦島どころか、といわねばならない。病院に帰り着いて夕刊（読売）を見ると、専修大の正村公宏教授が「マルクスレーニン主義の歴史的評価」ということでマルクス経済学、とくに戦後日本のそれについてボロクソに、むしろにくしみをこめて叩いて

いるのが目にとまった。それほどまでに言ってよいのかと思った。彼がどれほど経済学に貢献したか、よくかえりみてひとを評すべきではないかと思った。槍玉にあげられる今浦島という私のひがめであろうか。ソ連、東欧の動きを今しばらく注視して改めてものいいたい。

2 月 24 日（土）

協会、問研の活性化

新連合が発足し、総評は解散した。総選挙で連合がとくに新しい政治勢力母体になるようには判断されない。社会党もムードはいいがシンがない。自民の粘り腰は強力である。こうした諸傾向の中で社会主義協会、問研の行方を心配する人は周りにある、が、どうしたらよいか、イニシアをとる人がおりそうにない。あきらめるのか、もう必要ないのか――やるならどうしたらよいのか。――人間ドックをすませたあと、仲好旅館に七～八人集って論議してみた。みんなの意見としては私が衣笠氏に打診せよという。衣笠氏は協会の福岡、全国の議長であるし、問研の所長でもあるが、案外楽観的だという。それに、八丁氏と似て同志を糾合するというよりは分けへだててみるようだ。八丁氏にはじき出された人達がいっぱい不満不平をもって事態をながめているのに衣笠は気づかない。大坪はもう動けないながら意欲はもっている。しかし衣笠とは合わないらしい。奥田が衣笠に接触して、次のステップを考えようと集った面々はいい出した。

【欄外記入】

仲好旅館（三時～五時）〔岩崎、名田、石田、安達、嶋津、山川、竹村、奥田〕

2 月 25 日（月）

雲散霧消　今日は今日でよいのか

家計簿を繰っていると、昭和二六年度後期に私は佐賀大に非常勤講師（半年）として行っている。二七年の「紀元節」（建国記念日論争）に佐大に行き物議をかもしていたようだ。雲散霧消という言葉があるが、あれもこれも忘れ去っている。ともかくキャンキャン吠える仔犬のようだった。三〇歳過ぎの若い助教授だ。しかし、社会党左派、平和三原則、安保、講和、破防法、総評などホットな話題の中にあった。朝鮮戦争、米軍基地、警察予備隊など物議の種が身近にうず巻いていたのである。私は信念に満ちて東奔西走していた。当時の学生も私の言動に共鳴する者少しとせずであった。しかし今日、それら殆んどすべてが雲散霧消しようとしている。過去は消される、葬られる、又は否定される。今日は昨日の、昨日は一昨日の続きであり、その上にあるはずと思うのだが、恰もそうでないかの如きである。うたたかの如しというがむしろ今日の浮気の方が恐しいのではないかと思う。軽々に言動し、選択し、万物にふりまわされる主体性のない現代っ子。それでよいのか？

2 月 26 日（月）

旧友遠方より来る

ロンドンで暮した一年の中で、日本から来た若い女安田育代さんが土居まちえさんと共に私たちを訪ねて来福するというので、二人の乗っている新幹線に、私も小倉から博多まで同乗することができた。二〇年ぶりの彼女たちである。博多駅ホームまで出迎えたみゆきに二人をまかせ、一度別れて又三時頃県庁知事室まわりをしてもらった。道路課長吉谷氏が仲を取りもってくれ、庁内案内もしてくれた。夜十一時頃帰宅したら、二人は拙宅に泊まるという。コタツを囲んで又一時間ほど語り合ったが、不思議な縁といってよい。安田君が欧州研修中の古谷課長と、バスガイドの立場で私についての話を交わしたのがきっけである。古谷氏が彼女の手紙を私に託してくれ、彼女が夫をドイツに残して来日した機会に、土居まちえ氏に連絡して、来福したという経緯である。二人は私ども夫婦に会うためだけに、来福したという。私はその心を買いたい。農協の会議で富有柿を見つけ、みやげに若干持たせることにした（季節柄珍品だから）。旧友遠方より来る亦楽しからずやである。他は一切ない。二〇年前の写真をみて語り合っていた女三人。

2 月 27 日（火）

展望と打開策なし

午後三時すぎから一時間半ほど、ホテルリューで衣笠哲生氏と対で、近況について話し合ってみた。昭和二五～二七年頃に総評、社会主義協会、社会党左派、安保、破防法など激動の中にもわれわれは運動や主義に期待と自信をもっていたのだが、今日、この二、三年は――十日前の総選挙の結果をみても、新連合の動きをみても、又そうした中での社会主義協会や旧県評系の労働組合の動きをみても、期待も展望もなければ自信もない。社会党に何を、党中の誰に何をということについても何らとらえどころがない。以前向坂先生は山川均を立て、大内兵衛を巻きこみ、鈴木茂三郎らをつかまえて、自分で納得できる運動と主張を展開し、われわれ若い者は感激して随伴した。今日衣笠氏を前にそれを言ってみたが、旗、シンボル、旗手、叫び声の必要は認めながら、誰が、何を、どうするという課題、そして解答を引き出すことはできなかった。何か淋しい、わびしい。私自身の過去が抹消されてしまうような危機感すら覚えた。後継者後続者がないのである。

2 月 28 日（水）

今を大切にしよう

過去が消えていくのがくやしいと書いたが、今日が軽んぜられるのもよくない。過去はある意味では消えた方がいいだろう。消えてしまうものである、あきらめるしかない。自分で消さない努力をすればいいのではないか。そして未来を展望しながら、今を充実して悔を残さないようにしたい。今日夕方東京で山谷重箱において太田誠一代議士と対談した。次期知議

選に出馬するのかと彼は私に問いかけている、今の自分を大事にするなら次期不出馬もありうると彼はカマカケをしている。彼自身代議士をしたくてしているのではないという。私も同じと答えた。健康のことはここでは論外としても、充実した「私」を考えると、不出馬の方を選択するといいたいところだが、それは明らかにしないよう、周りから釘がさされているので言明をさけた。実際残りの「いのち」をどう使うのがいいかとなると、答を出せる人は少いと思う。出馬を希望するとか、それを選択するというのではなくて、いわゆる「天命」に従うのが一番いいのではないかと思っている。シャシャリ出ない消極すぎるかも知れないが、今ベストを尽すのみ。

3 月要記

三月一ぱいは県議会当初予算提案があるので審議には重みがある。誰しも慎重に構える。今年は加えて来年知事選で最後の当初予算というので野党各派は知事攻撃に腐心する。リーダーシップのなさだの優柔不断だの職員になめられているだの、亀井知事はおろか隣県の平松、細川にくらべ奥田はなってないとの攻撃の総掛りになる。自民党側の次期知事候補選びも本格化する。やや焦りもあるのではないか。人物選びの困難さには野党部内の結束とくに自民党内部の結束の問題もあるようだ。内部派閥がひじを張り合っていると十億近い選挙資金の出所に目途がつかなくなる。当選すればともかく落選するとカネの後始末や候補者の処遇の後始末も問題になる。犠牲候補となると問題はもっと深刻になり誰しも無責任になるので厄介だろう。三月といわず四月、五月と自民党側は候補選びに精力をとられよう。若手官僚から探すのであろうが、通産局長の川口氏の名をあげる人もある。OK となるだろうか、当方は国体終了まで全くこの問題に言及できぬ。

3 月 1 日（木）

老化の自覚

今年十月一日はわが国ではじまって以来七〇年目の国勢調査で、今日県の調査統計課に実施本部の看板かけのセレモニーを行った。市町村の末端まで手落ちなく指導しなければならない。廊下に出てセレモニーに参加した職員に、私は一九二〇年うまれで初の国勢調査の年、一ヵ月おくれの十一月一日生れと披露した。ところが、そのとたんに、もう七〇歳の老人なんだとしみじみ自覚させられた。昨日、太田誠一氏が、三期目に挑戦するんですかと私にきいた意味が客観的に示されたのだと気付いた。〝グラフふくおか〟三月号が手許に届いた。やっぱりふけた顔だ。その自覚が足りないなと思った。ひとはそう見ているんだのに、気付かないのは抜けているではないかと自嘲した次第。主観と客観とのひらきであり、主観の及ばぬところが指摘されている。夕刊を見ると、雇用審議会（大内力会長）が労相に、定年六五歳企業に努力義務を要請していると出ている。拍手を送りたいようであったり、そうかなと思ったり、各自の努力の必要を思ったり。

3 月 2 日（金）

補償行政

伊良原ダム建設の見とおしがついたので、今後の着工への工程につき、細目地元交渉に入ることになるが、一つの仕切りとして知事が地元への協力要請に行くべきだという事で、十一時から地元町長ほか代表者の会に出席、協力要請の挨拶を行った。利水者の利益に地元犠牲になるという図から、知事は利水者代表というわけである。筋は通っているが、この種大事業には「地元」はすごく強い。道路の場合は少し違うが似ている。豊前地域にはこの種での頑張りが目立つ。新北九州空港の漁業補償についても当面は難航している。洪水があった長狭川の改修についても私が知事になって以来話が長びき、最後の数件は収用発動となった経緯が思い出される。泣き寝入りする必要はないが、程々に妥協点が見つかることを願うものである。伊良原ダムも実際利用されるようになるまで順調にいってあと十年はかかるだろうという。後世のため、又後世の人は先代が流した汗という思いをしてほしいものである。

3 月 3 日（土）

春きたる

二十日すぎには桜が咲き出すだろうとのこと。十日ほど早い。先日東京の憲政記念堂で既に咲きほこっている桜を見たが彼岸桜だろうと思ったが、サクランボのなる桜だったかも知れぬ。うちの表の庭に森祐行氏がもってきてくれたサクランボは今年はじめて花をつけたようで、今、二～三輪すでに咲いている。桃の節句といわれるこの日ヒナ飾りが対話の場高宮別館にも用意してあり、集ってきてくれて外国人達の目を楽しませた。甘酒というか、にごり酒もみんなで口にふくんだ。対話に来てくれた在福の外国の人々は十一人で、それぞれに久留米絣のハンカチーフも届けられた。国際差別の問題がまず出された。政府の態度はかたくなであると思う。二世、三世の朝鮮人にも税金だけ取って選挙権すら与えず、何が国際化かという非難が一番はじめにとび出す対話となった。高宮別館が美しいたたずまいで春を迎えているのをみて感慨を覚えた。どんどん利用ケースがふえることを願う。

3 月 4 日（日）

凧揚げ大会

直鞍地区の第四回凧揚げ会に参加した。この会も定着してきたようだが、国労―清算事業団で解雇直前の人達―メンバーが精力的に取組んでここまできているので、来年はどうなるかわからないともいわれている。しかし、商工会議所をバックに、教組、高教組の人達が代わってやるなら大丈夫といっていた。第五回だから市民、地域の人たちの共通の祭りまで高まるならいいがと思う。凧作りを通じて家族、学校を巻きこんだ地域イベントになっており、子供の教育に果たす役割は大きいと思う。今日も子供達が喜喜として河川敷で活動していたし、親たちも熱い目で見、共通の目的に向って行動している。世話する人は大変だろう。

赤字になったらどうするのか、経費のことはきいていないが、資金集めをせねばならぬので大変だ。六ヶ月前から取組むのだそうだ。今日は太陽も顔を出してうすら寒い中に春らしかった。むしろ風が弱かった。凧作りに工夫器用さ要求され、みんなよく頑張っている。

3 月 5 日（月）

健康は不良

やはり調子がよくない。不眠症がひどくなったのではないか、用便で起きる。枕もとの時計を見誤ることもたびたび。今日は起こされた。午後頭が重くなる。階段は踏み外さないよういつも気をつけて動くようにしている。眠いようで眠れない、日中もその調子。目をつむっていることができると極楽だ。何の成果もないがそれが最もよい。今日の検診では血糖一七八、尿酸プラス三、だからよくない。右肩が少々痛い。爪が波打っているのは内臓のどこかが正常でないからだときいたが、それだ。けれども日常消化すべき業務に支障があるわけではない。こんな調子でどこまで経過するのであろうか。知事をやめればいいのか、自分で答えを出すことはできない。つまり、安楽に宅にこもればいいのか、好きなことをしておればいいのか、というとそうだということは今の自分にはできない。ひとがあれこれ引きまわしてくれるから身がもてるのかも知れないと思ってみたりする。今は引きまわされている訳だ。

3 月 6 日（火）

虎がかみつく

啓蟄で、いよいよ春がきた感じ。川の土手には土筆が出ていて袋をもって土の上をはう人の姿が目につく。だんだん自然もにぎわい出す。枝垂れ柳もぐっと芽を出してきた。うぐいす色のやさしさが何ともいえぬ。今日こそはと思ったが今日もやっぱり頭が重い。何の病気なんだろうか、いつまでつづくのだろうか。代表質問で、農政連の関和虎が私のリーダーシップのなさを追及し、答弁を求める再質問をしたので、「精一ぱい体をこわしてでもがんばりたい」と答えたら、議場がドッと沸いた。来年の知事選を意識したこの虎が、リーダーシップなく、自分でどうにもやれないと思うなら知事をやめたらいい、として答弁を求めたからである。代表質問で自己意識過剰というべき虎であった。昨日の中島茂嗣（自民）も似た精神状態だった。私を攻撃する時に多くの者が、大分の平松、熊本の細川、一村一品、日本一の呼びかけをひき合いに出す。今日の虎も同じ、背伸びが好きなのであろう。過剰でない方がいいと私は思う。どうぞおやりなさいといいたい。

3 月 7 日（水）

茜について

議会のあと筑穂町から茜染の日の丸国旗を国体に使ってくれとの陳情があった。茜はアカ

ネ（赤根）のこと。絹にしか染まらないという。国旗に使う程に採取できるのかどうか。ちなみに辞書をくってみると、丹は丹砂、赤硫化汞、地中より掘り出す赤い石、朱はシンの赤い木、赤は大と火の合体した意をもち、南方の陽気をさす。赭は赤土のこと――今日アカ色は科学的に合成するのであろうが、以前はすべて自然の状態か少し手を加えて手作りのアカであった。長い歴史の中で土、石、草、木の中から掘りおこして配色の工夫をしてきたことがわかる。他色についても同じだろう。藍の栽培についても茜と同じく連想できる。墨も今はもうかなりかわってきたろうが、ススからたくみにつくり出したようだ。われわれの先輩たちが色ものを自然の中から抽出し、加工し、採色、加色に使った知恵の集積に改めて頭がさがる思いである。万事そういうことができよう。昨日の上に今日があることをつくづく思わされる生活である。では政治って何だろう。

3 月 8 日（木）

人相似、花不同？

吉川幸次郎さんの岩波新書「新唐詩選」をみている。自分では読む力はないが解説を読みながら漢詩の厚みと自在性を感じさせられている。今日は劉廷芝の「代悲白頭翁」に出てくる二節を車の中であれこれ目を閉じながら、これ、逆にすればどうかなと考える。

　年年歳歳花相似　　歳歳年年人不同

つまり花相似を人相似とし、人不同を花不同としてみるということだ。可能とも思う。紅顔の美少年も半死白頭翁になると次々の節に出てくるので逆にできないことは明らかだが、一人一人を時系列的に見るのでなく、人間社会全体を巨視的にみると、人相似となるだろうし、わが家の庭もどんどん変わっていくことを思えば花不同といえなくもない。しかし、もう一度逆にして、自然の大きさにくらべ、人間がいかに小さい存在であるかを考えるのが順当、これが素直というものであろう。こせこせしないで、なるがままにまかすような心をもちたいものだ。化粧することは社会に通用するために必要ではあるが。

3 月 9 日（金）

杷木町に来て

原鶴温泉泰泉閣で明日の朝倉～日田間の高速道の開通式に先立ち、謝意を表して建設局、道路公団への招宴を行った。ホスト側に把木町長熊谷氏もいて、宴終ったあともしばらく私の子供時代の思い出、農山村生活について語り合った。町長は珍しい体験の知事ですねといった。そういえばそうだが、人生とはそういうものではなかろうか。鮎や鮒やうなぎを追って川遊びをしていて、誰だって今日を予測するはずはない。でも聞く側は私のそうした体験を不思議に思うのも無理ない。ゲンノショーコ、雁皮取りのこと、柿泥棒のこと、又田植、稲刈りのこと、あれこれ話すとびっくりする。草履つくり、縄ないも想像を絶する。私は杷木など農山村にくると、ひとに逢い、そういう話をしたがる。町長は柿が名産であることを誇

りにし、筑後川の中洲を利用してレジャー施設、企業を誘致したいので県も協力を、といった。隔世の感ありだし、杷木は私が育った農村よりはるかに雄大な近代化に値する農業地域で、横断道開通によって、昔ばなしと縁遠い開化した農緑地として将来が楽しめるところとなろう。

3 月 10 日（土）

日田草野本家の雛

九州横断道が今日から日田まで開通し、両県が高速道ではじめて結ばれることになった。久住にはよく行ったのでなじみ多いところだが、日田湯布院間の完成が次に待たれる。福岡・日田間は車で一時間の距離になり、日田がますます福岡県に組み入れられそうだといわれる。式典が終って豆田町の資料館や人形の家など見学に行ったが、土曜午後ということもあってか、雛人形コレクションのところには押すな押すなの人のにぎわいであった。庶民の祈りや努力がこめられた何百年かの作品が再現されていてほほえましくもある。集めた草野本家の方もてんてこまいさせられていた。客の中には福岡県からの人が多かった。小京都というに値するかは別にして、この種の町には街並みはもちろんいろんな伝統が残され保存熱も感じられる。そんなにかかるものではなかろうから行政がもっと力を添えてやればいいと思う。高速も通ったことだから今後こうした遺跡遺物を見にやってくる人は多かろう。みんなの財産であり宝なのだからと思った。淡窓の咸宜園にも行った。

3 月 11 日（日）

日田の学問・文化

日田を小京都というが昨日の旅行で少しわかったような気がする。日本中に四十も五十も盆地があるが、日田もその一つ。中心の町であり、よいたたずまいである。九州全体の地図の型を手に取ると、日田は均衡上も九州の中心になる。徳川時代には九州の各藩を監視する天領の位置にまで高まったようだ。日田金（ひたがね）というのは代官所（永山布政所、西国筋郡代役所）との関係で廻米用達、掛屋などを勤めることにより財をなし、諸国の大名貸、村貸などの手段で（金融業）発展した状況をさすようだが、雛人形を見せてもらった草野家も威勢よき八軒士の掛家仲間衆の一つだという。この繁栄の中で広瀬淡窓の咸宜園が成立し、日田の学問・文化を代表するものとなった。淡窓は豆田町の博多屋の生れ、咸宜園の階級の別なき塾生処遇が、明治以降の日本の義務教育の特徴に受け継がれていったといわれる。「みんなよろしい」という差別なき扱いを特徴とする。明治以降の傑物もこの塾からたくさん出ている。

3 月 12 日（月）

自民の知事候補選び

自民党県連では来年予定の知事候補づくりに強い関心を示し精力を注いでいる。一昨日のニューオータニでの谷口松太郎受章祝賀会に出席の遠藤政夫氏も私の隣にいて、このことにふれたし、先日上京の折、太田誠一氏も私に直接去就をきいた。会長の立場もあろう、気になるらしいのである。今日の夕刊では、東京で候補さがしの会議が開かれると記されている。若手官僚か首長の列の中からという。若手というのは、奥田はすでに七〇歳というのが念頭にあるらしい（！）福岡、北九州の両市長選は知事選に先立つし、可能性は小さい。川口通産局長をとの声が出ている。それにしても今、県議会では知事選を頭にえがいての奥田こきおろし質問が歩調をそろえている。中島、吉村、高橋など（それに農政連の関和虎も）が口を揃えたが、今日の板橋も似た口調。県職員がたるんでいる、それは知事に権威がないからだ、なめられているんだ、締めつけができないなら知事をやめたらどうだ。企業の大型立地が進んでいるが奥田の手柄ではないぞといった調子、人物評まで含んだ攻撃である。みっともない。

3 月 13 日（火）

鼻高すぎる薦野

今日一般質問の最終日。薦野のほか四人の自民党が次々に質問に立った。五人ともいやな感じ。薦野は自民から離脱した者だが、知事をあわてさせるような質問を連発し、私が確認のために横の富永副知事にただしていると、私語せずに質問演説をきけと私に喰ってかかるなど、無礼ともいえる発言の多い男である。壇上ではどんなことをいってもいいと思い込んでいるのであれば人格無視というしかないが、誹謗だろうが中傷だろうがどんどんいい質問を連発し、項目以外の質問趣旨は予め通告することを拒否して相手を困惑狼狽させるとよしと心得ている。全く好感のもてない人種の典型といえる。まだ若いのに将来どうなるか心配してあげたくなる。自信過剰ではいけないのではないか。自分を紳士として扱ってほしいなら相手をボロクソにいわない方がいい。こういう人には答弁も熱意あるものにはならず形式さえととのっているならよいという気持になる。「検討」との答が多すぎると数まであげるが検討の結果の対応数はあげない。突如の質問は「検討」以外に即答できないのに。

3 月 14 日（水）

井手宗夫また噛みつく

今日から委員会審議に入った県議会であるが、二月補正を早くあげてほしい立場にあるわが方に対し、文教委員会で例により井手宗夫が噛みついてきた。これは小郡、それに久留米の宮崎強が相乗りして噛みついた。前者は自民、後者は公明。問題は教育文化振興基金になぜ一〇億円の措置をしなかったのか、昨年の二月議会での裏約束違反ではないかという内容。二人とも低級そのもの、マスコミのニュース種にもならない。予め罠をかけて、そこへ知事を追い込んで陥れようとの仕掛け、ウソもあればヤクザのようなおどし（審議ストッ

プ）、さらには下品な言葉を使っての噛みつきである。裏ばなしをデッチ上げて委員会という公式の場で知事を追い詰めようという策、宮崎がその尻馬に乗ってわめき出した。委員会は休憩に落ち、再開なしで暮れた一日。帰宅して風呂を浴びたら午後十時だった。四時間余の損をさせられた。もっと品のある議員が選出されないだろうか。党利私略だけが先走っているように思える。福岡にとって不名誉なことである。

3 月 15 日（木）

宴会がなかったら

昨年七月に発足した県国際交流センターの開設記念講演会があってあと懇親会が行われた。城山ホテルで九経連、友好協会の人達がメンバーで講演会をきいてくれたらしい。中国の李徳純さん、韓国の慎鏞廈の二人の講師は学者でもある。福教組・日教組に出ていた藤田氏に久しぶりに会場で面を合わせた。そのほかにも知り合いの人が少くなかった。「元気ですか」と声をかけられる。「いや、いや辛うじて」と返事をしてビールカップを交わす。いつも点滴検診に通っているし、睡眠に苦労していて元気とはいえない。頭が重く右肩が痛い。でも日常の仕事に差支えあるわけではない。「一寸弱っているようですね」という人があるかと思えば「顔色はいいではないですか」という人もある。随行の橋本氏は「昨日は元気がないようだったが、今日は元気そうですね」ともいう。そういう具合で、やっぱり「何とか辛うじて」というのが今の状況のようだ。亀井前知事が「議会と宴会がなければ」といったそうだが、宴会も議会に加えるのは同感である。日程から間引いてほしい。

3 月 16 日（金）

金印愛好会発起人会

夜ホテル日航で金印愛好会発足の会（発起人会）とその懇親会があった。花村仁八郎氏がトップ、西日本新聞がすべて根まわしをしたらしい。七社会が主要構成員、九響の団長ということで田中健蔵氏も、NHK からも。ねらいは余暇文化の水準を高めようということだ。金印という言葉を用いたのは福岡が文明交流の窓口であるということを広く知ってもらいたいということを意識しているし、そうした問題の掘りおこしもしようということのようだ。金印については後漢書に出てくるということ、中国に同時代の兄弟印がみつかっているということ、二百余年前に志賀島から出てきたということ以外に何もわかっていないし、掘り下げて説明する人もいない。論語や千字文が伝えられたのは金印を受けてから二三〇年も後であるし、一八〇年後に卑弥呼が魏から同様の処遇をうけているらしい。まだ全く明らかにされない三〇〇年である。日本の当時にあって文字を解した者がいたのか、外来文字がどう利用され、日本語がどう展開されたのか、この三〇〇年何にもわかっていない。私は焦点をここにあてたいのだ。

3 月 17 日（土）

瞬間的勝負の蓄積

ダイエー新監督の田渕氏との対談。平和台球場オープン戦（対西武）観戦後球場内応接室で。田淵氏もやはりスポーツのプロらしさが語りの中で十分出ていた。観戦中解説してくれた前監督杉浦氏もやはり同じである。一事に秀でるということは容易でないし、秀でる者はそれだけの事を身につけているという点再認識させられた。マラソンの君原氏と対談した時も、タレント武田鉄矢氏と対談した時も、その他同様のケースが何回かあった。いい加減に生きているのではなく、真剣勝負の瞬間を渡ってきているからであろう、そうした瞬間の蓄積が人物をつくり上げていくということを今日又味わうことができた。スポーツの選手は瞬間的な総合判断を要求されることがわれわれ平凡人よりはるかに多い。打球をジャンプで取るか逃がしてしまうかは瞬間的判断一つと杉浦氏はいう。田渕氏はサインの出し方決意、選手交代のさせ方如何を語っていた。守備位置も選手一人一人の判断も加わりますといっていた。大変なことである。それが見える観客になる事も必要。

3 月 18 日（日）

春が来た

昨日は平和台の桜が一～二分咲きになっているのに驚いた。晴れていても霞がかった感じだ。今日も晴れ、彼岸入りとのこと。地から草が湧くように、萌え出ている。生命の強さを感ずる。植木鉢は外に出してよい。暮れると、それでも一寸冷えを感ずる。もう少しというところだろうか。土居まちえさんが、みかんとジャガイモを送ってきてくれ龍功二郎さんが筍を送ってくれた。先日川南の明野さんが日向夏柑や甘藷、千切り大根を送ってくれた。野の物が豊かにあって心強い限りだ。ツクシはずいぶん前に口にすることができ、もう遅いといえるだろう。菜の花も食べたし、いうことはない。うちの夏柑は一〇〇個ぐらいなっているだろうが、これはどうも酸っぱい。私が専ら食べているので相当長期に食べられる。カスミ草が満開、椿も辛抱強く咲いている。休みでも植木鉢を扱うことないのが残念だ。

3 月 19 日（月）

トヨタ元町工場見学

トヨタの元町工場の組立てラインを見学した。トヨタ会館も。戦時中に成長した会社だが、今日の新しいスタートは昭和三四年からで先年三〇周年記念を祝ったばかりという。三〇年間に世界一となったわけだ。国内のシェアは三割に達する。豊田地域から一歩も出ない会社だけに、今回の福岡進出は又の新時代を拓くことになると思われる。研究熱心という。さらに、地元や従業員の立場もよく配慮する会社らしい。提案制度が私の耳に残った説明である。従業員から出るアイディアの汲むべきものは大いに汲み、採用分には十分な酬いを出している。だったら従業員も生き生きしてくるに違いない。私は車のことはよくわからない。

だから工場見学も分ったとはいえないが、今の技術で自動化できる作業はできるだけ自動化しているが、従業員の疲労についても配慮してあるという。機械のスピード、故障点検、休憩、交代、リザーブ要員配置などの説明もあった。安全と完全がモットーのようだ。いい見学になった。

3 月 20 日（火）
隣家夫妻のこと
夜の時間にゆとりができ、明日は春分休務ということで隣の高柴夫妻に来てもらって三時間ほどマージャンをすることになった。彼の方は七四歳彼女の方が私と同じ七〇歳。どちらも元気そのもの。彼はゴルフに熱中していたのはわかるが今尚つづいているという。酒好きだが溺れる事はないらしく、顔はゴルフ焼けか酒焼けか。健康に意を用いているらしく、大きな声を張りあげるのが、うちからでも時々きこえる。年寄り二人暮らしの点では同じだが、高柴家は息子孫が近くにいてよく来訪ざわめきがきこえてうらやましい。懇意という程ではないし、生活領域も違うので交流は時々という程度でしかないが、現今、年寄り世帯もふえているので、お互い意識的に交流のチャンスを作るように心がけたらいいと私は思っている。声かけ合うだけでもいいのである。回覧板やら宅配留守代わり役など結構やむない顔合わせもあるのは事実。話せばそれだけ懇意になるのに、二〇年隣合わせていて未だ交流不十分とは当方にも責がある。

3 月 21 日（水）
草抜きしながら
暇あって草を抜く。花の季節でどんどん草も伸びる。大濠で魚が湧くことが話題になったが、草も湧くようである。これを一本一本抜くのだから合理的作業とはいえない。むしろ草も亦友かといいたい心境で抜くのである。跡かたなくなるまで抜き取るのではない。何日か後にふりかえるなら、抜いた跡もないほど生え茂るであろうことを知りながら草抜きをする。湧いて生えるのだし、生えないといけないだろう。草をなくするだけが目的なら除草剤を使うかコンクリート張りにするだろうが、そうではなく、生えることを許すことが前提で草を抜き取っている。中にはかわいい花をつけている名も知らぬ草がある。でも花に目をやらずに、そこに生えていることを理由に、勝手ながら抜き取らせてもらっている。情があるわけではない。あっても別のところにあって可憐な草花にはない。勝手なものだ。他方では別の植物を鉢植えなどして育てている。思うように育っているわけではない。草抜きをしながら、あれこれ考え事をするのもよい。気にせず時間が流れる中で手が動いている。

3 月 22 日（木）
春の花の名

幼い時から春の花に事欠かない。今も、まちにいても毎日、又花屋にいけば輸入もの、外来花、栽培花など、幼い頃に全く自然に見おぼえたのとは違う花、はじめてみる花など、びっくりするほど花に出くわす。ゆとりが生じたというから、花はますます身辺に多くなる。しかし名称は忘れていくし、新しい名はきいてもすぐ忘れてしまう。平凡な、見る頻度の多いものが、数も子供の時に知ったほど、いやそれ以下しか今は頭に残っていない。今日、県植物友の会の役をしている人が豊瀬禎一氏に伴われて来室した。二年後に県では全国植樹祭が予定されている。それに先立ち県の植物についてカラー刷りの本を出版したので助成を頼むという。佐賀県でも先年の全国植樹祭には県植物についての本を出版しているとして一冊私に進呈してくれた。議会の進行を気にしながら待ち時間をそのカラー刷りを見るのにあてた。忘れている、名が実際と合致しない、名は頭にあっても実際と差があるのにうちのめされた。「花ごよみ」を買っているので、春の花の名でも勉強しなおそうと思い改めた次第。

3 月 23 日（金）
老鶯きこえる
「花ごよみ」春の巻を持参して県議会の待機時間をつぶすのに役立てた。クロッカス、スノー※ドロップ、ヒヤシンスという外来花名も、わが家の狭い庭に見られる花のうち。又一昨日は草抜きした生々しい思い出を痛く印象づける句もあった。――いのちかけて青める草と思ひけり　山口いさお･･･天よりの日ざしとどきぬものの芽に　中山照子――というのである。また、比翼・連理というときの連理という意味を改めて認識させてもらったのもこの本による。それはそうと･･･朝食の時鶯の声がわが家の食卓まで届いた。まだまだぎごちないはずと思っていたのに、今朝のはもう老鶯の声であった。暖かいせいで鶯も練習十分になっているのであろうか。城内から堀端にかけての桜花はもう六分咲き程度になっている。県議会終了後ではもう花見も遅いのではないか。一せいに花は咲くし芽が出る。たしかに動きはじめた草木の世界を感じる。レンギョーも黄色の花より薄青い葉の方が目立つようになってきた。
【※線を引き欄外に「フレーク」と記入】

3 月 24 日（土）
子供遊びと植物
「花ごよみ」冬の巻をみていると、草木花の遊びのページが昔を思い出させた。花の蜜吸い、土筆でドコ継いだ、カヤツリグサ四つ裂きの仲占い、四つ葉クローバ探し、竹を切っての豆鉄砲、水鉄砲、杉鉄砲、松葉での相撲、草葉相撲、笛、ホオヅキ、笹舟、どんぐりコマ、タンポポ水車、イモ判そのほかこの本にはいろいろ多くが紹介されていて大変懐しく思った。商品としてある玩具があるわけでなし、自然と共にあり、兄や弟、友人と自然を介して時間

をすごしたのである。教えられ教えた、またたわむれた。スイバ、イタドリなど取って食べた。脊丈ほどもあるイタドリ（スカンポ）を見つけるため奥まで、道ふみ分けて山に登った。笹や竹を相手とする遊びには小刀（ナイフ）が必要だったので砥石は上手に使うことになった。竹で虫籠を作ったり、トンボ、竹馬を作ったりした。太い竹は鋸を必要とした。一月十四日夜のトンドは子供にとって大行事だったし、四月三日は節句（新暦雛まつり）で山に登って巻きずしを食べ一日中遊んだ。宿り木を見つけ、実を噛んでトリモチを使うこともあった。

3 月 25 日（日）

三年分の写真の整理

写真を整理するのに一日費したが、種類分けを大ざっぱにするだけに終った。三年分ほど手をかけずに積んでいたものである。外国関係、選挙関係、同窓会関係、地方まわり分、大会など儀式的なもの等々に袋分けにし、それをアルバムに整理したい、そうするのが一番いいだろうと思って手を初めたのである。既存の他のものは藤江君がしてくれているようだ。自分で点検しているわけではないが、点検再整理も必要かと思う。何しろ秘書室からどんどん届けられるのを机辺に積んでいたのが三年分はある。大小さまざま。書籍同様捨てる気にならないのがわれながら悲しい。捨てたってどうもないだろうに、更に時間をかけて整理しようというのだから、われながら馬鹿くさいことである。アルバムの十冊もいるのではないだろうか。整理区分しながら思い出すことも少くない。又全く思い出せないのもある。区分すらできないのである。バックに文字が入っている写真とか、届けられた時にすぐ日時場所を書いてあると、興味深く思い出す。捨てようと思うのもある。

3 月 26 日（月）

自然が美しいのに＝破壊

議会の待機中に「花ごよみ」（春）をみていて、昨日倒れてしまっているので紐で起こし立てた花をスノードロップと思っていたらスノーフレークだったのに気がついた。いい加減な覚え方だった訳だ。ユキヤナギ、アシビは満開、木蓮は柴木蓮又はトウモクレンというのだそうだ。今からそれが咲きそろってゆく。君子蘭は葉が損われ、今蕾だが咲くかどうか。藤の房が見る見るうちに七～八センチ伸びてきた。今年の咲きは早かろう。山椒の芽がもうつんでもいい程になってきた。昨日の新聞には今年は筍が例年より二割増の豊作と書かれていた。これも今年はやや早いようだ。昨日隣地（船越氏）の蕗の勢いよいのをみたが、蕗の薹はもうたちすぎているのではないか。その上に梅の実が小指の先ほどに浅緑のふくらみになってみえた。南の方の竹藪が無残に切り倒され埋め立てられつつある姿が見える。筍も埋めてしまわれる。私の家の日照もぐっと制限されるという話である。人間が人間に対し、自然の陽の光を奪おうとしているし、自然の草木も破壊してしまおうとしている。カネだけ

を残そうというきたなさが、すぐうちの南で計画されている。にくらしい限りだ。

3 月 27 日（火）
知事公舎について
予算特別委員会の知事保留質問で大川の古賀県議が、もと知事公舎であった高宮別館について追及してきた。次期知事選に出馬するのか、別館の利用度が低くもったいないではないか、大県福岡の知事は公舎をもつべきではないか（国際化、外国客、国内でも国体の大イベントが目前であるのに接遇できない）、条例を再改正して入居する意思はないか、またあれが「豪華」といのであれば、知事が気に入るようなのを建設して入居すればいいではないか、現在の別館はもっと利用度を高めるべきではないか･･･などなど。最後の項目については今後力を入れねばならないとはいったものの、他については現状を認めてほしいと答える以外に出ることは不可能であった。もういい加減に入居しても県民は怒るまいと彼はいうが、さてどうだろう。彼のいいたいことはよく理解できるが、まだまだ氷解したとはいえない県民心理もある。今の私の気持ちは「豪華」といえないと思うが、自宅からの通勤の自由を選択させてほしいし、干渉してもらいたくはない。二十四時間監視つきのような生活はかんべんしてほしいのだ。

3 月 28 日（水）
当初予算できる
二時前には「二月県議会」本会議議了となる。こんなにすらすら予定会期中に議了した例はないのではないか。三木議長がかなり強い指示をしたともいわれる。与党の議員たちもかなりその指示で動いてくれたようだ。尤も中には野党で抵抗もあったし、自己主張の強い人もあったようだが、ともかくやろうという点で一致でき、会期内しかも暮れぬうちに議了したのはみんなの努力の集結によるものであった。ただ私自身あまり感動的でないのが我ながら不思議なほどである。よろこぶべきだのにうれしさを感じない。疲れているようだ。順当にいったので祝杯とでもいいたいのに、その気持がない。今日は外かなり雨が降りつづいた。今日明日桜は満開だろう。花見とか夜ざくらという気分にもなれない。三月あと三日残っている。桜は一寸散ったかなという程度、桜花を追う人もあろう。ゴルフにもってこいの気温で外を楽しむ人もあろう。中央でもやっと補正予算が成立したが、本予算はまだ動かない。県の予算執行も中央をながめながらという期間が当面つづく。その意味では春満開ということにはならないのが惜しい。

3 月 29 日（木）
アルバム作りとカメラ
数日前に大筋区分した写真を一冊分のアルバムに整理したが、二〇分の一もできたといえ

ようか。見れば昭和六二年半ば以降、三年近い分がたまっているわけ。二〇冊ものアルバムがいるだろうか、まる十日の作業を要するだろうか。考えてみると、その頃から藤江氏がいなくなったんだったのであろう。辛抱強くやっていく必要はあろう。放置していても、どうということはないが、何だか自分で納得できないのである。アルバムにもいろいろな型があって統一されたアルバム集にならないのは残念だが今のところやむをえない。アルバムも一種の客観的記録資料だから、何らかの形にまとめておかないと、雑然としているといけない。普通の立場なら問題ないのだが、知事ということなので、異常に写真枚数が多いわけだ。もう十数年もカメラは扱わないし、きっとカビがはえて使いものにならない。使う必要も意欲もない。だのに焼付けられてどしどし手許に入ってくる。それが三年近くたまっているのだから、整理の荷も重い。もっと以前のものの再整理も亦問題になると思う。

3 月 30 日（金）

体調に懸念

検診をうけた。三日前は血糖二二八、尿糖プラス四だったが、今日は一七八とプラス二、肝数値三ケタだったが今日はこの検査はなかった。三月は悪いとの評、もっと体を休めねばと警告された。自覚の点では頭が重いのと肩が痛いのとがつづいている。寝不足感は相かわらず。睡眠時間は十分にとっているのに、ねむれないでひる間眠いという状況。たしかに体力はかなり衰えたのではないか。休むといっても食後のことであるが、その点実行できてなく、自覚の足りなさを反省している。肝臓のためには食後何分間か横になっているのがよいといわれながら、貧乏症というのか、在宅時でも、すぐ何かしようとして動いている。この点今後は一層自重しようと思う。――以前とくらべると時間にあくせくしなくなった方ではないかと思うのだが、まだまだケチケチして動いているわけだ。のんびり、のんびりしなくてはならないのであろう。いつから寝不足、不眠症になったんだろうか。もう五年とはいうまい？　今日鳥山隆三先生来県、七七歳かなり弱っておられる様子。

3 月 31 日（土）

退いたあと

マージャンを誘ったら河野・上田の両人が来た。河野氏は定年退官、それなりの余業は持ち、外に出歩く身ではあるようだ。上田氏は私と同じだからあれから七年になる。吉富製薬にずっと行っていて、あとしばらくはいいようだ。年度最後の日、今日は知事室に退任挨拶があった。東京事務所長も。原田室長には秘書室がお別れ会をした。それぞれ次の働く場をもっている。先日の新聞に天下り高級官僚があとをたたず、今年は昨年より十四人多いとかの記事がのっていた。民間会社でも、次々と渡りあるいて第三の人生を充塡している。ある意味では仕方がないし、知恵の働かせ方だし、いいことでもある。県の場合、五七、五八歳が肩たたきで、六〇はいや応なしという定め。先が読めるなら、早目でも横すべりしようと考え

る人は少くない。但し、先日花田守氏からきた手紙に、古手役人が天下って碌に働かず邪魔になっていると書いてあった。だから、ひとからいわれ、自覚もし、いい加減なところで静かに退くという心をもってなくてはいけないだろう。

4 月要記

企業立地の明るいニュースが身辺に重なり、新年度は、多忙なスタートながら国体という大型イベント消化の努力と相俟って特記すべき年になりそうだ。日産苅田の拡張、スペースワールドの開幕は四月の大きな出来事である。トヨタが宮田に来ることになったし、将来福岡県は自動車生産日本一の時代が幕明けしたことになる。県庁跡地利用の国際会館建設のコンペも四月審査が行われる。話題に事欠かない。新幹線博多南駅の開業も夢みたいな話だったのに、実現した。東京一極集中への批判が、さらに進んで溢れ出て北関東、東北に及び、中京、関西、中国はいうに及ばず、遂に九州にまで及ぶこの頃だと考えていいのかも知れない。私は東京一極集中をひが目でみたり、九州は一つというスローガンを強調したことはない。経済活動が自然になるようになっていくと思うからで、行政の重要任務はそうした波の中で、住民の福祉をあんばいするように努力することだといえる。トヨタの進出は奥田の努力のせいではないと県議会で某氏は発言したが、それでいいのではないだろうか。

4 月 1 日（日）

新幹線博多駅南駅開業

新幹線那珂川町の車輛基地と博多駅の間を回送列車利用の形で、博多南という駅前（ママ）により結ばれる事になり、今日、発車記念式が那珂川でおこなわれた。十分間で博多に出れる。西鉄バスは年間一億円余の減収になる。この車輛基地から乗るのは乗務員と那珂川に住む国鉄マンだけで、住民も乗せてくれればと考えた。カラ列車をみながら･･･十五年の歳月が流れ、五年間の住民運動が結実したのだ。その間に国鉄の分割民営化が強行された。諸悪といわれる中で、この線の開通が民営化の唯一の良き結果だろうと式に参列していた誰かがささやいた。住民の期成会を作っての陳情努力も熱意があったればこそという。しかし、人口がふえ、都市化が進み、バス路線、通勤道路、駐車場の確保にも地元としての犠牲と努力があったようだし、未解決の問題が山積しているようだ。喜びの背景に汗と犠牲、葛藤、悲話もあったし、まだまだ人知れずそれがつづく。社会現象とくに大きな変動にはこうした裏話がつきもののようだ。

4 月 2 日（月）

次期知事選模様ながめ

記者クラブ主催の花見懇親会が夜山ノ上ホテルで開かれ、広報、秘書三役も、新旧異動とりまじえてにぎやかな一時をすごした。記者側からは次期知事選への動きを知りたがってい

ることがよく見えたが、当方から何かをいえる立場でないし、時期ではないことは明らかだ。口をつむぎつづけるわけにはいかないので私も何か関連ごとをいうが、「私」がないこと、家族の賛同が得にくいことなど、否定面については説明しておいた。記者側からは自民の動きとして、私に説明してくれたのは、自民も奥田が次期出るか否かを見定めたいのが現状で、具体的候補名をしぼり込む段階には至ってないということである。その通りと私も思う。でもこのままでは時が経つばかりなので焦燥感もあるらしい。以上のことは誰もが共通の目としている所のようだ。何かきっかけはないかと話題開発をねらっているようだが、私の側にはそれを与えることはできない。社会党の林県議団々長は一切このことでわかるような言動はしないでほしいと私に強く念をおしている。時は経つ。それが問題らしい。

4 月 3 日（火）

花吹雪

今日は業務に少し隙間があいて骨休めになる時間があった。いつもほんとうに詰めこみがひどすぎる。朝早いのと、夜にも日程がはいると、これが私にとって辛い。日中の仕事は少々多くてもいいが、とくに夜の日程は嫌になる。だのに、ひとは夜も静かにせず社交的に動きまわり、引き込まれるのである。今日はそれがなかった。三時すぎ帰宅の途についたが、ほんのちょっぴり雨、それに一陣の風が出た。満開をすぎたばかりの桜花が風に舞う景色に幸運に出くわした。舞鶴城の堀の水面に一面花びらが浮んでいるだけでなく、ボタン雪が舞うように、何とも表現しようもなく美しく、桜花の舞うのがみられた。背景が舞鶴公園の空間だったということが絶景の大事な要因であろう。又晴れていたらこんなに美しくなかったかも知れぬ。ともかく今日はほんの十数分間だが絶景に恵まれた。のんびりできたし、言うことはない。昨日は山ノ上ホテルでの桜の夜景（夜桜）を、今日は花吹雪をというように、今年は桜の当り年のようだ。

4 月 4 日（水）

状況判断をどうするか

二時半から時間がとれたので社会主義協会に行っている嶋津氏に来てもらって、問研で、当面する政治姿勢につき話合った。東定も参加、高崎も偶然立寄って談話に参加した。東ドイツなど東欧、ソ連における民主化の波、米ソの冷戦構造の雪どけ、国内情勢、それに社会主義協会、問研などの今後をどう読むかということで近い者同志が集って意見を交わしてみないかということを私から提案した。五月の連休のどこかを選んで私も参加しようといった。全国的に混迷しているので、少しでもまとまりが欲しいし、勝手な解釈に個々にとらわれてはいけない。それにわれわれもこれまで戦後やってきた考え方と行動が泥溝に捨て去られてしまうのでは釈然としない。たとえば社会主義、党と国家との関係、宗教との関係、社会主義と民主主義の関係についてである。仲間で意見を交換する手だては嶋津氏にやっ

てほしいと私は注文した。又河野正輝氏レベルの若い人達にもっと前面に出てもらえるような状況を作ろうではないかということもふくめて提案したのである。

4 月 5 日（木）

〝九州は一つ〟？

〝九州は一つ〟の掛声が出はじめて二年になろうか。夜、中洲てら岡での永田、内田両部長の送別会のとき、渡辺労働部長が杯を交わしに来て、彼の出身である山口県につき、私見をのべ、福岡は山口と手を結ぶべきだと強調しておいた。山口県が九州地方知事会から脱退して四～五年はすぎたが、経済界は九州・山口は今なお手を結んでいる。何ヵ月か前に私は北九末吉市長に、北を向き更に西を向こうじゃないかといったことがある。ソウルオリンピックの年の青年の船団長として訪韓した時、私はソウルで、福岡は「西を向こう」といっているんですと発言し拍手をうけた。〝九州は一つ〟というと北九州市は端っこのまちになってしまうし、空港問題だって解決しないのである。県議会では、奥田は九州地方知事会でのイニシア発言ができていないと非難する向きもあるが、福岡が発言すると、他県知事は横を向く。イニシアとかリーダーシップとかんたんにはいうが、横を向く者のリーダーにはなれるはずがない。非難のための非難はやめてほしい。なぜに〝九州は一つ〟といわねばならぬか、誰がいっているのか問う必要があるだろう。渡辺部長には北を向こうとの意見をのべ共鳴してもらった。

4 月 6 日（金）

何にでも適応する癖

小川院長が、私の韓国行きは、休みにした方がいいと勧めてあったのが気になる。実は体調がいいとはいえないからである。自分で辛抱強い欠陥が自覚されてないことをつつかれているようでもある。又、こんど二年目随行秘書に橋本氏がきまったが、随行という仕事は「しんどい」のによく引きうけたものだと思う。その橋本氏が、たとえば中食をどうするかについて私が何も注文しないことをこぼしているとか。あれこれ注文せず「何でもいい」というのが、困るんだということのようだ。私は進んで選択しない癖がある。これも辛抱強いことと連動しているのかも知れぬ。食堂に入るときも和食か洋食か中華かときかれても、どれでもいいといってしまう。それでは困ると秘書はいう。そういわれてみるとその通り、･･･どうしても選択に歯切れが悪い。別の表現をすれば好き嫌いがない、どれでも好きということになってしまう。与えられものに容易に適応する。随行は橋本でいいかと聞かれ、本人さえよければと答えてしまった訳。なんでそういうことになってしまったのか、性格といってしまえないような気もする。熱が出て動くのが困難になり、測定してみたら体温が三九度にもなっていたということが前にあった。

4 月 7 日（土）

龍中卒業五〇年

午後神戸の六甲で龍野中学卒業五〇周年同窓会が行われているが、出席できなかった。部落解放全国婦人集会が日程に入り込んだために、断念せざるをえなかったものである。卒業五〇年というと記念すべき時だっただけに残念でもあった。反面、時間もかかるし、行かんで助かったとの感なきにしもあらずである。ほとんどが OB であるのに私はむしろ現役、バランスがとりにくい意識のズレもあろう。昨年末姫路で小人数集ったときに感じたが、みんな、エリートの側面で考えると、よくやって来たし、まだよくやっている。龍野といえばやはり名門なんだと思った。姫路、神戸、大阪の方面に出てよくやっている人が多い。もう半数近くまでクラスメートは減っているのではないか。二〇〇人定員だったので一〇〇人はないのではないか。満六八歳が一番多い。戦争を経ているので、余計消耗も多い年代である。年を重ねればそれだけ思い出も、心の中で大きな比重をもつ。中島敏子さんが近々知らせてくれたのだが、栃木にいるお父さんは植物人間みたいで生存中のこと。地・歴の先生だった。

4 月 8 日（日）

灌仏会の日に思う

ここ二、三日とんでもない夢を見る。もちろん後までおぼえているわけではないが、頭がどうにかなっているように思われる。死んでいるのではないかとか、起きてもまともに動けないのではないか、と思うが、起きてみて、やはりそうではなかったということになる。床に就いた時はしばらく、暗い山の中の藪地で静かに誰からも何からも害されることなく死にたいなと思ったことも何回かある。不吉な思いが自分の頭の中をかすめていることは確かなことだ。ただ現実にそうならないだけである。猫や犬が死ぬのは、ひと知れぬ所で静かにあの世に行くといわれるが、それがいいなと思うのであろう。鼻や口からゴム管を通されて植物人間となって病院で息だけしているとか、徘徊する痴呆病になったりするよりどれだけましかわからない。今日は灌仏会といわれるのに、こんなことを考えてしまった。夜刀出から電話があり五月五日朝から法事をするという。父の法事といっている。正一兄のことだ、彼は交通事故で死んだ。灌仏会の日にこういうことを書くのも何か因縁めいていると思う。

4 月 9 日（月）

個人情報保護の制度化

個人情報保護制度研究会から報告書の提出があり、夜そのメンバーの先生たちとサンヒルズで懇親会を行った。情報化時代といわれる今日、行政としての対応の必要性が強まってきたのを受け諮問していた問題である。行政が知り得たプライバシーを行政がどう保護するかということと、私的世界で知り得たものをどう守らせるかの二つの分野が当然に分けられるであろう。まずは前者につき保護条例制定にまでもってかなくてならないということ

だ。知事選がらみで情報公開制度の条例化にこぎつけたのが昭和六一年秋、それに絡んで、議会で個人情報保護もセットにすべきだと追及され、公開制が半年おくれたという経緯がある。この時点で研究会による報告書というところまで漕ぎつけたのだが、今年度中にその基本構想化作業を進め条例の前段階を終える必要がある。県段階で研究会作業が今後取組まれるわけだが、問題が広汎、微妙なところに踏みこむだけに、最初から完璧を期しえないかも知れない。情報化も更に具体的進展を見るであろうし、大事業になる。

4 月 10 日（火）

博多・麗水航路

〝ごーるでんおきなわ〟号の麗水博多間、就航出発式が博多埠頭で行われた。三時五〇分に乗船手続きをすませ、五時出航まで、那覇市長親泊さんと同室だが、この船は那覇・博多・麗水を結ぶラインなのである。麗水は唐津と姉妹関係を結んでいて、唐津の青年会議所の人達も、たくさん来ていた。夜は航海しながら立食式のパーティとなり、みんなでわいわい楽しんだ。写真を一しょに撮ってくれとの希望が多く、要望にこたえるのに多忙な時間であった。婦人客が多かった。中央区の人(8人)もいた。曇空、風強く、降り来る黄砂でどんよりした中でのテープの別れは華やかにみえた。この船は琉球海運六、六〇〇トン、福岡国際フェリーと名づけられている。韓国との交流がここ数年盛んになって来たので、しばらくの赤字で、あとは希望がもてる見通しである。自動車も積む船であるが、車を韓国に乗り入れることができるかどうか、疑問のままである。福岡というバックがあって、今後はこうした時間をかけての旅、即日帰国の旅も成り立ちうるようだ。

4 月 11 日（水）

キーセンパーティ

今回の麗水就航記念旅行の随行者は橋本君のほか企画振興部交通対策課事務主査の古賀誠一氏の二人であった。私には何も持たせないということで、よく手を貸してくれた。麗水夜の韓国側招宴には招かれなかった二人だが、事なきを期待し、宴会後ホテルに帰るまでロビーで待っていてくれた。彼らの方が私よりニュースを耳にするのが早いらしく、今夜の宴会も一寸危惧するところがあったらしい。というのは、よく話題になるキーセンパーティであることを知っていたのである。ソウルでもそういう日程はないように避けた予定を組んだといっていたが、今日は不可避ということであったから心配したのだろう。宴席の男子の間に女子が付き席の右側の女子が積極的にサービスする。それが夜のサービスまで期待し、宴後訪ねて行くということになるという。韓国のホテルはそういうことを予測したような部屋になっているともいわれる。女性たちは男の客と同数で年の頃二〇歳過ぎた人が主体。先方から求める形になるので、「気をつけないと乗せられますよ」というのだ。

4 月 12 日（木）

シェラトンオーカーヒル　見る、見せる

光州を経てソウルに。県職から出向している大使館の小山、ジェトロの藤野の二人が出迎え、大使館の車を使ってよく面倒をみてくれた。ホテルはロッテ、夕食はシェラトンウォーカーヒルで観劇を組み合わせての施設である。福岡ではダイエーがツインドームを建設する話があるし、東京のディズニーランドのアイディアも聞いているので、又、福岡のイムズ、ソラリアのイメージもあることだからというので、この施設を選んだと随行の橋本氏はいう。朝鮮戦争時代の将軍の名を取った南側の地。夕食をしながら観劇するというも新しいアイディアである。外国人しかはいれないカジノもある。観劇は曲芸を織り込んだ民族舞踊や歌謡など多彩な組み合わせになっている。観衆と役者との関係を、知事と県民の関係に置きかえての想念に陥った。妙な連想をもつ一瞬があった。「見せると見る、見させると見られる」。人間は妙な動物だなと思った。神妙な中にこうした関係も必要なのが人間なのだ。舞台では立派さと神妙だがその裏も亦必要だろうと考えたりしてみた。

4 月 13 日（金）

ソウルで偶然に

大韓航空、大使館、アシアナ航空の三つの要所に表敬訪問した。大韓航空では強烈な民族（国家）意識を感じさせられ、アシアナ航空では大韓航空への強い競争意識の上にある誘客ソフトムードを感じさせられた。あと、ロッテワールドに行き民族村展示の部分で偶然福岡からのグループ永田一行に会った。双方びっくりであった。写真はとっていけないのに、記念にということでバンバン撮ったものだ。双方ともこの時間帯ソウルにいることを知っていて、会おうとは思っていたのだが、こんな所で会うとは思わなかった。婦人たち、又県から元随行の斎藤原口らも来ていた。永田照彦氏が韓国にくわしく、一行の募集、旅行案内など努力してくれ婦人たち八人が中心のようだった。異国で会うと違った気持になるものだが、当方も日程があるので、自然体で別れ別れになっていった。でも韓国というものを改めて認識するいいチャンスだったと思う。天気がよくなかったのですばらしい旅とはいえなかったが、経験としてはめったにないことなのでよかったと思う。

4 月 14 日（土）

韓国の防空訓練

韓国ではほぼ毎月一回防空訓練があり、今日はその日だとのこと。午前十一時から約二〇分、空港に着いておれば交通の影響は避けられるだろうと早目に出発した。走っている車も止まり、運転手も近くのシェルターや建物に身を寄せるのだという。サイレンと同時に都市生産生活の諸機能が一斉に何分間か止まるのだそうだ。われわれは空港 VIP ルームにいたので、体験的に見ることはできなかったが、ホテルの部屋にはそのことの注意書が配布されて

いたので持ち帰った。「今の時代に！」と私たちはびっくりした。批判する人もあろうが、住民たちは命令に従っているという。その損失は大きいとの話もあるが、国民の気を引き締めるのに役立つのかも知れない。「北鮮から攻めてくる」という事が合言葉になっているし、実際訓練にも利用されている。漢江の南側江南地区はそれでぐっと開発が進んだともいわれている。川南ならまだしも危険が少いというので川北中心のソウルが南側展開へと心理的に動いたという。何か妙な感じがするが、実際にそうだから、思考をそこから始めるしかない。

4 月 15 日（日）

県政を織る方向

今日の新聞に県政広報が私の大きな写真入りで一面つかって掲載された。「県政を織るタテ糸・ヨコ糸、アジアの時代へしっかり」との大見出しである。タテ糸は技術立県と国際化、横糸は高齢化対策と環境問題だ。三年連続一兆円予算ということと、県民総参加の盛り上がりで「とびうめ国体」を盛功（ママ）させようということで結んである。これは先日、大濠公園で日本庭園を使っての対話を軸に仕上げたものだ。技術立県は主唱してから三年になろう。環境問題は二年目である。横糸に一本加えるということになった。地球規模の環境汚染、産業廃棄物、一般廃棄物は行政関与の頭痛のタネだが、一向に解決の見とおしが立たない。技術立県は石炭なきあとの福岡県を支える方法として特化したスローガンだが、マスコミをはじめ、その言葉の平凡さを批判し、内容の特殊性を理解しようとしない。これは「総立ち」という言葉についても同じ、「総参加」ならわかるというだけである。この記事も「総参加」と表現してあるが、よくわかってくれないからだ。

4 月 16 日（月）

北九州テクノセンター発足

北九州テクノセンター（株）の設立総会が小倉ホテルで行われ、県と市が御礼の意味で夜、料亭千草で招宴を開いた。招いたのは地域振興整備公団総裁茂串氏、九州通産局長の山口氏ら八人であった。この中に新発足センター専務の前波、事務部長の古賀氏もふくまれている。当方も県・市四人ずつ八人。このセンター方式の蔭の力になったのは今日出席の通産省立地公害局の総務課長大村昌弘氏といわれる。ソフト面への政府の産業政策出資への道を開拓したという事だろう。山口氏もなかなかさばけた人物で、第八次石炭政策について努力した経歴をもつ、筑豊に年間数百億円を何十年も注ぎつづけたが、ほとんど実を結ばなかった。公害、失対、生保の効用についてかえって筑豊の浮揚をさまたげるまでになり、地域住民の精神風土に好しくない蔭を落としたと彼はいう。私も同感だが、知事の口からはそういえない政治風土になっているのだと私は彼に伝えた。山口氏は、それはわかる、しかし主張するといっていた。石炭六法延長問題にどう対応するかの答は既に出ているともいっていた。知

事の賛成をという。

4 月 17 日（火）
残業なしデー
日本人は働きすぎとの定評がある。よくいえば勤勉、仕事のしすぎ、貧乏性ということもできる。私自身そうだし、県庁職員をみていても同様にいえる。休むこと、遊ぶことのよい面、その意味を知らず自覚もない。広報課から五月の「朝の放送」についての打合わせの時、四月末からの大型連休について話したらどうかとの話題が出て改めて感じさせられた。過労死の話題がある。県職員にも例があるという。働くのはいいが、程がある。公務員の世界では、定員の限度もあるのだから、自らサービス提供の仕方に工夫を致し、できるだけ効率的に、カットすべきは切り捨てて、自分達の仕事の限度を自分で決めてはどうかと思う。反面遊ぶことの意味を考えるべきであろう。遊ぶことが次の仕事のためというのでなくて、人間としての存在を意義あらしめるため、又は世の為というよりは自分の為ということを、もっと自覚し主張すべきであろう。残業が多すぎる。「残業なしデー」の設定が庁内でいわれはじめている。いいことだし、仕事の工夫を促進すべきであろう。

4 月 18 日（水）
従業員の立場と企業の選択
苅田の日産九州工場の拡張起工式が午前中おこなわれた。久米社長が祝賀会の席上、従業員の心を心としたい趣旨の話をしていた。記者が私に日産に次いでトヨタの話、今日の感想は？ときいて来た。これをつなぎ合わせての感想だが･･･いい話には違いない。いうことはないのだが、東京一極集中のあふれが九州にまで及ぶに至ったといえばクールすぎる受けとめになるかも知れない。「従業員の心」の中には、一時間半もかけて片道の通勤現況では、九州の立地で、楽な通勤条件を与えてやるのがいいといえる時代になったと推察できる企業者の心を見てとることができる。情報距離は差がなくなり、製品輸送には世界を視野に入れたら横浜も福岡も差はない。地価が安く、従業員の通勤が便利な方がいいともいえる。それやこれや計算すると、大企業の地方への展開は今や当然の帰結であろう。――世界が相手なのである――「知事の手柄ではない」と自民党県議はいうがその通りで、企業の選択でそうなっていくのだとクールに受けとめてもよいのではないか。

4 月 19 日（木）
小野明氏の急逝
小野明氏が急逝した。現職の参院副議長で、福岡県ではこれを受けて補選が行われる手順となる。昨夜はテレビでプロ野球巨人大洋戦をみるため、看病に来ていた奥さんを病院から帰宅させたという。今朝の四時頃なくなった。誰も死に目に合ってないらしい。カゼをこじら

せ急性肺炎だという。国会は「衆参ネジれ現象」で課題が山積し、副議長も激務つづきだったに違いない。私と同年の生まれだし、勤評はじめ多くの労働問題で共通のテーマに共同の立場で取り組んだだけに、思い出はつきない。県教組委員長、県評議長、参院四回当選、社会党県本委員長などの経歴をもつ人物だけに逝去の重みも尋常ではない。今日はトンボ帰りで上京、公邸におくやみに行き奥さん、妹さん、長男次男と、近親の方々に弔意をのべたが尽くせないものがある。同時代を生きてきたので、今度は自分かなと思ったりした。年寄りは風邪に注意しないといけないと西田東京事務所長が私にいった。自覚している以上に体力は衰えているからと彼はいう。小野さんのように、誰も知らぬうちに、数時間後死ぬのはかえって幸せかも？

4 月 20 日（金）

参院補選への動き

小倉南区若狭県議の「励ます会」（富士見ホール）で、参会者約二〇〇人が小野明氏の冥福を祈って黙禱した。小野氏は昨年七月の参院選で当選したばかり。補選が六月十日と予定され、県内政局はいわかに騒々しくなってきている。自民党は来年の知事選に繋ぐ意味からこの補選を重視し、早々に候補えらびに入っている。社会、共産がその後を追うようだ。遠藤政夫氏も出馬したかろうが、自民は県議の中からという動きの方が強いようだ。社会党は小野後継者を是非とりたいだろうが、連合がどう動くかの予測はたちにくいし、選挙資金面で苦労があって難渋しよう。藤田一枝さん（県議）とか、松田留吉（県評センター）とか、福教組からとか名をあげる人がいるが、要は連合に支持されるか資金を出せるかできまるだろう。自民が今月中に決めるといっているから社会ものんびりしてはおれない。福教組の梶村では両方とも弱いような気がする。松田は西鉄で藤田は自治労、どちらも国会議員を抱えているので苦しかろう。

4 月 21 日（土）

スペースワールド前夜祭

スペースワールド明日オープンだが、今日はスペースキャンプの開校式と前夜祭である。一九〇一年としるされた高爐の横に鉄から転身のソフトそのものの世界が現れたのである。午後七時からの前夜祭には各所のショーを見るためどんどん観客が集っていた。年間二〇〇万人が目標いといわれるが、アメリカの特許独占アジアに唯一というから、あとは中味が勝負どころであろう。ざっとみて、もうひと一工夫ほしいという声もあった、が、今夜のためにずいぶん努力したあとがうかがえる。あれこれのショーがどれほど付加されているかにもかかっているだろう。恒久施設だから博覧会というわけにはいかない。学びと遊びが巧みに組み合わされ宇宙という珍しいテーマをもっているから、子ども達にとっては世代の循環という点では入客は無限にありうる。周辺、交通アクセスなど外部の整備もこれからの

課題である。九〇〇〇台はいる駐車場が準備されているが、交通渋滞がありうる。皿倉山がバックにあっていい。この山を化粧してみるのも一案ではないだろうか。

4 月 22 日（日）

としよりと婦人

万燈法五月号がくる。俳人も年配者が多く、女性の比重が高いのが特徴であり、当然そうした年齢や性別の特殊性が詠風に出てくる。井尾望東さんも年で又病気らしい。

　壷の梅散るを眺めて病んでをり
　点滴のミモサ明りにはじまりし
　春蘭の香に忘れられ病んでをり
　見舞う人間遠になりぬ梅も散り
　入浴の許可得てものの芽など見に

何だかよくわかるような気がする。井尾さん選の婦人俳句の中から拾ってみる。手あたり次第でしかないが。

旅人吾もかまくらの子の客となる	吉岡辰代（飯塚）
悴みてことばの端を省きたる	古賀昭子（大牟田）
草萌や子供はいつも輝いて	蔵本はるの女（田川）
やっと訪づれし眠りに咳またも	伊佐利子（福岡）

4 月 23 日（月）

もう一歩のスペースワールド

昨日はスペースワールドオープンの初日だったが全くの雨、新聞には五千五百人の入場と書いてあった。いろんな人の話は、宣伝の割には内容がもう一つというのである。鉄会社の仕事らしいと皮肉な声もある。まずは一所懸命やっているという事を評価せねばならないだろう。改良は日を追って、経験を積んで、その上でやってほしい。私の印象ではスペースというテーマのゆえに、中身が固いし、抽象が強い。肌にふれる楽しさ、面白さ、遊びをさらにさらに加えてほしい。ソフトの転換がねらいであるだけに、今後一そう工夫されることを期待する。市内の、県内の人々への集客を第一義とすれば遠くの人への呼びかけも当然それに伴っていくだろう。JR 九州や地元企業が力を入れてくれているのはよいことだが、教育行政、機関がぐっと関心を寄せ、児童生徒達を引きつけるようなチャンスを意識的にふやしてほしいと思う。いずれにせよ、今後に期待するしかない。

4 月 24 日（火）

石城と時の流れ

福岡城趾を帰途花見がてら散歩した。改めて城の石垣をつくづく見ながら「総立ち」論を考

えてみた。又ペルーのインカ帝国やシルクロードの廃墟の石造り宮殿（四島司氏の「情断回遊」という撮影旅行作品集でみるシリア、ヨルダン、イラクなどのルインの状況）はなぜにこれができ、こうなったのと考えあわせてもみた。後者は日本の城の石垣とは比較にならぬほどの巨大さと精巧に驚かされるものである。今日は舞鶴城の石垣に手をふれながら感嘆したのだが、現代わが身辺の建造物の浅薄さをも考えた。万里の長城も、もっとくわしく観察してみたいと思う。「今のわが身辺の建造物」という指摘をしたが、それは大小の資本・資金であり、城や宮殿など遺跡のような権力はないからくらべるのは間違っているかも知れない。巨大な石造りの背後には想像を絶するほど巨大な権力があったのだ。日本の城は比較的小さい。それは権力が比較的小さかったからであろう。それにしても砂漠化のような社会的自然的変化にも思いが走る。

【欄外記入】

ピラミッド、~~スフウィンクス~~、コロセアム、万里の長城、マハータート寺院（タイ）

4 月 25 日（水）

遊ぶことは学ぶこと

五月の朝の放送の録音をした。広報課の仕事との関連である。テーマは四月末から五月はじめにかけての連休に、休養、遊びを味わうべきだという内容である。先日オープンのスペースワールドは遊びつつ学び、学びつつ遊ぶことをベースにしてのテーマパークである。子供は遊ぶことによって学ぶが、それは成人にもいえる。成人には勤労という別に必要な時間があるが、日本人にはその時間が多すぎる。いわゆる「働き蜂」の異名すらある。働くことの中にも学びがないとはいえないが、働くことの主流には学びがない。遊ばないと馬鹿になるというが、それは学びがないからである。こんなことを思う自分自身、毎日多忙なばかりで、学ぶにも学べないのが残念なのである。人生どこまでつづくかわからない。学びも、これでいいという限度はない。今日は中食時にジェトロ派遣帰任の職員と歓談しながらの時間をとったが、彼らも遊ぶことができてよかったといっていた。はげます意味で私も「よく遊ぶ」ことを推奨しておいた。若い時ほどよく遊ぶことが大事である。

4 月 26 日（木）

マハータート寺院（タイ）

ANA 機内誌翼の王国をみていて熱帯古都スコータイ（バンコックとチェンマイの中間でチェンマイに近い）の記事が目に止った。ワット・マハータート寺院の廃墟が写真に出ているからである。二日前の日記に書いた石城のことを重ねて考えるからである。「タイの歴史はスコータイから始まる･･･スコータイの地（は）クメール帝国（ヒンズー文化圏）の植民地都市でのひとつであった。それまで被支配民族であったタイ族が一二三八年反乱を起こし、クメール人を打ち破って自らの王国を興した。もともとタイ族は中国雲南省にあって南詔

国を作っていたが、フビライのモンゴル軍の侵略を受け南下を始めたのだ。雲南の山奥から肥沃な平原部におりてきたタイ族にとってこの地はまさに「黄金の土地」だったに違いない。スコータイ王国は三代国王ラームカムヘン王の時代に隆盛をきわめ、ほぼ現在のタイ国土を領有する。スコータイはセイロンの小乗仏教をとり入れた敬虔な仏教国家であった。遺蹟の建築物はほとんどがワット（寺院）であり、一ヵ所のワットには複数の仏塔や寺堂が建っている」･･･ざっとこう記してある。信じうる限りで興味深いことだ。

4 月 27 日（金）

千葉幕張メッセに行って

千葉の幕張メッセに午前中の時間を利用して見学に行った。県の企業庁が東京湾を埋立てた広大な土地。北九州国際見本市の何十倍もの土地が坪五〇〇万円も値付けされ売れたという。四苦八苦だった数年の景況が今や夢のようだと話されていた。メッセというよりはコンベンション施設群地区といった方が適切であろう。ロッテ球団をねらっての野球場もある。世界的な東京一極集中が溢れ出て千葉に及んでいることは周知のことだが、それがこの幕張メッセにあらわれてもいる。県当局はほくほくらしい。千葉市も人口八〇万人台に上昇し、指定都市への準備をしているとのこと、東京からからここまで、切目なく都市化が進んでいるのである。こうした景況がいつまでつづくのだろうか。東京はもちろん千葉も交通渋滞がひどい。成田、羽田両空港も大型連休を前にごった返している。福岡に帰り着くと、高速道もすッとして渋滞は見られない。何だか往復して東と西の違い、別世界のような感じがある。それでも福岡は「多極集中」の一つの都市だといわれているのである。

4 月 28 日（土）

自助、互助、公助

県の議員会館で社会党の自治体議員の研修交流会があって挨拶及び若干時間講話をした。テーマは「地方自治の源流を求めて」ということで、姫路刀出の郷倉、宗像の定礼を引き合いをしながら自助互助公助についてもふれた。話のあと、某議員が発言し、「自助」という点には納得しかねるとのことであった。この人身障者の立場で、自助とは抵抗を感ずるという。私も予想はしていた。社会党共産党には自助に納得できんという人がある。それを承知の上で私は自助、互助、公助の論理を展開することにしている。案の定、抵抗を感ずるとの発言があった。身障問題などにつき、行政が「自助」を逃げ口上に使っているというのである。私は逃げ口上に使ってはいけないと答えたが、彼はそれ以上追及はしなかった。生活保護その他についても同様である。定礼や郷倉（義倉）が上からの押しつけであってはならないが、自助から始まるこの論理の線上で自治を考えていこうとの私の提言は今後もかわらない。理解してもらうために更に努力せねばならぬ。

4 月 29 日（日）

満点の春の一日

休務だったし、特別に自己課題を負わさぬ日としたので、一日中のんびり庭に出入りして自宅の環境に没入した。庭仕事をして疲れを覚えたのははじめてだろう。衰えたようだ。午後陽のあたる縁側でしばらく横になり目を閉じた。眠れたわけではないが、音が耳ざわりだった。一つは時に着陸しようとする飛行機の爆音。二つめはマンション裏庭に出入りする自動車の溝板をならせて横切る音と出発時にエンジンをふかせる音。さらにはマンションの住人子供たちの群れさわぐ声、これがひっきりなしである。休校でもどこかに遊びに行かないのかなあと思う。しゃべってしゃべって時に大笑、ほんとうにやかましい。これにくらべると、緑に降りてくる小鳥のさえずり、美しい音色で四～五種類の小鳥だが雀のほかは特定する記憶がない。小鳥は虫をくわえては飛ぶ、わが世の春といわんばかり。虫の敵だろうが、虫はそのことを知っているのだろうか。又小鳥にも敵はいるはずだが、その世界はどうなっているんだろうかと考えて、縁側でしばし夢心地であった。

4 月 30 日（月）

高齢者も活躍

長沢定夫という人から重い便りが届いた。カセットテープ三本、ほかいろいろの資料。香住丘に住む六六歳のボランティアグループの方である。店番を日常の仕事としているが、市の福祉協議会を拠点に「便り」づくりなどいろいろ活動し、高齢者の高齢者への奉仕に意義を見出している。こういう人がどんどん輪をひろげてくれることを祈る気持が一ぱいで、早速礼状を書いた。「文集お便り」四月号（五七号）にのっている俳句が[ママ]をひいた。

白髪にしばしとどまる桜(はな)吹雪	森部半翁
干柿を吊るして住むやビル谷間	松尾綾子
衣変え昔をしのび懐かしむ	松本セツ
妻病みて暦で知るや針供養	安藤英俊
鯉の背のゆらぐ波紋や水温む	井倉　久
吹く風の優しくなりて草青む	渡辺光次郎
借景で紅梅の色賞でる幸	砥上俊子

5 月要記

若葉青葉のすばらしさに感じ入っている。改めてである。花もいいが若い芽、葉も劣らずいい。花はどこから来てどこにゆくのだろうと以前に考えてみたことがあった。今は新緑がどこから湧き出るのだろうかと考えさせられる。自然の力、恵みはどんなに考えても不思議だし有難さしみじみである。日の出、日の入りと同じように、風も雨も昼も夜も、めぐる四季もすべて有難い。五月はとくにそれを感じさせられる。でも新聞には何とか虫が異状発生し

て北部九州のレンゲ草が壊滅し、養蜂家が困っているという記事が出た。地球規模の環境問題、酸性雨、オゾン層の破壊、砂漠化の進展、温暖化による海水面の上昇などじわじわやってくる恐ろしい話も最近とみにきかされるようになった。これも自然現象だが、人間にその原因がないとはいえない。国際規模で取組まねばならぬことのようだ。五月も半ばになると、夕方、外で鉢物手入れをしていると蚊に襲われるようなる。蚊も生きているんだから襲ってくることは仕方がない。われわれは美しい花を咲かせたいのである。国体の花の種を蒔いたので、今年は立派に咲かせたい。

5 月 1 日（火）

統一と分裂のメーデー

官民が統一されてはじめてのメーデー。国際メーデー一〇〇年目に当るという。中味については福岡地区労がどうなっているのかよく知らないまま、共産党系統一労組懇系が分裂を明確に打ち出している中で各地のメーデーをとりしきる地区労がどうなっているのか知らぬまま心配である。北九地評は地区統一メーデー側にいたが市職など分裂して別にメーデーをしているらしい。福岡も分裂メーデー、東京は三分裂のメーデーだったといわれる。総じて労働界は大きくは共産党系とその他に二分され、九〇年代の新しい段階に突入したわけだ。好況を反映して賃上げや時短は問題を残しつつ、まずまずの成果が出たらしい。これも労働力不足が追風になったようだ。しかし、人手不足の賃金高で苦悩する中小企業も少くなく、「春闘」がまだ決着していない企業も数多いときく。まずは総じてのどかな中のメーデー、午前中はまぶしいほどに晴れていた。子供連れ、お祭りに等しい出し物もあっての平和なメーデーだった。

5 月 2 日（水）

衰えのひどい記憶力

記憶が悪くなったと思ったのが日記をつけはじめの動機である。二十数年前のこと。でも近頃は哀れなほど記憶力が衰えている。花の名など図鑑を見るなどして思い出す努力をしているが、自慰でしかない。夕方には朝のことをもう忘れているほどである。花の名など、わかり切っているのに、直ぐには出ない。時間をかけても出ないことがある。シャクナゲが満開やや過ぎたわが室内テーブルの上、その名が出てこないのであきれ返る。一体どうなっているのであろうか。花の名ならまだどうでもよい。問題は人の名。これも今日アルバムを整理していて痛感した。アルバムならまだましである。人常の仕事の中でひょいと出てこなくて、失礼というか、無能の暴露というか、恥というか、それが一番いけない。理くつならいくらでも弁説するのに、人の名にひっかかる。町長の名などポンと出てこないといけないのに出ない。日記をつけるか否か関係はない。が日記は場合によりては手繰ることのできる他にない金庫でもある。毎日行き当りばったり文脈も確かめないで書きつづけているが、やは

りないよりましである。

5 月 3 日（木）
どんたくと憲法の日
どんたくパレードは出発式までで、雨のため中止になった。それでも血の沸く人達はカッパを着てでも練り歩く。ぬれてでもやる人は少くない。一日百万人ほどの人出という。四〇〇年もの伝統、八〇〇年ともいわれるが西日本一人だかりの市民の祭になっている。花電車から花バス、それも西鉄から各社へと見えるところだけでも変化してきている。年々華やかになっていくのであろう。一時は節約令で禁止されたともきく。だったら平和のシンボルといってもよかろう。今日は憲法記念日でもあり、有志の憲法集会が大手門会館で十四回目である。知事になる前から私も発起人として動いていたものだ。憲法のお蔭で平和と民主主義を強調しても大きな顔ができるのだが、この二つの太い路線が平気で汚され、国民の間に憲法意識の「風化」が進んでいくのも問題である。空気や水のようにあるのが当り前で、それが汚れたりなくなったらどうなるか。存在の有難さに気づく人が少くなりつつあるのが残念である。

5 月 4 日（金）
佐方の者と夕食会
刀出の法事に行くことができるので、一日早めて今日は佐方の人達と夕食会をする計画を章に立ててもらった。場所は相生荘で、宿泊も全員そこに決め、今回は佐方の家に立ち寄らない旅程になった。義母はるをさんは米寿になるのだが、章は来年法事が予定されるので、その時に米寿祝を重ねようと思うという。一年後のこの連休を使って計画したいという。のんびりした考えだと思うが、それでやれるならとかくいえまい。私をふくめ、寿命は大丈夫かといいたいのである。和子の長男健がこの夕食会のメンバーに加わっていたのでびっくりしたが、三十も半ば近くになって立派な若者である。一彦が四十四歳になろうとする。祖母はその二倍の年でまだ元気。耳が遠くなっているので、ながいきの可能性はつづくと想定できる。章は一家ばらばらになっているので苦しく不自由だろうが、表面はほがらかである。炊事その他生活上の雑用は全部自分でやっているので、小廻りがきくようになっている。人間関係は積極性なしには何も当てにすることはできないものだ。

5 月 5 日（土）
刀出での法事で思う
刀出（晴久）の法事。主催者は準備心づかいなど大変だなと思った。大きな行事である。晴久の父母の十七年と十三年だから、その関係者が主賓である。私の知らない人もあった。甥や姪の時代であることを痛感した。毅が東京から来ていたし、和歌山有田の向井清夫妻も来

た。十七回忌になる正一兄、私より八歳上だから六十一歳で死去したのか。県道脇の田仕事に行っていて若者の車にはねられての死亡であった。読経のあと和代が仏壇の中から法名の束をひきだしてみんなに見せていた。私の祖父庄三郎が一番長命であとは早死するのがわが家系の特徴である。その庄三郎が六十九歳の死とある。とすれば、昔の「かぞえ」を割引きすると、むしろ私が一番長く生きていることになる。今日も本家田辺の利夫さん以外は、私が近親者の最年長であった。いわば次の順番ともいえると思った。長男光男のはなかったが、三郎、六三、五郎、十郎など兄弟の法名はあった。五郎以外は二～四歳で死んでいる。七二兄は六十七歳で亡くなった。五郎は三十一歳戦死だ。

5 月 6 日（月）

連休が終って

青葉若葉がまぶしく日光を反射させる。鯉のぼりが威勢よく泳いでいる。年間一番よい時だろう。ちょっとだけ寒さを感ずるが、それがかえっていい。山々にはあちこち藤花が化粧の役を果たしてるが、新緑もなかなかに鮮明な役割をもっていることに気がつく。連休が今日で終る。客の入りが決算的に問題になろうが、どこも大にぎわいだったようだ。雨にたたられた博多どんたく港まつりはやや低調ではあったが、二一〇万人と数えられている。花の万博（大阪）は一五〇万人とか、列をつくって待つ人は三～四時間覚悟とか。いやにならないのであろうか。ともあれ、日常の多忙を連休で取りかえすということはいいことだ。余暇という表現は一寸疑問を感ずる。「間」という字があてはまるが、これはどうでもいいというのではなく、不可欠の時間帯である。「間」の意味は深長である。単に体を休めるとか遊ぶというのではなく、アイディアを得るとか、着想、発想に新しさを求めるとか、次への動きを整えるとか、なくてはならない時間である。

5 月 7 日（月）

中国研修生の来訪

中国外交部アジア局から派遣された研修生孫美嬌さんと劉毅仁氏の二人が九大教養部での一年間の研修を終って来訪してきた。高田教授のもとで勉強したので、奥田さんの事はよくきいたという。又孫さんは一九七五年、まだ大連外国語学院学生時代に、私達が中国を訪問したとき、ずっと随行して説明役を果たしたが、彼女は私をよく記憶していたということだった。上海、杭州（西湖）、南昌、広州などを廻った時のことを今日も話題にした。日本語はペラペラになっているが、当時はかたことでしたという。今回の訪日は日本人の裏の生活もよく観察しようういうことらしい。一九七九年から八一年まで駐日大使館勤務もしたという。劉さんは彼女より十一年若いらしい。アジア局日本処に勤務していて一昨年二度訪日の経験があるという。十五年前の訪中団を思い出す。西湖の美しさが今も忘れられない。日本人の生活の裏面も勉強したとはいい考え方である。外交儀礼という言葉があるが、内側を知

っておくことも必要なこと。

5 月 8 日（火）
姫高同窓のこと
牧坂氏が九州姫高会の幹事をよく消化してくれていて、今日もその総会（秋に熊本で開く予定）の案内状と共に「白陵」12 号を送ってきてくれた。平成五年四月に旧制姫高七〇周年記念祭を準備しつつある旨の記事が大きく報じられている。トップに戸谷姫路市長の稿がのっていたが、その中で姫路は戦後師範学校と高等学校を失ったと述べたくだりがあった。それに昔陸軍の師団もというべきかも知れない。いずれにせよ、大きなものが奪われたわけだ。かわりに姫路工大が新設されたし、鉄の広畑を手中にした。シロトピア（市制一〇〇年記念博）の成功を機に、次の発展をはかりつつあるのが母校のまちなのである。「白陵」をみていると、二〇ページの記事のなかに、昔ながらの秀逸さをしのばせる文章が多いし、同窓会が各地で思い出の場となっている状況がにじみ出ている。十日後に私は大阪旅行の予定があるが、今、若干の同窓生に便りして再会のチャンスを作るかどうか迷っている。再会はいいが、反面あれこれ面倒だなという気もする。心の勢いが衰えたのだろうか。

5 月 9 日（水）
ボランティアグループ
行橋はボランティア活動が盛んだとの説明をうけての今日午後の対話集会。一〇〇人ばかりが市社協に参集した。グループ連合会が対象であった。やってみてみんな熱心な活動家なのには感心した。問題は高齢者介助、身障者、非行青少年、環境など多方面にわたるが、取組み方も婦人たちを中心にバザール、掛声、弁当づくり、ピクニック、読書奉仕など種々さまざま。手造りのそうざい、まんじゅう、縫物編物、手紙などが見える形で披露してあった。二十一世紀に向けての一番の心配はこうした活動を若い人達に伝承し、自分達がその恩恵にあずかりたいのに、若者への啓蒙普及が思うようにいかない。差しあったてはボランティアの拡がり、即ちメンバーの増大と費用の不如意だとのこと。又できればコミュニティセンターを建設してもらいたいといっていた。高齢者へのデイサービスや一般講習会、ミーティングができる場所ということである。ともあれみんなよくやってくれているのでびっくりした。民間先行で、行政あとおいの形である。団体があるので、手話通訳などなど、更にボランティアが必要な時である。

5 月 10 日（木）
注目される福岡参院補選
小野明氏の県葬が福岡斎場で行われた。「告別の会」と称して宗教色は入れられてなかった。花輪などなく、祭壇の飾花も最小限、白一色であった。あと一ヶ月で後つぎの参院補選があ

るが、後継者とみなされる三重野栄子さんも弔辞を読むやら挨拶の中に引き合いに出されるやらで、今日の看板役にもなっていた。新聞解説によると、参院野党優勢がこの福岡補選で自民が議席をとると、野党工作もプラスされ、参院与党優位に逆転するので、自民は補選必勝を期しているという。候補である県議住吉氏はもう二週間も前、小野氏死去直後から動き出している。山崎拓氏が正面に出ている。社会党の方も小野後継は死守せねばならない。三重野対住吉、いずれが優位にあるか正直なところ読めないが、三重野側は出おくれと選出までに幾分ごたごたがある。連合福岡は味方についたが力量ありやの問題が残る。共産党は対立候補を見送るというので、三重野側に利がある。いずれにせよ、自民が勝てば、来年四月の知事選に対し、突進の構えができるとみられている。

5 月 11 日（金）

ボランティアと行政

六月の朝の放送話題について広報課と話し合った時、ボランティア問題が話題になった。一昨日行橋にいって感じたことだが、ボランティア活動が行政を引っぱる作用をもつということである。ボランティアか行政かではなく、前者が後者を引き、部分が全体に及ぶといっていいのではないか。ボランテイア活動は地域的だし、少数派部分の作用しかもたないが、行政にその対象が組み込まれると平等、普遍になり、水準が量質とも引き上げられる。ただし、行政に組み込まれると、住民は水道の水を使うかのように、当然、当り前のことと前提してしまうことになる。教育や福祉、交通などいろんな分野で住民はそうした行政サービスを太陽の光や空気のように、思考の対象にしなくなってゆく。やむをえないとはいえ、モトにかえらねばいけないのではないか――以上のようなことを私は強調した。水を使う時はその井戸を掘った人の苦労を思えと昔からいわれているが、その苦労を思わないのが、常態になってしまっている。まして水道なら、といえよう。県の職員にもこうした関連をよく考えていてほしいと思う。

5 月 12 日（土）

裏庭の木の枝を払う

青葉の時期になると伸びすぎの枝の伐採が必要になってくる。庭仕事がたまるわけだ。専門家にやってもらえばいいのに、その気がおこらない。そんな気質の持主なのである。やはり枝切りは自分の仕事と思っている。高所に登ると、年柄もなく危険を伴うので余程用心しないといけないと自分にいい聞かせてやっている。土曜閉庁日で時間もあったので、今日は一時間余り費して庭の木三本の枝切りをした。どうも快い疲れを感ずる。もうその時期になっているのに、自覚がないようだ。でも休むのに躊躇はしない。何回か休みを利用してこういうチャンスを作らねばならぬ。新芽をつむのは心苦しい。命がある。木の精がそこに集中しているのに、ばっさりとやる。人間が自分勝手にこの枝はと思って切るだけのことなのであ

る。自然がなるようにまかせられないものだろうか。こんな狭い所に住んでいるからそうなるのだろう。許してくれという気持で形のよいように枝をきっているのだということを了解してほしいのである。

5 月 13 日（日）
写真の整理
昨日につづく庭の木の枝払い。今日は疲れたし揮毫の宿題も朝のうちに終ったので、ゆっくりねっころがる時間を設けた。やっぱり眠れはしない。放任状態にあった写真整理はひととおり目を通したことになったが、まだまだ混乱したままといってよい。何のことだかわからないのも多いし、整理の方針もつかない。同場面のが、あそこにあったのに、ここにもあると思って「あそこ」を探しても見失ってしまっていることが少くない。但し、よく考えてみると、なぜこんな写真整理というような「後向き」のことをするのだろうか。回顧のため、とはいえない。放っておいてはいけないと単に思うだけである。雑然としていて何が悪いときかれても答える用意はない。でも少しでも整理が進むと気持がすっきりする。そのために時間をどっさり使っているのだ。写真はもらったものばかりといえるが、その時にその都度、せめて日付とか場所とか、件名とか一寸の時間を惜しまず書いておけばいいのにという反省が強い。

5 月 14 日（月）
中村信県議死去
塩塚川橋の開通式で大和町側から柳川市へ渡り初めをしたあと、大川の古賀県議から、糸島の中村信県議の死去の知らせを受けた。ショックだった。諸行無情とはいうが、その通りである。若草がどんどん伸びている中で、畑のえんどうは役目を果たして枯れているし、もう麦秋といえる――これが筑後、柳川の風光である。中村さんが役割を終えたとはいわないが、次の代がわりが余儀なくされる。知る人あり知らぬ人あり。そのいかんを問わず、無常、非情にかわっていく。割り切るしかないが、それは大所高所に立っての話。当事者は嘆き悲しみ、事後処理に頭を痛める。中村夫人は私達夫妻が済生会福岡病院に彼を見舞に行ったことを今日の弔問の時も謝意としてもらしていた。彼は私に好意をもっていてくれていた。農政連所属だが、こちらも好意に感謝できる人だった。膵臓病のためと書いてあったが、聞くところでは（不明）□癌だったという。66 歳。農協のリーダーでもあった。「惜しい人は早目に亡くなる」と身のまわりの人達で話合ったものだ。二十二日農協葬がある。日程を都合して私も出席を強く求められている。

5 月 15 日（火）
革新懇

午後六時半から一時間半、祇園町のマルコ福岡ビルで革新懇があった。内田一郎さん、高木菫子さん、共産党の県議、事務局員、森茂雄、藤野達善、その他、藤原正義氏も。小島肇弁護士がきりまわし役で第一法律事務所が事務連絡先になっている。教育、米の自由化、非核条例、生活保護、失業対策、同和、塵肺、被爆者、国保、高齢者介護、消費税、文化など多方面にわたった。発言はみな好意的なトーンではあったが、言い分は、「弱い者への配慮が足りない、差別がひどい」といった問題点の指摘である。藤野氏がまっさきに立って学校の現場をみてくれ教師をはげましてくれといったのも印象的だった。日教組、県教委、同和教育を組み合わせての発言だが、解く緒さえみつからぬ問題にまでなっているようだ。部落問題で生徒が教師を糾弾する、他校の生徒も参加してそれをやる。県教委はそれを見て見ぬふりをする、是認する。教師はビクビク、やる気を失うという。県議会で与党が少いことは誰しも暗に理解している。が生保や失対、国保料不払者などもっと温かく扱ってくれという声は平素からきく声と同じだった。

5 月 16 日（水）

大鶴氏死亡

一日中書斎といえるような生活になったが、夕刊をみると前の教育次長だった大鶴英雄氏が今朝亡くなっている。近頃知人の死亡がつづく。昨日は松本七郎氏だ。大鶴氏は亀井知事時代に日教組征伐の先頭に立っていたので死をよろこぶ人も多かろう。昨年やめぎわに教育長の竹井を辞職に追い込んだといういきさつももっている。二人とも「同じ穴」でありながらツノつき合せたようだった。高石次官とともに竹井もリクルート事件に関係していたという問題。三人とも片付いてよかったと思う人が少くない。本人達はしたい放題したのだから満足だろう。それにしても死亡した大鶴は五八歳で少々早すぎた。肝臓の病気という。中村信さんもその辺、何だか周囲が妙だなと予感させられる。私自身依然糖尿と慢性肝炎、体力が衰えてゆくのを痛感するこの頃である。睡眠が十分にとれない。病院でよくみてくれているので、これ以上どうしようもない。今日明日休務にしてくれているのも、秘書室の配慮だろうと思う。ボヤッとしておれない性分だから、いけないなあ。

5 月 17 日（木）

鴻臚館に文字史料

十五日の西日本の夕刊に鴻臚館跡の発掘調査を進めている福岡市教委が木簡一点を含む三点の文字資料が出土したことを明らかにしたと報じられ、私も注目した。「文字資料が出たのは初めてで、いずれも国家的施設である鴻臚館の存在を裏付ける貴重な資料」としている。（資料は史料の方がよくないか）木簡には「肥後国天草郡志記里」の文字が読みとれ、肥後の国から海産物が運ばれ、いわばその荷札にあたる公文書だろうと推測されている。年代は八世紀前半（七〇二年から七一五に限定される）らしい。大宝律令直後であり、古事記、日

本書紀の書かれた頃である。ほかに、城の字がみえる墨書土器、二坊の字が読みとれる木製皿漆皮膜で、意味解読は今後のことになるようだ。海産物は「調」にあたる物納税のあかしだそうだ。志記里は芩北町志岐にあたる。郷里制が施行される七一五年以前のものと解説されている。吉野里などの遺跡からも文字資料（史料）がみつかったらと期待している。

【欄外記入】

（聖徳太子 17 条憲法　604 年
遣隋使はじまる　　607 年）

5 月 18 日（金）

アジアの時代明け

ホテル日航福岡で京大教授矢野暢氏のスエーデン王立科学アカデミー会員就任祝賀会があった。ノーベル賞選考の委員になったわけ。社会科学系ではアジアは勿論日本でもはじめての会員という。東南アジアについての権威者である。21 世紀はアジアの時代といわれるが、矢野氏の立場はこれから光ってくると思う。地球上にはいつからか人類の特徴あるいくつかのゾーンが成立した。東南アジアもそうしたものの一つでどこか似たものをもった国々からできている。私はそうした個性をリファインされたものとして特化することが必要だと思う。東アジアの特徴、中でも日本の特徴、そしてその中で九州・福岡の特徴というように、リファインする努力、特化する努力が必要であろう。そしてそれぞれが、他に対して相互啓発する（できる）ようになる必要があると思う。その意味で東南アジア学はこれからの科学分野であるし、それぞれが個性とプライドを自覚すべく努力する必要があるだろう。アジア博は福岡市制一〇〇年記念だったが欧化一〇〇年だった。これからは個性発揮の時代に進んでいくべきであろう。

5 月 19 日（土）

大都市の深夜人間

大坂梅田周辺「北」を夜おそく歩いてみて、ゾーッとした。若い男女がどっさりそれぞれの目的をもってか、歩いている。異様でおそろしい。もちろん何がおこるというでもないし、博多の夜もそうなのかも知れないが、自分は別として、なんでこんなに多くの人が歩いているのだろうか。「北」はにぎわうのは当り前だし、消費経済堅調といわれるので不思議ではないが、ともかく驚きであった。ホテルに帰って感じたのは深夜の車の音の高いこと。暴走族とは思われないが、車のエンジンのふかしようが尋常でない。大阪の人達は運転が荒っぽいとはきいていたが、無茶に駆動している。他人迷惑をむしろ意識しているようにも思える。でないと平穏に走っているなら、あのエンジンの音はおかしい。大都会がどこか狂ってないか。夜おそくまでうろつき歩き又は車を狂った音で駆動し、家族生活が普通に行われていると想像し難い。男も女も小銭はもっているのであろう。瞬間的な享楽に浮かれている人が多

すぎはしないだろうか。緑も虫も鳥も水もそこにはない。

5 月 20 日（日）

大河ドラマに黒田公を

かつて県議会でも話題になったので私は今日、NHK の大河ドラマについて、黒田武士、槍、秀吉、黒田、母里太兵衛などの人物をとりあげ、家康、光秀、信長をあしらい、場所は姫路、中国路、博多町割り、姫路城、御着場（ママ）などが扱われることを念頭に、話題推進につき提案した。相手は大阪コマ劇場伊藤社長（県人会会長）、西田東京事務所長、住友の会長（県人会々長）の三人に、それぞれ所見をのべたのである。伊藤住友建設の会長はこの点関心が比較的高かった。西田所長は県人会の若い世話役である NHK の高良氏にあたってみようとのことであった。伊藤さんは御着の黒田廟を改築した人でもあって、その辺の事情には執念をもっているし、NHK の番組審査会の方にも知り合いがあるようだ。こういう大河ドラマに話題が上げられ、実現するまでに三～四年はかかる。精力的に推進しても気の永い話だ。これから私も何回かその筋に当ってみることにしたい。今日から思いついたのだ。

5 月 21 日（月）

九州国博はいや！

国土審九州地方開発特別委員会に出席し、知事サイドからの意見をのべた。私はとくに国立博物館のことと、地球規模での環境問題について発言した。先日の新聞では宝満山（セブリか？）のモミの木が枯れる兆しのあることが報じられたが酸性雨のことらしい。偏西風で九州がまず汚染されるのだが、政府側の答えは全国的な問題なので、九州開発を扱うこの委員会の答申としてはふれてないとのこと。逃げの手だろうと思う。前者すなわち国立博物館問題は新たに提起されて以来もう十年にはなる。今日の答申原案でも、固有名なしで、「あり方を検討」とだけのべてあった。ここ数年この問題への政府の対応をみていると、やる気が感じとれない。文化政策がないともいえるし、九州で国博に手をつけると、日本の神話が崩れるのでまずいとの政治的配慮が先立っているかのようである。数日前の新聞では、アメリカでゴッホの絵など日本人が二五〇億円（二件）近くの値段でせりおとしたという話。政府も財源がなく九州国博建設に及び腰だといえる状況ではないこと明かである。九州国博が嫌なのである。

5 月 22 日（火）

環境も末世的

光円寺の住職、円日成道さんが住職の個人誌道を送り届けて下さった。一寸ひまをみて読んだ。そしてハガキで返礼を書いた。寸感ではあるが、今日中村信元県議の農協葬で前原からの帰り道、草刈機で国道路辺の草刈りが行われているのを見たが、「刈る」ということが

機械的に行われているだけで一寸も美しくなっていない。美しくするには素手が必要。荒けずりはできてもそれ以上の草は残ったまま、かえって路辺の空缶やゴミが露出してみえる。誰が素手を使うのか、使う労力、予算をつけるのか、実際に解決の方途はつきとめえないとの悩みを返信に書きこんだ。人間のエゴ、他への配慮のなさ、体制の物欲主義、あきれるばかりである。道路維持課にその姿勢を説いても耳を貸そうとする者はいない。もしいたらおかしい、存在しえないともいえる。環境問題はここに根っこがある。人類滅亡への道が敷かれているようにすら思うのである。

5 月 23 日（水）

生活保護の重みについて

昨日の庁議で生活保護率低下状況についてくわしく知りたいと発言したら早速民生部長保護課長らが、午後、くわしい報告をしてくれた。奇しくも帰宅したら小郡市の住民から、息子が大学に行くのになぜその分を保護費から差引くのか、生活権、教育権を基本に訴訟するという手紙が来ていて、それを読まされることになった。息子が十八歳で大学に行くようになってもその分の保護費は打切らずに継続すべきだとの手紙で、長い長い主張と資料に接したのであった。市のことだから直接県には関係ないが、知事宛ということは確かである。理論のかたまりで、序に天皇への財政支出不当論もとび出し、「主権者」としての国民が前面におどり出ている。新婦人の会の新聞切り抜きも入っており、息子の原稿ものせられ、小川政亮氏の意見もつけてあった。保護の打切りがひどく叱られているわけだ。叱られたりおどかされながら保護をしている側もたまらないだろう。天皇がついでにこっぴどくやられている。この被保護者は大学の教授か弁護士になったらいいのではないかと思った次第である。

5 月 24 日（木）

総合防災訓練

総合防災訓練が矢部川矢原河川敷で行われた。梅雨期を前に毎年この種の演習が行われ八女のこの地はわたしにとって二度目である。洪水や山火事の想定もあるが、消防防災の技術がどんどん近代化するし、専門化するので驚きである。しかし、それだけに、ひとたび災害が起れば一般住民はほとんどお手上げだなあと思った。但し、こんな消防防災の構えで何程の効果があるのかも疑いたくなる。空中ヘリコプターの撒水にしてもそうである。消火放水も現実に、ないよりましだろうが、効力ありと自信をもっていえるだろうか。孤立者の救助もである。演習の想定がきれいづくめなので現実味が湧かない。炊き出しも自衛隊の炊飯車が動員されていたが、一食や二食ならパンや非常食の方がよほど簡便で効果も大きいと思った。そういう意味で、この種演習の仕方内容には更に工夫が必要ではないだろうか。知事は総監という立場だし、民生部長の補佐もあるのだから、ひとごとのように言うのはよくな

いが、企画の立場の者が、もっと検討を深めてほしいものだ。

5 月 25 日（金）

農業、農村に親もう

農協婦人部の幹部研修会がセントラルホテルであり、挨拶して前後三〇分ほど思い出を話してきいてもらった。若い頃農業の体験があることを話せばみなさんのイメージもかわるだろうと思ったからであり、又話の中味も理解してもらえると思ったからである。麦秋といえるこの頃、網干の和代からエンドウ、ソラマメ（さや付き）を宅送便で送って来てくれたので夜、早速ながら皮をむいた。今日の講話の中で私は農業農村によって人間の自然との接触ができ、生きものとしての人間の自覚ができるということを強調した。蛾を見てキャッと声を立てる人があるが、虫たちに驚きやこわがりで接するのではなく、もっとやさしさを以て接せよといいたいのである。都市と農村との交流はすすめなくてはならない。しかし接し方に一工夫も二工夫もしなければならない。農作業を一寸やってみるということではなくて、農作物、農作業、自然をどう理解するかを考える必要工夫があっていい。そういった事も付け加えて講話したのであった。久し振りに農作業の話をして爽かさを感じた日だった。

5 月 26 日（土）

来年の知事選前哨戦としての今回参院補選

参院補選で自社両陣営の大物が福岡県に入ってきている。今日は大蔵大臣の橋本龍太郎、社会党委員長の土井たか子両氏が来福。選挙戦ムードが一挙に高まったといえる。自民の住吉陣営がまだ一歩先んじているとみられている。土井人気は相かわらず高い。社会党の側では多くの人が奥田はどうして表面に立たないのかといっているらしい。林県議のいい分では、桑原福岡市長が鉢巻をして住吉応援演説をぶったのはマイナスだったとのこと。奥田が三重野と一しょにうつっている写真が三重野陣営のポスターに出ている（チラシだった）のに、自民党側が苦情を出しているとの声も。その声は私も自民のある県議から直接きいたのだが、ひとのことを一々気にしているなとの印象である。神経をとんがらせているといってもよいが、総じて言えば今回の参院補選は来年の統一地方戦の前哨戦としての位置づけが両陣営で暗黙の一致点だ。自民が勝てば次の知事選に勢づくし、負ければ知事の候補の擁立すら困難になると見られているという。

5 月 27 日（日）

国体、身スポの惰性

身スポのリハーサル大会入場式に出席した。秋の四五回国体につづき二六回の身スポ大会がセットで、毎年各県もちまわりで開かれる。国体にも反対や批判が少くないが、身スポについてもいえるかなと思う。ますます派手になる。惰性にはずみがつく。先催県に倣うと同

様に、負けまい、不満を少くしようとの競争意識が働くから拍車がかかる、無理が生ずる。今日も何人かの病人が出たようだが、それもこうした問題の延長上のことであろう。のんびり楽しんで友好の輪をひろげるといいと思うが、勝負、華美、高レベルが問題意識として先に立つ。人がたくさん集ると輸送、交通混雑その他の面で事故が起こりやすくなる。そんなことをおそれては何もできないとの反論もありえようが、度を過ぎてはいけないと思うのである。天皇その他の皇室を招くのもその延長上にある。だれかがどこかで思い切った改革に手を初(そ)めないと無限に、危険な方向につき進んでいくだろう。困ったことだと思うけれど、今は正面から立ち向う人はいない。「知事が」という論法もあるが、不可止な力が今は働いている。

5 月 28 日（月）

陸上自衛隊をのぞいてみる

秋の国体と全スポには自衛隊の協力が必要ということで、今日は春日の第四師団司令部に出向き、県と師団の間の協定書調印式をおこなった。国体に反対する者も少くない中で、その人達の一応の納得をえた上でのことである。中食を隊員クラブ食堂でいただき、雑談する時間があった。婦人隊員も何十人かいるとのこと。それに、現代の若者向きの軍隊生活を送らせるために、幹部の側もいろいろ工夫せねばならないようだ。半分ぐらいは自宅通勤という。カセット、ビデオ、パソコンが支配的な今日、若者を納得させるには並大抵ではなかろう。食堂のメニューも選択の余地を残さねばならないであろうし、図書室の在庫も思わぬ苦心がいるようだ。昔なら気にくわぬと、上官が殴ったものだが、そんなことはありえない。隊員自身の親の思いはへだたりがあろう。親許に手紙を書くというような人はないのではないかという。春日にいても福岡の繁華街がより好まれるようだ。思えば現代の若者に軍隊の規律になじませるのにどれだけ苦心せねばならぬか、想像を絶するであろう。賛否は別として、別世界、別人間といえよう。

【「つくしんぼ　ひばりと知事」（『朝日新聞』1990 年 5 月 28 日朝刊）の切り抜き貼付】

5 月 29 日（火）

文化を食べる

夕食後、東京、ふくおか会館に帰ってベッドの上に転がって三〇分余飽食の疲れをいやしていた。こころよいひとときであった。紀尾井町のあるフランス料理風の店で西田所長らと四人の食卓で二時間近く雑談にふけったのだが、出される皿がどれも高級な味付けであるのに驚いた。店の人が挨拶に来たので「おいしいですね、質が高いね」と答えて、「文化を食べさせて頂いています」とつけ加えた。私は以前から、おなかにはいってしまえば物質的に同じでも、目や舌やのどは料理の文化度を判別するものだと主張していたのを思い出した。料理の工夫、それに手間ひまをかける、そこに料理文化があると思うのである。さらにいえ

ば、その料理のテーブルへの出し方にも、店の雰囲気にも文化があると思っている。先日、福岡で淡交会、お茶の文化講演があって挨拶したのだが、事務当局が作った原稿を棒読みして、列席の着飾った茶人達をシンとさせたのだが、瞬間、これは失敗だったと思った。ナマの声でナマの思いを披歴しなければいけないのに、と反省した。茶の心を原稿なしで言ってみるべきだったのだ。

5 月 30 日（水）

反核条例直接請求運動が起こされる

反核条例制定直接請求運動が六月十日の参議院補選のあと、二ヵ月の予定で署名活動として展開されるが、恐らく法定数をこえる署名は集めうるし、そうなると、十一月はじめに臨時県議会を招集して知事が提案しなければならないことになるという。臨時県議会は身体障害者スポーツ大会の直前の多忙な折に重なってくるし、用意されている条例案なるものが、知事に義務づけている内容そのものからして「できない」ことをせよといっているものとなっている。そのようなものを提案すること自体矛盾であるが、提案はせざるをえない筋道になっている。だから「なじまない」との意見を付して提案することになる。なぜそういうものを直接請求署名活動として提起するのか、運動体の本意が理解できないが、前にいくしかないこの問題が行きつくところまでいくと、知事側、議会側、署名運動提起側の三者とも県民の前に大きな混乱と不信をさらけ出すことになる。合同法律事務所の池永満氏、それにきくところによると岩崎隆次郎氏が中心という。困りもの。

5 月 31 日（木）

色のこと、わからないまま

東の隣境からガクアジサイを切ってきて壺に生けた。どこにも咲いている。どれも日増しに開花が目立ち、変色しているのに気づく。昨日は「かわさき」の玄関に、見事なガクアジサイの鉢を見た。粒々の小花も、よくみるとそれなりに力一ぱい咲こうとしていてかわいいものだ。ところで改めて思うのだが、花はどこから、こんなに短い期間に力強く生命をのばしてくるのであろうか、又、どこでこの色がきまっていつも出てくるのであろうか。そして申し合わせたように変色していくのであろうか。何千年も昔から人間はこの事実を知っており、それなりに花をめで、対応をしてきた。色に学び、草木の花や枝や根を利用して被服の色染めをなし、絵をかく顔料とした。それは洋の東西を問わない。しかし私はいつ、誰が、どこでこの「色」なるものを人工的に発見し材料に仕上げ利用してきたのか、少しも知らない。われわれがふつうアカといっているものにも無数といえる程の変種がある。色そのものをウグイス色というように名づけたりしている。これもいつから名称が決まっていったのであろうか。黒と灰と赤と白と‥‥なぜそのように名称が決まっていったのかだ。

6 月要記

なぜか身辺の人が死亡する。これが気になる。小野明参院副議長、松本七郎元代議士、中村信県議、鳥山隆三先生などなど。長寿社会いわれる今日、もう少しの感がある。でもそれぞれ仕方がないところかなとも思う。それで、だんだん自分の身にまわってくるような予感なきにあらず。いつ何がおこるかわからないし、対応困難なことになるかも知れない。思い残すことは特別にはないが、身辺の整理をもう少ししておきたい。しかしこれはなかなかできることではない。毎日塵が積もると同様に整理の宿題が残っていく。「白鷺城の興亡」（寺林峻著）を歴史経営学的視点にすえて書いてあるので、興味深く読んだが、昔の城主など年若くして死ぬのが多いことを知らされた。でもそれなりの見識権威をもってやっており、偉いなと思う。人生五〇年といわれた頃だろうが、誰しも、何をやってもやらなくても、それなりの役割を果たして死んでいく。悔やむことなければ、よしとせねばならぬ。

6 月 1 日（金）

博物館基本構想緒につく

九州国博の基本構想策定委十八人と推進本部側十人とで、中洲仲柳で懇親晩餐会を行った。明日構想策定委員会がある。全国レベルの学者が選抜動員され、国博の基本構想に取りかかってもらう段階に来た。梅棹忠夫氏が学者を動員しないとだめだといっていたのを思い出し、やっと誘致運動も緒についた思いである。この顔ぶれで文部省も重い腰をあげざるをえなくなるとの見方がでてきた。私の席の前にいた福永光司氏とは食事をしながらずいぶん話し合うことができた。中国宗教思想史の専門家だが、示唆に富む話をきくことができた。欧米文化の、つまり近代科学の到達点からみて、日本人は東洋精神又は非科学的なものの共存を求めて今後打って出なければならないと強調していた。科学と非科学の共存である。この博物館の基本構想も、九州とか日本とかをかぶせると狭きに失するので、アジアを冠したらどうかという声もあるらしい。福永氏は、日本人はアジア、中国の末流だということを強調していた。中国の沿岸をかなり歩いたという。福永も奥田も中国に源流をもつ姓だともいっていた。いずれにせよ、二十一世紀、アジアをにらんでの博物館構想になっていくなら注目されることになろう。

6 月 2 日（土）

鳥山先生の逝去

緑濃くなり、晴れると、いよいよ夏が来たという感じ。うちの周辺はクジャクサボテンとサツキが咲き乱れている。鳥山隆三先生が亡くなったと牧坂氏が暮れ近くに電話で知らせてくれた。夕刊にものっている。七五歳、心不全、福大病院で今朝八時すぎと報ぜられている。近頃われわれ姫高同窓生の集りに顔が見えないとは思ったが、体調が悪いとは気付かず、見舞にも行かず失礼なことになったものだ。少々早すぎると思う。高校時代の地学の先生で、

ていねいにプリント刷りを配っての講義で、ノートを取る必要なく楽させてもらった。九大理学部にこられ福岡の人となられたので、姫高会には同窓生のように扱って、感違いが生ずるほどなれなれしくしてきた先生である。奥さんとは演奏で結ばれた仲という。私にはとても及ばぬ世界である。北九州市自然史博物館々長が最後の公職だったろう。八幡駅ビルの中にあるその博物館を訪ねた時が印象深く思い出される。心不全ということだが、もっとくわしくききたい。衰弱されていたようだが、はっきり原因があるはずである。古生物学研究とはおもしろい分野だと今にして思う。

6 月 3 日（日）

住民運動がどこまで

中食会もかね仲好会の人達に山ノ上ホテルに来てもらい、反核条例直接請求の問題につき意見をきいた。行政上問題はあろうが押し止めることは既に不可能の段階に来ているので、運動者の善意を否定しないようにとの意見が大半だった。衣笠、徳本、西井、内田、門田見、土井、それに秘書室杉山、広報の森山が出席者。徳本氏が社会運動の転機に住民運動の意義も重要になってくるのではないかと指摘した。社共、県評センター（県民の会も）はこの問題には冷やかである。今日のメンバーは住民運動たることに意味があるとしている。ただ私が思うのは、こうした住民運動が、政治や行政にもっと関心をもってほしいということだ。思いを遂げるために法的ルートを用いたというだけでは、住民運動とはいえ私には納得のいかない要素がある。徳本氏らは、住民運動も政治を変える時代になっているという。住民運動に、政治的まとめをする指導者が必要な段階がくるであろう。今回の場合、まとめ役がまだ出ていないし、その道もわからないようだ。やることに意義ありとしている。

6 月 4 日（月）

桜島降塵活用

小島慶三「文明としての農業」を読んでいるが、うなづくところが多い。たとえば――ヨーロッパにおいては、長い歴史の過程にいくつもの文明が栄え、滅亡してきた。しかし農業のもつ役割や意義を重視し、大切に育んできた文明はみごとに生き延びた。土地を守るために独自の工夫を重ねることによって、自然と共存する媒介としての農業の価値を認めてきたのである。そしてヨーロッパ全体としては今なお、かつてのイギリスのような食糧自給放棄策に対してひじょうに批判的である――鹿児島に知事会で来て夕食会の時、桜島の噴煙降塵について話題にしたのだが、除去に要する労力とコストは大変らしい。しかし、このことを敵視するのでなくて、降塵を人間の生活に役立つように工夫することが大事ではないかということになった。それを研究していますかときいたら工業試験場で種々やっているとのこと。まだもう一歩前進がほしい。固形して使う方向のようだ。今は廃棄物扱いで片付けるのが主流らしい。自然との共存をここでも教えられた。経済合理性だけが支配するのはよ

くない。

6 月 5 日（火）

肉食と海外進出

昨日のつづき――地中海沿岸の人々がそうであったように、北ヨーロッパの人々ももちろん肉食民族であった。食生活のなかに家畜がミックスされているわけだから十分な食糧を確保するためにはその分だけ広い土地が必要ということになる。たとえばかつての日本社会と比べれば、全体としてはるかに広大な土地を維持しなければならなかった。その点でも、彼ら北ヨーロッパ民族の土地拡張への執着やダイナミズムの根源は、十分認められるのではないかと思う――又――大航海民族について――海に出て行くためには船をつくらなければならない。船をつくるためには、どうしても大量の木材が必要になる。大量の木材を伐採すれば当然森が死んでしまう。一例としてフェニキアが没落したのは、国内に豊富に茂っていたレバノン杉をほとんど伐採してしまったためだという――海外進出は、結果的に農業の放棄につながる。そして、そのことがスペインやポルトガルの早期の没落の原因となった。――日本で徳川時代の鎖国がかえってよかったということになる。おもしろい発想だ。

6 月 6 日（水）

他用途米に工夫を

又々小島氏の本から引用――（すぐれた他用途米の開発について）問題は、主食米に比べて、他用途にあてた米の価格がひじょうに低いことだろう。加工、原材料用の場合には主食用米の買上げ価格の四〇%、飼料用では一三%、工業用アルコールではわずか一二%しかならない。水田利用再編対策で指定された小麦や大豆と比べても、さらに収益性が低いことになってしまう。これでは財政負担をいたずらに増大させるばかりである。私自身、バイオテクノロジーなどの技術革新によって将来的には他用途米でも十分に採算がとれると考えているのだが、それはあくまでも将来の話である。――この展望に向って向って農政を進めるしかないのではないかといっているのである。農業の関係者がもっと真剣にバイオその他多用品種の改良に努力すれば、収益性をうるのに展望が開けるはずという。人間が食べなくても、他用途米は二～三倍の収益に達するものとしての水田作物ができると見込むわけだ。私自身よくわからないが、米以外に汎用水田という考えの方が先立つのではなかろうか。

6 月 7 日（木）

私権が強すぎては

〝ふるさと対話〟で矢部村に行った。八女津姫の神話のある村。五年ほど前に来て八媛旅館に泊ったことを思い出す。矢部川の流れが細くなり源点の釈迦ヶ岳は一二三〇メートルで県下最高峰という。対話の中で「二八災」それに連動という日向神ダムが問題になった。こ

のダムはどれほどの役割を果しているのか。出来てしまえば当り前のように誰にも有難がってもらえないようだ。水や川の有難さやおそろしさがもっと実感されていいのではないかと思うが、平常心ではそうはいかないらしい。もっと利用されていいと思うのだが、漁業権というのが閉鎖性をゆるめないらしい。山の緑も清流のさわやさも人間日常生活から切りはなされるのであれば、見るだけということになってしまう。道路を広くしたりまっすぐにしたりとの要望は強いが、地権者が話の進捗を妨害しているケースが少くない。私権が公益の前に立ちはだかっているのに、公益だけを行政に求める一般住民が多いのは困りものである。日本社会の前進にこうした躓きの石があるように思えてならない。行政だけを攻めて正義の味方の顔をするのが治らねばならぬ。

６月８日（金）

三度目の土井委員長不機嫌であった

参議院福岡補選投票まであと一日残すところまで迫った。岩崎隆次郎氏が来て非核直接請求運動は止まらんといって、あと、補選をどう見るときいたら、勝ちますよ、企業選挙中央直接パイプ論をいう相手は古いとのことだった。夜三度目の来県応援の土井たか子委員長にねぎらいのため高宮の水月に訪ねたら、全く見とおしが効かない、県庁筋の動きが今回鈍いことが中央からもよく見える、今日明日残る時間努力してほしいと、一寸渋い声でいわれた。随行の小田氏らにきくと、その通りで、岩崎はもう運動の中にいないので、状況が読めないのだ。先方は電話戦術であらゆる名簿手あたり次第に繰って潜行的にフル回転している。当方は危機感が強いとのことであった。又、政務をさばくべき林副知事がこの時節ブラジルに行っているなんて理解しかねるともいう。なるほどその通りで、県庁筋の対応が問題になるわけだ。知事は三重野事務所に顔も出さんとの声もある。「県政に波が立たんように」との配慮が支配しているので、そうなってしまう。住吉陣営に目立たぬよう、マスコミにもみえないよう遠慮ばかりしているということが専らの評判なのである。

６月９日（土）

二一世紀の農林魚業

小島慶三は「文明としての農業」を結んでいう――農業、さらに生命産業こそは二一世紀の主力産業だ――ちょっと大胆に思うが、そのいわんとするところは理解できる。人間が生命体である限り自然、そのサイクルから離れることはできない。離れるものは他を犠牲にしない限り生きていくことはできない。氏は黒川紀章の「共生」に共鳴し、「共存」を唱えている。人間はその原点から離れ、その離反を補うために他を犯してきた。しかしそれができないなら原点にかえるしかない。都市文化や無機物ばかりにあこがれるから、他を犯すしかなくなるのである。日本農業に将来を見出すことは今たいへん困難である。「過疎化」が進み、後継者が減少し絶望が支配している今の農村農業に何とか「活」を入れたい。この本をみん

なで読んでみんなで考えてみたらどうだろう。いい知恵が出るはずだ。変革が提言され勇気ある試みが開始されるはずだと私は思う。農耕、林業、牧畜、漁業、醸造など、どれも生命産業として関連し、次の世紀には、今思いもよらぬようなコンプレックスが盛んになるだろうと私も思うのである。

6 月 10 日（日）

鳥鳴更幽の環境

西側の松に大きな鳥が二羽とんで来ている。動作が忙しそうだ。目はキョロキョロ、私が縁にいることを知らないらしい。一時ものんびりしていない。忙しそうだ。又何種類かの鳥がさえずりつづける。青空にひびきわたる。虫が多いので鳥も得意一ぱいなのであろう。青葉がはち切れそうだ。そのような六月上旬の日曜、気分は上々だった。が今日は参院補選の投票日。自民は知事選の前哨戦といい、知事（県政）の批判を精一ぱいやってきた。が県民はそんなに受けとめてはいないだろうし、私もそれは一寸的はずれだろうと思っていた。案の定自民は負けた。社会の三重野候補の事務所（西鉄労館）へはできるだけ記者の少くなった頃をと思い十時すぎに、興奮がさめた頃と思って行ったのに、記者に囲まれてしまい、次期知事選はこれでどうのこうの質問攻めだ。そんな事はひとがいうだろうが私には関係はないという事で逃げたが、うるさくつきまとわれた。夜こうして嫌な時間だったのに、ひるまの鳥は満点。

6 月 11 日（月）

当面の政治関心

昨日は三重野さんが福岡参院補選で大差をもって勝利し、今日の夕刊にその詳細が出た。朝刊は一せい休刊だったので西日本やフクニチは号外で朝早く流していた。中央政局はまた揺れ動く要素を抱え込んだらしい。自民党は政治改革、消費税、自由化問題のいわゆる三点セットについてまだ頬かむりを決め込む構えのようだ。片や同じ日の選挙でペルー大統領にフジモリ（熊本出身日系二世）氏が選ばれ話題を呼んでいる。人口の七〇%が貧乏人と報じられ、その方面からの支援で圧勝したといわれる。年間物価が二七倍になったペルーである。貧乏人が多いのも無理からぬことだが、超債務国、超インフレ国に誰がしたのか、どうすればその苦悩から脱出できるのか見とおしはなさそうだ。秘書室でメモが渡された。FBS の調査で奥田支持か否かで支持二一二、否九三、中間一八二とのこと。報道陣では昨日から三重野当選で来年の知事選の展望は、とさかんに質問してくる。秋の国体をくぐり抜けるしか答えようがないと、私ははねかえしている。

6 月 12 日（火）

三重野陣営敢闘会

夜大手門会館で三重野氏の参院選敢闘祝賀会があり、われわれ夫婦とも出席した。改めてウーマンパワーの大きさに感嘆した。今日の出席者も女性がたくさんあった。県下のアクティヴな女性の顔を網羅していたように思われる。住吉陣営の七四万票は内部の人たちが予定していた数だったようだが、三重野陣営がそれを十二万票上廻った。その力は三重野自身キャリアウーマンということもあるが、今回は特別に女性選対ができてハッスルしたせいだともいわれている、女が燃えたともいえる。近年家庭でも女が男を選挙に行こうといざない、何某と推して投票希望というようになったとか。もっと以前は逆だった。自民党がいわゆる三点セットの課題をいい加減になし崩しにしていることへの怒りは女性に執念のように残りつづけている。三重野側はそれをうまく衝いたといえるだろう。住吉側が、県勢沈滞や中央とのパイプ論をひっさげ企業選挙方式に固執した古さから抜け出せなかったのに比べ大きな違いである。肝に銘ずべきであろう。

【欄外記入】

開票結果

（当）三重野栄子　869,036

　　住吉徳彦　　748,319

6 月 13 日（水）

公について

黒木町まで往復、樋口県議母の弔問である。車の中で目をつむって考えたこと。吉野ガ里はクニというが、国家とムラの未発達未分離の状況であることが第一。同様の社会が日本列島の他の地域にもあるというのが第二点。全くの空想であるが、そう思った。今日午後三階講堂で監督者特別研修の知事講話の時に、ムラ、自治について話し、綱紀と能率について公務員モラルを理由づけたことが念頭から離れず、この空想に及んだ。辞書で「公」の字をひいて、その解釈をおりまぜながら講話したのであった。公の字は八とムの会意で、私の反対側を意味するとある。なかなかうまくいいあてていると思う。「見られる、見える、見させる」という立場でもあるから綱紀と能率が大切である。即ち「私」ではないのだということである。村八分のムラ、そこに公があり、それが昇華する過程に吉野ガ里のようなものがでてくる。ただ吉野ガ里ないし奴国は大陸との接点にあって中国の文献にみえるのであろう。他にも同様なものがあるはず。

6 月 14 日（木）

日本人の国家意識片鱗

ミュージアムキューシュー三二号が届いた。過去の日本人の国家意識と国際意識を取り扱っていて随所に面白い部分がある。倭の字はヤマトと読むと同時に「みにくい」意をもつ。中国は中華と自負し、周辺を戎、蛮、夷、狄といっているのは誰しも知っているが、日本も

東夷のうちに入れられていた。日本と自称するようになったのは、「日出づる所の天子、日没する所の天子」に起元し、中国からしりぞけられつつ、遂に日本を自称し、これが遂に公認されるようになるという。逆に又、日本はそれなりに国家主義（「中華的意識」）をもち、朝鮮を見くだしていくようになるという。三韓征伐の真偽の程は知らぬが、何回も出兵の事実をもち、出兵しそうにもなったのである。その目的、意図をくわしく知りたいものだ。長い間多くの文物を朝鮮から輸入しながら、どうしてだろうか。中国に対しても、その国内争乱を知るにつけ歴史の長い時代の経過の中で侮蔑意識をもつようになる。とくに清以降にいえる。朝鮮に対しても似ている。今日以てそれがなおりにくくなっている。

6 月 15 日（金）

非核条例直接請求の問題ピークに

合同法律事務所の池永満氏を中心とする非核条例制定直接請求署名運動の知事認定問題がピークに達した今日、三役で協議したがなかなか結論に達しない。認定せざるをえないにしても、運動体側の条件もたいへん不揃いな足並みになってきている。ねらいはすべて善意であるにせよ、知事としてできもしないことを条例案にうたい込んでいる。県議会が否決しても、運動することに意義ありいうのでは実務上困るのである。参院補選中は署名運動もできないので、十日の投票が終ったあとに認定との論議を当方はしてきたものの、運動体側に不揃いな問題が多すぎて当方もすんなりと OK といえなかった。「市民運動だから」とはいえ、大上段に構えてこられたので、形式を不問にするわけにはいかない。申請者筆頭側に生じている不揃いや社会党、共産党、県民の会、県評センターなど平素の運動体、運動界がソッポを向いているのに、当方も困ってしまう。ソッポを向かせるように独走している池永氏である。ここ二～三日が山場となる。

6 月 16 日（土）

田植祭

売れる米、うまい米を作ることが県農政の一つの目標で、米も食味を競う時代となり、福岡県農業は立ちおくれているといわれる。閉鎖経済であれば自給できる県だのに七割も県外から入れている。農協は米の流通に苦しんでいるわけだ。今日はうまい米の品種改良のため試作のため農試で稲作田植祭がおこなわれた。百万都市二つを擁しているため近郊農業とくに野菜、花卉は他県に劣らないし、果物もよくできる。しかし、筑後川、遠賀川、矢部川という三大河川でめぐまれた平野が展開し、米作は苦労少くてよろしいという状況がつづいたのであろう。多収穫の方向に傾き、食味への努力が不足したようだ。今日の田植祭は県庁内の農試レベルの行事で、数年がかりで交配をくりかえし、新種開拓試験植えに知事農協関係者が来てくれたらということである。仕事というよりは儀式としての田植、ナンバーをつけ一本植えで、私は六〇本植えて終った。

6 月 17 日（日）

福教組、高教組大会

高教組、福教組の両大会があって例年同様挨拶した。昨年はたしか高教組で、県教委と知事部局の「風通しが悪い」と私が発言したあと問題になったのであった。当時の竹井教育長はリクルート事件がらみで文部省にひきあげ、大鶴次長は死亡した。両者は共に教員組合いじめに手腕を発揮したが、最後は相もつれ共倒れになった。ところで両教組の今日的課題は連合路線にどう対応するかということだ。しかし考えてみると、連合路線というものは未確定といえる。高教組は積極的に入って確定に努力しようといい、福教組はまだ及び腰で連合に信をおけないといっているようだ。次期知事選も問題のようだが、高教組は非自民全野党共闘のようだが、これは共産党を入れる点で今の連合では非共産なのでうまく通用しそうにない。非自民・非共産という線が連合の主力といえようから次期知事選での共通路線は今のところさきが見えないのではないか。高教組が大会で決めてしまって修正ができるかどうか。

6 月 18 日（月）

負を見つめる

知事室で時間があったので、昨年夏にいただいていた加野靖典氏（亡）の歌集「冬の構図」をぺらぺら見ることにした。暗い部分ばかりが詠まれている。人間は暗い面も必ずもっているので、これも文学の対象になるのは当然ながら、何かしらいただけないものがある。表紙めくって著者の絶詠が写真と共にある。

晩夏の　夕つ光と　なりて差す
　畳に一つ蟲の死がくる

心の内奥がさみしい。自分を見つめる、そしてこれしかないという気持があらわれている一首に、次のものがある。

ひざまずく神を持たねば他を責むるわれの我執は
鎮まりがたし

人間の負・陰・弱の面を突いて突いて突きまくる。

真実をいわばいうべしさまざまの
出遭いの果てに残る沈黙

6 月 19 日（火）

飯塚の情報工学部

県民大学講義のため飯塚文化センターに行き、時間があったので、九工大情報工学部に一寸立寄らせていただいた。学部長らが歓迎してくれ、八階本棟の屋上で構内及び近辺を一望、説明、教室の案内もしてもらった。私共にとっては超一流の近代的大学である。学生達もコ

ンピューター相手にのびのびと勉強している。別世界に来たようだった。亀井知事時代から曲折ありながらも、四年前にオープンに漕ぎつけた国立大学である。情報工学部というのは全国にここだけという。誰が設計、構想したのだろうか。門外漢だから何もわからないが、こんな大学を作ろうとした人達はすごいなと思った。それに、石炭後遺症に悩むこの地域が、この大学の誘致によって一変したといってよい。町がすっかり変わって石炭の町の様が残っていない。福岡市に劣らぬ近代化が進んでいるように見えた。あと篠栗線が複線化して福岡市との交通連携がよくなるということなしといえるだろうと思う。

6 月 20 日（水）

県議会開会のおくれ

一日だけの会期の臨時県議会。今年度の議会の役員ポストを定めるのが内容。でも執行部は列席した。三木議長は続投ということになったが、正副議長とも一年で交替し過去にくらべ異例といえる。監査委員の議員二人も決まり、常任委員長も決まる。われわれの側からは想像をこえることだが、議員さん達はポストに大いに関心があり、取引きが盛んである。それも前日までに終っているかというと、そうではなく、前日までは下取引、当日の開会時刻になって本取引が行われるらしく、今日も十一時開会の予定なのに、午後四時になってしまった。そのかわり、正式な議事はスイスイと運ぶ。思うに、傍聴しようと来県（ママ）した県民は大変迷惑だろう。どこで待つのか、何をして待機時間を過ごすのか、多くは嫌になるのではないだろうか。そのあたりにも気をつかってほしいものだ。

6 月 21 日（木）

鳥山先生葬式の弔辞

鳥山隆三先生の音楽葬の時には九大オーケストラの人達もかなり出席していたらしく、先日来宅した信博君の友人の話では、弔辞（牧坂氏代読）がよかったとのことであった。知事自身が書いたのかなといぶかる人もいたという。葬式のあとの牧坂氏の話では、他の弔辞は経歴にふれた形式的なものばかりで、情のこもったのは私のものだけだったのでよかったよといってくれたのであった。原稿を書き巻紙に清書するのに四～五時間かかったのだが、それだけのことがあったのかなとわれを慰めているところである。形式主義に陥り勝ちな場である。そういう場の多い私もできるだけナマの言葉で言おうと思うが、面倒でもあるので、遂々事務屋さんの書いたのを読んでしまう。勿論ナマで言う時もその原稿は大いに参考になるので必ず書いてくれとはいうが、ナマがいいことはいうまでもない。あの弔辞は私のナマの代読だった。珍しい反対のケースだ。

6 月 22 日（金）

非核条例制定直接請求署名運動の中止をめぐる後遺症

昨日は岩崎、芳井の二人から相ついで電話があり、非核条例制定の直接請求署名運動が、十二日以降行われていたところ、中止することになったと知らせて来た。今日はこの運動代表者事務局の池永満氏が記者会見をして運動中止の理由を説明すると共に、県知事あて、証明書交付が十八日にずれ込んだ理由釈明要求書を提出してきた。自治法にいう直接請求権をふみにじるものであるとの立場を基底においている。この問題をめぐってわが方もいろいろ意見交換してみたが、十二日交付の約束を十八日まで遅らせ、その間運動側の骨折り署名が無効になるとの指摘については弁解しようがないが、証明をえないままに事を進めて行った側の突っ走りにも問題ありとせざるをえないとの考えが相ついで表明された。釈明要求には応じられないという声も出ている。知事には運動への賛否、書類不備の有無についての審査権はないので、直ちに証明書発給すべきだのにしない怠慢が糾弾されている。

6 月 23 日（土）

婦人会議の課題

日本婦人会議福岡県本部二五周年祝賀会（大手門会館）に、大町、榊、今吉、原田その他面々がずらり顔を揃えていた。中央からは清水参議も来ており、三重野参議もおくれてかけつけた。三重野補選では榊さんを中心に女性選対が活躍したことを改めて思い出し、私も祝辞の中でこれにふれた。平素から私がいっているように、社会のあらゆる問題が女性の肩にのしかかり、これをまじめに受けとめたら、女性がハッスルすることになるのは自然である。男女平等ということもあるが、女性問題という観点から捉えることもまた重要であると思う。今は土井たか子という超人的な人気持がいるのだが、問題は彼女に考え方をどう集約するか、思想体系ないし向う先がみえるかどうかである。今日、社会主義の影が薄らぎ、魅力を失った、それが再興できるのか、不用なのか、再興するとすればどういう体系を組み立てるか、誰がそれをするのか、問題は尽きない。

6 月 24 日（日）

大河ドラマを探る

NHK の大河ドラマの舞台になる県は、その測り知れぬ広報力の恩恵をうけるから、福岡を舞台とするタネはないかと二年ほど前から県議会でも問題になったことがあり、それぞれ思い付きを出し合うその後なのだが、未だ、これというアイディアが出ていない。私はふと黒田長政をめぐる問題提起がいいのではないかと思い、二ヵ月ほど前から随行の橋本君や他の秘書にもそれを披歴（ママ）し、今は秘書室で、思いつく限り努力して資料を集め、およそまとまったら一般に提起してみることにしようということになっている。御着に黒田の墓がある。秀吉、信長、家康それから福島正則、母里太兵衛、（黒田武士、槍日本号）、また博多の町割り、それまでに至る博多商人など話をつないでいくと、結構ものになるのではないか、――そんな思いを周辺の人達が今は受けとめ、あれこれまとめてくれている。白石一郎氏、

西日本新聞などに相談ができるようになるといい。

6 月 25 日（月）

あじさい寺

県民大学講座の帰り途、三池山麓の定林寺あじさいを見に行った。大規模な紫陽花群に嘆息した。背景の緑、孟宗藪もあじさいを引き立てていた。老鶯の啼声のさえがさらにこの景趣を引き立てていた。人影なく世間から忘れ去られているようで、淋しくもあった。万燈九月号（六十三年）から紫陽花の句を拾ってみる。

紫陽花の毬の弾みて霽てきし　田隅遊佳
紫陽花を藍に染め変え雨上がる　岸川鼓虫子
水音に溶け込みそうな濃紫陽花　山本とし子
あじさいの色を溶かして雨も藍　西本麻寿雄　あぢさゐ
この次は何色ならん濃紫陽花　山田千恵女
紫陽花は雨を呼ぶかに今日も降る　市橋山斗
紫陽花の雨に追慕の香を焚く　足立津遊
紫陽花の彩は白より始まりぬ　西川せき

すんだばかりの田植苗、田の水が一そうこれを引きたたせている。

6 月 26 日（火）

容量の限度こえて

五月十三日のページに写真の整理について書いた。あれから一ヵ月以上もたつのに、なかなか整理が進まない。「後向き」と書いているが、それが進まないのである。新しい知識の欲求がほとんどない。テレビを見るのも消極的だが、新聞だけは止むなく毎日辛うじて見る程度。激務といわれる中で、あまりにも外界との接点が多い。しかも忘れっぽくて、どんどん忘れていく。それでも新しい知識が積み残される。テレビなんか見る意欲が湧こうはずがない。何か身辺のことに身をゆだねているとすぐ夜も十一時をすぎてしまう。はやく就床しないと明日があるのにと思う。最近とくに睡眠がとれない。ねむったのかあやしい状況がつづいて時間が経ってしまう。何とかなるはずと思って朝は出かける。「後向き」をつとめているつもりでもそれがはかどらず、新しいものへの拒否意識がありながら、何か新たに積っていく。そしてこれを受容し消化するだけの体力が睡眠量の不足で、十分とは思えない。そのような毎日、どうなるのだろう、このあと‥‥。

6 月 27 日（水）

紫陽花の句再び

またまたアジサイの句を万燈（平成元年九月号）から拾ってみる。

紫陽花の彩まだ秘めてさみどろに　　岸川鼓虫子
一と雨を得し紫陽花の藍すがし　　〃
色重ねひしめきあえる濃紫陽花　　〃
紫陽花の古刹の磴を狭めをり　　市橋山斗
紫陽花の淡きは淡く彩移る　　川口みゆき
紫陽花の空より青き太き毬　　江崎イツヨ
紫陽花の道自づから四阿へ　　一戸功子
紫陽花のはじめの彩としてみどり　　磯辺よ志子
紫陽花のこぼす雨滴の煌けり　　村上一舟
虚子堂の帯塚に添う濃紫陽花　　竹下純子
紫陽花に水音の流れあるところ　　高来一生
茂るまま咲くまま紫陽花屋敷かな　　結城てつを

最後の句は先日の大牟田あじさい寺を思い出させる。

6 月 28 日（木）

また紫陽花のこと

アジサイはよく見れば見るほど味、趣がある。緑とのつり合いで自然の妙をきわ立って感じさせる。絵になることというまでもないが、やはり句もいいので、昨日のつづき、もう一度引用することにした。

紫陽花の雨にぬれたる色のさえ　　岡本梅代
静子句碑守る紫陽花の白淋し　　木下スマ子
あぢさゐの隔てて交す友会釈　　下村紀美
紫陽花の色あざやかに小糠雨　　貞子
紫陽花の通る日毎に色かわり　　久江
濃あじさい雨のみちあり幾すじも　　藤枝
紫陽花の道の奥なる古刹かな　　久子
雨ふゝむ紫陽花毬に極まりぬ　　月子

虚子編新歳時記をみるが、あまりよい句は見当らない。この花はどうして繁殖するのか知らない。さし木、株分け？　古刹によく合うし、溝川にもよく合う。曇天、梅雨がつきものだ。ほんとうに感じ入る花だ。

6 月 29 日（金）

濃厚国家といおうか

県議会は一般質問にはいった。代表質問もふくめ、やいのやいのと県への仕事要求が伝わってくる。黒木、矢部、小石原などで石垣で囲まれた田んぼを見たり、万里の長城を考えたり、

ペルー（マチュピチュ）を回想したりしながら、後世に残った人々の汗の結晶、これが今日は新幹線や高速道、自動車道舗装、築港などにあらわされているのと通ずるのかなと考える。前に稀薄国家という表現を使いながら濃厚国家といえる状況を考えたのを思い出す。何でもかんでも県がやれということで迫られるのだが、もしできなかったら、その部分どうだろうと考えてみると、してもしなくても大した差はないのではないかと思ってもみる。昔は搾取・収奪と支配にあらわれたが、今はむしろ住民への奉仕のような印象を与える。メカニズムの違い、凹凸の違い、見るサイドの違いのようにも思える。石炭六法の延長でやいのやいのと言っている今の県議会である。数年前小郡の木村さんは、革新県政といっても何程の期待ももちませんといったが、対照的である。生活保護、鉱害はどうするか。

6 月 30 日（土）

同仁堂御膳廳

日帰りの東京旅行。礼宮の結婚祝賀記帳と国体についての事務交流、宮内庁挨拶をかねである。中食時に時間のゆとりがあったので、西田所長のはからいで、半蔵門会館前の東京同仁堂御膳廳という聞きなれない食堂に行った。感じのいい高級レストラン。フランス料理風ではあるが、中国料理だという。一皿ごとに書いてあるメニューは蕹菜華清蛋とか茭鱔魚絲、花巻、三絲□（不明）魚翅、虫草牛肉とか名を見ただけでは内容が想像もできぬ料理ばかりである。清楚、淡白という感じで、あぶら濃くなく、塩からみも少い。薬膳とかいう、食は薬という考え方が入っている。体調をみて配菜を変えてくれるともいう。ほんとうに変わったミセであった。東京だから成り立つのかも知れない。食物、薬物を統一的にみるというのがはじめて教えられた。当然といえば当然だが、それで営業を成り立たせようという点が面白い。美、文化の視点もある。

7 月要記

一日から二日にかけて中部九州を襲った豪雨により、大分、熊本、福岡、佐賀の各地に、被害が出た。その調査団対応にてんてこまい。それから予算編成に向けての県内各種団体の要望書決定会議、中央への陳情行動などスケジュールがつまっていた。これで又東奔西走、六月県議会がまるく納めてくれたので助かったが、それ以上の苦労があった月だ。トヨタの宮田団地進出協定調印、北九州都市高速道の北九州道路との一体化も公団、県議会、市議会といずれも乗り切ることができて明るい見とおしができた月でもあった。東京は水不足が深刻化しているという。福岡はまだ助かってはいるが、晴れの日がつづき、照りつづけ暑い暑い月の下旬になった。降ってほしいが降らない。超多忙な七月だったためか、済生会病院検診の結果はいつもよくない数値がつづいている。暑さも加わってダウンしそうだ。末吉、桑原両市長が次期立候補を表明した。非核条例制定要求署名運動中止の余波が私をゆさぶっている。余計なことだった。

７月１日（日）

青年会議所会員大会と太田発言

前原町の伊都文化会館での日本青年会議所の福岡ブロック会員大会に出席した。ライオンズクラブと同じように、会の運営がとても冗漫で形式的である。保守的とか進歩的ということは次元が違う。もっと簡約化した方がいいのではないか。若い経営者ばかりだと思う。新しい発想能力を生かして社会に還元しようとする意欲は買いたい。太田誠一氏が祝辞に立って、自分ももとは会員だったといい、結びのところで、奥田知事の前ではあるがと前置きして、次にこの中から知事候補を立てられるよう努力してほしいと結んだので、会場に大きな笑いを呼んだ。来年と限定しなかったところに面白味があり、彼自身を含むような意味にうけとれなかったところに意味があったと思う。山崎拓代議士夫人も来賓席にいた。私は面白い話ですねと拍手のあとで彼にささやいたら笑っていた。六月十日の参院補選で敗れた自民党県連の会長席、続投の重味を知ってのこと。

７月２日（月）

雨つづきで被害

二十八日以来ずっと雨。報道では今日未明の雨がかなりの量だったようだ。三〇〇ミリをこえる雨量が各地で。交通不能、崖崩れでの家屋倒壊など、死者は、夕刊では九人とあるが、さらにふえる見込み。福岡は筑後地方がひどく、佐賀、大分、熊本、長崎の各県に被害がでている。梅雨も後期にこうした集中降雨があるのが通例である。河川工事が進んだので、三十年前から比較的に被害は小さくなりつつあるが、それでも油断はできない。熊本空港は発着が止まっている。濫開発ということも事故発生につながるのではないか。忘れたころにやってくる、というより、忘れなくても人間が勝手なことをするので、シッペ返しにそうなるということもできるだろう、早目に帰宅したので、伸び放題になっている藤棚の藤の枝を南と西、棚にのぼって切り落した。専門家にしてもらった方が安全だと思いつつ、用心に用心を重ねて作業すること一時間余、疲れを感ずるようになった。作業中に又雨が降り出した。夜も雨つづく。

【欄外記入】

４日の朝刊報道（九州中北部）

　死者 24 人　不明３人

７月３日（火）

建国と国旗

晴れ上った夕方、アメリカ領事館で独立二一四周年祝賀会が行われ祝辞をのべた。祝宴のはじまる前に国旗降下式があり合理的だと感心した。日本なら揚げっぱなしにするだろう。国旗の尊厳といいながら扱いの根本精神に違いがあることを改めて考えさせられた。又建国

記念日といっても、アメリカは民主主義、自由、基本的人権というような基本的精神がはっきりしているのに、日本では神話から借りて来て、基本的精神などというものは求めようがない。その日は休みというだけで、一部では神事があるかも知れないが、ほとんどが休み一日分というに止まっているのが実態であろう。精神よりどころなど定め難い。神事といっても、その主義、教義など一般の者には理解しがたいものでしかない。手をあわせて拝む形だけで、何が何だか解しえないだろう。文部省は子供達に、国旗や建国を強制的に押しつけているだけで、受ける側に真の了解が成立していない。

7 月 4 日（水）

南筑後の水害視察

六月二日の朝の放送で環境問題にふれ、自然は美しくやさしく慈愛に満ちたものだが、怒ると恐ろしく、残酷だと説いたのだっだが、この日にひる、筑後南部に大水害が起ったのであった。小河川がそれぞれに暴れたのである。曲った河川の増水、堤防決潰、溢水、山間部の土砂崩れ、大きな川では水量オーバーでの土流田畑冠水など、道路が寸断されてまだ調査不十分ともいわれる。八時間ほどかけての現地視察だったが生々しく恐ろしいというよりいいようがない。流木といっても生やさしいものではなく、大木が根こそぎ流される。全壊家屋で跡形すら残ってないのもある。家財道具などどこに行ったか不明。車庫や路上の車が押し流されて破壊されている。南筑後で四人の死者が出たが僅か一秒足らずの崖崩れ家屋の全壊流出だった。農地への土流の後仕末も大変だろう。河川、道路の復旧は急がねばならない。何か手をつけたらいいか、何日かかるかであるが、ともかく復旧が急がれる。農作物の被害も小さくない。

7 月 5 日（木）

目ざわりな広告看板

福博であいの橋の完成渡り初め式がおこなわれた。天神中央公園の延長である。七月はじめ、目ざわりであった城山合産の看板が取払われたので、この橋とあわせ、美しい都心が改めてスタートしたことになる。でもまだまだ多い看板、何とかならないかと思うが、右から左へどうにもならない。福岡空港ビルの前の看板もひどいと思う。ロンドンに看板が少いのにおどろいたが、香港に多いのにも驚いた。目立つ看板は日本的なのか東洋的なのか、否、後進的なのだと思う。でも大阪梅田界隈も多い。もっと整理してほしい。新聞に折り込んでくる広告印刷物に、機内誌にも、広告がでかでかのせてある。これらのうち、目を楽しませるもの（スペースも）はよいとして過剰なのはどうかしているのではないだろうか。これ又後進性といってよいだろう。テレビのコマーシャルもやっぱり過剰気味だ。とにかく広告宣伝でごたごた、ゴミの山の中にいるように思えてならない。ひとの頭にこびりつかせようというのだろうが、いい加減に願いたい。くつろぎも欲しいのだ。

７月６日（金）

被害の原因に思う

中小河川で今回の水害がおこったとの特徴をつかんだが、元来なかった箇所だったんだ。一歩つっこんで考えると、中小河川のある山奥まで人的開発が進み、樹木や土壌の保水力を弱めたがゆえだろうかとも考えられる。山野を開いて果樹園にした。みかん、キウィフルーツなどだ。昭和三〇年代以降そのような開拓が進んだため地盤が弱くなっていたといえる。それならゴルフ場もだ。又高田町で指摘されていたことだが、災害が起った堤防は公共工事で、その部分だけが補強の対象にされるが、もう少し延長すればよいと思われても、それは「官僚主義」で許されない。補修箇所と補修箇所が二～三メートルでも残されてしまう、今回はそこが被災しているというのである。だから災害には人災的な要素が必ず付いているといってよい。濫開発にしろ、杓子定規的防災工事にしろ、自然は生きているという。その生き様の一端が今回出たのだ。

７月７日（土）

七夕祭り

和白公民館での七夕書道会に出席した。牧坂氏の教室の子供たち相手である。今年はうまく土曜に当ったのでと彼はいっていた。前回は六年前、二五人ほどの参加だった。七夕とは何かということを一席話せというので引きうけた。「笹の葉さらさら」の七夕の歌の合唱もあった。牽牛織姫の二つの星が天の川を渡って出合い恋を成就するという伝説が紀元二〇〇年頃の後漢の文献に出てきて、これが星祭り七夕のいわれという。中国では乞巧奠として年中行事になり、日本ではこれを受けて風土記や万葉集に出てくる。人麿呂のうたも紹介される。地方により、時代により少しずつ違うが江戸期にはずい分派出になったようだ。われわれも子供の時は、旧暦で八月七日、一つの楽しみだった。里芋の葉の露を朝のうちにとり、それで書き、夕方は笹に短冊をつけ、新しい野菜を供え、餅を食べさせてもらい、翌朝川に流し、天の川に届けと願ったのであった。

７月８日（日）

七夕祭り（つづき）

昨日は七夕のことを書いたが、和白での子供の反応がもう一つというのが実感だった。わかっていないし、わかろうとしないともうけとれた。もちろん子供の責任でもない。親の責任かというとそうでもないように思える。つまり現代社会から、伝統的な七夕が薄くなりつつあるように思えるのである。人と人、人と自然のつながりが七夕を忘れる方向に動いている。もちろん、暦の上での新旧でばらつきもあろう。それとは別に意義の薄れがひどくなりつつある。町の子に笹や里芋の葉の露といっても無理だし、流す川の流れもない。野菜を供える棚も軒下もない。今様の短冊飾り方法はあろうけれど、風趣は全く違う。ウマゴヤシの葉に

巻いた蒸しアンコモチは大きな待望で子供をはげました。今は飽食の時代で、そんなモチは期待されないし作らない。作りようもないだろう。子供の歌も空虚にきこえるわけだ。それほどに、短い年月の間に、世の中は変わっていっているのである。いいのだろうか。

7 月 9 日（月）
再び国旗のこと
パリ祭があって末永氏宅へ行った。文化会館で祝宴。その時来賓としてのリヴィア米主席領事と会い、先日の独立記念祭の時の米国旗の扱いのていねいさにびっくりしたと私の方から話題を投げかけたら彼いわく、アメリカのシンボルだから、みんな大切に扱うんだと。アメリカでは大統領は選挙でかわるが国旗はいつまでもかわらないという。この表現に改めて感心したのだった。日本では日の丸国旗掲揚が強要される。アメリカでは国旗を尊重しない自由もあるという判例もあるとのこと。それでいてリヴィア領事のように、シンボルはあれしかないという人もいる。学ぶべきことだと思った。フランス大革命二〇一年のパリー祭である。アメリカの独立宣言とフランス人権宣言は酷似していると乾杯のときにスピーチした。自由ということはここ二〇〇年世界の大勢の指南ではあるが、日本がどれほど自由であるのかまだまだ怪しい。東ヨーロッパがこれからどう変化していくかも今後の問題だ。

7 月 10 日（火）
物余り、サービス不足
先日の大牟田青年会議所 35 周年式の挨拶で塩塚市長が、所の「こんなものいらない」運動に言及した。物余り時代にふさわしいことだったと思う。空缶・ゴミ拾いは昔は無用だった。これに関連して思うのだが、単に物だけでなく今は騒音も多すぎる。私は建設機械にしろ、自動車にしろ、エンジンをふかす音が大嫌い。暴走族はそこをねらって攻めてくる。又物に関係するが物自体ではない余分なものに情報というのがある。過剰広告・看板についてはふれたことがある。電波（特にテレビ）、コンピューターなど。物余りはすべて利益目的の営業からきているのではなかろうか。物にしないで、人間の労力をサービスで終らせるなら物の影を残さないものが少くない。サービス不足といってよいのではないか。男女老若みんな働いて結果を物にし、使い残していて、サービスその他手のかかる物への労力の投入がなおざりにされている世の中である。ゴミ拾い、草抜きはもっとしなくてはいけない。子供が母さんの肩をたたく話も再現していいのではないか。

7 月 11 日（水）
夏の虫
夕方昨日につづき打水した。三十五度をこす猛暑である。草花は弱り虫は勢いづく。花の葉を小さなバッタが食い切ってしまうほど。虫も殺さぬという言葉があるが、花とくらべると

やはり何とかしたくなる。それぞれが共存してくれればと思うが、そうはいかないのが人間の勝手な感覚。それに木や花の枝にすごくクモの巣が多い。いたずらながら巣は破りたくなる。ながめがよくないからだ。小さなクモ、軒下に大々的に貼る巣ではない。取っても取っても翌日には又張っている。エモノがかかるのだろうか、かかるエモノはないように思うのに。子供の頃はあの大きな巣を見つけて竿の先につけた輪に巻き、それで蝉を取ったものだ。しぐれ鳴く木の下に近寄り、幹をたたくようにおさえる。夏休の午後のいい遊びだった。今の子にはそんな経験はないだろう。季語の中に死語がどんどんふえている。端居とかウチワとか風鈴など無関係になりつつある。

7 月 12 日（木）

豊前地域の開発

東九州自動車道、新北九州空港、西瀬戸内総合開発の三つの総会が厚生年金会館で行われた。私が会長議長。なかなか進捗しないで困っている京築だけではないが、用地補償漁業補償で行き詰ることが多い。「やれやれ」との掛声は強いが、地権者が行手をさえぎることが多い。空港土砂処分場の漁業補償、伊良原ダム水没その他、道路建設の地権者交渉など難航をきわめる。なかなかウンといわない。各論反対、総論ではやれやれと声をかける。とくに京築にはその傾向が強い気がする。板付空港だってそれと同じ。一般的にそうなのかも知れない。権利はむしろ空に近くてもかなりな補償が要求され、難行していると行政の責任をおしつけてくる。この傾向が軽いことを望むものであるが･･･誰しも要望は強く総論は賛成するが、個別になると、なかなか自己犠牲ということにはならず逆になる。

7 月 13 日（金）

労働組合四十年史

県職労四十年史出版祝賀会があり、教育委員長らとの夕食会があった。歴史の流れを感ずる、感ずべきである。これが率直な感想である。四十年史は戦後の大混乱の中で、昭和二十一年数えきれない程の組合が職場ごとに発生していくところから始まる。はげしい飢えの中で、焼跡から、はじめての民主主義を身をもって学びつつ運動史は形成されてゆく。すべての人が初体験であった。今は飽食、物余り時代、余暇の時代といわれる。その二つの距離は大きい。労働運動はあくまで受身である。どのように受身をして今日に至ったか、それを思わねばならない。組合運動家は保守的といわれる、超保守だとすらいわれる、多くの組合員に説いて来た。その説得を永年やっていると、時代の流れに随うことに不得手になるし、自己弁解せねばならなくなる。受身でなければ自己改造もできるが、受身だからそれが又むつかしい。君子豹変すべきだのに、君子ならざるが故に豹変できないことが多い。四〇年史も大変な事だ。

7 月 14 日（土）

山笠に女も沸く

山笠で福博の街は沸いている。今日も五十万人の人出で昨年より十万人多いという。土、日がよいめぐり合わせでもある。明朝の追山はすごいだろう。ホテルは満杯いわいだ。あの激しい動きは勿論男の精根をふりしぼったもの。但しそれは裏で女が働いているからでもある。山笠は表面男の美術ではある。しかしそれを支える女の力も忘れてはならない。近頃は外国人も山笠行事に参加する景がみられる。「万燈」昨年十月号に、

外人の親子揃いの山笠法被	井手藤枝	
追山笠を明日に法被の男達	越智せつ子	
つわものの真逆様や飾山笠	〃	
追山笠や雪崩のごとく曲り角	一戸功子	
山笠へ法被揃えて孫みたり	花村タミ子	
山笠解いて博多の昼のまだ覚ず	増井ぬいえ	七月十五日のこと
追山笠の昂おさえ刻を待つ	今永雪子	

7 月 15 日（日）

欲がどんどん進む

中島敏子さんが来ての話に、兄姉の相続争いが出た。誰しも欲が深い。九四歳になる父が今は植物人間になって久しいということから移った話である。この人は私の龍野中学時代の地歴の先生である。人間誰しもますます利益を追求する。総論賛成で各論反対というのは理くつと我欲のくいちがいによる。理くつは誰しも正義の味方と思える側に立つ。空港を早く作れということと、漁業補償の話にはなかなか乗らないのが一例。道を作れという反面、私権を頑として主張して譲ろうとしない。補償金をびっくりするほど出せば応ずるだろうし、それを待っているようでもある。韓国では日本大使館に戦時中の損害（強制徴用など）を要求する運動が、国内では原爆被害補償の問題、さらには毒ガス工場での被災補償など、様々な要求が渦巻いている。当局はどこまで譲るだろうか。原爆をこえて一般の爆撃被害をいい出したらどこまで進むだろうか。

7 月 16 日（月）

健康維持の努力

昨日は中島さんがお父さんの植物人間（ママ）な（ママ）っているとの話をしたので感ずるところがあったのだが、今日は三木議長夫妻らと夕食を共にした時、ゴルフの話に改めて感心した。健康のためといい、さらには早朝の散歩、その弾みのためのペット犬飼いの努力など、誰しもやっているんだなと感じ入った次第。夜おそく隣の高柴昌郎氏が大声を出している。腹の底から何回かとどろくように声を出すのがきこえてきた。よくある事なのだが、高柴さんもゴルフ

で黒々とひやけし、尚大声で健康維持に執念をもやしているかのようである。ペットの世話も大変らしい。でも敢えてということのようだ。それぞれにみんな長命への努力をしている。それだけ豊かになり、ゆとりができたのであろう。貧しくゆとりがなければそうはしないはずだ。健康への努力はゆとりの尺度といってよいと思う。残念ながらわが身はそうはならない。生き甲斐ということを聞かれてまだすっきりした解を出せない私だが、自己満足できるのが何よりであろう。

7 月 17 日（火）

根性にゆとりがない

政府筋の調査で生活充実度、時間、空間の三側面から見た日、米、英の比較図形化したものが新聞に紹介されていた。一口にいって日本はアメリカの三分の二という。経済大国といいながら、貧しくてまだまだということなのだが、私にはよくなる予感がわかない。何でこんなに物余りなのか。ごたごたせせこましいのか、キリキリ舞いの毎日なのか。どうも日本人の発達段階がまだ低いような気がする。物余りといいつつ充足してない、ゆとりがない。生活態度に共通する欠陥があるのではないか。今日はシベリア戦没慰霊巡拝団の明日出発を前に、遠藤遺族会々長が県費補助の増額陳情にみえた。私は今日上京で明、明後の二日政府予算陳情で霞ヶ関界隈を駈け回る。そうしないと非難される。下旬には産炭法延長の陳情がある。カネ余りではないかと思うのに何もかも陳情である。この態度がこせこせしていると思うが、某は陳情に来なかったとの批判があがるので、やはり行くことになる。この非難の根性も亦こせこせしている。なおるだろうか。

7 月 18 日（水）

氏族共同体のこと

陳舜臣の「中国の歴史」(1) を読みはじめた。王朝時代の始まり（七八ページ）について次の如くかいてある――「三皇五帝時代は終わりました。日本ではまだ縄文式文化もはじまっていません。文献にみえる諸聖王が実在したかどうかは別として三皇五帝時代は氏族共同体の良き時代でした。首長になったといってとくに個人的な実利はありません。みんなのために、骨を折って働かねばなりませんので、どちらかというと割に合わないポストです。したがって首長の地位は争奪されることがなく、みんなに推挙された人に、いわば押しつける形になっています。後世からみると、ユートピアでしょう。ところが、ようやく分配に格差が出るようになりました。‥‥大酋長の分け前が一ばん多いのはいうまでもありません。氏族共同体の基礎が崩壊して世襲時代にはいることになりました。もちろん‥‥徐々に‥‥ユートピアの時代を後世の中国人は‥‥大同と名づけました。‥‥世襲がはじまった夏以前が大同の世です」孫文はよく天下為公と揮毫したそうだ。公が大同に通ずるので孫文はそれをのぞんだのであろう。

7 月 19 日（木）

神話が歴史になりかわる

中国にも神話に類するものはあった。だが、それを受け継ぎ、拡大する者がいない。国が何回も他に代えられたから、多くの神話の類があったのに、それを誇示する伝承者がなく、改変強化するものもいない。日本では明治になってからとくに神話が権威、威力を発揮すべく位置づけられた。敗戦アメリカの占領が柔軟かつ短期だったから神話はよみがえろうとしている。神話が歴史におきかえられる機会をうかがっているように思える。九州で国立博物館を作ることに心から賛成でないのがいる。神話を歴史上位置づけたいからである。文部省がその片棒をかつごうとしているかのようにみえる。第二次大戦の敗戦、民主化はアメリカに強要されたと受けとめる人は少くない。しかし私からいえば負け方が中途半端だったように思える。地図こそ書きかえられないが、歴史は書き直されようとしている。「国体」が護持されたという事は、神話を歴史にとりもどす動きの基本になった。神話を神話としてしまうほどの変化があってよかったのにと思う。民主主義もほんものにならずじまいに変形されそうだ。

7 月 20 日（金）

立地協定調印（トヨタ自動車宮田へ）

トヨタ自動車が宮田団地に進出する計画の調印式が行われた。巨大企業の進出だから県も地元宮田、若宮両町も行政的に強いインパクトを受けるから、相互に誓約を交わすという意味での調印式である。どのくらいの規模なら調印するのかという線引きはできないが、相互に影響するところ大であるから調印した方がいいという常識的な線はあるだろう。道路、水道など基盤に関するものは行政側に特別の負担がかかってくる。行政側も立地に伴う波及効果をうけるから、そのプラス、マイナスを受けとらざるをえない。筑豊の炭鉱など、マイナス効果だけを残して引き揚げてしまった。行政に長い重い負担が残された。企業にそれだけの社会的責任があるといえるのに、問う手段がない。ないのが当り前といえばいえるが、今回の調印の中味は公害など責任を負うようううたっている。立て前にすぎないようだが、規模が大きいだけに、契約調印の形をふんだのである。主張のよりどころというべきほどのものでしかないが、あった方がいいにきまっている。

7 月 21 日（土）

非核条例を求める会を包む衝撃

夜マージャンに来た森氏が、森茂康氏から送って来た「みんなで福岡県非核宣言の実現をめざす会ニュース号外」なるものを持って来た。宣言を求める会だから「求める会」のバックをなすものであろうか。平和条例を目ざす五〇万署名が中止に追込まれたということに対する怒りの特集である。六月二十二日に福岡県非核平和条例の制定を求める会」代表十人の

名で、一週間以内になぜこういう事態になったのか理由を一週間以内に文書回答せよとの申入れ書も刷り込んであり、森茂康、石川昌子、出水薫、江口厚仁、木永勝也の五人が筆者となった十ページものである。十二日のはずが十八日になったことを「妨害」として非難し、知事及び側近のなせる業であるとしている。又、これまで協力的であった赤旗が消局的になり、社会党知事の側に立って推進しなかった組合も亦冷淡をきめ込んだ。組合内や政党「革新知事」にたよらない運動を探求するしかないといっている。衝撃が大きかったという事。どこにもっていくかである。

7 月 22 日（日）

涼で暑さを表現

今日は朝から又、東京に来てからも来信の暑中見舞状の返信を書いた。二十通にはなったろう。来信の中に、

　滝の音遠くにありて夏木立　（江口さだ）

というのがあった。全く暑い毎日ではあるが、何となく涼気を呼ぶ句である。こんなのは性別、年齢別を感じさせなくて中立的で感じがよい。暑い暑いと表現するよりも、こんな句で逆に暑さを表現しえていて気持がよい。今日も暑い中海も山も人手がどっさり。若さがあって、この現象もいい。がやや忙しすぎる感もなくはない。忙しいし欲深い、活気があるところに救いがある。三日に一回ぐらいは雨があればと思うが、そうはいかない。照りっぱなしは酷であるから救ってほしい。昨日今日月下美人が咲いて、秘書室の人が見たいといっていたのに、土、日とは皮肉であり、昨年も今年も東京出張に当るとはこれも皮肉だ。

7 月 23 日（月）

懐旧のチャンス摑みえないで過ぎていく

今日は東京で、経理学校時代の旧友清田彰氏がモスクワから訪日し、最近のソ連事情について話す会が開催されるというので出席したかったが、あいにくあべこべに、福岡に一寸帰り、希望は叶えられなかった。昨夜世話役の瀬川二郎氏に残念だがとの電話をしてことわりをいった。湯村教官も来てくれるのに･･･ほんとうに残念だった。瀬川は誰彼が亡くなった等々、電話口で話していた。そういえば関連して、昨夜は姫高時代競技部の中村俊夫の葬式で、東京事務所長に代わって行ってもらった。(児島正博氏からの連絡で知る)。そして又昨日の午後はマスケン（益田憲吉氏）が亡くなった。西日本新聞の解説委員で口八丁の男だったが、これまた逝ったわけだ。この春以来に限ってもほんとうに身近かな人が逝くのを耳にする。満州経理学校のことなど記憶はまだ比較的鮮明であり会いたいとは思うが、どのケースも「公務」の故をもってチャンスを次々に逃がしてしまうのが残念。八月一日大阪で清田を囲む会があるが、これもペケ。

7 月 24 日（火）
奴隷制のこと
陳舜臣の中国の歴史（1）で「奴隷制の時代は殷で終わり、西周からは封建制社会がはじまる」「封建制の萌芽はすでに殷時代にあり、それはかなりの力強さをもちつつあった」と書いている。奴隷制と一口にいってもかんたんには理解できるものではないけれども、墳墓犠牲などについての説明はなかなか面白い。と共に殷時代に甲骨文字ができており、いろいろ付言してあるのは強く興味を引かれる。精巧な青銅器のさしえにも驚かされる。三三〇〇年、それ以上の前の事であるし、文化の発展に永い時間がかかり、今日はむしろ急速に進んでいると思い勝ちだが、太古の時間は決して無駄なものではなかったということも理解できるような気がする。でも奴隷制のなかで人間の首をいかにもかんたんに、命もまたかんたんに扱ったということは、今からどうしてもさかのぼって理解することはできない。殉死ということすら理解できない。切腹も理解できない。強制的に生き埋めにしてしまうというが、どうしてそれが可能なのか理解できない。

7 月 25 日（水）
黒田のストーリー
屋上のレストランで中食を共にした葉玉君が黒田如水略年譜のコピーをくれた。ここ一〜二ヵ月、秘書室には NHK の大河ドラマを念頭にしての黒田福岡藩に関する研究グループが動きはじめている。この動きは私が姫路御着にある黒田碑について思いめぐらし、斎藤武幸氏からの手紙をもとに、秘書室の若干名に手がけてみてはと迫った課題である。県議会で大河ドラマになるようなストーリーを考えてはどうかと質問があって、少なからぬ人が思考をめぐらしつつ、いい種が福岡にはないとの声がでてきた矢先といってよい。東京事務所長にも、西日本青木社長にも私の思いは伝えてある。秘書室でストーリーの種を探し、ほぼ出揃ったところで白石一郎氏にライターになってもらう。それを新聞に小説として連載する。声価があがれば大河ドラマになるはずという構想である。誰しも福岡を売ることに賛成であり、全国放映をかちとれば万万歳である。今「跳ぶがごとく」で鹿児島が脚光をあびている。福岡に種はないとのあきらめムードがある中で、私は黒田―秀吉―母里太兵衛など結構種はなると思っている。

7 月 26 日（木）
入道雲
　入道雲新仙なれど今日も晴
午後早目に羽田に向けて立つ。もう入道雲の期に入ったのだ。雲が立っている。ほんとに近々にそれを見おろす。雲が光って美しい。立っている姿が不思議と新鮮さを感じさせる。何がこんな形をつくるのであろうか。雲と青空の稜線がくっきりしている。ふつう雲は線が

ぼやけているから、すべてを包むように思えるから霊感を与えると思っていたのに、今日のように青空にくっきり自分の姿をえがいてみせる雲も亦霊感を与えるものだ。雲水というが、水も亦不思議で雲のもとにもなる。雲は雨となって土にかえる。ここしばらく晴れ間がつづき、地上では雨を欲している。入道雲では降るわけがない。東京では雷雨があった。全く一時でいいから降ってくれればよいのである。自然の気ままによろこびも悲しみも含まれている。機内誌には海中の魚類の神秘がカメラでとらえられて特集されていた。これまた不思議な世界だ。

7 月 27 日（金）

旧県庁跡地における施設建設案決まる

旧県庁跡地に作る施設の採用案を審議委員が選定した第一生命保険、日本生命保険両グループからの二案のうち、前者を決め記者発表した。議会の特別委員会では後者を支持する公明党の吉永氏が綿密な反論質問を展開し、対応した総務部長が一々ていねいに反論、説明したという。小川部長は周到に質問を想定して答え、切り抜け、予約どおり知事記者会見に至った。この委員会でもつれたら事態が噴火したに違いない。福岡市からは身勝手な要望があり、博多・天神の商店部からの強い要請もあり、市民の一部からは今になっても緑地で残せとか、専用コンサートホールを作れとかの要望が執拗にあったこの緑地問題も一段落を迎えたわけだ。東京都庁のように、建ったら建ったで更に文句が出るだろう。福岡の知事公舎も建ってから問題化したのであった。この跡地も決定まで八年を要したことになる。四年後には実用化される訳だが、まだ何が出てくるか予測はできない。ドロドロした政治がつきまとうことは覚悟せねばならないが、一つの山は越えたわけだ。

7 月 28 日（土）

暑さも感じないで

是松さんが来ての話に、横浜（西区）の彼の家の周りは車がじゅずつなぎになっているという。サーフィンなど海辺遊びが若者に大もてなのである。若いからいいねと思う。この暑いのにと思うが、彼らにとって暑い事も気にならぬ海辺のよさがある。車があるからいとも気やすく、その辺に集まれるし、今様の新しい気取れる遊びがあるわけだ。夕刊によると暑い日が記録的につづいているとのこと。熱帯夜が十日以上そして福岡市は午前中に三三度をこえてしまっている。休みだが、外に出る気がしない一日で、ごろりごろりしていた。やっととれた連休である。花火大会がどこかであっている。夜、ドン、ドーンの音がきこえる。暑いなら暑いなりに大衆には楽しみがあるものだ。子供の頃はまっ黒になって川に泳ぎ、草の上にころんで暑いことなど気にしなかったことが思い出される。今の子もそうなのであろう。それでなくてないはずだ。年の差を感じなければならないのだ。夏休みを満喫できた頃が無限の生命を秘めていたわけだ。

7 月 29 日（日）

我が身を削って

久しぶりの連休だったが、何とはなく終ってしまった。暑いばっかり。それでもないのとくらべると大ちがいだ。作日はマージャンに時間をとられたが、今日は揮毫に時間をとられた。どちらも一面楽しい事ではある。眠れないので何をするにしても疲れが出る。勝手といえば勝手だが、あれこれするので、我とわが身を削っているようにも思う。眠れるならそうおうの休息はとっているはずなのに、そうならない。今日も朝六時に起きてしまって藤棚で作業することになってしまった。自業自得といえそうだ。誰が弁解してくれるか、助けてくれるか、慰めてくれるか、要するに勝手というしかない。色紙二〇枚、手紙三通、条幅八枚その他牛頸ダム看板、住吉神社ボンボリなど墨を使う仕事がたまりすぎていた。一件を残して全部終った。しなくてもいいのに、わが身を削りながらやることになる。暑いのでクーラーを使う。暑さと電力使用量はピークといわれる一日だった。

7 月 30 日（月）

新しい空港をどう作るのか

新北九州空港建設促進のため下関にある第四港湾建設局に陳情に行った。好意的に受けとめてくれているのだが、漁業補償や新松山埋立地からの渡り橋の建設費、さらには空域調整につき防衛庁の同意が得られなくてはならない。防衛庁関係は築城基地ではなく小月のことだという。山口県、下関市と話合いも加わる。他面、九州レベルで二十四時間空港の新設が話題になっている近年、この新北をどのように位置づけるかが問題でもある。県知事の口からは発言できない。多くの人は玄海とか有明海とかいう。又熊本、佐賀、長崎はそれぞれの空港が代替機能を果たせると主張し、末吉市長は今建設を構想している新北も代替に役立つといい、引っぱり合いの状況でもある。すべてが二十四時間使えるのだといっているのである。福岡現空港が二十四時間使えない上に、対外関係便も限度にきているので、二十四時間空港の構想づくりがホットな課題になっており、新北はむしろ冷やかにみられる面もある。困った課題である。

7 月 31 日（火）

社会主義の問題

夜三光園で在福岡報道各社の責任者との懇談会があった。三役、総務、広報の対応である。幹事として私の左には共同通信の中村明氏が座っていて話を交わす中で、彼が協会太田派や福岡勢力のことなどよく知っているのに驚いた。今は社会党もシンがなくなったと彼はいう。労働組合も社会党もふやけてしまって拠点とすべき理論をもたなくなっている、社会主義すらいえないんだから、まず危機といっていいのではないかとのこと。まずはご指摘のとおりといわねばならないだろう。僅かに頑張っているのは岩井だけじゃないかとも。私は

東欧、ソ連、中国など社会主義国で急変しているのは社会主義、マルクス主義に問題があるというよりは、実際面で、品質管理や競争原理を価値基準に入れてない点に最大の問題があるということ、日本では経済の急成長を背景に右も左も、まん中に寄って来て闘うことの必要性を感じなくなり、争点が少くなっている現実がそうさせているので、東側の事情、自民のいう体制選択の問題とは違うということを述べておいた。彼も納得していた。

8 月要記

ともかくも働きすぎである。日本人はそこから脱出できない宿命を負っているのだろうか。暑い暑い夏なんだから自由に振舞いうるような状況下に入ることが望ましい。夏まけということがよくあるのだが、この暑い中無理をするからであろう。昔は農村では八月大名という言葉があって、ウチワ片手に多くは午睡したものである。きいてみると、米づくりも早場米をねらうので八月は農繁期に値するようになったという。農家の夏休みすらなくなったらしい。事務側にきくと、職員は適当に休暇をとってやっていますよという。そうあってほしい。あちこちでドライヴする人がふえてきている。昔は盆の墓参りといったが、あるいは体裁よく休みをとった証拠だろう。例年八月十五日は戦没者慰霊祭が県立武道館で行われ、是非出席せねばならぬのでかえって拘束される身、又関係方面への初盆参りも三役分担でやることになる。私の夏休みは十六日以降二～三日ということになる。今年は南阿蘇を予定している。平素行ってない所だし、少しは骨休みになるだろうか。

8 月 1 日（水）

文化財対応を積極的に

福岡建設事業連絡協議会のあと懇親会があった。リーセントホテル六時から。朝建設大臣が災害地視察で高田町に来た時同行していた県の土木部長がこの懇親会にも出席していて、ビールコップを傾けながら出した話題に、文化財発掘と土木事業の関連があった。昨夜の三光園でのマスコミ責任者懇親会でも、革新知事は文化行政に力をとの声が出て、文化財に話が及んだのが思い出される。土木部長の話では土木工事の途中に文化財が出てきて工事がおくれるとの歎き、隘路は予算上の問題かと思ったのに否で、発掘作業、考古学関係者の作業のはかどらぬためというのである。分野は教育委員会の責に移る。南部長のいい分をきくと、考古学分野の OB でも動員してもらうしか途がない。この分野の人手不足で、「鑑定」仕事がはかどらず、さらに発掘物がどこか倉庫に乱雑に投げこまれたままに放置されているのが実態というのである。私の側の認識不足であった。予算をつけるべきは土木ではなくて教育文化の行政なのである。それにしても教育委員会からそのような声があがらないのは何故だろうか。中央の文化庁もこの面で鈍いとは思っていた。

8 月 2 日（木）

スポーツ能力の男女差

グラフふくおか記事取材のため、佐藤恵さんと対談した。ハイジャンプの日本記録（女子）保持者である。バネがある。タケが高い。イナゴのように足が目立ってみえる。筋骨はたくましそうだ。三年ほど前に東京湾の巡視艇の艇長となったことで報道界をにぎわせた佐藤潤子さんとの対談を思い出す。同じ質問をしてみた。つまり、男女のスポーツ能力の差は？ということである。後者からきいたのは、シュンパツ力はどうも男に劣る。その代わり持続力は女が上ではないだろうか。総じて差はないということであった。前者もこのことを認めた。陸上競技でいえば百米競争は男に追付けないかも知れないが、マラソンは女もやがて男に追付くか、さらには追抜くかもというのである。私も平素そういうことをいいふらしてきた最近であるので、両者の主張に納得できるのである。体格もだんだん近まるかも知れない。過去のしきたりその他のしがらみをどこまで脱ぎとれるか、将来を楽しみに見たい。

8 月 3 日（金）

猛暑パンチ

二十一日間連続の真夏日と報道されている。野菜の値上り、ナスは入荷が二割減で価格が八割高（昨年比）、キュウリ、トマト、ホーレンソウがこれにつづく。枯れるのと、サラダなど需要が上昇するのと、平均して四%減入荷、二十四%上昇の価格。水道の使用量は過去最高。一日平均福岡市の、五月は三九・六万トン、六月は四三万トン、七月は四八万トン（これは前年比一日約二・三万トン増）という。電力は八月一日午後三時一二三二万キロワットと過去最高。毎日記録更新をしている。商店では冷い飲物のほか、果物がよく売れている。猛暑で糖度が高く、好みが向くらしい。子供は夏休みで欲望を家庭内でフルに発散しているだろう。その反動がおそろしい。ところで新聞では、知事選を連合型（非共産）で模索する動きがはじまったと報じている。県評センター、社会党の動きが明らかになってきたからである。だんだん波が見えてくる。

8 月 4 日（土）

異常猛暑

新聞はこの暑さ、月の中旬までつづくだろうという。異常というしかない。利根川水系では二〇%の取水制限、一寸とした恐怖状態である。変圧器がこげついて停電さわぎがおこったり。電力会社はホクホク、発電量ぐんぐん上昇、電力各社は東京へ売電している。クーラー全開、これで甲子園野球になると更にテレビが加わる。反面、全国的な広がりで家畜の「熱死」がつづいている。農水省の発表では三日現在乳牛四〇〇頭、ニワトリ四一万羽、豚は関東一五八二頭、九州二一九頭等々。これは過去最高の昭和五十九年にせまる数という。日射病、熱射病のためで、日よけ、風通しの問題らしい。福岡で三三～三五度の気温。こんな状

態があと十日もつづいたら一ヵ月雨なしの日照りつづきになる。夕方の庭木への撒水が欠かせない。給水制限の心配は今のところ福岡はないらしいが、異変のおそれなしとしない。

8 月 5 日（日）
筑後川フェスティバル甘朝
筑後川フェスティバル甘木朝倉実行委員会（各市町村、商工会、農協ほか）の主催で三日から今日まで筑後川をテーマにいろんなイベントが展開され、その中で今日原鶴サンライズ杷木でサミットがあって参加。大分の知事、福岡市長らと共に私もパネラーとして参加した。富山和子さんが九地建河川部長とともにアドバイザーとして加わった。水と緑と土が人間にとっていかに重要であるかが強調された。この催しは、大川、小国、日田と先例があり、次は久留米で行われる。大分、熊本、佐賀、福岡の四県四七箇市町村が共通の認識をもとうというのである。水の縁で産業、交通、文化の歴史、将来が決まるということで、今日は濫開発、過疎化により源流が荒廃しつつある点で一致した。メソポタミア、印度、エジプト、ペルーなどの栄えていた古い時代と今日との違いが頭に浮ぶ。西域もそういえるかも。緑も、土も、砂漠すらもが、人間がつくったのかも知れない。日本列島はいつまでも緑でないかも知れない。どうも勉強が足りない感じ。コメの自由化、イギリスの食糧自給の上昇、よく対比してみたいものだ。

8 月 6 日（月）
女性の活動の表面化
日経新聞に俳句人口一千万人という記事が出ていて驚いた。句誌に参加している人口は二〇～三〇万人といわれ、他はみなかくれた俳人だそうだ。俳句の本も増加しており、必ずしも自費出版とは限らないとのこと。でも本の発行部数の伸びよりも実際に句を楽しんでいる人口の伸びの方がはるかに高い。句界結社人口はこの十年で倍増といわれるが、結社と無関係の人口の伸びはもっと高いのだそうな。管理社会傾向や大型レジャーに関心が向くなかで紙とペンだけで時間をとることを好む人がふえるというのは、どう説明することができるのだろうか。「日本人の平衡感覚のよさ」といえるのだそうだ。私は以前に俳界の高齢化と女性化を感ずるといったことがある。句誌の中からの覚触（ママ）である。ともすれば豊かさの中で余暇もでき、それを味っているのが高齢の女性だと、特徴的に短絡できるのではないか。今日は中央競馬会の理事長渡辺五郎氏が来訪、乗馬人口に若い女性がふえてきたことが話題になった。俳句化と競馬化の両極というか、女性の多極的活動表面化というか。

8 月 7 日（火）
学文の会
久しぶりに「学文の会」をするというので夜、山ノ上ホテルで夕食会になった。事務局は山

川、それに県評センターから梶村、社会党から渡辺参議と小田、共産党から堀井ほか、あと具島先生、内田先生をはじめ、土井、西井、高木、牛島の女性二人など。この会をもつについて、知事選問題と非核問題は出してくれないようにと秘書室の杉山があらかじめ釘をさしていたので、それは表向き話題にならなかったが、出席者はそれを逆に強く意識していたようだ。私の左隣の席にいた高木さんは、県の広報が足りない点をこぼしていたが、裏からいうと「革新」らしく見えないということのようだ。堀井氏は九日の長崎原爆の記念日までに非核の知事発言を期待するといっていたし、具島さんは「革新県政への注文」を語ってほしいと冒頭挨拶でのべられた。平素のうっぷんがたまっているような雰囲気の二時間であった、どの人も意識の急進派らしく語っていたのが印象的、ある意味では全く実務的でないともいえる。しかし「外野席」からみてそうしかいえないのであろう。

8 月 8 日（水）

原爆四五年忌というが

イラクのクウェート侵略問題が世界的な注視をうけている中で、国内では恒例の夏の甲子園が始まり、一昨日の広島、明日の長崎と、原爆忌が改めて関心を呼びおこしている。結構騒々しい熱い夏である。イラクは袋だたきのようだが、石油に心配なしとはしない。米軍はピリピリして活動に入っている。海部首相は広島にも長崎にも姿を見せる。長崎市主催の被爆四十五周年原爆犠牲者慰霊平和祈念式典（十時四十五分から）への出席である。本島市長は外国人被爆への謝罪、国家補償としての被爆者援護法制定、非核三原則の立法化を求めた平和宣言を発するという。尤もなことではある。論理は誰にもわかる。しかし実行となると、かなりな間接法が必要であろう。軍備と軍拡、通常兵器と核武装、戦争と国際紛争、戦闘と核使用などなど無限にむずかしい。平和ということはいいが、いっておればいいかというとそうではない。いわないよりもいうべきであろう。原水協と原水禁というように、運動にも違いがでてくる。運動体のすることと行政体がすることと、学校の教育と市民運動、一般地域と被災地など無限にむずかしい。

8 月 9 日（木）

原爆体験風化を歎かずに

西日本新聞社説に「被爆体験を局地化させるな」と題し、その中でいっている。「広島、長崎に夏が来る度に取り上げられる問題点に、被爆者の高齢化と死亡者増による被爆体験継承の困難さがある。現地からの声が弱まっていけば世界へ核廃絶を訴える力も先細りとならざるを得ない。さらに懸念すべきは、被爆体験がわい少化され、被爆二都市だけのローカル問題化されつつある風潮である」と。問題はこうした流れをよく認識すること。その上に立って新しく運動を深め、広げ、強めていくことではないか。私が思うのは新しい運動が見えにくいこと、問題提起が直接的すぎるということだ。ビキニ、チェルノヴ(ママ)イリ、スリーマ

イルズ(ママ)など外国にも数本はあるが、直接的なもの以外にも動機を求めなくてはならないだろう。非核条例の制定直接署名運動を妨害したので知事は平和や非核を願ってないというような断定を私は安直すぎはしないかと思う。君が代や日の丸についても似たことがいえる。日常性の中に問題追求(ママ)を忘れないようにして、体験風化、高齢化、局地化を克服するしかないと思うのである。

8 月 10 日（金）

打水

水打ちてにわかに薄暑めく庭に	稲見佳子
風涼し剪定終えし庭に佇つ	美都代
炎天のうそのようなる夕立を	平野郁太

「万燈」誌昨年の十月号から今日の気分を少しでも詠んでくれているもの三つをひき出してみた。やっと日が落ちたかなと思うと早く打水したくなる。打水は草木がよろこぶだけでなく、地面も壁もよろこぶ。そして同時に私の心も水を打った気分のさわやかさを覚える。この心の水打ちを一番願ってやっているのかも知れない。剪定や雑草抜きができたらどれだけいいだろうかと思いながら、それができるような天気をねらっているが、この暑さではとてもできない。降ってくれればと願う。一寸だけ降った夕方、でも打水ほどには効果はなかっただろう。なぜ、どっと降らずに終わるのであろうか。天が惜しんでいる。ないよりましかも知れないが、これで効果があったとはいえない。街頭のツツジがあちこち枯れかかっているのに。

8 月 11 日（土）

恵みの雨がほしい

例年同様に手わけして初盆まいり。一日が暮れてしまった。縦貫道を走っているときかなりにわか雨が降った。珍しい。街路樹が枯れかかっている。気になるが一寸助かった思いもした。恵みの雨といえる。わずかでも降ってほしい。夜は窓あけて網戸にしているとやっと冷気が入るようになった。しかし人間世界では涼しさが返ってこない。イラクのクウェート占拠が永びきそうだし、アメリカを先頭とする対抗手段がけんあくかしつつある。のんきなことをいっておれない方向にある。地元では教員組合の実損回復問題で谷川弁護士を先頭に、教員組合が私にやいのやいのといってきており、林県議（団長）にきいても、富永副知事にきいても反応は冷たい。この時期に、危い賭けはできないというのである。一方は筋論でおしてくるが、他方は政治的にそんな乱暴なことはできないという。ともかく部分的な話し合いをつないでも衝突するだけなので、十五日の夜、もう少し輪を広げて考え判断をぶつけてみようということになった。ここにも恵みの雨が欲しい。

8 月 12 日（日）

始皇帝の坑儒

中国の歴史（3）（陳舜臣）のはじめの方に、儒教と道教は中国固有の二大宗教である。だが前者は人間至上主義、後者は自然至上主義だし、前者が礼を尊び後者はこれを軽蔑、吐棄したとある。秦の始皇帝は泰山で封禅したが、我流でやり儒教を拒否することになる。彼が道教に深く立ち入ったかどうか今のところ私にはわからない。道教は陰陽五行説、易、祈禱、神仙説などを含み、老荘思想に近いと説かれている。始皇帝は孔子のいた魯を征服し、そこで流布されていた儒教思想を敵視したようだ。別角度からだが始皇帝は文字を統一的に政策的に創始した。ここではじめて文字は一つの定形をうる。権力との関係があるところに興味がある。文字が整ってこそ文化が始まり、言葉が発達し、思想が伸びる。彼の坑儒は後世に即響かなかったであろうが、中国を統一し文字を文化として創造したところに史的価値の高さがうかがえる。このあたりの事については引きつづき興味をもちつづけたい。

8 月 13 日（月）

暑さの中で休みを

猛暑日照がつづいている。夕刊をみると明日も快晴とのこと。真夏日、熱帯夜など記録的な連続らしい。若い人達は海や山に凉を求めて楽しんでいるが、わが方は室内でも汗をかく。ただ、子供達は楽しい一方で疲れを内蔵してしまうらしい。秋に入ると夏まけをすることが多いが、もう思わぬ病気に追われている子供が少くないらしい。楽しさが表面に出ているけれど、肉体は暑さの負担をかかえ込んでいること間違いない。昔は農家の人は八月大名といってゆったりと午睡したものだ。自然体による休息だったと思う。夕方四時か五時になって何かごそごそする程度。朝は五時半とか六時に起きて朝食前の仕事をする。その程度だから、農家にも自分たちがきめる夏休みがあったわけだ。今の都市生活にはこうした自然体の休みがない。ただ勤めの人達は旧盆に向けこの二、三日は連休のふんいきになる。街の通りも今日は車が平素の半分ほどだったらしい。できるだけ休んで体力を温存しないといけないだろう。

8 月 14 日（火）

慈父といわれるけれど

暑中見舞書状の中に、岡垣波津の小役丸卯太郎氏からのがあり、やっと返信を書く段になった。先日親しい者が集ったとき（父の日）知事のことが話題になり、その時の作品だがご笑納されたいというのである。

　県民の父にふさわし威に充ちて

　慈愛あふれる眼ざし親し

ほめてもらうのはいいが一寸はずかしくもある。今の段階で今の知事を語るのは誰しも当

然であろう。が読みつづけている陳舜臣の「中国の歴史」にはほとんどが政治の世界であるからかもしれないが、「殺した」という記事がやたらと出てくる。仲間のあいだの事であったり、敵国支配者の事であったり、人民大衆の戦争への動員であったり、ケースはいろいろだが、人命がいともかんたんに消し去られるわけだ。原爆被害者救護法制定運動、韓国戦争被害者補償要求など現政府にきびしい要求が渦巻いているが、立場や主張もずいぶん変化するものだと痛感する。

8 月 15 日（水）

年をかさねて身辺の諸問題が見えてくる

豊瀬禎一氏からの暑中見舞はがきに、次の句があった。

　独り居の置きところなし蝉時雨

一寸おかしな点はあるが、事情はよく理解できる。多分何もしていないのだろうと思う。彼のことだから、読書など適当に時間は過ごしているだろうが、それでも身のおきどころがなくなるのも事実。何か打ち込むためには平素の人生の中で、若い時から、自分で、何かを求める人間になるよう心懸けておく必要がある。だが、言うべくして容易なことではない。それはそれとして今日リーセントホテルで教員組合の実損回復問題で谷川弁護士と話す時間があったが、雑談の中で今日子供の教育と遺族の相続について新しい心配な傾向が顕著になっているという事が出た。テレビでは後取り問題が出た。それが家庭問題、結婚問題にまでひびいてきている。OB になって趣味云々どころではなさそうだ。ところで私自身どうなるのだろうか。盆にちなんで墓所問題もテレビで出た。

8 月 16 日（木）

「革新」らしからぬ

春日市の光照寺の郡島氏からのハガキを見た。七月十八日の消印があるのに、秘書室は今日私に伝えて来た。冒頭は暑中見舞だが、中は怒りに満ち充ちている。天皇病気見舞行きにはじまる数々そして又今回の非核条例制定直接請求署名運動承認に関する「妨害」問題に至り、憤懣やる方ないという内容である。池永氏らがいいたいだけ主張をぶちまけているともみられる。天皇については戦争責任、本島市長発言なども思い出す。およそ革新らしからぬ事と郡島さんは言う。同様に思う人はかなりあるに違いない。先だってから具島先生と席を同じくする機会をもうけたが、彼も当方のいい分をわかってくれない。面とむかって話してもそれだから、まして話す機会のない人は、郡島氏同様に考える者少しとしない。いずれも「革新」の看板をさげているのだからちゃんとやれとの希望なのである。この種の攻撃は味方を敵にまわすことになるが止むをえないのではないかと思う。訴える人、集会などちょっとできないからである。

8 月 17 日（金）

北九州都市高速問題解決の見通しつく

北九州道路と北九州都市高速道路の一体化が合意され来年三月末に一体化経営実施に向け必要工事起工式が今日取行われた。工事だけで約一〇〇億円必要という。公団の北九州道路の譲り受けに七〇〇億円余。ヘビがかえるを呑むのではなく、かえるがヘビを呑むと表現されるような合体を、建設省も道路公団もよく認めてくれたものだ。県議会で都市高速側の無限大の赤字が問題になって以来二年、多方面から問題解決への努力がなされた。思わざる障害は公団の職員処遇問題だったが、背景に好況があり人手不足が深刻化していたためか、これもクリーアできた。県議会で「政治生命をかけて解決する」と私が発言したので、やっとケリがついた思いである。土木部、公社、北九州市側は意外と冷静に受け止めていたが「親方日の丸」観があったに違いない。道路問題だから事務的には親方日の丸でも、政治的につついてくる側には攻撃の恰好の材料だったのである。北九にこんな巨額を投入していいかとの反論もある。

8 月 18 日（土）

南阿蘇から望む緑

　北阿蘇の全景望みつ残暑風

こんな駄作をひねってみた。グリーンピア南阿蘇の四階に部屋をとってもらって南から阿蘇連山を眺めたすばらしさを初めて味わった。根子が特にいい。車で中岳草千里にいく。そこから大観峰外輪山を見る。むんむんする暑さの下界を思うともうこちらは涼風、さすがに秋を思わせる。トーモロコシも旬であろう。あちこち出店に並べてあるし、阿蘇の野にキビの茂みも見られる。学生時代に九重に来た時のことが頭に浮ぶ。だが七月二日の大雨で中部九州各地に生じた山崩れが根子、一ノ宮でこんなにもひどいものとは思わなかった。とても人間わざの及ぶところではない。掻きむしったような爪跡がいたるところにある。その規模が、今の土木工事力とは全く比較にならない程の巨大さなのである。根子岳の形が変わったとすらいわれる。草原にも同じ爪跡はある。アカ牛が悠々と夏草をはんでいるが、これも自然みたいにみえる。雨が降らないので、中岳からみえる沢地がどちらも干上り寸前である。この日照も巨大な力である。

8 月 19 日（日）

由布院の町づくり

先だって日田に行って驚いたが、今回は由布院に来て驚いた。まず外見からも街が美しい。観光客が多い。大部分福岡からだといわれるが、吸収力がつけられているのである。吸収力は個性美であろうと思う。街の個性美だから伝統的なものがあり、それに創造的なものが付加されていくのであろう。付加していくのは誰か個人ではなくてその地域の人々であろう。

誰か先覚者がいてリーダー役を果たしているに違いない。由布院には由布岳、阿蘇山、盆地という独自の自然がかもし出す親しみ近よりうるものが自然にそなわっている。それに加えて、できるだけ寺社などの古い物を生かしながら新しい美術館民芸館などを設けようという努力が加わっている。今由布院は美術の街とさえいわれるほどに個人的な努力が集積されつつある。集積が力になっていくのである。街並みがあと一歩、それに洋館の大きな施設ができない方がいいといわれている。個々の個性ある街並みづくりに期待されている。

8 月 20 日（月）

モスクワ放送ですごした清田彰氏来日を機として思う

熱暑がつづく中、夕方ににわか雨があり夜はやや秋風を感じ、虫の音もひときわ時候の移りかわりを感じさせるようになった。虫は時がたてば啼くのであろう。虫の音で涼しさが逆に出てきたともいえる。横浜の瀬川二郎氏から写真を送って来た。七月下旬にモスクワから清田氏が帰国したので緑園会のメンバー有志集って東京と大阪で二回歓迎会が行われたが、私はどちらにも多忙で出席できなかった。会費だけは納入していたのであった。写真をみるとみんな老化している。八一五部隊八期生、第四区隊十班の寝台図で名前入りの資料も同封してあったが、十班四〇人のうち九人が死亡（消息不明も何人かいるようである）というから、ざっと四分の一はこの世を去ったのである。年をとるにつれ、同窓恋しという人と、うんともすんともいわず、ますます避ける人がある。避ける人は尋常ではないと思うが、避けたくなる境遇の人もいるのであろう。敢えて追求（ママ）しないでもいい。それにしてもこうした事はいつまでも思い出の種である。

8 月 21 日（火）

タテ割行政とヨコ補塡

サンヒルズ・H で青少年問題協議会が開かれ、安藤延男委員の中間答申案の説明をめぐる意見陳述のなかで、タテ割行政の弊害を補うために、ヨコの連絡とかネットワークということが強調され、注目を引いた。安藤氏は行政のヨコ組織を考えること、副知事クラスの人事をすべきとすらいっていた。平素県では他の問題についてもヨコ又は地域総合という意見が出るこの頃である。ただ、言うことはできても、さて、となるとなかなかできないし、納得のいくまとまりがえにくい。目をつむって考えても、名案が出ない。行政の上からの発想というよりは、具体的な個々の問題に沿って･･･というが、いうべくして対応しにくい。前から個別的問題、自助、互助それに公助（行政）と、私もいっているが、ボランティアとか地域市民運動とか、それと行政がどうかかわるかということになるとなかなか割り切れない。個々の問題に対応する必要はわかるが、タテ割り的に側面別の対応でなく、問題をもつ個別を丸ごとに、ということだと、行政がどう噛むかという点は解き難い。今後ことあるごとに反芻して考えてみたい。

8 月 22 日（水）

自民党の知事候補選び

二月二十八日東京で太田誠一氏と話合ったと同じシーンが今夕福岡のホテル日航で再現した。両者の態度は基本的にはかわっていない。但しあれから約半年が経過し、自民も知事選候補選びに力を入れざるをえない度合いが高まっている。こちらも労働戦線の動きなど、微妙な変化があっている。「反自民非共産」をはっきり打ち出した連合福岡にさからうわけにはいかないのが社会党の動き。公明、民社はこれまで自民と提携してきた面子は崩せない。共産党は社共路線を守りたいが、そうならない情勢。とはいえ独自候補を立てるとはいえない、孤立化を恐れている。新聞は奥田の輿が定まらないと解説している。九五年体制という言葉が太田によって紹介されたが、次までは奥田、その次は（九五年）は譲っていいということらしい。連合の坂本あたりがいっているようだ。太田氏は前回同様、私に引退をすすめるのだがという口ぶりでもあった。私は結びとして林県議に代弁してもらうと伝えておいた。

8 月 23 日（木）

心の一致

夜かわさきで石村善治教授と懇談した。秘書室から家永、藤田、橋本の三人が陪席した。行政の話が中心になった。そして用地買収など規則づくめではうまくいかない、行政に一般にいえることは人間どおし（ママ）の心の一致が先決ということであった。昨日の太田氏との会談でも私は行政に理論や思想よりも心を先行させているということを強調した。そのことが多くの人になかなかポイントとして理解されていない。理くつを前に出してくる人が沢山ある。当然わかっているだろうに心に留めていないようだ。今日の話は当然に、反核条例制定直接署名認可問題に移った。石村氏も、事前の連絡が悪かったといった。その通り、運動の中心にいる人は私ども行政の場にいる者に心を通わせることなく、突然に条例案をそえて運動を認可すべきと突きつけてきた。「べきだ」といっても心が通っていない。うまくいかない事もありうる。それは法の筋の問題ではない。目の玉に指を突込むようにしてくると、相手の心と反撥し合うことになる。教育の世界だってそうだ。

8 月 24 日（金）

長崎に行く

今日、長崎の旅博、福岡県の日、というので県の宣伝マンとして長崎往復した。途中高速道も整っているが、三時間かかった。カンカン照りで暑い中、じっと耐えねばならなかった。会場は出島近くの岸壁利用で、小じんまりまとまっていた。八月三日から三ヵ月余という日程。入りはこの暑い中でまずまずといわれている。予定百八十万人とか。九月になると涼しくもあり、入場者もふえよう。だけど全国的に博覧会疲れではなかろうかと思うが、そうで

はないらしい。イベントで人を呼び、地域の活性化に資するというやり方は平凡なようであたっている。石炭と造船で栄えた長崎、水産も思うにまかせない長崎。それを「旅」で支えなおそうという。出島に代表されるように、国際交流拠点さらには観光地としても売り出そうという。昔の港町だから山地が海にせまっており、広がりに難点がある長崎だが、「旅」というねらいはいいと思う。徳川時代の蘭学に匹敵するような文化魅力が加わるとよいだろうと思う。高速道もできたことだし、将来に期待はもてそうだ。

8 月 25 日（土）

県議会対抗軟式野球大会（国体協賛）

国体協賛各県会議員団トーナメント式で三日間の軟式野球試合が行われる。今回四二回目というずいぶん早くからやっているのがわかる。議員にとっても全国から集まるということはいいことだと思う。かなり本式の大がかりな催事になっているのに驚いた。ただ議員だから年齢上草野球みたいにエラー続出で思わざる加点、お笑いシーンがつづく。運動不足や、その方面の運動をしてない人にはプレーに無理がきて体をいためる結果にもなる。誰しも思ったようには体が動いてくれないのだ。事故につながる場合すらある。国体協賛ということで盛り上がりにはたいへん役割を果たしているのではないか。福岡では夏の大会まであと十六日、秋の大会まで五七日、と誰しもだんだんその気になって来る。人工芝なので照り返しが強くてよくないときく。平和台球場のほかにも六球場ほど使っての取り進めらしい。

8 月 26 日（日）

イラク問題

中東危機がはじまってもう四週間になる。イラクによるクウェート侵攻とそれにからむ国際関係である。安保理は昨日海上封鎖の強化のため、米海軍などの限定的武力行使を容認する決議を採択した。限定的というのは、必要な限度内ということらしい。海上封鎖ということだが、もし衝突するならどうなるかということ。親イラク、リビヤからの海ならぬ空からの物資供給まで阻止できるかということ。又イラクが耐ええて長期化した場合、人質にとられているアメリア人その他がどうなるかということであろう。日本人のイラク在留者は四五五人、クウェート在留者は三三人。四五五人のうち二一三人（うち女三九、子供二八人）は自由を拘束されており、安全は保証（ママ）されない。アメリカ同様、敵視されているのが日本である。イラクが四囲封鎖に耐えうるか、米国その他封鎖側が人質とされている人達をどこまで放置できるか、辛抱くらべがつづくであろう。その中で、日本はアメリカ側についてどう「貢献」するか。増嵩する軍事費の負担、石油価格騰
貴など、事態はこれからもどんどん動くだろう。

8 月 27 日（月）

失業対策の変化

東京から失対事業調査団（団長高梨教授）らが来日(ママ)した。五年に一度の調査という。労働省の高齢化対策部長も団員。失対事業就労者が高齢者であるということだ。政府の失業対策対象人員は福岡県で全国の三分の一を占めている。炭鉱稼働と関係するのだが、北海道ではヤマがなくなると人々は町を去る。福岡の場合は居付いてしまう。かわりの仕事がその地域にないという点ではどこも同じだのに福岡では居付く者が多い。「失業対策で三〇年働いているのに首切るとは何か」と私にハガキで抗議してくる人がいる。失対事業は次の職を見つけることを前提に失対就労を与えているのに、三〇年も次の仕事を見つけようとしてなかった自分への反省はないらしい。他に仕事があっても失対の方が楽で収入が多いとの選択があるらしい。失対事業の中で高齢化が進み、男子よりも女子が多くなっている。子息は別に職業をもっているはずだが、遠くにいて寄りつかない、近くにいても老齢の父母を寄せつけない。官給の高齢化就労事業に変わりつつある。その変質をよく見てほしいと思う。

8 月 28 日（火）

体調が思わしくない

くれぐれも健康に注意を、と多くの人からいわれる。今日は二時すぎ例の検診をうけた。糖尿の値は依然高いし、気分爽快ならずである。夜暑いということもあるが、睡眠が十分にとれてない。頭がなんとなく重い。脚力も不安で一寸と(ママ)した肉体労働で疲れ易い。庭木の手入れなど二時間ほどで限界を覚える。小川院長はそうした訴えについて特段の対応指示はされない。できるだけ休むようにということに尽きる。最近、上顎の渇きを感ずることがしばしばである。義歯のせいだろうと思うが基本に糖尿があることは争えないようだ。義歯をはずして寝たらといわれるが、翌朝はめこむ時にやや違和感を覚えるので、はめたままで寝ることにしている。夜中に上顎の渇きをひどく感じたことがある。口を開いて眠ったせいでもあろう。いずれにせよ体力の衰えを自覚せざるをえないこの頃である。ただ、入院とか寝込むといったことになってないのがせめてもの救い。国体（夏季）を十日余りあとに控えて何だか心もとないわが身ではある。

8 月 29 日（水）

行政の傾き方向

日照りがつづき、並木の枯死がひろがっている。行政が責任を負うべきところでも当事者たちには義務感はない。自分のうちなら撒水して防ごうとするけど、行政には無用のことのようだ。枯れたら次の予算で植えかえればよい。その間美観は損われるが、美観の維持には責任追及はないだろう。次の予算でやりますといえばよい。それで終りである。筑豊ハイツでの地行連での知事講話のときに、そうしたこともまぜた話をした。そうあってはいけないの

だが、そうあるべき必要がない。それが行政というものらしいといっておいた。わかりにくいだろうが、やはり行政は政治の事務なので、そういう政治体制にならないと、日照りで並木が枯れてもすぐ対応というわけにはいけないようだ。福祉とか環境など民主主義が進まないと、その面に責任ある行政事務にはならない。「支配」の都合でそれは放任できるなら放任するだろう。住民がやかましいならそちらに手をまわすだろうけれど、できないと他に予算をまわす優先事項があるのである。県でも私の声はその方面に届きにくくなっている。

8 月 30 日（木）

国体が近づいてきた。

国体夏季大会まであと十日に迫った。三階講堂で県選手団の結団式があり、いよいよ迫ったとの感を深くする。記者がこの国体をどう受け止めているかときいてくる。スリムといっていたのに経費がかさんでいるではないかと皮肉る。一般に県勢の活性化に役立たせたいというが、私は県民が県についてのプライドをもつことが第一のねらいと説明している。福岡県民性にシャイな一面があるといわれるが、そのシャイをプライドに転化できればと思う。華やかであればいいというのではない。自負できるものをもっていることを自覚することをねらいとしたいのである。読売紙の取材に対してそのことを強調しておいた。優勝至上主義という点に視点をあてる者もある。しかし、それは自覚を高める一つのポイントであり、プロセスでもあるわけだ。勝つに越したことはないが、スマートな勝ちであらねばならない。式典やデモストレーションゲームも自覚を高めるプロセスである。参加意識が自覚にかわっていく。勝負だけでなく、それをとりまくすべてを消化していって、そこに自分を再発見できればいいと思う。

8 月 31 日（金）

三首長選で社共関係大きく変化

福岡市、北九州市の市長選挙が近まり、社会党が連合路線を尊重し、現両市長の再選に向けて共産党と手を切る立場を打出した。連合は反自民非共産である、が両市長は自民が中心に推している。その点少し違うけれど苦しい選択である。知事選については社会党が主体となって連合型を模索しているが、民社公明の両党がどちらともつかぬ態度を表明、むしろ前回同様自民と共同でやる余地を残した口ぶりである。とくに落選し今は県委員長になっている民社の北橋は知事は奥田以外なら自公民でと明言している。共産党は社会党が両市長選に現職を支持し非共産知事選の方向に動いていることを非難している。両市長選では独自の候補を考えている。知事選については過去二回社共で臨んだこともあり、次回でもその線でいきたいとしているが、連合の非共産に乗っかかろうとする社会党が知事選で共産党との共闘をどう扱うかはあとまだ微妙な変化がありそうにも思われる。公民がどう動くか連合がどう反応するかが前提となろう。いずれにせよ両市長選は社共分裂が明らかになった

段階である。

9 月要記

次期知事選で、周辺はようやく動きはじめた。当方、国体という課題を負ってそれにエネルギーをとられる。それはともかく、こうもかんかん照りがつづくと、心配がそちらにまわる。月の半ばにやっと雨らしいものにめぐまれ、やれやれ胸をなでおろした。熱帯夜、日照りの新記録といっても全く名誉でもない。九月九日、国体夏の大会に秋篠宮夫妻が来福。新婚まもない二人に県民の目が注がれた。八・九・十の三日間つき合った。若い人だからすがすがしかった。各地ですなおな県民の歓迎、受ける方にも好印象を与えたのではないか。北九文化記念プール、スペースワールド、浮羽筑後川、その前の遠賀漕艇場、それから東平尾の総合プール。どこでも大変な人垣と歓呼だ。「紀子さん」ブームが福岡県民に充満した。彼氏の方もひょうひょうとたる感じで人好きされるタイプと思う。金丸訪朝団が日朝両国の戦後の冷い関係を解決への糸口を開いたことは画期的。第十八富士山丸事件だけでなく日本の対アジア全体に新機軸をもたらすスタートとなったのである。今後の一層の展開を期待する。

9 月 1 日（土）

猛暑少雨

八月三十一日、福岡で三七・一度と観測史上最高気温がマークされたとのこと。今日も同じ。これは九月半ばまでつづくかも知れぬといわれる。三七度は平年より六・六度高い。五〇日連続の真夏日で連続も新記録をつくりそうだ。八月の福岡での降雨量は七・五ミリ、平年よりぐんと少く、昨年の六〇ミリとくらべてもいかに少ないかがわかる。給水制限が必要になるのではなかろうか。野菜、果物の生産減高価格現象が出ている。他方でクーラーがぐんと売れ、電力も何回も記録を更新し、海山プールなどへの人手数も記録破りとなっている。国体夏季大会が九日から始まるが、水の重要はふえ、並木はますます枯れてゆくとなると、よくない印象を与えてしまうことになりかねない。県内十三の県営ダムの平均貯水量は四八％に落ち込んだという。まさに危機といえよう。こんな異常少雨は西日本では福岡と山口の両県でとくにひどいのである。台風一五号に伴うフェーン現象だとのこと。局部的でもあるようだ。

9 月 2 日（日）

アジア文化賞創設

夜ホテル日航で第 1 回アジア文化賞晩餐会があって、関係各国大使、領事その他すべて夫婦出席でニギニギしい格調で進められた。私についてくれた通訳の服巻氏が、ハワイ州と姉妹提携するとき当時の亀井知事の強引ぶりについて語ってくれた。知事が独断で調子に乗

って提携意思表示を大衆の目前で表明したので、その実現に向けて庁内が大さわぎをしたという経過がある。相手の有吉州知事もにが虫をかんだようにいやいやながら対応したという。難産であったし評判のよくない独断専行だったようだ。この話は今日のアジア文化賞についても相似ていると服巻氏はいいたかったのかも知れない。随行の橋本氏の説明では桑原市長が亀井氏と似た強引さで、ここまでもってきたということらしい。市職員財務当事者も大変無理をしてついて来たらしいのである。選ばれた創設特別賞の五人も適切なのかどうか私にはよくわからない。橋本氏は有名人を作る賞というよりは、有名人に福岡市を引っぱり上げてもらうために作った賞であると皮肉っていた。亀井桑原は強引さにおいて似ているともいう。

9 月 3 日（月）

国際的視野を要する福岡アジア文化賞

アジア博のあと設立された福岡国際財団でアジア文化賞という全国でも珍しい事業がスタートした。アジアを世界から注目されるように、又ひいてはその役割の一端を福岡が担ぎたいとの願望をこめての発足である。これには前提が必要であろう。一つは日本が、そして福岡がこれまでの延長線上で発展していくことである。そしてアジア諸国がこれ亦、従来の期待に沿って発展していくことである。この両方が必ずしも確実とはいえない。イラク問題が今そうであるように、突如として世界的規模での不安が噴出する。ベトナム、カンボジア、ビルマ、フィリッピンなどどうなっているのか私にはわからないし、次がわからない。中国のような大国が次にどう発展するのか、台湾との関係がどうなるか。朝鮮の南北はどうなるのか。それらが明るくない限り、アジア文化賞も折角ながら光ってこない。光ってくるように努力するしかないが、国際問題は一地方とは違って次元視野が必要となってくる。日中の技術協力もままならぬことである。近い所から再出発する必要もあろう。

9 月 4 日（火）

自民党の知事候補選び

杉山氏が来室し、自民党は今の副知事富永なら次の知事選で各党推薦でいけるといい出した旨伝えてきた。きき流したが、民社の北橋が似たようなことを最近いっていたし、以前太田誠一氏にホテル日航福岡で合った時も似た感じを私に与えたのを思い出す。今日の杉山の内容は記者クラブから伝わった話らしい。私は杉山に、それは太田誠一の流した話だろうと思うといったら、杉山も、だと思うといっていた。自民の模索、民社との連携の程が推測できる。北橋など力もないのにマスコミ向けに「奥田でないなら OK」と吹いている。公明は自民から誘いがかかっているらしいが、今のところ応答なし。今は自民が両党を抱き込もうとしていて民社が応ずる見込み。富永のことは別として、自民では田中健蔵を再度かつぐ声も強いらしい。前回は消費税（売上税）がらみで負けたが今回はもうクリーアされたので

大丈夫との観測がある。田中氏は含みを残して対応している。福岡市議々長の山崎広太郎との声もある。いずれにせよ自公民でという動きがあれこれ模索され、社会もそれに乗れと誘いをかけている模様。

9 月 5 日（水）
産炭地ということ
産炭地六団体の会が第一議員会館で行われ、その足で三班にわかれ、各省陳情を行った。炭鉱閉山の後遺症がまだ残っているので、地域振興のため六法の延長、予算の確保をたのむという陳情であるが、この問題で、県として、全国団体として、県六団体として、というように数回同じような陳情を行うことになる。来年度予算に向け、また石鉱審に向けというように、相手や目標に違いはあるが、根と先穂は要するに同じであり、又問題提起も三〇年の経過をもっていることを誰もが知っている。問題解決の目鼻もついてないし、新鮮さもない。私のところに来る陳情ハガキには「失対就労三〇年、首を切らないでくれ」といったふうである。「失対三〇年」ということ自体に不思議な、理解をこえる状況があると思う。他に職を求めるとか、職を求めて産炭地を去るとかしないで三〇年というのである。長期政権の長期政策がそうした状況を作っているともいえる。筑豊は今そういう風土をもつところとなって、自体あえいでいるのである。

9 月 6 日（木）
連合型知事選とはいうが
杉山氏が社党県本の小田氏を伴って来室、中食を共にしながら次の統一地方選をめぐって雑談した。先立つ福岡・北九両市長選については社会党は共産党と袂を分っても現市長を推す線を明らかにしたのだが、知事選については連合型を志向しつつも、連合内の県評センターと友愛会議のソリが合わぬ点を未だ明確にしえていない。北橋を頂点に友愛派は反奥田を言明し、共産党は社共という全国唯一の路線を崩すなといっている。小田氏の説明をきいても社会党中心といいつつも実力部隊が何であるのか未だわからない。総評系の政治結集である県評センターや社会党を表に出すことには大いに躊躇がある。それには連合が反撥するからである。友愛会議を抱えているからだ。だから連合型とは口でいえても実体、実力部隊の姿が見えていなのである。私が思うにはその点をはっきりさせることが第一に必要なのと、第二は従来の「学文」を一歩つっこんで改編させねばならぬのではないか。第三は女性グループの新規結集をどうはかるかである。

9 月 7 日（金）
連合福岡の対県要請、北方領土問題まで
午後連合福岡が坂本会長鷲頭事務局長ら役員揃って来庁、対県要請を行った。賃金や時短な

どふれず、環境、高齢者問題をはじめ教育問題にいたるまで県政全般に及んだ。高速交通体系も入っている。県としてはすなおにうけ入れるしかない。別途北方領土についても国民運動としたい旨要望が出されている。労働組合の要請とは思えぬほどかわったものである。官民一体の連合ができて初の要請である。項目とは別に、住民・消費者の立場から各方面の要請について使用者側もふくめ細目は県事務当局と協議したともいっている。自動車産業の進出に伴うインパクト、地価高騰にも要請があっていた。有効求人倍率の低さについても言及していた。要するに、これが新連合かと思ったと同時に、労働組合もかわったものだ。時代のなさしめるところかとの印象が強かった。来年の統一地方選挙についてはもちろんふれられていない。連合がどういう態度を表明するか注目されるので、記者がカメラを向けて三〇分ほどの会談を最後まで見守っていた。

９月８日（土）

三重熱が全県的に

第四五回国体の夏季大会がいよいよ明日北九のプールで開会式となる。数日前から他県からの客で会場地はざわめきがはじまっている。天気は心配ない、それどころか炎天つづき、かわきすぎて困ってしまう。浮羽でのカヌー競技は筑後川の水深不足が不安をつのらせている。街路樹が次々と枯れ、みにくい姿を見せ、かつそれがひろがっている。でも国体は私の想像をこえて県民に浸透したフィバーを作っている。今日は秋篠宮夫妻を空港に迎え、海の中道、北九へと随従した。沿道、立寄り先々県民の歓迎フィーバーがオンされ、暑さと共に三重熱になっている。「紀子さん」ブーム。若いことはよいことだ、若いに限る、とさえ思った。国体を無視しても「紀子さん」ブームに酔うということも大いにある。一生に一度の国体といってきた国体が迫ったのだが、強烈な印象が各自の脳裏に刻み込まれ、後世に作用するだろう。国体や皇室の是非をいう人が少くないが、理論をこえたエモーションに目をそらすことはできないであろう。

９月９日（日）

衆口鑠金

新婚の皇室要人秋篠宮夫妻福岡入りで二日間、ともかく事なく経過した。それにしてもすごい「紀子さん」ブーム、「紀子さん」フィバーであることが実証された。通過コースとその時刻をどうして知るのか、コース、要所にすごい数の人だかり。どこもここもびっくりするほど、熱叫歓喜、どよめきの連続である。警備の人達も大変だ。人波が崩れないように力一ぱい支えている。敢えて制止を破ろうとする人はないのに、制止線が保てない程にゆらぐ。最後のシーンは天神四ッ角、グランドホテル前であった。一目みたいとたかる人垣、見れなかった人はガックリだったに違いない。昨日のプリンスホテルでもそうだったが、おし寄せた人々はしばらく去らない。何かを期待したのではないか。それに応えるすべがないようだ。

応えていたら限りがないのであろう。そこに期待と現実のギャップがある。政治の世界だからだろうか。宗教界にも、さらに芸能人にも似たシーンはありえよう。「衆口かねをとかす」という言葉があるが、大変なエネルギーを感じさせられた。もえてもえて、かねをとかすエネルギーとなる。それが見えた。

9 月 10 日（月）

「事件屋」的報道

昨日の北九の文化記念プールでは水温が異常に高く、今日の浮羽町のカヌー競技では水位低く競技の実行に黄信号が出たそうだ。北九では前夜プールの水を噴水式で還流させ競技に適するように二度ほど下げることができ、浮羽では大型ショベルで川底を掘り取りオールに邪魔にならないように手当したという。担当市町の努力で事なきを得たようだ。異常ともいえる高温と水不足がつづいているのでアクシデントではないが心配をさそったし努力を要したのである。ただ新聞は事あれかしといわんばかりにこのことを書き立てる。エピソードで蔭の努力というならいいが、読む選手に心理的動揺を与えかねないような報道である。又新聞は選手達への食事メニューに生魚を入れないようにとの指導があっているのに対しても、コックの腕のふるいようがなく歎きがもれているというように書いている。募金の集りようといい少いと批判を書き、「事件屋だなあ」と思わせるふしが少くないのに驚く。

9 月 11 日（火）

ドイツ印象派展をみる

西日本新聞からの要望によって、市美術館で行われているドイツ印象派展を見に行った。シュク、リーバーマン、ロールフス、コリント、スレーフォークトなど新たに勉強することができて楽しかった。フランス印象派のものも沢山展示してあった。絵のことなど理解できないのだが、十九世紀半ばから盛んになった印象派の絵が、ぐっと私たちに親近感を与えてくれるものであることがわかるような気がする。印象派の画題のせいだろう。図録の解説の中に、その主観性、瞬間的な自然観察という言葉が出てきた。光のあたり具合によって異る自然が瞬間的にとらえられている。かりそめの、無常の対象が、自分にはこう映るというように表現されている。風景にしろ、人物にしろ、静物にしろすべてが平凡で、どこにでも、いつでも見られるものを画題としている。とくに風景が対象になり易いようだ。もちろんそれは一九世紀から二十世紀かけての市民社会の発展が生み出したものに違いない。もう二十一世紀がめぐってこようとする九〇年代だのに、つまり一〇〇年も前のものだのに、私にはこの印象派の手法が一番わかりやすい気がしてならない。

9 月 12 日（水）

知事のスタンドプレー

十日だったか、熊本細川知事が三期目不出馬の意志表示をして世間をさわがせ、私にも所見を求めるマスコミ陣、ひとのことだが何といっていいか。要はどうでもいいのに、なぜ所見を求めるのか底意が知れる。彼はまだ五二歳というから、下心があり、次、そして又その次とのねらいがあるといえる。それだのに思い切りがいいとかどうとか褒める空気があおられている。スタンドプレーをする人だなと思う。これと並んで大分の平松知事が引き合いに出される。外向き顔がいいのはこれ又スタンドプレーが加わるからであるが、マスコミはこんなのが好きである。この夏平松氏はソ連に旅行し、「一村一品」のすすめをしてきたのでマスコミから褒めたたえられてきた。一村一品運動はもう古いといわれながらやはりこれが彼のトレードマークである。細川が EC 型九州を唱えるなら平松は九州府論を唱え、マスコミが双方を褒めたたえる。「九州は一つ」はその共通の根だが、そのために北九州が端っこになり熊本がまん中になるわけだ。可能かな！

9 月 13 日（木）

水への配慮・総意

雨が降った。昨日は福岡で、今日は東京で。北九州のプールでの夏季大会終了前はかなり降った。きいてみると一番欲しい行橋方面は降らなかったという。東京も欲しかったらしい。全国的に、所によっては床上浸水になる程に降った地方もあるとか。ともかく恵みの雨であり、もう少し降ってほしいが植物はホッと一呼吸できただろう。つづくカラカラ天気で思ったのだが、山々はどれも依然緑であるのが不思議。頂上の木すら枯れていない。樹は自然に自分が必要な水は流さないで貯えているのであろうか。平地では人間が植えた並木などが、とくにツツジその他低木はどんどん枯死している。枯死した低木の中に緑のものがあると思ったら、それは蔓草であったり雑草であり、自然そのものである。人間が自然を考えないでビル建設に力を入れるが、給水が限界にきているのにと反対の声をあげるケースがある。一人一人の賛否ではなくて、そうしたことに向っての総意を、意識的にもっと早く結集しなくてはならない。今日の全国知事会はその一つの場だったのだが･･･

9 月 14 日（金）

汗牛充棟

執務のなかで中国で紙が発明されたことが話題になった。秦の始皇帝の焚書坑儒という古事にいう書は詩書六経ではあるが、紙をやいたのではない即ち書は紙でなかったという事を私が指摘したことに端を発した。高山課長が紙はそれよりずっとあと蔡倫が発明したんですねという。その通り。彼は後漢の宮中用度職の長官で手工業方面の主任でもあった。樹皮や麻、ぼろぎれ、古漁網などを原料に紙をすくことを皇帝に報告したと百科辞典（ママ）には書いてある。時に紀元一〇五年それ以前は木竹帛に書かれた。石、金、甲に彫られたのは勿論、木管、竹簡などかさが高いし運ぶのも大変だったろうが、時代はそれを常識とした。それで

汗牛充棟という言葉もできた。処則充棟宇、出則汗牛馬（柳宗元・陸文通墓表）からきているのだそうだ。紙以前のことだという事を知らないと汗牛充棟はわからない。尤も死語である。こうした死語が今どれだけ多いだろう。先日の小倉のプールにおける夏季大会閉会式の時、県体協会長永倉三郎氏が「襦袢までびっしょり汗かいて」といったという話題が出た。八〇余歳の人のいうことなのである。

9 月 15 日（土）

ねたきり老人はいけない

先だって元駐日大使ライシャワーの尊厳死がニュースで流れた。きょうは敬老の日ということで関連の報道が身辺に多い。いのちながし（寿）はいいことだが、医術の結果としての高齢だとすれば再検討の余地が大いにある。テレビで痴呆症のことが報ぜられているし、今日の旧姫高文甲 2 のクラス会でもアルツハイマーを話題に出す者がいた。親が九〇何歳とか、どこにでも痴呆の例がある。もの忘れを感ずる私だが、脳の関係細胞が死滅していくのが原因らしい。常に刺激を与えるしか対応策はないという。見る、聞く、書く、運動するなどの刺激である。私が日記を書き出したのは忘れがひどいとの自覚からであるが、日記をつけるのも対策の一つであるらしい。それでもこの頃は忘れがひどい。痴呆への入口だときくと、がっくりくる。ねたきりというのが一番いけないらしく、介護者をつけても相手を求めるのがいいという。目的をもつことだ。ねたきりの人が多くて高齢長寿といっても医師がよろこぶだけなら、それ以上の長寿は無用だろう。

9 月 16 日（日）

雨が降る

大阪花博をみている途中でかなり雨が降って傘の列々。人垣を縫うように特別案内をえながらまわったが、それでも洋服はぬれ、靴も、水の中をジャブジャブ通ることになって、じっとりぬれてしまった。三時間も降ったろうか。琵琶湖の水位も給水制限の直前から脱したときく。いわば恵みの雨である。福岡も同様だと思う。この二、三日雷雨のようにふっている。長期天気予報のとおり、中旬まで降らなかったのに、まともな雨が降ってくれたわけだ。花博関係の花も木も雨に打たれてよろこんでいるように見えたが、管理に汗を流す人も同じくよろこんだに違いない。水、空気、光、温度など平常にあるべきものが欠けると人間はじめあらゆる生物が犠牲になる。そのような事を花博を見ながら考え直したみたわけだ。だけど日本人は目さきの利便を優先させて水の浪費につっぱしっている。いつか将来ひどい目にあうのではないか。オアシスの有難さを知るわけでなし。ましてや井戸掘りの苦労をなめるわけでない。過疎地の人達は都市の給水ストップの体験さえ祈っている。

9 月 17 日（月）

国交正常化のトゲ

九月二十四日に自民党と社会党の国会議員団がチャーター便で訪朝する。トップは金丸副総理で社会党は田辺書記長。日朝の国交がどう展開することになるかが占われるので注目される。東西緊張関係が変客しつつある中、朝鮮南北関係及びそれと日本のかかわりがとくに注目される。七年来の懸案である第十八富士山丸の紅粉船長、栗浦機関長の釈放がこんどの訪朝団によって決着づけられるだろうといわれる。そうした地ならしが出来ての金丸訪朝の実現といわれている。昨日大阪の花博のあと上京したのは栗浦氏出身の福岡県として訪朝団に改めてよろしくと伝えるためで、伊豆県議会副議長、浅井企画部長も陳情まわりに同行だった。外務省と議員団との間には見透しに小さな差はあるが、釈放実現を同じく認めている。川島審議官はこの問題は両国関係正常化のトゲだと表現したが、いいえて妙であると思う。又金日成の代がわりする前に解決しないとあとの保証はできないともいっていた。正常化にはまだまだ茨の道が待っている。

9 月 18 日（火）

ゴネ得

綿貫建設大臣が陳情に対する言葉として地元の努力を強調する――今日もそうだった。用地買収に手間どり、その経費がかさんでいる。地価が上る。建設費の多くが用地費に取られてしまう。「花見酒費」になってしまっては国費の効用が落ちてしまう。そういうことがないようにともいう。用地問題が早く、安く解決すれば（地元の一致と努力があれば）建設は早く効率的に進むというのである。「ゴネ得」というのがよくある。総論賛成でも各論反対になる。土木部長はいう。あの道路、地元の協力があったら十年早く出来ていたのに、と。そのような例はいくらでもある。近年は地価がぐっと高騰してきた。地権者は待ち構えている。手ばなすことを渋る。一人でもそういう人がいると事は進まない。「ボタンの掛け違い」ということになるとはじめからやり直しとそれに要する手数がぐっとふえる。誰がしたのかそういう社会体質ができている。農村より都市にそれが大きな影響をもつ。社会資本、「インフラ」に日本が立ちおくれているといわれる。大きな要因がそこにある。政治が作った体質だろう。

9 月 19 日（水）

自衛隊中東派遣の外圧

中東紛争がなかなか展望が開けないこの頃、日本の「貢献」策がアメリカあたりから強く求められ、資金だけでは満足されず、輸送手段、医療要員が派遣され、さらには自衛隊の派兵が問題になってきて、数日来それをめぐる政府、各党の対応、論議がにわかにかまびすしくなってきた。自衛隊員を身分をかえて派遣するとか、新法を作るとか、改憲までとび出すや

らで、騒がしくなってきた。現憲法で四〇余年やってきたのだが、自衛隊を作り、強力な武器をもたせるあたりまでは何とかなったが、海外派遣はまだ禁句である。何とか名目をつけたい、つけてやらないと国際的に孤立する。そういった外圧に抗しえないというのが今の自民党であり政府である。これはコメの自由化以上にきびしい外圧である。この外圧に耐え抜くのは至難の業なのかも知れない。私にいわせれば日本の社会が変身しないからである。経済強国だからである。弱ければ外圧はこない。弱くなることができないのであれば、開き直って武力に依存しないことを言明したらどうだろう。国は変わるだろう。覚悟して。

9 月 20 日（木）

子ども劇場

　輝け子どもたち

何を見ている　そのいっぱいの瞳
何をときめく　その小さな胸に
子どもたちの　輝きは
いのちの　　輝き

六時半からリーセントホテルで福岡県子ども劇場協議会の十周年を祝う会があり、配布されたリーフレットにこの詩が刷り込んであった。

今、この協議会は県下五十七劇場、四三、〇〇〇人の会員をもっている。一九六六年六月に福岡で誕生、全国で五六〇団体四九万人の会員にまでふくれ上っている。出発時十歳の子は三二歳になっている計算。子どもを包む環境は大人達によって年々心配の深みにはいっていくかにみえる。大人達が勝手に家庭、地域、学校を心配な方向に進め、子供を勝手な、定型的な未来へと導いている。子どもがもっている無限の可能性を勝手に摘み取っている。物余り社会だけれど子どもの前途は選択の自由が失われている。子ども劇場は失われた社会、自然、選択の自由を少しでも取りかえそうと努力する大人たちの集団である。

9 月 21 日（金）

「奥田は何もしない」

「財界九州」が次の知事選奥田では困るとの放談をのせている。先日の八幡民社の北橋と似たいい分である。何もしないから、というのがポイント。しないから欠点が見えない、しないのはダメとの筋である。だからここがいけないとの指摘はない。しかし私にいわせると、ほとんど毎日てんてこまいに知事なるが故に動いている。「何もしない」というのは架空の自己流設定である。「私のために何もしあに」というのならわかる。してやれない県民もまだ多かろうからである。「何もしない」はウソである。「誰彼のためにしたろうが私の為にには何もしてくれない」というのならわかる。「財界九州」はウソツキということになる。社党県議の白石、豊島が知事室に来て、八年間何をしたかをまとめたいので、事務側にポイントを並べてみてくれと私にいって帰った。何かを毎日のようにしているが北橋や「財界九州」のためにしたおぼえはない。彼らの害になるようなことをしたおぼえもない。ウソはいわぬ

方がいい。自分の立場が苦しくなるだけなんだから。共産党のように考えをぶつけてくる方がまだましだ。

9 月 22 日（土）
細谷治嘉氏の政界引退会
昨夜大牟田ガーデンホテルで開かれた細谷治嘉氏の引退パーティ。昭和三八年から今年二年六月まで二六年の衆院議員（九期）、その前に大牟田市長二期、これは四二歳から五〇歳まで、さらにその前に福岡県議二期八年、その前に三井化学労働組合長という経歴。政界だけで四二年、連続当選という記録である。勲一等受賞（ママ）というが、他の人のように公表して祝賀会をするようなことはしなかった。自治体問題、地方行財政にくわしく、私は大学時代から地方交付税のくわしい論文に何度も接したし、知事になってから自治省人事であれこれ世話になった。大正元年生まれで七八歳。最後の衆院出馬のとき七〇歳をこえてるというので社党内で問題になったが、元自治省事務次官が党にたっての願いで引退はもったいないと押したという。待っていた息子は後継のつもりが一期おくれたのでおだやかでないと。

9 月 23 日（日）
わが家の秋の庭
秋らしく肌にふれる空気もさわやかになったが、輝る太陽に身をさらすとまだ暑い。それで秋分、彼岸にふさわしいのであろう。日照りでまごついていた草花もやっと本来の生気をとりもどした感がある。裏庭に出て鉢物を整理してみた。平素放置しすぎている。国体の花は消毒しなかったので虫にいたみつつけられたが、半分は何とか育った。飾り物としても役立つまでになっている。藤の枝が又伸びている。年に三度も切らねばならないようだ。アロエは少しずつ食用に食べているが、殖育しようと思って分株しているが、二〇鉢余りになり、どれも根づいて成長している。虫はつかない。きれいに並べてみると、けっこう見られるものだと思った。バッタと蓑虫をなすがままにまかせていた。近頃の建築様式の新傾向に拙宅は全くおくれている。けれど今や庭をふくめ旧式のままで固執するしかない。変哲もないままだ。

9 月 24 日（月）
揮毫依頼
ずっと小雨が降り一日が暮れた。たくさん宿題の揮毫を消化することができた振替休日。しかし身辺あまりにも雑然としていて他に手の施しようもない。一寸書類を動かしていたら県庁の封筒からひとくくりの揮毫依頼書が出てきて驚ききわまる。見ると 1 年前のこの頃のもの、書いた記憶は残っていない。出来た作品は依頼紙と共に秘書室に届けているし、期待の期限がくれば事務的な催促もあるだろうから、残っていることに不思議を覚える。恐ら

く書かず催促もなくてそのままになって果てたのであろう。大変失礼なことになったろうし、催促のない事務側にも不平をいいたい。ないはずの事が起こっているといえる。揮毫依頼は私にとっては荷物には違いないが「よろこんで」引きうけている。遠慮の向きもあろうが頼まれることはむしろ光栄に思うのである。自分の書き物を見るのは好きではない。快心の出来というのが殆んどないからである。

9 月 25 日（火）
共産党との意見交換
夜、共産党の堀井さんほか役員、県議と山ノ上ホテルで意見交換会をもった。七年半の知事仕事の経過の中で当面問題となる諸点、即ち天皇問題、同和問題、非核問題、消費税問題及び政治倫理条例などが話題の焦点であった。私に要求されているのは、自民党などとの妥協が多すぎるので、思い切った言動をしてもいいのではないかということであった。議会に対する配慮が必要であることはわかるが、この時点に来たら、思い切りよくとの注文もあることは、私にもかえりみてよくわかる。しかし、実際は仏心仏顔が自分にとって一番楽な、安易な、中庸の道であることもわかってほしいように思える。共産党も次の統一地方選にらみであれこれ配慮があってそれ以上の追及は避けているように思える。今日の意見交換はそこに焦点があった。社会党が労働組合の「連合」寄り（反自民非共産）になっていることへの不満、せめて知事はそうならないでほしいといっていた。

9 月 26 日（水）
統一地方選への動き
西鉄労組大会挨拶。去年同様原鶴温泉だが、代議員たちの宿泊する夕食どき、ブロック別の会食の場を訪ね、林県議と一しょの短い挨拶まわりとなる。今年は次の統一地方選に向けて、組合側も候補を抱えて意識を集中させている点、昨年と異なる。私については、各会食場を案内する執行部から三選に向けてと明言するなど挨拶をきく側の見る目も違っていたようだ。尤も三期をにらみ構えるなど一口ももらした事はないのに、西鉄労組では決めてかかっている。今晩は、この雰囲気に私もおどらされているのを感じた。しかし、まだ何も決めてないし、決める条件もないと言いきかせているのは確かなのである。自民党の県本部では公、民両党を巻き込む姿勢で今候補者探しに動いて様子が報じられる。田中健蔵氏は再度固辞、それで山崎広太郎市会議長の名が出たり、緒方世記子の名をあげる向きもある。いずれにせよ十、十一月がリミットだといわれている。周りがこのように動くのは仕方がないことだ。県議選にむけては各区はもっと生々しく動いている。

9 月 27 日（木）
水への対応が弱い

十月一日付の「市政だより」が届き、水に関する記事があり、みて驚いた。異常少雨、異常気温について心配無用になっているかというとそうではない。九月二十日現在の貯水率は四五%、これは平年にくらべ一五%低い。三五%になったら渇水対策として水道圧力を下げねばならないという。節水を呼びかける記事だが、今年の少雨の異常さが数字で示されている。今年は梅雨明けから九月十七日までの降雨は六〇ミリで、大渇水といわれた昭和五十三年の一九七ミリの三〇%でしかない。これに対し、三〇度をこえた真夏日は七五日、熱帯夜五四日だと書いてある。この日記の九月一日にも関連することを書いたが、日本列島がどうにかなってしまうのではないかとすら思った時だった。あれから少しは降ったのにと思ったのに、この市政だよりの報道だ。まだまだ安心できないわけだ。議会の質問でも、水に関連するものがかなりある。もっと熱を入れて水問題に取り組まねばならぬことは明らか。水が余って洋々という表現が可能なのが最善。

9 月 28 日（金）

政治倫理条例制定に向けてスタート

公明党の井上寿昭氏が代表質問で公約をどう守るのかと指摘、答弁が気に入らぬということで再質問。一点は消費税、二点は知事公舎、三点は政治倫理条例。消費税導入反対運動したのかに対しては、していない。知事公舎は必要ないのかに対しては、一般論としては必要。政治倫理は今後対応を開始すると発言。随行の橋本氏はすごく簡潔でいい線がでたとの感想をもらしてくれた。政倫問題は「県議会の動向をみながら」と答えたのに対し、井上氏は、議会に尻をもってこないで自分でイニシアを取れ、場合によっては議会を解散するくらいの覚悟で事に当らないかとの再質問をしたのである。私にとっては渡りに船との気持であった。議会側も含め、検討委員会など作って動きはじめたら誰しも納得してくれるに違いない。与党の中でもこれは動きたくないと見られる人もあるほどである。再質問を引き金に動きはじめるということになったわけである。非核宣言の問題も似ている。十二月議会に向けて政倫問題に取り組みたい。

9 月 29 日（土）

トゲが抜かれた朝鮮との新関係

社会党本部を訪ね、金丸・田辺訪朝団の成果に敬意を表したのだが、その時応接室の壁に「山川異域、風月同天」の書がかかっていた。中国人の書らしい。今回の訪朝団は自社両代表であるが、日朝関係史に歴史的な一ページを記録する成果をあげたものである。政府レベルではなく、まさに政治の成果で政府間交流の行き詰まり状況に穴をあけた壮挙である。党の違いを乗りこえ、天を同じくする態度をとれたが故にそれができたのである。社会党では自民の金丸氏がよくやってくれたとほめていたが、社党の長い間の積み重ねと田辺氏の金丸氏への誘いがこの壮挙となったのである。金日成氏もよく受けてくれたものだ。朝鮮労働党と

自社三党の政治的努力協力の結果だが、八〇年のよくない歴史を変革することになったわけだ。しかし、明るい方向であるにせよ、将来に向けてのたくさんの課題を残したことは確かだ。「償い」という言葉に盛り込まれる中味は、そして南北の取扱いは等々、重く大きい。

9 月 30 日（日）
青年の船見直し論
県青年の船発足二〇周年式があって宗像ユリックスに行った。各年ごとの代表の集りで、表彰状授与のほか、それぞれ工夫して出し物をして一日楽しく過ごそうという発想である。事前研修など加えると船の中の十二日間と合わせて二〇日ほど費すのが「船」事業なので、参加できる人に限度がある。殊に施設農業の担い手たる若者だとよほど代われる人が背後にいない限り長期に家をあける事ができない。中小企業にも似た事情がある。だから「見直し」論がでてきているのだが、中止論ではなくてやり方にそれぞれの立場からの注文がついている。船内研修には形式至上主義への反撥もある。十万円近い自己負担だから同じ負担なら自由旅行をという人もいる。但しこれは「船」の人間養成の意義そのものに賛成しない主張である。ともかく現に「船」のあり方について県費一億三千万円の価値があるようにするにはどう見直すかが論議されている。

10 月要記
国体夏季大会がすんで正念場の秋季大会を迎える。県議会は波も立たず乗り切れるだろう。国体は極左が即位の礼、大嘗祭反対で、前哨戦として大会に臨席の天皇皇后をねらって過激な動きをするだろうとの予報が入っているから気にかかる。北海道の時の程度ならまだしももっと目立つと福岡国体は成功といえなくなる。夏季大会の時は「国体いらんばい」という幕をもった集団が、三～四〇人北九州のプール近くで一さわぎしたそうだが、警備側がすばやく対応してくれて表に見える形にならなかった。秋季大会には警備側がもっと神経を使うだろうから、一寸小ぜり合いになろうけれど何とか抑えられるのではないかと思う。事前の打合わせ作戦は相手以上に綿密にやっているので何とかなるはずである。ただ、入場券は市、町に自由入手の途を開いているのでそれをなくする手はない。会場で何かおこることは考えられるが、危険物や横断幕の類は持込ませないだろう。味方をえるための運動というよりは、自己満足の運動のように思えてならない。これなかりせば、県民一般は国体成功に向けて努力を傾けてきたのだからみのるはず。天気がよければいうことなし。
【「取材メモから　奥田支持へ時機待つ連合」（『日本経済新聞』1990 年 10 月 1 日）のコピー貼付】

10 月 1 日（月）
韓ソ国交も

国連本部で昨日（日本の今日未明）韓ソ間の国交樹立声明が行われ、朝刊のトップ記事になった。海部首相は「東西和解の動きが確実に朝鮮半島にも及んでいることを示すもので歴史的意味がある」とし、米政府当局も「歴史的な一日」「今後日本と北鮮の関係正常化も韓ソ関係の促進と連動して展開することを大いに期待したい」と評論したという。「一つの朝鮮」と修正したとされる金丸訪朝成果に即座に対応したものとの見方も生じている。新聞報道によると、日本経済界は日朝関係の新展開を冷い目で見ているし、外務省も今後を憂慮して渋い受け止めである。北鮮が日本経済界の輸出代金未払を大量に放置しているし、北鮮経済が行詰っているから冷戦を放棄するしかなくならんと解し、又「償い」で将来重い負担を強いられるとみているからである。重い負担や輸出入期待薄という面からだけで新展開を評価すべきではないのではないか。平和友好への努力とその事実がもたらすうるおいをこそ再認識すべきであろう。価値の置き方なのである。

10 月 2 日（火）

輿に乗る人の順序を逆にしてみる

本会議のあと杉山が来室。来年の知事選の屋台作りについて話題をもちかけたので、「仮の話」という前提で、私の胸のうちの構想をのべた。杉山が社党、県評センターから小田、山本の二人を呼び四人で話合う形となった。私が「仮に」ということで云ったのは、前二回と違い、選挙の輿とそれに乗る人の名乗りを逆にすればどうかということである。十一月中旬以降の早目に、立候補声明し、その候補の支持者、団体が集る。その際、政見公約は提げておく。集るのはその支持者である。支持者が集って輿の準備を急ぐ。支持者は相互に反撥し合わない。候補に個別政策注文があれば聞き入れる。組織の役員、責任者、経費負担などそこで決める。立候補声明は一にぎりの支持者の熱い要請によるという形をとる。以前のように、社、共、県評、学文による輿である「県民の会」を作り、それに乗る候補を決められた政策協定に賛同する適任者をあて輿に乗る形にするという形を逆にする。この考えは、福岡連合労組、共産党の問題を念頭にしたものである。杉山、小田、山本の三人は名案と思うといって別れた。

10 月 3 日（水）

統一ドイツのスタート

東西ドイツが統一された。西日本新聞夕刊は「マルク大国」が誕生という見出しつきで次のように書いている。「東西ドイツが三日、ついに統一された。第二次大戦後の四十五年間、国の分裂で冷戦時代を象徴してきたドイツは三日午前零時（日本時間午前八時）東ドイツが西ドイツに編入され消滅する形で平和裏に統一を果たした。これは欧州が東西対立時代に終わりを告げ新しい時代に一歩踏み出したことを意味する。統一ドイツは人口でも経済力でも欧州最大の強国としてスタートした」。昨年十一月まで「壁」によって分断されていたで

は統一ドイツ初代大統領、首相となったワイツゼッカー大統領、コール首相らが出席、旧帝国議会前の広場で記念式典が行われた。会場には十六州の旗がひるがえり、広場には市民数十万人が黒赤金の国旗や、たいまつをもって詰めかけた。大統領の統一宣言に割れるような拍手がおきた。ボンでも数万人、ハンブルグでも十万人余が祝賀集会を開いた。十六州から成る連邦共和国の誕生である。

10 月 4 日（木）

ドイツ統一と日朝問題

二日夜東ベルリンでは東ドイツ政府と人民議会の共催による公式のお別れ式典が開かれ、デメジエール首相が国民への最後の挨拶をした。統一と同時にコール西ドイツ政権が、十二月二日に実施される全ドイツ総選挙まで暫定的に代表することになる。西ドイツ連邦議会には東ドイツ人民議会の議員四〇〇人のうち一四四人が新たに加わり、東ドイツ側デメジエール前首相ら五人が無任所大臣としてコール政権に参加する。四日にベルリンの旧帝国議会に初の本会議が招集され、コール首相が施政方針演説をする。こうして東西ドイツは一体となったが、アジアでは朝鮮の南北、そして台湾の問題が残る――というか、これから問題になる。金丸訪朝団は先月二十八日帰国、第 18 富士山丸問題も今月十一日二人の帰国でケリがつくとしても、いわゆる「償い」の実践で日朝間に、また自民党、経済界、まるめて政府内に、外務省はもちろん、新しい波紋がおこるわけである。ドイツ統一が問題解決のインパクトになってくれるか。

10 月 5 日（金）

記録魔

なぜこんなに日がたつのが早いのだろう。手帳のブランクが思わずつづく。ムキになってそれを埋める。ある意味では記録魔というべきなのか。手帳には要点的に行動を列挙するだけなのに、三～四日分のブランクがすぐできてしまう。日記は何とか追っている。考えない、躊躇しない。誤字があるかも知れないし、文脈がおかしいのかも知れない。又その日にもっと書くべき事があったかも知れない。だのに、ボーと脳裏に浮んだことを書く。別の日記には行動をおさらえするように書いて、二冊、ポンと書斎の定位置におく。時に過去をふりかえることがある。そんな時、書いておいてよかったと思う。もちろん主観にすぎない。それもうたかたのような主観である。毎日がつまっていて書くのに念を入れる時間がない。だが時間が毎日とれたとしたら書くこともなく、書きもしないだろう。休みがちょっと続いて在宅ばかりしていたら書かなくなってしまうに違いない。記録魔というか、意地みたいに書くのはむしろ多忙のせいだ。

10 月 6 日（土）

要介護老人問題

県議会では高齢者対策が数人から提起された。介護手当とか介護休暇、ホームヘルパー、対策公社の設立などである。県では昨年七月に「すこやかライフ推進プラン（福岡県高齢化社会行動計画）」なるものを作って、考え方の大綱は示しているが、なかなか具体的には動いていない。市町村が在宅サービスを、というのが基本になっているが、その市町村がなかなか鈍い。ほんとうは大変なのである。要介護老人（ひとり暮しとか寝たきりとか痴呆性疾患の人）は手がかかる、カネがかかる、神経を使う。市町村はそれをいやがる。近所の人がいてくれると少しはいいが、都会のビルの中では近所の人というわけにはいかない。配偶者、嫁など、くたくたになっている。介護で休んだらその手当を出してくれというが休暇は認めてもそれ以上のことはできないのが職場の実態。デイサービス、ホームケア、ショートステイなどいろいろ知恵はあるが、人材と資金が伴わない。県に何とかせよといわれるが、市町村が悲鳴をあげるまでに傾斜してほしい。

10 月 7 日（日）

揮毫のあとで

揮毫を頼まれると色紙や条幅、数が多くてもほとんど、同じ言葉でなく変えて書く。そして老少、男女、わかるようなら別々に。結婚祝は県庁で形式化されているのだが、結婚祝らしいものを選んで書く。「墨場必携」など平素気がついたものを便箋に書き写して選択肢を沢山準備しておく。ほとんどそれで間に合う。文字を注文してくる人があればそれが一番よい。所で、書いて渡すとき読み方、概意を付け加えるのだが、後で出所は何だったかきいてくるのが時にある。その対応が一寸骨折れるし、明解に答えられないのがあって困ることがある。同文を書かないとむしろ自分が満足できるわけだ。以前農協中央から頼まれ、各農協別々に二〇枚の扁額用条幅を書いたが、その地域の個性が少しでも表現できる句を選定するのに苦心した。が我ながら満足できた。意味を改めて賞味することも少くない。出来はよくなくても、書く楽しみがそこにある。

10 月 8 日（月）

ジャンプの瞬間

北京でのアジア大会金メダリスト佐藤恵女史が帰国報告に来訪。ハイジャンプで一・九四メートルを記録。もう一寸記録を伸ばしたかったが優勝と決まった瞬間に気が緩んだと思うと話していた。助走二五メートルといっていたが、三～四秒の勝負である。コーチの方もみえていた。彼は八〇歳に近い。耳も遠くなっているが、彼女の挑んでいる姿を見て（テレビにうつる時も）アドヴァイスを的確にするといわれる。孫みたいなもんだといっていた。目の鋭さに敬服する。コーチがいてくれるので、と彼女もいっていた。三～四秒の勝負、息が

詰まる思いである。動物でも一般にそうだろう。とくに人間には瞬間的な極限の自己発揮を要する場面がある。ピークに耐えられるのでなくてはならない。もちろんピークは平常ではない。ピーク極限に耐えうる平常が必要だろうといいたいのである。目をとじてその事を考えると、何とすばらしく美しいことだろうと思う。それができるならあとはおだやかでゆったりでありたい。挑む気持の大切さを感じさせられた今日だった。

10 月 9 日（火）

両筑土地改良区の水問題

甘木朝倉、小郡の県議三人が地元農業者（両筑土地改良区）の人々を伴い陳情にみえた。江川ダムの上流に予定されている小石原川ダムについて、分担金を払わないで水を分けてほしいという趣旨である。一見虫のいい話のようだが、農業者にとっては深刻らしい。今年のような少雨だと、地下水を求めて深井戸を掘るやらポンプ揚水をするやらで、水のためにかなりの出費をしている。昔のような水げんかは今は考えられない。又寺内、江川両ダムの建設以来、この地下水覆流水の水位が五〇センチも一メートルも下がったという事実があるといわれる。ダムで川水が流れなくなくなったのが原因と推定されている。ダムの水は福岡市の水道水にもっていかれ地元の灌漑には使われないとの主張である。小石原川ダムの建設が今計画されているが建設費の一部を地元の用水の割に応じて出せといわれても減反や米価引下げで出せる農家はないという。ポンプ揚水で苦労してきたからなおさらのようだ。陳情は建設省農水省レベルで検討される。

10 月 10 日（水）

秋を感ずる

九月上旬までつづいた暑さがウソみたいに今日はむしろ寒さを感ずる。ヴェストを出して上に着た。廊下の温度は一九度でいうほど寒くないはずだのに冷えこんだ感じ。表の進入通路の芝をはさみで刈ったが切れ味が悪くて手が傷んだ。なぜこんなことをしなくてはならないのか、どうして自己命令したのか合点がいかない。何の役に立つのか自分でわからない。しなくても済むし、しても効用の程に自信があるわけではない。化粧になったとも思えない。自己満足にすぎないであろう。アロエを生でかじり出してから一年以上たつが効用の程には確信がもてない。株分けしたのが二〇鉢余りどんどん大きくなっていく。ジカに食べているがアエロの成長の方が速いように思う。今はどれもが美事に成長している。効用はわからないが、今日もアロエの本を出してみると、生で
食べてよいと書いてあるから今後もつづける積りである。ただ、近頃血圧が少々高めに出るのでアエロのせいかと心配している。警戒しながらつづけてみようと思う。

10 月 11 日（木）

第 18 富士山丸の二人帰国

九月県議会が順調で今日本会議議了。第一八富士山丸の栗浦さん、紅粉さん二人が羽田に七年ぶり帰還。県人事委の報告、勧告があるなど、今日もあわただしい一日だった。その上、団体の入場券個人関係分の配分連絡電話をするなど夜もあわただしく過ぎた。明日から臨時国会が開かれるからこれ又大事がつづく。北鮮との国交正常化のトップをきって 18 富士山丸問題が解決した。向うでは立国祝賀の特赦という扱いのようだ。これからの「正常化」については北鮮側も、日本国会・政府も、韓国との関係をにらみながら、表情は硬い。つまりこれまでの建前、韓国の存在を強く意識せざるをえないわけだ。金丸氏ら訪朝団がいとぐちを切り開いたものの、これからがむしろ正念場というべきだろう。国会がどう受けとめ政府がどう対応する積りか、北鮮がどの条件で OK か、まだまだ未知数が多すぎる。でもともかく二人の特赦、釈放が実現したことは先ずもっていい方向へふみ出したことだけは確かである。「償い」の大きさ範囲、今後の交流、航空直行便、「一つの朝鮮」問題など今後どう展開するか。

10 月 12 日（金）

旗振り役がいない

四時県評センターの幹部が来訪、三期をめざしての知事選出馬要請をうけた。団体として公式の要請ははじめて。考える時間を貸してほしいと明言回避をした。他方今日は自民党地方議員団の有志の間から、知事選候補に福岡市議会議長山崎広太郎を推す声が浮上してにぎわっている。当方では県評センターが動いているものの、「学文連」の一部幹部からは県評センターが「県民の会」という過去二回の経緯を無視して動いているとの非難文を県民の会、社会党、共産党、県評センター宛に、要請書という形で発表した。署名者は上欄のとおり。夜山ノ上ホテルで杉山氏立会のもと大屋、徳本の両氏と夕食しながら知事選情勢を話合ったが、大屋氏はこの要請書は当然という。ただ、これが自民党にわかったら、当方の連中が四分五裂なっていることが明らかになるだろうと私は思った。「三選」めざして、とひとはいうが、乗る輿、船、はできてない、というか過去の輿、船は名ばかりで何の統一性もない。心棒というか、旗振りというか、まとめ役がいないのが実態。県評と学文連代表がまず話合うべきだということになった。

【欄外記入】

具島兼三郎
石村善治
牛島春子
内田一郎
内田茂雄

高木菫子
土井仙吉
西井龍生

10 月 13 日（土）
高校教育現場の荒廃
二時頃から高教組の有志と教研講師団と教育文化懇話会の一時をすごした。県教委から私立高校にくらべ公立の地位低下がある、中退者問題、特色ある学校づくり、教員の意欲と活力の四点が呈示されている今日、これを組合側はどう受けとめるかということが話題に上っていた。管理教育と教師の自由・自己のなさが問題の中心になっているのではないかと私は主張した。型にはまった受験教育、教師の抵抗に限度があり、投げやりになっている風潮。生徒は自分を見失って中退者がかなり多い。教育が子供をよろこばせるのでなく、嫌にならせる場になっている。喜々として学校に行くのでなくてはならない。実業高校の例では四分の一が学校に来なくなってしまっているといわれる。休んでアルバイトし、カネを手に入れ好きなことをした方がいいという。親はこの子らをコントロールできない。教師にまかされても手の届かぬ所で自在にやっている。ともかく教育現場は荒頽廃ということのようだ。

10 月 14 日（日）
さわやか子供
一彦の誕生日だから朝出発前に祝意の電話をかけた。もう四四歳になるわけだ。昨日の高教組のメンバーとの話し合いの時、中学二～三年、高校の一年ぐらいが問題の年齢。一彦のところでは麗衣がその頃にあたるので、電話の中でそれにふれたが、家族四人のうち彼女だけがいないようだった。全く心配なしということはなかろうが、それほど手をやかすことはないようだ。日曜というのに朝から塾にでも行ったのであろうか。私からはといたださなかった。反抗期という言葉もあてはまる。今日のプレ国体についても詰め込み演技練習の中で、この年齢期の子がやはり、粒そろいになりにくいということであった。大人と子供のはざまにある若人である。自覚なり自信を早くもつように周囲のめくばりが必要だろう。又甘やかしてはいけない。放任もいけない。善導しかないと思う。今日は東平尾の陸上競技場でプレ国体、集団演技で、小、中、高生が四五〇〇人ほど立派に課題を課してくれた。子供の演技はいつみても、さわやかさを感じさせてくれて心なごむ。こうして成長してほしい。

10 月 15 日（月）
宗家古文書研究
いわゆる三県サミット。事務側にだけまかせられないが、その直前に了解だけは得ておいて、私は準備事務抜きで対馬の宗家文書の研究を話題にのぼせた。丁度、予定議題のトップにあ

った三県共同の日韓交流にあわせることができ、唐突ながら OK となり、記者会見の目玉にもなった。日韓外相会議でも「二十一世紀日韓誠信交流事業」の合意があったばかりであるし、三県がその具体化のトップを切るという形にまとめえたのが大変よかった。その誠信交流事業の具体化ということで対馬宗家文書の研究を国に要請していくというのである。こうした取りまとめになろうとは事務側も予測してなかったろうが、うまくはまり込み、目玉合意となったのである。二〇年前、九大教養部で中村正夫氏の紹介で宗家文書の存在、利用の困難性を現に見知っていたので、それが今回このような形で政治課題にのぼせることができたわけ。九州国博（太宰府）、考古学研究所（吉野ガ里）、それに加えて宗家文書研究（対馬）となると、三県ひとしく国レベル事業の要請となるわけだ。

【欄外記入】

誠意・信義）の交流　　武力交渉ではない
雨森芳州（ママ）

10 月 16 日（火）

対馬の再自覚

昨日の宗家文書に関する提案は西日本新聞がトップ記事としてうまく説明してくれていた。高田知事ら長崎県スタッフも満足できたろうし、とりわけ対馬の人達、厳原町長らはよろこんでくれたようだ。宗家は一五世紀以来三八〇年間対馬で君臨し、鎖国時代にあっても長崎と並んで、とくに李朝との交易の重要な窓口であった。釜山には対馬の「出島」倭館もおかれていたという。元寇の時にどうあったのか、昨夜は宴会の席の出しものに子供達の蒙古太鼓があった。白石一郎氏の海狼伝には大陸貿易の中継地対馬が、海賊の根拠地となっている。和寇の話もあろう。私は両県知事に宗像大社、沖の島の図録を今回配布したが、位置は違うとしても対馬にも両海峡をはさむ秘話が少くないはずである。今の対馬の人は日韓交流といっても、対馬は素通りになると歎いている。私は必ずしもそうではなく、昔からの中継地的役割をもつべく自覚すればできることがいくらでもあるのではないか、二十一世紀に向けて希望がもてるはず、と町長さん達にいっておいた。

10 月 17 日（水）

母子・寡婦福祉

大手門会館で母子寡婦福祉協の四〇周年大会があったが、その趣旨に疑問というよりは、運動の楫取りに一段と工夫を要するのではないかと思う。戦争未亡人の運動がそのスタートにある団体である。もう未亡人という言葉は使われない。何が運動の主体なのか、どう運動するのかの目標が定かでない。母子問題に加えて近頃は父子問題もあり寡婦というのも問題性のアピールに乏しい。近頃女も強くなって離婚も平気、それを寡婦という問題意識でみる時代ではなくなっている。この世界に注目したことがないのでよくわからないが、子供が

成長していくと母子問題から「卒業」するはず。交通問題、労災などで新規に対象者はでてくるかも知れないが、四〇年もたっている間に、卒業者もたくさん出たはずである。「さよなら」「バイバイ」という組織なのか、新規加入頼むという人がいるのか、私にはよく見えない。全国レベルの組織もあるだろうに、どうなっているのか。ききたいのに、根掘り葉掘りきくわけにもいかない。どうもピントがあわない対象である。

10 月 18 日（木）

政治の岐路・騒然

政治問題、だんだん騒々しくなってきた。第一に平和協力法、第二は即位の礼と大嘗祭、第三は南北朝鮮と日本など、賛否両極に分れて世の中騒然。国内だけでなく、第一の問題ではアジア各国民も日本国内、国会の動きを注視している。日本国憲法はゆがめられている。限りなく蹂躙がつづく可能性がある。歯止めがきかなくなり、アジアへの再侵略の心配さえあるという声が出る。日本はすでに軍事大国で海外派兵するなら戦闘しないという保証はなくなる。今国会で決着させるような問題でないから総選挙で民意を問えといった声。ズルズル軍国主義の悪夢の方向を歩みはじめたと心配するのが当然だろう。昨日海外派兵に反対する九州緊急ネットワーク市民団体が福岡で結成された。即位の礼・大嘗祭についても奉祝派、反対派がそれぞれに団体運動を活潑化させてきた。とくに天皇皇后を迎える福岡では、この二十日以降の数日、かなり波風が立ちそうだ。奉祝派は三九都道府県で大会、パレード、反対派は二六都道府県で集会といわれるが、さらに増えそうだ。何だか政治の岐路にたたされている日本といえそうだ。

10 月 19 日（金）

健康への関心

帰福後すぐ登庁したが、明日にそなえて清掃や部屋椅子の配置など終っていて緊迫感があった。人間の気持は周辺の事情に大きく左右されるものだということが改めてわかった。やり直しができないことだからなお新たな緊張感を覚えるのである。それにしても体の方の調子は大丈夫だろうか。睡眠にまだ懸念が残る。機内でもすごく眠い。昨夜は十分ねたと思うのに、眠いのは服用薬の残作用かも知れない。それならその程度のことかと思うのだが、肩の痛みや頭の重さがやはり抜けていない。睡眠不足と感ずる時に肩の痛みが連動しているようにも思える。いずれにせよ明日から一週間は緊張の連続だし、ニューオータニに三泊することになる。近いから帰宅しようと思っていたのだが、両陛下が泊られるのだから、一しょにいてほしいと秘書室が強く主張する。それも一理あると思って三泊は覚悟した。夜の時間も拘束されたものになるわけだ。午後来福の京都の安田氏と合ったが、彼は呉々も眠るよう努力してほしいという。伊賀定盛（元衆院議員兵庫五区）の遺族から便りが来た。追悼式案内だ。同じ年なのに。

10 月 20 日（土）

知りたい、と知られたくない

六時からのホテルでの記者会見の時、目黒侍従はなかなか具体的に答えなかった。記者側は両陛下の行幸啓につきできるだけポピュラーな面をきき取りたがっての質問をする。随行していてあれこれわかるだろうから、それを教えてくれ知らせてくれという。でも適確な「ネタ」になるような答がえられないので記者はムズムズするわけだ。カメラを向けるのも、宮内庁が公表するようなポーズでないのが欲しいのと同様である。極端にいうと「フォーカスする」ようなのがほしいわけだ。福岡までの機内で（特別機）どういうところに空からの興味をもたれたかといったように。皇后の誕生日なので皇太子から花束が届けられたというが、どういう花束だったのかとの問に、侍従は口をにごしてしまって明らかにいわない。問う方が無理なのか答えないのがいけないのか、その辺が今様の一つの問題である。秋篠宮夫妻の新聞発表ポーズが、宮内庁として出すべきでないのが出てしまったという近い例がある。一般国民にはかえって人気があるのに、出す側には問題ありとされた。今日の記者会見でも、知りたい＝知らせられぬ･･･の綱引きがあった。

10 月 21 日（日）

国体開会式事なく終る

いよいよその日が来たというか、午後東平尾博多の森陸上競技場で第 45 回国体秋季大会開会式である。私の出番は開会宣言と国体旗引継、とくに前者に気がかり。あとできいてみると声も大きくうまくいったとのこと。式後の集団演技は小、中、高の若者たちが美事な演技を披露してくれ、他県から来た人達を感心させ、万事よし、という出来であった。ただ事前に心配していた妨害行為をする者が若干あった。開式のときの君が代日の丸、陛下のお言葉の局面、ヤジの声である。またあとできいたのだが、終ってホテルに帰る車列に、競技場をでたところの曲り角へんで車道に飛び出して横幕を開こうとした者がいて警備当局から抑えられるというハプニングあったらしい。ホテルで七時から行われた記者会見のとき、これらの妨害行為をどう思うか、警備側に知事として何か申入れるかとか執拗な質問があった。「責任ある」のにと反問する記者もいた。何か為にする質問のように思えた。ありうることだし、トラブルとか支障という程のものでなかったのに、ケチをつけようとしているように思える。

10 月 22 日（月）

記者がまとめた開会式の一局面

国体開会式を新聞は次のように報じている（朝日）――福岡市東平尾公園博多の森陸上競技場を訪れた六万二千人を迎えたのは鮮かな色彩の競演だった。開会式を彩る集団演技では前半と後半を合わせて計一万人が延べ一時間半、衣装や布、パネルを駆使して紫、赤、黄、

オレンジなど色彩の変化を演出。スタンドを埋めた観衆から盛んな拍手がわいた。競技場入口に設けられたシンボル花壇も人気を集めた。高さ 4m、幅 8m にたてかけた花壇にマリンゴールド、ベコニヤ、サルビヤなど四千本の花を敷きつめてある。公園敷地内には三千八百個のプランターが置かれ、花を前に記念写真を撮る光景も。「好天にも恵れて色彩が一段と映え、開会式は大成功」と県の式典関係者を喜ばせた。･･･福岡県が招待した県出身の外国移住者一八二人も、故郷で繰り広げられるスポーツの祭典に盛んな声援を送った。一行は米国やブラジル、コロンビヤなど九ヵ国一七県人会･･･入場行進の最後を飾って県選手団（九四四人）が入場してくると移住者は総立ちになり、大きな拍手を送っていた。（花火が美しかったという声も）

10 月 23 日（火）

国連平和協力派兵の問題性

国体開会式にこられた両陛下を空港に見送って早目に帰宅したが同時に岩崎（隆）氏がやって来て知事選に話が及び、学文の会、県民の会の不統一を強調していた。次は出馬しなくてもいいじゃないかと私に言った。状況不安定という点でも意見は一致した。が、結論は先送りということでも一致した。国連平和協力法案も話題に出た。「一つの武器」とはいえ、これをまとめる人がいないことも共通認識。明日は戦後国連が発足して四五年目になるという。その後十一年して日本が加盟。湾岸危機は国連の試練でもある。今日から衆院国連平和協力特別委の審議が始まる。日本がこの危機を解決するに役立つ方法として自衛隊の中東への派兵が提起されているが、国会内部で論議紛糾は必至。岐路という言葉があてはまる国の行方。知事選にもってこいのテーマと岩崎はいう。大坪もいう。でも清潔な県政とか売上税といった過去二回の選挙と違い、この中東自衛隊派兵は大きすぎる。保守の多くが派兵に反対といっても、これをまとめる求心力と知事選争点とはケタが違う。

10 月 24 日（水）

体調あちこちに心配

またまた眠れぬ日がつづいている。夜中にトイレに起きる回数が一度ではすまなくなっているのだが、因果関係はどうなのか。三日間ニューオータニに泊まった二十日以降だが、とくにプレッシャーがかかったとは思えないのに夢ばかりの三泊だった。今日の検診では眠りが浅い証拠だといわれた。疲れていることになるのであろう。十一時頃だったが血糖二二六、尿糖プラス三と出た。血圧は一時高かったのにここ数日おちつき一二〇と七〇台で心配は薄らいだ。点滴の時間中眠っていてその直後の血圧計だからかも知れない。眠れないのでこんな時間には眠ってしまうことになる。車の中でも執務中でも眠いことが多い。体調の悪いもう一点は筋肉痛。右太ももと右前肢。前者には原因らしいものがわからない。後者は八月下旬の全国県会議員野球大会の試球式に出て以降それが原因らしい。ピリピリ痛む足が

気になる。外用消炎剤をもらって貼っているが、効果があるように思える。不眠症のためと思うが、頭のさえは依然よくない。重いわけだ。

10 月 25 日（木）
中食をどうすませるか
秘書室の女性が中食の用意をしてくれることが多い。あげ膳さげ膳になる。外ですませてしまう事も、外に食べに出る事もある。きいてみると、あげ膳さげ膳が一番気をもませる秘書室の仕事だそうだ。何にしてくれと注文するならいいが、考えさせられるのがつらいという。でも私は注文するタイプではない。さげ膳の時に、おいしかったか知らというので、強く肯定する。食欲は常にあり食餌の内容にこだわらない。しかし彼女たちは内容にこだわってくれた方がやり易いというのである。病院にかかりきりの身でありながら何時も食事がおいしい。でも彼女たちはその事ではなく、食餌のメニューの選択に限定がある方がいい。そのくいちがいをもっと意識した方がいいと思う。だから一時間でも取って外にでかけてすませるのが一番いいようだ。地下の食堂でもいい、議会棟でもいい、出かけてすませるのがいいようだ。今後はそのことを考えよう。でもお伴がいるのだから、それにも若干の制限がある。食べることすら容易でない。

10 月 26 日（金）
国体秋季大会終る
小雨ふり風吹いて予期せぬ冷い国体閉会式であった。が、期待された通り県勢の優勝になったし、来客にも県のよさを知ってもらえる国体運営ができ、有難いことだったというほかはなかった。次期担当の石川県知事がさかんに、福岡のまねはとてもできませんといっていたが、遠慮半分としても、県民の努力が大きくみのったことに間違いない。あとはこの成果を将来に向けてどう発展させるかにかかっているだろう。つまり、蒔いた種だから、今後どう育て収穫するかであろう。俗にいうスポーツ振興と県内地域活性化の連動の努力であろう。集団演技が褒められているが、その企画力は大したものだと私も思った。実演した子供達、指導した先生たちもよくやってくれた。競技開催地の各市町でも同じことがいえる成果だったと思う。この福岡会場を飾ってくれた裏方さん達も、ボランティアの人達も心をこめてやってくれていた。終ったあとスタンド入口周辺の飾花をみたが大した努力の跡がみえた。工夫、努力、誠意がいたるところで感じられ、人の和の威力に打たれたフィナーレであった。

10 月 27 日（土）
松友会に参加する
全く秋めいて、長かった夏日がウソのように思える。昨日の秋季大会閉会式は小雨と風で冷たさが増し、朝のうち会場から寒いのでとの連絡で、秘書室は厚めの、半袖に代わる、下着

を買ってもって来てくれたので助かった。風邪でもひいたら大変と考えてくれたからだが、会場のすみでそれを着加(ママ)えて、ようやく助かった思いである。今日も雲天で冷えている。中食を兼ねて福大セミナーハウスで教養部の松友会があり三〇余人が集った。この種集会には来ない人も来る人も特別の事情がない限りほぼ決まっているようだ。その人の気象、気性によるのだろう。毎年のことながら、今年は土曜閉庁の日があたって出席に細工はいらなかった。村瀬氏にも中村正夫氏にも硯の話題を投げかけた。村瀬は父の使った硯だといって丸い蓋の付っいたのを私に贈ってくれ今も使用している。中村氏は若田硯についてだが、彼が対馬について宗家文書を中心にこまかい見分をもっているのに改めて感心した。松友会は細々と OB の集まりとしてつづいている。

【欄外記入】

松友会は、九大教養部 OB 会。私が教養部長の時に組織したもので十数年つづいていよう

10 月 28 日（日）

ナツメロ

身スポ大会のリハーサルが終って市の社会福祉会館で行われているナツメロの会に出てみた。第八回というがはじめてである。案内は長沢定夫氏からいつももらっているが何か支障があって行けなかった。高齢者がナツメロに親しむのは、ボケ予防にも効果があるといわれる。長沢さんはテープに吹きこんだのを四本ぐらい届けてくれているが、まだきけないままだった。子供のとき、若いとき耳にしたメロディではあるが歌詩は定かならぬものが多い。メロディも我流といえるほどいい加減である。又、今日きいたものも半分は全く接した経験のないものがあった。もちろん自分自身のこの世界での縁の薄さも根底にある。現時点で人々に親しまれている歌などさっぱり知らないのだから。でも察するに、今のはうわっ調子、昔のは心にずしんとくる違いがあるんだろう。歌詩も曲も文字どおりナツメロであると思う。古いといわれるだろうが、そうなんだ。もう少し時間を作って時に口ずさんでみたい。あの歌この歌を。

10 月 29 日（月）

青少年問題対策

青少年問題協議会の専門委員（長は安藤延男氏）が、今年はじめ以来審議をかさねて作成した健全育成についての知事宛意見具申案を協議会で決定した。これにもとずき(ママ)行動計画総合計画が作定されることになる。今日の意見具申では三層システムによる指導体制が強調されているのが特徴であった。即ち小学校単位ぐらいが第一層、そのグループ地域組織が第二層、県全体をおおうのが第三層ということになる。問題は行政と民間がこれにどうかかわるの具体策である。専門委や青少年対策課では行政のタテ割りの弊を強く指摘し、横つなぎの独立して大きな権限をもつ組織を作りたいようだ。今の県の対策本部は知事部局、教育委

員会、警察本部の三者構成であるが、県下末端までの指導をとてもやれない、むしろ形だけのものでしかない。しかし独立の横つなぎ機構といっても、かんたんには作れるものではい。まずは三者の協議から入るしかないであろう。

10 月 30 日（火）
戦後の基本筋を通せ
火曜日で定例記者会見。国体がすんだらと前にいっていたので、今日は案の定、次期知事選出馬について質問された。周辺の状況がみえないのでといいたのだが、「まだ決意しかねるあとしばらく時間をかしてほしい」と答えた。他方飯塚会館での自治労県本部大会での祝辞の中では、国連平和協力法案についてふれた。一部の記者からはそれをきいてなかったので、との理由で何をいったのか、と追及されもした。事務側は何故今時この問題にふれたのかといいたげであった。右の二つはタブー、口をつむぐべしという無難論が事務の中での空気であり、秘書室は若干あわて気味にみえる。知事選については記者達も連合路線が定まらぬという状況を知っていて、それなりに報道しよう。国連平和協力法案については意見を出さぬ知事が多い中で珍しく発言したということで報道するに違いない。にわかに騒がしくなりそうだ。国際的に頑固といわれようと「協力」しないとの筋を通すのが今求められている日本の選択肢であると思う。

10 月 31 日（水）
ヤマハ JOC 演奏をきいて
ここ二週間ほど過密のスケジュールがつづく。体力がもつか否か自信がない。やってみるしかないと思っている。午後は阿蘇プリンスホテルへ。九州地方知事会だが、今日の日程は九経連役員との意見交換の場。夕食前のヤマハ JOC メンバーの自分で作曲演奏の四十分間が感動的だった。九歳から十三歳の女子がピアノ、エレクローンを独奏する。四人のうち二人福岡、二人熊本の子である。知事会意見交換会関係者数十人の前での熱演に、興奮の渦が沸いた。演奏者は子供、燃えに燃えた力演、たいしたもんだと、みんな感心した。子供の時からこうした挑戦の鍛錬をへてきたなら、それが将来のかけがえのない財産になるに違いない。物余りの時代に、このような鍛錬に耐え抜いている人がいることに改めて感動させられた。何かに打ち込む子供時代を、親が作り出してやらねばならないし、その芽を親が見出してやらなければならない。この子たちは学校行きの傍ら外国への演奏旅行をすることもあるときく。時代が大きく変わっている。平和だからこそそれができる。そんな思いが頻り。

11 月要記
第二六回身スポ大会が三・四の二日開催される。皇太子来福など、その前日からびったりはりつけられた日程の消化。七〇歳誕生祝というけれど十月中にすませ、秘書室からは大きな

地球儀を祝ってもらってすぎた。あとすぐに新潟、シンガポールの日程がつづき、行事が先送りされた分だけあとの日程に押し入った感じ。十二月議会の準備、さらには次期知事選への出馬にどう対応するか決めなくてはならない。そのため要人には合って意見をきかねばならない。県議の方はもうかなりそわそわしているように見える。一そう深刻な人もある。
十二日には即位の礼、十三日は饗宴の儀、二十三日は大嘗祭となる。
大嘗祭は「政教分離」云々の論議があって欠席する知事もある模様で他県をにらみながら欠席することになった。深夜の儀式に出席させられると昨年の大喪を思い出すが、カラダがもつまいと思っていたのでまずはよかった。労働戦線の変化により共産党や右の組合との噛み合いがぴったりこないので、知事選の構え方が容易でない。

11 月 1 日（木）
心従
七十而心従所欲不踰蚯という論語為政篇の語句を秘書室職員の祝意に対する感想として披露した。古稀という時代ではなくなって心従という方が気持に合うこの頃である。みんな祝ってくれてうれしいが、近来男でも寿命は七五をこえている。決して稀といえない。しかし、心従というにふさわしいように、万事和平に応対できるようにしたいものだ。親兄弟の中で私が一番長生きしていることになる。何か気が合致してここまでたどりつくことができたのであろう。有難いというしかないが、今日の検診の結果も楽観を許さない。熊本から帰って検診のあと登庁したとき、県職労の大会挨拶録画のとき、組合側からの質問の中に三期目への挑戦の条件の中で健康上の心配があるかときかれたが図星を衝いたものといえる。徐々に衰えていくという表現がよいと思うが記憶力をはじめ、あらゆる側面で衰えが進行しているとの自覚がある。一彦、啓二から祝意電話があったが、どう思っているか想像がつかない。複雑だろうな。来年は佐方の母の米寿祝賀会をすべく心準備をしていると伝えておいた、

11 月 2 日（金）
複雑な、いいのか悪いのかわかりにくい世の中
身スポに来福の皇太子を空港に出迎える。福岡聾学校に案内し、幼稚園から高校までの障害者教育の一端現場をはじめて私は見て複雑な思いがした。みんな真剣に生きようとしている。先生が粉骨砕身その教育にあたっている様に感動させられた。社会福祉概要の説明のあと皇太子から「障害の重度化、重複化、さらに高齢化」について質問をうけ、そのことにふれると記者会見においても質問をうけた。県だけのことではなくて全国的傾向なのであるが、なぜに重度化、重複化なのか、ときかれるとあれこれ理由がつけられ、今日のポイントだなと思った次第である。人権意識の発達、医術、医薬の裏面、それに今日の交通事故、家族紐帯意識などさまざまな側面から述べることができる。夕食会の時、厚生大臣から絶対平

和論もきかされた。戦争体験からでている。国連平和協力論議も沸騰している今、戦争をからめると妙な思いがする。それにしても昨日の記述との関連で、俺はあと何年ももたないぞと思うようになってきた。

11 月 3 日（土）

あと一歩

第二六回身スポその日がやって来た。すごく多忙な周辺だからあわただしくこの日になり、この日が暮れたといってよい。国体は九割以上消化できたといってよい。あと明日だけと物理的にいえるが、その一日が一番用心せねばならないだろう。がともかくここまで来たという思い。やれやれである。記者の側から問題提起があっている。皇太子がもう少し県民、選手たちに、ゆっくり接してもらえる時間がとれないかというのである。きめられた日程の中で容易にプラスの返事ができない。知事（大会々長）の責任とまでいいたいような不満がぶつけられる。皇室との接点がもっと欲しいのであろう。だけれども、一度セキが切れたら洪水のように収集がつかなくなるだろうからこわい。接し方に注文がつく気持は理解できるが、それを安易に受け入れるわけにはいかない。警備の方もそれなりに気をもんでいる。十分な理由があるからだ。あと一割というのもそれなりの懸念があるからである。民主的皇室の声と民主的国民の実際が必ずしも一致しない現実がある。記者の目から欲しい事件ではないのである。

11 月 4 日（日）

身スポも終った

午後五時までに東平尾陸上競技場での身スポ大会閉会式が終った。成功裏にといってよい。記者会見に出ている記者は七～八人だった。うまくいけば当り前で記事にすることはないし関心もない。当方からはよかったと胸をなでおろすことなのである。四八〇万県民の総力で、と平凡にいうが、中味を一つ一つかみしめてみると価値あるものが一ぱいである。参加した人はどれだけあったか知れない。大会会場のボランティアが五〇〇人というまい。音楽隊は吹奏、合唱、ファンファーレなど一四〇〇人以上である。各会場にちらばって、どれだけか、今の自分にはわからないが、思えば九月九日の国体夏季大会以来だけでもたいへんな数にのぼるだろう。みんながそれなりの感動を胸におさめたに違いない。五〇年に一度とか生涯一度とかの表現を使っているが、地域、年齢、参加の仕方など多種多様である。福祉団体、老人クラブ、その他ボランティアがこの大会を支えてくれたし、学校も広汎に関与してくれている。数えきれる性格のものでない成果である。記録が残るが、それはほんの僅かしか語らないものであるに違いない。

11 月 5 日（月）
還日本海交流というけれど
還日本海社会党フォーラム出席のため早々に新潟に行った。ついでということで、国体、身スポ御礼まいりのため、文部、厚生、日体協、宮内庁まわりをしたので、東京経由になった。新潟イタリア軒で、土井委員長の歓迎夕食会が開かれた。現地新聞はその模様を別貼のように報道した。写真は左から社会党の関山、ひとりおいて土井、私、隣りが伊藤茂などとなっている。日本海の新時代を主張しようということで、北は青森北海道から、南は山口、福岡まで、社会党代表が地元漁業、経済、大学の人達と共に参加する。新潟はもちろん、富山、石川からの参加者がとくに多かった。ただ私には国レベルでなく自治体民間でという趣旨はよしとしても、徐々に、根気強く、継続して、いろんなことを、具体的に実行していくつもりでこの問題に臨まないと成功し難いのではないかと思える。自治体レベルというは易く、相手に相当する「自治体」なるものがないことに気づく人は少い。国際交流といってもここに一つの山がある。相手も同じと思ったらそれは誤りである。福岡ではハワイ、韓国など県レベルで体験している。社会党レベルではよく理解できてないように思える。
【「社党フォーラム今日開幕」（掲載紙・日付不明）の切り抜き貼付】

11 月 6 日（火）
岡崎次郎先生のこと
新潟から上野まで嶋崎譲氏と同席することになった。七時半の新幹線である。彼との話の中で驚いたのは、岡崎三郎氏の追悼会のこと。次郎夫妻が心中自殺したようだということである。三年前か五年前か、それは定かにはきかなかった。三郎氏の死もはじめてきいた。次郎氏は九大教授のいきさつ（就任にひまがかかった）あり、マルクスの資本論翻訳に打ち込んでいたということなど思い出はつきない。しかし九大辞任も亦平凡でない。東京の方が生活に便利ということだったと思う。翻訳の印税について向坂先生との間の紛糾、確執を残したままという。夫妻とも身辺を整理して失踪のようだが、残るものは姪に当る人が処理したのではないかという。生存なら八〇歳にはなろうか。ニヒルなところがあったように思う。向坂先生の奥さんは元気とか。それにしても今は時代が違いすぎる。いわば過去のことに属するといえよう。縁者なく死ぬとなると、失跡しかないのかも知れない。元気ならいいが、動けなくなると失跡もできなくなる。気の毒というべきかどうかも私にはわからない。岡崎さんらしい死に方だったろう。

11 月 7 日（水）
フードフェスティバル　福岡アンテナショップ
若い女が風を切るように街を行く。福岡でも東京でもそうだが、シンガポールでもそうである。シンガポールには日本の旅行者がすごく多い。そして女も多い。余暇時代というか、カ

ネ余り時代というか、泊っているニューオータニでもその傾向が実感としてみてとれる。そこへ福岡の農産物、その加工品を売り込めないかというので、アンテナショップをやってみようとやって来たのだが、果たして成果が期待されるかどうか。県総政部、農協中央会、園芸連などこの試みに大きな関心を寄せているが、ニーズ動向にどうこたえるか。大変頭をひねる必要がある。米作米食の上にきづかれた食文化が今大きな試練に立たされている。カキモチ＝ライスクッキーだって需要を呼ぶかどうか。ゴボウ、レンコン、ミソまたしかり。山笠、オッショイ祭りも日本でこそまだ命脈があるが、シンガポールに出ても人気が同じとはいいきれない。それに、価格の勝負が何よりも前面に出る。アメ・ヨーカンのたぐいに引き合う価格を払ってくれるかどうか。日本の国力、経済力の背景を恩に着てもなお且つである。市場開拓に根気も必要だろう。

11 月 8 日（木）

セントサ島観光

SENTOSA 島の見物。行きはフェリー、帰りはケーブル・カー、島一周のモノレールを利用。噴水公園、蝶の園、歴史資料館（先駆者、第二次大戦時山下大佐とパーシバルの降伏調印その他）が印象に残った。ゴルフ場二つ、サイクリングロード、海水浴場、その他島全体が一日遊べるようなレジャー施設である。蝶の園では標本のほか、生きたのが現にとんでいる場面も作ってある。サソリが標本にしてある。初めてだ。もちろん日本ではこのようなスペースは見たくてもない。生きたサソリが網の中でじっとうづくまっている。危険だからだから手を出さないようにといわれる。クモも蝶々も見たこともないほど大きいのが標本にしてある。昆虫学をやっている人には欲しいのがあるだろうと思う。World Insectarium 世界昆虫館といわれるから、蝶のほか甲虫、節足、多足の類も標本にしてある。われわれが日本で体験するのと規模が違うのでびっくりだ。田島君が高所ぎらいのようで、ケーブルカーの中では固くなり、せっかくの見晴しを満喫できなかったのではないだろうか。日本も観光開発手法を考えたらどうだろうか。

11 月 9 日（金）

大使館の懇切な接遇

今日のシンガポールでは日本大使館に印象が残る。外交官は共通してハダざわりがよいが、ここシンガポールでは山口達男氏らとくにあたたか味とやわらか味が感じられる。大使館はどこでもだろう厳重な通行出入チェックがある。夜は大使公邸での招宴があった。まだ竣工して間もない施設という。格式ある公邸で県側、県議員両夫妻、自治体国際化協会、など、今回のアンテナショップ事業に関係した日本側公的立場の者が招かれた訳。かたくるしいと思うのに、まるで逆。着くと公邸玄関に迎えてくれるし、帰る時も見送ってくれる。着いたらすぐビールその他好きな飲みものを出してくれ、しばらく歓談ののち本席へ案内され

る。三時間もお邪魔してしまった。席を立つとき、公邸の裏庭をみせてもらった。きれいに造園され、十二日の天皇即位式の時はこの公邸にあふれるばかり祝宴がはられるという。多分、日本の品位にかかわるとの判断だろう。少し前に石川県知事が来訪したらしいが、そんな接遇はなかったようだ。とすれば福岡県の位置づけのせいだろうか。

11 月 10 日（土）
気温差や国力や
新加坡（シンガポール中国表現）から一気に福岡へ。途中台北に降り乗りかえたが、台北は三分の二福岡寄りである。夏の洋服をもって行ったが、それなりの役にしか立たない。南の島 SENTOSA で、（八日）モノレールに乗っていた時はさすがに暑かった。日本では強風が吹き、急に寒くなってきたという。あちらでは三〇度、こちらでは一五度。ホテルで差し入れてあった果物、珍しいものばかりだが、水っぽく大味、決して「うまい」という表現はできない。ふるさとという事があってか、やはり果物は日本に限ると感じた。四季あり、日照の差あり、微妙な味がそこから出てくると思う。同じ日本でも低地よりも中山間地の方が昼夜の温度差が大きく、そこに美味がはぐくまれるようだ。だからそうした味わいをシンガポールの人にも知ってもらうといいだろう。そのためには、日本の力が経済界はもちろん、各分野で大きくなり、それを通じて日本を知ってもらうようになる必要がある。向うでは日本語熱が上がっているそうだ。これは日本の国力のバロメーターであるともいえるだろう。それに伴って福岡の果物も売れるようになろう。

11 月 11 日（日）
貴重な休み
ぐっと冷え込みを感ずる一日だった。まれな休日。家のまわりをまわってみると日照の少なさがしみじみ直感でき、鉢物をできるだけ日あたりのよいところに移したりしてみた。レモンが今年はたくさん実っている。黄色くなると目立つだろう。温州ミカンもかなり実り熟しているが、味は賞する足りない。今年は夏ミカンの実りがとくに少ない。昨年多すぎたたからであろう。電気ストーブをつけ書斎にこもって日記のおくれを取り戻すのにかなり時間を要したし、たまっている手紙をかいて一日が終ってしまった。旅行中日記帳をもちまわっていた方がいいとわかりつつ、海外に出るときはメモですませたいので、課題がたまってしまうのである。旅のあいだに来翰あればその整理も大変である。あれこれ一日かかってしまう。一週間もあけるとそうなってしまう。消化できた今日は充実した一日だったと思う。それは誰にもわからない自己満足なのである。

11 月 12 日（月）
天皇の即位礼正殿の儀

天皇の即位礼正殿の儀に列席した。皇居の宮殿松の間の高御座（たかみくら）、御帳台（みちょうだい）、中庭の旛（ばん）、弓、太刀、桙、そして鉦、鼓などの仕立てである。武具関係者四〇人、楽部十四人、万歳旛など大小ののぼり類左右計二六本。両陛下をはさんで下段に皇族男六人、女七人、三権の長四人、それに宮内庁長官ら三人が正殿にのぼる。礼、楽、武の三つが古式にのっとって揃えられた形である。鉦鼓の楽は合図だけで他に音なしである。あと、「天皇のお言葉」と海部首相の寿詞（よごと）の声があったのと、万歳三唱、それだけが音であり、事はしずしずと進められた。古式ゆたかというが、昔から伝統というほどでなく、大正、昭和の二回を今回も引きついだというほどのものでしかないのではないか。天皇制反対、粉砕、「復活強制反対」の声のほか、宗教的色彩への反対、百何十億円もの巨費投入は問題との声もあがっていて、しばらく尾を引くだろう。韓国、イギリスなど戦前の軍国主義復活を危惧する声もあるようだ。

11 月 13 日（火）

即位礼　饗宴の儀

12 月補正の知事説明をきいたあと、改めて上京。今日は夜饗宴の儀があり皇居連翠の間に参加した。何千人という人達に何回かに、今日、昨日、明、明後日と分けて、出席される両陛下、皇族たいへんな重荷だろうと推測する。それにしても、料理を出す方もこれ又大変だろう。材料の調達、加工、盛りつけ、考えただけでもぞっとする。長い時間かけて計画を練ったに違いない。もちろん今回の即位の礼すべてだ。警備、交通規制も儀式用の衣裳、一寸考えても尋常ではない。今日は高御座、御帳台をつくづく見学できたが、比べてかなり差がある。大きさといい装飾といい一〇と八ほどの違いであろうか。てっぺんの鳥は鳳と凰だと思うが、京都から運んだというのは疑問。新たに製作しただろう。次に後保管のことが気になる。ともかく即位の礼の一連の「儀」は大変な事業だ。しかし考えてみると、大国といわれる日本、その政権を担っている自民党にとっては、面子にかけても、こうした華麗荘厳な行事をこなしていかざるをえなかったであろう。あれこれの批判は批判として‥‥

11 月 14 日（水）

文化の交流、普及

ふと思った「ありがとう」という日本語はいつからはじまったのだろうか。漢字「有難し」というのを日本語の中に消化していったはずで、漢字が伝わり用いられるようになる以前には、別の言葉が使われていたのではないか。関西とくに大阪で「おおきに」という発音が同じ意味に今でも使われている。こちらの方が源流なのではないだろうか。こういった例は無数、というよりある国の言葉というものは勝手に、独りで発達するものではなくて、生活の広がりや上昇と共に発達していったはずである。その意味で、生産力の発展、文化の交流、普及こそが言語を豊富にし、それが又逆に生産力の発展、文化の交流普及をうながす。わが

国が（住民が）漢字をとり入れた後に不断に中国朝鮮と接触し、欧米のそれを輸入し消化したことは評価しなければならない。島国が閉鎖的であってはならないし、僻遠そのものであってもいけない。心の島国、閉鎖もいけない。仮名を発明し、アルファベットを使い、外国語をうまく言葉の中にとり入れた先輩たちは偉いと思う。

11 月 15 日（木）

労働組合の今後の政治運動のあり方が問われている

七時半大手門会館で福岡地区労センター結成レセプションがあった。福岡地区労はなくなり連合福岡の福岡糸島地域協議会に変形していくので、それが果しえない政治的住民運動的課題を新発足のセンターが継承していくわけだ。この地区労は三十八年の歴史をもつという。県では門司八幡に次ぐ古い地区労だったし、常に県中央メーデーの担い手だった。センターは社会党系の選挙、平和その他の住民運動を新しい角度から担い直すことになろう。共産党、民社、公明の線に立たないであろう。地域住民要求など新たに掘りおこし、担いつづけることができるかどうか、不安が残らないとはいえない。福岡糸島協議会としては中央メーデーはともかく、ほとんどなすところなく経過するのではないかと予想される。とすれば、労働運動はもちろん住民運動も一つの転期に来たといえると思う。古い考え方の私としてはどうも心もとないわけだ。来年の統一地方選が一つのテストケースになるようにも思える。半世紀近く経過すれば曲り角は当然ともいえる。

11 月 16 日（金）

Amorphous

福岡地区労労働大学フィナーレ講義を行った。昭和三十四年から始まり今日までつづけてきたこの地区労の一つの大きな事業だったという。それが今回で歴史的な幕を閉ずという。私に依頼があったのは、その起源から私がかかわって来たからしい。「明日への指針」というのが与えられた演題である。労働組合とは、日本の地区労とは、福岡地区労の位置など、胸にあることを順序立てて話し、結びに、住民として労働者として、県政の二つの横糸と称してきた環境問題、高齢者問題に関心と運動を地区労センターとして示してほしいと要望し、アモーファスという産業界の動きの解説をして結びとした。今後の労働組合がどう動くか今は予見の限りではないが、危機的側面をもっているとの自覚が足りないように思えるし、無為にすごしていくという予感もするので、一種の激をとばしたかったのである。老いのクリゴトと評されるかも知れないとの前置きづきである。

11 月 17 日（土）

交流

国体ではどういう成果をえたのか、県民それぞれに違うだろう。志免の南里町長はホームス

テイを指摘していた。ここは種目が相撲、かなり太った選手だったろう。何百人の県外客か知らないが、ホテルでなくホームステイだ。町長の話では、アパートに住む町民が引き受けてくれたという。泊めてもらった方も感激しただろう。帰郷して後、御土産品を送ってくる。贈られた方も、仕甲斐があったということでうれしかろう。北陸からは毛ガニ、青森からはリンゴといった物が返礼のしるしだろうか。このようなよろこびを感ずること、これが成果だったといっても過言ではない。やり甲斐を感ずること、そして後々まで交流が残ることこれが成果なのである。交流・交換というソフト面はいかなる意味においても新しいものへの芽を生む。町民が相撲好きになったかも知れない。これも別の面での成果ではあろう。しかし、ここでは種目の特定は避けよう。他県との交流、外国との交流、こんなのは現実に何の成果もないかのように一見おもわれる。しかしそうではない。交流が進歩を生むのである。これを見落さぬようにしたい。

11 月 18 日（日）

互助を忘れている

宗像の地区労中心の任意団体の主催する中央公民館で行われた「知事と語る」（ふくおか 21 世紀を展望）で感じたことは、パネラーの各界代表及び司会の川向教育大教授が県及び中央行政への大きな依存心をもっているということであった。私が、「負の共有」という気持で力説したことを不満に受取っている。たとえば障害者に対する無料ないし割引き、バス、列車、障害者向け住宅などの要望に直接こたえず、まずみんなで助け合おうといった点が不満らしかった。何でも「県はどうしてくれるか」と問いかけてくる姿勢、一本槍なのである。われわれは自助、公助の間に互助が必要だということをくりかえし強調してきた。彼らはその強調に対し、行政の怠慢を是認することになると思っているようだ。リフトバスの常設を業者に行政指導するわけにはいかないのである。「弱い者の味方」ということは当然だとしても、それは行政に直にもってくるのではなくて、自助の上に積み上げる互助、互助の向うに行政（公助）という論理がなくてはなるまい。勿論知事がこの種の席で「ああします、こうします」と約束するわけにはいかない。彼等は歯痒い（ママ）かったようだ。

【欄外記入】

「奥田知事とともに 21 世紀を展望する県政を語る実行委員会」

11 月 19 日（月）

二十一世紀の福岡をつくる県民の会

夜、山ノ上ホテルで県評センター梶村、松田、社会党竹村、山本、県議林、小西、秘書室杉山、それに私が集って次期知事選運動の進め方の基本につき討議決定し、十一月下旬から行動に移すことになった。私の三期目出馬については異論をはさむ段階はすぎたと皆いっている。問題は支持確認団体を学者文化人グループから選ばれた少数の人の団体にしぼり込

むこと。それを二十一世紀の福岡をつくる県民の会と称するということに絞りこんだ点で、社、共、労組、青年および婦人団体、学者団体、農業者その他の団体がそれぞれ集い、運動を独自に展開するということになったこと。及び中でも県評センターが運動の中枢責任をもつということである。連合福岡には協力を求めるが、共産党の参加に異を唱えさせないし、共産党が母体の中で主体性ありげな態度をとることのないよう気を配っているという点も工夫されたといえる。出馬の正式表明は十二月県議会の代表質問に対する答弁という形をとるだろうという点も合意ができた。

11 月 20 日（火）

以閑為楽

新採用者研修で一時間講義した。その中で給料を取るための仕事に熱中するのもいいが、人生顧みて悔ないようにするには好きで打ち込めるものを求めることを忘れてはならぬという意味のことを挿んで話した。昨日は勤労（ママ）者表彰があり、私が揮毫した絵皿が贈られたが、その文言は「以閑為楽」というのであった。あとになって自分の字を見ると気にくわぬものではあるが、それは仕方ないとしておこう。祝辞の中で私はこの四文字を解意して、楽しみとなすべき閑をもつことをおすすめした。働き蜂といわれ勝ちの日本人だからこそ、閑の意味がかみしめられなければならぬと思う。閑というのはタバコを吸うための、コーヒーをのむための休憩というようなものではなく、日曜休みとか、土、日の連休とか、あるいは更に老後といった時間をさすのではないか。その反面に汗を流す労働が想定される。その上でできたレジャーを有効に生かす。そうした構えを平素からもっている必要があるという意味の講義でもあった。

11 月 21 日（水）

健康への不安

三期目に出よとあちこちから声があがっている。うれしいことだが懸念がある。それは第一支持団体のこと、第二は健康のこと。後者は我がことである。自信がないし、その配慮なしには県民を裏切ることになる。杉山副室長に、小川院長に意見を求めるよういっていたら今日彼から報告があった。状況はよくないことは事実だが、選挙運動など無理をしないなら、あとは当方で見守りつづけるとの答えが返っていると彼はいう。無理な生活を戒めてある。と同時にあと一期ぐらい挑戦してももたせることは可能じゃなかろうかというのである。かなり危いことは確かである。そのことは自覚もある。むしろあともてるだろうか心配なのが現在の心境である。頭が重いとか就眠に不満が残る。その原因がよく分からない不安がある。だんだんモウロウとする方向に進んでいるように思えて仕方がない。それに近頃皮膚のあちこちに湿疹のようなもの、赤みがかかった出来ものが出る。薬を用いる気にもならない。嫌なことだ。

11 月 22 日（木）

パリ憲章成る

昨日全欧安保協力会議（CSCE）でパリ憲章が調印されたことが大きく各紙に報道され、くい入るように記事を追った。ベルリンの壁の崩壊のあと西ドイツが東ドイツを併合し、それを追認し全欧に、この体制の基本を広げるようにこのたびの調印が追っかけた。自由、平和、民主主義が全欧の体制となり、それが保障されることとなる。新聞は一様にこれを歓迎すると共に、懸念についてもふれている。何が保障力なのか、経済格差を国境でどう処理するか。大小の民族利害が今後新たな火種になるのではないかというのである。又われわれにとっては、アメリカは今後どうするか、とくにアジアの軍事力をどうするのか、アジアの東西冷戦構造はどうなるのか。朝鮮、台湾など動きが見えないが、必ずや影響される時がくるに違いない。その際、ソ連がどう動くか、中国はどう出るか、朝鮮の南と北とどちらが柔軟に出てくるか、日本がそれにどう対応するかなど、不透明な部分が多い。日本政府がアメリカの顔色ばかり見ているのが気になる。

11 月 23 日（金）

文字の起源

誕生祝のときに秘書の橋本氏が贈ってくれた淡交社刊中国の美術②書蹟篇をみていると、「漢字の起源」（白川静）というところに、次のような部分がある。文字は古代王朝の極盛期に生れる。オリエントやエジプトにおける文字の成立はいずれもその初期王朝の時代、前三〇〇〇年とされる。中国より早いが、古代の神聖王朝による統一支配が成就している時期であった。文字の成立はそのような古代王朝の祭政的支配と密接な関係をもつと思われる。文字は本来神聖文字であり、神殿やその経営のために必要なものであった。中国においても殷王陵の規模や遺品からみて、その王朝経営に文字の使用が必要であったことが首肯される。それははじめから高度の様式的な完成をもつものとしてあらわれている。･･･私も前から宗教、武力、文字、統一支配を必須の道具立てとして説いていたので橋本氏がそれを思い出して文字に関する本を贈ってくれたのであろう。もちろんスタートにすぎない。発展は交流によるのである。

11 月 24 日（土）

朝倉の柿畑

是松氏から誘われていた甘木花雲月ゆきが今日実現した。季節も適当ということで柿狩りをついでにと希望していたら、それも実現した。杷木の志波と思っていたら朝倉の宮野に連れていってくれた。昭和四〇年代後半から五〇年代にかけて県営で開発した山地の果樹園一六〇ヘクタールばかり。一帯が色づいた柿の葉に蔽われ見事な園地の展望ができる地点にまで登った。車道が整備されていて楽なコースである。今年は炎天つづきでカメ虫の発生

も異常で柿の結実はよくないといわれながら、枝も折れんばかりの結実も見ることができた。自由化問題で揺れている農業ではあるが、この柿にまで脅威は及ぶまいと思った。この朝倉はわれわれが知らぬ村々が合併して新発足の町だが、万能ネギでフライト農業でも有名だし、三連水車は今観光面で名を売り出している。それなりに自立していける地域である。

11 月 25 日（月）

書きつづける日記

「千秋会」は今年は形式上とりやめ来れる人だけということで拙宅に四人来た。嶋津、浅野、東定、河野。話が石炭資料に及び、東定氏がよく語った。話題が明治平山からいただいた会社側資料さらには私の日記にまで及んだ。もの忘れがひどくなった四〇歳代前半から書きはじめるようになった動機をのべ、今は二冊書いていることも説明。針の穴から天をのぞく程度の主観的なものでしかないことをことわったが、後世、ぜひ欲しいという。私は OK といっておいたのだが県の人も、マスコミも希望していることは承知していた。私は忙しい中思い付きをとにもかくにも余白を埋めるだけと思って、何かかいておけばと思って書きつづけているにすぎない。誤字、脱字、時には時間、場所の一寸したまちがいがあるかも知れない。文になってないくだりもあるだろう。まずは余白を埋めている。でも何かの役に立つはずと思って書きつづけている。意地で書いているみたいな点もある。彼等が残してくれというだけで私はうれしいのである。

11 月 26 日（月）

選挙母体の輪郭みえず

二十四日の「毎日」に、選挙母体の輪郭見えず、党団体妥協点を模索という見出しで、知事選奥田陣営の解説記事が出た。意外と正確に書いている。連合福岡が動きがとれず社会党系の労組がつっ走るとヒビ割れして民社系がはねる。共産党を抱き込まないとなると、学者文化人がはねる。どちらを選ぶというわけにもいかない。今はとりあえず県民の会という名を使うことだけを合意し、党は表に出るなということになっている。共産党はこれに OK ではない。党を表に出さないとメリットがないと決めこんでいる。これが表に出ると連合は横を向く。といって反自民非共産の旗印の連合のいうままになるわけにはいかない。いずれにせよ、ここ旬日中に県民の誰にもわかるようにせざるをえない。十二月十日に予定される県議会代表質問には否応をいわざるをえないと思っていたのに、県評センターが三日には事務所開きをするというから、にわかににぎやかになり、待てないとの空気が高まってきた。今日、明日というほどに。

11 月 27 日（火）

確認団体の学文グループづくりが急がれる

昨日、今日つづけて法学部の徳本正彦氏が来室した。県評センターの松田、山本、秘書室の杉山氏も話の相手。センター側からは次期知事選に向けての準備に動きはじめるしかない、もう待てないという。それにしても、体制づくりの焦点となる学文グループをどう作るか、見えない姿。徳本氏に相談するにしても、結局は国家公務員だから表に出るわけにはいかない。具島さん、内田一郎さんは無理だろう。だったら土井仙吉氏しかないのではないか。具島さんはそうした形づくりにはついては概して OK だという。徳本氏は私に土井氏に頼むよう日程を早くつめるべきだと主張。県評センターもこの段階で一番大きな課題といっている。学文を表に出し社共は黒子になり、センターが実動者となる。その学文グループは一期、二期のを組みかえるしかないが、その仕事が当面の重荷になっている。共産党を黒子になってくれというのも重荷だが、それは、何かと乗りこえられるだろうとみな思っているわけだ。

11 月 28 日（水）

土井委員長に意思表明

東九州自動車道について陳情。自民党本部に行ったあと時間ができたので社会党本部を訪ねた。次期知事選につき、そろそろ意思表示すべき時が来たので、誰か会える人がいたらと思っていたに過ぎなかったのだが、偶然土井委員長が OK ということになった。決意をのべよろしくとのべたら大そうよろこんでくれた。ほがらかな応対であった。すでに北海道、神奈川は連投の意思を明らかにしているので、福岡はおそすぎるといった感じである。西田東京事務所長、橋本随行も同席していて、タイムリーだったと、私の発想訪問をよろこんでくれた。公的に意思表示した最初の人が土井さんだったわけである。十二月十日の県議会代表質問で、どうせ明らかに表明せねばならぬだろうが、社会党本部で、その前にこうした形で表明できたことは、よかったと思う。夜は福岡に帰り、林団長にも「かわさき」で正式に私の口から表明した。労働組合など周辺は既定のこととして動きはじめているからだ。スタートは自分で決めるしかないはずだ。

11 月 29 日（木）

不透明政治

今日、参院で来賓ふくめ一二〇〇人が出席して議会制度開設一〇〇年記念式典がおこなわれた。議会制とか民主主義とかいうが、中味はピンからキリまでである。この百年間にどこがどう変わったか細部は別として、そんなに明らかではない。日本の議会制がヨーロッパその他の諸国とくらべ得失がどうなのか、私にはよくわからない。それに今日ほど政権党の態度が不透明な時はなかったのではないだろうか。消費税問題は頬かぶりのまま、国連平和協力法案は廃案になったが自民党の小沢幹事長ら推進者は責任をとる風にもない。土地税制、それに選挙法案も全く不透明。リクルート汚染からでてきた政治改革だが、それが選挙制度

改革で取り替え、その内容がまた賛否両論の中で納得のいく姿が出されていない。何もかもウヤムヤで時間がたてばいいと考えているようにも見える。民社は衰えゆくのだからといっていいかも知れぬが、きょうの公明党大会も、「右より」を宣言せぬ右寄り方針を出したようで、これ又不透明。これでよいのか。

11 月 30 日（金）
学文の新リーダーを求む
中食時、山ノ上ホテルの一室に土井仙吉氏に来てもらい、杉山副室長立合いで確認団体の代表になってくれるよう話をもちかけたが、即座に NO といわれた。向かないし、力量もないとの理由。年齢のことも理由にあがっていて逆に、私にも立候補すべきでないという人があると彼はいう。一つ一つ尤だと思って私は反論しなかった。とくに年齢についていえば、五〇歳ぐらいの人がいないかと私も思う。だが今となってそれをいい出しても陣営内部が混乱するだけで、別の候補探しはおそきに失していることは確かである。夜の連合福岡の一周年レセプションの席で土井氏の考えを松田氏に知らせたら松田氏は、あの手この手であとまだ彼を口説くからとの返事であった。学文の会の脱皮については土井氏も異論ないようだが、彼とて名案がありそうにない。もっと若い人が積極的に前に出てきてくれればと思うのだが。近頃の人政治のことなど関心がなさそうで周辺に寄りつかない。学文の中での論議もだんだん陳腐な発想に寄ることになってしまう。だがさて、新しいリーダーをどう求めるか。

12 月要記
大きな山場をこえて十二月。県議会で次期知事選に出馬するか否かを発言することになろう。ここまで来てことわることもできないし、受け皿がきまらないことも躊躇の要素にもなっている。これは決意の有無からはなれて客観世界の問題でもある。立候補否を答えるのは自分に忠実であっても、一般論としては無責任になる。二つの矛盾のハザマに立たされる。流動性が止まぬままで新年を迎えることになると、受け皿づくりにもわが責任を感ずることになる。このあたりじっと事態の動きを見ながら、つど対応するしかないだろう。十二月議会がすむとすぐ来年度予算に向けての長い陳情の日々がつづく。これにも耐えねばならないが、健康には依然心配がつきまとっている。睡眠が鍵のように思える。それから年末いつものように刀出に餅つきに行けるかどうか。定まらぬ日程のように思える。十二月十九日土井社会党委員長が来て共に演台に上るようになる。どういう仕組みで事が進められるのか。ともかく ひとにふりまわされて十二月も暮れてゆくだろう。

12 月 1 日（土）
生涯扶養介護保険

子供の時は一年がたつのが長かったのに、大人になると又かと思うほど早く来てしまうと誰だったか、まだ二十代の人が数日前に話していた。その通りなのだが何故だろう。子供の時の一日一日は刻み込むように、人間形成に意味をもっているからであろうか。ところで東区の和白だったか共栄生命が経営する特殊老人ホームが話題になっている。一人生涯三千五百万円で面倒をみてくれるという。親子関係の断絶が一般的にひろがり、扶養、介護、遺産相続の意識が早急に薄れていっている昨今である。子のない夫婦、ないのと同じ断絶状態の老夫婦が少くない。われわれもそのような状況にあると思わなければならないのではないか。他方、そういうことを見越したように、子は不要という夫婦もある。市町村で対応してくれるように、県も指導を強めねばならぬようだが、生命保険会社にまかせないように、市町村自体ががんばってくれることを県としても願うのである。

12 月 2 日（日）

来年の選挙に向けて協会員の揃い踏み

ぱっかり時間が得られた一日だった。朝のうち信博夫妻が来訪し、午後は社会主義協会県支部の総会、懇親激励会があって出席することができた。党、労働組合運動が混迷する中で協会員はよく頑張っている。名称は産業経済研究所と改名して久しい。各支部も支店と呼称している。高崎氏は今勤労協をやっているということで元気にしていた。中央区の永元市議も来年の選挙にはぜひ勝利をと気合いをこめていた。福新楼でのこの会食は統一地方選挙出馬者への激励会の意味があった。当然みんな奥田三選を期すということを旗印にしている。それが又地方議員選挙戦にもいい雰囲気を作ることを承知している。教組や自治労では知事を取ってもメリットがないという声がだんだん掻き消されようとしている。知事選勝利のムード作りが地方議員選戦を有利に進めることになることを感じているからである。そういう意味で今日は地方選に向けての揃い踏みなのであった。

12 月 3 日（月）

学文を通して岩崎が急浮上

知事室に岩崎隆次郎氏から電話があって昨日の学文の会で、社共の路線でないとダメだといって来た。学文で選挙確認団体を作るという線が出ているので、岩崎氏のこれまでの位置を生かす場ができたわけである。県評グループの松田（留）や、連合の坂本からは反撥される岩崎だが、学文という位置から彼の声がにわかに強く近くきこえるようになった感じである。学文の中には共産を入れよという声が強く、岩崎が生気を取り戻した形である。昨日の学文の会で、社共という線が強く出されたというのである。共産党県委員会も堀井、高の二人がうちに来て話し合ったことを早々と新聞に発表して、社共の線が動かぬものになるように懸命になっている。そんな勝手な発表をするのだったら、今後知事は共産党に会うなというのが社会党筋。こちらは連合の顔色をじっとうかがっているからである。岩崎は電話

で、十日に予定される議会での知事発言も抑えたものにしてほしいと注文をつけてきた。彼は己れが学文、確認団体を動かすようになったとの自負ができたようだ。さてあと数日、どう動くかだ。

12 月 4 日（火）
非共産の線が強調されすぎる報道
毎日新聞が面白がって県評センター知事選で共産党排除の方針との記事をのせている。共産党側からは「共闘」といっているのに、くいちがっていると説明している。松田留吉氏が口軽くいうので毎日がすっぱ抜くようにそれを記事にする。岩崎は学文の中で生き道を得たかのように、社共路線しかありえないと吹いてまわっている。社会党県本の書記長竹村は表向き社共共闘といえないといっているが、表現に苦慮している。松田はあっさりいってしまう。杉山など松田の言い方では困るといっている。県評センターもあれでは困ろうとのこと。社共の間の問題は社会党にまかせると大方の合意ができているのに、松田がホイホイと記者に吹くから新聞は面白がって書く。こうした機微は十日からの代表質問で追及の材料になるだろう。連合福岡で、坂本議長はまるごと連合をこちらに引き寄せよせようと努力しているが、反自民非共産といっている。この線とどう合致するのか食い違うのか、議会ではつついてくるに違いない。松田がしゃべりすぎるとの声が高まっている。

12 月 5 日（水）
脱皮をせまられる学文
中国武漢からの来客と一しょに来訪した岩崎隆次郎氏が学文の中がまとまらない限り、十日の代表者会議での意見表明はすべきでないと私に告げた。私は一つの区切りをしておかない限りまとまるべきものもまとまらないし、マスコミが書いている予告めいた記事に合わないとすれば、当方陣営の力量が問われるし、一般をガッカリさせるものではないかと思う。まとまらないのは学文の連合に対する思いのくいちがいが根にあるからだろうから、そこを思い切ってとびこえてもらうしかないだろう。学文には社共を固執する人が有力で岩崎もその線にあり、発言も強い。そこに学文のまとまりのいま一歩の問題がある。にえきらないで時間が過ぎると県評センターが独走しだす可能性があり、社会党はこれに乗るしかなくなり、別口の学文をこしらえる流れすら生ずる。悪くすると学文の分裂である。私は学文が脱皮するしかないと思う。非共産といわなくても表現をかえればいいのではないか。

12 月 6 日（木）
山崎広太郎出馬表明
福岡市議長山崎広太郎氏が次の知事選に出馬することを正式に表明、固い決意だとのこと。自民党県本では総務庁の重富吉之助氏の擁立を決め、北九に来ている。山崎は自民を脱党し

ても頑張るという。自民の分裂というほかない。自民の福岡・北九州両市議グループが山崎を推すというのだからおさまらない。市議グループは重富を自民本部が天下り的に決めたことに強く反撥している。どちらかが折れる以外はかなり強烈な地殻変動というべきである。熊本県では細川氏の三選不出馬表明のこの秋以来、また佐賀県では香月知事の四選出馬への表明そして断念表明（十二月三日）にみられるように、自民を中心とした保守が揺れている。両県も後継者選びで揺れがつづいている。福岡においても山崎、重富をめぐる動きについて記者たちはあわただしい。同時に奥田はどうなんだとにらみもきかしている。当方は学文系の中で社共共闘を離さぬという線が太いので、これが連合はもちろん県評センターの反撥をまねき、ここもまたスタンスが定まりにくい現状である。あと二、三日揺れつづくであろう。

12 月 7 日（金）

日記のこと

毎日新聞記者が十分間ほどといって取材に来て日記を書いているそうだけれどということその他知事選をめぐる心境みたいなことをきいた。私の日記のことは周辺にかなり知れているようだ。いつ書くか――たいてい寝る前にと答えた。ともかく何を書こうと練って構想成立の上で書くのではなく、ともかくペンを取って思いつきから書きはじめ、次々と行数を埋めていくだけだと語ったのである。文意が通っているか誤字がないかなどなど読み返しもせず、ともかく書くんだとの執念のみの連続であるという説明をした。たまに、後日ふりかえることがあるが、書いておいてよかったと思うこともしばしばだ。他人の悪口も書いているかも知れないが、その時の感じが出ていることは確かだと思っている。近頃は執念も高まって小さな字でページの全行を埋めてしまうまで書きつづけることになっている、多くの人が関心をもっているようだが、誰にでも見せられない。一番大事なプライバシーなのだと思っている。事件に連座して、捜査当局が持ち去るようなことがあるとけしからんなと思う。そんな事はあろうはずもないが。ともかく何かを書く。

12 月 8 日（土）

出馬答弁はできるか

夜森山氏から電話があって毎日記者からの連絡では今日の学文の会では確認団体の責任者選出は不可能で、知事選には関与できないような結論になったということだ。共産党支持に傾く人が多数なので、このような結論になるのは、止むをえないといえるだろう。岩崎、池永がリードした会であったらしい。ひるま、十日の代表者会議で、自民、社会の代表質問、中島、野下県議の質問にどう答えるかにつき、林、白石、豊島三県議それから秘書室長、杉山副室長、出納長、両副室長をまじえて突込んで討議したのだが、学文が確認団体になってくれるだろうかという懸念を含んでの討議であったし、昨日の岩崎の発言でも危いですか

ら答弁では出馬を明言しないでということもきいている。しかし明言しない方が、記者の反応などを考えてみて結果影響はよくないので前向きに答弁すると決めたばかりなので、問題が残ったわけだ。確認団体はあとで作ってもらうとのことで答弁するしかないだろうと思う。さしせまって考えよう。

12 月 9 日（日）
多賀谷真稔氏を励ますつどい（勲一等受賞（ママ）祝賀会）
二区の岩田順介氏が実行委員長となり、飯塚寿会館で多賀谷真稔氏の受賞祝賀政界引退激励のパーティが行われた。四十数年間の政界活動で石炭政策の生字引的存在。会場あふれる来客であった。多賀谷氏の座右の言葉は和而不流、行不由径の二つと書いてあり、帰りのみやげに後者を肉筆で書いた色紙が配られた。行きてこみちを経由せず、つまり大道を歩むということである。ほんとうにそれが人格ににじみでている人である。信念の人であり、誠実そのものである。又たいへんな勉強家でもある。会場ではいろんな人に会った。半分は知っている人だった。自民党系も少くなかった。信念はきっちりもつべきだが、ひととの交りには信念の区別なしという人なのである。賞讃に値すると思う。彼自身定期的輸血を必要とする病気もちだし、奥さんも車椅子の人。彼と私は同年生れ、ちょっと考えられない困難な生活だろう。だのに東京で代議士退いた後も岩田氏の部屋を使いながら政治活動をつづけてあるという。

12 月 10 日（月）
あげ足とり代表質問
代表質問がはじまったが、一番手の中島氏は例により奥田県政衰退論をぶって嫌気たっぷり。宮田工業団地へのトヨタ進出についても、あれは亀井前知事の約束が実現したのだとか、国体は成功というけれど入場行進の時電光掲示板で広島がおちていたし、天皇のお言葉の時騒いだ者がいたとか、欠点の指摘多々。他方西原は再質問に立ち、西鉄大牟田線単線部分の複線化要望で知事は西鉄、沿線市町村に要請に行ったかとかの追及。私の本心は、逆に沿線市町村が県に陳情に来て、西鉄にも一緒に行ってくれという方がまともだと思うのだが、彼はその逆。この忙しい身に、さらに沿線市町村まわりをせよといわんばかり。ひとのあげ足取りに議場がつかわれるのは承服できない。もう一人野下氏の質問で三期目を目ざし立候補すべく答弁させられた次第。中島質問で同趣旨の質問が出れば、これと合せるように答えようと思っていたのに、中島質問にそれがなかったので、対野下答弁は出馬につきトーンダウンの状況を感じさせることになってしまった。明日からいよいよ大変だ。

12 月 11 日（火）
晴れぬ気の議会答弁

代表質問で県民クラブの近藤氏がいやみを込めて追ってきた。昨日の西原の質問に私が市町村にいかなかったと答えたのに対し（高岡が議会軽視とヤジったのは昨年の九月に高岡の質問に私が市当村に行くと答えたのに行ってないというので)、近藤は「議会は真剣勝負の場なんだから、答弁はきちんと守ってもらわねば困る」と私に迫ったのであった。どうも私の方に非があるようだ。忘れているし、答弁したことを守るべく日程を組ませなかった事務側の手落ちともいえる。但し、西原は「知事は行ったのか」と皮肉に質問した。（私は言質あることもわからなかった)。市町村に行くと答えたのも不用意だったと今日反省させられたのだが、今以て、大牟田線複線化陳情に沿線市町に知事が行かねばならぬか解せないのである。西原の質問も昨日は、昨年九月の議会での経緯には全くふれないのだから意地が悪い。あれやこれやで今日も一日晴れやらぬ心境がつづく。林副知事は、私の対近藤答弁の声が小さいので瀬川に対してはもっと張りのある声でと注文するし、嫌々。

12 月 12 日（水）

県立黒木病院のこと

昨日とちがって今日はさっぱりした質問ばかりで（一般質問）感じがよかった。八女黒木病院改築についての樋口質問につき、二の矢がきたので希望をつなぐ感じの答弁をしたのだが、林副知事が不満げだった。今県立病院赤字問題につき、県外の学識経験者に委嘱してその在り方を検討してもらっている。黒木病院は採算割れも甚だしいので、答申には廃止と出るかも知れない。それだのに、私が希望ありげなことをにおわせたからである。樋口氏は過疎化する東部八女から県の施設をあれもこれも撤去する（林試、茶指がその例）のはやめてくれという願望をいう。採算だけで県政を考えられては困るというのである。私もその訴えには動かされる。老朽がひどいから改築という線が出てくる。高齢化社会の問題に対応するため、介護、ケア、共同作業なども併せた病院機能をはたす施設をテストとして作ってはどうかと考えてみる。いずれにせよ、採算割れ老朽のゆえに廃止とは酷なことではないだろうか。

12 月 13 日（木）

西京論を夢に

昨日からひょっと念頭に浮んだ「西京」論を、今日の報道取材、毎日及び朝日に対してはじめて披露した。秘書室の連中は理解しそうにみえなかったが、広報の方は趣ありげにきいていた。以前から私は九州は一つとか地域活性論にとびつくような関心はなかったし、「一村一品」に興味をひかれなかった。又東京一極集中になげきをあらわすこともなかった。でも二一世紀はアジアの時代というのには関心を高めていた。近頃の私の主張は「強さとやさしさ」の県づくりであり、技術立県と国際化、高齢者対策と環境対策をそれぞれタテ糸とヨコ糸として組み合せてそれを表現した。こうしてでききていく福岡県の将来像は「西京」論で

結び仕上げていいのではないか。札幌、仙台、東京、横浜、名古屋、京大阪神戸そしてさらに西に走って福岡、それが列島の西の京になる。それは県民、県職員のこれからの心構えであっていいはずというのである。自動車産業県はすぐ目の前。その次はその裾野から花咲く高次未来産業県だろうと思われる。

12 月 14 日（金）
家庭では保革はない
年頭所感を取材する各社との会見は今日のフクニチで一巡。きまって保革の質問が出される。私は中央の尺度は、そのままでは地方では無理だ、極論すれば家庭には保革はないからな、と笑って答えた。聞く方もこの発言をきいて笑いながら納得する。夜共産党の責任者二人と対談する折があったが、党の原則むき出しの彼等にはとても理解してもらえそうにもなかった。彼等とて家庭で党の原則はまる出しにしないだろうし、原則は無用のことが多かろう。県民党という党はないのだが、故八丁氏の助言もあって、私は八年前からこの言葉を使ってきたのだが、今もって筋を通すことができるのでよかったなと思っている。地方自治のレベルでは党派の立場で割り切れない問題、適用できない、してはならぬ問題が多い。社共共闘で支えた知事だとはいうが、私は過去、両党の間の約束は「尊重はするがとらわれない」と説明、以来ずっとこの立場を守りつづけている。協定は今回もあってもいいし、私は口出ししない。とらわれもしない。今後とも守りたい。

12 月 15 日（土）
知事選体制づくり
昨夜の堀井、高の、共産党二幹部来宅をうけ、今日は林県議団長と梶村県評センター理事長と「かわさき」で要談した。知事私が選挙について今回はイニシアを取るしかないということであるが、表に出にくい場合は林氏に、そして学文系の取りまとめは梶村氏に、それぞれ私からお願いして選挙体制づくりに入ってほしいと要望。了解をとりつけたのであった。これまでの二回と違い、今回は体制づくりができないまま出馬の意思を公表せざるをえなくなったので、イニシアは候補自身がとる形となった。連合福岡の誕生、県評の解散、その他の状況変化のため、体制づくりは流動して止まらない。非共産の声があって県評系、社会党は共産党と組むというわけにはいかない。心情は共産党否ではないのに表向き共闘を出せない。他方、学文系の人達は共産党を大切にせよとの主張は譲らない。そういうわけで、体制を作らねばならぬとは知りながら整わない。候補予定の私が体制づくりのイニシアをとるしかない。でも表に出にくい事が多いので、林団長に一任するわけ。

12 月 16 日（日）
学文系の人達の了解

「県民の会」から脱退すると県評センターの松田氏が約三週間前にいったのが問題になり、学文系の人々は、そんな話には乗れないといいつづけてきた。どちらも共産党を意識してのことである。実際共産党を次の知事選の体制づくりの中でどう扱うかは表裏の別はともあれ、大変むつかしい。共産党は先日の私との話合いで、名を表に出さないでも共闘の仲間にいたいと柔軟さを示したので、昨日は林氏にそれを知ってもらい役割を演じてもらうことになったし、今日は学文の役員の人達と山ノ上ホテルでその点了解してもらい、引きつづき知事選に協力してもらう下地ができた。共産党が社共協定調印の線を軟化させたのでようやくここに漕ぎつけることができたのである。固さで押しとおした共産党もこの時点に来て軟化せざるをえなかったようだ。学文もやむなく軟化の線に寄ってきた。私が出席してそれを求める形をとった。学文は筋を通そうとするが、体制ができるかどうかには直接責を感じないのが、ひとりひとりの常である。組織があるというより集合体だから合計がそうなっていく。

12 月 17 日（月）

石炭と鉄を忘れよ

政府予算対策本部発足（東京事務所）の行事に参加したついでに選挙について時間の許す限り挨拶まわりをした。自治労の次に住友建設に斎藤武幸県人会々長を訪ねた。彼は早速福岡の国体は立派でしたねとほめてくれた。ショボショボした福岡と思っていたのに、行ってみるとビックリだったと。彼は宮田出身なので、トヨタの進出で気をよくしているせいもあろうと思う。斎藤さんだけでなく県外の少なからぬ人が福岡は思いの外立派だという。逆に福岡の人が内からみて立派なんだと思う自覚が足りなすぎると。近頃私はそう思うようになった。だから、県民はもっとわが長所を自覚すべきではないかと思う。明治から一〇〇年石炭と鉄で名をなした福岡だから、その衰退をなげくのに馴れ、四〇〇年つづいた鴻臚館や金印の源（ママ）点その他二〇〇〇年の歴史に刻まれた福岡という観点から見直そうという気を持ちえないでいる。福岡は決してショボショボしていないのである。石炭と鉄の栄光と影を早く忘れ原点に立ちかえるべきと思う。

12 月 18 日（火）

切るか切られるか執拗に

近頃年末年始のいろんな挨拶文を作成せねばならぬので秘書室もてんてこまいだ。広報も報道社から要請される。それらを私も目を通さねばならぬし、意見をまとめねばならない。さらに選挙に関連して共産党がいろいろ注文してくるし、それが非妥協的な部分が少くない。「福岡民報」という広報紙で、非核、本島発言、消費税、同和の四点につき知事批判をしていた。それにこだわる学文系の人達、共産党県委員会、ではあるがこの人達は次期知事選は社共共闘でやると巻きついた主張をし、県民の会は解散しないと主張する。考え方であ

り方針であることは了とされるが、現実はそのように動いていない。既に県評はないし、県評センターも社会党も、県民の会と従来どおりではやらないといい切っている。だったら共産党と学文が県民の会に取り残されることになるというのが現実である。ともかく執拗に旧にくいさがっているのが共産党。それを理解し知事選に臨もうという学分。困った事。

12 月 19 日（水）

社会党系地方議員等の決起集会

社会党県本が土井委員長を呼んで昨日は直方中間、今日はサンパレスで地方選統一決起集会を開いた。国会議員、県会議員、市町村会議員など総動員の形でボランティア大衆を集め大集会をやった。前半は模擬県議会、林団長が議長で私が答弁という形。知事三選の決意を問うということで、私は十五分間方針をのべると共に出馬の意思をのべる。「開かれた、県民参加の、又県民党的姿勢を貫く県政を貫く。三期目はホップ、ステップ、ジャンプのジャンプに当る。土井言葉で、やるっきゃない」ということで結んだ。第二部は土井委員長の世界と日本の情勢と社会党ということでの講演四〇分。あと花束贈呈の儀式などで打上げ。今回は私の三期出馬の大衆の場での公的宣言になってしまった。ひるま、庁内では確認団体の学文の人名選出の論議のため数人が集って知事室であれこれ論議されていたが、党を中心とする実践部隊が先行している形である。共産党及び連合右派の思惑の交錯の中で、確認団体を決める学文、その世話役の県評センターの梶村氏が努力を重ねていて決しかねている状況である。

12 月 20 日（木）

実績誇示か再自覚か

時間があったので社会党県本に寄って昨日のお礼をのべた。松田県評センター事務局長も顔を出していて、昨日の知事演説は、もっと八年間の実績を並べなくっちゃという。書記長竹村もそうだという。私の誇示が足りないとの評である。誇示するよりは県民に必要な自覚、県政の反省と課題を述べた方がいいと思って演説したのだが物足りなさを感じたらしい。国体などを通じて県の立派さが外に誇示されたことを県民がもっと自覚して欲しいという角度からの十五分演説だったのである。県職員の人達はきていてよかろうといってくれたのに、社会党の人達は物足りないという。しかし私は実績を並べたてる機会はこれからまだまだたくさんあると思う。県民が、石炭と鉄で付与された栄光の思い出から脱出し、全国的に見直されようとしている福岡の国際的地位に県民も気付かねばならぬという点の指摘が今重要と思ったのである。実績の並べ立てとどちらが重要か、私もさらに考え直してみようと思う。

12 月 21 日（金）

十二月議会終了

十二月議会は終ったが、今年は終っての挨拶が自民党や記者団ちぐはぐで、社会党もそれに次ぎ、まとまっての様子が薄かった。そわそわというか多忙に追われて終末へきたという気分が少なかった。部長会では、これから政府陳情があるので更にがんばってほしいとか、選挙のこともあるので迷惑をかけることになろうとか、いつもと違った内容の加わった挨拶になった。それでも秘書室側は明日から私の陳情上京ということもあって、あれこれ日程の予測がほぼつくようにはととのえてくれたようだ。ひとに引きまわされての年末日程ともいえるが、刀出に行くことや正月の小旅行の日程もきめてくれたわけだ。それだけに陳情など、今日、昨日かなりたくさん詰めてあって消化せねばならなかった。今日はトヨタの岩崎社長が来庁、現地法人で宮田立地をしたいとの申入れがあり、明日からの林団長の心配もあって、抗議にきこえるような答にならないよう、心して申入れを受け、この件も円満に解決した。

12 月 22 日（土）

大家族での夕食会

ゆとりがとれ、準備してもらって、私ども二人上京。霞が関ビル 35F のプルニエールで、一彦及び啓二の両家族で夕食会をすることができた。めったにないチャンスであった。残念ながら久美がスキーに行く予定を立てていてこちらに来なかった。みゆきが来年はフィンランドに行く希望をすでに伝えている。ライヤの両親に会うことができる。北欧あちこち遊んでみたらよい。来年の五月連休には佐方の義母の米寿祝いがおくれているので決行しようと話し合っている。一彦も啓二も来るかも知れない。このように、親子関係にある者が何らかの口実をもうけて会うチャンスを作ることは必要なことである。平素、生活の糧のためとはいえ、離ればなれになっているのが実態である。多くの人は今日でも親子別々であっても近くに住みたいと努力しているのに、われわれは会う努力すら足らず遠くはなれて暮らしている。遠くの親戚より近くの他人という諺があるが、いずれにせよ努力して縁ある者、そのつなぎを強めることが大切である。

12 月 23 日（日）

月をみて感ずべき

部屋で小休息した後、七時頃ダイヤモンドホテル近くの半蔵門というすし屋で夕食した。快晴の一日だったことを反映して、三日月ではないが上弦の月がすごく美しくみえ、帰りは星のまたたきが目にうつった。皇居で祝宴という今日の味わいに夜空の美しさの印象がおまけについた。近頃の人は夜空などどうでもいいだろうが、何千年もの間人類は心をひかれ詩歌に表現した対象だった。私の尺度からみると惜しいことだと思う。月への旅行もいいが、

月や星が心の対象になるのも捨て難いことではあるまいか。有害コミックが問題になり、カラオケボックスがとかくいわれる。月や星は忘れ去られている。十五夜など職場で話題になるのを近頃きいたことがない。風月、雪花はそれなりに味わいなおしてみるべきではないか。雪といえば子供たちはスキーの対象ほどに取捨する。雪景色として楽しむことも亦忘れられてはなるまい。ともかく今日の夜空は久しぶりに美しいと思った。風も程よく冷たくて。

12 月 24 日（月）

葛西水族園にマグロを見る

東京で一日ポッカリ時間をあけたつもりだったが、所長のはからいで葛西水族園にマグロをみに行こうということになって、有意義な余暇の一日となった。遊ぶことこそ勉強だということを実際に体験した。マグロ、カツオの勢いよく回遊するさまがみられた。一万人以上の客が群がるわけで、園長さんから直接に要領よく案内してもらったのに、十分見え　ないほど混雑ぶり。魚がそれぞれに、使うヒレの部分が違うということを改めて知ることができた。尾ヒレ、尻ヒレ、腹ヒレ、背ヒレ、胸ヒレなど特有の発達をなし、使い方も違っている。口、目、断面形、大きさ、色、住分け、深さや温度の異る水温、海流あれこれ説明をしてもらった。平素何気なくみている世界の魚、それにペンギンのように海中に生活の場を求めている鳥、イソギンチャクの大きいの、奇形のシードラゴン。あれもこれも餌を求めて発達してきた。生命の神秘性が展開される世界の海の生態をかいま見ることができた。ゆっくり見て考え、又見るとよかろうと思う。

12 月 25 日（火）

社党県選出の人達と語り合う会をもつ

六本木の部落解放同盟中央本部横の松本邸で、県選出社会党国会議員七人集ってのこんだん会があった。マツヤサロンで県の予算説明に来てもらった人がそのまま移動した形だった。新北九州空港と国立博物館の二つがゼロ査定になっているのが特に問題になっていた。三木議長が、社会党議員に、こういう種類の予算を取りえてこそ、野党じゃないかと強調したのが印象的で、あとの懇談会でもそのことが話題になった。社会党の諸氏にいわせると、自民党等も委員になっていても、一向に突込んで政府与党を追詰めることはしない。まあまあ主義、なれ合い主義で、事なかれ主義で終ってしまう。カネでやられてしまうケースが多く、社会党にもその臭みがあるというようなよもやまばなしが百出した。東京の後援会が立ち消えみたいになっているので来春早々に関係者は集るべきだという忠告をしてくれもした。こんな会がたまにあった方がいい。集ったのは衆院松本、岩田、細谷、中西、参院渡辺、渕上、三重野の各氏。

12 月 26 日（水）

国立九州博物館に尻込み

文部省は福岡から提出されている国立博物館建設問題に関し、まだ言を左右にして逃げまわっている。第二国立劇場に手をかしているのでという理由が、年ふるにつれ理由でなくなり、今は三浦朱門氏を委員長とする県側の基本構想を見てからという理由に寄りかかっている。「新しい国立博物館構想」を求めている点、われわれも理解できる。だが、経済大国といわれるにふさわしくない博物館貧弱国なのだから、福岡からもち出している問題提起にもっと早目に乗ってもらいたかった。自民党系の誰かがいったように、神武天皇の神話は神話としてそっとしておいたがいいという理由づけは茶話に近い。文部省の役人がそれをいうわけにはいかない。建設をしぶる理由づけがだんだん危くなってきた今年である。金印が紀元六七年、神武紀元が六六〇年さかのぼるとしたら数字や事実あわせが困難なことは誰にもわかる。私は、神武以来十数代もの天皇がヤマトコトバで呼ばれてないこと作り話であることにも多くの学者が気付くべきだと思う。（ヤマトタケルノミコトのように呼称があるべきだ）

12 月 27 日（木）

動揺ばかりの知事選各陣営

六時からの和田伴における国体警備御礼の意味の県警本部長などに対する慰労会のあと、副知事林、家永室長、団長林氏と私四人で、ここしばらくの知事選めぐる人の動きにつき観測を交換した。前商工部長大塚が重富陣営を取りしきることになり、県幹部にも手をまわしているとか。山崎広太郎をめぐる太田県連会長、山崎拓選対本部長の態度だが両人共重富陣営に行ってしまい、山崎広太郎は脱党し、多数の両政令都市の市議を引きつれて行った関係で、自民党内部がガタガタになっている。その影響は県議、その他の市議にも広く及んでおり、地方選をめぐる自民党は今や分裂状況。太田誠一氏はその責任をとらされるだろうが、責任のとりようもないとのこと。党は中央、地方とも重富にまとめたいが、山崎広太郎氏側は地方のことになぜ中央が深く介入するかと反撥している。こちらの方が筋が通っているようだ。両陣営とも奥田の病気退引を祈願しているという。こちらも共産党、連合どちらもつっぱり合って受け皿がまとまりそうにない。

12 月 28 日（金）

見とおしがよくない

あわただしく一年が過ぎていった感じ。今日は「御用納め」ということになるが、空気は平常どおりの事務である。帰宅して机辺をみて雑然としているのに、何から手をつけていいかわからない。何をするにしてもすごく時間がかかる。写真の整理、特別発刊物、雑誌、書物、その他、整理の時間がとても足りないからその意欲が湧かない。正月に記者が取材に来ると

いうが、そのために部屋を片付けるとなると、二時間や三時間余分にとられる。明日から姫路に行くのだが、そうした必須の時間に使ってしまってあとがない。日記を読みかえして又思い出すのだが、年賀状のことが加わってくる。あと四日、その対応になすすべをしらない。年末になって気になるのはやはり健康のことだ。今日の検診の結果。血糖二八三、尿糖+++、これが食後三時間、あまりにも高い。又血圧は下が八四、上が一四四、これ又高い。陳情旅行で疲れたのではといわれるが、それにしても少々ひどい。のんびりしたいが年末年始とて、そうもできない。精神的緊張は少しは弛むだろうが、自分で原因がわからないから対応のしようもない。あと、年末年始の一週間で少しでも好転するように努力したい。一寸見とおしの悪い暮れとなった。

12 月 29 日（土）

ありがたい里帰り

歳末の兄弟餅搗き会にいく。もう何年目だろうか。四年になるかな？　これを口実に、互に会って健康を祝し合おうと約束した餅搗き会なのである。又近年はこれを機に、西脇、打越、刀出の本家、田辺に挨拶。そして仏壇、お墓まいりもする。おおげさなようだが、先祖、縁者にお礼の気持を伝えようというわけである。まだ動けるからできるし、知事という座にあるからそのような思いをもつのだといわれても仕方がないけれど、しないよりもした方がいいと思っての里帰りなのである。九一、和代、晴久及びその家族が面倒であるのに私のこの里帰りを受容してくれるのも有難いことだ。かなり煩雑、迷惑をかけるのに協力してくれる。そのおかげで、自分の気持を整理することができる。姫路と福岡という距離が一つの意味をもつのかも知れない。ただ残念なのは、佐方をまわり道に入れられないことだ。村の人もそれほど縁のあるものと思ってないのも事実だが、章の家族情態も寄り付き難くしている。この方面にごむさたしているのは仕方がないと思う。気にはなりながらである。

12 月 30 日（日）

不安な越年

姫路勢は誰も福岡の次期知事選についての近況は知っていた。国体や千秋楽での私の出番もテレビで承知していた。国体開会宣言の声が大きかったということも加えて知っていた。次々とうわさとして広がっていくようにもある。東京の毅の長男慎吾君は日大三年生らしいが、選挙には春休みを使って応援に行くといっているし、九一も和代も必要な月日を連絡してくれれば手伝いに行くという。こうしてみんなで気にしていてくれるので、自分の健康について不安が大きくなってきた。又今日は福岡から杉山の電話で明けて一日、学文内田先生が私に会見を求めているといっているという。多分、共産党との関係で私に一声をということを含め、学文に満足のいくイニシアティブをと求めているように思える。健康と同じくこれ又不安の材料である。共産連合民社の三つのバランスに私が心を砕かねば前に進まな

いとなると情けないない限りだ。頑張ってとの声に送られて帰福したが、二つの不安を抱えて年を越すことになっている。

【欄外記入】

第二次海部内閣改造、発足　これ又不安要素一ぱい

12 月 31 日（月）

非主体的な迎春

毎年のことながら落付いて次の構想を練って静かに新年を迎えるということはなくなってしまった。精神的に、気分的に、これで今年は締めくくりということは全くなく、時間が来てしまって来年になるしかないということになってしまうのである。こんな非主体的なことがあろうか。身辺整理が一番大きな心の重荷なのに、全く手がつかない。年末に各所から歳暮などが届くが一つも対応できてないのが苦痛である。書斎は書類を積みっぱなし、読書中のものも区切りがつかぬままの越年になる。新年というのは去る年を心ゆくままに締切って新しい気分で迎えるからこそ新年なのだが、暦の上だけの新年なんて意味がない。ひと様が新年で、私自身はその中に投げ込まれるだけということになってしまう。何十年式典とか何々式に参加して祝辞をいわされるのと似ている。失礼ながらこちらにその気分上の準備、一体感がないのと同じである。今日も午後志賀国民休暇村に行く。新年をホテルで迎えるしかないと思っての二泊旅行だが、これ又与えられた逃避行で監視付きになってしまった。

年末所感

まず健康について。糖尿と慢性肝炎というので医師と薬、点滴に今年も明けくれた。それは昨年と変わるところなしということであろうが、事態は悪い方に進行しているように数値に出ている。口がかわき、唾液にねばりが感じられる。元気という点からはやはり気力は衰えていくようだ。ひとの話では緊張、ストレスが糖尿を悪くするとのことだが、ともかくぎりぎりの分刻みのような毎日だし、便所に行くにさえ監視下にあるといえるから、便秘勝ちの毎日である。ところで今日（マ）は何といっても国体（とびうめ国体）の年だ。開催地はリハーサル大会、炬火リレー、音楽隊、マスゲームなど県民あげての取組みだった。七月にはすでに全体としてその気分になった。夏の大会、秋の大会、身体障害者スポーツ大会に来臨の皇族随従に私はとりこになった。記録方は大変だったようだ。記録のビデオはもうできたし写真集もできている。県民が得た精神的感動産物は大きかったに違いない。第三の問題は次期知事選のことだ。自民党陣営は十月もおそくなって動きが見え、福岡市議会議長の山崎、それに中央官僚総務庁の審議官重富の二人を出し、年末に至るも一本化できず、地元と中央で牽制し合い、当方は十二月の県議会で私が立候補せざるをえない状況下で意思表示をしたものの、共産、学文と連合右派とで、まとまりつかぬ排除の泥仕合をつづけ年を越すに至っ

た。

補　遺

二月二十七日　若い人の気心が知れない。県から東京へ出向している二九歳の男子職員が十二月上旬から突如欠勤をはじめ、消息を絶ち、かれこれ三ヵ月になるという話。寮の部屋、中の持物、事務所の机の抽出の中、全く何の所作もなく、贅沢な衣類もそのままにして消えて八〇日近い。友人が一度横浜ででくわしたというのと、銀行から二度ほど預金を引出している形跡だけあって親許や知人、上役には一切消息不明。解雇処分をした事は親も知り、近々寮の荷物をまとめ引き払いに来るという。一体何をしているのか、どこに居るのか、どんな気持で無断欠勤しているのか、今後の生涯をどう設計しているのか、何もわからない。この話を床島所長からきいて一ヵ月以上になるが、今日又その後について質したが不明とのこと。ともかく気が知れない。親や同僚、自分の将来をどう考えているのか、なぜそうなったのかわからない。平素の言動からの推測もできないらしい。いわば青白い知的若者だというだけで、平凡な日常だったのに突然にということである。女性関係に埋没したと私は推測するのだが、だとすればその女性はかなりな金銭をもっていて彼を捕えて離さないということになる。そして彼は人生の夢の中をさまよっていることになる。姉がいるらしい。両親も、泣いている。それに思いを致さない。日本の現代の世相がそういう若者を生み出しているということにもなる。彼が恐ろしいし、それを生み出した世相も恐ろしい。

六月三日　山ノ上ホテルで仲好会のメンバーと非核条例直接請求の問題を検討してもらったが、党や労働運動体が関与しない住民運動の意義について強調されたのは教えられる所が多かった。しかしやはり問題は残ると思う。今の労働運動体は殆んど問題提起をしない、社会問題に冷淡である。労働組合に依存する傾向の強い社会党は連動して社会問題に関し処理の姿勢を示さないし、処理能力が低い。今日のメンバーは東欧やソ連で住民運動が力を発揮したことを重大視している。政治の側が瓦解するならともかく、住民運動も問題解決を究極的に政治に求めざるをえないような領域の問題については政治的な配慮が必要なのではないか。つまり、こうした領域の問題については政治集団の側から住民運動を提起するのと、住民運動のリーダー達が政治集団と連絡をとるなどしないなら無政府性が強まる。社会主義協会が今作用してないので残念だが、そうした仲継ぎの役割をつとめる集団がやはり必要なんだと思う。そうでないなら住民運動も生きてこない。今日の話し合いで住民運動が強意されたのはいいが、政治集団の面で目が届かなかったのは残念というしかない。社会主義協会について討議してみようとの動きはあっていたが、今ピタッと止まっている。そのゆとりがあれば、私も一言したいと思っている。

リュックの会、子ども劇場などは市民運動として、小さなグループとして日常的に運動して

いる。そしてリーダー格は当方と関係ある人である。もちろん政治問題までは提起していない。県庁舎跡地保存については市民運動がおこった。そこには政治とつなげる人がいた。メインは失敗に終ったが、教育庁舎の保存には成功した。地域懇は今休眠中だが、その中から国博誘致の運動が提起され、それが財界にまでひろがり、県を動かし、ひろがりも全九州レベルになり、今では県政方針として又全国の学文を動員して博物館の基本構想を作定する段階にまで至っている。こうした事例を見ても政治的リーダー、つなげ役が必要である。目も耳も内臓も足も手もそれぞれに必要なのである。数ヵ月前から当面する社会主義協会の問題を論議し、再出発を期そうとの空気は出ているが、ここでもリーダーがいない。カリスマということがよくいわれる。昔の山川とか向坂とかいう人物がいない。社会主義協会が労働組合や社会党に運動の依拠する筋を与え、各方面のリーダーを糾合してきたことは確かだが、今は人物がバラバラだし、住民市民を糾合する理論もないし、かけまわる人物、カリスマ性を発揮できる人も見つからない。こんどの直接請求署名運動だって、求心力をもっているとは思えない。善意の人達が何となく運動を聞き及んで集まった程度だ。

八月五日　筑後川フェスティバル甘朝のサミットパネリストとして参加した中で、水の評論家富山和子さん、平松知事その他ダムの地元が、下流、利水者（流域外の福岡市をふくむ）に対し、変に「上流意識」を強調しすぎていたのが気になる。水の大切さを強調するのはいいが、下流利水者に恩をきせすぎる傾向はないだろうか。ダムの水没者に十分補償するのは当然だろう。しかし、影響をうけること少い人が下流利水者に恩を押し売りするような空気を作るのはよくない。下流に産業がさかえ、人口がふえ、利水を欲するのは自然というべきで、下流にも水利権があるというべきであろう。上流が下流に水をやらない自由があるというのは言い過ぎであろう。又下流の者は上流の者に対し、税をもっと出せとか、基金を設置して上流のものを遇すべきだとの発想はいいとしても、そのためにこそ、国、市町村財政が介在しているのだということを無視してはいけないだろう。今日の福岡市長は謝恩を強要され督励されるためにやって来たようで気の毒ですらあった。平松知事や大山町長がいくら上流意識を強調しても、それによって何か新しいものが出てくるわけではない。直接的に福岡市や筑後川下流に恩着せがましくいうのではなくて、税制、予算編成を通して上流の者にも納得のいく施策をせよと、間接法をもって論ずべきであったと思う。

九月十五日　敬老の日。ねたきり老人は痴呆への道だとの報道があった。老人過保護の一種がねたきりをつくる一つの途になっているのではないか。荒っぽくいえば老人にも何でもさせる。できなくなるなら死んでもらうというほどの考えがあってもいいのではないか。他の動物の世界では各個体は自己処理が原則で生存しているように思える。過保護、ねたきりは人間社会の中途半端な豊かさの結果なのかも知れない。自己処理の原則をもう一度見なおしてはどうだろうか。過保護の中には医療の過剰もある。「それでは医師の収入にならな

い」という制限があってもいいと思うのである。検討の余地ありだ。

十月四日　県評センター（梶村理事長）は加盟単産の代表を集め、次の知事選に奥田を推すことで、来週中に出馬要請することを決め、又いわゆる学文を再編し、政倫条例の署名にも取組むことにした。十一月下旬までに選挙母体を結成するといわれる。県民の会から県評センターが脱会し、事実上これが崩壊したので、その再建を目ざすものでもあるが、非共産を主張する連合内部を固め直す戦略でもある。来週中に出馬要請というが、私の方としては「奥田三選」に即答をする時期でないことは明らかで、まだ一波瀾はさけられない。政倫条例は二期目の公約であるが、九月議会で、動き出すべく答弁しているのでくいちがいはおこらないはず。

十月十二日　朝の放送についての打合わせの時、森山がいうように、私の方から「この指止まれ」式に出馬を表明すると、一般の政治家がそうであるように選挙資金を自分で準備せねばならない、となると諸般の事情からそれはできない。「それをしないところに奥田らしさがあり、リーダーシップをいわれるゆえんがある」と森山はいう。今日の県評センターからの要請のように、乗る船ができるのを待つ外はない。船ができるよう学文連あたりに働きかけて旗振りを探し、これをまず県評センターに繋ぐしかない。徳本大屋と山ノ上ホテルで話し合った結論はそこまでいった。結局今の所旗振りを見出すために、当方がもう一歩ふみ出す必要ありということか。

十月十七日　大坪衣笠島津ら六人が問研で次の知事選の船づくりを話し合ったが、その指揮者指名に困ってしまった。組合側や社共からといえず、学文の中でといっても具島さんは奥さんの病気や年配で、又内田さんも年で、あと、やはり石村善治しかなかろうというコトになった。門田見、土井も名をあげられた、がまず石村にあたってみようとの結論。誰が当たるか、それは木梨さんに仲立ちしてもらったらということで、ここ二、三日中に動こうということになった。石村は据えるにはいいが、旗振りとなると、みんなで助けねばならんだろうと思う。議論は止ってしまう。県評の山本あたりが汗をかかないと、岩崎は時の人ではないし。

十二月二十三日　新聞には三つの知事候補の各陣営のもつ苦悩を報道されている。元福岡市議長の山崎は二大都市の自民市議の大部分の支持はとりつけてはいるものの中央自民したがって県自民の認めるところならず、自民から離党に押しやられ、自民本流たらんとする総務庁からの天下りの重富は公認にはなっているものの、各方面から地方を無視した中央人事に過ぎぬと反撥をくい、大手各社をまわって挨拶に走りまわっているが、地についていない模様、地元にあまり知られてないという弱味がある。両者の一本化が強く求められてい

るものの今のところ両陣営とも一体化に屈する様子はなく、山崎派はもう数日前からイエスユーヤングのスローガンを書いたポスターを張りめぐらしている。自民離党ながら、こちらの方がむしろ地についているし、狙いもはっきり見える。他方わが陣営だが、連合福岡の出方を見ている形だが、参院補選（三重野）北九県議補選（高山）について歩みよりをみせたのに、民社の北橋が「奥田以外なら」と依然自民の方を見たもののいい方をしている。過去二回知事選で自民と組んできたから今更奥田に走るわけにはいかないといい、共産がからんだ側に就かないと主張。この態度は連合福岡の友愛会議部分をつかまえ、このままの線で正月をこしそうだ。共産党は依然として社共共党（ママ）、県民の会存続をいいつづけていて混沌。

十二月二十四日　何だかふけ込んでしまった自分を意識する。時間が余ったからどこかに見物に行こうかとの誘いにも積極的に乗ろうとしない。新しい天地を求める意識をなくしている。もちろん選挙だって自分で出馬を申出る人の気が知れない。周囲からいわれてやむをえないと思うようにやっている。以前からいっていることだが、滅私奉公はもちろん、ひとのため、国のためというようなことは一寸も考えない。僅かに自分のためを考えるこの頃、その時間のゆとりすらないのが残念でならない。ほとんどの時間が不可避的にひとのためにならざるをえない状況がつづいているが故にそういう考えになってしまうのであろうと思う。毎日が自己に忠実になってないからであろう。新潟から東京への途中、嶋崎氏と新幹線の中で話していて岡崎次郎夫妻が行方不明ということを知らされてびっくりしたのだが、ニヒルという要素はともかくとして、自分を消すという気持になるのが私にわかるような気もするのである。生に執着するのが一般であるが、おかれる状況によっては執着しなくなる。生を断つ方がよいと考えるにいたることもあろうと思う。実行することがかんたんという状況におかれるのであろう。どこまでも生を求める執着さがあっていいはずなのに、それが薄らぐのが不思議でならない。いってきかせる人がほしい。強烈な刺激がほしい。与えられるだけでなく自由に自分を生かせる私がほしい。

【「出納録」への記載】

本島長崎市長銃撃事件

西日本新聞 1 月 20 日朝刊より

本島等長崎市長銃撃事件で長崎県警の捜査本部は 19 日から殺人未遂の疑いで逮捕した右翼団体「正気塾」幹部田尻和美容疑者（40）の本格的な取調べを始めたが、田尻容疑者は 18 日の犯行直後から逮捕されるまで潜伏していた長崎市内のビジネスホテルの部屋から東京大阪の各正気塾本部に合計 6 回電話をかけていることをつき止めた。捜査本部は田尻容疑者が「犯行結果」を事後達告（ママ）していたと見ており、組織的犯行との見方を強め、さらに追及している。犯行の動機については田尻容疑者は「市長の昭和天皇に関する発言を許せないと思い、市長に鉄槌を下そうと思って実行した」と供述した。

公明党が迷いはじめた

10 月 18 日の新聞では国連海外（派兵）協力（隊）法の国会審議の中、社会党は断固阻止をいっているのに公明は審議をつくそう審議の拒否はしない、いってみれば多数が勝つだろう、場合によっては自民と連立してでもと考えはじめている。消費税導入の時も同じで、あとになって県議会で執拗に私を攻撃してきたのが思い出される。公明は自衛隊賛成安保賛成を社会党にせまっている。水面下で自民から資金援助をうけているからだといわれている。いわんや民社をやである。つまり、民社はいずれ自民につく。そうして両党は票を自民に吸収される衰退の道をたどる。両党の役割は歴史的に社共から票を取って自民に還流させることにあったのだから、この時点でますますその作用が明確になってきた。連合が票を〔反自民非共産〕分け取りして自民に流す作用を果たす。その為に連合の集会にも顔を出す。

公明と同様に存在意義を失いかけているのが民社党である。どちらも個（ママ）有の立場なく、マタグラゴーヤクのゆえに役立っている。それがそうはいかない時代になってきたのが、選挙民が見放す傾向にある。とくに民社党は大企業への依存心を必要としなくなった今の若者の時代に、企業に指図される行動を好まぬ若者が多くなっていく世相も反映している。企業にとらわれず、自由に振舞って生きてゆけると考える人がふえている。両党が危機を迎えているのが今日の特徴である。

九州は一つ！

12 月も暮近くになると、国会議員も知事も事務を総動員して〝九州は一つ！〟を旗印に予算陳情に力を入れ、決起集会をも開催する。県議会では私に、九州は一つのスローガンにもとず（ママ）き、他県のリーダー役になれと迫る。ただ私は以前からこのいい方に鈍感にしか反応してこなかった。大分県知事の〝一村一品〟にしても私は鈍感である。地方の時代とか地域活性化という観点から魔性をもつ合言葉になっているのに、どうも敏感に反応しきれない私である。

九州は一つといういい方は下関海峡を境界にして切断する表現である。ひとは東京一極集中に注文をつける発想が正しいようにいうが、私は頭をかしげる。福岡に住む者は下関海峡を切断した思考、本州とのつながりを必須の前提としない思考には疑問をもつべきではないか。日本全体を背景にして九州なり福岡県を自負心をもって見直すべきではないだろうか。

九州は一つとか一村一品は遠い過去からいわれてきたのではなく近頃の作り言葉である。歴史的地理的必然性をもたない。金印や鴻臚館、大宰府のもつ意味を忘れてはならない。鎖国時代に九州が果たした役割、明治維新の原動力又は九州から攻め上るような大きな波を考えねばならない。九州は一つどころのさわぎではないではないか。九州は一つ――何と無

自覚な、中央へのへりくだりの言葉だろうかと私には思われてならない。

アジアに於ける日本、その日本の中の九州というふうに自覚しなおさないといけないのではないか。福岡の人間がこの魔言に弱いのは明治以来一〇〇年という短い期間ながら石炭と鉄で日本の近代化に寄与してきた福岡の力が今は衰えた、その泣きごととしての九州は一つの魔性への肯定にすぎないと思うのである。

新幹線、高速自動車道、24 時間国際空港、九州国立博物館など九州は一つという発想からではなく、日本全体の中で必要な施策として主張されなければならないのである。九州のためというよりは日本全体のためというべきである。その努力をさぼってはならない、問題を極限化してはならない。

しかし私の口からこの趣旨を公的に吐くわけにはいかない。

誤字脱字の多い日記

ちょっとの時間、この日記をよみかえしてみる、誤字、脱字がすごく多い。その日一寸した思い付きをそそくさと書いてポイとおく。そのつみかさねである。その時読み返せばいいのに、それをしないから誤字、脱字がそのままになってしまっている。書きさえすればいいという毎日の連続である。しかし中味は書いておいてよかったと思うことが多い。翌年に、これを読み返しながら書けるならいいがと願うが、やはり書き捨てになってしまうのが落ちだろうな。

連合の奥田支持三条件

12 月 21 日連合福岡が執行委員会、構成組織代表者会議で、県評センターの示した知事支持への態度として、共産党と一線を画する必要があるとして

① 社共共闘の支持母体「清潔な県民本位の県政をつくる会（県民の会)」を解散する
② 陣営から共産党と同党系労組を排除する
③ 奥田知事は共産党と政策協定は結ばない

との三条件を提示した（22 日　日経）

連合が県評センターに示した条件提示ならわかるが、他の組織に向けたひどく干渉がましいいいっぷりである。連合から県評系（センター加入）を除いたら五万人もないだろう。そのうちいくらかが、このような横柄なことをいっている。知事が共産党と手を切らないと支持しないぞといっているし、これまでの県民の会の会の解散を要求している。他の動きを見て自分の態度をきめるというのならいいが、他に自分の欲するところを要求し、つきつけてくるとは何と横着なことか。無視したいものだ。

リーダーシップ（12 月 24 日）

新聞記者たちからよく私にリーダーシップないといわれる。評論家の立場からよくその

声がきかれる。オーケストラのコンダクターではあるまいし、多くがその気にならない雰囲気の中で、批評家が多い中に立たされそれができるはずがない。誰もが横を向いているのにリーダーシップもあったものではない。リーダーシップは期待を背に受けてはじめて成り立つ関係語である。

県議会においてまずいえよう。それから九州地方知事などもそうだ。期待がないのにリーダーシップをとれるはずはない。記者が評論家的にそういうだけである。県職員だって半分以上横を向いていると思う。少くともきょろきょろしている。時代がかわったら冷飯をくわされるようなことがあってはならないと、自分を大事に思う心からであろう。サラリーマンということに徹して右顧左べんするのは仕方がない。

そうかと思うといわゆる左翼系の人達はどんな無理があろうとお構いなしにリーダーシップ発揮が可能であるのにやろうとせぬのはその気をもたぬが故だろうと思っている。期待過剰と私は思う。

一つは評論家、一つは利己中心型、一つは期待過剰型、この三方面が期せずしてリーダーシップ不足論を私に投げかける。それぞれが身勝手な評価である。

ほんとうの意味のリーダーシップ不足論もあったに相違ない。その意見には大いに耳を傾けたい。が多分私に積極的意欲が欠如しているが故だろうと思う。いわゆるやる気を失っている場合がないではない。今更という気持がないではない。私も自分がかわゆくて、それまでしなくてもとか、もう疲れたよという気がないではないし、ほんとうに気が付かぬこともある。

知事には政治家的側面が大きい。リーダーシップが客観的に期待される。しかし、現実がそうであるように、殆んど毎日自己喪失のひきまわされっぱなしの時間が多い。リーダーシップを取るには気持のゆとりが必要である。又は事の緊要性が必要である。使命感、義務感という言葉を使い分けて教養部長をこなした時代を思い出すが、あまり多忙だと義務感に陥りやすい。仕方なく毎日をすごしてしまう。サラリーマン的になる。そこからはリーダーシップは出てこない。

1991 年

年頭所感

昨年の第四五回国民体育大会と第二六回身体障害者スポーツ大会は、県政史上でも特記できる大会になったと思う。今年はその成果の上に立って一そうの発展が期待できる希望の年明けということができる。ただちと残念に思うのはこの両大会をどう記録の形で残すかという点で、広報部など関係者の意識が低いので、私としては満足できる成果とはいえないということである。あと追いでもいいから残す方法はないものかと思う。子供の作文などいいはずだ。ところで今年は知事選の年だ。十二月十日の議会質問に対し、出馬を表明することになった。精も根もつきると自覚してのことである。命ある限りと思う。秘書室は依然私をこき使っているが、見方をかえれば有難いことでもある。天命というのはこういうことをさすのかも知れない。ただ、支えてくれる陣営内に一期目、二期目にみられなかった変化、亀裂が生じているのが気になる。連合福岡が、強くもない民社系労組、同盟会議に遠慮して右に目を向け、それが反共になり、共産党系（県労連を含む）が執拗に過去八年間の共闘の形式にこだわり、この、左右への綱引きがわが陣営内にまとまりを失わせ、盛り上がりを欠くことになっている。それに、山崎広太郎、重富吉之助の二人が保守サイドから出馬を表明しており、これがわが陣営に隙をみせる因子となっているというのも気になる。いずれにせよこの四ヵ月が私を決めるのである。（四月七日投票）

1 月要記

一月いぬというとおり、お正月からはじまってアッという間に終った。寒さきびしい折柄ではあるが、毎日が充実して過ぎていった。今年は四年に一度めぐりくる統一地方選の年であり、十七日に多国籍軍のイラク空爆攻撃という二つが例年より重い一月の日々にしていった。各界での新春の会が多様に重なったが、地方選挙に関連する集会への出席もかなりあった。各種の会合に選挙への思惑がつきものであった。体力が衰えるのでそれらが一そう重荷になってくる。睡眠が十分にとれないなやみが加重され、体調に自信をなくするこの頃である。身を削られる思いがする。他方で、選挙に出よという方々からの声は天命として受け取りたい気持になり、意識が身体を動かしているようにも思える。なるようになるだろうと半ば捨鉢的にもなっている。会う人ごとに身体だけは呉々も大事にねといわれるが、そうした有難い願いに私は逆らっているのではないだろうかとさえ思う。つらいけれども有難き幸せというのがこの正月再発見したことである。保守側知事出馬者二人しのぎを削っている。

1 月 1 日（火）

賀状の重み

国民休暇村で新年を迎えるなんてはじめてのことだ。しかしやはりゆっくりの一日ではなく、午後はグランドホテルで知事選をめぐる学文系のもたつきのほぐれにつとめるということで時間をとられた。午前中年賀状を少しでもと努力したが、夜休暇村に帰ってみると秘書の橋本氏が私のうちから玄関の賀状など郵便物をどっともってきてくれていたのに、賀状を一通り見るのに時間をとられてしまった。これも元旦の仕事かと思うと、結局はひとから要望される時間使用になってしまう。これが正常な正月と思うしかない。むしろ考えてゾーとするのは、この何百枚に及ぶ賀状にどう対応するか、これからの課題である。賀状はあってよし、しかし悩みがずっしりと来る。どの賀状もそれぞれの人の工夫に充ちたもので、努力のあとがみえ、それ自体誠意が有難い。こたえるのが当り前である。何年もの間、みずから年末に書く努力をしなかった後悔で一ぱいである。これ又時間をとれず止むなき状態である。昨年はあとの対応もしなかったが、今年は今後何とかせねばならない。

1 月 2 日（水）

共産党の顔と腹

昨日は午後橋本秘書が私のグランドホテルに行っている間に子供連れで私のうちから賀状など取って国民休暇村まで運んでくれ、今日の午前中は賀状をみるのにすごしてしまった。やっぱりこれの整理対応は頭痛の種だ。午後は休暇村から帰宅したのだが、報道二社の取材に応ずるためである。和服で揮毫する家庭でのポーズを知事候補としてとるという。山川氏からの電話で、確認団体の件は新年早々にも当方の予定どおり進めることで共産党も OK しているとのこと。共産党が文句を並べそれを学文の各メンバーがまともに受けて協定書だの確認印だのいっているのは中央の考え対するメンツを守るためであって、腹の中ではこだわりはないので、どんどんやってくれと思っているというのである。昨日学文との話合いの席上、具島、土井、高木の諸氏から、私が「共産党は納得している」かの発言をしたのは甘いとの批判が出たが、腹の中では納得し、公的、外向けには固い姿勢をとって中央への顔向けを作っている点への理解がないためなのだ。

1 月 3 日（木）

非核条例署名の準備経費負担

大坪氏が二度も電話してきた。昨年夏に池永弁護士らが進めようとした非核条例署名準備に要した経費四八〇万円云々の後始末で共産党系の人達が頭にきているという。福岡民報の十二月に発行された分にも奥田知事の非としてこの件をトップに掲げていたのを思い出す。経費の一部は大坪氏も弁済に協力しようということになっているらしい。しばらくこの種の話はきかなかったのに、この頃になって言う人が近くに現われたということは、これがやはり知事選にいくらか絡んでいるらしいのである。社会党や県評センターが賛意を表わさないままに署名準備をどんどん進めた不用意さを当事者たちは自分らの責としないで他

におしつけようとしているかのようだ。夏の段階で表面上問題にしなかった共産党系が今になって問題にするのは借金の後始末がうまくいかないからかも知れない。カンパが訴えられているようだが、大坪いわく「ドブにカネ捨てるよう」だのに誰がカネを出すか、と。

1 月 4 日（金）

「金屏風」がモノをいう

県評センターが八仙閣の前の小さなビルを借り上げて選挙事務所とし、そこで十二時から旗開きを行った。報道が注目する中、知事県議の候補が来客格で紹介をうけた。正面の幕には「二一世紀の福岡をつくる県民の会」という文字が入っている。その会の旗びらきにもなっているが、今まだ決着していない名称が用いられており、共産党系からは文句が出そうなことになっている。相談中なのにもうゴーサインを出したようにみえるし、出した以上はひっこめられないんだと県評センター幹部は胸をはっている。「待てない」との気持のせいだろう。正式に県民の会がスタートするのはまだ十日かかるだろうという。われわれが「金屏風」と考えている「学文」の構成メンバーがあれこれ意見をのべるので年内決着がおくれて今日に至っている。知事室で今日も私見をのべたのだが、「金屏風」はダマッテいて党派的意見や選択をしない方が「金屏風」らしいのに。当面はモノをいう「金屏風」なのでみんなが困っているわけだ。

1 月 5 日（土）

国際交流

技術立県と国際化をタテ糸として県勢発展の牽引要素にしている私であるが、国際化が何故にその大きな柱になるのかと、先日暮れの県政研究会で疑問を投げかけた人がいた。わかってくれないが、交流によって相互の刺激になること、又福岡がアジア交流の西日本の拠点になろうとしている点を考えてもらいたいのである。技術、商品、人物、文化が交流すると相互に刺激し合うし、とくに外国相手となると効果は大きい。朝日新聞の一月一日号に陳舜臣が「異質な生活様式との交流で」日本の生産、文化が発展してきたことをのべている。遣唐使はその他にも往来を随伴していたのだし、倭寇など大変な交流の一つの変形であった。鎖国時代にもオランダ、中国、朝鮮との交流はあったのである。国の政策が御朱印船とか鎖国という特殊な方法をとったのであって、今日の自由貿易からみると異様にみえるが、それなりの交流はしており、日本は決して閉鎖された孤島ではなかった。だからこそそれなりの発展があったのである。

1 月 6 日（日）

若者病

近頃いわれている若者問題。経済価値の追求に走りすぎているのではないか、家族や社会に

対する思いやりが足りないのではないか、辛抱したり空腹を感ずることに耐えたりしないのではないか、享楽に走りすぎるようである。その典型が暴走族だ。昨年は全国で一万一千人をこえる交通死亡事故がおこり記録の更新になった。若者の原因者たる比率が高まっている。昔の戦争ありし時代の戦死者より累計では多い交通死亡事故が重なっていく。人生八十年時代というが今の若者が高齢化する頃には余命が低下しているに違いないとの立論もある。これまで成人病といっていた病状を今の若者がすでにもっているケースが少くない。食生活に起因するともいう。又硬いものを噛むのを嫌がるのでアゴや歯の発達に弱さがあるともいわれる。全体としてこうした傾向は若者病であり、社会病といってもいい。先輩の責任か。

1 月 7 日（月）

大型化する若者

昨日の新聞に、文部省学校保健統計調査の結果が報道されていた。現代っ子は 17 歳（高二）で平均身長男一七〇・四センチ、女一五七・九センチ、体重男六二キロ女五二・八キロ。男子は四〇年前の高二と今の中二が同じ、中二の男は四〇年前より身長が一七・六センチ、体重が一三・九キロ大型化しているという。肥満化、早熟化が進む一方、視力が減退（眼鏡高校生の三〇%）、肥満児と診断された割合が小学生で二・二%に達し、小児成人病がひろがっていると指摘されている。欲しいものは何でもあるかわり、自分で作る努力をしなくなっているだろうし、受験勉強に追い立てられて、他の人間的訓練が及ばない。他人、家族、社会への思いやりの心が育てられることなく、身体のみ大型化していく。昨日は先輩の責任という言葉で結んだが、これは親であり社会である。物の豊かさの中で心がますます貧しくなっていく。体格は大きいが心は狭いといってよい。誰か個別の人に責任を負わせるわけにいかないとすれば、行政や社会運動で克服するしかない。

1 月 8 日（火）

同盟・民社は消えるのに

三時から連合福岡の新春交歓会に出席したが、知事選について、奥田推薦をトーンダウンし、支持との原案としたこと、奥田にはリーダーシップがないという同盟系の意見が勝利したということだったので、私も気分を悪くし、会場を早めに引きあげた。公明党の吉永県議の顔もみえたし、「奥田以外なら推薦する」と年末に明言した北橋の面影も浮んで、この場に嫌気がさした。同盟の票何票を期待しての誰か知らないが、民社系のこの恩着せがましい態度に何の有難味も感じられない。何年か後には消えてゆくとさえいわれる民社系の労組ではないのか。反撥すら覚える。明日北九州の連合に新年挨拶に行くことになっているが嫌々ながらの挨拶となる。経営者の集団の方がまだましと思う。尾をふる犬以下の同盟に遠慮する旧総評系なのだが、自公民連携に水さす方策ということで公民に尾をふる連合の総評系

幹部の気持には納得できない。いずれにせよ、流れを傍観したいが、気分を害されたことだけは確か。「リーダーシップ云々」を出す者はすべて味方と思えぬ。

1 月 9 日（水）

公明・民社が自民にすり寄り難くなってきた

北九州連合に新春会挨拶に行かずにすむことになった。福岡の共産党旗開きにも行かないことになった。相打ちである。新聞で連合型選挙になったと報ずる向きもあるが、それはまだいえぬ。連合福岡が「支持」をきめたのは、自由投票程度で、するもせぬも勝手ということなのである。共産党を切らねばならぬときめたわけでもない。保守系で山崎広太郎、重富吉之助の二者択一に決定が下されていない今、公明・民社が（中央とは別に）自民に相乗りする道を選べないでいるところへ、「支持」によって、一層拍車をかけたことになる。県の公明・民社は山崎につこうか重富につこうか条件をうかがっていただろうが、連合が「支持」をきめることになると、自民から持ち出される条件も何もあったものではないということになる。この両党はますます不安定になってきたわけだ。――ただこんなことを考えることは、選挙民にとってはどうでもいいことであろう。万人、もっとさめた目で選挙戦を見るであろうから新聞では、山崎派が、相手は奥田ではない、重富より一票でも多く取って将来につなぐのみといっていると書いている。どっちかへの統一はまだ見通しが立たないと報じている。

1 月 10 日（木）

外国との接触でこそ

田村円澄さんの仏教史周辺の書き出しのところに、新撰姓氏録（八一五年）に古代近畿に居住する氏族一一八二氏の系譜のことが書いてあり、天皇家から出た皇別三三五氏、天皇家に仕えた神別が四〇四氏、朝鮮から渡来の諸蕃が三二六氏に分けられ「中央貴族、豪族のほぼ三分の一が渡来系であった事実は古代日本の文化の形成、また荷担者の問題を考える場合、まず注目しなければならないであろう」とのべられているのをみて、ウンと考えさせられた。あたり前といえばそれまでだが、「国籍条項」という理由で、三代も日本に住む朝鮮人を教員に採用することすら拒みつづけている今の日本の支配層の頭の構造が、どうも私には解せないのである。日本の文化さらには日本人自体が「外来」ものに大きく依存しているのであり、解放的であったればこそ今の日本があるわけだ。鎖国時代でも、ちゃんと外国への風穴はあいていて、幕府の要人は海外の動きをよく知っていたという。「国際化」という言葉が異様にきこえるようなふりがみえることこそおかしいのである。

1 月 11 日（金）

21 県民の会への始動

夜七時半頃すべての挨拶まわりが終ったあと、林県議、梶村理事長らが組織化に努力してくれた知事選確認団体たる「21 県民の会」発足準備の会の出発見込がついての懇親会がグランドホテル地下の和食堂で行われた。土井西井のほかはこれまでの学文の顔ぶれの変更の形になった。共産党が依然旧県民の会の再開を主張し、連合が共産党排除を主張している中、新発足に踏み切った形になった。内田一郎氏らは共産党の OK なしには加入できないといっていて、そのグループは後まわしにしての発足である。浮羽の金子さんや文学者の坂井さんが新規に加入してくれてよかった。徳山怜子さんも応地、市川、中村も。猿渡、中村栄子さんは所要で欠席。その背後で杉山や梶村の努力があったのは大きい。梶村も広い気持でやってくれた。あと共産党、連合が反撥するかも知れないが、動き出したといっていい。彼らの言い分をきいていると、いつまでも動き出さない。ただ年輩の連中、西井、土井、それに中村正夫氏らは私に対し一言も二言も何かいいたい、注文したいという気持はかわらぬようで、尾を引きそうだ。

1 月 12 日（土）

歌を詠む人（中島さんのこと）

中島敏子さんが来て私への賀状をおいて行った。いつものように歌が書いてあった。先日大川家具展からの帰り三潴町長（木下氏）に会って、話題にしたことも知らせておいた。何でもやる気になって生きていくことが大事ということを話し合った。今でも九大アニマルセンター後の職に某教授の研究手伝いに夜間通っているという。定年後のいそしみである。次の三首。

　羊年めぐり来て早死の母を恋ふ生きてゐませば九十六歳

　外来を終（へ）夜に研究をする医師の心になりて実験助く

　手術（オペ）受けし兎の飼育の難しさにも馴れたれどわれは老づく　　寿子

平凡な日常の中で短歌や俳句を頭に浮べようとするのは並の心懸けではありえぬことだと思う。木下町長のことを言ったら、あの人も頑固ですよ彼女の返事。そのような人だから「地下茎」という歌集を出したのであろう。町長からいただいたのを読んでみませんかと彼女に手渡した。昭和五五年の出版だからもう十年にもなるわけだ。自費出版が流行する時代でもある。

1 月 13 日（日）

消防出初式

嘉飯山地区の消防の出初式に出席した。堂々の行進を目のあたりにして力強さを感じたとの祝辞が出る。だが実際団員は「高齢化」していて、言葉通りではないと思った。若い者は都市に出てしまい消防団の高齢化は避け難い。人数もどんどん減っていく。器材が近代化していくので補いはつくかも知れぬが、いざという時にどうだろう。五〇歳前後になると退き

たいだろうがそれができない。何十年勤め云々という感謝状の数がふえる。それにつけても気づくのは消防の仕事がボランティアだということである。行政組織で主力をつくるのが筋であることはわかりながら、その数を満足できるほど維持できないのが市町の実態であろう。それに、行政側の職員がいるから消防団は無用ということにはならない。近頃は女性消防隊もできて補いをつけている。さらに幼年消防隊すらできて今日も演技していた。しかし「火遊びはぜったいいたしません」と合唱したのには、いささか時代錯誤を感じた。焚火とか火遊びは日常の情景ではなくなる。これが都市化なんだから。ともかくボランティア消防につき考えさせられた。

1 月 14 日（月）

国博のテーマを奈良朝以前に求める

西日本新聞の玉井地域報道部長が二時半来室して九州国立博物館誘致運動に関し、稲作の伝来をテーマに中国河母（ママ）渡地方の博物館や遺跡調査を事業として計画したいとの話題をもってきた。国博誘致には京都奈良にないテーマを求めねばならぬとか、稲作伝来をテーマにしたいとの基本姿勢については賛成できる。照葉樹林地帯のこともあって福岡にもそれら樹種を意識的に植え込んだ公園があってしかるべきだという話もでた（宮崎県綾町のことを思い出していた）。九州国博は奈良朝以前をテーマにすべきだというのは前からの私の主張でもあった。スサノオノミコトならわからぬではないが、神武天皇というのは腑に落ちないと私は近頃あちこちで語っている。神武というようなのはヤマト言葉ではないから漢字が用いられるようになって勝手にあてはめた名称にすぎないことが誰にでもわかる。子供の時わけもわからぬまま天皇名を暗誦したのを思い出す。九州国立博物館ができると神武天皇がなくなってしまうという文部省の心配がおかしくなってくる。

1 月 15 日（火）

身辺雑然

さっさと捨ててしまえばいいのに、なるべくとっておく。そのようなクセがついてしまっている。頑固ともいえる癖である。ほとんど何の役にも立たないのではないか、そう思いながら捨てえない。机辺に紙片がたまるばかりである。何かの役に立つと思う心がどこかにくっついていて、それがこの癖の根底になっている。空箱でも形のいいものは残してしまう。書斎のあちこちにある箱はほとんどがカラ。でも今日点検した箱の中には時計が使わない新品の状態で眠っているのもあった。もとになおしておいたのだが、この書斎の中だけでも時計が六～七箇ある。動いてないのも勿論ある。三〇年といわぬつきあいの時計もある。捨てえない、万年筆、ペンや鉛筆、ボールペンの類はたまる一方である。大学時代からの原稿用紙の類いもかなりなスペースをとっている。昨年の夏頃整理しかかって中ざしている写真、そのアルバムが部屋の入口で動かないでいる。ともあれ時間がないのである。今日は休日、

それを考える時間ができたということかもしれない。毎日が投げやりで積んでおくだけなんだから。

1 月 16 日（水）
21 県民の会 14 日に届出
昨日の新聞に、十四日 21 世紀の福岡県をつくる県民の会（代表西井龍生）が選管に政治団体の届出をしたこと、共産党系が反撥を強めている旨の報道がなされ、今日夕刊では、朝の記者会見で私が共産党の支援は排除しないと言った旨の報道がなされた。「奥田みこし」「からかさ共闘」構想とも表現されている。こうした報道をもとに、今後連合及びこれと対立する共産党がどう出るかが注目される。予定にしたがって二十一日に「県民の会」は事務所開きをすることになるが、既存の「県民の会」は事実上なくなったことになる。共産党系の人達の反撥はこの点にある。「県民の会」再開を執拗に主張してきたのだが、これは事実上消え去ることになる。県評センターが取り持ち役を演ずるしかないが、ここには共産党系の組合はない。調整ができないまま走り出すことにもなろう。共産党は社共協定とかを主張しているが社会党はこれに乗らない。からかさ共闘では各党は一歩退いた形になるよう求めている。政策大綱での合意により支持関係に入るわけで、共産党はこの点に危惧をもっている。いずれにせよ、もう動き出したといえる。共産党は少々執拗すぎだと思う。

1 月 17 日（木）
対イラク戦争始まる
対イラク戦争が始まった。バグダッドが未明米英軍に爆撃されたのだ。今日私の身辺はこの話題でもちきった。自治会館における幹部研修や北九州合同選対総決起集会、信用組合協会新年会などテーブルに立つたびに私は戦争拒否の発言をした。庁内で記者会見もあってノーの発言をした。サウジアラビアへの米軍の大量展開が事前にあったわけだが、何十万の兵を動かすのにどれだけの軍費をつぎ込んだかを考えても大変なことだ。米英の世論は急角度で戦争賛成に傾いている。日本がどのような影響をうけるのか予測しえない私だが、平和がつづいた戦後の発展に逆行することになることは確か。海部内閣も米国の後押しを考えているが、何だか経済の軍事化が急展開し、生活や文化、民生・福祉が歯止めをうけることはまちがいない。テレビでニュースをききつづけたが、解説者によると、石油需給について直ちに憂慮されるような事態にはならないのではないだろうとのこと。でも、軍事に財政的、経済的、人的エネルギーがとられるだけ他の分野が犠牲になるわけだ。正義や理論の話ではない。戦争でない解決策を探るべきだ。

1 月 18 日（金）
武力行使は肯定できぬ

午後衆院本会議で海部首相は対イラク武力行使を「確固たる支持」「できる限りの支援」という表現で、アメリカを中心とする多国籍軍の行動を支持する態度を明らかにした。イラクを非難することは簡単だが、後遺症がおそろしい。一つの文明、宗教、歴史に支えられた国を、武力によって屈服させることは止めねばならない。長い目でみて成功しないからだ。全体としてみて、多国籍軍といっても所詮それはアメリカに属するというほかはない。日本がどういいつくろおうと、首相の態度は強い軍事力に依りかかったものというしかない。巨額の損失を敢てし、負担を国民に押しつけるだけではなく、武力解決の肯定に国民の心理を誘い込む従来の支配者のずるいやり方のくりかえしにすぎない。この新しい流れが知事選にプラスかマイナスかと問う人があるが、私はマイナスに逆転することを惧れるものである。武力肯定論がにわかに擡頭してきそうに思えるのである。いつか来た道とまではいいたくないが、民主主義といいながら武力に依存する米英を肯定することは人類の損失でもある。

1 月 19 日（土）

民主主義の壁を厚く

今日は筑後で明日は豊前と、いよいよ知事前哨の挨拶まわりに追われる身になった。ただ申し訳なく感じたのは、平素ごむさたばかりしているのに、いざ選挙となると頭をさげてよろしくお願いしますといっている私を顔におぼえのある人達が冷たく感じたのではないかということである。選挙の時はお世話になっていながら、日常の県政の運営では直接その人達のためにしてあげてないのである。逆にいえば、選挙の時には反対側にまわっていたような人のために県政が運営されていることの方が多いのではないかということである。「革新」といわれる相互の関係は真底こういうものなのかも知れない。今日もなつかしい人達たくさんにめぐり合った。直接何もしてあげてないなと思いながら言葉を交わすのもつらいものだ。皆さんのあついご支援で、身を削ってもやり抜きますとはいいながら、実は何ほどのこともできないでいる。ただ、これまで八年間やってきたことが、真の民主主義社会体質の壁を厚くしていくことに役立っているならば了とせねばならないと思う。当面の中東戦争を思うとそんな自覚も湧いてくる。

1 月 20 日（日）

福祉施設をめぐって

選対の車で昨日は夜行橋まで、今日は豊前市福祉施設めぐりとなった。こんなにもあるのかと思う福祉施設、六ヵ所まわったが、三万余の人口しかない市に、老人ホームなどたくさん抱えているのは大変な負担だろう。市民以外の人もかなり多く入所しているし、一度入所したら永年動かない人が少くない。精薄施設もだんだん高齢化していくという。老人医療もかさんで国民医療保険会計を圧迫する。神崎市長が一日随行してくれたが、苦しい立場にあるようだ。車の中で地元の人が説明してくれたのだが、市議の OB などがこういう施設経営を

志す例がしばしばである。それに、活力衰える地域にあっては、これら施設設置が雇用増に貢献すると考えられる。反面、地元の住民にとっては施設からの排水が生活水の汚染につながるとの反撥もあるとのこと。豊前では紛争中の施設もあるという。福祉施設というものがいろんな問題を投げかけているということを知らされた一日であった。

1 月 21 日（月）

執拗な自己主張

雨の中の選対本部事務所開きが十一時からおこなわれた。県評センターが主力で社会党はバック、連合もワキ役、社民連の楢崎氏は台にのぼって挨拶に立ったが、共産党の顔は見られず、帰宅したら無名のハガキ二通あり。なぜ社共共闘を崩したのか、県民の会の存続をと主張するものであった。共産党が今尚この線の主張を崩していない。立場を守るのはいいが、他に対する条件提示が頑固すぎるので排除される結果となるように思う。これまでの学文のうち、土井、西井は参加しているが、内田、具島、の線は参加がない。自己主張はある程度でとどめてほしい。連合福岡の自己主張も（即ち非共産）友愛会議系の引張りによるもので、これでは主体的地位を失うことになる。こんどの中東問題にしても公明よりも民社が結局は自民に就こうとしているのが現実。その自民も内部で統一がないのだから民社は自民の強硬派にくっつくということになってしまう。自己主張も、こう強ければ逆に主体性を失うことになる。共産も民社も、自己主張しつつ自分を失う方向に動いている。

1 月 22 日（火）

高齢化

高齢化問題が急カーブできこえてくる。この前の日曜に豊前に行ったとき立寄った精薄授産施設は、高齢化が進んで困るとのことであった。前回知事選のときも行ったが入所者はほとんど変わってないという。どこまで進むのであろうか。昨日は山村謙一氏が来室して話し込んだが、話題に公営住宅入居者の高齢化があった。彼は全国の公営住宅入居者団体の世話をしているが、どことも同じらしい。いわば低家賃、そして建齢も進んでいるが、建替家賃値上げ支払不能が大きな問題らしいが、それ以上に高齢化による住環境の変化である。老夫婦、ひとりぐらし、近所つき合いなし（孤独）があれこれ問題をおこしているらしい。昨日は尚文堂岸本教室の書初会の懇親会に出席したが、ここのクラスも会員の増はなく高齢化が進む一方。もちろんここでは問題はとりたててはないが若い者が混っている方が話題は明るい。ただ結論は年齢を気にしないで書をつづけるという根性が大切ということになった。その根性が「高齢化」を防ぐことにもなろうとの主張が出たのであった。

1 月 23 日（水）

多事多端

「奥田知事にはこれという欠点がないといわれる。そのはずだよ何もしないのだから」これが今重富陣営の「福岡県を変えよう」の訴えの中味である。こちらからいわせると「よういうわ、何もわかってないのに、だったらあとは力だけ」ということになる。山崎陣営は今重富方から抑止されて力負けのせいか、特にこれという動きが聞けない。一月中に両者の一本化が必要といわれているが、どうも山崎陣営が強制的に引込む可能性がある。だが、天下り候補への反撥がそう簡単に消えるとは思えない。かなり深刻なシコリが自民党内部に残るのではないか思う。過去五年の県政実績についてまとめたものがあるので、項目だけでも残しておく必要があるので、ポケットにしのばせることにした。昭和 61 年 4 月甘木鉄道（第三セクター）開業から始まって、昨年 11 月牛頸ダム完成にいたるまで、とても自分の頭裏に連綿とつづかない項目があって、我ながら多事多端であったのに驚く。昨年の国体や身スポは他律的なものとはいえ、全国的視野からの大イベントであり、県勢の将来を占する重大行事だったと思う。

1 月 24 日（木）

青少年問題フォーラム

篠栗の社会教育総合センターで青少年環境フォーラムが開かれ、冒頭私が「子育ては七ほめ三叱り」というテーマで基調講演を行った。この集会は県ではじめての試み、予算も財政課段階で蹴られたということで予備費対応だったという。六〇〇人入りの会場で七〇〇人以上の人がつめかけ、モニターテレビで室外できいてもらわねばならぬほどの盛況さだった。シンナー吸引、コミック、テレホンQ2、テレクラなど時代ばなれの私には経験できないことが今の子供たちを蝕んでいる。シンナー禍による少年の検挙・補導は昨年、五年前の二倍近い六〇〇人にのぼると報道されている。もちろんすべて親の責任、大人の責任である。物の豊かさ、それを追う大人、それに追従する子供、そして物が人と人との繋がりを阻む。子供は大人や親、友人の愛情よりも物への執着によって、その物が子供の心をむしばむ物であるから、非行少年問題が増大する。カラオケボックスの問題は数年とくらべかなり下火になったといわれるが、テレホン Q2、テレクラなど新手の害物が青少年の環境として騒がれている今日である。要は大人の反省だ。

1 月 25 日（金）

共産・民社の中に立って

「県民の会」を一日も早く、知事の力で再開するように、との趣旨のハガキがどんどん舞い込んでくる。トクメイの差出人もかなりあるが、福岡市南区の人が多い。田川からどっさり舞い込んだ失対問題の直訴状と同じような印象をうける。郵便配達人も、それらを一括ゴムバンドして配達する。おかしいことだが、まずはばらばらにならないようにするためだろうか。今日、選対本部に立寄って松田留吉氏に、共産党との関係はどう進んでいるのかときく

と、「ほっておくしかない、こちらはどんどん進むだけ。いくらいってもわかってもらえないし、ほっておいてもついてくるはず」との返事である。他方、福岡県レベルの連合は「奥田支持」とは決めたものの、今日の新聞では「民労協も組合一任」を昨日決めたとのこと。県友愛会議は一昨日、ほぼ同じ内容の決定をしている。いずれも民社系だが、松田氏は中央が自民に傾き中東戦争対策に加担している中で、県の民社を当方につなぎ止めた影響は大きいと主張する。連合福岡の坂本隆幸氏も同じ。共産党をはっきり味方につけた方がいいのにという意見も周囲で強いのに。

1 月 26 日（土）

湾岸戦争の犠牲

イラクの反撃というか石油の大量海上流出が報道されている。早く終ってほしいのにイラクは抵抗を止めないし、これを止める米軍側の攻勢もない。評論家の話をきいていると、どちらも現有兵器の試射をやっているにすぎないとか、軍需産業はホクホクの大儲けで笑いが止まらないとか。一日に国連多国籍側は五億ドルの支出というから八千億円は武器使用など軍需に費している。関係産業はこの軍需でもうかるはず。日本は九〇億ドルの支援と難民運輸を決めた。一兆二千億といわれるが、これは増税で賄うといっている。タバコ、石油、法人の面での増税らしい。福岡県一年分の予算をポイと追加支援にきめたわけで、自衛隊機を難民輸送に使うのも技術上問題が残るらしいが、戦場近くに行きたがらぬ人もある。自治省は県に医療要員を出すようにいってきているが、一寸考える時間を欲しい。外ではあちこちに反戦運動すら始まっている。軍需産業、軍隊専門の人たちだけが、これで喜んでいるのだから嫌な「大義」に加担したくない。

1 月 27 日（日）

「今福岡が面白い」

「今福岡が面白い」ということが全国的になっている。一昨年の福岡市制一〇〇年記念のアジア太平洋博覧会以来で、昨年の国体の成功もそれに乗りハクをつけたことになる。北の札幌、仙台も同じといえるようだ。東京一極集中の余波といえなくもないが、アジアが注目されるという観点からは福岡の面白さが一味ちがったものであることがわかる。知事選に関連してあれこれの集会に出席してものをいう場合、最近はとくにこのことにふれることにしている。私は東京一極集中を羨む発言をしたことはないし、この頃よくいわれる「福岡一極集中」についても否定的に受けとめていない。地価高騰などマイナス面もあるが、むしろわれわれはこの傾向に対し積極的な自覚が必要であると主張している。国際化の波の中で、又環境問題が深刻化する中で、そして特に文化が未熟な中で、われわれは「見られる」という自覚をもって、更に見られてよい状況を作り出すために努力しなければならない。イベントも知恵の一つなのだ。

1 月 28 日（月）

老母の入院

夜六時半すぎ佐方の章から電話があり、義母が右大腿骨々折のため半田外科に入院し明日手術だという。去る二十四日の夕方、粕汁を作ろうとして台所で動いていた時、何かにひっかかってつまずいて倒れたらしい。米寿をすぎてからではあるが、今年五月の連休に祝賀会をもつことにしていたところだった。それまでに手術成功完治であればいいが、「ねたきり」になるのが恐ろしいと章はいっていた。このケースも高齢化問題の一例といえる。動くからいいということだが、もう無理なことはできない。その限界を明かにするわけにもいかない。章はひとり暮しになってしまう境遇、それに入院加療の老母をかかえる。裏では費用もかかることだ。手伝い人がそうかんたんに得られる訳ではない。和子が一日おきに手伝ってくれるそうだが、これも簡単ではないはず。だんだん行詰まり状態になっていく。家族問題が根底にある。少産少死、核家族、バラバラ家族でカネ余り物余り社会に対処していかなければならない。すぐ見舞に行ってやれないわが身のことを考えている。

1 月 29 日（火）

山崎広太郎陣営頑張る

重富氏が自民の公認であちこちあいさつまわりをして、山﨑広太郎よりはげしく動いていると思ったら、山崎の方も選対事務所を本式に建造したし、今日は午後、国際センターで八千人を集めての決起集会を開き「元気で豊かな福岡県をつくる市町村議員の会」福岡地区本部を発足させた。すごくはりきった集会だったという。これでは重富陣営も顔負けになろう。県議レベルでは、この二つのうちどちらにつくか定かでない人が多いが、市町村議員レベルでは山崎につく者が次第にふえているようだ。ある意味では自民の分裂になるが、代議士の太田、山崎らの立場はだんだん苦しくなっているようだ。重富が眼底出血との話すら流れ、病気断念になるかもという人がいる。まさかと思うが、そうなると逆一本化となり、自民県幹部は詰腹を切らされるとさえいわれている。ここ数日が一本化の山場だろうが、どちらが引くにせよ、うらみ、しこりが残ることは避けられないだろう。中食は知事室で大坪、嶋津が来て杉山も加わっての話だが、わが選対はたるんでいると愚痴。

1 月 30 日（水）

奥田棚上げを狙うか

報道は連日のように知事選の保守系候補問題（一本化）に住民の関心を引きつけている。今日は山崎の方が前に出たように受けとれる記事だ。県職員私の周辺の者の意見では、奥田を宙ぶらりんにする作戦でもあるという。どんどん書けば、どちらに転んでも知名度があがるので、保守有利になると見る。県の記者諸君の中に奥田支持が明らかなのは一人だけで他は全部保守を支えているという。当然の傾向だと思う。もちろん彼等には責任はない。面白お

かしく書き、社内で上役の目に止まる言動をしておれば保身に役立つであろう。ただ、自民を心の底で支持していても今回の知事候補推戴の財界の動きは、どうやら躓きになりかねない。重富陣が退くに退けなくなると、財界の地元筆頭九電の川合の立場は苦しいし、西日本新聞のお偉方も妙な立場に立つことになろう。前回は田中健蔵の後見者永倉三郎氏も成功しなかったので苦境に立っていた。山崎広太郎は常識的な財界バックをもたないし、穏当さは私にも評価しうる面が少くない。マスコミと財界やっていて知らぬふりをする。

1 月 31 日（木）

戦争加担は反対

夕刊に今日の記者会見での私の中東戦争に対する意見が報じられた。八月はじめイラクのクウェート侵攻、一月十七日の多国籍軍のイラク攻撃、そして今日はじめて私の意見開陳である。諸問題を要約して、憲法の精神に反しての武力行使による解決への加担は賛成できない、九〇億ドル支援は使途不明で武力による解決に通ずるおそれがある、自治次官の医療要員派遣協力については県職員にはその余力がない、との意見表明になっている。この態度は県下に伝わるだろう。県外にも伝わるだろう。政府その他どう受けとめるか、又選挙民はどう受けとるかである。すでに戦争反対の大衆行動が各地でみられる。民社党、自民党の大部分は戦争熱をあおっている。読売新聞も明らかに、イラクを武力で抑え込めと主張している。国会で海部総理以下自民政府要人、大蔵省など戦争加担にいろいろ理由をつけて踏み込んでいっている。平気で憲法蹂躙を既成事実としてつくりあげようとしている。私の発言は孤立するだろうか。ともかくこの時点で旗印を明らかにした点意味はあると思う。

2 月要記

海の中道の湾側の「あさり狩り」が近頃さっぱり取れなくなったと十三日の夕刊が報じている。闇に乗じて機械を使って根こそぎ取ってしまうから、稚貝もいなくなるらしい。ひどい者がいるわけ。吉村宅に電話したら長男が大学受験に失敗し、今年はあきらめてアメリカに渡ることを考えているという。両親の方からその息子に、私の選挙のことで手伝いに来てくれというのを言い伝えるのを遠慮しているという。子にモノがいえない親がこの頃あたり前ともいわれる。夕刊に、福岡少年オーケストラの会員が減少して用をなさなくなりそうだ、関心をもつ者が減る、六〇人から今は一五人しかなくなったという。世の中がどんどん変わっていくのだ。それも人間が自滅する方向にと思えるほどだ。ひとのことを考えず自分のことだけを考える。人類が抱えられている自然を人類だけのもののように行動している。勝手な行為がひどすぎる。「つよく、やさしく福岡県」をスローガンに選挙で走りまわっている昨今だが、「やさしく」には他人に対し、自然に対し、やさしくあれとの訴えである。高齢化社会だからこそ、そして廃棄物処理が問題だからこそ、「やさしく」をさらに強調したいのである。

2 月 1 日（金）

すべて幻？

眠るのにも元気が必要だと思っている。ずっと眠りがよくないので、われながら元気がないのだなと思う。元気な人はコトンキューと眠る。それができない。赤ん坊は乳をのみながら自然に目を白くしながら眠りに入る。元気があるのであろう。上京の機内で目をとじるのだが眠りにならない。眠る元気がないように思う。機内テレビの画像が目にはいる。イヤホーンをつけないので、うつろ（虚）像にすら感じる。夢であってもいいし、現実であってもいいし、幻の如く消え行くものであってもいい。夢・現・幻の三つが世界のすべてのようにも思える。画像にニューヨークの林立するビルがうつった。イラク戦争でバグダッドの街並が米軍によって破壊された。現であったものが幻と消えていく。先日マヤ文明展を県立美術館でみた。これら歴史的遺物も幻の世界といえぬこともない。日本人の知り得る限りの昔事を念頭にえがいてみても、地球の、そして人類の、ほんの一極部でしかないことをマヤ文明展をみながら感じたのであった。夢か幻か。

2 月 2 日（土）

かげ薄い労働組合

第 22 回春闘駅伝大会が春日公園で開かれた。自治労県職が春闘に向けて気勢をあげる行事である。春闘が様変わりし、この頃は生活制度要求闘争ともいいかえているようだ。労働界でも、ずい分長い間平和がつづいていて労使の熱い衝突がほとんどなくなって久しい。パート・女性・高齢者など労働条件の改善に多くの問題は残っているし、新たに発生しているが、労働組合の分野の課題になりにくくなってしまっている。組合の組織率は二五%程度に低下した。連合時代になって二年がすぎたが、連合はそうした未組織というか外れた労働者の労働条件は自己課題としない。今日は国民宿舎ひびき荘で勤労協の会合があって挨拶に行ったが、どんなことを論議しているのだろうか。統一自治体選挙の年なのだが、社会党も組合のこのような衰弱の中で以前のようなめりはりのある運動を展開できないでいる。ムード選挙、女性かつぎ出しで形をつける選挙戦になってしまったといってよい。

2 月 3 日（日）

イラク戦争に加担しようという

昨日の県医師会新春懇で桜井会長はかなりはっきり中東湾岸戦争への日本の関与を推進すべきだとの方向で挨拶していた。先日自治省からの通知に対し、公立病院職員の派遣は遠慮させてもらうと私が言った新聞記事を意識しての発言とも受けとれた。医師会とて賛否必ずしも内部統一されてない筈だのにはっきりものをいったものだ。イラク軍は一日カフジから撤退したものの、まだ地上戦闘の危機もつづいている。戦争に「後方」と前線の区別がいつなくなるかわからぬ今日、医師団派遣程度は思い切ってやるべきだと主張するのはか

なり責任ある発言だと思う。自治省の要請も「希望者を募って登録しておく」程度のものだが、積極的に行ってもいいとの姿勢を示す人がいるわけだ。どこに、どんな条件で、行って何をするかも、今の状況では明言できる人はいないのに、行くべきだとか行こうというのは、思想形成の叫びと受けとめていいのではないか。

2 月 4 日（月）
寒あけというけれど
二時すぎの出発となったので、それまで扁額の依頼ものを揮毫することで時間を使った。曇って小雨が降ることもあるような天気、寒空のもとあれこれ植込みの木はじっと耐えているように見える。しかも一時も無駄にしないで春の準備をしているようだ。紅梅の蕾が代表的だ。侘助も寒空に力強い気分をあらわしてひとり咲き誇っている。夜、ニューオータニで国体成功感謝のパーティが開かれた。二〇〇人以上関係者に来てもらった。それぞれ感激のシーンがあったようだ。これも冬の時代に耐えて春一せいに花を咲かせたようなものだ。私には予想もできず目にもとまらぬ感激のシーンがたくさんあったはずで、県民一般のレベルでそれをどうぬくめ持って、来たるべきいつかのチャンスに生かしてほしいと思う。競技成績もさることながら、半世紀に一度、各人には一度しかない感動なんだから、そのことを胸にとめてほしい。冬来りなば春遠からじという。この寒さ、力を貯える期間だと思う。

2 月 5 日（火）
徳永喜久子さんのこと
徳永徹氏から「九十二歳のクラス会」という本を送って来たので早速礼状を出した。藤田たき、野間久子、小野タケヨ、徳永喜久子の四人の筆になる二〇〇ページ余の本である。表紙絵は徳永さん作だ。教養部でその夫新太郎氏と親しかった私は高取のお宅にうかがった事もあるし、日本婦人会議でご活躍の喜久子氏とは「黒い羽根」運動でも縁がある。本書にもこのことが一行ふれてある。喜久子氏は昨年夏他界されたと思うが、「燃え尽きるまで活動する」との信念で、徹氏のすすめで福岡から世田谷に引越された後も永い間老人達と共に老人達のために活動しつづけられていたわけだ。緒方道彦氏がモットーとする「元気で死ぬ」という生涯を終えられたようだ。今日「やま祢」で行われた西日本新聞恒例の新春会の席で芸者あがりの酌婦の人が八〇歳になるけれど、こうして表に出てこないと元気でやりつづけられなくなると強調していた。私の横にいた安川寛氏も八〇をすぎ、右隣の永倉三郎氏も八〇ぐらいだろう。表に出てひと前に出なくてはならない位置にいた方がいいという意見は一致していた。気力が健康と深くかかわるわけだ。

2 月 6 日（水）
戦争が含む論理

筑紫地区の婦人のつどい（大野城総合福祉センター）で、老人介護の問題のほか中東湾岸戦争をテーマとする寸劇が私の興味をひいた。衆院の予算委員会で今九〇億ドル支援、自衛隊機参加が国民の注目の問題として論議に火花を散らしている。政府自民党は公明・民社を巻き込んだ形で逃げようとしている。今日の寸劇のあと私は演壇で戦争についてふれた。戦争はどちらも「正義」といって衝突するもので、この正義の争いを武力で解決しようとするのをやめると宣言したのが日本国憲法にほかならないし、日本人はこの憲法を世界に向けた宣言、誓いをこめて発表したのだから、今これに関与することは前線か後方かを問わず宣言、誓いを捨てることになり許されないと主張した。戦争を肯定する正義論の背後には、産、学、官すなわち武器製造企業、武器試行の工学、軍隊組織の三つに、それぞれ利益、理論、栄進の欲望追求があって、それが戦争肯定の正義論を一般化するにすぎないことを指摘した。惨害を被るのは一般国民で、沖縄の場合によく実験されたように「民」が「軍」より先に悲惨な目にあうのである。

2 月 7 日（木）

「強く、やさしく」

みゆきの誕生祝いを秘書室の数人がしてくれるという。橋本氏が元気で長生きをと伝えておきますというので、「やさしく」との言葉を挿入してくれといって県庁玄関で別れ、私は筑後の「知事と語る夕べ」に出発した。「強くやさしく、二十一世紀に飛翔する福岡県について語ろう」というのが今日の久留米集会の趣旨だから、「やさしく」を加えると県政運営の方針にも合致すると伝えたのだが、笑い種となったようだ。石橋文化センターでの夜の集会の冒頭に私の二期八年をふりかえって次に進むことを説明したスライド上映があったが、まず久留米絣が出てタテ糸ヨコ糸政策を説明するこのスライドはうまく出来ていたと思う。技術立県、国際化、環境対策、高齢化対策の四つがうまく説明されていた。又六人の各界代表意見発表はどれも教えられるところが多かった。今日は四ブロック最初の政策発表会だったのだが、立ち上がりは上々といえよう。「強くやさしく」「タテ糸、ヨコ糸」の大筋がうまくあらわされていて、参加者によくわかってもらえたと感じた次第だ。

2 月 8 日（金）

地方選福岡集会

六時から知事と語る夕べが福岡市民会館で開かれた。五〇〇人は集った。いわゆるファンたちで、県議、福岡市議の候補も揃ってくれた。21 県民の会代表委員も顔を揃え、市川弁護士が「語る」部分を司会、西井教授が代表しての挨拶を行った。農業者木下さんは今後の農業の位置づけ、高齢者弘岡さんは高齢者対策について、主婦井上さんは子育てについてそれぞれ問題提起があり、緑、国土保全、青少年問題、湾岸戦争についてもふれていった。昨日につづき今日も、まずは順調に進行したと思う。寒い中わざわざ集ってくれるのはファンな

らではの有難さである。要はムードを盛り上げようということであろう。金子、応地、中村、土井の各代表委員も来てくれた。坂井ひろ子さんも、猿渡秋枝さんの姿はみえなかった。県議市議ずらりと壇上に並んだのに、市議の紹介をしなかった司会者は妙な手違い司会進行になったと思う。これからエンジンがかかり始まるだろうという段階の統一地方選。安田利政氏から電話があり激励された。

2 月 9 日（土）

自民の内部にあちこちで亀裂が生じているみたい

選挙に出馬する方も推す方もだんだん熱を帯びてきたようだが、今回は二ヵ月ほど立ち上がりがおくれているのだそうだ。保守候補がなかなか決まらない福岡、革新がきまらない東京が見本のようだ。都知事鈴木の四選を自民本部はノーといっているし、自民推薦の候補に対抗馬が出ているのが福岡の状況であり、この分だと保守系分裂で福岡は突き進んでいく形勢である。それだけに私どもの陣営では油断があって手綱がしまりにくくなっている。このゆるみが恐ろしいとの指摘は方々から出ている。今回は資金醵出もうまくいきそうにないというからなかなか締まるのがおそいといわれている。自治労は岩田代議士で、西鉄労組は渕上選挙で疲れているようだし、加えて三重野選挙があって連選ながら資金面での疲れが出ているようだ。近頃は重富についても活気が見られないとのうわさである。でも取り下げる訳にはいかない。取下げたら自民の面目まるつぶれる。一つだけ病院に入るという口実はありそうだ。自民も危機らしい。

2 月 10 日（日）

筑紫野市の給水制限

小雨ふる一日だったが、流れるほどに降ってほしい。この頃なかなか大降りがない。地球環境の問題でもあるのかと思う。筑紫野市は給水制限をしなければならなくなっている。少しは回復したとはいえ、市の水ガメ山神ダムの貯水率は一八%でしかないといわれている。これでは無計画というしかない。水使用傾向に関する給水能力との調整の計画のなさである。市はもちろん県にも責任なしとはしない。福岡市の南部衛星都市は人口急増地帯である。マンション、宅地開発が急に進んできた。給水能力の限界を見ずに開発を許したのであろう。一割カットで間に合うのかどうか、福岡導水とどう関連しているのか、水利権がどう調整できるのか中味については私は知らないが、水はみんなのものと考えて、この非常事態はまず凌いでもらい、今後は計画をしっかり立てて需給バランスをとってほしい。緊急に井戸掘りをするときくが、それは又蔭を生むかも知れない。ともかく水は都市計画の基本中の基本であろう。

2 月 11 日（月）

大義を武力で争うな

西日本新聞の湾岸戦争、私の意見（9）に「大義より惨禍に目を」の見出しのコラムが目に入って、わが意を得たりと思った。アメリカは西側諸国の石油利権を守るための戦いという「大義」をふりかざして戦争を正当化している、これは大東亜共栄圏という「大義」のもとに過ちを犯した日本の姿とある意味で同じじゃないか、報道もハイテク武器に目を奪われる傾向にあるが、その下でかけがえのない命が危まれ、貴重な文化遺産が失われている、イラクも多国籍軍もない、戦争の惨禍を見逃してはいけない、というもの（北九州ＹＭＣＡ総主事藤本新二氏）。二月六日に私は同じ気持を日記にあらわした。われわれはイラク側の「大義」を報道でほとんど知らされない。大義が二つ衝突している。どちらに就くかは別として武力で決着づけることを、われわれは誓って武力非行使を憲法にうたったはずである。だのに、「防衛」という名目で既に武力を貯えているのであって、行使するか否かはもちろん、防衛武装そのものが、この誓いに反するのである。今、湾岸国会で派兵すら平気で議論されている。

2 月 12 日（火）

筑豊にまだ感じられる石炭後遺症

県職労筑豊ブロック青年婦人部の集会が直方総合庁舎であって、すでに整理された質問四項目に私が約三〇分かけて答えることになった。湾岸戦争や女性問題はそれなりにわかるが、田川の四年制大学設置や、宮田へのトヨタ進出について受皿がないのでどうするかというような質問は、うしろ向きというか県依存主義というか、積極姿勢に不足していることが痛感された。トヨタがくると高い賃金のゆえに地元の企業が労働力をとり上げられてしまうとか、田川市を大学設置にふさわしいものにする方法とか地価が高くなるとか負の面が出るということのようだ。むしろ好機至れりと心がはずむのでないと困るのに、プラスと受けずにマイナス面を力説する問題提起の構えがみえる。石炭はなやかなりし時代がすぎて次の世代になっているのだが、精神的な遺産をまだもっているように感じられてならない。二年も前から私が指摘して青年会議所が問題化した例の「精神風土」云々の話がやっぱりある。県職労にもあるというところに根の深さを思う。主体的に、よしやろうといってほしいのだが‥‥辛抱強く説くしかないようだ。

2 月 13 日（水）

下品な論評

二月県議会代表質問初日、自民の中村忠和氏が知事をこきおろす暴言の限りをつくした。議事録に残るだろうに党の事務側の作った質問文をそのまま信じて発言した模様。新聞記事や九電川合会長の発言を勝手につなぎ合わせ筋の当否も検討せぬまま長々とまくし立てた。

私は意識して小さな声ですんなり答弁した。選挙が近いことを意識し、相手をけなしたら味方の得票に結びつくとの策からの発言であろうが、恥を後世に残すことになったに違いない。議会とは、もっと政策を論議するところだと認識できないのであろうか。福岡県議会の品がさがるだけなのに。それとも自民県議の責任者で次の選挙は無投票だろうと思ってか、中村の程がわかってしまったような一日だった。これにくらべ社会党の長谷川氏は奥田県政の二期八年をよくまとめていた。旧教育会館の処分、基金設置のことなど、つい忘れてしまっていたのに思い出させてくれた。亀井時代にはできない処分と思わねばならない。相手をこきおろしたら自分がよくなるというよりは、品がさがるということを知ってもよい年頃ではないのか。未熟なのか。

2 月 14 日（木）

女性副知事ができるか

一般質問で昨日同様下品さを今日は薦野健が演じた。薦野はむしろ居丈高というべきだろうか。押しつけがましいというか、単なる提議というのではなくて知事をなじりながら勝手な提言をする。そう急いで自分を売らなくていいのに。バレンタインデーということもあって副知事をつくるということで、重富、山崎、奥田の三人が国際ホールに呼びつけられた。山崎派の女性のやらせ罠のように思えてならない。表向きみんなまじめであることはまちがいないが、リップサービスできるかできないかの差がある。女性幹部の登用などといっても容易ではない。各種審議会委員の席も指定席みたいに思われていてその打破はむずかしい。女性が一般にもっと社会進出していくことが先決な面もあるのに、それをいうと集った女たちは反撥する。時間がかかるんだということを理解しようとしない連中が多い。三〇〇人ほど集っただろうか。話題が面白いので人集めにはいいだろうが、リーダーシップだけでは事はきまらないのに決まるかのように思う人が集めた話題なのである。策も高等化したものだ。私の方の選対は望まなかったのに、秘書室で出席を OK してしまっていたという。何人かの策士が何百人かを集めた会だろう。

【欄外記入】

〔「女性副知事を誕生させる福岡の会」呼びかけ人代表川口道子〕

2 月 15 日（金）

なし崩しに戦時体制に

一般質問自民の吉村元秀が、奥田は保守か革新かはっきりせよと執拗にせまってきた。一昨日の自民の中村と同じく不毛の挑戦というしかなかった。私が県民党、支持してくれる個人団体に対し排除の道はとらないといっていることに喰いついてきたわけ。共産党をも排除しないのかという意味も含まれていた。これは連合の反奥田分子に油を注ごうとの計略からだと思う。吉村ら自民が、重富か山崎かのどちらかを明示して支持か否かをいうことはで

きないだろう。反奥田、連合の離反に少しでも貢献できればということであればいいと思っているだけである。今日の各紙が明らかにしたように、重富派は自民県連大会、山崎派は後援会事務所開きで、双方新しい勢いをつける集会を昨日同時に開いて、一本化不可能を誇示したのであるが、県議の連中はまだどちらかの去就を明らかにできないでいるのである。選挙戦が進むにつれ、いずれは去就を明示すべくせまられるであろう。中央では公明党が強引に自民に引き込まれようとしている。何億円かになるのであろう。県では急速に吸引力を弱めつつある、ふらふら公明、衰弱公明ということだ。カネに限界がきたように思える。

2 月 16 日（土）

選挙の盛り上がり未だし

何だか気がもめる。選対に気合がまだはいってないという。迫った感が足りないのである。五〇日足らずだが、どの辺からだろう。三月十八日告示といわれるが、それは終ばんに入るとみられる頃だ。今日は豊前地区と行橋地区に行った。寒風の中、この地区にはかなり盛り上がりが感じられた。有難いことだ。ひとごとなのに、京都行橋一市四町の首長たちの陳情もうけたが、支持しますよと一様にいってくれうれしく思った。相手候補の貼紙が行橋にみられぬではないが、浸透は感じられない。みんな開展してくれるなら力になるがなと思う。それにしても北九州などこれからのようだ。八幡製鉄労組が今日奥田支持の決定をしてくれたとのこと。大都市の動きはまだまだ鈍いようだ。福岡市もふくめ、儀式的集会以外に地区に入った動きはいつになるのであろう。広い広い人口多い大都市で熱を感ずるのはずっとあとのことだろうが、どうしてエンジンがかかるのか、誰がかけるのか。県議選、市議選が細目にかかわるであろうが、今の私には少しも感触がえられない。疲れが積るような気がする。

2 月 17 日（日）

知事選の新しい争点

公明党が自民の抱き込みに応じ、九〇億ドル（約一兆二千億円）のアメリカ軍援助が実現することになったは大変残念だと思っていたが、今日の新聞では公明党幹部が、統一地方選にこのことが原因で敗北するようなことがあっても仕方がない決意だといっているのには驚いた。創価学会婦人部が公明党の集票マシンだが、婦人部は戦争支援には反対し、集票機能が落ちることを見越しての幹部の発言といえる。公明党に対し、自民がどれほどの仕送りを約したのかわからないが、党の本質暴露の日が来たわけである。地方選は地方自治の現行の範囲内の政策論争からもっと上のレベルの戦争問題にまでふれざるをえなくなってきた。新聞は東京と福岡の知事選が注目されるようになったと書いている。自分では全国的視野で台風の目になりたくなくても周囲がそうしてきたわけだ。「戦争か平和か」ということも今後は新たに提起されなければならなくなってきたのである。平和問題を自治体問題に取

り込んで訴えざるをえないことになってきた。

2 月 18 日（月）
書道
さまざまの小旗や花を打ち振りて歩む選手の晴れやかにして　御製
昨年十二月二十八日宮内庁からこれが通知されて来て、これを国体記念誌にのせるのに田村寿麻さんに揮毫してもらった。それができ、その田村さんが今日午後三時、議会がすんだあと知事室に来訪され、お礼を述べた。田村さんは、朝日新聞社の九州山口書道二十人展（第十六回展作品集）に入れてある。これをみると市内南区長丘の方で、明治四十年生れと書いてある。那乃津書道会主宰とある。八十五歳か。上品な方で書家とはこういう人をいうのかと思った。御製を記念誌に揮毫して下さっていい思い出を残してもらったのではないかと思える。土井仙吉氏が一過性脳梗塞で十六日に入院ときいたので牧坂に電話したら、月曜で玄羊書会に行っていると奥さんの返事。彼は意欲を燃やして書の段の上進に挑戦しているのだそうな。退職して書に没入しているように見える。日本には漢字と仮名の双方からの書芸が独特のものとして発達しているのが、何ともいえぬ特徴である。田村さんの字を見て枯淡というものを味わえた。

2 月 19 日（火）
国家総動員法の前兆
この冬一番の寒気寒風である。その中で六時から警固公園で湾岸戦争と統一地方選についてのアピール集会（天神デモも予定）。今、地上戦回避のためソ連がイラクにあたっている。イラクのクウェートからの撤退が前提といわれている。しかしいずれにせよ、戦闘はいけない。国連決議だ多国籍軍だといって理由をつけての戦争はいけない。アメリカが遠い中東に何十万もの軍（兵士、艦隊、飛行機など）を派遣して戦っているが、理由づけよりも手をひくべきだ。軍をおいているから戦う衝動にかられ、背後の理由を求め、国連が動かされる。国連がなってないというべきだろう。今日は急いで国家総動員法（昭和十三年二月提案）のコピーを作った。議会を抜きにして、政府が戦争するために何でもできるという法律である。満州事変から六年後に日中戦争、その翌年に（いやその年から準備されて）この法ができ、自由、人権、人命、財産が平気で否定される法、勅令で議会抜きでできる法ができたのである。自衛隊機派遣を政令でやることにした今の政府は、この五三年前の総動員法に向けて一歩ふみ出したといえる。兆しがみえるといえるようだ。あと何年もかからないかも知れぬ。

2 月 20 日（水）
声高に自治を守ろう
昨夕警固公園集会での私の話が声高だったこと、戦争反対の態度が明らかになって、集った

人たちに、やる気点火になったことがあちこちで評判になった。今朝は一寸声がかれたようで、あわててウガイした次第である。寒かったのと、反戦の姿勢をこの際明確にしておかねばならないと心の底から言いたかったのと、そうした動機があって声が大きくなったのである。平素はボソボソ話すのに、急に声高になったのは心なしか興奮の程が外に出たのではあるまいか。昨夜は帰宅のあとカゼをひかないかとおそれたほど寒かった。オーバーコートをもっていたのに被なかった。形にならないと思ったのである。あの寒さは忘れられないし、国家総動員法が全面的に民主主義・自由をつぶしたことへのおののきを反芻的に思いかえしたのであった。今日は西日本の記者が私の思いを改めて問う意図での質問が庁舎内廊下で行われた。昨夕の会場で彼等も私の張り切りぶりにびっくりしたらしいのである。民主主義・地方自治が侵されていくように思えてならない。これはむしろ今回の知事選の争点にせねばならぬ新展開であると思う。

2 月 21 日（木）

イラク地上戦突入前夜

イラク地上戦が始まるかどうかの前夜ともいえる時になった。米軍中心の多国籍軍が今にも突入したくて展開し構えており、米軍機の爆撃はいぜんつづいている。アメリカ軍はあとにひけないようになっていて、ひけないように理くつを、又は条件を並べ立てていると私には感じられる。まさに軍の論理が前向きに世界をひきずっているように思える。国連の中でもイタリーやソ連は応じないだろうし、中国その他反対するに違いない。そうした中で日本は「貢献」とか、理くつをつけて米軍の活動に役立とうとしている。自民党内閣はゆらぐことなくそちらに動き傾いている。自衛隊は自衛の範囲をわが勝手に全地球に及ぶ限界なき防衛隊に変質せんとしている。知事選関係で県民に接するに際し、私はこうした論法で、自治を守り憲法を逸脱することを防ぐのが私の県民との約束だと訴えつづけている。奥田さんは案外左ですねという人がいるが、そうだよと答えるしかないし、これを誓って次期に挑戦することになってきたのである。自治を守るということ、反戦ということを表面に出していくしかないのが現時点である。

2 月 22 日（金）

公明吉永氏の引退

二月県議会が順調に終り、夜三光園で県三役が参加して公明党県議の慰労会を行った。十人のうち四人も次回不出馬ときめている現状である。上の方から決められるのであろう。福岡中央区の吉永氏のごときは、すでに準備に入っていたのに、票が足りないとかで出馬を断念、ここ二～三日で明らかになった話である。かなり精度の高い票読みをする党のようだが、運動で足りない分を上積みする努力の上積みをしようとしてもいいのではないのかといぶかりたくなる。党中央では選挙で不利になろうとも湾岸問題では自民党に同調するといい切

っていたので、かなり資金もゆとりができたのではないかと思うのだが、なお力不足を知って引退にふみ切らせたのであろう。これでは運動員や支持者は途方にくれるであろう。可能性を信じてこその立候補であり、目標に向って邁進するのが選挙なのであろうが、まさか中央区の自民党を助けるための突如の引退ではあるまいに、そのようにすら疑いたくなる。本人も信じられない中央指導だったようだ。何だか自民党の裏取引の政治のこわさを見たようにも思える。

2 月 23 日（土）

口実をやめて停戦を

新聞に、イラクがクウェート油田の二五%を破壊していると報じている。又油で汚染されたため海鳥が何十万羽も死んだという。今湾岸戦争でどれほどの人的物的消耗があっているのかよくわからないが、先端技術（ハイテク）実験と考えている多国籍軍によるイラク破壊は大変なもののようだ。人類共同財産といわれる遺跡の破壊も進んでいるという。つっぱり合っている両者の指導部の責任は大きい。追従しているイギリスや日本の指導者の責任も大きい。過去の戦争惨禍に対する反省がないだけ、責任の大きさが倍化される。国連決議を大義名分にしての説明がおこなわれているが、そのようなことを口実にすべきでないことは、凡人が考えてもすぐわかる。口実をいうなと声高に主張しないといけない。この頃知事選関連で出席するあれこれの集会で私は、口実なしの無条件停止を訴えつづけている。国連決議がかくれ蓑になっているともいえる。国連もまちがいをおかしていると考えねばならぬことが多い——こと軍事についてはアメリカ主導だから——ドイツや北欧にならうべきだろう。イギリスボケをしてはいけない。

2 月 24 日（日）

遂にイラク地上戦開始

昨日アメリカ時間正午、日本時間今日午前二時、バグダッド昨日午後八時、アメリカ側（多国籍）の提示するクウェートからの撤退開始期限は遂に切れ、その後八時間ソ連側の仲介中にもかかわらず今日、イラクへの侵攻地上戦が始った。ひる頃号外が出た。テレビでは開戦ニュースがつづいた。戦況は極力公表しないとされる多国籍側であるが、夜になって様々な反応がテレビで伝えられてくる。ふくおか会館で私もテレビに目を注いだ。アメリカはフセイン政権を倒すことが究極の目的という。英、仏、エジプトも軍をイラクに侵入させている。エジプト、サウジでもフセイン憎しとして参戦しつつも、アラブ民族相克を心配する声もある。日本政府はいち早くアメリカの行動支持を打ち出した。国内では反戦集団の動きが急に高まっている。フセインの執拗さにうんざりしつつも戦争という手段は不可とする声は国内で依然強い。いずれにせよ大国が勝つだろうが、何十日もつづく戦線補給は大変だろうし、とりわけ戦後処理が予想できぬほど大変だろう。地上戦の開始は七〇万人派遣の軍の論理

だというソ連側の見方は一考に値する。軍がやったわけ。

【欄外記入】

多国籍軍 70 万（うち米軍 30 万）
イラク軍 54 万

【「両軍の地上部隊配置」（『日本経済新聞』1991 年 2 月 24 日）の切り抜き挟み込み】

2 月 25 日（月）

「積極的に実績宣伝を」

夜 21 県民の会の代表委員の人達と懇談夕食会となった。八仙閣春鮨。選対から梶村、松田が出て状況説明もした。西井氏が切りまわしてくれた。石村、内田の二人が新たに加わり猿渡氏もはじめて出席。徳山、秋枝の二人が欠席（土井は入院中）知事への注文というところで多く出た意見の中に、女性副知事との声、さらには積極性というのがあり、ハッタリも加え、足跡を積極的に宣伝せよという、「イニシアティブ」論の裏返しのような意見もあった。議会の少数与党の状況下でのやりにくさを説いても弁解ぐらいにしか受けとられなかった。混乱や行詰まりを恐れず名案をどんどん出して県民に知ってもらわないといけないという。このようにイニシアティブ論は反対派から出され、味方からは消極姿勢批判が出てくる。これが当面の相場である。隙をねらっている奴らにイニシアを取ることはできない反面、行政の責任を考える立場からは、混乱や行き詰まりを恐れずにつっぱしるわけにいかない点の理解がほしいものだ。でも多くの人が歯痒い思いをしていることを今日又思い知らされたようだ。政治の世界はその場にいないとわかりにくい。

2 月 26 日（火）

老人ホームに参上

寒さがぐっとしまっているが寒（ママ）はそこまできている感じ。梅の時期だ。午後から夕方・夜、門司地区をまわる。松永氏が陽光園を案内してくれた。特養施設、病院、中間施設も揃えられ三つ揃えてうまくいっているようだが、交通の便が一般に人にはよくないのではないか。親族との交流がうまくいく場所がいい。近頃の人は働くことに気がまわって老親を忘れ勝ちになる。みゆきが先の土、日に相生に祖母見舞に行ったが、帰りに妹弟そろって泣いたといっていた。台所で折った祖母の骨折も順調に治っているとのこと。福岡からは見舞もままならぬ。親族が近くに住むということが大切だということを改めて考えさせられる。もう九十歳になるので歩くにも用心、手摺りは忘れないように持って歩んでくれと今日の話の中に折り込んでおいた。ほがらか第一に友達を作って毎日を過ごし、長生き競争をしてほしいと話したら居並ぶ老人達はうなづいてくれた。松永氏も長生き競争という句を引用して使っていた。介護人不足、経営難など問題を抱える老人ホームが少くないという。

2 月 27 日（水）

遠い過ぎし日を思う

昨日は門司、今日は大牟田。選挙関係の集会に集ってくれる人の中に、演壇に立つ人が、「奥田先生」という方がいい易いので、とことわってものをいうケースが少くない。親しみをこめてであるが、六〇歳七〇歳の人達である。その昔、もう四〇数年前に私が県下北から南まであちこち労働講座をしてまわっていたしるしである。昨日門司の全港湾の OB は演壇でその昔の私の講演の中味まで披露して激励してくれたのが印象的であった。三池でもたくさんの知人がいた。「おい、おい」といい合い、久し振りだねと挨拶を交わす。私自身いかにも古びた人間であることが自覚される。福教組結成四〇周年祝賀会が大手門でひるま開かれたが豊瀬や岡松氏の顔がみられた。これらもいかにも古い。これらの人々には絶対信用がおけるが、心配なのは若い人達への影響がどれだけあるかということだ。若い人は意外と冷淡な目で選挙を見ているのではないだろうか。中東の戦争もテレビでゲーム扱いするケースが紹介されるこの頃である。古きにこだわらぬよう自戒した次第。

2 月 28 日（木）

民主主義が問われている

海部首相の湾岸戦争に関する国会答弁があいまいさを強く印象づけると同時に、ズルズルと戦時独裁の方向に国民をひきずり込んでいく姿が影にうつってみえるのが特に感じられる数日だったが、今日はイラク側の国連全決議受諾によりアメリカ側が停戦に入らざるをえなくなった。問題があまりにも多く残り、パックスアメリカーナとはいえ、大変危険をはらんだ状態のままであることに気付く。アラブ民族は平穏たりえないし、アメリカの新秩序の中に平和的にアラブ諸国がおさまりそうにない。何のための戦争だったのかさっぱりわからない。ハイテク武器の実験や古い武器の消耗のためといえばあまりにも犠牲が大きすぎる。イギリスと日本のアメリカべったりの姿勢が目立ちすぎた。アメリカが傾けば両国はさらに傾くだろう。日本はどこかでイギリスとお別れしなければならないだろう。日本では今民主主義、地方自治の真価が問われている。私は各地の演説でそのことを付け加えて強調している。自民党が「奥田つぶし」に懸命になっているのを見てもそれがいえる。平和の原点のことだ。

3 月要記

知事選は三月十八日が告示、四月七日が県議選と同日投票である。この月一ぱい終盤戦である。保守系は二人になりそうだ。いずれにせよ全力で走るしかない。争点はないが、当方、強くやさしく福岡県というスローガンをかかげている。決起集会などではこれを少しく説明できるが街頭に立ったら何といえばいいかに迷いがある。相手は福岡県が危いとか福岡県を変えようなどといっている。わが方は県勢の順調な伸びをいうのが一番いいのではな

いかと思う。高齢化、環境問題など街頭でのアピールになかなか適さない。アピールにいいのは湾岸戦争であり、平和の問題であろう。これは相手二人共全くとりあげない。都合よく停戦になったので、よけいふれなくていい状況になっている。この点については行政よりむしろ党側に意見をたしかめる必要がある。どの程度ふれたらよいかである。平和問題はアピール性に富むと思う。さらに地方自治、民主主義、住民参加も特徴ある点であるが、アピール性は高くなさそうだ。街頭では短い言葉が選ばれなければならない。ある面からは空虚な言葉であっていい。政治的人間側面に訴えられればよいのである。だんだん近まってくる。それを考えよう。同陣営でどういうべきかの討議があってもいいと思う。

３月１日（金）

福岡市のドーナツ現象

大手門会館ホールで永元市議、吉安県議両候補と私の三人に対する中央区関係の人達三〇〇人ほどの激励集会があった。私は五分の挨拶の中で、私も中央区の出身である点にふれた。会場の参会者は一瞬アッそうだという表情にみえた。そういえば、平素誰しも私が中央区にいることを意識してないし、地元三点セットのための集会など初のことなんではなかったろうか。永元が、中央区の空洞化のことにふれて演説していた。ドーナツ現象というか、昼間、天神のにぎわいは特別だが、夜半になると人影まばらというか淋しくなる。小売商店など潮がひいたようになり、老人がふえ、子供が少くなっていくと指摘していた。永元は議員定数も減るのではないかといっていた。中央区から市議や県議が出ることはまれであったし、又まれになる傾向にあると彼はいう。東京には早くからそういう現象があっていたが、福岡でもそうなる前兆がでてきているというわけだ。いい傾向の一面でもあるし、考えさせられる。天神から一つはずれると決してにぎわいはないということと同じではないはずだが、何か混合して思いつめているようにも思える。

３月２日（土）

高齢者作品展

秀巧社ビルで高齢者作品展があっていて、期日はあすまでとのこと。今日は県もこれにかかわっているため私に来会者に向けて挨拶をせよということで参上した。絵画が一番多かった。作品の半分はないが三分の一はあった。書、手芸、写真等々、アマチュアとはいえ立派なものが揃っていた。九〇歳をこえての出品も見られた。熱意というか根性というか、好きというか、何か一すじに走ろうとする人達の秀作展であった。県職員のも中にあったらしい。私は機会あるごとに、仕事ばかりでなくて年涯の自分を悔なきものにするためにも、何か手に覚えをもつよう努力してもらいたいと、平素の心構えを説いている。作品にならなくても、ウタイ、踊り、自分史執筆等々に傾いてもいいだろう。それがあってはじめて人生に情も意もあるといえるであろう。生き甲斐とか満ち足るとかいうのはそうした生き方にも関係し

てくると思う。絵をかくには画房がいるだろう。が、それに躊躇せず突入する決意も必要である。その方面の勉強はいうまでもない。打ち込むことの意味を感じたわけ。

3 月 3 日（日）
形骸化しつつある桃の節句
ホワイトデーというのがいつの頃からか人々の口にのぼるようになり、街ではその日に備え売らんかなの構えがみえる。バレンタインデーの裏返しなのだが、これもいつの頃からはやるようになったのだろうか。日本人は何でも外国のものを引き込んでこれを営業の契機にするようだ。クリスマスイヴがその典型だ。十二月に入る前から街にはその空気が流れる。だが実際二十五日のクリスマスは知らん顔。宗教・信仰はどうでもよい、売れればよいということだろう。今日は三年三月三日そして大安とか。快晴で陽気盛んである。「ひなまつり」というのに、その気分はほとんど感じられない。若者の関心が寄らないらしい。少産といわれるこの頃、若い親も子のことは無頓着、日本の伝統にも無頓着のようだ。桃の節句というのに、売れないのでダメというのだろうか。車の中の雑談のタネにしたのだが、二月十一日建国記念の日とは何だろうかと疑問に思う人がどれほどいるだろうか。誰が何をいつどうしたのか説明できる人は稀だろう。人々の関心は、その日が休日ということだけなのである。

3 月 4 日（月）
危機感強まる世界
夜久留米リサーチセンターでの集会はバンド、ナレーション付きで興味をひく集会だったが、雨のせいか三〇〇人ほどで意外と少なかった。でも集った人は大変熱心だと思われた。バンドの方はよくわからないが、全体のトーンが人間、自然の自滅を語り警告しているようであり、反戦平和をアッピールするものだった。私も挨拶の中で環境、平和、青少年問題について県政の次に向けての構えを語ることになった。つい、三五分も演説してしまった。日本政府自民党の湾岸戦争への対米追随の姿勢は自衛隊機の派遣といい、九〇億ドル支援といい、それに対応する政府、国会の状況といい、昭和十三年の国家総動員法の時局柄に酷似したものを感じないわけにはいかない。このたびの湾岸戦争についての公立学校の授業状況調べも地方における姿勢の危険性を心配させるものである。私はこの調子で進めばあと十年、二十一世紀までに、どんな危機を迎えるか予言を許さないものを感ずる。そのような趣旨でつい長い演説になってしまったわけだ。

3 月 5 日（火）
壁に向って語りたくない
実に春らしい暖かさ。夕方飯塚文化センターで地区総決起集会があり、六人の意見発表にこたえる形で私が決意表明をすることになった。十五分の予定時間に対し三〇分講話するこ

とになった。どうしても私の話は長くなる。困ったことだ。しかし六人があらゆる角度から県政への要望となると、これにこたえるには時間がかかる仕方ない面もある。一方的に私の方から意見を開陳するよりは住民からの要望という形で出される方が対話風にみえていいと思う。しかし、会場は暗く、演台だけライトをあてる方式を止めてほしい。その要望をするのだが、会場照明係の方で勝手に照らし直さないので対話の雰囲気が出ない。会場からの発言も声ばかりでどの席からか見分けにくい。対話にならない。私は壁に向って言うようになってしまう。昨日あたりはよくきいてくれたのに、今日は照明がなおらなかった。これからも前以て注意しつづけたい。壁に向ってものをいうようなのは調子を狂わせることになる。どうやら田舎くさい感じだ。平等に光をあてるのがいいがせめて、演台から会場がみえるようにしてほしい。

3 月 6 日（水）

女性の声が強くなる

小倉北区から県議で上島氏にかわって出馬する勝見氏の決起集会には男性が目立った。西鉄出身であるからだろう。その他の集会には女性がかなり多い。三重野参議の補選以来気付くのは女性選対というのができていることである。近頃女性の活動や発言が活潑になってきたように思う。女性の社会進出に対応する流れであろう。男女差別撤廃の要求もさることながら、育児、教育、老人介護などにつき、女性への「シワ寄せ」が盛んに論じられている。どうしてもその傾向から抜けきれてない。炊事、洗濯、掃除だけでない、高齢化が進むにつれ政府は施設から「在宅」を強調するが、その人材は女性に求められる。解放を欲する女性は出産を嫌がり、今は二人の夫婦で一・五七人の子しか産まない。これでは国の将来すら案ずる声が出てくる。児童手当や育児休暇の制度はこの「少産」をくい止めるに至っていない。出産をふやす刺戟には足りないのである。女性の発言と活動はまだまだ強くなってもいいだろう。多くの男性がもっと関心を払うようにならなくてはいけないだろう。そうした意味で運動と制度の上昇が望まれる。

3 月 7 日（木）

ジャスト・イン・タイム

夜朝日新聞夕刊の「窓」（論説委員室から）のコラム「効率経営の弊害」に目がとまった。「個々の企業の経済合理性の追求が社会にとって許容できない、いびつな姿を生み出す場合もある」と、昨春経済同友会の報告書が指摘し、トヨタ自動車の発案によるジャスト・イン・タイム方式の弊についてふれていた。一企業にとって合理的でも社会にとっては交通渋滞、交通事故、大気汚染などの不合理につながっていくというので、効率第一主義を見直そうとの反省が出はじめているというのである。コイン販売による空缶のはんらん、オートバイの騒音、アダルト漫画、ダイヤル Q_2 等々数え上げればきりがない。効率主義、利便性の

追求、さらには偏差値教育への傾斜が社会、さらには人間をどれほど汚し、ゆがめているか知れない。夕食の話題になったばかりである。トヨタの宮田進出もいいが、ロボットによる人間のロボット化、重労働ないし人間性喪失も考えものだと、今日の鞍手地域挨拶まわりの中で指摘されたのは印象深い。どこでどう線を引くか、「闘い」よりほかに判定の尺度はなさそうだ。

3 月 8 日（金）

高齢者の世界さまざま

筑豊にかけたこの数日の選挙行動強行軍といえる日程消化で、自由に便所に行けず、便秘気味でもあって、自覚的に健康すぐれず途中の車の中は目をつむり勝ち。どうにかなってしまうような気もする。養老院を訪ねることも少くない。特養では私を迎えて入所者が車イスで並んでいる。一〇〇歳をこえる人もある。自分も老人の世界にいるのだが、この人達はさらに一ランク上の老人世界である。余りの能力は少く介護に手のかかる人が集っている。家族がないのか捨てられているのか聞きたいが聞けない。下田川では母子寮に行った。こういう人をどう扱っていいか判断しかねる。ここには失対の老女たちも数人私の顔を見に来ていて「退職金をあげて下さい。だったら引退します」と呼びかけている人がいた。田川市の総合福祉センターでは囲碁に夢中の組が多かった。別のケースだが入浴サービスだけに集まる人達のグループもあった。高齢社会対応と一口にはいうが、さまざまな現実、デイサービス、軽費、特養、老人センターさまざま。一つ一つをみても問題、手数、運営は深刻である。ほんとうにどうするのがよいか判断に迷う。これから切り開くべき世界だのに。

3 月 9 日（土）

農業に未来はあるか

盛り上がりに欠ける選挙前哨戦――もっぱらの評判。当陣営においてもどの集会も空席が目立つ。無風選挙区の県議選ほどそれがひどい。半数の選挙区がそれ。みんなのんびりしてしまっている。労働党上村氏の話では三、三、四で奥田有利といわれているが終盤に入るとひっくりかえらないとはいえない、一本化となり、五一と四九に逆転しないとはいえないという。農村、農協では相かわらず自民への傾斜が強い。そういう中で夕方農協青年部幹部有志の集りで大木町「きのこの里」まで出かけ農業農村の将来をテーマとする対話に身を投じた。農業の将来に危機感をもつのは誰しも同じであるが、名解答が出てこない。EC 諸国に見習うべきだと私は思うが、実は営農規模や民主主義の観点からも彼我の伝統が違う。守りひとすじ、補助金ひとすじの営農、農業政策から容易には脱却できない。農協もそうだし、危機感をいだく青年部だってそうなのである。「嫁」は来ないし、後継者がない、高齢化の一途であり、その背後に収入減減反が進んでいる。攻めの農業の途が開けてこない。ますます行政に依存し、自民政権党に寄りついていく。価値観が経済合理主義で、社会が充満して

いるからだ。

3 月 10 日（日）
選挙マスコミ取材
夕方知事候補三人の余暇のすごし方を絵にすると称して西日本新聞がわが家に取材に来た。半裁タテヨコ二枚を書いてこれにこたえた。ストックのものの中から、これはと思ったのは次の二つ。これは偶然ながら面白い
　タテ　有志者事意成也
　ヨコ　山雨欲来風満楼
と思った。選挙用なので志にふれ、状況急であるという意味にとれる。但し、こんな取材に応ずるには手間ひまがかかる。準備から片付けまで三時間はとられる。昨日の農協青年部同様、この忙しいのにと思うと半分腹立たしい。でもことわるわけにいかない。マスコミというものはそれほど横暴である。平素から貯えた材料を使えばよいのにと思う。今日は大濠観光会館で毎日朝日両紙の取材に応じた。ここ数日テレビでの政見放送など応じなくてはならないようだ。超越してこだわらないしかない。毎日の記者のいうには重富山崎両陣営とも動きは鈍いとか。こちらも同様、決して活潑とはいえない。

3 月 11 日（月）
政見発表
選挙活動の中で一番嫌なのがテレビでの政見放送である。選管がテレビ局にたのんで有権者に周知させる一つの方途としているのがこれである。今日は小学館裏でそのリハーサルをした。秒を合わせるのに骨が折れる。内容がその次。放送姿勢が第二。髪やネックタイにまで配慮しなければならない。品造り競争みたいになる。こんなことやめてくれないかナというと、随行の一人が何年か後に止めるんじゃないですかという。私は三回目である。壁に向ってものをいう。読んではいけないのではないかと思うが読むことになってしまう。宙にできることではない。五分ほどの長さの時間、自由に言ってもいいが、これ又危い。読むようにして固くなってしまう。視聴者が何と思うだろうか。こんなシーンのスタンドプレーで票がどう動くだろうか。今日第一回目で十五秒オーバー、第二回目で五秒オーバー、これで時間しめ切り。原稿を書き直して、こんどは自習熟練に達しなければならない。この忙しい時に嫌な重い荷物である。選管にとっては安易な広報だろうが、当人にとってはそれだけ逆に荷物になるわけだ。他の候補とて同じであろう。こうした裏面事情を知らないでこのテレビを見る人へ、つらい見られる側から訴えたい。

3 月 12 日（火）
糸島

午後、糸島三町をまわった。海あり山あり田地ありで、立派な自然にいだかれたたたずまいを改めて見直した。前原は人口五万をこえ、近々市制をしくことになるらしい。福岡市の西の延長ともいえる、二丈、志摩の両町は美しい海岸を利用してレク・リゾート開発が進んでいるようにみえる。芥屋漁協で若い者が少くなって困るのではと質問すると、いや、若い者もふえているとの返事。漁業にも活気があるようだ。ただ密漁には困っているという。外国からも隣からも犯されるのであろう、見張り番を出すのだという。でも苺とよのかは有名だし、農業ははりつめてみえ、三町は活気を見せている。私の一期目から熱心に支えてくれる人が多く今日の決起集会も隣保館あふれる人の参会があった。一期目、二期目いずれもよくやってくれた。景色はいいし、人情もいい。昔から大陸とのかかわりの中で発展してきた由緒ゆたかな土地柄である。こういうところに別荘住まいをしてみたいと思った。今日は晴れて暖かく桃の花も咲いている。訪れる人には天国のような印象を与える。

3 月 13 日（水）

「一度でも」非難

昨日一時半国際センターで重富陣営の一万人集会があり、後援会々長の川合辰雄氏が「さあ、変えよう会」冒頭あいさつで四点にわたり「一度でも」といういいまわしで奥田県政を非難したと報道されていた。①県民に夢のあるビジョンを一度でも提示したか、②中央に対し一度でもものを申したことがあるか、③中央から一度でも予算を分捕ってきたことがあるか、④雄県として一度でもリーダーシップを発揮したことがあるかと。太田誠一氏は「今回の知事選の意義は無気力な八年間に終止符を打てるかどうかという点に尽きる」といったとか。川合の「一度でも」非難については、今夕の小倉市民会館での北九ブロック政策発表会で当方の市川弁護士（会長）が四点とも全く無根の非難と例をあげて反論した。川合にしろ重富にしろ、県政について何にも知らずに、いいたい放題「攻撃の矢」を放っているにすぎないが、一々反論していると馬鹿らしくなるくらいだ。でも福教祖、高教組がいじめられているのにこの八年間何もできなかったことは事実。小倉で夕食をとっていた時隣の席にいた高校教員から私に直訴があった。その通りなのだ。

3 月 14 日（木）

直鞍をえがき直す

直方市民会館での奥田、野下をはげます会で、ひるま商工会議所の幹部に対してと同じく、新幹線新駅を作ろうとの意見をはじめて公約に表明した。これをトヨタ自動車誘致とともに、直鞍二十一世紀づくりの鍵となる構想として打出した。北九州市と福岡市の中間地帯を直方と宗像を結ぶ線とクロスさせて特別構想ゾーンとしようというのである。商工会議所あたりの構想は古い直方の改装にすぎないが、私はもっと大きな夢をえがいてみたいと思うのである。二十一世紀のアジアにおける日本、日本の中での西の拠点福岡というものをえ

がいた時に、二つの百万都市とその中間地帯ということが考えられる。その夢の中にえがかれた直方は商工会議所の考える直方よりはるかに大きい。炭鉱時代の鉄工産業の街直方とはスケールの違う直方になるのではないかということになる。地元の人達よりも視野広く訴えてみたわけだ。直方地域には支持者が大変多い。今日の集会にマスコミ各社が来ていたが、明日これがどう報道されるだろうかと思いつつ、就床する。

3 月 15 日（金）

誤解のままで「養子」に

夜地区センター田中氏の仲介で飯塚市内の某すし屋で創価学会の幹部の人と夕食した時、そのうち一人が、前回知事選の時も同じような席を作ってもらい、私が養子だとの話題が出て共鳴したといった。今日の席も同様な話題で雑談に時間が流れた。先日和代がこのことにふれたのを思い出す。奥田初治と田靡繁之助の間に違った合意が暗にあって感情が合わなかったと彼女が私にいった。仲に立った小林新治が都合よく二枚舌を使ったのがもとだという。つまり新治は奥田に養子に引き取ってくれと頼み、OK をとり、他方田靡には欲しがっているから養子にやってくれと頼んで OK をとったという。双方が相手に対し恩を売ったと感じているので、相手の対応のていねいさのなさに内心不平をもったまま十年の歳月が流れた。つまり、相手をよく思わない月日だったというのである。確かに私には、両者の間の冷やかさが感じられていた。みゆきとの結婚式の日に繁之助が酒にまぎれて初治に大声で面罵しているシーンが私の記憶に残っている。どちらもこだわっていたのか、繁之助の方がおかしいのか、もう五十数年前のことだが。

3 月 16 日（土）

マスコミ対応は嫌

マスコミ各社にはマスコミ営業の論理と取材の自由が基礎にあるため記者、編集者など横柄な態度が目立つ。なるべく理解しようと思うが、やはり腹立たしくなる方が強く、これは知事就任以来かわらない。つねに闘いだと思うしかない。今日の合同記者会見もそうだが明日も、うちまで乗り込んでくるし、休みと思うのに引っぱり出される日になってしまう予定である。各社まちまちだし、担当が違うと重複の失礼も平気である。選対がきっぱり跳ねのけてくれるといいのだが、これまたマスコミに弱く、ついつい要請に押されてしまう。どう報道するか自由にまかすほかない。でも彼らとけんかしたら負けというから嫌になる。戦争に協力していくくせに自己反省はない。妙な営業が自由の名のもとにあるものだ。少々遠慮してくれるとかわいいのに、それがない。こちらがあやつるようになったらしめたものだがそうもいかない。この忙しい時機に、マスコミの勝手取材に時間を奪われ健康をそこねるようでは全く感じが悪い。

3 月 17 日（日）

共産党系に背を向けて

中比恵公園で共産党系の一万人集会があり、是非私に出席をという要請に、連合に配慮して選対はこれを拒否し、夫人をという事だったが、みゆきも尻込みし、結局九一が行ってくれることになった。西井龍生氏も行ってくれたようだ。今日夕方連合の山岸理事長がくるので、妙な、激しい言葉が出たらマスコミがとびつくので、そうならないようにとの選対の配慮である。過剰配慮かなとは思うが、連合の顔色うかがいが優先したのである。明日の報道がどう出るか予断できないが、共産党系諸団体は力を落したのではないだろうか。私も顔を出してやりたいがかなわぬ願いになった。共産党側も地方選挙を前に奥田を最大限利用するという党略をもっていることは疑いない。正しいことを通そうとしての理くつが先立ってしまうので多方面で拒否反応が出るのである。奥田県政に対する論破もかなりやってきたので、私の今回の対応への評価も複雑だろうと思う。非難から推薦への論調を支持者たちがどう受けとめるかである。選対は排除しているので、別途の動きをしている。岩崎派も別に動いている。

3 月 18 日（月）

出陣の一日あれこれ　前後しつつ綴る

早朝の宮参りは和代、九一らみんなで祈禱してもらった。出陣式には病気だった土井仙吉氏も来てくれた。具島、内田、それから猿渡氏らも珍らしく来てくれた。市川弁護士も県民の会として挨拶、連合会長山岸氏も演壇に立ってくれた。壇上から池田出納長、中村国際交流センター長の顔もみえた。金子文夫氏らわざわざ来てくれていた。いわば総出で 21 県民の会結成時のシコリ、こだわりは見えなくなっている。ただ共産党が排除されているようで気がかりである。香椎の場合森祐行氏が案内車に乗ってくれた。伊三男夫妻が出陣式に来てくれていた。前後してのことだが、近所の奥さん方も来てくれていた。広場での演説はたとえ五分ほどでも大声を出すことになり声がかれる。天神ではそうだった。中山日出子氏が、ノドに注意をといってくれた。何だか緊張の一日だ。どうなるか全く予見もできず、指図されるままの行動だ。中食をいただいたのは東区吉浦公生市議候補の選対事務所で、前回と同じだ。ここでも赤飯栗入りという祝いの食事。まずは出陣の一日。

3 月 19 日（火）

草木はひとりでに動く

八女の朝立ちは寒かったが陽が上がるとポカポカ、平年より五度以上も高いようだった。梅、桃、そして彼岸桜など春らしさが遊説の路傍でぐっと感じられる。ソラマメの花も咲いている。大牟田では久留米よりもモクレンの花の開き方が大きかった。ボケも咲いている。自分のうちで何がどうなっているかわからぬ毎日であるが、レモンの蜂蜜づけは和代が作って

くれていて夜いただいた。川原を探すように歩いている人がいるのはツクシを探しているのであろう。新芽がどんどん出ている木もある。柳のウグイス色の芽は美しい。当方は人の顔ばかり見て頭を下げてまわる選対車遊説の一日である。握手を求めてくれるだけでうれしい。手を振ってくれる人にも同じく応答する。重富、山崎の陣営はどうなのか知らないが、当方は昨日より今日の筑後の人達の反応がよかった。南高北低という前回と逆の現象だろうかとさえ思う。それにしても午後八時までが選対車の終り時刻なので、あと夕食というスケジュール。朝は早いし、すでに若干過労、睡眠不足が心配される。春の草木どころではない毎日だ。

3 月 20 日（水）

マイク車への反応

志免、宇美の遊説では子供もよく反応してくれた。文字どおり邪心がないとみる。手を振ると半分以上が手を振るとか叫ぶとか笑うとかの反応を示す。何かわかってくれるのだろうかと疑念をもつが、ともかく反応しているわけだ。マイクの音が高いので耳を指で栓する子もある。近くにいるので車の窓から手を出すと応じて握手になる。母親と連れ立っている場合は母親もよろこんでくれる。近くで作業中の人は腰をのばしてこたえる人が三分の一は確実である。対向車にも手を振ってジェスチャーを見てもらうが五分の一に反応があることがわかる。中には警笛で合図する車もある。選挙のことが徐々に知られるようになっていることがわかる。三日目だが新聞などの報道でわかって来ているのであろう。他陣営にどれだけの反応があるのかわかるといいのだが。三日目、確実に春になった感じでもう熱（ママ）いくらい。木の芽をふき出している木もある。花はそれぞれに次々と咲いている。どの家も、新しいスタイルで衣裳し、植込みもしっかりしている。アパート、マンションの類は、この点うるおいが足りない。マイク車へのこたえもないのが多い。

3 月 21 日（木）

春の草花の中に居たい

風強く後雨になった。春分で春らしさは満点、麦はもう二〇センチほどの丈になりエンドウものぼりはじめている。筑後川の両岸は黄一色の菜の花畑。車を降りて摘みたいが、遊説はそれを許さぬスケジュール。村落に中に入ると、モクレンはもちろんユキヤナギがあふれんばかりの色白模様を盛り上げている。レンギョウもこれからといわんばかりの勢いだ。みんな職を求めて都会に行くが、田園の生活の方がいいことを知らないではないだろう。屋敷内に好きなように植込みをしつらえているうちが少くない。自分もこのような私生活環境を求めるべきであったと思うし、今後は今の住居をかえてみてはどうだろうと思ったりした。豪華すぎはしないだろうかと思ううちもある。豪華すぎというのは、日常の生活に余分が多すぎるということである。本職の人を入れたり、手伝いさんをおいての維持よりは私の場合

手づくりの住居維持が性に合う。ともあれ、四季折々の草木に囲まれた生活が羨しい。三輪町だったか、見事に列をなしたスミレ花を見て驚いた。

3 月 22 日（金）

「夢あるビジョン」はないか

行橋の個人演説会で私は又重富陣営の責任者川合辰雄氏の「一度も」論にふれて反論することになった（この冊子補論三月二十一日）。三点に加え、もう一点「夢あるビジョンを示したことが一度でもあるか」を加え、これで四点になる。他の三点は地方自治と関係ないものばかりだが、もう一点は関係がある。但し彼は「福岡県二十一世紀へのプラン」（長期計画）及びその第一次実施計画がビジョンをえがいていることを全く知らないのか、知っていてなお断言して県民をごまかそうとしているのか、私はその両方だと思う。それは九電というような場にいて、ビジョンであると解さないからではなかろうか。重富が知らないというならわからぬでもないが、川合が知らないとはいえない。大塚尚という県商工部長を経た人物が事務局長に坐っていてなおこれである。力ずくで県政奪取をねらっているからに外ならない。こんなカラクリを知ると腹の虫がなおおさまらない。今は第二次実施計画も終稿に近い交通ビジョン、女性対策さらには高齢者対策、その他各分野でのビジョンはほとんど出そろっているのである。彼らは地方自治以外自治否定の面から見ているのかも知れない。

3 月 23 日（土）

春がいそいでやってくる

選対車でまわっていると、風景が気になる。まず建物、住居が新しいのが目立ち、経済のゆとりというか発展が感じられる。八幡東区、西区、若松区どこもが大変な変貌である。これでどうして不況がいえるだろうか。欲をいえばきりがないではないかということである。住宅の近代化も著しい。黒い瓦、いや瓦葺きなどとても貧弱にみえる。古いのだ。豪勢な住宅が多い。でも、充ち足りて面白いだろうか。子どもの代にそれがどう継承されるだろうかと考えると、とても想像が及ばない。庭とか塀も、今は、立派であるが、あと二十年もすればどう価値観がかわるか考えが及ばない。もう一つ、急に春がやってきたということ。どこも花、花、花といえる。桜の花も（吉野桜）そこまで蕾がふくらんでいる。車窓をあけて手を振るのに風の冷たさが感じられるが、草木はもっと長い時間を単位として、一雨ごとに春の盛りに向っている。常緑樹の芽も出はじめている。こうして風景は確実にかわるのに、なぜか自分だけが、もっと大きくは私をとりまく人間関係はかわってないように思える。年々歳々花相似歳々年々人不同とは逆か。

3 月 24 日（日）

自民陣営の女性副知事公約

重富氏が女性副知事を作る公約をしたという。それは知っていたが、糸島の小グループ集会で女性が十数人だったので、そのことに私がふれたら、原田八重さんが、それも東京から連れてくるといっていますよと、いう。女性票が欲しくて副知事人事を公約した重富が民主主義のミの字もいわないのだから大した空約束で県民をあざむこうとしているわけである。私は約束できない旨バレンタインデーのあのやらせ集会の時にいっておいたが、あとで少し不評をかったらしい。でも女性問題の解決に向けていろいろ考えているのだから県民の半数に奉仕する姿勢をもっていると思う。重富は女性票を集める手段に利用し全女性に奉仕しようとはしていない。空なる専横めいた言葉であっていただけない。バレンタインデーの国際ホールでの試みは立案側の「やらせ」であることははじめから判りきっているのである。重富はその裏にあったに違いない。女帝を出すようなもので女の立場の改善や男女平等、民主主義には縁がない。重富陣営には大塚という一つ抜けたのが指揮をとり、見当はずれが多い。

3 月 25 日（月）

福岡一極集中批判論

今日は水巻中間地域で山崎広太郎遊説隊と二度でくわした。ダイエーの前で二〇〇人ほど集めて山崎が演説している一齣がきこえた。福岡一極集中批判をしている。県下九七市町村のなかに過疎化している市町村がずいぶんある、という点への言及である。重富のように、それは知事の責任と直接攻撃はしないだろうが、そうした市町村に適宜県から施策を講ずべきだといっているに違いない。私もその必要は感ずる。しかし、企業をもってこいとか、県の文化スポーツ施設を作ってやれというのではいただけない。経済合理性のみの追求をそのままにしては対策は破綻する。文化施設も死物化してしまう。彼はその程度のことしかいわないと思う。そして福岡市やその周辺ではそういう指摘はできないに違いない。私は子供の時の小学読本に「胃とからだ」という題の文があったのを思い出す。それぞれが他の部位を羨むのはいけないというのである。過疎地はそれなりの地域個性は何なのかを再発見し、それを磨き光らせるに如くはなしと私は思う。山崎の福岡一極集中批判の結論はどうなっているのかを知りたい。

3 月 26 日（火）

車社会の安全を祈る

山崎広太郎氏の福岡一極集中批判の落ちは何と県内一時間交通の達成を策すということらしい。いわば誰もが否定しない当たり前論のようだ。でも車社会になり高速道が発達しても一時間交通というのは言うべくして困難である。目標という限りにおいてそれはよい事だろう。それは別として交通を論ずるなら、市内の混雑をどうにかならないかである。やたらと駐車が多い、右折車にほとんど制限がない、車庫かわりに道をふさいでいるケースが多い、

これらについて何らかの対応が立てられないだろうか。もっと車の流れをスムーズにすることが急がれるのである。ふと思ったことだが、交通事故が比較的に少い。ドライバーの熟練度が高まったのであろうか。比較的というのは車の多いのにくらべてという意味にすぎないのだが、事故があった時、当事者関係者の痛みははかり知れないほど大きいに違いない。悲惨な状態でレッカー車が事故車をひいて行くのを二日前に見たことがある。暴走車が一方の当事者であるというケースもあるだろう。自殺行為に等しい。私のごとき、車に乗せられることの多い身になると時々大丈夫かなと思って取手をたしかめることがある。瞬時も油断できない。

3 月 27 日（水）

西日本新聞へ敬意は払えない

重富陣営ではポスターなどで盛んに当方を攻撃する。川合辰雄が無知をさらけ出して演説をする。その影響のせいか西日本新聞には似たような論旨での革新批判が掲載される。今回は、革新知事では補助金が来ないとの意見の紹介である。そういう意見をもつのは悪いといえないが、読者の意見として新聞にのせる側の方が悪いと思う。西日本新聞というのは八年前のお布施事件についてもウソを書いて保守の側にいい顔をしようとした。今回もそれらしくみせないで読者の声の紹介という形をとって革新叩きをやっている。新聞を売りたくて佐賀、熊本、大分の肩をもつ場合があるが北九州では評判がよくなくて朝毎読の後塵を拝している。公正な報道をする方が得だと思うけれど、保守や他県にこびる新聞社である。これでは二流、三流の新聞というしかない。下月隈の個人演説会で私は紙名はかくして、革新には補助金が来ないとの読者意見を紹介するバカ新聞があると紹介しておいた。幾分か腹の虫がおさまったであろう。編集関係者に敬意を払う余地をみずから消している。これはまずいのではないか。

3 月 28 日（木）

集票努力にあと一歩

県南で桜花がチラッとみえた。今年は遅いようだ。投票日まであと十日、燃え方もまた遅いようである。県職員の集票マシンぶりは亀井時代にくらべ全く違ってマシンぶりになってないとのこと。現時点で一人 13 票程度、二〇票にならないと前回以下になるとのこと。情勢を甘くみているせいでもある。第一とりかかりが二ヵ月も遅れているというのだから、前回水準にいかなくても当然ということになろう。亀井時代のような締めつけがなく、私もそれを全く望んでない。自由意思にまかせていいのではないかと思っている。でも今日の柳川は川下り周辺をみただけでも結構沸いていた。二期八年の実績のあれこれのシーンにつきテレビ放映などで頭の中に残っているから、実物をみたのははじめてとか、握手も許されるのかとよろこぶ人が、日増しにふえてきているように思える。自民党側が川合を介して、ポ

スターや各戸への投げ込みを通じて逆宣伝をするが、それが効力を発揮することになろう。あと十日、どんな悪辣な手を打ってくるかわからない。マスコミの世論調査では私が重富より二倍近く多く支持されていると伝えられるが、これがぐっと縮まることが予測される。

3 月 29 日（金）

再び西日本新聞の偏向

県議選の告示日で、無投票になる選挙区が二〇、当選決定者が四六名あるとのこと。それがいつもよりぐっと多いのが今回の特徴で、このことが知事選の盛り上がりにもかなり影響するようだ。当方にはマイナス効果だろう。選挙資金がどうしてもたくさんかかるので、出馬を牽制されるということが根底にある。橋本氏のもって来た資料では選挙区ごとの立候補状況と当落予測がすでになされている。マスコミ陣営ではそれが的否の争いになる。選挙状況の記事のあれこれよりも中る確率の方が関心が高い。ただ西日本新聞や読売新聞では特定候補の得票減になるような報道を敢てするように思える。西日本は知事選で私に狙いをつけているようだ。福田－青木ラインのリーダーシップによるのではないかと思う。やっぱり地方紙の悲哀なのであろう、ひとの欠点、あらさがしに執念をもっている。公正に報道する方が読者確保に役立つと思うが、経営安定にむしろ力点をおいているようだ。これでは伸びに限度があろう。知恵者がいないのかも知れない。当方も記者に会うのさえ嫌になる。あまりにも政治偏向が強い。

3 月 30 日（土）

若い人達による天神行動

前後に福岡市内の選対車遊説をはさんで、二時頃一時間ばかり、西から新天町、西鉄コンコース、車上演説などで、都心が沸いた。選挙用帽子をかぶる者、横断幕、幟をかつぐ者、ピエロ部隊で練り歩くなど、陣営内の動員もあり、土曜の午後のいい時間帯、街頭がふくれ上がり、人々はびっくりさせられたようだった。私も練り歩きの先頭に立って沸かされた。ピエロ部隊などのアイディアは県職員青年部らしい。秘書室からも来ているのが車上からみえた。車上では吉安県議候補が司会し、坂井ひろ子さんほか応援弁士も立った。私には県下自治労からの要望書の束や激励木の葉花びらづくりの寄せ書きが届けられた。あと一週間というところで選挙を盛り立てる注目すべき行事が工夫されたわけである。これを機縁に燃えつづけてほしいものである。天神のこの沸き立ちに先んじて市民会館で行われた競艇場労組の大集会の時、はじめて重富候補の遊説車とすれ違った。先方もかなりこまかく動いているようだが、当方の、このようなパーフォーマンスはないだろう。新天町は山崎派というが、今日練り歩いた限り、市民は何派ということはない。

3 月 31 日（日）

平和ボケがおそろしい

私には年配者とくに女性の間で人気があるとひとはいう。昨年の天神では学生が「かわいい爺さん」「握手をしてみたい」といったという。中年の男性では目をむいて怒る顔をする者、若い男性でははじくように握手要請に応対する者も中にはみかける。三分の一はすなおに応じてくれるが他は無関心をよそおうか、はずかしがって身をそらす。これが小倉あたりでの街頭の一般の反応である。ただ私は報道陣の質問に対して勝利の確信ありと答えた。たしかなものはないが、そう答えるしかない。私は過去八年間に新たに有権者になった人達の反応が一番気になる。彼らは豊かさと新しい享楽には関心を寄せるが政治は空気の如くに無関心である。戦争ボケもしているし、政治は民主主義や平和に関係があると思っているように、空気のように当り前の環境なのである。平和が尊いこと、湾岸戦争がいかに重い荷物を残したかを知ろうとしない。平和ボケになっている。彼らの訓練のために、戦争が実害を及ぼすほどにあった方がいいのかも知れない。

4 月要記

七日の日曜が県知事、県議、福岡市議の改選投票日、そして二十一日の日曜がその他の市長、市議の改選（通常の分）の日。私については長い選挙戦の最後の一週間東奔西走、即日開票、事務所で万歳、記者会見、テレビなま放送の出番とずっと引きまわされた十日間であった。疲れっぱなしである。春を楽しむこともできなかった。二十二日までに新年度の人事異動を終ったが、ひどくいやごとを言われた。原案を作った林副知事、家永秘書室長のいいなりになっているのは許せないというのである。人事のむずかしい面が具体的にあらわれ、諸関係が荒れそうである。なお二十二日には郷田商工部長が動脈癌で急逝するというショッキングな事故がおきた。二十三日は初登庁の本庁玄関前の儀式があったし、就任挨拶というプレッシャーもあって血糖、尿糖の値が異常に高くなる。睡眠がうまくとれないという状況がつづくし、口腔の乾きがひどいという不快感もつづいている。体調がどことなく崩れている。随行秘書は私の歩調が尋常でないと指摘する。よろよろしているように見えるらしい。ひと前では確かな歩はこびになるよう心懸けてはいるが、睡眠薬の残効果ではないだろうかと思う。

4 月 1 日（月）

保守の犬

九大連合で永らく書記をしていた八尋さんが今夕粕屋町中央公民館で行われた個人演説会場に出席していて、先日篠栗の自宅付近で会ったのに又会うことになった。何分か立ち話をしている話題の中に、西日本新聞の知事三選不適の多いとの発表につき、彼女は、質問のしかたにより誘導されてあんな答が出るんですよ、意地悪ね、と私にいった。直後の個人演説

の中で私はこのことについても付言した。それにしても八尋さんの直観的な指摘には驚いた。あれは誘導尋問に違いないというのである。さらに、なぜ今の時点であのような点についての世論調査をするのかの意図もありありである。先日の、革新県政には補助金がつかないというのと全く同じである。「中央直結」を肯定させようとするわけだし、今の知事三選に否定の民意を煽ろうとするものに他ならない。中央官僚を知事候補にもって来たことを肯定し、県政を保守に変えようとの誘導にほかならない。中央との太いパイプ論という従来の失敗の手を別のやり方で継承するものであるというほかはない。西日本新聞はやはり二流か三流の新聞に他ならないことが立証されたも同然、保守の牙城というよりは犬である。

４月２日（火）

春風なのに冷い

風が冷い数日である。遊説の選挙カーでは左の助手席の窓を開けっぱなしにしたいのに、叶わない。開けたり閉じたりになる。春風というのは暖いものと思ったのに、車でとばすとそうではない。もうレンゲも咲いている。吉野桜は少々おそいらしく、今が一～二分咲きといえる。投票日あたりは満開だろう。桜には風の冷たさはどう関係するのだろうか。笹などゆれているし、商用ののぼり旗もはたはたふるえているのだから外だってポカポカというわけにはいかないであろう。大きな川辺の河川敷は菜の花が満開、花キャベツは一様に薹が立っている。筍をいただいたので夕食に利用されたが、やはり旬のものとして特殊な味わいがある。ともあれ残念ながら選挙運動に没頭せねばならぬ身、このいい季節を十分に味わえない。しかし県下東奔西走していると、どこも住んでみたいなという里の味というか野趣が感じられる。都会に人が集まるのは収入を第一にする傾向のせいだが、年金生活者なら、住宅を処理して農村に住みかえるのも一方法だと思う。

４月３日（水）

身体不調のあれこれ

検診で異常に血圧が高いが特別の自覚はない。多分選挙演説が多いので昂奮しっぱなしだからであると自分では推測している。相手候補のいうことが新聞に出たりすると、強い反撥を感じ、どこかの場で反論したい衝動にかられる。根もない誹謗だと余計にそう思う。それにここ数日来、選挙車に乗って姿勢が固定しているせいか両足がむくんで気になる。脚気の時はスネからカガ（ママ）トまでの部分を一寸おさえるとしばらく指あとがへこんでしまうが、これと同じ。前回も検診の時にアピールしなかったし今回もそれですごした。この数日がんばったあとでもいいだろうと思って控えている。表立った事になると行動に制限されたり、治療行為が必要だったりして面倒になると困ると思うから。ともかく数日の辛抱だ。さらに、近頃上部ノミがかわくし、ツバがいつも以上にねばついて気持が悪い。糖尿系統の悪さがあらわれているに違いない。ともかく選挙が終るまでひとにわからぬように自分でガマンす

ることにしている自覚症状の数々。

4 月 4 日（木）
あと二日に迫った時点での集約
今日の日程が終って、やっとゴールが見えてきた思い。あとまる二日、最後まで息抜くわけにはいかないが、ここまで来たという自己慰藉感がある。重富陣営は「あと一歩」と叫んでいるようだが、山崎との対立は大きな溝となっているようだ。あれだけの県議がいるのに、完全に重富をかつぐ者はないようである。財界がしっかり肩を入れているようだが、保守陣営は半身の構えにみえる。山崎は「草の根」とはいうが、ボランティア化しているといわれる。選挙というものを一寸誤解しているのではないかと思う。ハセガワ仏壇の彼も「知事候補公募」とやらをやって、茶番劇を演じ、バレンタインデーに三人の候補を呼んで女性副知事をつくる会が「やらせ」みたいな茶番劇をやったのと、形は違うが味は似たものとなっている。重富が女性副知事を作る公約をかかげているとかいうが、これこそ人気取りというほかはない。中央官僚的といいたいが、それ以下のお粗末さである。マスコミ新聞は当方の社共共闘のキシミを書き立てているが、どれほど反奥田の効用があるだろうか。

4 月 5 日（金）
選挙演説がうまくいかない
いよいよ選挙戦の最終日を迎えた感じだ。明日はむしろ締めくくりとみていい。県民の誰もが傾向的に意識を高めているようで、福岡市内でも、そして特に春日や大野城では住民自身が沸いて来たように思える。十分から二〇分かけての決意表明ではあるが平和、民主、地方自治という側面にふれることに最力点をおいて話すのがいいと思うようになった。逆にいうと、限られた時間内だから政策をこまごまいうゆとりがないということ、そして憲法に立ち返っての話、情報公開條例とか対話事業などにふれて二期八年間にやって来たことの継続発展をいうこと、これに尽きるようだ。ただいつも時間オーバーな演説になってしまう。反省はするのだが、砕けた話にしようとすると、廻りくどくなるのか時間オーバーになってしまう。少ない言葉で切り詰めていく技能を身につけないといけないと思う。今からではどうにもならない性格みたいなものになっているようだ。

4 月 6 日（土）
天神フィナーレ
選挙運動の終点、過去二回も天神総行動と名づけ岩田屋西鉄大牟田線コンコース付近に人を集めリレー演説を行い、知事候補の発言でしめくくりとなる。今年は三候補で場所取り合戦もあるだろうというのでわが方は午後の早目から先取りしてリレー演説をしたようだ。21 県民の会の代表が次々に宣伝カーの上にのぼってくれた。私の方は天神地下街を遊説・

街宣をして私が各店や通行者に呼びかけつつ宣伝カーにのぼった。前回同様ピエロ隊も来ていた。場所の取り合いについては山崎派がぴったりわが方とマイクカーを並べ、当方からいわせると妨害マイクボリュームをあげたが、程なく劣勢であることを自認して引きあげた。今年は地区センターごとにそれぞれ違った創意による集会をした点にも特徴があった。もちろん天神へも各地区センターからの派遣があり、重点がおかれていた。演壇からは多くの知人が集ってくれているのがよく見えた。

4 月 7 日（日）

知事選の一日

昨夜は骨休めとのことで脇田温泉楠水閣に泊ったのだが、到着が十時頃、夕食準備もしてあって、九一、和代、晴久、幸それに随行運転手という顔ぶれだったが、夕食団らんをしていると就床が十二時すぎになってしまい今朝は八時半発で睡眠不足がいぜん続いている。検診のあと投票、このあたりから報道陣に取りまかれ終日終夜報道側とのつき合いで、疲れてしまった。グランドホテルのロイアル・ルームを借り、当選したとの前提で各社の質問にこたえ、投票率が異常に低いというので心落付かぬまま締切時刻を迎え、午後八時には当確というので選挙事務所にかけつけ、祝勝行動の数十分が経過したあと、共同インタビュー、つづいて各社のスタジオに呼ばれ、次々と演台で質問会見に応じ、もみくちゃになった。投票率が低く信任投票みたいになってしまった感が強く、健闘の割には勝利感が沸かないという妙な、疲れが残る一日となってしまった。体力の限界すら感じてしまった。馬鹿馬鹿しいほどである。

4 月 8 日（月）

東京都知事鈴木四選

東京都知事選の開票は今日、予想されたように、鈴木・磯村選は鈴木四選という結果になって決着、一〇〇万票以上の差で鈴木大勝となり、自、公、民の推した磯村の敗北、三位が共産党系、四位が社会党系という順で、共、社はいずれも問題にならぬ支持票しか出なかった。鈴木氏は八〇歳、いろんな理由をつけての自公民の磯村支持だったが、自民党小沢幹事長は、福岡県に関しての押しつけ反発のことも含め、顔が立たなくなったため即、幹事長辞任の意思表明を行った。静かに退いたあと又顔を出すつもりだろうといわれた淡々とした引き際だった。社会党は都知事選の対応が悪く、各県レベルの選挙でも県議数で激減、自民党県議の大増を許す結果となった。土井執行部は後半の統一地方選挙の結果を待ってといっているけれども、大揺れするのは確実のようだ。世界情勢の動きにも的確に対応し得ないところを国民からきびしく指摘されている。米ソ東西関係の弛みがここまで影響してきたともいえよう。

4 月 9 日（火）

天神中央公園での桜見

休養をかねて人間ドックということで済生会病院に入院、選挙後の初登庁諸行事は二十三日に予定している。今吉野桜が満開、天気もすばらしくいいと思っていたら秘書室の数人と済生会の永田常務が相談して天神中央公園で花見会をしようということになり、六時に私も徒歩参加することになった。思わぬチャンスがきたものだ。市役所の職員もいくつかのグループに分れ花見宴をしていた。林副知事、林県議も参加していた。県議からはたくさんな酒類のさし入れもあった。ここの桜はまだ若く若干淋しいが国際会館が建設されたらその頃はぐっと幹も太くなり、中心街での花見といういい場所になるであろう。今回も少し前からの席の取り合いを必要としたようだが、数年後はどうなることだろう。こうして楽しい時を過ごしてみると、公園にまだまだ必要なものがたくさんあることがわかる。福岡の一つの顔になる中央公園を改めて考えてみた次第である。

4 月 10 日（水）

社会党の脱皮が必要

夜大手門会館で知事三選など敢闘祝賀会があった。名称は統一地方選中間総括会とし県評センター主催であった。祝勝会とはいえない取りこぼしが若干あったわけである。又連合福岡が正面に出られない事情があり、共産党を呼べない理由もあり、未だドロドロして固らぬものがあるので祝勝会といえなかったようだ。社会党も正面に顔を出せなかったのである。今後こうした問題の取りまとめに苦労がつづくだろう。優秀な指導者が出てくるか、中央の政党再編がどう進むかによってもっとすっきりするものにならなくてはならないであろう。それにしても知事選勝利という事は全国的にみて意義あるはずだから、中央レベルで社会党の指導力が、方針がもっとすっきりする必要がある。それが問われていると思う。土井たか子氏はつなぎの役割を十分に果たしたのだから、若い世代の優れたリーダーが現われなければならない。そのためには世界的、全国的、地域的視野での新機軸が求められる。

4 月 11 日（木）

「九五年体制」の心配

検査入院中だのに、政治的な問題で午後が全部経過してしまった。随行の橋本氏にきいてもらった一つの話題はいわゆる「九五年体制」のことである。今回の知事選で、三人みつどもえに代表されるパターンの中で、今回の県評センターや二一 C 県民の会のような求心力、候補になるシンボルがどのようにできるかということである。当方は崩壊過程にあるのではないか、二一 C 県民の会に求心力がつづくか、県評センターの如き燃えるグループが存続するかどうかである。元学文の会はすでに影響力を失ったと思う。学文の分野での若い力量はもう期待できないであろう。連合型の運動に燃える力を期待することが疑問視される。

今回の選挙は辛うじて「体」をなしで勝利しえたが、もう次は期待できそうにない。情勢の動きが予見できないこともあるが、客観的な面だけでなく主体の面においてもそうである。今後三年ほどの間に見極めを得なければならない。その為に誰がどう動くかである。私自身県政に埋没していていいかどうか。

4 月 12 日（金）

四月人事内示に思う

三泊四日の人間ドック。検査はていねいに、最少限でしてもらえたが、やはり訪問者が多くて休みにならなかった。年度はじめの人事につき注文が多いわけだ。甲論乙駁でもある。人事は大切であること論をまたないが、役所のことだのに、それぞれこまかく論じすぎる。よかれと思ってすることであるのに、他の面から逆に非難されたりする。今日が内示という。昨日は秘書室人事で議論が沸いた。家永・杉山・高木の名がのぼり林副知事、林県議、家永室長の言動への非難も出た。それが私にも飛火する。決断力がないという。昔から論功行賞が禍福の種とされてきたことはよくわかる。しかしだからといってそれで歴史が変わるわけではあるまい。県庁レベルでは当面、職員の長所をどう生かし欠点をどう補い合うかだろうと思う。歴史はゆっくり動いている。各人は見えたり見えなかったりである。行き違いもある。ベストをつくしてくれればいい。そして過ぎたことをいつまでもこだわらないことだ。ベストをつくしておればいつかは福に当ると思う。

4 月 13 日（土）

大坪康雄書簡

秘書室人事について大坪氏から絶縁状のような速達が来た。大事な人事であることはわかっているが、彼らの思惑と違って私の一存で左右するには大いに無理がある。大坪氏らにとってみれば決断力が足りないという。決断力で左右されるものなら苦労はいらない。大坪氏は私に切りつけたかえす刀で林副知事、林県議を切っている。杉山、安達に対する人事が不満なのである。人事を進める上でのルールの如き慣例にこの際こだわらないで少々は無理をすべき時に来ていると彼はいっている。あちら立てればこちら立たずで両林氏もかなり策を練った跡がうかがえる。いつの世にも人事で成功もし失敗もする。五〇%推奨なら五〇%非難なのである。当り散らした彼の書簡は思い上がりぶしつけが見られる。あんなに当り散らしたら自から生命を断ち切るのではないか。今の時代公務員人事など社会をひっくりかえすことは稀なのに。

4 月 14 日（日）

新しいもの古いもの

裏庭の二つの藤の房がどんどん伸びていて根本の房には花がちらつくほどになった。ツツ

ジが一株枯れたがどうしてなんだろうか。スズランの花の蕾が出はじめている。ツワブキを取って煮物にした。野趣豊かでよい。山吹も白、黄両方花をつけている。自然は黙っていても立ち帰るものなのである。桜の花びらがうちの玄関前まで散っている。後藤さん宅の桜木である。花ばかりよりは少々青芽が出るくらいが桜も美しいものだと思う。新聞にはシャクナゲの咲いた紹介があったが、わが家のはそこまでいっていない。テレビに興ずる者、野球を楽しむ者、イムズ、ソラリヤのような近代流行の先端を楽しむ若者も多いようだが、われわれ年寄には野趣豊かな素朴さがかえって楽しい。先端を行くような流行を追っかけると限りがなさそうだが、同じ享楽でも古きをたずねてみるのも一興あるのではなかろうか。ふわふわするような近代性を帯びた享楽には退屈がくるし、厭きがくるのではないだろうか。人里遠く、逃避したいものだ。

【欄外記入】

「天地無私春又帰」（UCC 社長上島氏の為に条幅をかく）

4 月 15 日（月）

指導者の世代わり

八仙閣で行われた六時からの林県議選関係者の敢闘会に松本龍氏が来ていた。彼は中央の動きを肌でよくうけとめている。知事県議特別市レベルでの選挙で社会党の退潮が明かになった今日、中央本部執行部体制が揺らいでいる。中東戦争以降をみても対応が国民に不満を与えている。そうした中で福岡の知事選勝利、県議戦上積みは全国的な意味があると彼はいう。国レベルからみて福岡はやはり一番注目されているというのである。福岡の内部では一世代古い活動家たちが今回の選挙に不満をぶちまけているが、私は今は今、新しい世代も精一ぱいやったと思う。連合が誕生した今日そのうねりの中で梶村・松田など県評センターは古い闘士からは非難されつつも連合とつないだり、連合系の票をくいとめるためにいろいろ苦労をしているわけだ。前のように一すじ縄でいかない苦悩を理解してやってもいいのではないだろうか。選挙はすべての人々の結合でこそ意味があるのであり、非難のみではいけないだろう。

4 月 16 日（火）

初夏を思わす一日

淀川つつじの蕾がふくらんできた。常緑樹の落葉がほとんど終り、若葉がすがすがしい。昨日の夜は押印などで、就寝がおそくなったせいか、今日はやや元気がない。和代が毎晩アンマしてくれるのだが、肩はかなりこっているようだ。選挙運動中の疲れが漸く恢復した頃かと思う。挨拶まわりをしていると、開票後の報道各社の要請にこたえるのに大層疲れることを理解してもらえるチャンスがえられる。たんたんと選挙疲れを語って歩いた。「この野郎」と思ったに違いない対象もある。医師会や新聞社、経済団体など、共産党本部を訪問したら

全県議が揃ってみえたのには驚いた。戸畑の常守氏が落選して、五が四となり代表質問権をなくし、がっくりしているようだった。「赤旗」は選挙運動段階になって私にとってはいい記事を連載してくれたが、平素が固すぎると私は思った。この党も代がわりが求められているのではなかろうか。橋本君が「共産党への対応には知事の気やすさが感じられる」と評していた。

4 月 17 日（水）

国体ビデオを見る

夜、橋本、清水の両氏と拙宅で夕食をしたあと、安川電機からもらった国体の時の両陛下の同社モトマンロボット視察のビデオ、次いで国体の集団演技のビデオ（別編 NHK）もみた。国体に捧げた県民のエネルギーと感動を改めて思いおこしたものだ。こんどの選挙で関係者ほとんどこれにふれなかったが、これも実は私の勝利の底に流れていた県民の声ではなかったかと改めて思い直したのであった。今回の選挙の低調さの中で、勝利できた要因の分析はなかなか容易ではないだろうが、運動体の方では盛り上がりのエネルギーを評価してもらいたいだろう。庁内では各自集票努力を指摘する。私は現職の強味が大きいと思う。それに今回は国体の翌年というフレッシュな感動も残っている。それらが「知名度」という大衆的な波に高まっていく。これが決定的だと思う。そして候補本人に指摘さるべき難点なく清潔さが感じられるならさらにいい。天の時、地の利、人の和という、それぞれに重さ、視点のおきどころもあろうが、国体は巨大なエネルギー源だったことは間違いない。

4 月 18 日（木）

県定期異動に不満

あいさつまわりが終って夜、社問研で衣笠、嶋津のほか、県職教組など地公労の協会員数人が集り、今回の県職人事異動について知事に苦情披露の会があった。鵜崎知事の時に学んで組合人事ということになってはいけないが、反組合人事では納得できないという内容ではあるが、更には私の決断を強く求めるものでもあった。「両林」というが、副知事県議の両林が人事を牛耳っているのに対し奥田は易易諾諾と甘んじていて、結果としては役人の保身、出世主義、さらには議会対応策（野党のごきげんうかがい）に傾斜しすぎ、奥田独自性リーダーシップがないという追及の筋であった。弁解する訳ではないが、苦情や注文の側に遠慮が先んじ、時を失し、誤解が多すぎることも確かだ。人事異動に案を出す側が故意に反組合や個人攻撃、奥田の足ひっぱりをしている訳ではないのに、そう見えるかも知れない。よかれかしと思ってもそううつらない。善意が悪意に受けとられる。追及する側は自分の弱味をかくしてひとを突くことも多い。

4 月 19 日（金）

定かならぬ現象

はっきりしない天気が多かったのに、今日は爽かな晴、若葉が光っている。花もいいが若葉はもっといい。桜花は先日の嵐で散らされてしまった。樹の下雪のように散っていたのに、もう姿はない。花びらはどこから出てきてどこに消えゆくのかと自問したことが何回かあったが、このたびも又自問した。わからない。理屈をこねない方がいいようでもある。我が身も亦そうなのではないかと思ってみる。現象という言葉があるが、その通りにすなおに解しておきたい。人事異動で心労している林副知事を誘って六本松で夕食した。五つしかないポストに二〇人の候補があり、当たらなかった人はうらみに思うだろうが仕方がないと彼はいう。難ぐせがつきにくい人をそこにやるのが知事の為だろう、誰しも知事のことを考えてのことだともいう。ぼんのうと悟りがある。悟るしかない。職員に仕事やポストよりも自己納得の人涯を開拓してくれと私は常にいっている。だが定年近くにならぬと悟りはないと彼はいう。どこからか現われさまざまに活動し、暮し、老いていく、自己を貫かれたい。

4 月 20 日（土）

県高校教育会

棟安信博から便りがあり、夫妻で姫路にある公立高校に転勤できるようになったという。福岡県に嫌気がさしていて中間の高校を最後に兵庫に移るのである。試験を受けねばならず昨秋二次にも合格したわけで幸福な選択ができたことを祝福する。福岡では、一寸左翼めいた人間は実業高校に移され、管理指導がきびしく教師の自主性が発揮しにくいらしい。兵庫ではどうだろう。選挙の時に教員組合の人が知事に教育現場改善を訴えるケースがしばしばあった。どうも難しい話だ。今日西井龍生氏に選挙のお礼に行ったが彼も教育改革の希望を私に語った。ただ保守陣営が教育委員会部分を奥田県政への反撥の拠所にしている様子は知ってはいた。小中学校よりも公立高校を足場にしているので、小中学校の方がまだしもおだやからしい。県民は、先生がストライキなどするから非行がふえるのだとの宣伝をきかされてる。今時、ストライキを原因にする手法があるだろうか。

4 月 21 日（日）

役所言葉

久しぶりの日曜休日、一日中色紙を書いていた。天気は上々の春日だのに、外に出ても何かする事がない。新聞にお役所言葉について国民、住民が、その堅さに抵抗感をもつと書いてある。役所言葉は国民、住民のためにあるのではなく、国民、住民に対して役所の共通統一認識のために使われる言葉であって、自然な産物である。この分野で生まれてくるものである。ただ、近頃、やたらとカタカナを使って英語などを役所が進んで摂取定着させていく傾向があるようだ。どこが使いはじめるのか知らないが、日本人がもっと親しめるようなもの

を選出したらいいのにと思う。レク・リゾートとかマンパワーとかアイデンティティとか、の類である。無数といえるほど役所語として使われている。日本文化の長所であるとは思うが、一寸ひどすぎるのではないか。「遺漏のないよう」というような堅くるしい言葉同様、役所みずからが、役所特有の範囲をせばめるよう努力する必要は確かにある。

4 月 22 日（月）

色紙に書く句

昨日、是松氏からたのまれた一枚の色紙が扇子文様入りだったので、細筆で「すべての人を愛し、僅かな人を信じ、何人にも悪をするな」と書いた。Love all, trust a few, do wrong to none, とノートに書いているので、誰か西欧の偉い人の言葉であろう。色紙の出来ばえが我ながらよかったと思う。たまには仮名を使うのもいいから今後はもっと意識して書くようにつとめたい。揮毫には、いろいろ選択すべき句をノートして残しているが、だんだん陳腐化した思いでページを繰る。新しい句を見出すべく努力しようとは思うが、その時間がない。ノートにはとどめているが使ったことのない句もかなりある。説教めいたもの、政治くさいものは避けるし、字句の長いものも避けている。句の意味が理解してもらえないのはいけないので、私が釈分を加えることがしばしば。でも限定して解釈してもらっては困るので釈文することがいいかどうか迷うこともある。漢字で表現してあるので、昔をしのぶのだが、どの句も人間をよく語っているので感嘆。人間って進歩しないのかなと思う。

【「湾岸戦争被害一覧（3 月 1 日現在)」（掲載紙・月日不明）の切り抜き挟み込み】

4 月 23 日（火）

孤独を好む

和代が長らく手伝ってくれ、今日の私の初登庁を見てから姫路に帰るという。一人そういう人がいるかいないかで、いえの中がかなり変った空気になることが実感される。小さい子がいたとするとにぎやかさという意味でまた変った感じが出るだろう。明日から又もとの二人にかえる。淋しいことだ。一人いることによって食卓上のものが減る効果が違うこともわかる。二人だけだと、毎日ほとんど減らないようだが、三人なら少々減り方が早い。老いて食べる量が少いのと、外で食べることが多いから、そうなるのである。知事をしていると、外からのいただき物が多く、余計に物が減らない。誰か他人がはいってくれていいのにと思う一方で、誰も入ってこない方が解放されていいと思い、ひとの入居を求めないで今日まで過ごしてきたのである。知事をしていると、ひととの接触が多く、うちに帰っても誰かと接しなくてはならないのでは嫌で、かえって孤独を求める気持が強い。それが、テレビ嫌いに通じていると思う。要はいてよしいないでよしということだ。尋常の心境ではないだろう。

4 月 24 日（水）

死に方を選べるなら

午後郷田商工部長の葬式で宗像紫雲閣に行く。五十七歳で、商工部長になって一週間しかたたないのに動脈癌で亡くなったのだ。表向きにいえないことだが、苦しむこと少くあの世に行けるのはむしろ幸いではないかと思った。何日もひとの厄介になり、苦しんで苦しんで死ぬのはたまらないなと思っている。飛行機の墜落事故で，ひと思いに死ぬのも一つだろう。遺族にとってはそうはいかんということになろうが、いえばきりがない。動脈癌の原因は何かときいてみる。静脈癌というのもあるのだそうだが、原因は解明されてないとのこと。郷田氏はよく酒をたしなんだそうで、それがもとだろうという人がいるが、それで因果をきめるわけにはいかない。与えられた運命と受けとるしかないだろう。それにしても、常識的に少くとも十年早い。まだまだこれからしたいことがあれこれあったに違いない。だからしたいことは早目にしなければならない。仕事の鬼になったって仕方がない。仕事は使命ではなくて手段というほどに考えてもいいのではないか。仕事よりも自分の生き甲斐が優先する方がよい。仕事が生き甲斐と考える人は何をかいわんやである。

4 月 25 日（木）

「地域」がなくなっていく

東京事務所の西田所長の話で千葉幕張メッセの近くに城郭風の住宅が建っているとのこと。一戸分一～二億円とかの話だが、詳細はウワのそらできいていた。福岡にもないわけではない。厳重な戸締りになっていて予約なしには入れない。何だか自分が別世界に追いやられているみたいな感じだ。情報にうといし、情報ぎらいの自分である。新規なもの、先端流行にはうとく、好ましいとは受けとらない自分である。建てた家も二十余年前、時代おくれになってしまっているが、なかなかインテリアをかえようという気にもならない。今のままがいいと思うと西田氏にいったのだ。昔の「お隣り」がだんだんなくなるのは淋しい。隣の人にすべてモノをいう時代ではないが、やはり隣のおばちゃんがいる。井戸端会議はない時代であるが、ひょっと顔を合わせてモノをいう。ウワサが一日でひろがってしまう村ではないが、情報や評判が近くの人について近くの人からもれてくる。その方が人のつながりが地域という形で存在する。予め OK なしには話せないのでは隣がなく地域がなくなる。選挙運動もかわってしまうのであろうか。

4 月 26 日（金）

自衛隊の海外派兵

昨日ペルシア湾の機雷除去のため、海上自衛隊の掃海部隊が、六隻横須賀、呉、佐世保から出港した。自民・民社は賛成、他は反対という国会の中で、海部首相は国際協力、平和目的、人道目的を強調しながらも法的根拠はあいまいなままで、今後もありうることを、参院で答

弁した。とうとうその日がやってきたことを改めて強く認識させられる。どの港でも反対派の行動が見られたようだ。「人的貢献」の不可欠性を強調する政府だが、派兵でなくて派遣だと強調する政府だが、「自衛」という目的をこえた軍事活動の開始にはまちがいない。五月五日に現地に到着する予定だが途中フィリッピンにも寄港し、首相がそこへ激励に行く。一万三千キロの彼方における自衛である。憲法の一角を自衛隊創設で崩し、今回の派兵でもう一角崩したことになる。あとは地球規模でもどんな戦争が起こるかによるが、アメリカ軍と兵器生産業がどこまで辛抱できるかによって日本も巻こまれる戦争参加の道筋が開拓されたことになる。戦後史の一大事件だ。

4 月 27 日（土）

私的な時間がなさすぎる

休みなので手紙類を整理していると、知事選について、見てない手紙がぞくぞく出てきた。三連泊というのがあったほどに走りまわった選挙だし、直後も報道陣に翻弄されて何が何やらわからないまま、また公務にも追いまわされ勝ちで何もかも放置したままになっていた。今回の連休で少しは秩序だてうるだろう。何枚か書くべき返信も御礼も書くことができる。自分の時間が欲しいといっていることが赤穂の大森慎吾氏の祝状の中にもふれてあった。自分の時間をとることが三期目の課題の一つですよ、と秘書室を去った橋本随行が言い残した。うまいことをいうけれど秘書室は暇を取るのに苦労するのである。相手にいい顔をしたいしハイハイと受容すれば執拗な要請が止んで楽になるだろうからついついそうなってしまう。ある意味では安易な途でもある。選挙に関し大所ばかり挨拶、御礼に走りまわったが、たくさんある個人個人はほとんどそのままになっている。祝電、祝文その他寄せてくれているのに反応しないでいるわけだ。

4 月 28 日（日）

宗像の産廃問題発言

身辺整理をしていると、いろんなことに気がつく。はじめてみたような手紙がある。たしかに読んでいるのにはじめての思いがする。忘却なのであろう。誤解がそのまま残っていて、その方が強い。先日、二十九日に「宗像に行くのは嫌だな」と川上随行秘書に言った。産廃処理場設置問題につき、私が宗像から呼ばれて行って大衆の前で、質問に対し、「皆さんががんばって」といったのを、知事は責任転嫁していると受けとられていると、中村正夫氏が私に言ったので、「馬鹿な」と私が怒りをぶちまけたのが宗像の日の里を愛する会の代表の人達の耳に入り早速そのうちの一人有馬君子さんから、そんな誤解がどこから生じたのか、自分たちは知事の発言どおり頑張って産廃処理場の建設が進まないように努力し、効果をあげているから「知事さん誤解しないで下さい」旨の手紙を一月十七日付でもらっている。私の宗像での発言は昨年十一月十八日市中央公民館でのこと。「住民が手をつないで頑張れ

ば行政を動かす力になる」その通りだと、既に一月十七日の手紙にあっていた。

4 月 29 日（月）
ユリックス植樹祭に思う
ユリックスで緑と音楽のつどいがあり、表彰式と植樹祭に顔を出し中食会その他諸行事は失礼して早めに帰宅し、余り時間は手紙かきなどに使ったのでゆったりした一日になった。昨日見つけた坂本工業産廃問題がどこからも出ないことを願ったが、手紙はふところに入れていた。滝口市長が何かいいたげだったがいわれないままお別れしたことになる。逃げの姿勢を自覚したのだが、この際巻きつかれたらなお疲れると思ったからである。ともあれ今日は植樹祭に参加したりで改めてユリックス構想の立派なのに気付いた。近代的なまちづくりの見本になるのではないか。利用者も多いようだ。今後はこうした余地がある地区を見つけ出すのは容易ではあるまい。昨年の国体メインスタジアムであった福岡東平尾県民の森公園を考えると、これ又このような余地がよくあったものだと思うが、これは元弾薬庫だという。くわしくは知らないが、ユリックスや東平尾公園のような用地は今後めったに見出せないのではなかろうか。

4 月 30 日（火）
21 県民の会の懇親会
夜「かわさき」で 21 県民の会の先生方と知事選慰労会を行った。女性では秋枝さん、坂井ひろ子さん、徳山さん、中村栄子さんの四人が出席してくれた。古賀武夫、市川俊司、金子文夫の三人が欠席されたのは残念だった。このメンバー選択に昨年の暮私自身大へん苦労したのが思い出される。労働戦線の変化のもとで連合福岡が反共路線を強く打出したからである。連合の中に嫌がるのも相当部分あるが、これを抱え込むために共産党を排除するのはかえって方向を誤るという意見が旧県民の会の諸氏の中にはたくさんあった。共産党を従来どおり入れよという「先生方」がかなり多くて、今回の 21 県民の会の発足は困難をきわめた。土井、西井らが待てないという県評センターの梶村、松田らの意見を了としてくれたので、女性四人、市川、金子、応地、猿渡ら主として私が依頼して新たに動いてくれた人達を加えて、選挙の確認団体として 21 県民の会発足となったのである。代表委員の人達の集まり、具島、古賀の二人は顧問である。

5 月要記
大型連休がこの月の最大の特徴。その次は次年度政府予算編成を前に重要事項について政府陳情にはしりまわること。まずメーデー、次はどんたく、そして佐方の母の米寿祝、刀出ゆきなど連休をフル活用する。それだけに真の休みということにはならない。政府予算要望は石炭政策又は産炭地対応、産炭六法の再々々延長ということもある。実は内心はずかしい

ことでもある。何時まで「産炭地」かという声をきいて久しいのに、また六法延長を要請するとはわれながら「げせない」のである。これまであまりにも負んぶに抱っこでやってきて、まるで自立の努力がみえないといわれても仕方がないではないかと私は内心思っている。コメの自由化問題の決着も迫られているが、これも似ている。どちらも矛盾を感じながら既定の方向でトップとして奮闘しなければならない。もう一つ、次期開催県として、今年の京都宇治の植樹祭に招かれている。この行動日程を利用して平素ごむさたしている緑園会大阪のメンバーに一目あうというチャンスを摑む。だからこの五月はいろいろヒマを見て平素のできなかったことを叶えるという月にもなった。

５月１日（水）

体力減退に驚く

二つのメーデーを新幹線で消化するという例のパターンだが、今回は小倉からの帰り発車に遅れそうになって駅の階段を急いで駆け上ったところで倒れてしまった。労政の谷口所長の肩に絡みついて倒れるまでには至らなかったが、からみつかなければ倒れて大失態になるところであった。一〇秒の違いというよりは発車を一寸おくらせてくれたので乗ることができたという瞬間だった。階段は登らないように（エスカレートを使っても）と小川院長から平素いわれているのに、それを犯すどころではなかった。それにしても体力がこれほど衰えているとは、はじめての自覚であった。つまり平地から新幹線列車ホームまで力一ぱいのつもりの駆足で列車のドアー前でふらふら足がもつれてしまった。知事になってから志賀島マラソン大会で一〇〇メーター序走はしたし、大濠一周二キロメーター近くしたことも頭に浮んでくる。なぜこうも体力が落ちたのか悲しいことだ。辛うじて列車に乗り、車内博多までで平素にかえったような思いなのだが、ともかく弱っているのには驚いた。

５月２日（木）

どんたく前夜祭

ジャーマンアイリスが三茎きれいな花をつけた。藤花が落ちはじめた。緑がどれもすがすがしい。クジャクサボテンが花芽をどんどんふくらませてきた。年中で一番いい時だと思う。八十八夜ということだろう購販連から八女の新茶を送って来てくれた。ドンタクの前夜祭が国際センターで行われ実行委員会の顧問ということで知事挨拶を行う。RKB の場である。一部で行事、二部で歌謡ショウである。一部はミス福岡の選抜と前年各種受賞グループのリハーサルが主な流れであった。街には若者があふれているが、この前夜祭でも若者の舞踊が目をひいた。ぴちぴちしていて気持がいい。女性も丈が総じて高く、一六〇センチ以上が常識になっている。昨年の国体で技をきそった余韻が残って感じられる前夜祭であった。近頃ミス福岡をえらぶというようなことは女性差別だとの声もある。今年はどうするのかと思っていたのだが、そういう声はとどいていないようだ。県政に文化予算をという人が少くな

いが、民間の力で結構いろんな文化を育てているのがわかる。

5 月 3 日（金）
どんたく衣裳
どんたくは雨にあうといわれてきたが今年は晴天がつづき、福岡への来客もいつになく多いだろうといわれる。恒例のパレードに参加したが、どんたく衣裳を着けるのがやはり重くるしい。憲法集会にも出席せねばならぬので、登庁して平服に着かえねばならない。やはり面倒と感ずる。どんたくは女性、山笠は男性といわれる主体者の違いが当然に前面に出てくる。ひる頃県庁玄関前に来る稚児隊（東流）の中でも女性が光っていた。化粧すると、老女も年齢を感じさせない。絣の着物をそろえるのは今の時節大変だろうと思う。材料を揃え縫うのだから、メンバーがかわると新入者は着物を譲りうけるのか新調するのか、新調と仮定すれば同じ柄のがあるかどうか、一グループの数がふえたとすればその新調はどうなるのか。頭にのせている編飾笠を一寸注意してみると、三〇人ほどの中に、二～三人違ったのをかぶっているのに気付いた。どうするかに気を使った結果だと思う。男性のハッピも似たようで少しずつ違っているのがわかる。気分が一致すればいいのであろう。
【欄外記入】
生かそう憲法　暮らしと政治に
憲法施行 44 周年記念　福岡県民集会

5 月 4 日（土）
一族の集まり（一）
佐方で朝から墓参、法事読経、直会、僧侶なしの和讃ということで、昨年来計画していた大きな行事の半分が夕方までに終った。一彦一家、啓二一家も東京から来てみんなに顔をみせ、章の孫、われわれの孫が揃って四代の者が一しょになれたこと、そしてフィンランドに里をもつライヤがはじめて経験する日本の仏事、こんなところに今日の特殊な意義があったように思う。章の孫たちの顔も私ははじめてだった。ただ誰が誰やら区別がいまだにつかない。いずれにせよ、夕方の相生荘での母の米寿祝賀会とあわせ、こういうことがなければ顔を合わせることのない縁者のつどいであった。一度しかない大がかりな行事であったと思う。初めの終りだよと私は何回も強調した。母は八十八歳まだまだ生きられる。そういう私はグループの中の最長老、そのことを改めて自覚したわけ、というか、既に世代は一つ廻っていて、私を含め古い時代は過ぎているのである。小学校に行く前の幼い娘達がキャーキャーいって走りまわっている。それを抱え支えている人達の時代なのである。

5 月 5 日（日）
一族の集まり（二）

一彦一家は早朝車で相生荘を出発、横須賀への帰路についた。私どもは章の車で和代の住む網干経由で刀出へ。啓二一家も夕方帰京するが体験するのも意義ありと思って刀出に別の車で同行するよう誘った。刀出では晴久及び、九一の、そして和代の孫たちまで含め、幼児がさわがしく走りまわる中で、本家和夫、田辺の利夫さん夫妻、仁さんらを加えての大中食会となった。本家の貞子さんも、この中食会のにぎにぎしさは、私の知事三選を祝賀する意味が込めてあったので、皆さんの好意に私はうれしかった。裕一、里美一家、万智一家も来て代がわりが感じられた。三月の女の節句には赤飯、五月の男の節句は白飯（シラムシ）ということのようで、今日も九一宅の庭で餅米を蒸し、中に黒大豆を入れたゴハンが出された。私の三選を祝ってくれるのに適したゴハンでもあった。啓二が帰京する前に、もとの家を一寸見せようと思い、近くまで案内した。なぜ転居したのか父の計算を想像して説明しておいた。五十年以上も前の話なのである。その頃、誰が今日のこのにぎわいを想像できたであろう。

5 月 6 日（月）

六〇年を遡る話

十時から書写ロープウェイ登り口の上の山旅館で小学校同窓生が私を囲んで懇談する席をもってくれた。黒川庸氏が集会に努力してくれたのであった。私はみゆき、九一、随行の川上に同席してもらい、中学校時代の広田正義氏にも来てもらった。前田先生は別として、同窓の男五人、女七人の出席をえた。私の知事三選を祝うという気持で集ってくれたのである。十七人の懇談となった。誰しも昔を語る、何かの口実がなかったら集ろうとはいえないからなと黒川や吉田がいっていた。七〇歳ばかり、六〇年も昔のことが話題になる。井上、黒川、大坪、奥田、吉田、以上が男、辻、梅宮、山田（光）、池田、山田絹、鍬田、山本和、以上が女。誘っても応答なし、仕事の都合、遠方などで出席しない人が十余人いるという。そしてこの合計に匹敵する人達が逝去しているという。ここでも女性の方が元気があるように見受けられた。小学校の頃の貧苦を思い出すが、他の人達も私に似たりよったりの苦労をしてきたようだ。それを思うと今は極楽だねと、苦労の先に咲く花のことが話題となった。前田先生が中東湾岸戦争とブッシュの功績を口にしたが誰も反応せず。

5 月 7 日（火）

産業廃棄物処理問題

嘉穂町での産業廃棄物処理場建設をめぐる業者と地元民との間の紛争が報道され、明日の記者会見で知事質が出るかもといわれている。今日三光園での宴席で総務部長は、自分の廃棄物は自分で処理というのが原則と強調していた。ただ思うのはその原則をどこまで、どのように現実のものとするかということである。屎尿、台所その他家庭の廃棄物は市の責任でということが大勢をなしている。産廃は排出業者が責任で処理という原則だが、処理場及びそこまでの運搬には排出業者もカネを出せばいいと決めこんでいる。市町村がその区域内

のものを自分の区域で処理できる状況にないことは誰もが知っている。不法投棄や処理場建設で、持ち込み反対という住民の気持はよくわかるが、生活圏という区域をひろげた考え方をしないと、自己処理原則は通用しなくなっている。都市指向という生活圏になっていながら、廃棄物は否というのではおかしい。そこに広域行政、県というような単位での責任が必然的に考えられざるを得なくなる。「住民に開かれた県政」の出番がそこにあると思うのである。

5 月 8 日（水）

革新県政への期待が不満となって積っている

労働組合や革新系といわれる人達から盛んに私に注文が寄せられている。新年度の県庁内人事を見て「三期目こそは」と思っていたのに、愕然としたというのがまずは主流。家永室長から今日、具島さんが会見を申込んでいると私に伝えてきたが、それも同様の流れだろうと思う。さらに、自治労福岡県の自治研からも同様の申入れがあっているという。これも同じ流れであろう。でも、どの意見も問題提起が抽象的で、人事配置にあらわれる期待はずれ、うらみがうっせきして表現されているようだ。県職員を入れて自治労の集票活動が今回はかなり鈍化したようだが、それは奥田県政への失望のあらわれであるという。でも自治労の力で三期目が達成されたのだからとの主張は固い。選挙の論功行賞期待が、県政批判につながっている面もある。ただそれをいうと、自治労以外の労働組合員にどう行賞すればいいのか、そのほか選挙で票の一つ一つ積み上げた人達にどう応えていけばいいのかが問題になる。直接的な行賞（人事）はやりにくい、やれないということはわかってもらいたいものだ。

5 月 9 日（木）

日本農業の将来

日本の農業に未来はあるか、これは今は落選の山本辰雄氏が議会で何回か質問した大きな問題である。今日「朝の放送」の打合わせの時、昨日の庁議で報告された県農業十年計画が話題になったが、私も同じことを問いかけてみた。刀出で、晴久が小作地の圃場整備負担金のことで悩みがあるといっていたのが思い出される。費用の一五%ほどの負担でも、農業者にとっては耐えられぬほどの高額である。OK してしまった限り負担するしかないが小作人としては OK とはいえないとのこと。農耕するよりアルバイトで賃料をかせいだ方がはるかに得、病院の介護人は一日一万二千円だと章君はいっていた。養母の骨折入院で費用がかさむとぼやいていた。農業面でどんなに努力しても介護賃ほど稼げないのである。合理性に徹した経済界が公害をおこしているのだが、今、社会の各分野は不合理、アンバランス、矛盾に充ちている。陽の当たる所と蔭の所と、農業はむしろ蔭の部分である。過保護といわれながら、農業は更に保護を求めている。

5 月 10 日（金）

エイプリルフールの思い出

六時半に西鉄第二共済会館で開かれている知事選挙遊説部懇親会にみゆき同伴で出席した。熊谷恒夫、天川郁夫その他全部で三〇人ほどになっていた。鬼木氏は候補随行、小西ユキ子はみゆき随行、共に走りまわった仲である。社会党本部の田中浩子さんは子供連れで出席していたが、彼女はマイク嬢たちの先輩ベテランのキャップだそうだ。勝利できた選挙に関係してみんな楽しさひとしおだったようだ。それにつけても、四月一日エイプリルフールということで大芝居をうったことが話題になった。選対本部にウソの電話をしたのが八時すぎの本隊車乗務者たち。夕食の時に思い出し、本隊車の屋上看板が夕食中ヤミの中で何者かに打ち壊わされた、と電話したのは鬼木君だった。それを受けてあわてたのが天川君。五分もせぬうちにエイプリルフールなのでと再電話するまで選対本部遊説隊のさわぎはほんとうに大変だったらしい。私も今回ほどまことしやかに芝居できたのは生まれてはじめてだった。笑ってすんだこと。

5 月 11 日（土）

庭木が伸びっぱなし

玄関の竹林に今年は一本筍が出てきた。かなり太い。にぎやかになってくる。庭に出て草木に手を入れるのは久しぶり。サクランボの木に今年も全ての葉にウイルス状のものがつき、青虫が付いたようになっている。枝の先を切り、むしばまれた葉の部分を全部千切って落した。花も咲かないので切り倒した方がいいかも知れない。裏庭には枝を切り落さねばならぬ木が少くないが、作業力がないかも知れないので手つかずのままにした。一寸の作業でも疲れを覚える。東側の梅林に今年は実のつきが悪く、ついた木の実もどんどん落ちている。拾ってもまだ使いものにならない梅の実である。アロエがどんどん太っていく。鉢株の数が多すぎるように思うがやはり捨て難い思いで株分けなど考えてみる。ふえるばかりだ。藤棚が気にかかる。昨年はつらい思いで蔓切りしたのを思い出す。もう能力をこえる仕事だろうか。放置できないなら誰か手入れする人に来てもらうしかない。

5 月 12 日（日）

物余りを感ずる

目がさめた時は雨になっていた。降り止まない。昨日揮毫したので今日は押印する。ほかにこれといってすることもないので机辺の整理し、何がどこにあるか確認するにも役立った。とくに気付いたのは物が多すぎて使いこなしてないということだ。これは一般家具、飾物などにも言えるが筆記にしても本にしても用紙にしても然りである。ボールペンを試してみると書けなくなったのが七本もあった。平素使ってないと液が固まってしまうようだ。こんなのは邪魔になるだけだから棄てるほかない。捨てるべきだと気づかないのである。昔の物

不足時代を思うと想像を絶する今日の状況である。先日テレビで中東紛争の後遺症がうつし出されていたが、生活用品不足と栄養失調、衛生問題、アメリカだイラクだといっているけれど誰もがこれら諸困難の原因解明につとめようとしないし、戦費はつぎ込むが難民救援はしようとしない。戦争しようという意識そのものが難民をつくり出しているのである。われわれは物余り時代、それを戦争に向けようとする力が強い。

5 月 13 日（月）

第三期県政への強い要望

西日本新聞の玉川部長ら四人の県政記者たちと夕食を共にしながら意見交換をして三時間費した。私の発言について苦情が出たので陳弁のチャンスを作ったものというが、私にはその自覚なく、話は三期目をもっと積極的にやれとの注文に重点が移った。奥田県政の特徴が見えないとの指摘である。多くの人がもっている不満を代弁していると思う。知事選の期間を通じてリーダーシップ不足という指摘がつづいたが、その延長でもある。波を立まいとしたり調整役をつとめたりする点が物足りないのである。その気持はわからないでもないが、反対者が多ければリーダーシップは発揮できない。積極的に動こうとせず相談ももちかけず事勿れ主義の職員も少くない。リーダーシップを待っているしかない人もあれば、こちらから言っても反応の鈍い人もある。ある意味では事勿れというのが一番いいのかもしれない。十二年間の県政で何を残すかと問われても傍観者多くては形にあらわれにくい。要望はわかったというしかないのが実際。

5 月 14 日（火）

体調悪し

今日明日臨時県議会である。まず議長、副議長の選出があり、井上雅実、松山譲氏が選ばれた。出席者八十八人中四人を除き他は一致した記名だったので共産党四人が無効（白）票を投じたものと推測できた。女性県議が三人ふえて五人になった。うち四人は社会党県友クラブである。新議員一四人で気分一新の感じである。かえり咲きが自民二人（藤田茂令、橋詰和元）これまた気分一新にみえる。ところでどうも体調がよくない。頭が重く爽快さ全くなし。検診の結果、中食後四時間余も経ているのに、血糖二〇九、尿糖プラス三、そして右肩がひりひり、いじいじの痛みが感じられる。これまでこのようなことは何回もそれぞれに体験しているが、今日はすべてが集ったように思える。点滴中にツバがねばっているので数値はよくないだろうと予測したが案の定悪い数値が出た。運動をせねばと思って久しぶりに万歩計をつけた。議会棟二往復で六五〇〇、帰宅後一〇〇〇で七五〇〇が今日の運動量である。庭仕事を一寸すれば疲れるし、これでは老化著しということになる。自分では老化したなど少しも思いたくないのに。

5 月 15 日（水）

済州島航空路のオープンに思うこと

アシアナ航空の黄会長の訪問があった。近々福岡・済州島直行便が就航する。福岡空港はこの春だけでもハワイへの直行便がはじまり、千歳と共に空の中心としてますます浮上している。これで海外航空会社一五社の乗り入れとなり、成田に次いで二番目という。関西新空港の工事のおくれや成田の二期工事のおくれがあって、待てないので福岡にという動きが強いようだが、この二つが本格的に稼働はじめるようになると、福岡への集中度も低下するだろうといわれている。ここ二、三年の福岡空港国際線の伸びが大きいようだが、手ぜまなこの空港の利用価値は西側展開をしたとしても、もう限界であろう。望むらくは万事今のまま横ばいであってほしいということだ。観念的にそう思うだけで、航空需要が今後どう伸びるか、各空港の役割分担がどう動くか、私には先は闇でしかない。チャーター便もふえるに違いないし、貨物便もふえるだろう。これ又私には先は闇、成田のような混雑と不便が重なり合うようなことは避けたい。ハワイに行くのに成田に行かないで済むようになっただけでも有難いことだ。

5 月 16 日（木）

石炭策延長要請に思う

石炭政策の継続を求め、石特会計や鉱害諸法の延長を求めての県民大会が飯塚で行われた。国会議員、県会議員もずらり出席。関係市町村長議員議長も顔を揃えている。「三池と安保」の言葉が耳の底に残っているのでわかるが、石炭危機が始って三〇年余になる。こんどは第九次石炭政策の確立を求めての大会である。外国炭の二倍半もするという国内炭。政府は需要者（主として電力業）の声をきくしかないという。又政策経費は石油に負わせた関税によっているので石油業界は負担したくないと強く主張している。採炭条件が劣っているのが主要原因であろうが、この間円高がそれ以上に進んでいる。石炭業や産炭地に対する保護策だけが敵視されているようだが、円高のことを考えると、わが国の経済界が協力して支えてやっていることの言い分もあっていいと思う。ただ三〇年間、石炭業界と関係地域が他に負担をかけてきた年月の長さについて、限界があることも自覚していいのではないだろうか。ひとに頼みすぎると指摘されても仕方がない。本人のためにもならないであろう。

5 月 17 日（金）

不幸に逢う同僚

ひるまで休んでいて庭の花にふりかかっている藤花の枯れたのを取り払ってやった。名も知らぬ花の鉢だがよくみると美しい。花はつらつら見るべきもの、と痛感した。藤の蔓を切ったので毛虫があちこちに居場所を求めてはいまわっている。やがて蝶になるのであろうが、そこまでの居場所を失っているのである。与えてやるすべもない。藤はやがて又長い蔓

を伸ばしてくるだろうと思う。暴追県民大会（市民会館）からの帰りに浜の町病院入院中の上田幾彦氏見舞をした。「腹を切る」んだそうだ。安東氏からきいたが悪性ともいう。私は明日が大腸検査で絶食。庭に出ていたら八三歳になるという花田さんが玄関先に立寄り、知事選で、かげで活躍してくれた英語の森岡、西原両氏の話題を出し、森岡氏の家が全焼し、今は屋形原の某老人ホームに夫妻で入所しているとのことであった。びっくりも頂点、わが身を考えてみると、長寿がかえって不幸のチャンスを多くするような気持が湧いてきた。森岡さんも見舞に行かねばならぬ人だ。ともかく大変、とたんに元気を失ったようだ。

5 月 18 日（土）

川越さんから荷物着く

宮崎県川南の川越初枝さんから焼酎とえんどうを送って来た。荷物の中の手紙の結びがすばらしく感じられた。次に引用する。

　私も八十の坂を越えましたけれど、友達とのふれ合いを大切に長寿会の学習等生甲斐求めて、楽しく過しています。　　平成三年五月十七日朝七時三十分

そして、「短歌一首」として、私の知事選と同じ「強く優しい」を用いている――

　庭に咲く自然に生いし撫子は　強よく優しい此の世の花か

荷物は一日で着いたわけだ。えんどうはもぎ立てに違いないが、無肥料、無農薬と書いてある。東京の向坂夫人（ゆき）からもハガキが来た。これは十五日に書かれている。「私もおかげ様で元気でおります。どこもどうもないのに、肝心のアタマもともとのアタマが近頃いよいよオカシクなりつつありますのはトシのせい。自分に腹を立てたり、ひとりで笑い出したり、とにかく、ひとりぐらしでのんびりやっております。かしこ」。川越さんより向坂さんの方が年が上に違いない。どちらもひとりぐらし、そして元気。昨日の森岡さんの事を思い出すのだが、ほんとうに高齢化社会、各自の努力で少しでも頑張りを見せてほしいと祈る。

5 月 19 日（日）

女性は変わるか

書斎にいて柴田佐和子句集「筑紫」を引き出して一九九〇年の一番うしろにのせてある句に目をやった。「次の世も女と決めて毛糸編む」とある。この人と知りあいでない。生れは一九四九年一月とある。まだ 42 歳ではないか。その手前に「日向ぼこしてまる顔となりにけり」というのがある。女らしいというと近頃の女性は機嫌をそこねるだろうが、此の二句は従来型の女といえる。またこんなのがある。「籠を持つのみの父なり若菜摘み」。この父は私とはそう年が違わないのではないか。私だったらいそいそと菜摘みに動くだろう。どうもこの親子ふけているし前代的である。近頃、女性副知事を作れと声を荒くする女性が少くないし、東京都、福岡市など実践にうつしている。先取りといえる。だんだんそういう傾向もでてくるだろうが、年月はかなりかかろう。女と心に決めて毛糸編むというのはどういう心境

であろうか。

5 月 20 日（月）
同窓会を多くもって
全国植林祭で次回開催県として今回京都のそれを視察のため二五、二六の二日間関西に行く。月はじめの大型連休の時は小学校同級生に囲まれるチャンスを作ってもらった。こんどは旧制姫高と新京経理学校の同窓会（緑園会）の集りを姫路と大阪で開いてもらう話を進めている。こうした集りによろこんで参加してくれる人が少くない。お互いに高齢者だから懐旧の情が強くなっている。それとみんな OB になっていて多忙という口実よりも、暇つぶしにいいと思う傾向があるように思われる。誘われるとヨシッということになるのではなかろうか。五〇年近くも前のことを語り合って何の足しにもならないが、それで楽しいなら肯定していいだろう。今の人は多忙すぎる。考えるひまが与えられてない。人間は何千年もちょっとも精神的な発達をしてないという。それは各人が前代より一歩前に進まないからである。私は進む必要もないと思う。小、中、高、大学、軍隊など同じ体験をへた人達が五〇年後に話合うのを楽しみにする、それでいいのではないか。楽しめばいいのではないか。

5 月 21 日（火）
国民健康保険会計のこと
昨日の町村会長の陳情の中で今一番苦になるのが国保（国民健康保険）会計赤字の問題である。国民皆保険という点から立派な制度だし、もしこれを堅持するのであれば政府がさらに努力するのが筋であろう。しかし現実に、保険者は市町村だし、被保険者は弱者ばかりである。保険料を引上げたり自己負担を多くすると困る人が多い。確実に収入があり、原則健康である人は別途健康保険に加入している。市町村は不確実な人ばかりを相手に保険者になっている。赤字会計になるのは当然である。他方、いわゆる高齢化が進み老人医療は拡大の一途をたどっている。医師はどんどんふえ、加療に意欲をもやしている。入院や投薬を推進する側にまわる。いわゆる検査漬とか、どうかと思われるターミナルケアが行われる。結果として医療費は膨張するばかり。他方被保険者の側も「タダと思う」かどうかはいいにくいが、むしろ「安易に」診察治療を希望する。保険者が会計で困惑しているかどうかは知らん顔。これでは制度が内部崩壊するほかはない。気やすく県や国の補助をいう人が多いが、病根をたずね直すしかないのではないか。

5 月 22 日（水）
石炭政策のこと
いわゆる石炭政策「ポスト八次策」について産炭地域六団体の緊急代表者会議と陳情行動が行われた。エネ庁、電発に赴いたのだが、産炭問題をめぐってはすべてが冷淡になってしま

っている。九次策はもうないとの見とおしである。出炭量や石炭需要の割当など、もうおこなえないというのである。三〇年間やって来て、見とおしが立たないのである。大牟田の港では現地採掘の石炭の三分の一の価格で外国炭が入手できるという。当局は会社側の自助努力を強調するが技術上の劣勢はないのに、他の条件が追付かないので会社側も努力のしようがないと考えている。発電その他需要者側もこれだけの価格差をこれ以上辛抱できないという。一億トン以上使っているのに、国内炭一千万トンも邪魔ものになるというわけだ。国内エネルギー資源を守ろうという声もこのような事情のもとではかき消されてしまうのである。炭坑は一たび閉鎖したらあと永久に使いものにならないといわれるのに、一割に充たぬ量でも邪魔になるらしい。資本主義の原理だけを基礎に政策決定をすると、いつかは大きな後悔の時が来るのではないだろうか。

5 月 23 日（木）

あいまいな接近

左翼の諸団体が私に面談を求めているケースが今一〇件にのぼっており、徐々に対応せざるを得ないだろうと秘書室の話。少しずつ片付けていけばこんなにたまることはなかろうに、思い付きで、面倒と思って逃げているから、たまることになる。昨日東京から帰ったら嶋津氏がうちに不満の電話をかけてきたとのことだったので、夕方時間がとれたので問研で会うことになった。「何時か時間をとってくれ」というような申入れをするので、「何時もノー」と答えるのが秘書室の実情のようだ。だから、政治的な立場を考えない知事はけしからんということになっているらしい。私は嶋津に客観的に誰もが論議できるような計画文を出すべきだと言っておいた。「いつか」というようなあいまいな内容だと、結構ですと秘書室が答えられないのは当然である。何月何日何時からどこで、どうこうする会なので是非知事の出席をというような平凡な形式をどうして取ろうとしないのであろうか。ある側面からは横着であいまいきわまる。それでいて知事の政治決断不足というような攻め方をする左翼陣営の悪い傾向がある。

5 月 24 日（金）

雲仙火口の危機つづく

直方での総合防災訓練。関係者約九〇〇人、それぞれの努力はわかるがもう一つ実感が湧かない。雲仙の火口土石流が注目をあびているこの頃、見のがせない話題で今日の防災訓練など、とても人力の及ぶところではない。今朝八時すぎ新たな崩壊が東側へ伸びたという。少しの雨でもこわいし、これがどこまで続くか誰も予見できないのである。人的被害にまで至ってないが、村里まであと二キロほどに迫ったとか、毎日泥をのけるだけでも二億円の費用がかかっていると、先日高田知事が東京でなげいていた。しないよりした方がいい防災訓練だが、桁違いの問題であることだけは確かである。今日、市の婦人会が非常食としてニギリ

メシを作って配っていたが、一面ままごとみたいなことである。乾パンでいいのではないか。ヘリコプターに乗るチャンスもあった。上空から災害の現場をとらえる情報力は昨年の国体の経験とてらしあわせ先端技術の点で驚嘆に値する。それにしてもペルシア湾に派遣された日本の掃海作業隊は先端技術の及びようがないようだ。

5 月 25 日（土）

関西緑園会

大阪空港から県人会江崎氏の入院先に見舞に寄り心斎橋に直通した。大成閣という中華料理店。高田保治氏が早目に表に出てくれ、吉田氏も車庫もちということでよくみてくれた。大阪の緑園会はこの二人が切りまわしているようなもので、私が行くと連絡したら十三人集めてくれた。やっぱり軍隊の話。内地に帰ったり、シベリアに抑留されたり、南方にやられたりという話。私は福岡の金印のレプリカを用意していて数が丁度まにあった。十と思っていたのに十三もっていてよかった。知らない人はほとんどだ。それでも皆戦後はチャンスを得て成功している人ばかりだ。というか戦後はやる気のある人にそれぞれのチャンスを与える社会になったといえるだろう。中部軍の管轄下の学徒動員組でいわば優秀な人がそろっていたのである。五〇年近くの月日をへているので死亡した人もないではないが、生き永らえて会えたのは嬉しい限りだ。高田、吉田両君のお世話に感謝する。

5 月 26 日（日）

旧姫高 16 回合同クラス会

四時に姫路駅南のサンガーデンホテルに集った旧姫高第十六回生、合同同窓会のいう、戸谷姫路市長は文乙で、彼の当選祝いが発想のはじまりみたいだ。中村秀教授は病気で突如来れんという。私ども夫婦参加、土井、山村の福岡組も夫妻で、他にも夫妻で十二組もの盛況。姫路在住の渡辺（文甲一）が主たる世話役をしてくれた。私どもは一時間半でグリーンピア三木へ去退したが、他は三時間ほどいたようだ。文甲二では北村、高馬、谷口、井田が来た。みんな昔の顔と思い出すようになってきた。何せ、入学から五〇年もたつ。戦争をはさんでの経験があるので、それも話題になった。でも多くは OB で志達した者が多い。私のように現役に引き出されているのは、自家営業している、弁護士医師ぐらい。井田はマツダの病院長という。広島が本拠地。文甲二では中村や西尾が死んだが、岩田の死は早かった。どのクラスも四〇人中一〇人ばかり他界している。七〇歳前後で残りは長生きということができる。創立七〇年はあと三年、それまで生きようといって別れた。

5 月 27 日（月）

神戸を一瞥

グリーンピア三木から神戸に出てポートアイランド、タワーを見物し、新幹線で福岡へ帰る

という順序になった。兵庫県出身といいながら県都の神戸にはあまりなじみがない。縁が薄かったのだろう。何回か行ったことはあるが、むしろ旅人としてという程度。もちろん今回もそうであるが、通ってみるだけでも福岡より規模が大きいことがよくわかる。タワーからみると都市景観は大変にいい。六甲山がせまって海までせまいが、これがうまく一体的に利用され、山ー街ー港（人工島）が共存している。どこでもそうだろうが神戸はとくに調和がとれている。以前、六甲の北側展開について考えたことがあるが、それを加えると更にその雄大さがわかると思う。多分それは戦後になされた開発なのではなかろうか。戦前は神戸は東に西に伸び、戦後は北に南に伸びたように思う。いい所ばかり見るせいか、街並みは美しい。すがすがしい。「株式会社」神戸市といわれるほどだが、他の部面でも（行政的側面）努力がみのっており発想が立派で活気があるように思える。

5 月 28 日（火）

書斎は墳墓

うちの庭ではサツキ満開、青葉の季節が満喫できる。姫路で、高馬が、枚方から姫路へ引越したい旨発言したが、私は今の家がいいんじゃないの、といっておいた。この年になって、もはや新築ではなかろう。後継者がおれば別だが、私は住宅の修繕にも意欲がない旨発言したのだった。自宅の庭は何年かでこの様子になってきた。それを毎日のように見てきて生活し、それを肯定してきたのだ。積み重ねがある。とりわけ書斎がそれである。書斎こそはわが墳墓の所といっても過言ではない。誰か他に入った人はない。すべて自分がすべての責任で今あるようにしてきたのだし、それで仕方がないと肯定してきたのである。何がどこにあるかおよそわかっているし、いろいろ用件はそこですませる。孤独の楽しみを味わう場でもある。近頃引越が多いある主婦の荷物整理のことが新聞に出ていて「愛着」があって捨て難いもの多しとの記事をみたが、それは気の毒な生活だけの人生のあらわれである。暮らしてきた「物」はわが「命」の一部と考えていいはずだのに。

5 月 29 日（水）

県労連しめ出し策

昨日は庁内で革新懇（共産党系諸団体）の代表の人達と中食会を催した。その中で、地労委労働者側代表九人のうち一人でも自分らの意見を代弁できる人をとってほしいとの要望が出た。その要望に応ずるか否か、全国が見ているという。他県では労連系ははじき出されているが、福岡はどうかということのようだ。労働省が共産党系をはじき出す音頭をとっているらしい。秘書室の白石に、この点うちはどうするか林県議にきいてみよといっておいた。はじき出しはどうもよくない、納得できない。中東湾岸派兵に応ずることに通ずる大きな流れであるようにすら思える。共産党支持者がいると、地労委がかきまわされるとの理由をいう者がいるようだ。又経営側代表も共産党系は入れるなといっているらしい。なぜ経営側が

労働側代表の選出に口をはさむか、これ又嫌な傾向でもある。地労委の中が異論者のためにもつれることがあってもいいではないか。もつれることのないようにという事の方が不自然である。この問題は七月のはじめまでに決着を要するという。大きな当面の関門だ。

5 月 30 日（木）

粟粒のような自分

身体の調子のせいか、近頃は上京往復の機内の中で、読書の意気も湧かず、目をつぶって半ば眠ることが多い。何かを考えるわけでもない、考えるにしても、自分は何だろう･･･といった想念の循環である。洋の東西をとわず、国の内外をとわず昔も今も、えらいなあと思う人、事跡は一ぱいある。考えれば考えるほど自分が粟粒ほどのものでしかないことに気がつく。何をしているんだ、何を考えているんだ、何をしてきたんだ、と、無駄なことをあれこれ考え目をとじ、機内の時間をすごすのである。あと四〇分で福岡に着く、それまでに何かの事故で墜落して終りがくることもありうると思って、これ又無益なことでもある。小事にこだわっても何にもならない。自分で自分を納得する以外にない。そのための名分をあれこれ作っているにすぎない。先日、書斎は墳墓だと書いたのを思い出すが、それも自己満足でしかない。そのようなことを考えない人ばかりでこの世界が成り立っていても、それでいいではないか。近頃、毛虫をみつけても潰すことはしない自分を意識したのを思い出す。

5 月 31 日（金）

兵器供給のメカニズム

第二回国連軍縮京都会議について、「兵器を供給する側の責任」について論じられた旨報道されている。軍需産業から民生産業への転換に苦闘しているソ連・ロシア共和国の発言があったという。大国が大量の近代兵器を製造している限り、資本主義国はもちろん、社会主義国でも〝やめられない〟ようだ。このことはもっと早く、もっと強く国際会議のテーブルにのぼせられねばならなかった問題であり、そのため大国の中の世論がもっと早く強く沸かせられるべきであった。但し、それは兵器製造の前提にある軍備そのものについてもあてはまることを見逃してはなるまい。さらに、日本はその例外ではないということではないだろうか。兵器に使われる部品やその理論について日本は輸出国だったと思う。だったら、いい顔をしてはいけないのである。軍事、兵力について積極的発言をする業界、政界の人達はそうした関連の畑で生活しているに違いないのである。「兵器供給側のメカニズム」が問題になった京都会議、もっと前に進んでほしい。

6 月要記

月の終り方、当初予算を提案する六月県議会が始まる。佐賀での九州知事会のあと、有田に行って久しぶりに中西氏に会った。彼が町長選にかかわって勝利したので顧問格として動

いている様子がみえた。七～九の三日間済生会病院に入院して大腸にできていた指頭大の腫瘍を抉出する手術をしてもらったが、断食のせいだろう苦しい時間がつづいた。それでよくなるならいいのに、あと又できものができるというから嫌な体質に出くわしたものだ。糖尿病の方も手あつく点検してもらっているが、だんだん悪化しているようだ。眼科にもかかっている。よなかに必ず用便に起き、そのあとの睡眠が不十分、そのような状況がつづいている。頭もぼんやり、肩も少々痛い。それに運動不足が目にみえていてまた万歩計をつける数日、二〇〇〇歩程度しか歩まない日が多い。さとる、あきらめる、やけくそ――そのような日々であるが、毎日の執務で、とくに問題になる誤りはないようだから、まずはいいのかも知れない。近頃は秘書室も私の体調に気配りの日程を作っているように思うが、私が性格上、こそこそ動くから休養にはなってない毎日である。

6 月 1 日（土）

武器輸出禁止へ

兵器を供給する側の責任という事に加え、中東の核、化学、生物兵器及びそれを運搬するミサイル拡撒を目的とする（軍備管理構想）が二十九日の空軍士官学校の米大統領の演説に盛り込まれているようだ。中東とはイラク、イラン、リビア、シリア、エジプト、レバノン、イスラエル、ヨルダン、サウジアラビア、マグレブ諸国を含む湾岸協力会議諸国である。中東から始め世界に及ぼす構想である。これまでの一〇年、中東へ兵器を供給してきたのは、英、仏、ソ、中、米の五ヵ国。七月のロンドンサミットで当然議題になる。相互武器移転管理を行うというもの。これに対し、中東諸国は反撥、疑問をもっている。イスラエルだけが核をもっているとか、シリアは米国の大量の兵器を保有しており、イラクの崩壊で一挙に地域軍事大国になったという。イスラエルは依然米の軍事援助拡大に直面している。これら諸国では宗教上の対立もなかなか解けないでいる。いずれにしろ武器輸出から踏み切ってほしい。

6 月 2 日（日）

兵器製造の片棒かつぎをしてないか

一時からサンパレスで、アジアの平和と豊かで住みよい九州を創る青年女性フォーラムがあって、ここで少々長い挨拶をした。二月一九日を思い出し、昭和十三年の国家総動員法をめぐる話になった。戦争への道がひとり歩きしてはならないとの意味である。この青年たちの集会の目的は二十二年前からの六・一運動の流れに沿っている。私は、日本がすでにアメリカに追従して戦争への道を歩んでいると判断している。日中戦争の始まった昭和十二年軍需は GNP の二四%を占め、総動員法の十三年は三三%にふくれ上がり、ハワイ攻撃の年十六年には五六%、敗戦の二十年は八五%にまで膨張してしまっていた。一五%で国民はすべての要求を処理していたのである。中曽根内閣の時に、防衛費が一%を超えたということ

だが、既に昭和十二年に二四%だから驚きである。今日、物余り平和ボケが云々されるが、その虚をついて軍需至上主義が大手をふってのさばる時代がくるように思える。先日の新聞記事、兵器を供給する側に、日本も、アメリカの影にかくれて、入っているのではないか。世界第三とか第四とかの兵力をもつ経済大国日本は研究や部品製造で仲間入りをしていると思う。

6 月 3 日（月）

環境対策は追付かない

環境庁の招きで合同庁舎での環境問題懇談会に出席するチャンスを得た。私は今回の知事選の中で高齢問題と共に環境問題への対応を訴えてきた。その際、この二つの部門については行政としては、手間、ひま、かねをかけないといけないと強調した。でも県の高級幹部もカネがない一てんばりで今なお真剣さがないと私は感じている。環境庁はあれこれしたいが、自治体が乗り出さないとできないし、中央ではその予算を組む政治勢力ができていないうらみがある。今日の自治体首長との懇談では環境庁としても、首長側から大きな声をあげてほしいと願っていたに違いない。でも自動車の排ガス対応にしても小手先の、および腰の対応にとどまった発言しかなかった。中東湾岸戦争と環境問題にしても、わかっていてあのような事件をおこしているのだから、大本が狂っているとしかいいようがない。電気自動車の話をきいていても、自動車製造の大本をそのままにしておいて効果が追付きようはない。だのにそこに話題は届かない。空缶対策にしても、対応の数々あるけれど、追付くべくもない。大本にさわらないから。

6 月 4 日（火）

雲仙火砕流災害

九州知事会の夕食会をすませ、ホテル、ニューオオタニの部屋に入り、夕刊各紙が雲仙普賢岳火砕流事件（三日夕方）を詳報しているのに驚いた。長崎の知事から、午後、うちの民生部長が見舞金をもって訪問したのでお礼の電話がはいったが、現地は民家、報道陣ら、かなり被災しているらしい。12 遺体、32 行方不明との数も出ている。長崎県では住宅の急造を決定したともいわれている。火口の東斜面が被災地だが、取材陣や消防職員の被災が大きいのが特徴である。人災・油断との指摘もある。報道の使命をもって危険をかえりみず火口に近よったとか、避難立入禁止の指示を怠ったとかの指摘である。避難者がわが家の安否を確めるため立ち帰り罹災した者もあるようだ。専門家筋では、このあと火口が何時また怒り出すかわからないから油断するなといっている。火砕流は一〇〇〇度、流れの末端民家をいくつか焼いた地点では六〇〇～七〇〇度の熱を帯びているようだ。そこまでの林木は燃え倒されて焦げている。畑地も。高熱の灰を吸いこんで内臓を犯され死亡した人もいる。ヘリコプターで救出された人もいる。実に、大変。

6 月 5 日（水）

島原事故の人災性

九州知事会が終っての中食会の席上、雲仙火砕流事故が話題になった。人災論が強かった。報道陣の突出ということである。報道競争過剰ということである。記者がタクシーを借り上げて奥まで入りすぎ、運転手まで死なせた。記者が行きすぎるので、自衛隊消防隊警察隊など護衛の任にある者が追従して事故にあう。報道陣が避難後の空き家に入って電源を使ったとかの心配で住民がわが家を見守りに避難先からあとがえりして事故にあう、などなど。因は報道行為にあるというのである。そのほか、農業をやっている人で家畜など生きものを心配し、餌を与える必要上避難先からひまをみて、わが家に帰って事故にあうという例もあるという。ともあれ、この報道陣の行き過ぎは反省されるかとなると、効果は期待できないだろうということであった。人間は競争しないと発展はないといえるし、過剰な競争は自縄自縛の結果を生む。右の事故、以て知るべきである。知事会では冒頭長崎県及び国に対し、慰藉及び善処方要望の特別決議を行った。いろいろ思い付きの対応をいう者もあるが、噴火という自然現象は人力の及ぶところでなさそうだ。

6 月 6 日（木）

衰えを感ずる

明日から済生会病院へ二泊三日の入院となる。大腸検査の結果、左の末の方に、指の頭ほどのできものができており、これがガスだまりや便通障害の原因になっているようで、入院により掻き落すことになるらしい。他にも同様のものが見つかるかも知れないといわれる。悪質のものかどうか私にはきかされていない。善意のことと思う。四月の選挙のあとちょうど二ヵ月になるが、選挙を境に体調の衰えを自覚するようになった。トシを顧みれば当り前といえるかも知れないが、第一、何か少し動くと疲れを感ずるし、慢性的な不眠症のようでもある。肩がぎくぎく痛いし、今日は首筋の痛みさえ加った感じである。眠るにも精力が要ると思う私だが、その精力が衰えて不眠症になっているのかも知れない。老化の他の面では、物忘れがひどくなっている。いつもならでてくる花の名がなかなか出てこないのに気付くが、不便を感ずるのは人名を忘れることだ。脳のどこか部分が働かなくなっているのだろう。更に、字を忘れている。言葉はでるのに、文字が出てこないことが多い。七〇年間使って、と思うが、まだ少し早すぎないだろうか。

6 月 7 日（金）

死に方を考える

公用車が止ったので降りた。しかし自分の行く先も次の一歩の方向もわからないのでその場にしゃがみ込んでしまった。これは今日のベッド上での瞬間的な夢。ゆめじをさまようという言葉通り、今日はさまよった。手術とそのあとが大変苦しかったのである。表現のすべ

を知らない苦痛。なぜこんなにまでして生きなければならないのかと一瞬考えもした。昨日田川のある老人から手紙が来た。十余年の入院生活、親族も病院当局も退院したいというのに入院のさせっぱなし、考えたあげく自殺するより他に途はないと書いてある。そんな相談に私が乗るわけにはいかないが、病人の立場はよく理解できる。どう死ぬかではなくてどう生かすかを追求しているのが今日の社会の特徴である。生き方も大事だが、死に方も問題になってきている。自殺者がふえるとすれば、それは一つのやむをえない結末であろう。医術の発達は有難いことではあるが、どう生かすかだけを突出させると、ゆがんだ社会になってしまうだろう。医の倫理が盛んに論議されている今日、人間に納得のいく死に方をみんなでもっと真剣に考えてほしいものだ。

6 月 8 日（土）

少産問題を考える

夫婦二人で一・五人しか子を産まないのが今の傾向。晩婚、未婚のままという女性がふえる傾向もこの中に要因として働いている。共働きはあたり前になり、男女平等機会均等の叫びは強い。女性副知事推挙論も加わる。育児休業法はできたし、介護休暇もあちこちで論議されている。しかし、企業側はもちろん女性労働者は直ちにはこうした援護手段には乗ってこないのではないか。出産手当を出す自治体もあるときく。どれだけ効果があるだろうか。みんなでこの少産傾向について考え、対策を協力し合うようにならないと多くの施策が効果をあげえないのではないだろうか。私にいわせると、男も女もみんながあまりにも利己的である。「個の突出」を戒めようと提案したことを思い出す。環境問題にしても、「個の突出」を何とか抑えないと結末が見出せないのではなかろうか。もう一つ、合理性の追求の過剰がある。人間は合理性だけで生きているのではないということをもっと強調したい。ルソーじゃないが「自然にかえれ」を叫びたい。利個と合理性追求への反省こそが大事だと思う。

6 月 9 日（日）

生きるもののいぶき

退院して帰ったが、もう一つ元気が出ない。絶食がこうもひびくものとは。福教組大会と社会党の集会に出て何分ずつしゃべったが、いずれも精一ぱい夢中といえる状況。三時頃帰宅して裏庭のつつじの枝を切ってみて力の程を試してみたが、やはり力量のなさを感じた。食べることのいかに大切かを知る。夜になって書斎から手当り次第に小冊子を取り出して読む。塵肺訴訟のことを書いた「涙がこぼれそうで」はどんどんページをくることになった。世の中にはつらい思いをさせられている人があるものだ。それに対して法廷の冷たさ、何とかならないのか。次の本に移る。これは句集、岸洋子「鴻臚館」である。一句でもと探しあてた――今年竹すでに山門より高し――新聞を読んでいて、草木がすくすくと伸びるこの頃、自然のいのちのさかんなることをめでる投書があったのを思い出す。無限のいのち、力

をつくづく感じるのである。小鳥の声、庭の虫、蚊さえも、自然のいぶきを感じさせる。塵肺訴訟で悲しみの日々を送っている人達も一つのいぶきと受け取った方がいいのかも知れない。高訴はいやといいながら高訴の年月を送っているわけだ。

6 月 10 日（月）

時－噴火－物質

時の記念日か。時が三次元の世界の一要素であるといわれるが、私はまだ時が何であるのかよくわからない。地球があり太陽があるから時があるのではないかと思ったことがその昔あった。何が正しいか考えたことはないが、それ以上時について考えたことはない。地球の歴史だけでも全く無知なのだから、又、考えてみようと思ったこともない。雲仙の普賢岳が二〇〇年前、何故か又今同じように、活動する火のかたまりといっても意味不明であるが、鉱物の熔けたもののかたまりといっても何のことかわからないが、灰のようになって、灼熱の状態になって、われわれの周りに降りかかって来ると、何なのかわからないというわけにはいかないが、常識的にいう灰でないことは確かである。それが地中深いところから地表にどろどろ現われるのだから、何年そうだったのか、考える能力は私にはない。桜島の降灰のことをよくきくが、灰といっていいのかどうか今改めて考えてみるが、鉱物の粉というほかないだろう。普賢岳の灰火で植物も土岩も民家も熔かされたが、何かに還元されているとみてよいのだろうか。全くちっぽけな存在の私。

6 月 11 日（火）

県人事への不満

当初予算知事保留分について査定態度を審議したあと、山ノ上ホテルで国会議員の渡辺、岩田の二人と夕食を共にしながら要談するという日程がとびこんで来た。六時すぎから八時すぎまでの懇談である。二人とも自治労出身ということであろう、県職の、私への意見が又、又、伝えられたわけである。とくに人事についての不平、そして林県議、林副知事、この両林にふりまわされ知事自身思い切ったことをしないでいるという点の指摘である。三期目のはじめ四月人事（選挙運動中ともいえる）への不満がくりかえされたことになる。二人の国会議員に県職労から訴追されたに違いない。私にいわせると、職労のこだわりがあるというしかない。林副知事は、人事について組合のいい分をきくわけにはいかないと言ったとか、鵜崎時代の失敗を考えてのことかも知れない。個性の問題もあり、公正であると思っても、それが斜視であることもある。組合からみた人事判断が正しいかどうか、にわかに結論づけられない。私自身知らないこともあり、判断が誤ってないとはいえない。情実がなければ試行錯誤で結構世の中は廻るのではないだろうか。

6 月 12 日（水）

「排除せず」はどうなる

今日一日の重要話題は県地労委の労働側委員の選任をめぐり、九名のうち一名も共産党支持労組の集りである労連側に渡さず、全部連合で独占しようとする動きに対し、私が抵抗している（又は孤立して、排除の立場をとらぬ）という事実をめぐっての秘書室長などのあわただしい動きであった。労働者、県労働部が全国の動きからして福岡県だけが特異な結論を出してくれるなと圧力をかけているようで、家永室長らは、それに従うかわりに、共産党県議や県労連に若干の県支援をすることでどうだろうと私にもちかけている。県評センターの梶村も来室して話込んだが、彼は私の非排除の立場を理解してくれそうだった。ほかほとんど、私に賛意表明なく、当惑しているのが私の心境である。労政課はさけて通ろうとしている。両林氏は私の説得に焦点をあてている模様。一人でも労連に席を与えるなら総引揚げをすると主張している経営側の姿勢も私としては到底理解できるところではない。

6 月 13 日（木）

石炭の町大牟田対応を

地域振興課の者に石炭問題を抱える大牟田の振興問題に早速対応策を練るよう指示した。六月七日の石鉱審の答申では、九次策は策定せず石炭は自由市場にゆだねるとされた。年産何トン生産とか、内需どこに何トンとか、石炭を政策の対象にせずという。内外の国内価格差は大きく大牟田の地で三池炭は外炭の三倍近いといわれる。石鉱審は石炭会社に営業の多様化を求めているにすぎない。三池坑は急速に減炭に向うであろうし、三井が大牟田の地で多角化努力をする気はないようだし、土地は三井が占有して手ばなしそうにない。県は三井、大牟田商工会議所など産業界、大牟田市に先行きどう見ているかをまず問い、市と共に何をなすべきかを考えはじめなければならないと私は指示したのである。当初予算査定を終ったばかりだが、この大きな政策転換に対応する予算案は目にみえていなかった。名案があるとはいえないが、志向していることぐらいは県民にわかるようにしなければならないと思うのである。県の係がそれに気付かないのはおかしいことだ。

6 月 14 日（金）

国際協力というマジック

岩崎隆次郎氏が仕組んだという地域ネットワーク懇親会が夜広州酒家で開かれた。知事ににがい注文をするというのでなく、はげまそうという趣旨と今後どう続けるかという課題が投げかけられた。旧学文の会を焼き直したメンバー二〇人余が集った。私は中東湾岸危機以来問題の局面がかわってきたことを再度改めて感じたと語った。何度かいってきたように、国連はアメリカと北欧に代表される二つの極があってまわっているのに、国際協力、貢献、孤立化しないといった言葉が、今政府によってアメリカの極に集中することを当然とす

るように使われるようになったこと、これを多くの国民が是認するようになったこと、これこそが今の日本の危機なのだということを今晩の席で強調した。国連協力ということが、アメリカ軍への貢献にすりかえられるのを国民の多くが認める傾向にある。地方自治の形骸化が進むということも同時に考えなければならないであろう。それは北欧的国家、福祉行政からの逃避、軍備の拡大体質への転換をも意味している。さきにもいったように、昭和 13 年の国家総動員法の前段にまで来ているように思える。

6 月 15 日（土）

女性が前に出てくる

先日上田恵子さんら女性副知事を誕生させる会の人が六人やってきて知事はバレンタインデーの時は他の候補よりこの問題で積極性がないとえんりょ勝ちな私の対応が不満だったけれど、今尚期待はかけているのだが、現時点でどうかときかれた。私はあの時はあのようにいうしかなかったが、今でも前向きではある、今後は客観的にわかるように、一歩前に出た言動をせねばならぬと考えていると答えた。近頃のテレビに出てくる劇のシーンは女がしゃべりすぎるし、男に対して居丈高すぎると私には感じられる。テレビが好んであんなストーリーにしているらしく思える。実力はそれほどでもないと現状を見るのが素直な感じである。もちろん試してみると意外と能力を見せる女性もあるが、女性だからよく見なくてはいけないとはいえない。「女性の怒りは男中心の社会のなごりのような女性とのかかわりが許せないから」と彼女はいう。確かに女性と新人類が今日の時代の変化の先頭にあるようだ。

6 月 16 日（日）

写字･･･此是学

明道先生曰某写字時甚敬非是要字好只此是学（それがし字を写す時甚だ敬す是れ字の好からんことを要するに非ず只だ此れ是れ学なり）中国古典名言事典をみていて近思録（朱子）のところに出てきた文がこれである。「字を写すは此れ是れ学なり」という見出しである。その二ページ前に不学便老而衰（学ばざればすなわち老いて衰う）というのがあった。つねに学ぶということでなければならないとは思っていたが、「字を写す」ということがこんなに強調されているとは意外であった。しっかりとていねいに字を書く、ということの必要性を自覚させる言葉であった。ともかくも書いていくこと、それによって自分を少しでも前進させるそのことによって生き抜いていくほかはない。そういう思いである。揮毫する文言の数を一句でも多くしようと思ってこの本をみていて今日はこの言葉に出くわした。収穫だと思う。

6 月 17 日（月）

国際交流広がる

タイの商務大臣が来博、明日その貿易センターがオープンする。中国以南、インドネシア、シンガポールに直航便ができ、次はタイという運びになっていて福岡もいよいよ国際都市の風格を備えてきた。先ほどはハワイ、済州島にも直行便ができたところだった。心配するのは交流の進展のなかで国際理解が伴っているだろうかという点である。言葉はもちろん衣食住、宗教さらには国家のなり立ちに至るまで相互理解がなかなか容易ではない。スポーツや技術学術面の交流ならやりやすいので、こうした面からはいっていくのはよかろうが、国がらの理解は容易ではない。困難はあっても寛恕の精神姿勢を根本にしんぼう強く交わっていくしかないだろう。相手から求めるのでなくて理解していくのでなければつづかないだろう。福岡が東京、大阪に次いで日本の国際拠点になりつつある点に自負心をもち力を注ぐべき分野だと思う。国際交流センターに立寄ってそういった点で意見交換をした次第。

6 月 18 日（火）

アジア諸国をもっと勉強しないといけない

タイの貿易センターが赤坂門にあるビルで今日オープン。夜はホテル日航で祝宴があった。われわれは福岡の国際的地位の向上という面で祝意をもつが、タイ側の大きな期待は、福岡が日本のタイ生産物の輸入の大きな窓口になってほしいということにつきるといってよい。その趣旨の発言が今晩のレセプションでいよいよ明らかになった。対日赤字の解消をタイ商務大臣は強調した。資源、加工品いろいろあるようだが農産物、とくに米の輸出に期待しているとみられる。すでに加工された米はかなり日本に入っているようだが、私は勉強が足りないので、どの分野に交流の可能性が強まるのかよくわからない。別のことだが、商務大臣は昨夜ラオスがアセアン諸国の中では一番立派な地域だといっていたのにはびっくりした。香港とかシンガポールしか知らない私である。アジアのことをもっと勉強すべきだと思うようになった。中国にしてもそうだが、日本の商品や技術が出ていくためには、相手国のものをもっと買わないといけないのだ。意図的に。

6 月 19 日（水）

「従心」の境

小雨降りつづく中、五時半に帰宅できた。ゆっくり時間がとれる夕刻である。外の仕事をすることができないからである。こういう日がたまにあって欲しい。机に向って、ひら仮名（高野切二）を書きつづけた。少しもうまくならないが、書くだけに満足できることもある。体調にますます不安が残る近頃だが、自己満足できるだけ幸せである。紙に書いてみた文句

　心和気平者百福自集　　さらに

　七十而従心所欲不踰矩

先日駅近くのビルにある国際交流センターで中村健所長と話していた時、私は「寛恕」という文字の意味する雰囲気が好きだ、座右の銘でもある、これはヨーロッパの宗教改革の気持に通ずるだろうといったのを思い出す。別の面からいうと、いろんな点でファイトを失ったからだろうとも思う。福教組、高教組、県評センターとつづく大会挨拶で「元気がない」との評判だった。

6 月 20 日（木）

柳川両開地盤沈下問題

大和干拓両開の地盤沈下について選挙中呼び出され地元農業者と話し合った件につき、今日予算案に出てないが、対策はどうなっているかと事務側に詰めたが、ポンプ揚水の強化しかできてない事がわかった。県政懇のとき、夕食しながら自民党の柳川出身江口県議からその件につき再度問い詰めがきたので、弁解した次第である。両副知事が私の左右にいたので、よく問題を認識してもらったのであるが、要は問題に対応すべき窓口課がない性格をもつ懸案なのである。干拓地地盤沈下だが干拓の手落ではないはずだし、三池炭鉱掘削のせいか、現時点でおこっている島原の火山のような問題なのか、ともかく原因究明ができておらず災厄は進行中であり、農政、国土、土木、通産その他、国レベルでもどこで扱うかわからない現状。県でも窓口の新しいセクションを編成しない限りどの課も逃げまわる。編成しても対応できる国の機関がないのでは困る。ともかく今一番苦悶すべき難題なのである。

6 月 21 日（金）

住居の改築について

数日前からみゆきが、便所や風呂場改修の意見を出し、随行の川上氏にその話をしたら友人を紹介しようといってくれ、今日その人が訪ねて来て、当方の要請の概要を説明する段階になった。雨期が終ってからの工事がいいだろうという。七月十日から月末まで彼女は啓二一家と相伴ってフィンランドに行くといっている折柄、工事は八月になろう。今は風呂場のタイルは汚れ、脱衣場の壁がカビできたなく、便所もガタが来たように感じられる。彼女は前の家屋を崩し改築してもいいと思い切りのいいことをいうが、われわれの寿命はそれに値しないだろうと私は賛成しなかった。今日、親の住む家に息子達が住むことはむしろ率が低い時代になった。つまり住居の半恒久性は薄らいだわけだ。貸家に住むのは高くつくようだが、総計してみると、そう違わないのではないか。それに何だかだと物余り時代の物が詰め込んであって整理するのが惜しく整理する気にもならない。そのような家を息子が継いでも仕方がないだろう。

6 月 22 日（土）

ユニバーシアードに向けて

夏至を確認しよう。四年後のユニバシアード福岡の組織委員会とマスコットキャラクター、シンボルマーク、スローガンの発表会がニューオータニで行われた。片仮名ばっかり、時代を反映している。組織委員会で福岡大会の特殊種目が柔道と野球と発表されたが、これはむしろ固い日本名である。四年後の八月二十三日から九月三日までの十二日間の会期も決定された。六〇〇〇人の外国学生を泊める選手村も用意される。国体に積み重ね、国体を上まわるイベントになるのではないかといわれる。会場も新規にいくつか整備されるので福岡市はいよいよ国際都市の風格をそなえていく。私どもすでに過去の人間になっているが、さらに遠い存在となるように感ずる。それにしてもシンボルマークなど応募入選者はほとんど東京、たまには大阪である。感覚のすぐれた人あるいはそれで生活している人が集っているわけで、福岡市にはそれだけの人材が住みついていないといってよい。比較的にまだまだイナカなんだろう。

6 月 23 日（日）

テレビ評

雲仙で又かなりな鳴動があったという。マスコミ公害で死者が出たというのはもう常識らしいが報道関係者にいわせると取材は面白くてたまらないようだ。昨日のユニバーシアード関係委員会式典でも、報道陣のカメラ撮影活動が目に余るほどであった。カメラを向けられるだけでなく、ライトを正面から当てられると周りが真暗になる。もちろん取材したのが全部報道される訳ではない。新聞にもほんの僅かしかのっていない。京都の植樹祭の時など報道陣の一隊が私どもの視野を長時間にわたって遮っていたのが印象的であった。取材の自由は何ほどか規制するか遠慮してもらわないといけない。私はうちに帰ってもテレビはほとんど見ない。ホテルの部屋ででもテレビをつけることはない。独りでいたい、ひとから離れたいのに、テレビはおしゃべりばかりでうるさくもある。見ないのは勝手、せっかく独りでいたいのに。これがテレビ評。

6 月 24 日（月）

物、物、物で汚い心

今日も夕方五時ごろに帰宅できたので昨日のつづき筆をもった。同じ筆を何年も使っているのですり切れてか、細字を書くのに不都合なのが少くない。捨てる気にならないのは吝嗇のせいだろうか、これはなかなかなおらない。筆だけではない。紙も二度使わないと捨てる気にならない。五〇年も前紙の表裏を使う生活をしてきたのが身にしみついている。鉛筆も短くなるまでナイフで削って使った。今でもその気持はかわっていない。昨日、一昨日台所の入れかえをしていたが箸の使ってない溜置きが抽出一ぱいにあるのに気づいた。湯呑み、皿その他何でもたくさんにある。帰りの車の中での話題に街並みが看板できたなく、店前の通りを何かの置場にして狭くしているのはいかにも日本人らしいが何とかなおらないかと

いう事になった。那珂川の両岸に建物が並んでいて水辺をふさいでいる事も話題になった。我もひともケチというほかない生活にとけ込んでいるのである。

6 月 25 日（火）

欠陥現北九州空港

小倉での西瀬戸内開発促進総会で現小倉空港の東京一便やうやく再開というのに、この三ヵ月間六割しか使用できず、濃霧などで欠航が多くて不便きわまりないとの苦情が訴えられた。七月から今の一日一便を二便にふやす予定になっているが、こんなに欠航があっては予算も予定も組めないのは事実。濃霧、滑走路の短かさ、計器の不十分さなどが原因らしいが、今のところ計器の改善しか解決は困難という。滑走路を上空から確認できても操縦士が着陸寸前に目で確認できなければ計器のみで着陸することは不可らしく、霧が邪魔して肉眼でみえなくなり板付などで不時着になるという。築城基地（軍用）は使えないのかというが、そういう仕掛けになってないという。大型飛行機の時代なので以前から YS11 しかとんでなかった現空港なので欠陥空港といわれる所以である。小倉の象徴といえる足立山を取るわけにはいかないし滑走路延長も不可という。新空港を作るしかないと皆意見が一致。

6 月 26 日（水）

革新色は潰されていく

庁内で労働党、ライオンズホテルで民商の人達と対面する日程があった。知事選で支持したのにという人ばかりで、後者は祝勝会でもあった。秘書室の壁が厚いことを感じながらようやく突破しえた努力も買っていいと思う。革新知事というのになかなか施策の革新性が見えてこないという不平が一般的、新聞も当面の県議会への提案（当初予算など）に奥田色がみえないと書き立てている昨今である。報道陣の場合は期待というよりはおもしろ半分であろうが、労働党や共産党系の人達は真剣である。願いが届かないともいっている。私はその理由を二つあげて弁解した。一つは私をとりまく人的要因、県職員、幹部、県議会さらには政府。第二は余りにも多忙のため、県民の声をきく機会が少いというか接点が少いということ。後者はそれほど障害ではないが、問題は前者。とにかく中東湾岸問題への対応、当面の小選挙区制導入の企図をみてもわかるように、アメリカ一辺倒にのめり込んでいく大勢に国民は抗しえなくされつつあるのだから･･･。

6 月 27 日（木）

長寿社会というけれど

門司の野原さん、浄水池の問田さん、志免町長の南里さん等々今日はかなり年配の人に出会った。元気ですかと声をかけた。ビクともしない様子の人ばかりである。六月県議会の提案理由説明は七五ページの原本をほぼ一時間かかって読み終えた。がやはり途中で疲れを感

じたし、それも原因で何箇所かまちがえた。注意がゆき届かないからだろう。他面老化のゆえでもある。ひとから注意され（議場からも）、何故まちがえたのだろうと思うほどだが、トシのせいかも知れないのだ。今回の提案予算の中にも高齢化時代らしい項目がいくつかでてきているが、政府も県も市町村に対応を期待するところが大きい。高齢者といっても七〇歳から九〇歳ぐらいの人が対象に考えられる層であるが、ひと手のかかる人も少くないわけで、そのマンパワーこそが要請されている。今日ふと思ったのだが、早目に死ぬ方が幸せといえるかも知れない。長寿社会といっても必ずしも幸せとはいえないのに、と。

6 月 28 日（金）

科学・芸術・文学

私学々術局の大石氏が来室し話込んでいった。城野、池野と女子大の OB（ママ）が大学院を作るよう要望してまわっているとの報告もあった。大学院もいいだろうが、女子大の名声を高める努力をしてほしいというのが私には先決課題である。役人世界全体にいえることだろうが、生き残るなりひとの先を行くという欲がなさすぎる。「安住」という立派にみえる反面のマンネリズムが目立ちすぎるように思えてならない。先日ユニバーシアード大会（福岡）でのシンボルマーク、マスコットなど応募選定に福岡出身者がないのはどういうことかと疑問を出した。芸工大などあっても役立たない。科学はするけれど芸術はどうでもいいとする人が多すぎる。子供の時から勉強はするが情操教育とその効果が評価されない。芸術分野で生き抜こうとする人は僅かしかなく、それらは東京や関西に行ってしまい、福岡には人材が住みつきにくい。文学や芸能にしてもそうである。女子大は科学するだけでなく芸術や文学の面で伸びようとする人材を育てることに力を注いで特徴を出すようにすることがもっと緊要ではないだろうか。

6 月 29 日（土）

緑と小鳥

近年緑を意識する自分に気がつく。この時期、紫陽花と共に緑葉が満喫できる。有難いことである。庭に出て緑をじかに楽しんでいると虫がまた多い。近頃虫を殺すことを遠慮する自分にまた気づく。足にとまって刺す蚊はたたくが他はむしろいのちと思って放置する。わが家の近くは緑・虫が多いので小鳥が多い。東側の梅林にも何種類かの小鳥が来ている。それぞれ違う啼き声だからわかるのだが五～六種とはいわない。なぜ小鳥の名をおぼえていなかったのか今にして残念でならない。この季節小鳥のさえずりが一番よく聞こえるのではないだろうか。虫が多いからたぶん満腹しての大さわぎだろう。楽しさ一ぱいという状況である。すばやい動作がふしぎである。ねぐら、巣はどこにあるのだろうか。バードウォッチングを楽しむ人があるがうらやましい趣味だ。魚釣りよりいいと自分は思う。同一種が群をなす本能だって不思議というしかない。

6 月 30 日（日）

小鳥の句例

雨の一日。小鳥が囀って時を強調していると思った。これが句誌の中にでてこないかと思った。昨年の万燈八月号に「雨上るらし囀のいっせいに」福岡鎌田いよ子というのが見つかった。ぴったりの雰囲気だ。だが一般に小鳥のことは句例としては多いとはいえぬ。鶯やつばめ、郭公、時鳥は句例が少くない。「また違ふ方より郭公聞く夕べ」糸島川上清子というのも、よくわかる。「時鳥曇天の空鳴き渡る」南関木村清香というのも、いい気持である。小鳥が囀る、ひるがえして飛びすぎるというさまをみると楽しさ、快活を感ずるが、小鳥たちにとっては真剣そのものであろうし、生きざま、生き抜くことそのものであろうと思う。子育てにもいのちがけで取組んでいるに違いない。都会にいるせいでもあろうが、燕をほとんど見ない。その餌を運ぶ行動、巣をめぐってこもごも来る親燕、見えるのか見えないのか空気で察知するのか一せいに口を開いて餌を求める数羽の子燕の姿、幼い時から知っている姿が今も忘れられない。

7 月要記

七月も知らぬまに過ぎてしまった。一番大きかったのは当初予算をかけた新議会が六月から七月二十三日まで延々開かれ拘束されがちになった事だが、野党側も譲歩を重ねて、順当に運営してくれたので助かった。次に大きかったのは十日以降月末までみゆきがフィンランド旅行をし、その間和代が来て手伝ってくれたことだ。留守番する者がいないと中元シーズンなので大変だという側面も兼ねもっていた。それと今月は雨が多かった。平年以上に雨がふり、七月末には豪雨雷雨があった。福岡の水甕も当分安心できる。東京は降らなくて困っている。雲仙が依然見とおしのないままなので、避難生活をしている人達は苦悩は限度をこえているようだ。帰らせてくれない不満が積もり積もっている。文部省や教育庁は何を考えてか八月はじめ授業の不足をとりかえすとして避難先で仮校舎を設け学校を開くという。学校とは何かをさか立ちして考えているようにすらみえる。中国大陸の洪水がどうおさまるのか、米ソ関係がどうなるのか問題。

7 月 1 日（月）

普賢岳の土石流、火砕流と人間の執着

夕刊に「土石流約五〇戸が流失、倒壊、水無川下流襲う、国道越え有明海へ」と雲仙普賢岳事故が報道された。昨日夜も大雨が降ったから災害が拡大したのである。一夜で姿が一変したとも書いてある。火砕流堆積も大きく影響している。島原市の雨量は三十日午前〇時から今日午後一時まで二四六ミリ、火山性地震一回、微動三四回、震動波九回の火砕流という。避難生活をつづけている千数百人の日常がここで又絶望性を増したのである。自然の力の大きさにはとても対応できないことがしみじみ感じられる。ただ残念なことに、ひとは住む

巣に執着する、しすぎる。あきらめられないのである。この執着を非難することはできない。よく考えてみると、汗の結晶である、田畑、住居、家財に魅練（ママ）することなく、新規再出発を決意した方がいいのではないか。逃げるにしかずであり、新天地の開拓に早くとりかかった方がいいのではないか。自然の破壊力は巨大であり、人間の汗に対して無慈悲である。そう思うけれど言えない。自衛隊は出動するが守ってやれないのである。

7 月 2 日（火）

九州北部研究学園都市の構図

県の企画部が世話をして、国からもすすめられている北部九州研究学園都市構想の素案をめぐる懇談会がグランドホテルで開かれ、アジア・人間・環境を共通コンセプトとすることで動きはじめた。まずは北九、宗像、飯塚、福岡、久留米、佐賀をゾーンに入れての、日本で三つめの研究学園都市を構想しようという。学術、研究、技術開発、文化研究などにおける従来のタテ割りをこえて、産学官協同で新しい研究開拓の可能性を追求しようというのが狙いである。これまでの多くの研究は自己完結して終点をもつものが多く、他とのつながりを考慮していなかったであろうが、今後はむしろ学際的な視野が重視さるべきだし、研究もそれだからこそ脱皮することができるとの視点に立っている。国の行財政のタテ割りもそれによって欠陥を克服することができる。今日の懇談会が次のステップを自分たちでふみ出せるようになることを希望する。点を結んで力とするが、横に結べるようにするのがねらいとなろう。

7 月 3 日（水）

裏からとった資料で追及

三期目最初の県議会の代表質問一番は自民党の板橋。私の県社会党のフォーラムでの発言をとりあげ、県民党を唱える知事が自衛隊を否認するかのような意見を、かくかくしかじか、の言葉でのべたが、県民を代表する知事として不穏当という意味の追及をしてきた。意見の違いぐらいあってよいのに、それでは県民代表といえない云々の追及である。板橋がフォーラムに来ていたはずはないので、誰かが録音していてその資料を売ったに違いない。記者が手伝ったという推測もつく。買う方も、売る方もどうかしていると思うが、周辺に敵がうろうろしているわけだ。私がした答弁がひとを小馬鹿にしたように受けとられたということで閉会後、自民党内から問題提起があり議運にかかり、ひともんじゃくする場面が生じたが、まずは議長「注意」ということで今日はおさまった。いつもあることだが、裏から見たり、あげ足をとったり、議会というところは、福岡の場合あまり県政の前進に役立っているとは思えない。もちろん執行部から見ての話だが、敵意をもてばそれだけ無駄になるということだ。恕の心がほしい。

7 月 4 日（木）

奇妙なことがつづく

文字通りの世の中、変わってきたし、変り方も妙である。世界の動きは東西の緊張がかわり、湾岸戦争があり、米、ソともに以前の常識では理解できない。四月の統一地方選挙をはさみ、湾岸問題のピークを経て国内の金融、経済の動向も妙であるし、社会党の土井たか子体制の崩壊、自民党の政治改革路線をめぐっての内紛などなど、新しい時代が来るのか混迷中なのか、自分がどっちを向けばよいのか、さっぱりわからないままに時間がたっていく。私自身の体調も全く自信がもてぬままに、よくない日々である。はずみもつかないし、爽やかでもない。もういい加減でいいと思ったりする。確実に自分が過去の人間になっていることを疑わない。大坪氏が妙な手紙をつづけて二回よこした。それも「さよなら」と結んだ絶縁状をたたきつけて何ヵ月もたってないのに。妄想というとしかられるだろうが、政界、思想界、県議、国会議員の誰彼をばっさばっさと切った内容の手紙である。県の四月人事でにえかえるように立腹して以来の彼。

7 月 5 日（金）

句をみて季節を思う

時間のある限り、句集をくって筆で書いてみることにしている。夏らしさを表現しているのが季節に合う。

風鈴の音に迎えられ訪ねけり　秋帆彩
稜線に夏山脈を重ね英彦　竹　亭
英彦人の沢蕗負うて戻り来し　〃
植田とも見分けつかず雨ふける　〃
紫陽花のどの花も好き苑めぐる　宮坂和子
暫くは眺めいたしさくらんぼ　飯田龍女
水打って今日の商ひはじめとす　高富千歳
久々の雨のつれきて涼風に　増井ぬいえ
風鈴の音色に偲ぶ飛騨の旅　吉浦タツ子
息災に草引く今日を喜ばん　蒲田いよ子
山深くダム静まりてほととぎす　木下屋信子
今朝こそは空耳ならすほととぎす　築山アヤ子

7 月 6 日（土）

雨は一まず止んだが

降りつづいた雨もようやく去ったかなと思う。今日は久しぶりの晴天。緑の葉も躍っているように見える。雑草も力一ぱい延びようとしている。東側の梅林の主も梅の枝を詰めに来て

いる。どんどん切るしか秩序が保てないようでもあるし、わが家の台所からは空が見えないほどに茂っている。紫陽花の株もせい一ぱい枝をのばしているので詰めて刈るしかない。雲仙の噴火（土石流・火砕流）はなおつづいていて、避難民に耐え難い苦悩を強いている。この長雨がどれだけマイナスに作用したのか知らないが、毎日何メートルかマグマの噴出ものがふくらんでいくようだ。何時止むともいえない、予言できる人もいない。政府の対応が鈍いと報じられているが、ほんとうはどうにも打つ手がないといえそうだ。流出土石を生活との関連の限りで処理していくのにも、人手が全く足りない。すごいカネもかかっているようだが、鬼と少女のたたかいのように実力が及ばないのだ。

７月７日（日）

働かないですむのは異状をひきおこす

昨日につづき細筆をもって一日を費した。小雨と風、そして蚊が外に出ることさえ妨げる休日なのである。昨日法学部の河野正輝氏からの電話を思い出した。生活保護のことで私に、行政の立場で感ずることをきかせてもらう時間をとってくれということであった。ついでに私は筑豊の「精神風土」問題に関連する感想を若干つけ加えて電話応答した。その昔イギリスの救貧法論を思い出しながら話した。「なまけ者を作る」という行政側の主張に同感できる部分があるからである。二十年も三十年も生活保護を受けていて権利意識だけがひとり歩きしている。働いてかせいで生活しようという気慨（ママ）を失ってしまうのである。それは失業対策にも、健康保険にもいえる。更に用地買収にもあてはまる。働くことなく一定の収入やサービスが得られるからであるが、問題は何年もつづいている点にある。子供にもそれが伝承されるから、勉強することにもひびいてくる。行政の梶取りだ。

７月８日（月）

働くことに意義を

共産党の県議諸氏を相手に庁議室で中食。懇談の中での指摘は、今回の当初予算の中には党の要求がほとんど容れられてないとのこと。今の私にはそういう追及にはどう答えていいかわからない。自民党側からも議会質問でボロクソにいわれている現在、共産党も別の面からつつこうとしている。でも、本来は県民がそれぞれ自分でベストをつくし、それでも不都合だから、又市町村がベストをつくしてもできないからと立証して、県政に要望するなら納得できるが、何でもかんでも県政のせいと追及する態度、これはいけないと思う。雲仙で避難生活をつづけている人は気の毒。何の仕事もできず、大部屋の中で、何日もただ何か食って生きているだけ、では頭も変になるのではないか。災害への救済というのはここまでくると、食、衣、住、保健だけではなく仕事、生き甲斐を与えることであるということを町、市、県、国の当局者も気付かなければならない。単に食うのではなく、働いて腹をすかせて食べてこそ生命なのである。その辺がわかる人が周辺に意外と少い。

7 月 9 日（火）

雲仙見舞に行こう

雲仙の熔岩噴出が、とどまるところなくつづいて危険性は増すばかり。難をさけてじっと耐えている人は表現の仕様もなくつらいだろう。私は今日の一般質問答弁検討会のあと、知事自身長崎県に見舞に行くと提案し、検討の結果、一般質問終了後（十一日夕方）長崎県庁に行く日程をほぼ決定した。明日は両陛下の現地視察があるというのに、福岡県が隣県に対し、今の状態でいるわけにはいかない。七月一日林副知事が県職員からの見舞募金千五百万円余を携えて長崎県に行ってはいるが、私は地域婦人会の見舞金を携えて行く予定になった。一般に、モノ、カネ、住家の援助を考えるが、私は避難者に何か働く道をさがしてあげることも亦この際必要ではないかと考えるので、そのような発想も出してみようと思っている。つまり、カネを出せば片付く問題でない、その限度をこえているという考えを述べてみたいと思うのである。県議会も執行部の対応を追及しようとの雰囲気だ。

7 月 10 日（水）

新時代を負う地労委

ガーデンパレスで地労委の新会長招宴があった。その前に私は済生会病院院長室の窓から、その昔の地労委会館跡をしのんで宴会の席での挨拶の話題にした。戦後いち早く新木造庁舎として建設された会館のさまざまなたたずまいが脳裏に浮んでくる。戦後日本がいち早く欧米流の新社会に向けて歩み出した時、この会館はその殿堂であった。労働県福岡の劇がここで延々として展開されたのである。今は亡き、当時の九大の菊池勇夫教授がこの劇の主役でもあったろう。私は最初からの観客であった。いま、福岡県は石炭鉄の時代に織りなした素材型に代表される産業構造からの転換をほぼ明確にしてきたが、その後遺症というよりは、新しい産業構造への展開の摩擦を気にせざるをえない時代に立っている。加工組立型にかわりつつあることははっきりしているが、日産、トヨタの自動車その他先端技術関係のソフトを先頭にした産業と、素材型産業が残した小企業群との間に人材を軸とするアツレキが招来されることが予測され、そこにこれからの地労委の新しい課題があるように思えるのである。

7 月 11 日（木）

久しぶりの議会ストップ

しばらくなかったのだが、今日県議会が一般質問の最終段階でストップした。私の「解放」発言が引き金になったのだが、自民席からのヤジと社会党竹田県議の反応で三木清氏らがガマンできんといい出したためである。どこかでストップをかけたいと面子にかけて狙っていた自民党の罠にはまったということであろう。今日の一般質問はトップの野下（社）のほか五人は薦野（県民ク）を入れて、みんないいたい放題の言葉で知事攻撃をしたので、森

田（しんがりの発言）の前で、竹田の激昂をいい種に議場の騒ぎが始まり、井上議長の意に沿わず、ストップ休憩になった。その間約二時間、議事録にはカゲ薄くながら議事がこんらんした。但し、野下ほかの四人の発言は議事録を見なおす必要があるほどに悪口雑言を私にあびせたものであった。礼はもちろんないし、常識外れというほかないであろう。多数党であれば何をいってもよいという態度は議会の品位を著しく傷けるものといえる。でも私はカッカしないのが自分の健康のためになると思っている。

7 月 12 日（金）

危機の予感

江戸川区総合文化センターで同対の要望全国大会があって往復した。東京が大きいのに改めてびっくりした。車道の混雑もあってのことだが、東京事務所から片道公用車でほぼ一時間かかる。その間、東京の素顔ともいえる街並みを拝見したが、やっぱり巨大都市、異状都市東京であると思った。昨日長崎ゆきで一四〇キロのスピードで高速道を走って、違った光景だが総じて異状日本を感じさせられた。車社会の面だけではない。人々が余りにもスピード、時間の価値を大きく認めすぎている。なぜ急ぐ、なぜ車なのかと問いたいし、それによって交通事故、環境汚染など失うものは多かろうに、それが隠れてみえない。今日も羽田に行く途中の高速道で追突のような事故があったようだ。「知らんぞ」といいたいような社会傾向である。日本人のエコノミックアニマル性がやがて根本から問われる時が来るのではないだろうか。それは社会の一たん破壊再出発になるのかも知れない。アメリカ追随もいい加減にしたらと思うが止まらないらしい。

7 月 13 日（土）

社会党への注文（一）

（以下長文の引用「経済論壇」三年六月号より）

「我々使節団（国連事務次長マーティ・アティサーリら）は世界保健機関や国連児童基金からの最新報告を読んでいた。それはバグダッドを中心とした空爆の非人道性を語っていた。然しながら、戦後ただちに現地に赴いた我々はそれまで想像していた破壊状態をはるかに越えた一種不気味な荒廃を目の前にして言葉を失った。多国籍軍による爆撃はイラクという国の社会基盤を粉砕し、一九九一年一月十五日まで存在していた都会的な工業社会に、世の終末を想わせる悲惨さをもたらした。人間生活に必須の浄水施設や電気ガスはもとより、イラクが一国として機能する為の基盤を壊滅に追いやった」･･･この実態を検証するべく元司法長官ラムゼイ・クラーク博士はまだ猛爆中の二月二日から一週間カメラ班をつれてイラク全土を駆けまわり、イラク市民の生活そのものが系統的に破壊されている証拠をフィルムにおさめてきた。それは米政府が喧伝したような軍備施設ピンポイント爆撃では【7 月 14 日に続く】

7 月 14 日（日）
社会党への注文（二）
【7 月 13 日から続く】なく詳細な衛星写真を前にして民間企業、農場と食料倉庫、道路や鉄道、病院や学校を選び、それらを系統的に破壊したと博士は述べている。全く無防備で無抵抗の市民を整然たる軍事計画のもとに惨状に追いやった多国籍軍、特にその総指揮を務めた米国防総省はハーグ協定、ジュネーブ協定に違反した「国際戦争犯罪人」であると宣言し、クラーク博士は大規模な告発を開始している‥‥世界には百三十七の国々が湾岸派兵に参加せず、最後まで戦争に反対した。米英仏の国内にも反戦運動のうねりは続いた。アメリカ議会の約半数も反戦だった。それは戦争という最悪最低の手段を選ばなくとも、イラク軍をクウェートから出すという国連の決議は実行に移すことが出来るからであった。経済封鎖による兵糧攻めと交渉―これこそが国連の意図した紛争解決手段であった。経済封鎖は確実にその効果を現わし、今年六月までにイラクは完全にねをあげると【7 月 15 日に続く】

7 月 15 日（月）
社会党への注文（三）
【7 月 14 日から続く】いわれていた。戦争をする必要など全くなかったのである。日本のやるべき国際貢献とは、アメリカ政府の指揮棒を仰ぎ「殺しこそ国際正義」と願うことではない筈だ。日本が無差別本土空襲と原爆の悲劇を通して国際社会に貢献することが出来るとすれば、それは「武力は解決にはならないのだ」という事実を説き続けることである。武力ではなく、あくまで交渉し、条件を出して説得するという方針を堂々と貫くことである。そうしていれば今回でも世界百三十余国は、日本の気骨に心から尊敬の念を抱いたことであろう。――三日分のスペースをさいて「日本は世界の孤児ではない」松原久子の論文の一部を引用した。それは今の私の気持に合う。そして今回七月十三日の社会党の県本大会で私は挨拶の中で引用しながら代議員の諸氏に女史の意見について考えてくれるよう訴えたのである。きわめて憂慮すべき空気が現に社会党をも包みこもうとしているから一そう憂慮させられている。

7 月 16 日（火）
雑感
和代が、うちの鋏はみんな先が切れない、紙切りの布切りの区別をしてないのがいけないと強調していたので、夜帰宅してから主たる鋏を六丁ばかり集めてヤスリで刃を磨いだら、かなり切れるようになった。何でも一寸手をかければいいのだが、それをしないので身辺すべて雑然としていて、すがすがしくない。ほんとうはこの刃物の例のように気づいたことをすっきりさせる気持のゆとりがほしい。一週間前電話番号を変更し、なすべき変更連絡が抜け

ていたので三～四件連絡をしておいた。一週間のうちに若干迷惑をかけたケースがあったようだ。でもみな了解してくれた。私だけでなく、嫌がらせ電話を受ける人がかなりあるとの声もきくことができた。「電話公害」といっていいかも知れぬ。嫌がらせのハガキも来る。同じのを何通か出さないと一年以内に死ぬよというのが先日姫路の消印で届いた。電話といい、ハガキ手紙でいやなのが絶えない昨今である。世の中少しおかしくなっていくようにも思える。豊かさのカゲだろうか。ピストルや刃を用いる事例もあるこの頃だ。

7 月 17 日（水）

対イラク政策エスカレート

アメリカのイラクに対する主張が、ここ一年ばかりの間に次々にエスカレートしているのに気がつく。昨年の八月はじめのイラクのクウェート侵攻はけしからんから始まって、イラク軍の撤退、サダム・フセインの抹殺、バグダッドの攻略。（そして軍事施設の破壊だけではなくて民間生活の食糧、衣服、住居、通信、交通なども標的にされ、各国の経済封鎖だけでは効果がないと頑強に主張して首都攻撃になったのであった。）フセインは抹殺され、イラク政府がどうなったかは私には不詳であるが、次は大量殺戮兵器の抹殺消滅にまで進み、現時点では核兵器をもっている可能性があるからそれも消滅させると頑張っているようだ。世界主要国がアメリカのこうしたエスカレート政策に乗っているのも私には不思議だ。一年前までは黙認するか武器輸出もしていたに違いないのに一年後は今ここまで変っている。国際とか国際干渉とかの言葉自体に疑問を覚える。イラク国家の自主性はどうなったのだろうか。

7 月 18 日（木）

小倉の毒ガス問題

小倉、曽根の人達がさきの大戦中近くの毒ガス充塡工場で働かされ今でも呼吸器障害をうけているので、国家賠償を訴えているので、知事も協力してほしいと陳情に来た。もう六五歳以上の人で、付近で十人の従業員手帖が見つかったとしてその写しを、又今尚残って遊休状態にある工場跡地の写真も添え訴えてきた。広島の大久野島とかにもっと大きな事例があって、大蔵省も厚生省もこれを認め、補償を決めているのに、曽根のケースは証拠不十分で退けられていたが、今に至って証拠が揃ったのだという。昨年五月はじめにも県にアピールに来た人達だが、これで二回目。これだけ証拠が揃えば国の側も認めるほかないのではないかと思うが、毒ガスと作業と呼吸器障害が、これだけの時間を経て因果関係として証明できるのか否定できるのか、私にはわからない。広島大学の医学系教授も肯定・否定どちらかに決めるとはいってないようだ。さきの大戦との関係、国の責任につき、内外ともに近頃たくさん立件されている。イラク「貢献」との関係でどうだろう。

7 月 19 日（金）

イギリス留学回想

県議会の常任委員会は知事保留質問なしで終点に行ったようだ。待機していた間に国際交流センターの山口嬢が来室し、若干質問したいという。ロンドン留学の時の模様を書いた私の原稿についての補充質問である。ブリティッシュ・カウンシルのことが中心である。二〇年だが、私には不満はほとんどなかった。当時は一ポンド八〇〇円、今日それが二四四円前後といわれる。ずい分時代もかわったものだ。県の国際交流センターは BC のような役割を果たしてくれればよいのに二〇年後からみても当時のＢＣにはまだ及ばないのではないかと彼女に言った。毎日の留学生活の中で、半日かかって英字新聞を読んだ日も少くなかったが、その時間に相当する分はあちこち見学等に費す方がどれほど役立ったか、後に気付いて私は BC に大いにお世話になったのであった。英語でも一対一で通じ合おうという気になれば何とか話せるものだといえるが、現時点ではその気持はゼロだ。そのような体験が尊いものだったとの回想がある。昨日、写真を一枚というので当時のアルバムを繰ってみたが、忘れのひどいにびっくりした。

7 月 20 日（土）

硬直教育

小学校は今日から夏休み入りというので、和代の孫たちが三人、親子全部で五人が夕方やってきて、とたんににぎやかになった。島原では繰り上げで明日から新しく授業が始まるという。北九州に避難していた子供たちも新学期が始まるので島原に帰る別れの会をしたと報じられていた。何とも妙な感じだ。昨日はうちの民生部長が支援方法の一つとしてホームステイを申し込んだが新学期が始まるとの理由で子供達を相手とする支援がことわられたと私に説明したのを思い出す。授業にひどく忠実であるようだ。暑さも噴火も不自由もはねのけて授業時間は消化しようという学校側の、あるいは市、県教育当局の姿勢はみごとではあるが、硬直しすぎではないだろうか。万一の責任を逃れようとしているかのごとくである。「島原大変」に対し、地区の人達も当局側もわれわれからすると硬直的にみえる。なさけ容赦がもっとあってもいいのではないだろうか。学校の授業がそれほどに価値をもつというのだろうか。どこかの校舎を借りて二部授業をこの暑い中で‥‥

7 月 21 日（日）

由らしむべし、知らしむべからず

色紙に書く文字を整理していて、論語の、民は之れに由らしむべし、之を知らしむべからず（泰伯）というのに出くわした。その解説を読むと、法律にのっとった生活をさせることができるが、その法律を理論的に理解させることは大変困難だと書いてある。一般にわれわれの理解は、民は従えさせ、知らしてはならん、という専制政治肯定論的に受けとられ勝ちで

あった。この解説では可能、不可能ということである。これでは違う。私自身平気で疑うことなくそう思っていた無理解をはずかしく思う。「隗より始めよ」というのも時に用法を誤っている例に出くわす。まずは不勉強というしかないし、知ったかぶってはいけないということにもなる。「由らしむべし、知らしむべからず」などは、もっと用心して使わねばならぬと思った。「開かれた県政」を主張してきた私であった。知らしむべしということを主張してきたことになっている。県政について、わからないかも知れないが、わかるように努力することはむしろ当然だと思う。

7 月 22 日（月）

子供の世界を思う

来てよし帰ってよし。子供たちは引揚げた。家の中、所かまわず走りまわる。椅子を倒す。何でもないことに大声をあげて共に笑う。こちらから興味あろうとして示してやってもふり向きもしない事がある。野菜は食べず、牛乳や肉は欲しがる。エネルギーがあふれている。汗を汗と思わない。夜は早目に眠くなるといった具合。私は何があっても怒らないようにつとめる。自分にもこういう過去があったはずだし、それらを経て成長したから、すべてが成長の糧なのである。父から強く叱られたのを回想しない訳ではないが、むしろそれら一齣一齣が成長の一段一段を刻んでいるに違いないし、自分自身この子供たちと全く同様に大人の世界や配慮と無関係に走りまわってきたに違いないのだ。現時点では自分を尺度規準にして考え勝ちであるが、それは深慮に値しよう。大人の世界を心するはずはないし、関知しない。それが子供の特徴であろうと思う。関心が合わないから腹立たしいケースが少くないが認めるよりほかないと思う。

7 月 23 日（火）

墨を使いながら思う

昨日今日、夜の時間を連続して揮毫にあて当面の課題を果たすことができた。ひきうけるからいかんとの意見もあるが、私にとって揮毫課題は苦しくてもやり甲斐がある。ひとから頼まれることは有難いと思うのである。昨日朝まで二日間孫にあたる子供達に騒がれたが、面倒というよりは、それをよろこばしく解釈しなおす方が正道であろう。子供たちも来てくれるだけ有難いということになる。ものの理解には裏表があり、一意義と第二義とがあるだろうが、どちらも考えないと十分とはいえまい。揮毫によってわずかでも勉強になると思うと、嬉しくうけ取っていいのではないだろうか。ところで関連して思うことは、みやげにもらう中国製の筆墨は質がよくない。今日は墨すってねばねばになって硯も筆も洗い直したし、墨がポッキリ割れるのには驚きであった。以前から思っていたが、質の合格不合格は中国では点検されてないようだ。こういう社会体制では発展は覚束ないのではないか。品質管理ができてないのである。外形でパスはいけない。

7 月 24 日（水）

女性副知事への途

藤田一枝県議ほか数名の人たちが二九グループを代表してということで、女性副知事を実現するための運動の一環として今日来室要請をうけた。この人達二度目である。選挙中バレンタインデーを利用して川口直子さんらが仕掛けた候補者への同種要請の行動よりは若干きびしさはないが、今がチャンスという気持は十分に受けとれた。知事選後、東京都がまず一番のり、沖縄は一度失敗したが二度目の挑戦で成功した。又福岡市はベテラン局長を女性初助役として成功した。今こうして女性副知事実現の空気は徐々にではあるが盛り上がりつつある。県会与党筋でも、このチャンスは見逃すなという雰囲気だし、執行部三役の中でも何らかの形でこたえていいのではないかといっている。ただ、土壌は未だ十分とはいえない。男女平等はいいえても実態がおくれている。女性の社会進出が今一つ熱してないだけにトップクラスの副知事となるとすぐ人材が揃えられるとはいい難い。県の委員会、審議会などアテ職のシキタリのある分野で名乗り出る者が乏しいのをみてもいえる。もう一歩前進があればいいと思う。

7 月 25 日（木）

国際会館の北側壁面の変更申出で揺れる

昨日今日は跡地の国際会館北側壁面の設計変更申出についての執行部側決意をせまられ、進退きわまった状況になり、右往左往させられた。自民党県議の反撃でどんでん返しのようなさわぎに発展するかも知れないと予測を立て、林県議、林副知事、家永室長らは強くコンペ結果の変更は許されないと主張している。第一生命グループは今になってデザイン権を主張するアメリカの設計者との話がうまくいかないということで、こちらに尻をもってきて、変更を申出ているのが裏話のようだ。私は北側壁面にそのような問題があるとは気付かず欠陥があるなら今からでも素直に陳謝して変更したらいいではないかというが、この三人は頑として変更は否といっている。今そういうことを持ち出すと、コンペで第一生命グループに決めたことまでひっくりかえされるおそれがあるというのである。落し穴にはめられたように思える。私は、この時点で素直に話合って変更すべきは変更すべしと明言した文章を残してでも、政治ではなく誠意で対応したいのだ。

7 月 26 日（金）

朝露はいらないのか

蝉の声をきくと、子供の頃の夏休みが思い出される。八月一日から末まで一ヵ月の休みだったが、毎日が遊びで長い休みと感じられていた。勿論七月に入ると休み同然、川や水に親しむ遊びが多く、平素と夏休みの区別が今でははっきりしない。八月七日が七夕祭で、短冊をつけた笹竹を翌朝川に捨て、その場で泳ぐと何だか時季はずれのように感じたのを思い出

すが、そのことを思うと七月下旬はやはり夏の盛りといえるだろう。親達はなぜか昼寝をして三時過ぎには午後の働きを始めることにしていたようだが、これは早朝、明けかけるとすぐ働きはじめるから、いい休憩になったに違いない。われわれ子供が登校する頃には家畜のための草刈りを終えている姿がみられるのが常識である。「朝露」という言葉がそれをいいあらわしている。露を含む草が牛たちにとってはおいしかったに違いない。今のわれわれは朝露など全く関係がない。そんな生活が私にとって何年つづいているだろうか。このままで人間の生涯が問題にならないといえるのであろうか。それを昔に返すべきかどうか、今でも迷う。

7 月 27 日（土）

伝統ということ

夕方戸畑の提灯山笠の儀式に出席した。暑い中こうした祭行事にはひどくエネルギーがいる。準備も大変だろう。当事者にしかわからないことだ。私は挨拶の中で伝統ということにふれた。昔からうけつぎ次世代にうけ渡していく。国指定無形民俗文化財といわれるこの祇園山笠も何十年という伝統（戸畑村時代からどう生まれ、うけつがれてここまで来たのか）厄払い的なものから今日の絢爛と賑いにまで発展してきた勢い、それは年々の伝承の中で、「育った」に違いない。その点を挨拶の中にふれ、今の時点での役割をメンバーの人達が自覚してくれてはじめて伝統のものにつながっていくのではないかという、そういう点に気付いた今日の山笠行事であった。それはもちろん博多山笠その他あらゆる事象に共通することであろう。老いた者、中年者、若者、それぞれが上を、下をうまく関係づけていかねばならないし、工夫も発掘も必要であろう。汗とか絢爛さとかごちそうとか目の前のことだけにとらわれては及ばないことだろう。

7 月 28 日（日）

「勉強するな」の時代があった

法学部の河野夫妻を呼んでソーメンを食べながら雑談の中で子供の話が出た。彼らもまた子供を一人前にしていくのにかなり苦労しているようだった。今の学校教育の中から生じたヒズミをあらわしているように思った。今の公教育全部が悪いというのではないが、そのヒズミを誰かが受けとらせられる。油山の吉村夫妻の場合もいえるのではないか。受験教育のヒズミといいかえてもいい。今の偏差値教育の全部がどうこういうのではないが、ヒズミを受ける子供にどう対応するかを含んだ教育でなければならないのに、その配慮が一般的に足りないのではないか。子供はもちろん先生も父母も一般社会もみんながそれぞれに被害者なのである。岡茂男氏の武蔵大での最終講義（録）をみていて感じたのだが、われわれの時代は親から「勉強するな」といわれた点は共通であると同時に今とは逆みたいである。教育の分野で今は一段と工夫が必要だと思う。

7 月 29 日（月）

自然への恭の心

台風九号の九州への接近で朝からたたきつけるような雨、空の便も乱れたようだ。予定の便で上京、ひるすぎ東京は永らく降雨なく路傍の雑草も弱り果てた姿になっていた。福岡は多すぎるほどの今年の雨だのに、対照的である。夜の九時半、県庁からの電話で稲築町に水害が発生（二十七日の雨）床下、床上浸水の住居が多く、災害救助法の適用につき申請したいとの連絡があった。東京はからから、雲仙普賢岳の噴火はどうなっただろう。中国大陸では大洪水で二億人の被災者が出たと昨日の新聞が報じていた。自然に対しては人間はかくも弱い。否強いと思い込んでいるのが基本的に誤りなのである。鈴虫やゾウリ虫、カベチョロを虫けらと呼んでいいが、人間はその何倍かの強さは確かにあろう。しかし自然の無限大の強さにたとうべくもないのである。恭という言葉をここでも念頭に浮べる私だが、自然に対しても恭でありたい。環境問題への対応の基はこの恭であり、自然愛護というような尊大さではとても及ばないのではないかと思う。

7 月 30 日（火）

女性を考える

　我老いてロウ人形のごと娘らはみな

これは俳句とはいえないが、東京でも福岡でも女性、とくに若い娘たちは美しく化粧して街をゆく。一様に風を切って歩いているように見える。女の時代といわれるが、若い娘たちが一せいに自負心高げに振舞う姿は何とも味なくやわらか味が感じられない。美しいが魅力を感じさせない。私自身が年をとりすぎているせいかも知れないと自分を尺度にすることをためらうが、実は、やんわり、にこやかに、温かい目つきで接しうる女性であってほしい。陳情のため各省庁をまわっても受付嬢は一様に蠟人形のように表情に乏しい。航空機内のスチュアーデスの方がまだしもと思う。しかしやっぱり一般に駈けゆく女性たちは若きも年配者も個性に乏しいように私には感じられる。物余り時代で衣裳も化粧もベストをつくし、頂上にあるかのようだ。中ほどでもいい、個性が欲しい。えらくなくても頼もしかったり、たよってくるような態度が欲しい。冷いのだ。

7 月 31 日（水）

陳情さばき大変

対政府陳情は今日二日終った。広い大きな建物をどんどん駈足でまわるので疲れる。東京事務所の係の者が予め連絡しており案内の先頭に立ち、説明書やみやげ物持ち役も加えた一隊が動くことになるので、受ける役所側も大変だろう。大臣、両次官、官房長、審議官、局長、それから課長に至るときもあり、留守なら名刺と書類を渡してあとは頼んでおくが、少々応対話をしてくれるケースもある。概ねていねいに応対してくれ、何か成果が上ったよ

うな錯覚をうけることもあるが、どなた様も予め件名の内容や問題点など理解していて形式的な対応で短時間ですませる場合が少くない。各県市町長から次々とやってこられたら受ける側も大変だろう。何とかこの辺のルールでも作って簡素化できないものかと感ずる。でも逆に、どこの誰が来たとか来なかったとかを問題にする仁もあるかと聞く。武家時代とくらべると簡素になったに違いないので政治とはこんなものかと諦めるのが先だろうか。

８月要記

話題は旧盆前後の休務、九月に向けての思索、甲子園の高校野球などやはり多彩である。それに続く日照り、蟬、鈴虫の鳴き声、夜半の暴走族など音にぎやかである。冷房と野球テレビで電力の消費量もピークに達する。草抜きや撒水など自分で手をくだすべき事もなくはないが、日照りのため、屋外での小仕事は最少限にがまんするしかない。小仕事で思うのだが、ホーム・サービス提供業（社）が何でもしてくれるような仕組みがすでにあるのでそれにたのんだらいいとは知りながら、気乗りしない自分を省ている。シルバーホームヘルプではないが役所にかかわる制度が既に出来ていて登録者も多いようだ。ともあれ何でもしてもらえる時代なので、例えば藤棚に登って危険を感ずるようなことはしない方がいいのである。ところで連続の休務をとるという点で、昨年の宮崎旅行に代え今年は済州島に行った。福岡から直行航空便もできたばかりで便利だった。済州島道知事にも会えたし、近代的なリゾート施設がととのっているので、有意義な小旅行を楽しむことができたわけ。

８月１日（木）

政治的集い

「知事と二一世紀の福岡県を語る集い」六時からグランドホテルの二階全室を貸してもらって六時から開かれた。保守系にもどんどん来てもらったという。一五〇〇人ほどの寄りであった。三期目のスタートを祝うという趣旨であるが、裏の実情は知事選で要した資金の補給であろう。県職員もかなり来てくれていた。銀行筋や土木関連も、そして社会党や労働組合の著名な幹部は引いた姿、松田留吉氏は七社会にももっと近づいてもらいたいといっていた。社会党・県評センターが裏で動いたのだが、「二一県民の会」は表に出ていた。小柳氏も、具島氏も、秋枝さん、鵜崎夫人など来てくれた。おもむきを変えてでも、年に一度小規模でもこんなのを催したらいいだろうとの声があった。ある意味ではあの手この手で資金集めをしたらということではないか。政治にはカネがいるので、不正でないなら堂々とやっていいともいう。そういう思い付きができる人が近くにいないと政治屋にはなれないことも確かだ。

８月２日（金）

県政の基本のこと

広報室の事業で県のテレビ買取番組 RKB「ふくおか見聞録」というのがあって、二時から知事室で収録。ディレクターというのか、さしずがうるさくて収録に時間がかかった。県の今年度施政方針の概要を対談の形で十五分足らずの放映になるのであるが、時間がかかるので汗びっしょりだった。強く（技術立県と国際化）やさしく（高令対策と環境問題）が主たる中味で、すでに私の頭に入っていることでもあったので、話しやすかった。その点楽ではあった。当初予算規模一兆二千六百億円、県民一人あたり二六万円ときくとちょっと責任の重さを感ずる。西日本のリーダー県たるの自覚を強めると同時に、もっと対外的に県を広報しなければならないという角度から対談に応じた。昨夜のグランドホテルでの私の挨拶も基本は同じであった。県政の前途は明るいというのでやりやすかった。技術立県が産業構造の転換という福岡県独特のことが理解されにくい点であるし、国際化がなぜ「強く」の部に入るのかがわかりにくいらしい。

8 月 3 日（土）

保育問題

自治労と保育連盟が福岡県担当でスターレーンにおいて研究集会を開いた。全国から会場一ぱいに保母さん達が集ったが、合理化対応が当面の主要課題であるという。出生率がこの頃一・五三まで低下してきたので、保育所の合理化が全国的におこっている。女性の社会進出でゼロ歳保育へのニーズがふえる反面、子を保育所に預ける人が少くなってきているので、差引保育児の数が減っているのである。保育所運営の立場からは保育所の閉鎖もあれば保母数の圧縮、待遇向上の低迷又は労働強化があっている。合理化問題はそういう動きにさらされた危機感からの提起である。ゼロ歳保育や深夜保育のニーズは私がもっと若かった時にも起こっていた。保母の重い荷物なのであるが、それが今でもつづいているようだ。壇上から集ってきた保母たちの顔をみると決して若くはない。時間をくり合わせて全国から馳せ参じたのであるが、深刻そうだ。政府、自治体、企業それぞれに育児休業など対応を考えているが、焼け石に水のようである。

8 月 4 日（日）

四月人事へのうっぷん

昨日大坪康雄氏から電話があったとみゆきが話す。泣き声もきこえたほどというから感傷的なんだろう。四月の県庁人事について不平をもらしていたらしい。家永室長が勝手な口を出して人事を左右したというのがもっぱらである。杉山ほか社会主義協会系が家永によって知事から遠ざけられている、家永は三木議長に通じ自民党に専らおもねっている、四月人事は家永ライン、林副知事がこれに加担し、権威づけているといわれている。そういえば四月人事は選挙もあってのことだが、彼らの専横ぶりが私にも感じられた。そのつながりが、近頃の国際会館の北側設計変更許すなの声にもあらわれているように感じられる。近い将

来それがかなり大きい問題として提起されるように私の肌に伝わってくる。林一家永ラインで反旗をふっているようなのだ。林県議がこれにどうつながっているか実感的にわからないが、風の音には何かあることがわかる。人間って案外政治的なのだ。大坪らが不平をいう気持がよくわかる。私が総スカンを喰っているみたいでもある。

8 月 5 日（月）

上流が威張って

筑後川フェスティバルで久留米へ。平松知事は来てなかったが、佐賀、熊本の両知事の出席はあった。昨年ほどには感じなかったが、やはり上流下流の意識が強く、私の挨拶原稿にも、今日の桑原市長の挨拶にもそれがにじみ出ていた。前もって私は昨年のような空気は嫌だよと県の事務側にはいっておいたのだが、昨年のが強烈に残っていたのであろう。つまり下流は上流のおかげで栄えている、又は上流を犠牲にして利水している、だから頭をさげよというのである。今日も五〇〇人ほど参加者があったが、上流意識をもって桑原市長の「御礼を申上げる」という言葉を気持よく耳に残した人も少なからずあったのではないか。上流は人口が減り下流はふえる。下流は上流に謝金を払えという主張でもある。今年のフェスティバルがどう展開されたか知らないが、共生・共存という意識がなかったらこの種の会は意味がない。平松氏は昨年腹一ぱい主張したので今年はもういいということで欠席したのだろうか。来年は佐賀県諸富町で行われるという。こんな意識でどこまでつづくのだろうか。

8 月 6 日（火）

首長との対話

町村長会役員の人達を相手に、環境、高齢の二つのテーマで、知事との対話をサンヒルズで行った。市町村長と話そうと考えて半年以上、やっと今回のような形で実現した。両副知事や関係部長も来て、ぎょうぎょうしいものになったが、まずはよかったのではないか。町長たちがかなりきびしく県の姿勢に注文したからである。法の規制をネガティブにのみ解釈して逃げまわっているというのである。町長らは住民から逃げられない。夜打ち朝がけさえありうる。私は挨拶で逃げるなといったのだが、それがよろこんでもらえた。昔なら直訴は打首である。環境問題はとくに総論賛成各論反対で責任感のない住民は直訴もする。今日の会はそういう立場にある町長たちを慰労することにもなったと思う。責任のない住民の直訴強訴にはお手上げだろう。環境にしろ高齢化にしろ住民の個人的社会的責任感を訴える仕事も欠かせない。首長との対話はさらに続けねばならない。

8 月 7 日（水）

蔵書などの始末

小倉からの帰り車の中でふと蔵書の始末のことなど考えた。プリントやノートの類もある。

新聞雑誌も、戦後四五年、私の手垢の累積でもある。しかし今の物余り時代、どう評価するかといっても何の尺度もない。欲しい人も、欲しがられる物もないのではないか。だのに毎日塵がつもるように積まれていく。それは私が捨てる気がないからであろう。何でも可能な限り積み貯えてしまう。明日のことも先先のことも考えなくてよいのに、どう仕末するか車の中でつい考えてしまった。今は何もできないし、誰かに相談する相手も指せない。二人の男の子があり、九大には法、経にまだ若い「弟子」がいる。しかし、いずれも関心がないのではないだろうか。無関心なら捨ててもらうしかない。写真も、とくに知事になってからの分が無分別にたくわえられている。車の中で、あと、どうなるのだろうかと考えたが何の結論も出ない。結論を出す時がやがてくるのか、結論がないままになってしまうのか、筋のない妄想にふけっていて、やがて福岡に着いてしまった。

8 月 8 日（木）

すごい湿気

立秋とか。数日涼しい。まだ暑さはぶりかえすに違いない。ともかく雨や湿度の高さや、異状ともいえる夏である。前の家屋の西北隅の部屋の雨もりカビなどひどく傷めつけられていると思ったら、本屋の洗面所も何が原因かひどくぬれ腐朽した状況が発見され、驚きは只ごとではなかった。何か身辺に異様な凶事が近づいたような感じがしてならない。洗面所がなぜそうなのか（洗面器の下の物置きの中の諸物品のぬれようがおかしい）、水道がもれているかというとそうでないようだ。和代が来ている間も、前の家屋の湿気に注意してもらったが、その前にみゆきは今年二度も畳にわき出た青カビのためふき掃除をしたのであった。今日の課長研修での知事講話では、環境にやさしく、という趣旨の話をしたのだが、その中で、地球の砂漠化にもふれ、人間が、その勝手で、自然破壊を行っているのだから注意をしようということを言ったのを思い出す。自分達が悪いのだから、とくに身のまわりは最大限注意しなければならないのだ。

8 月 9 日（金）

自分のなれた城がいい

椎田町での「ふるさと対話」をすませての帰途、折尾にある県医師会桜井会長の宅に寄り、奥さんの初盆まいりをおこなった。献花は県の方でよく対応してくれていた。広い立派な庭や庭木に感心した。帰りの車の中で、同和会の松尾正信氏の三階建ての「城」の話が出た。明日もいくつか初盆まいりに行くが、毎年何件か私宅訪問の機会を初盆まいりで得て感ずるのだが、それぞれに立派な住居を構えてある。それにくらべると、わが家は貧弱である。「こんな所に知事が住んでいるとは･･･」と驚きの声を出した訪問客があったのを思い出す。でも住めば都とか貧しくてもわが家という言葉があるように、能力に応じた住居を、与えられた機会で選んだ地に、適宜構えて年月は経っていくもので、愛着は変わらない。大きな居

を構えてもて余している人もあるだろうと思う。住んでいる家が一番いいし、とりわけ自分の部屋が一番いい。批判や羨望は無用だと思う。納得するしかない。

8 月 10 日（土）
ゆとりを求めて海外に旅行するのはよい
まえ秘書室にいた原口や斎藤の奔走で夏休を二日とって六月に直行便ができた済州島に一〇人でツアーを組むことになり、明日出発、十三日帰福というスケジュールができた。一人約十二万円の費用、そう高くはないと思う。生活も一般にゆとりができたのではないか。誰でも気が向いたら、チャンスを見つけて二泊三日ぐらいの旅行ができる時代になった。国レベルでも対外メンツがあってのことだろうが、公務員も率先するほどの意識をもって労働時間短縮、休暇利用につとめるよう勧奨する時代になったのである。働き蜂といわれて久しいが、今はさらに蟻のようと外国から指摘される日本人なのである。蜂や蟻が悪いわけでもないが、さげすまれているように思える。ここ数年海外旅行者数も年間一千万人をはるかに越えるに至り、貿易の黒字を減らすのに一役買っている。日本人は勤勉といわれるが文字通りそうだろう。その上、大事なのは軍備から戦争という精力の使い方は他の大国に比してぐっと少い、こうした要素は是非守りたい。たとえ非難があろうとも。

8 月 11 日（日）
済州島観光開発
済州島は、済州、西帰浦の二市を中心に二郡から成る道であり、五一万の人の人口を有し、漢拏山を頂点とする火山によって作られた地質で、植物の宝庫だといわれる。世界の十大有名観光地として名をはせ、政府もこの十数年観光開発に一そうの力を注いでいる。ノービザで行けるし、福岡から定期便五〇分で着く。長崎からジェットホイルで四時間半で行ける。一時二〇分着いてすぐ地元紙記者から感想をきかれた。ハワイ・沖縄のような所だと思うし、それよりも近いので楽しめると答えた。地元島民がどれほどいるのか知らないが、地価高騰や雇用増でうるおうことは確かだとしても利益は全部ソウルにもっていかれ、自然が壊されるのは嫌といっているらしい。地元感情として不可避的につきまとう問題であろうが、もし目にみえて自然が破壊されるならおのずから限度をもうける必要があろう。私たちは今回客として楽しませてもらうにすぎないが、この種の問題は容易に結論を出しにくい。泊まった新羅ホテル（中文地区）は新設の豪華なホテル、ゴルバチョフも来たという。

8 月 12 日（月）
済州島にゆく
セントラルエージェンシー　弓岡氏
奥田八二、幸　それに随行　川上

同行は　企画調整課企画主幹　　橋本　洸
　　企業立地課参事　　高木義人
　　国際交流課参事　　斉藤忠男
　　青少年対策課育成係長　葉玉博幸
　　都市管理課　　原口　明
　　秘書室　　重松典子
　　国際交通センター　　山口美矢
8 月 11 日（日）福岡 12:20――済州 13:20
　　14:00 済州市　蔘鶏湯の中食
　　あと南部海岸中文観光団地　西帰浦市　新羅ホテル CHEJU SHILLA
　　夕食同上ホテルにて
　12 日（月）朝食同上ホテル　洋式バイキング
　　午前　中文リゾート視察
　　中食　韓国観光公社主催中食会（キジ料理）
　　午後　済州道知事招宴（新羅ホテル）
　13 日（火）朝食　前の日に同じ
　　空港へ　　済州発 10:40――福岡 11:30

上記のようなスケジュールだが、機内食で十分なのに、蔘鶏湯という料理を普通の食堂で食べ、夕食もホテル水仙の間で宮廷料理式というフルコースをたべ、満腹で心配した。済州市近くの民俗自然史博物館が最初の見学対象となったのはイメージをえる上で、よい企画であった。ツアーの車はすべて CAC 済州ツアー（通訳は李徳姫さん）、東洋高速観光という会社のバスによった。右側通行を改めて確認。

8 月 13 日（火）
済州島中文観光団地
夫妻で宿泊に充てられたのが新羅ホテル五四〇号室。この部屋は一ヵ月余り前にソ連のゴルバチョフ大統領が宿泊に使ったといわれる。そして又今日は島内中文地区バス観光を早めに終え小休ののち、州知事の招宴で夕食会、その会食場も SARA というゴルバチョフ会談のおこなわれた部屋となっていた。全くの貴賓扱いにおそれ入った次第である。韓国では地方自治はこれからの課題で州知事もエリートながら未だ官選で、食事中の話の中で地方自治の行方、問題点を探るような対話があったほどである。当方では三県サミットで対韓南岸交流の懸案を抱えているものの、知らせるだけで具体的に問題提起するほどに熟していないのが残念であった。話題には済州島の観光も出た。率直にいって観光地に十分値するというのが私の感想であった。李承晩が別荘にしたというハネムーンホテルは絶壁を擁しす

ばらしいところだった。植物園もよくできているし、大侑狩猟場キジ料理も強い印象を残してくれた。福岡県というような単位でこれだけの観光資源をもつことはとても考えられない。

【済州観光植物園如美池の入場券貼付】

8 月 14 日（水）

暴走族

深夜の暴走族、これは同じ道路を往復しているみたい。それも一台の二輪バイクのように思える。異様な音を立てるのが目的、また、ひとの迷惑をかけるのが目的、早い走行はそれ自体目的でないようだ。製造工場が取締りの対象になってないのであろうか。改造して違法の状態にするというが、改造できないような製法はないものだろうか。家族は注意しない、そういう親子関係ができている。「認めてやってくれ」という親さへいる。子の反撥がこわいのだ。暴走以外の悪に走らないことを祈るとさえいう。しかし暴走が特定年齢段階に限られているとしても、それを許しておいて子がまともに育つとは思えない。車を自家にもたず、どこかに置くとか借りて深夜外出で迷惑行為をやっているのだ。自己満足もありうるだろうけれど、何も得るところはない。虚無だろう。警察の取締まりの穴をねらってやっていて警察も手をやいているという。

8 月 15 日（木）

遺族だけを考えてはならない

武道館で戦没者慰霊追悼式があり、遺族会長の遠藤政夫氏が又遺族補償要望の挨拶を述べた。遺族たる妻や母は毎年減っていく。しかし遺族補償をなぜ今問題にするのか理解に苦しむ。靖国参拝の閣僚、自民党議員も二〇〇人近かったと報ぜられているが、靖国とは何か今日の意義を明らかに説明できる人は多くなかろう。遺族や戦死者だけが問題ではない筈である。原爆、空襲、抑留、引揚、従軍看護婦、その他戦争の犠牲者はいろんなケースとして考えうる。今日の追悼式の挨拶の中では誰もが戦争の犠牲という観点から述べたのに、遠藤氏は立場上やむをえないとはいえ、遺族補償についてのべたのである。遺族も立場が違って兄弟まである。なぜにそれに補償なのか、すなおに理解できない。近くの谷公園の陸軍墓地も「支那事変」の戦死者までを祭る碑が立っている。こわせないだろうが、四六年前（五〇年前宣戦布告）当時の犠牲者を忘れてはいけないだろう。

8 月 16 日（金）

ハワイ攻撃公式謝罪

ハワイ攻撃から五〇年、記念式典でホノルル市長が日本代表から公式に謝罪させるべきだとブッシュ大統領に求めての発言があった。これに対し石原官房副長官は記者会見で、戦争

責任は全世界の問題で何十年何百年の歴史が判断する旨の発言をしたという。ハワイ市長にしろ石原氏にしろ全く問題に答えていない。もっと具体的に問答しなければ逃げにすぎなくなってしまう。ケンカ両成敗という言葉の通り、攻撃も受けて立つも、戦争に関してはどっちもよくない。これまでの世界史では侵犯のしっぱなしはなかったので、侵犯はいけないといってみても解決にならないようであるが、侵犯に対しては無抵抗という答しか私にはない。近代社会で印度や中国はずい分侵犯されたが、それらしき抵抗に熱を入れず、元にかえっている。民族と文化を大切にし、勝つか負けるか、どっちが先に攻めたか、なぜかなど理屈を並べても、どちらかに軍配をあげるだけで、それ自体意味はない。戦争放棄の信念に徹することこそが今のわれわれの誓いである。

8 月 17 日（土）

久しぶりの庭仕事

数日前から気になっていた庭仕事を今日夕刻決行した。撒水とアロエの植込みである。アロエが大きくなってくるので本の所から切り取り一週間ほど干したあと植込むのである。今日は六株（六鉢）新造した。済州に行く前から切り取って干していたものである。もう二十鉢以上株分けしていることになる。いろんな使い途があるといわれるアロエだが、もう多すぎるのではないか。撒水のことだが、この夏はじめてだ。雨の多い年だったのでその要はなかったがこの数日照りつづく。草花がしおれかかっている。今日は甲子園高校野球八強が順次決まっていく中、三十五度を越す猛暑と報じられていた。ここ当分降りそうにない。一日おきには撒水せねばなるまい。夏草抜くべきものが目ざわりになっている。今様にはホームサービスを申込むなら疲れることなく身辺もきれいになるのに、何故か自分でしないと気がすまない。西庭の松は当然専門の手でやってもらわねばならない。ひとにたのむ気持になるのが当然と思う。

8 月 18 日（日）

知事を孤立させる策が確かに進んでいる

午後、問研セミナーが黒田荘で開かれており三時から私が一時間話した。あと徳本正彦氏が話し合いたいとの事だったので別室で要談したし、夕食をソラリア下階でメンバー八人で同様の話題をめぐり歓談のうちにすませた。誰しもいうのは知事と意見を交換したくても秘書室が切断してしまうので、これまで近しかった人も奥田県政に冷淡になりつつあるとのことであった。二人の林氏、室長の家永がそうしているとの指摘である。九月議会では林副知事、池田出納長の任期切れで、人事異動が予定されるから、これを機に現状打開をはかるべきだということだ。私もこうした意見には全く同感で、何とかしたいと思っている旨答えた。実際私もこの春以来孤立化策を進め近縁を切る事務処理があまりにもひどい事を肌で感ずることしきりである。自民党に媚び、自公民路線の実現と奥田県政の安楽死を狙って

の策謀が大手をふってまかり通っているのであろう。秘書室にうかがっても直の返事はなく、パッと意見を求める情報が流れ、闇に謝絶されるとこぼす人が多し。

8 月 19 日（月）
雲仙観光の見直しを
雲仙のことで今日、長崎県経済部長など観光客激減に対する理解をしてほしいと宣伝隊をつれて来た。普賢岳東側の溶岩ドームは巨大なものとなり依然危機はつづいているが、「雲仙」という報道表現によって一帯の観光客が激減し、経済破滅になりかねないとの訴えである。観光客の六～七割は福岡県の人だからよろしく頼むということもつけ加えられている。そういえば唐津、呼子、中津、宇佐、日田、別府などでも、福岡県民がたくさん旅行していることを見かける。いわば福岡県の皆さん雲仙は大丈夫なんだからもっと来てくださいよとの訴えでもある。県職員のあるグループが、最近雲仙旅行をするときいた事があるが、その例にならってほしい。ところで近頃仁田峠からは溶岩状況をカメラにおさめうるとのことで、ここがちらほら有名になりつつあるようだ。「危ふきに近よらず」の原則にあわないことであるが、細心の注意のもとで、雲仙を見なおしてほしいものだ。何年か後には溶岩ドーム自体が大きな観光資源になるのではなかろうか。

8 月 20 日（火）
ゴルバチョフの失脚
昨日、一時からの研修講話のあと、ゴルバチョフ失脚の報を耳にしたのだが、夕刊、今日の朝夕刊をみても、私にはまだよくわからない。東西冷戦緩和に努力して来たゴ大統領を軟禁しているらしい勢力は改革派に反対する保守派らしく、西側諸国はいっせいに対ソ反撥を表明している。つまりゴ氏のあとをうけて指導しているヤナーエフ大統領代行、そしてエリツィンロシア共和国大統領にも西側諸国は反撥して、対ソ経済援助を差止める意思表示をしている。アメリカはゴ氏の復位を強く望むといっている。大勢はゴ氏に従うソ連国民だが、反ゴ勢力がどう動いているのか判らない。取材や報道の自由がないためか、こちらの新聞も行きあたりばったりの、そこにあるネタで紙面を埋めている感じだ。ともかく西側諸国は冷戦緩和に逆行するとつかんで、対ソ硬化の姿勢を見せている。朝日の夕刊は、軍と改革派にらみ合い、との一面横の見出しで報道しているので、これでみると、軍の一部が反ゴの[ママ]点になっているのは確かである。中国の洪水、印度、ユーゴ、あちこち、今世界は混沌としている。よく判らない。

8 月 21 日（水）
瀬戸内海の美を守ろう
小倉の国際会議場で瀬戸内海環境保全知事市長会議総会があった。第 21 回というのに、私

は初の出席である。和歌山も大分も入れて関係県ずらり、でも知事出席は兵庫と福岡だけ。北九州から洞海湾の浄化に関する報告があって私には興味深かった。紫川もだが、一時期魚が住まなくなった死の海が今は立派に蘇生しているという話である。生産側の全く関心のない産業公害が反省される時代になったという。今はむしろ先端技術産業から新規に、また生活雑排水の汚濁が問題になっているのが特徴といえる。合成洗剤の燐が赤潮の原因になっているとの話や、大阪湾の北端がどうも高い汚染度を保ちつづけているとの指摘もあっている。当面問題になっている産廃は話題に出なかった。共通の海水が対象だからである。年に一回として二〇年前からこの会はつづけられた。川も浜辺も汚すまいとの共通の願いを込めての会議で、今後とも開くことに意義があるようだ。世界的にも対応の水準が高く景観にすぐれた瀬戸内海である。今日配布された資料もよかった。兵庫県が世話役をしてくれた。

8 月 22 日（木）

ソ連クーデター失敗

ソ連クーデター失敗、ゴルバチョフ大統領復権と新聞は大見出しで報道した。アメリカをはじめ西側諸国はゴ氏の復権を歓迎する意思表示をおこない、経済援助中止を再考するとのこと。事件の首謀者八人は逃亡を謀ったが、非常事態国家委員会という事件主体は解散され、KGB（ママ）クリュチコフ国家保安委員会議長らは逮捕された。ゴ氏はエリツィンロシア大統領に感謝の意を表明、ヤナーエフ副大統領は首謀者の一人として逮捕されることになり、こうしてクーデターは三日天下で終りをつげた。ゴ氏がいうように、これはまずモスクワ市民の平静さが元の体制への復帰に大きな役割を果たし、ペレストロイカ、東西冷戦終結への努力が市民にかなりしみ込んでいたからであるといえる。また、一部報道がいうように、西側諸国がこぞってクーデターを非難したことが市民の冷静さを支えたといえるのかも知れない。でもまだ行方が決まった訳ではないし、ソ連の経済困難もその収拾は容易でないようである。混沌が当面つづくとすれば、わが身辺の景況にもいい影響があるとは思えないのである。

8 月 23 日（金）

健康診断で思う

健康診断の日としてあけてもらった。眼科と皮膚科を追加してもらえるよう希望した。眼底に問題があるのでできるだけ早く更に精密検査をする必要があると指摘された。皮膚科では足の裏に水虫がということで軟膏をもらった。エコーでは肝臓の一・五センチメートル大のポリープは以前とくらべ大きくはなってないとのこと。心電図では一ヵ所不整脈がみられるが心配するほどのことはないだろうとのこと。それで残るは糖尿と肝炎である。この二つは常々見てもらっているので、その面のチェックによる指導に頼るほかないと思う。血圧が依然高めである。あと自覚的には睡眠に難がある。昨日岩崎友四郎氏と東京事務所で会見

したとき、彼はひとり暮し老人として、もうおしまいだよと投げやりな発言をしていたのが気になる。同じく昨日安田利政氏からの便りで姫高同クラスの戸石氏が亡くなったと知らせて来ていた。あれこれ問題がおこる年齢なのである。安田は九月十五日の大津でのクラス会の案内をして来たのだが、四〇人中十五人が死亡していると書いていた。そういうことが問題になる頃である。岩崎のように何時でもいいという気になる人もあって不思議ではない。

8 月 24 日（土）

普賢岳この頃

雲仙問題について政府は復興基金構想を決めたようだ。県が起債によって創設し、利子分を国が交付税でみるというものだ。総額三〇〇億円程度で基金の運用で復興事業や商店街の振興をはかるなどがねらいだが、難民の生活費など現行制度で対応ができない事業についても特別に措置することができるという。金銭給付は四人世帯で六ヵ月以内月十二万円までというようになる。これで基金、救済特別措置など「動かない」政府も動こうとして決着にきたわけだ。あとは現地、島原市では二十三日に、二十六日から警戒区域への立入制限を一部認める方針を固めたという。家や田畑を守りたいとの願いから強行突破で警戒区域にはいりこむ住民があとをたたない。ビニールハウスに高級ランを育てているから水をやらねばという人は億単位の借金をかかえ、火砕流で命がどうのこうのいうのと借金対策の苦とは比較にならないというのである。こうした判断は自由と責任において自分がしていいだろう。

8 月 25 日（日）

ソ連の前途まだまだ

朝日の解説記事に「脱ゴルバチョフ」がある。ゴ氏路線のもとで、ドイツの統一ができたし、湾岸戦争も一応の結着をみた。そしてクーデターがおき、三日間で失敗に終った。しかしゴ体制に返るのは容易でないようだ。「ゴ氏が率いる連邦政府の威信、権限の大幅後退と共和国の発言力の増大は保守派が再現を夢みた〝強大な一枚岩の連邦国家〟の解体プロセスを速めていることを劇的に示している」、「共産党の中で政治的に育ってきたゴ氏と長く続いた一党支配への恨みの深い一般国民とのずれも目につく」との指摘はうなずける。ソ連の領土は広すぎるし、多民族で成り、それぞれが不満をもっていよう。エストニア、ラトビアの独立をエリツィン大統領が承認したという。ウクライナも独立を宣言した。グルジア、アルメニア、アゼルバイジャン、トルクメン、それにバルト三国の中のリトアニアその他大戦後にソ連が領土拡張した地方にも問題は残るだろう。共産党の流れがどう変わるかだ。

8 月 26 日（月）

七四年に及ぶソ連共産党の支配体制崩壊す

ソ連のゴ大統領は二四日の夜（日本は二五日）共産党中央委員会の解散勧告の声明を出し、みずから党書記長辞任を発表した。一九一七年のロシア革命から七四年の歴史に一つの幕がおりた訳である。複数政党、市場経済を想定した民主国家に向けて動きはじめるだろうが、具体的に明日の姿を論じうる者は誰もいないようだ。七〇年代後半から社会主義経済の危機が強まり、今日の事態になったのである。八五年以来のゴ氏のペレストロイカも直ちに効果をあげえなかった。ゴ氏への批判も強まり、彼の政治生命は既に終ったといわれている。日本を含め西側諸国はこの変化を歓迎しながらも不安は消えないようだ。ソ連共産党中央委は近々総会を開いて解散するだろうが、地方の共産党も機能停止、消滅することになる。全国にわたって共産党の支配力が崩れることになろうから、当面政治上の混迷はつづくであろうし、対外関係の影響から、西側諸国も単に変革歓迎だけでは済まされなくなる。

8 月 27 日（火）

コツコツやったらいい

土曜日に是松氏が来て、私が書いた「佛心」というのを掛軸に仕上げて見せてくれた。私なりによくできたと思った。彼の作品として保存してくれるよう頼んだ。今回は短冊、扁額用に注文されていた作品をもって帰ってもらった。屏風のような作品に用る短冊である。六枚というから「万燈」から拾い出して書いたものだ。近頃同じようなのを暇あるごとに書きためている。これからも一つの好みのように書きつづけることになろう。紙冊に好きな句を書いてみて時間つぶしになり、自分の手の加わったものが残る可能性がある。テレビを見て物知りになっても何が残ろうかという気持があるので、そんな時間があったら筆をもつ。蒐集好きな人もある。永田照彦前室長は「面」を好んで集めて部屋一ぱいにしている。コレクションはいい趣味だと思う。一つの物を価値あるものとして蒐集するその努力の結晶だからそれもよい。何万何百万何億円という絵を集める人その他民具など、世にはコツコツやる人は少くない。

8 月 28 日（水）

県の文化懇話会

生活文化課の方から文化懇話会をつくろうとの構想がもち出され課長黒石氏から県の文化について現況把握視点などについて問題提起があった。県下の状況は全国的視野からみても上等とはいえないとの総括である。私は、その原因に、戦中戦後の素材型に傾斜した産業構造、その衰落が大きく影響しているのではないかと主張した。生活のゆとりなくして文化は創造できないが、石炭と鉄の斜陽をバックに生活も地方財政も対応に忙殺されてきた。青少年非行、交通事故、麻薬、暴力団などは高水準に推移しているので、これで文化が育ちに

くいというしかない。又労働県といわれる側面をみても争議、労使不信が根強く、この状況では文化的創造のゆとりは出てこない。現在でも教育（公）の分野で反撥や処分の問題が渦巻いている。又私は一万人の県職員は程度も高いのだから、もっと積極的に文化活動などで県民市民の中で牽引車的役割を果たしてほしいものだと主張した。

8 月 29 日（木）

福岡県は政治面では光りにくいという

三時から高宮別館で直木賞受賞作家白石一郎氏と、グラフふくおかに掲載のための対談をした。NHK の大河ドラマ作品が福岡県を土台に可能かどうか（数年前から念頭にあった問題）も、この際彼の考えをききたいとの下心で対談の中でもちかけたが、福岡にはそのようなタネが見当らないと彼はいう。大陸とのクロスロードだし、商業流通では大いに光る福岡だが、政治という観点からは光らないという。文芸面でも今日全国三位といえるほどの福岡だのに、政治の側面ではやっぱり大宰府、探題どまりになってしまうし、人材に欠ける。黒田藩政もかえって福岡をダメにしたとの主張だった。関ヶ原の戦いまで博多は光っていたのに、鎖国後は長崎に門戸の役割もとって代わられ、福岡は通過地点にすぎなくなったというのである。西日本新聞社の青木社長に白石氏に対する大河ドラマ用の作品の可能性を打診してもらって NO との返事があって既に一年もたとうが、今日改めて白石氏の立論を知りえた次第である。県民が政治の面よりも芸能や商業の面での活躍に向いているということのようだ。その位置から。

8 月 30 日（金）

健康ばかり気遣う

二日前土井仙吉氏から姫高五〇年記念に来年は戸谷市長らを招くということで私に海の中道に宿をとりたい件の申入れがあった。敬老の日には大津で文甲二の集りをする計画ができている。その計画者安田利政氏の連絡では戸石氏が逝去したとあった。一ヵ月余り前の話だろうか。いつ死んでもおかしくない者ばかりの逢いたがる話ではある。今日の済生会病院での検診結果はまずは小康といえるが、依然、糖尿と肝炎が問題のわが身。ニシキおしめの多川博氏が来室し、知事はひと前で糖尿だなどといったが、そんなこと言うなと注意された。「敵もいるんですよ」というのだ。彼も糖に日々対応し、立派な状態を守りつづけているという。何といっても運動と節食と彼は強調する。私自身自覚的には口腔の乾きがひどく、ツバが粘っこく、満足できる睡眠がとれない。運動には限度があってほとんどしてないといえる。眼底に（もうまく）再検査の症状が出ている。いつダメになるだろうかとばかり思う毎日である。

8 月 31 日（土）

独りで楽しむ

別冊の日記に動より静を選ぶと書いた。この暑い日に、海山が賑わうだろう。夜は花火、プロ野球に興ずる、街の冷房のきいたところをうろつきコーヒーを楽しむ、テレビを見る、動に類するものはいくらでもある。休日の使い方には事欠かない。ゴルフ場も好まれる標的だろう。しかし私は部屋にこもってしまっていた。それも書を読んで他から何かを知ろう楽しもう、学ぼうというのではない。知識欲もないようだ。万燈誌があるので夏の景を詠んでいる句を選んで短冊形小片紙に書き積んだ。前年の十月、十一月号には夏の句がぎっしりある。その中から軽く快いもの、涼味あるもの、回顧的であるものなど、気分の乗り易いものを選んで書き積んでいった。すべて自己満足である。ひとにたよったり、煩らわせることもない。既存の材料で自分ひとり静かに享楽して時間を過ごすことになる。ひとりで楽しむ、おそらく明日もそうするだろう。暑ければそれが涼をとることにつながるのである。

9 月要記

さっと過ぎ去った九月だった。しかし内容は甚だ充実している。姫高卒業五〇年を前にした文甲二のクラス会、これは待っていたが、アッという間に過ぎてしまった。誰しも年をとると、クラス会など待つ気持になる。不思議なことに逆に絶対音信をしない人もある。常人とはいえないだろう。この月の大きな話題は台風被害のこと、ハワイとの県州姉妹締結十周年記念のハワイ旅行の二つだろう。台風被害は何十万人に及ぶだろうか、何百億円になるだろうか。島原火砕流もまだ心配消えないままだが、あわせて大損害である。「大風で桶屋が喜ぶ」の論理が通用する部分があるとも聞く。ハワイのことだが、国際化の一端として友好交流のむずかしさをつくづく思った。「お国柄」は争えない大前提なのだが、どうしてもピンとこない。遊び半分で「姉妹」関係を考えている人が少くないのが残念である。又、向うの県人会の人達の淋しい気持も察せられる。若い者にはますます関心が薄らいでいるからである。言葉も母国もちがってきているからである。十年、二十年、否百年もたつと人も変わってくる。同じことをいつまでも考えていてはいけないのだろう。

9 月 1 日（日）

防災の日の雲仙

外気がようやく秋らしくなってきたが、気温は、晴天つづきで、とても高い。二百十日で、関東大震災を記念して防災の日となっているが、雲仙は昨日からの火砕流の大きさが増しつつあって今日の新聞では北東部の集落で新に急ぎ避難取りかたづけを行う写真がでていた。あと五〇メートルとかいわれ、危険がそこまで迫っているようだ。どうしても帰宅してどうなっているかを知りたいという避難者が多く、生命の危険については行政当局でなく自己責任と思うから区域内に入らしてほしいという声が強いようだ。調査では自己責任と

思うというのが六五%をこえていたようだ。執着、執念、意地のようなもののようだ。これをどうこう批判するつもりはないが、要はなるようにしかならないだろうと思う。救援金も立法も用意されているが、こうした執念ともいうべきものをどうにもできない。

9 月 2 日（月）

高校五〇年クラス会

来る十五日（敬老の日）に、滋賀県で姫高入学五〇周年文甲 2 のクラス会を企画していることにつき、京都の安田利政氏に電話したら、是非出席をと強調された。その日は市内敬老行事で、向うに行くのにおそくなるので、欠席もありうると思ったので電話してみた次第。当時のクラス四〇人、今生存しているのが二五人、うち出席すると安田がつかんでいるのは一九人だとのこと。生存者六二%ほど、逆に死去は三八%である。安田への電話のついでに、刀出に寄ろうと思って姫路の弟妹にも連絡した。滋賀からの帰途立寄って顔見せした方がいいだろうと思ったからである。何回も行くが、これが最後ということになるかもと、和代にいったら、そんな馬鹿なことをいうんじゃないと笑っていた。安田氏は先日逝去した戸石には死の二日前見舞に行ったとのことであった。元気な若い人には思いも寄らぬことかも知れないが、自分には死のことが時に去来する近頃である。重要なことでもないのに、念頭に去来する。生きつづけてもそれほど意義があるわけではない。一生とはこんなものかなと思っている。

9 月 3 日（火）

簡素に運びたい

行事がたくさんあって消化が大変だった。自分自身どう思われているかわからないが、「挨拶」が長いのは嫌われる。原稿なしでのスピーチはかっこういいが、よほど注意しないとダラダラ長くなる。私はなるべく原稿をみながらやるか、その通りに読む。予めチェックして長いのは削るように努力する。ていねいすぎたり、冗長だったりすることが多い。それに今日のアジア文化賞祝賀会の場合は開始時刻が四〇分もずれ込んだ。日本は外国とくらべ時刻を守る方だと思う。列車やバスが予定時刻通りに動くのは、日本のレベルが一番高いのではないだろうか。今日の開会のおくれも外国流の感覚が作用していると思う。過密スケジュールが組んであると、次の会に迷惑がかかることになってしまう。時刻を守らない、長話、過密スケジュール、この三つがそれぞれに問題であると痛感させられた。福岡市がアジア博の益金で、アジアマンスの諸事業を華やかに展開しているこの頃である。市もかなり注目されるようになってきた感じだ。

9 月 4 日（水）

日常的レベルの国際化

昨日の韓国議員李漢東氏との夕食会のときに出た話題を今日の開発銀行総裁の来訪時にも私がもち出した。即ち、漢東さんは、韓国はすばらしく発展しているが、まだ表向きで、国民一般のレベルに浸透していくためには、日本からの技術移転を今後強く望むという。超一流の技術、特殊技術でなく、二級レベルの、一般的に必要な技術を輸入したいというのである。開銀もこの点考慮してほしいと私はいった。但し、何を、どういう部門で欲しいのか、日本人はよく知らないのではないか。このことは中国その他アジア諸国についてもいえるだろう。国際化という言葉はよく使われるが、誰しもそうした目のつけ方はしていないのではないだろうか。この頃は「地方の国際化」「内なる国際化」という言葉が使われるが、まだまだ足りないのが右のような問題点である。一般的な、平凡な、日常的な水準ではまだまだ国際化の充足はない。「行ってみて、生活してみて、話してみて」ということが必要であろう。昔のような朝廷の国際化、これまでの大資本の国際化をはるかにこえて、庶民の、日常的な生活での国際化を考えていい時になってきたように思う。

9 月 5 日（木）

「やさしい福岡県」をめざす高齢・産廃の解決目途

春の知事選のとき、私は、高齢化対策の先進県になりたいといってまわったのに、高齢者在宅福祉の三本柱であるデイサービス、ショートステイ、ホームヘルパのどれもが全国四〇位という低レベルのわが県。そして特別養護老人ホームなどの施設人口割合は三位、医療面も七～八位の高水準。ただ私は数字も見方によって理解がかわってくるということから、改善への努力は当然としつつも、数字自体で慌てないように心得ている。説明の仕方、考え方をよく考える必要があろう。ところで新宮町で県が目ざしている産業廃棄物広域最終処分場（三セクター方式）の見込みがついたことについて、あと数日たってからと思っていたのに、今日の新聞ではもう報道されていた。高齢対策と車の両輪をなす環境対策、そのイの一番、産廃処理場公共関与が職員や現地の努力により決まろうとしていることは嬉しい限りである。今全県で紛争中の産廃処理場が十箇所ある。これらがいい方向に解決できるようインパクトが与えられればと祈っている。

9 月 6 日（金）

昭和会での産廃関心

昭和会という町村長の集いが英彦山で行われ、私が出席したのははじめてであった。八年前から昭和生れの首長たちが会を作り親睦に役立てているのだという。今日は私と地方課長が呼ばれて、二〇分ずつ話し、二〇分の質問という運びで四時から五時すぎまで（アドベンチャーセンター、森の家で）私は高齢化と環境について話したが、質問は廃棄物処理に集中した。産廃で業者処理の線でトラブルをおこしている町が県下で十箇所もあるだけに町長の関心も強いわけだ。県が広域公共関与の方針でまずは福岡地区から打開の途を得られそ

うだという（昨日のこのページ）ことがわかったので尚更なのであろう。県がまず突破口を開くなら、そして他の三ブロックにも同じく最終処分場建設を進めるなら、現時点でのトラブルもだんだん収束するであろうとの見透しがつくから、朗報であり関心があるのは当然といえよう。廃棄物（一般も）には合併処理浄化槽や下水道の問題も連動してくる。町長たちは頭を痛めているのだから前途が見えはじめてほんとうによかったと思う。最終処分場や公共下水道等環境問題に県費がどんどん必要な時代になってきた。

９月７日（土）

多数野党の顔色をうかがわざるをえない人事

九月議会で副知事、出納長人事任期到来。私は入替論だが、中に立つ富永副知事が林県議と折衝していて相手が現体制でいこうという。以前から私も林、富永と接触してきたが、林氏がなかなか応じない。運動体の中には奥田無為との評が立っている。今更新の機を逸すると更にその評が高まるだろうし、運動体をはじめ私の従来の私的関係に常に冷淡な態度をとって来た秘書室も家永の采配下にあって近頃とみにその傾向が強まっている。林県議にしろ家永にしろ議会野党とくに自民の顔色ばかり気にして、それで県政の回転上の采配をふる傾向が強い。何か言われたらどう対応するか、しやすいように平素から隙を見せず顔色に注意を払っていくことに強い関心を寄せている。野党自民の機嫌をそこねると、取引条件を出されると逃げようがないではないかとの意見である。今回の三役人事についても取引条件が出されたら困るというので、現体制が主張されているのである。

９月８日（日）

普賢岳変災対策

雲仙普賢岳の噴火活動は北東部の民家に及びそうだ。六月三日の大噴出以来あとしばらくで百日になる。義捐活動をつづけているに違いないが、忘れてしまうのも一般にあろう。現地の住民の中に本気で移住を検討しはじめた人がいるといわれるが、いいことだ。いくら早くてもいい。一応の見切りをつけて生き方を他に求めるのが賢明だろう。でも公的セクション、役所、学校その他の関係者は単に住民というわけにはいかないので、これらの人達にどう対応するかが本気で考えられねばならない。消防や警察はもちろんである。政府の対応が鈍いということはすでに指摘されて久しいが、まだ具体的にこれといった施策は講じられていない。政治というのはこの種のことでは鈍くて当り前、やむなしという情勢にならない限り動かないと思う。そういうわれわれもだ。ただ、避難する意思のある人に望みを最少（ママ）限かなえてやることから始めねばなるまい。

９月９日（月）

外へ出る、内にこもる休日の話

救急の日とか重陽とか、陰暦の九月九日、九は陽、九月九日は九が重なる、陽が重なる。菊の節句、少し早めで、残暑である。ところが、台風が右に行って東京に上陸するかと思って啓二に電話したら平穏だったとのこと。それとの関係であろう、今日は福岡は快晴であるのにすごく涼しい。助かる。秘書室の女性と庁内で中食を共にし、私の昔を話題にしたが彼女たちのびっくりすることばかり。毛糸編みのことを知っていることだけでもびっくりしていた。近頃の女性は食事の準備さえ縁遠くなっているのだから、彼女たちはスモウやプロ野球の話にくわしい。日曜日は家にいてもたいくつなので街に出る。家にいるとテレビを見るか眠るだけという。外からの刺激を常に求めてないと落付かないらしい。私は逆に外からの刺激は嫌だからテレビは無関心。書斎で筆をもって自分を外に出すことばかり、それで満足。休みでもカネがかからない。彼女たちはカネがかかる、欲しいといっていた。

9 月 10 日（火）

アパルトヘイトを思う

午後六時から市博物館で行われたアパルトヘイトに抗議する写真展のオープン式に出席した。ソ連を頂点とする東側諸国の巨大な動揺に注目していたにすぎぬ私に、西欧（イギリスも）が今尚頑固に守りつづけている黒人差別虐待のおそろしい現実が突きつけられ、嘆息の宵となった。ふたこと目に民主・自由という西欧白人が、こと黒人に対しては隔離、差別、残酷、暴虐の限りをつくしている南アの実態。この写真展で改めて鮮明に指摘された。創価学会の池田名誉会長が発意提案してこの写真展が実現したらしい。アパルトヘイトが残る限り暴虐、残酷は残り、戦争が肯定され平和はこないであろう。イギリス、フランスのトップの「日本たたき」はアパルトヘイトをうしろ盾にしているといってもいい。二十世紀人類が尚克服できない恥部といえよう。南ア ANC（民族会議）の資料もいただいて帰った。国連は表面うまいことをいうが、この差別を克服できないで、きれいごとを主張していることになる。現実、現地の視点でどうしたらいいか私にも解答はないが、日本の投資にも責任なしとしないだろう。もっと勉強したい問題だ。

【欄外記入】

（ANC の憲法草案が一応の答を出している）

9 月 11 日（水）

第二次世界大戦の「償い」

昨日のアパルトヘイトの件がまだ脳裏に残っている。第二次大戦のあと始末どころではない経過をもつ問題である。植民地主義といえるかも知れない。が、やはり大戦後の今日の問題でもある。これからもっと関心を高めなければならないと反省しているが、自分にふりかからないから更に要注意だろう。アメリカがソ連の弱みにつけ込んでか、今頃になってソ連に北方領土を日本に返すよう対ソ発言をしているようだ。アメリカは近頃内政干渉に近い

ことをあちこちの場でみせつける。アパルトヘイトに近い問題が未だ国内にあるだろう。日本もこのままでは亡国につっ走ってしまうという声がある。アメリカのことをいう前にわが身の周辺も考えてみなければならない。第二次大戦の「償い」問題が噴出している。北方領土をいう政府はこの「償い」にどう対応するのか、基本姿勢を知りたい。わすれな草、なざれ園のことも今日話題になった。出すぎると打たれる。南アでは日本も罪を作りつつありはしないか。

9 月 12 日（木）

人事に対する不満が四月以降つづいている

明日は代表者会議、今明二日は各派県政懇。それぞれ派の思わくをかかげて臨むのだが、九月議会は人事を焦点とするので、その議論は水面下にもぐる。野の方でも駒をもっているから予め執行部与党の顔を見ながら取引材料に使うべく構えている。こんどは三役だから、相手の駒をみないと、そうかんたんに議論にのるわけにはいかない、取引き対象にしていいといえるものではない。野党側は教育委員を握りさせすればそんなにやかましく押してこないかもしれないとも推測できるから、との雰囲気もあるようだ。私は副知事出納長は変えることに意義あると考えていたのに、県議団長は変えないで隙を見せないことに意義があるという全く逆の発想である。私は選挙にバックなった人達の意見を重んじ林県議らは野党取引きの安易さを第一義的に考えている。このような雰囲気が私のまわりからウツウツと湧く不満の道筋だろうと思っている。

9 月 13 日（金）

ILO を知らない者ばかりの秘書室か

夜川上是松の二人を加えてマージャンを楽しんでいたら赤嶺氏から電話。その内容は秘書室を通して知事に会うつもりで訪ねたのに、門前払いをされた、けしからんと思う、ILO も知らんのだからということだった。そういう時代になったといえばそれまでだが、二つ問題がある。秘書室は訪ねてくる人をチェックするのはいいとしても、私の個人的知り合いの人が気易くくるので考えなしにアウトにする傾向がなおらない。確かめ方が機械的に過ぎる。又赤嶺氏が指摘した通り ILO といっても何のことかわからない職員がいるし、それが通用するのである。赤嶺氏は私に ILO 県支部の顧問にとお願いに行ったのだが、ILO って何ですかという者ばかり。どうも労働という問題にかかわりがあるとポイすることにしているとも考えられる。いずれにしても近頃の秘書室はこうした面で非難をされている。連休がすんだら改めて注意をしておかなければならない。

9 月 14 日（土）

台風 17 号福岡で荒れ

台風 17 号が昨夜福岡を襲った。強風と雨、沖縄から福岡、松江、山形というコースを走るらしい。雨は欲しいが、騒々しい雨では一寸困る。雲仙普賢岳地獄跡の火口はまだ活発に動いている。自然の力の巨大さというか、人間がその中で特別の力を発揮できないという当り前のことがいやというほど知らされるこの頃である。干魃で困っていた沖縄では自衛隊機を使って降雨実験をしていたのに、今回の台風で三人の死者、行方不明者を出した。船のてんぷくで死んだ漁民もあるし、島原の仮設住宅も危険と騒がれている。県庁跡地を利用したアジアマンス（福岡市行事）が中止になるという異変もあった。だが総じて大事に至らずして台風は去ったようだ。こうした中で、島原では警戒区域指定の解除が問題になっている。がまんの限界に来たのではないか。家、家畜、畑を見捨て隔離されたままの閉鎖生活はたまらない筈である。新天地開発再出発の方法を見出すこと、そのためのあらゆる援助が必要であろう。

9 月 15 日（日）

高齢化を思う

敬老の日の公的行事、一〇〇歳の人に代表で自宅における総理の祝辞をうけとっていただく。西区の人。あと姫高のクラス会。安田利政氏の世話で大津石山のオークホテルで、四〇人クラスのところ生存者二五人、うち十八人が出席した。新聞によると日本の 65 歳以上の者一五五三万人（総人口一億二千四百万人）、この高齢者比率は 12.5%、あと一五年するとスウェーデンを抜いて世界一になろうと推測されている。ただ、長生きだけでは人の幸福は判定できないと思う。高齢者だけの核家族、ひとり暮し、痴呆性が依然問題だし、引退後の労働など社会参加の体制が十分でない。今日は姫高時代のクラス会で同僚の生活事情をきく機会がなかったので残念だったが、満足できない人もかなりあるようだ。二人の弟妹に刀出で会って話したが、余生を満足しているとはいえない夫妻であった。病気でない限り、ピチピチ張り切れるような毎日の社会参加がなければならないだろう。病気への対応にも医業界のあり方に問題は結構多い。充実した高齢社会への努力をつくづく感ずる。

9 月 16 日（月）

島原又又大変

昨夕雲仙普賢岳でこれまでで最大規模の火砕流の頻発があった。地獄跡火口と眉山との間、北東斜面では山林火災が発生、東の方の水無川沿いでは小学校や民家が炎上したといわれる。火山性地震二三〇回、微動は一三二回うち火砕流とみられるもの三三回、水無川沿いの警戒区域の一部が避難勧告地域に規制緩和があり住民の立ち入りが始まったばかり。逆に立入りしないよう勧告が出されたということのようだ。自然の猛威と人間の社会的執念の合打ちといえば、ひとごとのように聞えようが、そうしか考えようがない。政府の対応は依然目にみえてこない。対応しないのが政治的に正解というわけではあるまい。刀出での雑談

の中でも湾岸戦争で一一〇億ドル「貢献」することを易々決定しているし、円安分の上乗せにもかんたんに応じているのに、島原には何もしないと弟がいう。常識人の感覚に応ずるのが政治の要諦だろうと思うのだが‥‥石原慎太郎も金融疑惑でとうとう累繋していたのには驚いたとも彼は言っていた。

9 月 17 日（火）

台風の後遺症大きい

14 日の台風の県下における被害がかなり大きかったことが判明してきた。朝の五時半頃長崎市に上陸、八時から九時頃に筑後、福岡を通過していった。死者二人、住戸全壊 16、浸水一千戸ほど、県下五六市町村が被害をうけている。水害は前原、二丈の両町で大きかった。前原町には災害救助法の適用があった。田畑の冠水三七〇ヘクタール、橋梁流壊 18 に達した。今後復旧工事にかなり予算がかかりそうだ。島原も悲惨、要はくじけないで再建に勇気を出すことだ。死者二人は男女一人ずつであるが、風でとんできた木片、スレートが内臓に当ったという共通事情があるが、これこそ不慮、不運というしかない。当り所とタイミングの問題である。どこにどんな運命が待ち構えているか、はかり知れない。今日の観光キャンペーン行事の中で、私にますます元気ですねと挨拶を交わしてくる人がいたが、肯定しながらも、いつ、どういう事故がおきても仕方がないと観念、諦観する心境ですよと、挨拶をかえす私ではある。

9 月 18 日（水）

南北朝鮮国連加盟

夕刊に第四六回国連総会が十七日南北朝鮮の同時加盟を承認したことを報じてあった。バルト三国もこのときソ連から分離独立し加盟し、ミクロネシア連邦、マーシャル諸島共和国も加盟、七カ国が新規加盟で計一六六ヵ国で国連が形成されたことになり、平和、独立、統一がずっと進み半世紀ぶりに世界は新しい条件下に入ったことになる。気になるのが台湾、南アメリカ、南アジア、アフリカに未だすっきりしないものが残っていることと、先進国が弱小国を従来の植民地支配分裂支配から別の形での支配を意図して状況をかえていく可能性が残っているということである。ソ連が中国やイランと接している広大な部分がどうなっているのか私は無理解である。あと百年間もたつうちにまだまだ変わるだろう。社会主義国の動揺にもひとかたならぬものがあり、国際交流の中で弱肉強食が進むことも避けられないだろう。国連がリーダーシップをもちつづける訳にもいかないと思う。安心はできない新規出発というしかない。

9 月 19 日（木）

ハワイ訪問を前にして

だんだん近まったハワイ行き。今日旅行社の人も来室し、日程の詳細も明らかになった。県側はいわば大げさな対応であるが先方はそれほどでもない。姉妹関係というのはどこでも似たようなものではないかと思う。日本人の儀式好きがあらわれているのかも知れない。ハワイの場合は向うに県人会があるので、儀式的意味がその分大きくなる。われわれの今回の日程にもその分が加わるので重くなる。百年余の歴史があるので日系人はそれを意識するに違いない。但し、二世はともかく三世ともなると、まるで関係がないかのような意識しかもたないであろうから、その点こちら側も知っておく必要がある。姉妹関係も十年経過したとなると又別の角度からの観察が必要なのではないだろうか。これまでそのようなことを考えてもみなかったが、今日はそれに気づいた。静かに、慎重に、そして先々のことまで考えて相互関係を新しい角度で考え直すにはどこにポイントをおけばよいのか、それが私に課せられた問題だろう。

9 月 20 日（金）

ハワイゆき細目きまる

日ざしがやわらかくなって来た。ハワイゆきの資料、準備について次々に原課からの説明があり迫った感じだが、むしろ当方の準備不足が感じられる。色紙も書いておく必要があるし、ハワイ交流の知識、移民史なども大まかにしらべておかねばならないというあせりさえ感ずる。できるだけやるしかないが、向うでの日程がつまり過ぎの感なきにしもあらずである。まずは大きな行事だし、あとに定例議会が控えている。すぐ議会にとりかかれるようにするためには決済その他済ませておかねばならぬのが次々に出てくる。そのような一日であった。県議会からも数人参加するが、以前の経験では行事に参加するわけではなく好きな行動をして後で執行部批判発言をするという傾向があったが今回のメンバーをみると、そういうくせの人は少いようだ。ゴルフその他好きな日程をもち保養になるのが県議だが、こちらはぎっしり詰った日程でかえって疲れる。

9 月 21 日（土）

交通事故（社会悪）

旧県庁跡地で交通安全フェアー開幕式があった。「マナーアップふくおか」が合言葉だが、県は全国的に交通事故率が高い。マナーが悪いためというしかない。東京によく行くのだが、混雑ぶりは東京が高いのに、事故は福岡が多い。新聞にのっても、事故関係者の事後処理をめぐる悲惨さは報道されないので、リスクを抜けるスリルを求めている人が多いようだ。急いではいけないし、少しぐらい早く目的地についてもそれほどの価値はないのに、一寸でも早くと思う気持が事故を生む大きな要因だろうと思う。交通戦争といわれるように、大変な損害にもなるし後遺症は人生を左右する。若者が原因者としてふえている。福岡では昨年一年間に死者四〇〇人をこえた。全国では一万人以上、毎年そのツケが積っていくのである。

負債の累積を思うと行政も何とかせねばということになる。交通事故をなくすための行政上の煩雑さも小さからぬ負担なのである。三悪の一つ。

9 月 22 日（日）
ハワイ向けの色紙
ハワイゆきが明日に迫った。姉妹関係締結十周年行事のため諸関係行事が詰った日程である。文化関係だけでも二五〇人募集して三五〇人にふくれ上ったといわれる。交流はいいが派手になってきたと思う。県と州ではあるが、彼我の考えや制度は同じではない。対等交流というわけにはいかない。たいていこちらからの過剰交流になっているようだ。ハワイの歴史を知らない者が大部分であろう。私も勉強不足。現地の人の心をつかむのは容易ではない。今日午後は持参のための色紙を書いた。一世、二世、三世、いろいろ念頭においてみる。年長者といっても二世というか、だんだんわれわれには縁が薄くなっている人達が多かろう。平素書いている色紙文句の中で選んでの五〇枚だが、言葉は中国古典ばかり、あげても読んでもらえるかどうか想像がつかない。でも思い切るしかない。案外色紙がよろこばれるということも聞く。只、見当もつかないままの今日の仕事であった。
【欄外記入】
（明月みえず）〔と書いて後、みゆきが呼ぶので外に出てみると雲が去って見えた、見えた。やはり明月だった〕

9 月 23 日（月）
ハワイへの出発とハワイ女宮の見学
ハワイ十周年行事という課題を負って一行二三人で出発する。議会側は井上議長夫妻、前議員野原夫妻ほか[ママ]人、行政側は私ら夫婦、室長、川上、それに国際交通課[ママ][ママ]人。西鉄旅行社から二人等である。今回の旅立ちで不慮の問題は予定のハワイアン航空がエンジントラブルのため、急遽出発まぎわの TAZ チャーター便に乗りかえ、先方との関係も齟齬なく滑り出せる日程となったということだ。日付変更線通過のため乗り込んですぐアメリカハワイ時刻二十三日が始まるという事になり、当方夕方七時すぎ発で、ハワイは朝の九時前に着き、一日の業務が始まる。機内で眠れない人は二日つづけての活動になる。ホテルはワイキキビーチのヒルトンで立派だが、市内見学の中に組み込まれていたカメハメハ王の宮殿（州議会の隣）内部見学は貴重な体験であった。リリオカラニ女王が一八九三年退位するまで約一〇〇年の当地の王宮で洋式がかなり入っているのに驚く。

9 月 24 日（火）
ハワイ食文化
ハワイであれこれ歓迎をうけごちそうをいただくのだが、感ずるのはまず分量が多い。それ

に味にデリカシーがない。別の表現をすると大味である。最初に出てくるサラダは野菜のブツ切りを皿に盛ったもので一行のうち誰かが兎の飼(ママ)みたいといっていたのが当っている。ヨーロッパ化していても固有の味付けが育成されていてもいいはずだろう。魚の料理も大味。いわば食文化はもっとこれからだと思う。食べ物が豊かに生産され、統一された民族としての味の文化が育たなかったのであろうか。日本移民も少くないが、日本の味付けが主流になるまでに至らなかった。移民が貧乏ぐらしで陰の者だったせいもあろう。だが庶民の生活にあるミソ、ショーユ、ウドン、ソバ、ラーメンなどは伝統が生きているようだ。イナリも巻ずしも多くの人が食べている。が、この世界でも競争がないとすれば上昇がない。総領事館での緑茶にヨーカンはとても気に入った。ハワイの食文化の、できれば固有の発展を願う。

9 月 25 日（水）

ハワイとの姉妹関係　未来に向けて

福岡県ハワイ州の姉妹締結十周年目にあたる今日、ハワイ知事室隣の会議室で両知事が盟約文に再サインを交わした。誰でも関係者は口先だけで十周年再締結というが、中味はどうかというとそれぞれ違った認識をもっている。経済、スポーツ、文化の交流をさらに深めるというのはやさしいが、基本になる考えはまちまちである。博多、堀川の二組の太鼓が行った。能、舞踊団、お茶も披露した。よろこんでくれるのかわからないだろう。こんなのがあるという見せ物としてしか通用しなくていいかどうか。何を交流するのか。日本にはハワイのあの騒々しい踊りを好く人は多いかも知れないが、私は日本の土には、あれはなじまないのではないかと思う。能のよさがどうしてわかってもらえるだろうか。文化の一つ一つの部門に入るとさらに問題はあろう。今後の交流を盟ってとはいうが、モノミユサン的な旅行から抜け出すにはいくつもの山を越え、時間をかけ、積み上げていかなければならないであろう。宗教のこともあるがそこまでかなり距離がある。

9 月 26 日（木）

宇宙飛行士鬼塚氏の記念館（ハワイ島、コナ）

ハワイ島コナヒルトンホテルに着いて暑さから解放され、ホッとしていたところ、川上氏が来て、福岡県からの電話連絡として、木村正剛県議と九電渡辺社長の逝去の報があったという。どちらも可能性なきにしもあらずの報ではあるが、やはり人の命、びっくりということである。台風の影響の話と重って、福岡での不幸（凶報）にしばし胸うたれるところがあった。木村氏については、本村氏のあとの参院地方区補選中のこともあり、又筑紫野市では選挙になることが頭に浮んだ。参選補選はどうなっているのかとの思いもある。ところで今日はコナ県人会の方から出迎えをうけ空港すぐ近くの、チャレンジャー号事故（一九八六年一月二十八日）で亡くなったエリソン・オニヅカ記念会館に立寄った。福岡県浮羽にルーツを

もつこの鬼塚氏は死の二年前だと思うが（？）福岡県庁来訪あって私は握手したことがあり、印象深い事故であるが、彼にとっては胸のすく燃え立つ「チャレンジ」での死であったであろう。思い残すことのない記念され後世にこそ残る死に方はむしろ祝福すらできると思う。少年時代からの志だったから、記念館で「夢の実現」をもらった。

【欄外記入】

「風は偉大なる者を燃え立たせる」（宇宙飛行士エリソン・オニヅカの生涯）という本、日本訳もの、をいただいた

。

9 月 27 日（金）

子は親ばなれ、女は男ばなれが進んでいく

ハワイは新婚さんのメッカだ。ホテルにいてもそういう感じ。八月はじめに行った済州島は韓国のそれだといわれる。新婚さんにこうした旅行のゆとりができるようになったのは戦後の一つの大きな流れとして歓迎すべきことである。だけどこれが新婦新郎の古い親達に対する関係意識にも急速な変化をもたらしている側面については、古い時代の者としては淋しい思いがする。これは昔からだろうが、母親にとっては息子に嫁をもらうと最愛の息子を嫁にとられてしまったようになるのが大変淋しい。近頃の嫁は姑の意見を、又しきたりに拒否反応を示す。拒否しても生活できる。姑の経験や智恵は生活に無になってはいる。住家でも古い親時代のから離れるか、壊して建て替えないと新夫婦には気に入らない。物の豊かさにより親子関係が一そう冷却に向っている。新しい夫婦の間でも男女平等論、女子の職場進出、年金制の普及により女子は男子から相対的に独立を強めていく。外食が多くなると炊事も女子を解放する。しかし女子の主張が飛び出しすぎるような気がしてならない。報道の煽動もある。

9 月 28 日（土）

国際交流も並大抵ではない

ハワイ時間で今日はハワイを離れる日。十周年姉妹関係の意義を再確認するためだった今回の旅行なんだが、民際レベルの交流を拡げるという目的は進むだろうか。先方では三世、四世になると言葉たべ物をはじめ日常生活の中に日本というものがなくなり、意識もなくなる。必要性がなくなるのだから理解といっても到底覚束ない。日本の経済力の高まりにより言葉伝統工芸物文化財などにも関心がふえる逆現象はたしかにあるとはいえ、日本の伝統が低い生産力の上に成り立ったものが多いだけに今日の生産力に基く社会生活をしている人々にとってはやはり違和感、よそものの感はぬぐえない。だから日本の伝統文化をあらたに取り入れてもらうには、現代風にアレンジしなおす必要があるだろうに、文化人というのは形式流儀こそ誇りとする傾向が強かろうからこれ又大変困難であるに違いない。柔道が世界的スポーツに入れられた今日、元来の「柔」の精神がふっとんでしまっているようだ。

精神を抜くか型を変えるか、国際交流には双方から忍び難き寛容を示すしかないだろう。宗教にしてもだ。

9 月 29 日（日）
帰国したらさんざん
ハワイは二八日、今日は空の旅だし、帰国したら夜だから十分に眠れると思ったが、そうはいかなかった。ハワイの方はカンカン照りばかりの一週間。福岡は台風の跡、さらに曇だった。福岡空港に着いて迎えの富永副知事から被害の大要の報告をうけた。死人が九人も出て、明日の議会での私の最初の演説も内容が予定以上に長いものにならざるをえないめったにない台風だった。二七日のはひどかったらしい。県下全域にあちこち被害が生じている。北海道の方へ抜けた大型だったのだ。わが家に帰ってみると、夜なのではっきりしないが、玄関に木の葉が落ち散らかり、二階の樋の一部が吹きとんで落ちている有様、いわばさんざんである。明日から忙しいのに家屋の事にも心配が新たに生じたわけ。議会の方も対応について論議がある。今日投票の参院補選は午後九時頃の知らせでは、自民重富の当選という。社会の牧野は及ばず投票率も三〇%を割っていた。

9 月 30 日（月）
自然の猛威
昨日の参院補選で自民の重富五五万、社会牧野三六万（投票率二九%戦後最低）。また台風 19 号（27 日）で九州山口地域で 35 万戸が三日間停電と新聞報道。夕刊は、四日目の三十日になっても九州で 14 万、山口・広島両県で 56 万戸が停電していると報じている。ポンプがストップ給水不能、塩害も大きいといわれている。福岡県では筑後と筑豊が大きな打撃である。潮風の塩によりショートするなど、広島県では県内の約三分の二、96 万戸が停電、二十九日からの雨で電柱の碍子についた塩がとけて絶縁不良をおこし、沿海部での停電が多かったという。電力会社の損害は予想外であろう。並木の折れたのも見かける福岡市。「知事さん屋根に登らんで下さいよ」と川上氏がいう。是松氏が屋根から落ちて一ヵ月入院したと運転手の広末氏が指摘。どこに不幸が待っているかも知れないので自信過剰になっていてはいけないことは確かである。あれもこれも、ひとにまかせる気持が今問われているのかも知れない。自然は猛威をもち、己れは無力である。弱いんだなあ。
【欄外記入】
災害救助法の適用五市三町（田川、柳川、山田、筑後、大川、城島、大木、三潴）

10 月要記
なぜか一ヵ月の過ぎるのが実に早い。露の世という表現の句にも出くわす。ふりかえるひまもなく、一つ一つとってみても価値が低いのだろう。ハワイから帰ってすぐ九月下旬の台風

十九号の猛威対応から始ったこの十月、何百年たつ樹木も何十年の瓦も十日ほど前に蒔いた野菜も毎日手入れしてきたハウスも一瞬にして吹きとばされた。行政対応はのんびりしているわけではないのに議会側はうるさく迫ってくる。その県議会が十月十八日までも今年はいつもより十日ほど長い感じだった。ハワイから逆訪問がつづき二十八、九日がそのピークであった。議会が済んですぐ上京し陳情、あとすぐハワイ訪問団受入れと身がいくつあっても足りない程の忙しさで過ぎた。そしてその間、十二月議会の準備、国への政策陳情も必要だった。それらにはさまって三県サミットがあった。行事を思い切ってカットしてくれないかと祈るが、カットしてなお且つこうなるようだからなるようになれと諦めてしまうしかない。下旬に姫高同窓の竹田津永明氏が「美しく齢とる」と題する句集を送って来て、それを全句短冊型の紙に〻〻た自分の根性を自讃したい。

10 月 1 日（火）

国際化の一視点

「グラフふくおか」用の取材で福大講師のウェストンさんと一時間知事室で対談した。県広報だが、外国人からみた福岡、又は日本をきかせてもらうのが目的である。テーマは「国際化社会を考える」であった。彼女はやはり福岡一極集中を気にしていた。又日本人の〝島国性〟も気になっているようだった。私が大陸との接点の位置にあった福岡についてふれると、今後はアメリカや EC 諸国にも通用する福岡県になってほしい、外国人の能力を企業や行政に取り入れるべきであるといっていた。まだまだ排他的と受けとられている。国が先頭に立ち、県もそれにつづけという。公立学校に外国人を使うべきだし、授業科目が旧のままなのはおかしいという。彼女は福大で日米関係論をやっているし、授業の中に経営者から話をきく時間も設けているという。私はきいていて文部省が批判されているように思えてならなかった。こうした点は一寸やそこらでなおらないだろうと思う。国より先に県がせねばならぬのか。

10 月 2 日（水）

台風 19 号被害に筑豊視察を終えて

飯塚農林の管内視察に時間をさいた。九月二七日の 19 号台風が県下全域に及ぼした爪跡は大変なものなので、一部でも見ておかないといけないということでの急な日程。瓦がとんで雨洩りというのは数えきれない。屋根が全部めくれシートを被せたのやら全壊、看板の転倒、杉の山がボッキンボッキン折れている。英彦山神社高巣原はひどかった。樹齢八〇〇年で文化財といわれている杉もバッサリ、神社の建物も押し潰されている部分がある。森林被害はなかなか検証しえないでいる。道に蔽いかぶさった倒木はようやく切り取り、倒れた電柱切れた電線はようやく当座の間にあうまでに至ったようだ。停電給水不能も何時間も待ってようやく原状になったらしい。秋野菜は全面的減収不可避のようだ。育たないから蒔き直し

てでもといっていた。養鶏場もこわれ、ショックで産卵は一割減の状況、八木山のリンゴ園は樹の倒れ、落果、いたみなどで八割の減収とみているという。電力会社、鉄道も被害は大きかろう。零細商工業も、それぞれ所によってであるが合計では巨大。

【欄外記入】

樹齢八〇〇年という彦山神社の杉がポッキリ折れている。八〇〇年ぶりの猛風だったろうか木の寿命がきていたからなのか。時速八八キロメートルだとか。四〇～五〇キロメートルでも異常なのに

10 月 3 日（木）

県立大学（田川）に期待

今日も田川往復。県立大学開校に向けて最後の関門大学設置審をパスしなければならないが、今日社保短での現地調査があるので、知事出てこいというのである。審査委員の方が呼びつけるようなことだったらしい。田川に大学ができて、学生数が今の三倍になることは産炭地後遺症脱却のためには意義がある。飯塚の九工大情報工学部誘致で実験ずみみたいなもの。それに近年は老齢人口の割合が高まり、人手不足が深刻化していることを背景に、マンパワーの確保、質の向上に役立つ方向での田川での大学新設だから、その面からの意義も大きい。今後この大学がぐっと注目されるように勢いをつけたいものである。それにしても香椎の県立女子大は大学院の設置を要請するだけで注目すべき存在感がないのは残念である。どこか安住しているように見えてならない。女子大も田川に負けないように頑張ってくれなくてはと思う。その点、両学長の責任は大きい。文部省は田川のこの大学にかなり期待をよせているようだ。田川に光が当たる日が早く来いといいたい。今日はその一歩を踏みおろす日でありますように。

10 月 4 日（金）

都市緑化祭

今日は北九州響灘緑地で全国都市緑化祭の行事があった。建設省、緑化基金、県、市が主体、市が実行者、全国八回目である。こうした名目で予算を組み、都市環境の改善を進めるのである。響灘埋立地環境が一段とよくなり、よろこばしい限りである。北九州市は緑が多い点で大都市中神戸に次いで二位だという。もちろん都市合併によって周辺部の緑を大きく抱きこんだ結果でもあるが、産業、行政の努力も近年大きな成果をあげたことも見逃せない。われわれ子供の頃の「読本」だったと思うが、七色の煙つねに空を蔽えりというような表現で都市の活力が表現されていたのが念頭に浮ぶが、これは単に六〇余年前ではなく、三〇年前も、この状況がむしろ自慢に値した。今日は発電所の煙突すら気になる時代であり、洞海湾には魚がいなかったのに、今は漁業権が問題になるほどである。産業公害が騒がれて企業も努力した。但し、現在は IC 産業に関連してはるかに高度な公害が問題になっているとい

われる。従来常識だった重化学工業にかかわるものではないようだ。今日響灘緑地で小学生の花植栽をみて心が清められた。

10 月 5 日（土）
台風の影響に思う
ナスビ一本が八〇〇円と昨日の新聞に出ていた。三〇円ぐらいならと思うが、三〇倍もするようになった。九月二十七日の 19 号台風が青野菜に潰滅的打撃を与えたのを視察で十分わかった。キャベツの古い葉などなくてもいいと思うのだが、古いのがあってはじめて目的に沿って育つのだということがよくわかる。世の中すべてそうだろうが、それを自覚する人は多くない。青野菜が高いなら乾物で三〜五ヶ月は辛抱するしかないだろう。リンゴも落ちたり傷物になったり、当面果物も高いわけだ。屋根瓦やスレート、屋根を蔽うのに使えるシートの類もずいぶん値上り又は品なしになっている。県では来週から台風被害総合相談窓口を設けるよう検討している。中部、関東方面の被害はきかないので、そちらから不足物品の補給はできないのであろうか。人手不足は深刻のようだ。屋根から落ちて死亡した老人がいる旨報道されたが、私にも忠告が届いている。荒れるにまかせておくしかないかも知れない。用心に越したことはないのだから。座敷の夏の敷物を今日片付けた。秋だ。

10 月 6 日（日）
にぎにぎしいこと好き？
松山副議長就任祝賀会に行ったのはよいが、まあ疲れた行動であった。豊前市の体育館まで往復の公用車の中で本も読めず退屈、祝賀会での各人の挨拶は各界残さず、至れりつくせりで延々数十分に及ぶ。会場あふれるばかり、老男女少くなかったのに立っていて疲れたろう。政治の側面の配慮が、こうしてしまうのであろう。人はつき合いを主に、顔見せを重要視してやってくる。もっと簡素にお互いが考え対処したらどうだろうか。もし欠席したら大失点になるようでは困る。それにしても豊前地方の沿道でも、こんどの台風十九号で屋根瓦のとんでいるのがかなり見られた。看板はいたるところで飛び倒れていた。鶏舎も屋根を失ったのがあった。一般の生活、農商工にかなり被害があったのではないか。ともかく日本人は今回のような祝賀会のあり方を、みんなが論じ合って改めることが必要だ。海部内閣は政治改革という長期の大宿題をせぬまま次に譲るようだが、この面の改革音頭取りも必要なのだ。

10 月 7 日（月）
台風被害対策についての議会代表質問
代表質問の初日、三人に共通なのは台風一七号、一九号被災対策についての質問姿勢である。これこそ言うは易く行うは難しといえるだろう。法の適用への働きかけをなぜしないというが範囲規模は念頭にないだろう。果物、野菜、水稲、樹木の被害をどうしてくれるとの県

民の願いを知事に質問してくるが、どこまで、誰に、どうすればよいかの線引きができると思っているのであろうか。県は無策だとか、対応が鈍いというが、敏速に何をどうしろというのか、どの地区にせよというのかさっぱりわからない。屋根の瓦や蔽い（シート）、建材の不足、価格の上昇をいろいろ指摘するが、県がどこでどうすればよいのか、提案できる人はいない。執行の側に立つ人も、質問者の中にも被害をうけた人はいるに違いないが、五〇〇万近い県民の、どの部分にどうしたら県としての役割が果せるのか誰にもわからない。共に浴びた天災なのである。打つべき打てる手は打って来ている。だけど代表質問は共通して県が何でもできる、すべきだと考えているみたいであった。

10 月 8 日（火）

天災対策で奥田攻撃

西日本新聞に昨日の代表質問に関連し、県の台風災害対策が鈍いと大きな見出しで解説記事があった。実感としては腹立たしい。野党は口を揃えて災害対策、県単独措置を質問してくるが、「西日本」もこれに同調していることは明らか。非難は、国にも、自治体（市町村）にも、他県にも向けず、ひたすら福岡県、知事に向けてくる。対応が鈍いとか具体性がないとかいろいろにいうが、これならできるだろうとの指摘は全くない。県もやるだけのことはやっている。これからという分野もある。事前対応を求める議会質問もあった。ヒト、事業、カネがそんなに簡単に動かせる訳がない。予備、余剰をもっているわけがない。時間もかかる訳だし、県ができる事せねばならぬ事は現場市町村や国とはおのずから違ってくる。質問も非難も抽象的だし、「奥田攻撃」の別面が見えかくれする。台風被害の合計は一千億をこえるようだが、柿や野菜、杉林、漁網、屋根瓦などの損傷がいかに巨額でも、県政でこれを直ちに個別的に補ってやる方法はすくない。天災と県政の関係をよく考えてほしい。

10 月 9 日（水）

われ老いたり

本会議で林副知事と池田出納長の明日の任期満了に伴う続投が決議された。裏では他の意見もあったが、ここに落付いた。波瀾なくという声が制したのである。続投だが、次への体制が一応定まり、新発足といえよう。ところでよくよく感ずるのは「われ老いたり」ということだ。当り前のようだが今の子供は鉛筆を知らない。ナイフをもって鉛筆を削ることはない。今日の議会質問でも子供の食べ物、飽食時代健康にふれる件があった。昨日牧坂、土井との夕食の時に、土井と蔵書の始末を話の種にした。古本屋も紙屑屋も引取ってくれない。若者は本を読まないし、読んでも全く違うものを読む。でも蔵書資料は捨てたくない。私は大きな梱包にまとめてそれを納骨兼用とし墓石を作るまいといったのだが、彼もうなづいていた。電気器具が部屋のスペースを狭くする時代である。空き瓶、空き缶、包装紙どんどん捨てていく時代、テレビに目を奪われ、海外旅行にふける時代。車社会、手紙もワープロ。

こんな時代に私は全く興味なく、なじまない。懐古というより、古きにしがみついている自分、それしかない自分。時代に合わない存在であることを痛感するこの頃である。

10 月 10 日（木）
一輪の月下美人
何たることか何も身辺にない体育の日の休務。秋のにおいといえば木犀を身辺に感ずるだけ。そうだ、昨日は待っていた一輪の月下美人が咲いた。ゆうべは九時頃にたしかめたら咲いていた。鉢のまま居間に持ち込んだ。満開、強い甘い香、電灯の下で一輪の花の全貌をしげしげ眺めた。とくに珍しいわけではないが、改めて美しさに見とれた。一枚一枚の花弁その連がり萼と花弁の区別がつくようでつかない。おしべとめしべ、とくにおしべの形が手のひらを上に無数の指が並んだよう。花弁をふれてどう表現してよいか、天の授けた色とやわらかさに改めて感動した。これが一夜にして終るというのも不思議で、しぼむのを待たず就床したのだが起きてみるとしぼんでいた。両手を軽くあわせたようなしぼんだ形もまだ美しさが十分残っていると感じられる。今年はおそく、全体としての出来もよくなかったが、来年は総対的にもりかえしてくれよう。

10 月 11 日（金）
久しぶりの金沢
一般質問二人を消化し、きりきり舞いのうちに空路金沢に行った。石川国体秋季大会開会式を明日に控え、国体旗引継ぎの式場面に必要な役を果たすためである。小松空港に着いて石川県の車に迎えられ、金沢市内東急ホテルに向ったのだが、何という錯覚か、「福岡とかわらんではないか」と思ったことが頭に残る。この夏以来、済州、ハワイと外国旅行をしたので一瞬外国に降り立ったものと思ったようだ。それは別として、小松へは一時間余りで着く。すごく近いのである。金沢は経験ある町、昔と今がうまく調和してすばらしい町だ。富山や福井から人を惹きつけている。昔がよく残され兼六の緑地は全国的に誇れる。経済合理性だけでは輪島塗、九谷焼、加賀友禅、金箔など伝統工芸は残せなかったに違いない。経済合理性をこえた職人の根性のようなものが、伝統を、昔を今に伝えているのであろう。金沢はこの点、昔に帰る気分を味わうことのできる所である。海の幸にもめぐまれている。この金沢にとび込んで来たわけ。国体をはなれて、このような思いで、来た人も多かろう。

10 月 12 日（土）
社会党、君が代・日の丸論
石川国体の秋季大会開会式はほんとうに都合よく降雨をみずに予定どおり終った。両陛下と同じくロイアルボックスに席をもらい、国体旗引継ぎの役を果たしたのだが、荒巻京都府知事と連絡していたら、ボックスの下の席にいた嶋崎譲夫妻と顔を合わした。開会式後、福

岡県職員ら四人と「つば甚」（料亭）で夕食会をしていたら、連絡があり、嶋崎氏が席に加わって来た。土井たか子委員長のあと、シャドウキャビネットの文相として、マスコミから「君が代・日の丸」に関し記者会見を申込まれている今、自分は回答を準備したが、その内容は「かくかくしかじか」奥田さんどう思うかと話題を出してきて席をにぎわせた。総じて日の丸はイエス、君が代には疑問という。十四日に記者会見し、十五日の新聞にのるに違いないという。場にいた人は福岡県議会一般質問は終っているが、常任委員会で知事保留になるかも知れんという。学習指導要領で文部省が現場を強くしめつけているだけに事おだやかならずであろう。又彼は以前、仁徳陵など調査すべしと委員会質問をしてタブーと抑えられた事も話題にしていた。

10 月 13 日（日）

知事は冷淡になった？

十月も半ば近くになっている。今日は日曜、金沢から帰って二時以降もこまかい仕事があれこれ残っていて結構夜まであくせく働いた。明日から又県議会、夜のつき合いもつづいていて身の休まるひまもなさそうだ。昨日の金沢での嶋崎氏の話ではすぐる参院補選牧野選挙の時彼は応援に来て、労働組合など周辺の人の話では、奥田は近頃冷淡になったと評していたとか。これまでの生活での付合いが何倍かにふくらんで当方はきりきり舞いしていても相手さんは疎遠に扱われているように感ずるらしい。そうしたことを理解する人とできない人があるようだ。だから誰がどう言おうと気にしないということでなければ身も心ももてない。新しい世界、新しいサイクルの中におかれたと思うほかはない。不満たらたらの人がいけないわけではないが、私の世界もサイクルも従来とは違うということの理解だけはしてほしいものである。

10 月 14 日（月）

親の希望どおり子は育たなくても

県議会、石川国体、又県議会と、あわただしく十月が過ぎていく。日記をつけていて思い出し、一彦の誕生日、四五歳だろう。十一時にもなっておそいと思ったが電話したらまだ帰ってないとのこと。孫娘は元気かときくと元気だけれど、一彦が思うように進学しないので不平をぶつけていると美可はいう。私は、元気でまっすぐにのびている限りでよろこぶしかないではないかと言っておいた。親の思う通りに成長の道を歩んでくれなくても仕方がないのではないか。強いて要望すると子供の方がまがってのびることにでもなったら大変である。親の望みどおりに育つ子はむしろ少いかも知れない。当面の議会でも、後継者難の問題が出たのだが、親の希望どおり育たないどころか、親のあとを継ごうとしない子の方が一般的である。医院、小企業、農林漁業など、かなり親が投資して築いた生業であっても、子は親と同じ仕事苦労はしたくないというのが一般である。グレる子もかなりある当世なんだ

から素直に成長してくれるのをよしとするしかないと思う。

10 月 15 日（火）
ハワイ訪問反省会
ハワイとの姉妹再締結のための訪問旅行反省会が嵯峨野で行われたが、その席で私は田中会長（議連）に提案した。ハワイ県人会が三世、四世時代になっていってメンバーが減っていく悩みがあるので、掘りおこし事業をやろうということである。ハワイ報知新聞に広告を出し、記念品を贈るからルーツを福岡にもっている人は名乗り出てくれという広告である。そして又、県立大学への入学をすすめるため、授業料を無料にするというのもいいだろうと言っておいた。三世、四世になると誰しも県人会意識が薄れるだろう。だから何らかの手段を用いて意識を掘りおこし、それを交流の手がかりとしたいと思ったのである。場合によってはある会社の社長が名乗りでるかも知れないし、それが交流促進の手がかりになるかも知れない。かけ声倒れの交流、姉妹関係ではいけない。当方県民がハワイに行く時も何かお世話をしてやるというのもよい。具体性ある交流になるよう反省する。これが今日の会の趣旨に合うだろう。

10 月 16 日（水）
災害対策に思う
今議会の焦点は台風災害対策になっている。当然といえば当然。九月十四日の台風十七号、二十七日の十九号は全国的な災害をもたらしたが、福岡県が最も大きな被害をうけたし、これは昭和二十八年のいわゆる二八災害以来の天災である。対応が鈍いという知事攻撃の特徴がみえるが、チャンス到来ということでもあろうか、自民党県議がとりわけ敏感に反応している。ただ、私には対応に線引きが容易でないという感じがして仕方がない。瓦一枚、資材高騰が問題だということは判るが、行政が被害者に満足に対応できるかというと、疑問ばかりが残る。既存の制度活用というだけではなく、県としての特別対策、上積みが望まれている。それも判らぬではないが、限度がわかりにくい。貸金にしても利率をゼロまでという議論はありうるが、対策の体系を崩してまでというわけにはいけない。貸出し限度をどこで引くかという点でも多ければいいという論議はできない。議会とくに自民党はこの際無限に被災者におもねる発言を知事にぶっつけ、マスコミがこれに乗る。行政とはそういう具になるものなのか。

10 月 17 日（木）
台風災害に質問集中
議会で夜おそくなったのは二年前から久しぶりだった。今回は九月中下旬の台風災害対策で、質問の熱気が高まったのが特徴である。誰しも災害対策を詰めないと話にならないとい

わんばかりで、とくに農林、文教、商工、総務の四常任委員会が今日にもつれ込んだ。知事保留は文教以外の三委員会だった。でも執拗でもなく助かった。裏での根まわしに多くの人が苦労したことはいうまでもない。執行部の対策が遅い、対応が鈍い、県独自の策がみえない、ニーズがふくれた時は十分に対応する覚悟はあるかというような点に質問は集中した。被害総額はざっとみて千二百億円県の対応としてカウントされるのは三百億円ほどである。弱者対策や資材不足や価格高騰対策まで質問にふくまれていた。配慮が届き県民にあたたかいようにみえていいが、他面、奥田攻撃のいいチャンス、材料というにおいが、質問に見えかくれする。自民党県議にとくにそれが目立っているのも特徴である。疲れた一日であったが、思うに、平和な日本ではある。

10 月 18 日（金）

記者団の災害対策質問

一時前に本会議終了でやっと一段落、記者会見で台風対策が鈍いとの指摘をうけたが、ここでもよくわかってもらえないようだった。一日かけて筑豊の災害状況視察に対しても、住民の声をきかなかったとか、車の速度が早すぎて被害実態が見られるわけがないとかの指摘をうけた。災害が惨状を呈しているのをよく見ないから県の対策が罹災者の満足いくものにならないのではないかとの質問も出た。惨状と県の対応が直に結びつくとの解釈がはじめからあるらしい。又県職員が全貌をつかみ対策を出すぐらいはすぐできる筈なのにぐずぐずしているのは、やる気がないのと知事のリーダーシップが足りないからではないかとか、要するに愚痴と批判を矢継早に放出する記者たちであった。県職員が災害対策で待機していてしかるべきといわんばかりであった。私は職員もそれなりにベストをつくしてくれた筈と答えておいた。平素から人手が余っている訳ではないし、惨状の回復に県がすぐ取りかかれる訳ではない。資料（数字）の提出が遅いとはいうけれど、発表がその時機になった訳で速報する必要があるか否かなのである。

10 月 19 日（土）

松友会に出席して

午後教養部第一会議室で松友会。西原さんがトップ世話役だ。私が部長時代にはじめた会で毎年やっているが、もう十五回前後をかぞえるだろう。山崎先生は存命という九十何歳か。九十九歳でついさきほど逝去された干潟初代部長の話が出た。岡田武彦、問田直幹、毛利浄賢さんなどの顔がみえ、長寿なのに驚く。私が色紙を五〇枚書いて任意贈呈をした。教養部のあり方が問題になっている昨今であるが行方を確信する人はない。言語文化部や健康科学センターは分離独立したものの、これをふくめ行方、あるべき姿をさぐっている段階であるという。立田部長の時代から原田部長が現時点、九大全体の移転の話題も周辺に出ている。本館の建物（ビル）も今や古くみえる。学部、大学院に分解するしかないとの指摘はあるが、

時代の変化がしみじみ感じられる、というかむしろ私ら古すぎるのであろう。若い人にまかせるほかない。この松友会もいつまでもつづかないのではないだろうか。

10 月 20 日（日）
自由のはきちがい
缶ジュースを飲みながら歩いている若者が、その空缶をどうするか、どう選んでみてもひと迷惑な処理しかない。ブロック塀の上に、街路植込みの下に、あるいは公然と路上に、その他、だいたい自動販売機そのための缶ジュースの製造、路頭でのコイン販売機そして若者の自我無法など、界隈を汚す条件は揃っている。自由日本というが、こうした側面はどう考えても納得できない。他面車社会の問題がある。路上駐車が多い。用事があるからその前に駐車する、その件数が多い。放置に等しい空車もある。一車線がふさがれる。そして、右折車がどの横道にも入ろうとしてバックライトを点滅しつつ止っている。これで又一車線がふさがれる。福岡市内では二車線が普通である。直進車は阻まれることが多い。渋滞がおこるのはあたり前である。こういう訳で街は汚いし、車でごった返しになる。自由、自由、そのはきちがえが自業自得の時代風潮となっている。誰も何とかしようとしない。なおせばなおるのに。他国はどうなんだ。

10 月 21 日（月）
文化懇話会発足
県の文化振興ビジョン策定を当面の目標にかかげ初の文化懇話会を東急ホテルで開催した。委員十五人、白石一郎氏は欠席だったが、他は出席してくれた。文化を論ずると限りなく発言しそうな人ばかりだったが、生活文化課の方針に添ってくれ、三〇分のオーバータイムで一応終止とすることができた。文化問題でこの種の討議をおこなったのは初めてだし今後に期待できるが、文化への関心は全国レベルにくらべ、わが県は最低の部類である。石炭と鉄と支店経済ということで馴れてしまっていて、更にその後遺症に精力をそがれていたからである。個性と積み上げ（歴史と伝統）が必要だのに、依存体質で事足りたから、これまで手つかず気づかずであったと思う。気づいても石炭鉄の後遺症対策に追われすぎた。他県はそれだけの個性を発揮していたのである。後進文化県福岡は、これから目ざめて文化振興に力を注ぐ。それは継続されねば力にならない。個性、固有のものは十分にあるのだ。

10 月 22 日（火）
三県の対韓交流の今後
今晩の三県サミット（武雄センチュリーホテル）では、昨年来の話題である韓国南岸諸道と三県の交流が前面に出るはずであったが、今回は新幹線長崎ルートが前面にでてきた。韓国諸道との交流については、自治省の企画が先んずる運びとなり、それが来年二月東京でとい

う予測である。われわれの呼びかけが、自治省の動きに契機を与えたに違いないが、当方の希望は二月のそれのあとということになってしまい、それでは、年度当初予算が主題になる二月県議会のあとで実現不可能というほかなくなる。ただ、この誤算は致し方ないと思う。韓国の道や特別市はわが国の地方自治の水準でおしはかることができないのだから、国と国の間で OK をとるという話になるほかなく、自治省が前面にまずは出てくる必然性があったわけである。韓国の地方自治は今後の展開が待たれる前夜にあるようだ。その点、地方議員や首長の権限、住民の地方自治意識がわが国とどう揃うかをしばらく見守るほかはないようだ。次なる展開に期待したい。

10 月 23 日（水）

知人二人の葬式

今日ははからずも二つのお悔み参りを消化することになった。一つは北九州の松本洋一氏、もう一つは福岡の具島兼三郎先生の奥さん。二人とも私自身浅からぬ関係なので、遺骨、遺骸に参拝するという形でともかく責を果たさせてもらった。松本さんは弁護士で北九のカネミ油症をめぐる訴訟弁護で活躍、北九州市長選の立候補と、かなり無理なお願いをした人である。肺ガンだったという。奥さんは、仕事ばっかりに熱を入れ、十分休養しなかったと話して下さった。市長選に二度も敗れさせる結果になり、気の毒千万というしかない。革新を旗印に、このような大規模選挙をかちとろうということは容易でない。具島先生はもう卒寿、なくなった奥さんは八三歳とのこと。奥さんの遺影はありし日そのまま、社問研の東定さんが先生と原稿のことで話している時に、今なくなったと切れた電話を改めてかけ直された先生の言葉が印象的と彼女はいっていた。先生は今も原稿に、講演に力をふりしぼっておられる。高齢者が片方をなくすとどんな心境になるだろうか。

10 月 24 日（木）

跡地会館の鏡張り再論

陳情で上京、ふくおか会館で休む準備をしていると、県の跡地対策局長白石氏が、了解を求めたいと訪ねて来た。三つ問題というその中の一つが例の路面総ガラス張りという会館設計についてである。彼は施行（ママ）実施に至るまで、更に変改の努力をしてみるといっていた。もう言っても仕方がないかも知れないと前置きして、私は尚変改の意見をもっているということを彼に強調した。総ガラス張りでまっしかくという鏡が路面にそそり立つと、百年の計としては後に県民から必ず批判が出るに違いない。問題になった春以来、私は小規模ながら類似のものをよくよく見ることにした。鏡には空や対面建造物が映るがそれは街並みとして、自己の顔をもたぬ個性のない大建造物ということになってしまう。自ら街の顔造りに参加せず、攪乱する立場でしかなくなる。周辺の者は、「もう決ってからでは遅い」というが、改善への努力、困難でもそれを乗りこえる努力をしたくないから、「遅い」といって逃げて

しまっているにすぎない。責任回避ともいえるだろう。

10 月 25 日（金）
東京福岡県人会 40 周年
東京の福岡県人会四〇周年記念大会がグランドパレスで午後六時から始まり、四〇〇人ばかりが参加した。西日本新聞の二十一日付けの PR 版にこの県人会の前史から四〇年前の再発足以来今日までのアウトラインが紹介されている。今は会員一四〇〇人だが、これがあまりふえてないと説明されている。郷土意識で結ばれる縁への関心が濃くならない世情を反映しているのであろう。昭和 26 年の発足時の会長は松本健次郎氏、今は昭和五八年以来住友建設の斎藤武幸氏が会長である。東京には学生の男子寮、女子寮があって県人会がかかわり一つの繋ぎ役になっているようだ。会誌「東京と福岡」は、今回で四六六号を迎え、三五〇〇部発行されているという。青年部、壮年部、婦人部の部別活動も行われているのだが、愛着がもう一歩というところであろう。ふくおか会館に事務所を構えているが、支えている人達の苦労は多としたい。ふくおか会館は内堀通りイギリス大使館の隣り、一等地にある。どうして維持発展させるかが今後の課題。大阪、名古屋、京都にも同じのがある。同じ悩みだ。

10 月 26 日（土）
「諸葛孔明」を読む
十二時半に帰宅し、楽しい午後の時間を得た。気になっていた東側の残り柿一〇箇を竿を作って取ったり、網干から送ってきた栗や枝豆を食べる中食に気分なごんだ。食後、気になっていた陳舜臣「諸葛孔明」下の残り約三〇ページを読んだ。孔明の死のところにニルヴァーナ（涅槃のこと）がうまく述べてあり、よく燃えた人が美しく死ぬ意味が汲み取ることができたし、五丈原の戦いの場で「死せる孔明、生ける仲達を走らす」という文にも出くわし印象的であった。この本の最後のところ（後記）で、孔明の死後五年、倭の邪馬台国女王卑弥呼が魏に使者を送った（二三九年）にもふれてあった。孔明が記録好きで、紙と筆を常用していたことも記されており、すでに文武両面からみても発達した中国のことが想像できた。しかしこの「諸葛孔明」上下は何日もかかって読みはしたものの、中味をしっかり理解できないこと、記憶にとどめえてないことを残念に思う。もうその能力がないのである。著者が私に贈呈してくれ、気になりながら少しずつやっと読み終えただけである。

10 月 27 日（日）
美しく齢をとる
姫高の先輩で先日東京事務所に訪ねてきた児嶋、西村両氏が問題にしていた句集、竹田津永明氏の「美しく齢とる」から少々引用しておこう。

年の瀬に逝きし友より賀状かな
ゆく年の友の訃報の続きけり
精一ぱい生くる余生や冬さうび　　寒バラ
美しく齢とることや文化の日
酒断ちて自分史書けり秋灯下
つゆの世の自分史半ばに君逝けり
蟬しぐれあといくばくの余生かな
ここよりは遠景細き細き瀧
葉桜や余生は妻とつつましく
春を待たず愛犬ミミの逝きにけり

ターミナルケアーというのを自分で十分やっている人に違いない。

10 月 28 日（月）

ハワイとの交流

前月のハワイ訪問のときも今日のハワイからの来訪の時も宴席での祝辞の中で誰いうことなく「次の十年」「ネクスト・テン・イヤーズ」という音がきこえ、一寸気になる。十周年がきて、姉妹関係の再調印というだけのことなのに、次なる十ヵ年というと少し意味合いが違う。思うに、ハワイ側から言っているみたいである。十年でも悪いわけではないが、向う流の考え方は何年というように数で表現しないと気がすまないのかも知れない。私の方がむしろ日本流で、あいまいで平気といえるだろうか。さきほど訪布の時は、十年経ったのだから再締結して、再スタートに当り、心を改めて交流の分野や大きさ、頻度など考えなおす契機にすると私は言った記憶がある。そこには「次なる十年」に相当する発想はなく、これまでの十年を反省して、「さらに」ということを誓う気持があれば十分との考えがあった。いずれでもいいが、国際交流というのを私は更に深めたい。平和の欲求だ。

10 月 29 日（火）

フランクなハワイとの交流

ハワイナイトに出席して感じた。昨日山ノ上ホテルで県側招待の席よりも、今日の方がずっと工夫されているし、明朗な感じ。われわれは下手だった。子供たちのフラダンスもすばらしかった。ハワイ出身の力士、高見山、小錦、曙の三者も顔をそろえていた。終り方にこの三者が壇上にのぼり私もつき合えといわれ、登って彼らから担ぎ上げられた。小錦など私の四倍の大きさ。タテはもちろんだが横も当然、小びとが割りこんだみたいで満場の客が爆笑してくれた。こんな雰囲気だったので、私のはじめの方の挨拶も原稿読みを止めて、ジョークをまじえてのものに切りかえていてよかったと思う。国際交流といっても無限のひろがりがあり、五月以来福岡・ハワイ間の直航便ができ、新しい角度から一そうの交流が深まる

だろうとの自信が湧いてきた。一そうフランクに往来することこそ大切だと思う。須郷氏が一〇〇〇人の生徒をハワイ旅行に連れていく計画をもっているとか、私はハワイに〝ふくおか村〟を作ってはどうかと思うと夢をまじえての挨拶をしたのであった。何か拠点をもちたいと願っている県民も少くないだろう。

10 月 30 日（水）
不祥事つづく昨今
姫高 16 回生の同窓会を来年八月二十三日に実施しようとの発案につき、それに至る大綱を論議しておこうと、五時半から医学部前の「かね吉」で、牧坂案を中心に山村、土井も参画夕食を共にしながら楽しんだ。卒業五十年記念ということになるわけだ。各クラス二十五人そこそこの生存だが、来年の事になると又何人逝去することか、誰も知るよしもない。つい最近大野氏が逝去したとか。今日も前九電社長の渡辺氏の告別式に行って帰庁したら元県議の住吉氏宅で葬儀の件がおこったときかされた。ほんの一週間のスパンに四件、五件と身辺に不祥事が耳に入る。だから来年夏の同窓会などいっておれるかどうかわからない。それでも熱をいれて計画に加わらざるをえない。京都府知事荒巻氏の父さんが亡くなって高宮に悔みに行ったのが昨日。この人はもう年、それでも事が多すぎる。念には念をいれて健康に注意しよう。

10 月 31 日（木）
男女平等？
婦人問題懇話会からの提言をうけた。新聞はこの時とばかり夕刊に「前向き」に書き立てた。提言をうけた時、私は当時東京湾海上保安巡視艇々長だった豊前出身の佐藤潤子さんとの対談を思い出し男女のちがいの有無について彼女の言葉を紹介した。提言にきた委員の一人の女性が、「そんな尺度でこの問題を考えてはいかん」と私を批判した。「上位」という言葉があるが、多くの場合、女性が焦っているように見える。女なるが故にむしろ過大評価してもいいとでも思っているみたいである。今日の来年度予算重点ヒヤリングの時、私はこのことを背景に、「林業作業員が足りないなら、女性にやってもらったらどうだ」と冗談まじりに言った。木登りはさせられませんよと笑いながら返事がかえってきた。力士にしたらともいった。‥‥要は理想を高くかかげるのはいいが、現実に対しては批判の姿勢を崩さない、という程度でないといけない。せのびした男女同格論が前に出すぎる当今というのが実感だ。

11 月要記
【記載なし】

11 月 1 日（金）

又めぐりくる誕生日

秘書室、コウ氏、龍氏、原田八重さん、三光園、啓二、一彦、笹川良一、そのどれもがいつもお祝いしてくれる。お祝いというのは自分の気持というよりはひとからみた感じのようだ。儀礼のみというわけにもいかないものがある。七一歳にもなってという気がある。この日を自覚しないではないが、何となく改った感じはする。今日の宴席でも話したことだが、積極的な社会存在感がなくなってきたことは確かだ。それぞれに積極的にやってくれることを認めようという程度である。もちろん責任なしとはいえないが、先頭切って指揮棒を振る気持はなくなっている。その意味では政治分野など引退するのが当然であろう。大ぴらにはいえないことながらそう言える。こんど総理になる宮沢氏は七二歳ですよと誰かがいう。だから人それぞれにかなり違った判断があることも事実。私は、公的関与が多すぎて、自分の時間がない。今はどう考えてみても自分の時間の方が価値が高いのである。そんな思いを改めて。

11 月 2 日（土）

高齢はいいが「その後」はやっぱり問題

武蔵大の岡茂男氏が引退して北海道武蔵短大の学長となって札幌に行くという。ホテル日航で卒業生達が集って彼の記念講演会を開く。次郎ずしの中村赫男氏の声がかりで、森山氏を通じて私に出席の要請があり、ともあれ私は六時頃その講演会集会に出向き、パーティが始まる前の時間を利用して岡氏と会い、出席の諸氏に岡氏との出合いなどについて若干スピーチしてお別れした。彼は大正九年九月末の生れ、私と同年だが、まだピチピチしている。でも、今後札幌勤務をどうして消化するのか苦労も少くなかろう。まさか引越しはせぬであろうから羽田・札幌間、週に二回ほど往復するだろうが、大変なエネルギーを要するだろう。高橋正雄先生がもう九〇歳になられるだろうが、仙台に行っているらしい。新幹線を使ってではあるが、これ又元気らしい。今日このあとで近藤栄次郎氏の招待でベイサイドプレースで鵜崎、秋枝両夫人と夕食会があったが、この二女史も年をかさねていてますます元気な様子。めでたいことだが、誰しも「そのあと」が案じられる。

11 月 3 日（日）

趣のない休務

新聞には秋の叙勲名列がのっているだけで、文化の日らしい他のものは何もない、というよりは私自身が世間に疎いだけというべきかも知れない。家から一歩も出ない一日であった。菊花の鑑賞ぐらいはしてしかるべきあろうに、それもしない。わが家にはそうした片輪もない。日常生活のタッチが全くないからである。面倒という気もあるが、平素の多忙さからいえば、タッチすらできない。久しぶりに裏庭の鉢に打水した。天気がつづいているのでどの

鉢も水を欲しがっているみたいだったから。以前、菊の教室に通っていたことがある。鉢もたくさん買ってまねごとのようだが菊作りに熱中したのを思い出す。平常、日々がなければならない。単に今日一日休んだからとて何の自分もない。ポッカリ空いた時間というだけである。だから宿題の揮毫に、そのような日常の延長に時間を充てるにすぎない。深趣ありというべきだのに趣のなさにはわれながら驚いてしまう。休み日の食べ物もデパートあたりのインスタントを利用すれば事足りるが、それは趣ありとはいえない。

11 日 4 日（月）

句を書写して趣を

意地のように細筆を執って俳句のいいのを書きつづけている。句誌万燈を毎月送ってくれるので、二ヵ月ほど先の、したがって昨年のをみながら季節感を味わいながら書く。実際肌で味わえる状況にないのだが、句誌から想像してみるだけで満足する風景も思いおこすことができる。昨日は趣のない毎日であることを綴ったが、この句誌と筆を通じてみずからを慰めている。すべての句にではなく、五句に一つぐらいの割で感動を覚えるのがある。新聞には週一度選句がのせてあるが、一くせも二くせもあって面白味があまりないが、万燈は観念的だが身近かに感ずるものが少くない。旅行しているみたいである。それにしても詠む人はみんな鋭い感覚をしているので感心する。そわそわばたばたの毎日ではそうはならない。ゆっくりした気分で「私」なりの行動、見聞、思索をしてみたいものだ。ツワブキの黄色い花が縦横にわが庭に咲いているこの頃だ。

11 月 5 日（火）

産労懇スタート

十時から十二時半までグランドホテルで中食を含め、産業労働懇話会が開かれた。春以来の連絡でようやく結実した第一回のもの。労、使各 5 人、学識者三人、県から私一人、問題提起は二人、あと労使行政それぞれに随行者席に同数が控えていた。それぞれ労使で言いたいことを言い合って、何をどう考えているかを平素から出し合っておくことがねらいで、特定の目標はもたないものだが、中には、労使で対県要望をするような機関とすべく主張する人もいた。行政に何かをやってもらおうではないかとの気持からであろうが、これは筋違いといえよう。今日の会のテーマは「ゆとり、うるおいの感じられる生活」を築くために語り合おうということであった。労働時間短縮と中小企業のかかわりということになるかも知れない。福岡県は全国平均よりも年間五〇時間ほど労働時間が長いという統計数字がでているが、その原因は何だろう。とくに運輸業のようだ。話合いを進めていきながら、そうしたおくれを克服する方途が見出せればよい。

11 月 6 日（水）

外国語をマスターする若人への期待

今日は中国からの二組、アメリカ大使、三組の外国人来客があった。宮沢内閣が今日新発足したが、首相は英語に堪能という。私の場合外国語は全くだめなので通訳をつけておかねば用を達しない。練習でもという人はあるかも知れないが、もう遅い。それにこの種会見では多くの人が付き合うから、中に通解できぬ人もいるかも知れないから、通訳はこれら随絆の人の役にも立っていると思えば心の荷が軽くなる。国際学会で、英語で挨拶させられ原稿を読んだことがあるが、発音がよくないと、恥の上塗りをすることにもなる。だから全く能力なしを決めてかかるのが一番すなおな態度だろうと思う。職員の中に何程か外国語がわかって知事に不満を感ずる者があるかも知れないが、それは致し方ないことだ。イギリスに一年間も住んだのだから、その機にマスターしておくべきだったのに、いくら後悔しても今は駄目。これからの若い人には二、三箇国をマスターしてほしいと念願する。

11 月 7 日（木）

学会に出て挨拶するのは不向きといえる

東和大学が主催して国際科学シンポジウムがあり、そのバンケットに私が招かれて挨拶する仕組みになっていた。午後七時みんな空腹これから夕食に入ろうという時に、私は日本語で固くるしい挨拶を日本語でやる破目になった。県の技術振興課が窓口らしいが、およそ場の雰囲気に似つかわしくない挨拶文を読む仕組みなので完全に失敗であった。通訳はいらないとの前ぶれだったが、私が英語でやれば「通訳の要なし」ということのようだった。英文でもできていて読むのなら辛うじてやってみるが、行政用語の多い原稿は流暢に話せる人でもだし抜けにという事になると詰ってしまうに違いない。事前の打合せが全くないままでのこうした場での挨拶は赤恥もいいところだ。学界の場は行政の場と雰囲気が全く違う。「よくいらっしゃいました。ごゆっくり博多のまちを楽しんで下さい」程度のもので共通の歓迎になるのに、技術立県がどうだの役人のつくった文章が通用しないのは明らかだのに。何と打合せたのか、不覚をとった一日だった。

11 月 8 日（金）

注目されだした福岡

カナダ領事館のオープン式があった。通産大臣や大使などこの国の要人も来福。まずは通商代表部であり、その昇格したものであるが、東京、大阪に次いでカナダが設けるアンテナであるから、九州又は福岡に目を注いでいるわけだ。そういえばここ数年福岡空港の対外定期航空便がふえつづけ、先日きいたら今は週に発着で二三〇便だという。一日に三〇便以上、往復としてみると一五便以上ということになる。アジア各地についてみると、上海は東京とほぼ近く、同様に大阪とソウルが近い関係にある。羽田、成田、大阪がオーバフローして福

岡にやってくるということもあるが、もう一つ、近頃九州、福岡が見直されるようになってきたともいえる。福岡空港の西側再開発にようやく目途がついたようだが、あと十年でそれも容量をこえるから、早く代替空港を作るべしとの声が高くなる最近である。東アジアよりもカナダの方に目を向け直すべきなのかも知れない。環黄海とか環日本海という声もきく時代だが。

11 月 9 日（土）

九州寮歌祭

第二五回九州寮歌祭が例のごとくグランドホテルで行われた。一年一年の積み上っていく参加者の年齢なのだが、近頃新しい傾向がでてきた。それは第一に奥さん同伴者がふえたことだ。豊かになったせいか加齢によりわびしくなって来たせいか。第二に、小さい子供もかなり会場にみかける。孫の手を引いてということであろうか。中にはミルクを飲ませている風景もある。いずれにせよ会場充満であることにかわりない。参会者の振舞は一つは舞台で高吟する各高校、もう一つは懐旧を語り合う人、もう一つは舞台の乱舞に注目している人、第四は黙々と食べている人、こういうタイプに分けられる。同伴の夫人や子供たちが校歌寮歌に関心があろう筈がない。行って参加することに意味ありという風でもある。いずれにせよ、昭和二四年新制大学がスタートしたのだからあれから四〇年の年月が後続者なきままに過ぎた。当日の帽子、マント、ハッピなどで姿がかわれば若返りもする。どこまで続くだろう。

11 月 10 日（日）

季節を句で味わう

机に向って句誌をみながら筆をもち、それで一歩も外出せぬままに秋酣の気を頭にえがいて楽しんでいる。数例･･･

油山しづかに染まる秋茜	山内良子
白雲の動くともなし柿熟るる	波多江友峰
色褪せてなほ太りをり種茄子	重藤霜月
ダム工事進む温泉の郷柿の秋	中上哲崇
五岳入れ芒の中に写真とる	塚原木犀
来るといふ娘に栗の飯炊いて待つ	小野友雪
薪能照し出されし樟の闇	江崎イツヨ
鵙の贄乾びて風の笛となる	西本麻寿雄

（万燈、昭和六十四年一月号）――次の号は平成元年二月号――

おもしろいから次から次へと季節を追いながら書いている私の近況である。名句が次々に出てくるので、よむ人の直感の鋭さにほんとうに感心する。私はその同感没入者なのである。

11 月 11 日（月）

車社会をふと考える

車社会といわれるようになって久しい。世界の先進諸国はみなそうだろう。今日、ふとその車を帰りの車の中で話題にした。乗用車をもつための経費は月にして三万円は下るまい。車庫のことからその話になったのである。農業をしている人は夫婦で一台づつ、その他の家族で又一台、農機具のエンジンまでいれると四台、五台は珍しくない。それらが維持費をとる。私が思い出したのは、自分の家に車をもつことを否定する意味をこめて今の住居を選んだのであった。一彦が成長した時、車庫がないので困ると不平をいった事がある。知事選後何年か藤江氏がうちにいて車の置き場に四苦八苦していたのを思い出す。私は車を使うよりタクシーをどんどん使った方が安あがりだと計算したことがあった。あれから 25 年は過ぎたようだ。今日の話では、一度乗りだしたら費用がどうであれ、車はやめられないとのこと、持つことの楽しさも加わっている。交通事故で一万人以上の命がなくなっていても尚の傾向だ。

11 月 12 日（火）

散髪での居眠り

散髪していて髪をつんでもらっている間、ほんとうに気持よく居眠り、時に吾にかえり又眠る。ひと前だし、眠っていなかったかのような態度を執って終りの払いを受けて店を出る。あとで思うのは、あのまま逝ってしまうなら極楽だろうということだ。誰しも看取られてさらに看取られて逝くのが当り前と思うだろうが、私は逆で、交通事故であれ何であれ、アッという間に、又は散髪の時のように、うつうつとしながら自分が終るのが幸せと思う。鈴虫が鳴かなくなってもう三週間といわぬだろうが、盛んに、全部が一度にと思う程に鳴く日々から、だんだんかすかに淋しく僅かに鳴く頃へ、そして唯一尾だけに違いない鳴き声、しかも、それも時々に鳴く段階へと移り何時の時か絶えてしまうに至る。一つ一つ生まれ、おそいのが最後まで鳴く役割を負うのか、仲間のうちどれがどれを食うのか、姿が全部見えなくなってしまい、翌年新たに生まれてくる。この鈴虫の世界は環境さえよければ、ほんとうは極楽なのだろうと思ってみる。

11 月 13 日（水）

町村からの災害対策要望

三時から一時間余、町村会館で町村会理事（各郡代表）から、台風 17、19 号災害対策について陳情をうけた。県が準備した予算対応について説明したが、町村又は協同組合の負担分については不満が残ったし、対策の嵩上げも期待しているようだった。当然といえなくはないがこうした自然災害について期待が大きすぎるのが実際である。その裏には住民の絶望的な状況がある一方、災害への過剰行政責任観が見え見えである。住民からの直接要望もあ

るが町村当局の要望もこれに重なっているだろう。みずからたち上がろうとの気慨(ママ)をもつことが基本にないなら、助成案も生きてこないのだが、こうした話合いの中ではなかなかそれが見えてこない。私は県が樹立した原案でおし進めていくしかないと思う。何年かかかって復元するしかないし、ほんとうは誰も基本的には助けてくれないのだと思ってもらうしかない。ただ今回の災害は全県規模なので、県がトータルで受けた損害約一五〇〇億はかなり大きいし、県の施策の第一になるのは確かだ。

11 月 14 日（木）

関門海峡

午後は車を下関にとばす。久しぶりの関門海峡、改めてすごいと思う。戦争が終るまで要塞地帯だった。潮の急な流れと関門両都市に囲まれた海峡の短かさをつくづく思い直し、これでは容易に通過できない重要海峡だし、このゆえにこそ、昔の人達は博多を拠点に、関西と交流することになったのだな感慨ひとしおであった。つまり、この海峡のゆえに博多があるのだということである。昔の海賊というか水軍というか、この海峡をおさえて容易に利得がえられるのである。誰かこの海峡の歴史を綴っていないかなと思う。対岸に赤間神社が見える。そこに車を入れた。安徳天皇の史跡にもなっている。平家物語、琵琶の語りがちらり頭に浮ぶ。神社内で菊展を見ることができた。今年はじめての菊展、もう終りだろう。下関も北九州も近年徐々に衰落しつつあるが、第二関門橋への動きにみられるように、今後上向線をえがくに違いない。その為にがんばろう。

11 月 15 日（金）

台風禍の渋柿皮むき

忙しい用件をすませて夜九時すぎ帰宅してみると、浮羽町から渋柿を二梱届けてくれていた。重い荷物になったと思いながら、干柿にすべく皮をむくことに決め二人でさっさ仕事をしたら十一時に骨格片付いた。二梱のうち一梱は九月の台風の爪跡がありありとあらわれている柿の実だった。皮むきをしたもののはたして通常の干し柿になるかどうか疑わしいものが多い。黒い斑点が実の中まで跡を残しているわけである。合計一八〇個ほどあったが、半分がいわば傷もの、そして粒も小さい。浮羽の方はとくに被害が大きかったとはきかないが、それでもこの有様である。台風禍を改めて実感させられた。浮羽町長からの渋柿は前にも何回かいただいている。毎年大粒の立派なものだが、代金はといっても請求してくれないので、対応を別に考えねばならないであろう。毎年のように渋柿の皮むきを楽しんでいる。毎度食べ残しているので、今回のは、早めに処理せねばと思っている。それにしても、又又一夜の夜なべ皮むきを今年も楽しむことができラッキーだった。

11 月 16 日（土）

毎日健康に気づかい

寒さが例年以上にきびしく感ずる。昨夜は電気毛布を用意した。靴下もはいて就床することにしている。床の中で寒さを感ずると睡眠にさしさわるから、極力そうならないように努めている。そのせいか近頃予期する以上に体調が悪くない。検診で尿糖がマイナスときくとほっとする。頭の重い感じや肩の痛みは、今、以前よりややましになった。ひとから「元気ですね」といわれると、ハイとはいえず、「まずまず仕事を消化しています」と答える。実に多忙な毎日だが、別の面から考えると、だから耐えているのだとも思う。暇な毎日を送っていたら、かえってへこたれているかも知れない。九大にいた頃、使命感と義務感とを分けて義務感でやっていると言ったのだが、今は義務感どころか、已むなくさせられているとしか思えない。好きで立候補しておいて選挙民の前でそんなことは絶対言うなという人もある。それも理にかなうだろうが、やはり本心、させられるからやっているとしかいいようがない。健康のためなら別だが、暇があるなら書斎で一日すごすのが一番いい。

11 月 17 日（日）

読み書き算盤

机上の文鎮のうち九州大学のは創立五〇周年記念一九六一年とあるから三〇年経過した今年は八〇周年である。もう一つ少し小形（ママ）のは千代小学校のもので七三回生卒業記念一九六三年とある。これは一〇一年ということになる。この小学校は一八九〇年に創立卒業生を出したことになる。当時四年制だったら一八八六年にスタートしたわけだ。日本の特徴は初等教育の普及ともいわれる。識字率が高い。その歴史の上に教育水準がぐんぐん引き上げられた。戦後の高水準技術もその上に達成されたといえる。字を概約知っているから技術生産の水準も高くなる。なぜ勉強するのかがまず世界的に不思議がられるし、なぜ試験勉強に熱中して高学歴を目ざすのかも不思議がられる。明治以来近代史の美点はこの点にあった。勉強してみないとわからないが、その素地は徳川時代から築かれていたに違いない。ヨミ、カキ、ソロバンという言葉はすでに徳川時代から人間修行の合言葉になっていたのではないか。

11 月 18 日（月）

空域調整のこと

海上自衛隊小月飛行場と計画されている新北九州空港が空域問題で調整がつかないというので昨年末から新北の計画前進にストップがかけられているので、今日防衛庁教育訓練局長を訪ねた。運輸省は省庁内相互の関係で解決の努力をしてくれればいいのに、地元の努力も引き出して防衛庁にあたろうとしているようだ。小池局長はいろいろ理由をのべていたが、いずれも説得力に乏しい。軍縮が叫ばれてよい今日の世界情勢のなかで、自衛隊は縮小したくないので存在理由を一寸でも薄められないよう努力しているのではないか。国民生

活の自然の動きを前提にその自衛というのであれば、新北にクレームをつけるのではなくて、新北の動きに応じて自衛隊のあり方を整えるのが基本だろうに、その逆を主張しているのである。運輸省は地元のわれわれに防衛庁説得の役をしてほしいと思っているらしい。防衛庁のいい分をきいて時間がたてばたつほど、国政に矛盾がでてくるに違いない。静観とはいわぬが、早く矛盾が出てくる前に、この問題に解を出してほしい。それは政府レベルの調整にほかならない。

11 月 19 日（火）

竹田津さんの句の書写に対応は誤りだったろうか

夕方、竹田津さんが訪ねてきて、ふくおか会館の私の宿り部屋に案内してもらった。夕食を共にしながら話合うつもりにしていたのに、早めに来られたので、三〇分ほどの面接で用件をすませた。彼とは初対面、埼玉の綾瀬の人、同じ年生れ、姫高 13 回生剣道部。児嶋、西村両氏を通して彼と連絡、「美しく齢とる」という俳句集を私に送ってきてくれたので、私は彼の句を全部短冊型の紙片に書き写し、それを西村氏に連絡、竹田津氏が西村氏からそれをきいて私に墨書したものを譲ってくれとの手紙をよこしたので、東京に行く序に持参するから面接してからにしたいと私は電話連絡を入れていたのである。今日私は彼にその本の全句を書写した原物をみんな渡して持ち帰ってもらった。「あなたの好きな句に印をつけて送り返してくれれば、何句でも正式に書いてさし上げます」と約束した。今日渡したのには私は落款してなかった。もっと丁寧に書き落款してさし上げますといって、選を彼にまかせ、書いた全句見本を渡したのであった。後で、こんなことでいいだろうかと反省もした。なるようにしかならないと、さらに自分を慰めた。私が選をし、落款すべきだったかなの反省。彼の要求は二〇句ほどとのことだったのに。

11 月 20 日（水）

二つの躓き石

新北九州空港建設が海上自衛隊小月練習場と空域でぶつかり合うからダメと昨年今年二年にわたって難色を示される。また九州国立博物館も何とかかんとか理由のない理由でゴーサインが出ない。今回の陳情でこの二件がいぜん躓きになっている。世界的冷戦構造解氷のなかで、自衛隊は何とか契機口実をつけて自己保存に懸命になっており、小月飛行場が新北により使えなくなるのではというのは納得できない。共存両立の途がある筈であるし、自衛隊は国を守るというなら、「民生」を優先して自分のあり方を図るべきである。それが自己保存のため逆立ちしようとしている。国立博物館も永年棚ざらしになっているのだが、どうやら神話の中の天皇制を保存しておきたいからかも知れない。文化庁が研究を目的とする博物館は文部省の分野だと今になっていうのは一寸おかしいが、九州が手をあげている以上、アジア文明交流をテーマとするものを他に作りえないから、国は無視して時代におくれ

ないような博物館建設をすることは不可能だろう。この二つに関して国レベルの人達はもっと素直になってくれないだろうか。

11 月 21 日（木）
辛抱の二字に尽きる
十七日の日曜だったか東京での世界女子マラソン大会で資生堂の谷川さんが優勝した。はじめのうちテレビに全く映らなかった人、つまりトップグループからずい分おくれて走っていた。先頭から何十メートル、否一〇〇メートルといわぬ差をつけられていた。だのに最後の方でトップに出てきての優勝、その笑顔が美しく輝いていた。彼女はふくおか会館前の千鳥ガ渕公園あたりのジョギンググループの一人という。前を走る男子を追抜くのを目あてにしていたとも書いてあった。マラソンや一般の長距離を走るには体力や早さが必要であることはいうまでもないが、その上に根気というか根性が必要である。私の経験から推して谷川女史はそれをもっていると思えた。私にはマラソンの経験はないが龍野中学の時の十マイルは強い印象がある。二年生から五年生まで全員が揖保川の川原から一斉にスタートして揖保郡南部のコースを駈けて学校の運動場ゴールに入るのであるが、一時間ほど走るその経験の貴重さがよくわかる。歯をくいしばって辛抱辛抱で完走するその味は何ともいえぬ。中学校で十マイルの成績がよかったから高校・大学とつづいて陸上競技部に誘い込まれた若き日が思い出される。とにかく谷川さん立派。

11 月 22 日（金）
ウソとマコト
夕食は県警本部長ら幹部と中洲の満佐で、雑談の中で林県議が都農の同じ師団で終戦を迎えたことがはじめてわかった。軍隊時代とくに主計官としてのいろんな経験が吹き出るように思い出された。ハワイ開戦五〇周年記念を迎えようとしている直前のこの頃である。経理の仕組みなど、短期間の経験ながら語った。官庁経理のやむをえないウソとマコトがある。決して公開できないことながら、やむなく正しくないことをしてしまう。マル公で買えない資材を買うには購入数をかさ増しするしかないし、平等に分配して余るタバコや酒は経理室で処分するしかない。ごく少量の鮮魚は他の兵がどんなにひもじい思いをしていても、わが方でいただくほかない等々、話していたらみんな笑う。笑いころげる程度の話題、何が正しいのか真実はわからない。又は真実では通用しない世界がある。ウソを含まないと上位のマコトにならない。マコトばかりだと失敗してしまう。今日、田中博『筑紫の磐井』（下）を読んで図書室に返却することができた。磐井は正義派だったわけ。滅ぶ。

11 月 23 日（土）
商工会婦人連合会の人々

勤労感謝の日とて特段の気持で迎えた人はほとんどいないのではなかろうか。この土日は連休だという気分が大部分だろう。それで連休を満喫できる回数が多くなってきた。昨日は商工会婦人部連合会の人達十数人と特別会議室で対話したが、みんな勤労者。働く人は雇われ人と営業者とがあって同じ女性でも雇われ人は連休。労働時間を自由に近代的に使うよう小企業でも努力する。それが許されなければ企業を去るという傾向。それを雇っている商工会婦人部の人達は休業ままならずあたふたと働いてばかりいなければならないと訴えていた。中小企業と包括的にいっては何が基準か話の焦点は定まらないが、婦人部に属する人達はいずれも地域に根をはっていて、少人数でも雇用者を使っている側の人のようだ。それで近頃は雇用者確保と労働条件、労働時間と営業という面の両立に苦慮することが少くないという。世状（ママ）はどんどん変わっていく。まさに企業は存続を問われている。

11 月 24 日（日）

千秋会

すばらしい秋晴れ。今日は千秋楽、そして恒例になった千秋会の日である。優勝は小錦。私が五〇kg、小錦は二五二 kg というから、五倍の体重差。優勝杯を渡す姿をみる人は、会場にしろ、テレビを通じてであれ、こっけいに感じたに違いない。対小錦に渡すのは九州場所二度目である。六時前出発のとき、記念刻印をしてもらったキーホルダーを求め、千秋会場武雄京都屋にもって行った。東京から坂梨、大阪から宮原、山口から馬渡らが出席。中西忍氏が宿懇親会場をあっせんしてくれ、翌日の有田焼窯元見物の用意をしてくれた。嶋津、そして幹事役は河野正輝氏だった。私と嶋津、中西、河野がペアで参加。私が武雄に着いたのは JR を利用、午後八時で宴は始まっていた。十時すぎまで宴と雑談ですごし、そのあとも名残り惜しく思い河野夫妻の部屋に集って夜半の二時すぎまで話し込んで楽しんだ。部屋に帰って就床したのは三時になっていた。久しぶりに風呂に入りせっけんを使ってさっぱりもした。会員は若くても五〇歳に近い。中西氏は六〇歳に近くなっているわけだ。来年は別途韓国に行こうとの話も出た。

11 月 25 日（月）

九大移転のこと

十二月三日から県議会。今日明日六回にわたって県政懇が開かれる。今日は私の方から話題として九州大学の元岡への移転について県としてどう対応するかを話しかけた。公明党は代表質問でこの問題をとりあげる予定という。昨日武雄での千秋会で河野氏がこの点若干説明していたが、最近九大評議会レベルで決定され、背後で福岡市と財界が動いているという。市は九大の市域外への移転を絶対に反対で、九大に強く働きかけて来たという。元岡は西のはずれになるので、全国ないし九州レベルの学界活動には不便がある。しかし、市と大学は切り離しえないというのが、広島の例で痛感されたので、市はあくまで九大を追い、九

大はあくまで市に相談をもちかけてきたらしい。県はつんぼさじきという形になっているわけである。公明党の代表質問になっても、聞いていないと答えるほかはない。私の思いは九州縦貫道と福岡空港から便利なところといえば、元岡のほかにありうるのではないだろうかということである。九大の位置は確かに大きい。更にシンボル性のある建物であってほしい。威厳がなくてはならない。

11 月 26 日（火）

お布施事件終結の会

県評センターの呼びかけで午後六時から「お布施事件終結」パーティが大手門会館で開かれ、当時の関係者、主な被告は夫妻同伴出席であった。私の知事選でよく動いてくれた面々の顔がみられた。諸岡さんや那波さんは被告のうちでもなつかしい。近藤栄次郎氏は初めの秘書室長で苦労をかけた男。会の直前に気付いて私が電話で呼び出し、急に出席してくれることになり、参会者もよろこんでくれた。私は当時新聞が夫妻で寺参りと、ウソを平気で書いたので、それ以来マスコミ嫌いなったという強い印象が今でも残っている。近藤氏がそのへんのことをよく知っている。いろんな思い出もあろうから原稿にして印刷物として残してほしい。諸岡さんのペアになった芳井氏も出席していた。佐方の慈眼寺の僧が京都の西本願寺の推薦状をとりつけ、それを選挙運動の一つの手段としたのがこのお布施事件の筋である。幸の父初治が門徒総代として慈眼寺につくしたという根があり、養子の私への推薦状を西本願寺に要請したのが発想の基礎にある。今日の会でも石井弁護士はこれほど妙な嫌疑はないといっていた。強引に当選の知事の足を引張ろうと中央の自民党が事件にまでもち上げたのだが勝負なしで終ったといえる事件だった。

11 月 27 日（水）

採算性と公共性

県議会決算特別委員会で、高橋（自）と高岡（県ク）の二人が知事保留質問ということで、ひるまは動けなかった。が問題になったのは県立病院（黒木）の赤字問題撤退問題である。赤字はいけないといい、且つ撤退もいけないという。どちらも正しいと思うが、この矛盾する現実にどう対応するかである。採算性と公共性の矛盾統一ということでもある。撤退して赤字を少くせよという人もあれば、過疎地だからこそ公的医療の供給は必要だという人もいる。矛盾解決をせまる人は両方からいくらでもあるけれども、解決策を提示する人はない。議会とか報道機関はこういう場合、いいたいように言って攻めまくり正義者ぶるが、解決案は出さない。あるいは出せないのであろう。撤退に反対する地元の気持はわかるけれども、地元が協力している姿が見えなくてはならない。病院に関しては開業医との利害も絡む。県としての思案は医療、衛生、環境教育啓発など総合的な業務を行えるようにする方向の模索である。黒木病院については老朽化しているので改築もせまられている。問題性が行き詰っ

て大約納得してもらうしかない。

11 月 28 日（木）
自治省関係福岡県人会
東京の陳情行動は一日中雨だった。事務職の案内役の人はこんな時傘をさして走り大変だったろうと思う。それでも二週間といわぬ晴天つづきだったため、いい雨だったと思う。やはり雨は適宜土地をしめらせてくれないといけない。自治省関係福岡県人会は雨で出席が少いかと思われたが、ふくおか会館には予定どおりの人達が集った。地方課長から総務部長になる人が多く、私の時代にはすでに四組ほどそうした人がいただろう。花岡、首藤というお歴々も顔がみえ、顔なじみというよりは県の事を思ってくれる人ばかりといえる感じだ。県の現職の総務部長、次長、財政課長、地方課長も富永副知事も出席した。私は挨拶の中で、今福岡県が、自動車産業や航空交通の面で全国的に大きな注目をあびていること、一昨年のアジア博、昨年の国体、来年の植樹祭など大きなイベントがあってそのためにも知名度があがった点にもふれておいた。自治省という縁のためか、みんな和気靄々と互に話し合って尽きないかの如くであった。

11 月 29 日（金）
ホルモン・城大の運動場など笑いのタネ
六時半からリーセントホテルで来訪の韓国延世大学校歯科大学々長劉氏らとの夕食会になったが、席上、ホルモンという言葉に話題が移った。北九州小倉南区のシンさんが、あれは純粋の大阪弁で「放る物」「棄て物」を意味するという。韓国では一括して腸というようだ。日本では余りものであるが、韓国ではひっぱりダコになる部分で、通常の肉の三倍のねだんだとのこと。みんな感心して聞き入り、ついでに私が済州島から仕入れた博多（バッタ）の話題にも列席者は関心をもち、今日は二つ勉強になったと国際交流センターの長崎氏がいうと、シンさんは授業料を出さんといかんよといい大笑いだった。ついでにいうと、国際交流という中に遊学という大事な問題がある。外国に行って勉強ばかりするのではなく、遊ぶことも必要じゃないかといったら、みんなその通り、遊ばないといけないということになった。シンさんの話では、昔の京城大学の運動場は今もそのままに残っている。奥田さんはそこで長距離競技をしたとの話だから、次のソウル訪問のときにその目で確かめたらいいといっていた。

11 月 30 日（土）
末期的症状
昨夜やっと書きおえた原稿をしめきり約束の今朝問研に届けることができた。コメの自由化問題を題材にした。終って就床したら暴走の車音がきこえてきた。若い者が付近の人にど

れほど迷惑か考えないで、否、迷惑がるからこそ高い爆音を出すのが彼らにとって快いのだとのこと。コメの自由化にあまり抵抗を感じない一般社会、政府の空気が濃厚になってきつつあるが、自分たちの主食の自給が危くなる時がくるなどと考えぬのが一般である。こうした世相は日本にとって末期的とさえ思える。なぜ暴走するのか、なぜコメの自由化に危惧の念をおこさないのか、「知らんぞ」といいたい気持である。今日は宗像ユリックスで高齢化社会を考える諸行事が始まり、主催者として挨拶した。一五〇〇人は集ったが、明日も盛大に行事が展開されるであろうが、年配者はみな熱心だとしても、若者がどうもいけない。もちろんこの空気は若者の責任ではないだろうが、危機が現実のものとなった頃にしかわかってもらえないようだ。

12 月要記

【記載なし】

12 月 1 日（日）

マラソンばやり

空気がつめたく太陽が輝き爽快な休日だ。マラソンびよりといってよいのかと思うのに、一寸あたたかすぎたらしい。朝日国際マラソンはそのためか記録づくりにマイナス条件だったという。日本選手が三位まで独占したのは、ひいき目で気持がよかった。ニッサンの森田選手が優勝、記録は二時間十分五七秒、十一分にならなかったことがすばらしいといわれた。今日は豊前市の天地山公園で県民体育大会走ろう大会があり、四つほどのグループに分かれての、そして二 km、三 km などの区別をしての競走で、初回のスターターを私がつとめた。長距離レースはいずれにせよエネルギーを要する。冬のスポーツにもってこいである。私は若い学生時代をクロスカンツリーといって駈けたのだが、今はもうそのエネルギーは全くない。今日の天地山公園の舞台での開会式に登り着くだけでも体力の衰えをつくづく感じさせられた。ピチピチしている子供達、衰えを自覚する自分と並べていろいろ考えるところがあった。

12 月 2 日（月）

産廃公共広域処分場設置への第一歩始まる

新年のはじめに、いよいよ県環境保全公社が発足する運びとなった。二年以上の苦心の作といってもいい。産廃処理場の建設をめぐって県下で五～六箇所紛争があるが、公社が発足すれば徐々にではあるが、問題は解決されるであろう。人間は己れが出した廃棄物は己れ自らが処理するしかないのであるが、各自勝手に自分の都合だけを主張するから総論賛成各論反対というきまった型の紛争になっていく。公共関与の必要がそこから出てくる。今日はサンヒルズで福岡地区産廃広域処理推進協議会総会の場で合意を得、つづく発起人会で福岡

県環境保全公社を来る一月に発足させることになった。第三セクターで福岡都市圏二二市町村が協力して新宮町に広域処分場を確保し民間の業者と補完し合う形で処理業務を行い広報宣伝も行うという公社の発足である。基本財産一億円の公社を作る。同じ方式を筑後にも、筑豊にも、北九にも適用できるようにするが、まず福岡都市圏から出発ということで足並みが揃ったのである。公共関与ということで住民の信頼を得なければならない。

12 月 3 日（火）

産廃公社設立決定の知事コメント（事務側作成）

昨日の公社設立決定に関する知事コメントは次のとおり（未発表）

公共関与による産業廃棄物広域最終処分場の確保につきましては、県政の最重点課題として位置づけ、一昨年来、関係する市町村と鋭意協議を進めて参ったところであります。

この度、この広域処理事業を行う事業主体の設立に関して、協議が整い、本日、財団法人福岡県環境保全公社設立発起人会が開催され、公社設立の意志決定が行われましたことは、たいへん嬉しく思っている次第であります。

ここに至るまでの間、関係の市町村長さんを始め、関係の皆様方の多大の御理解と御協力をいただきましたことを深く感謝申し上げます。

県といたしましては、今後、公社に対しまして、適切な指導、助言を行いますとともに、この設立を契機といたしまして、産業廃棄物に係る諸課題の解決へ向けて、一層、積極的な展開を図って参りたいと考えております。　　平成三年十二月二日

12 月 4 日（水）

知事公舎のこと

九時から三時前まで高宮別館で各種の報道（新聞、ラジオ、テレビ、グラフふくおか）の新年取材に対応する仕事。久しぶりに元知事公舎の私邸部分、はじめて随行秘書向け公舎を見てまわった。元知事鵜崎氏の奥さんが、この秋ベイサイドプレースでの夕食会の時、知事公舎に入らないのは正解といったのを思い出したが、管理仕事をしている案内者職員は入舎して下さいよという。矛盾に胸をいためられた。鵜崎夫人は、公舎で来客への応対でメンツも何もなくクタクタになるまで働かされた、秘書室を通じては会えない人が公舎におしかけてくる、燗をつけろと要求する人もある、屋根の修理もしてもらえず、大雨の時はタライ、バケツ、洗面器、灰皿まで使って雨もりに対処し、足の裏が何度も黒くなったのを覚えていると私に話してくれた。亀井さんの奥さんもおそらく大変だったに違いない。知事という職をこなしていく上で、公私の区別をどこでつけるか、政倫条例をとかんたんにいう人が少くないが、公舎には容易に入居できるものではないことは殆んど知る人はなさそうだ。

12 月 5 日（木）

知事への過剰期待

西日本新聞の玉川氏の求めで、七人のオピニオンリーダーと新春対談をした。産業廃棄物処理場のことも話題に出た。幸い先日、福岡圏域で県が音頭取りで広域公共処分場を建設着手すべく公社設立の準備ができていたので、そのことも説明した（福岡県環境保全公社）。宗像市の人も来ていたので、宗像の処理場反対の人達に私が「頑張って」といった事で気嫌（ママ）をそこねたのを思い出し、住民に頑張ってというしかない場合のあることを説明した。住民に頑張ってというよりは、知事自身が頑張るべきなのに責任のがれすると宗像の人達は私に不満をぶっつけたのだが、住民運動を頼みとして動くしかない場合もあることを住民も知ってほしいのである。いずれにせよ、今日の七人は不満たっぷりの人達だった。北九州や筑豊産炭地の浮揚について知事の頑張りが足りないと指摘する。革新への依存一辺倒のいい分はいただけない。そういう構えで今日の対談に臨んだ。みんな不満が残ってしまったろう。

12 月 6 日（金）

保革過剰反応なし

昨夜は全国知事会側が自治大臣はじめ自治省幹部を赤坂の菊亭に呼んで歓談した。知事側は鈴木都知事ら九人だった。仄聞するに、福岡県の評判はいいという。政務次官もそういう感じだ。私もなぜ呼ばれたのかとは思ったが、そのように目に付くらしいのである。私は目立つのは好きではないが、注目されるなら、そのように自覚しなければならない。三期目なのだが、はじめのうちは警戒される存在だったのかも知れない。保守革新に色分けして見る人は未だ少くないが、接してみるとそうではないと感ずる人が多いようだ。私自身そういうつもりで物事に対処しているわけではないのだからおのずから判ってもらえるはずと思っている。逆に自民党与党の政府を私がみる場合も同じである。政府を色めがねで見ることはしない、又しなくても結構対応できて満足である。それにしても八〇歳をこえる鈴木都知事は元気そのものだ。若輩にはオバケのようにみえるに違いない。これでは身をひくのは天の道とはいい難い。

12 月 7 日（土）

協同文化社の旧友に語る

協同文化社全国セミナーに出席して二〇分余思いをのべさせてもらった。場所は黒田荘。北海道、大阪、大分、熊本など、若干衰えたかなと思う程度でみんなまだ熱をもっている。ソ連の崩壊が伝えられる今日、出席者は何かを求めているに違いない。社会党は土井氏の退いたあと希望の星はないし、この協同文化社もイデオロギーなく星もないように思うが、それを求めて集ってきていることは疑うべくもない。社会主義とかソ連とかは時代にそぐわないこと明白である。探そう、作ろうというしかない。自民党も社会党も他のどの党も似たり

よったりで核なしといえる。それでいて何とはなしにアメリカに吸引されているみたいである。PKO 法案の扱いが代表している。私はコメの問題を例として今日の状況の危機はらむことを語ってみた。明日は真珠湾攻撃日米開戦五〇周年である。国民のほとんどが何とはなしにアメリカ「寄り」に動かされている。コメの自由化が始まったらわれわれは心も身も売ることになるに違いない。

12 月 8 日（日）

真珠湾攻撃五〇周年

真珠湾奇襲日米開戦五十年という今日、数日前からであるが、報道機関はこれに関連した報道をあれこれ扱っている。世論の傾向がどうなのか、私にはよく理解できない。今の若者はそう気にしていないのではないか。バカな戦争をしたもんだと思うだろう。アメリカでは日本の攻撃をうまく自分に優（有）利に宣伝しているようだ。原爆投下による戦争無関係者（無辜の民）殺戮についてはむしろ肯定的にみえる。歴史はいろんな立場から説明される。説明する人にとって基本的に有利なようになっていることが多い。五十年前のことを今の政府はふれたくないようだ。ふれたとしても筋は別途違ったようになる。今韓国の側から当時の強制的従軍慰安婦にかかわる賠償訴訟が東京地裁に起こされている。裁判所がどうさばくかが注目されるが、政府は日韓平和条約で、解決ずみといっている。しかし当事者たる韓国女性にとっては、国がかかわらないで素通りしたにすぎないという。あれもこれも持ち出されて政府も困惑、法解釈もまちまちという事だろう。

12 月 9 日（月）

ソ連邦消滅の宣言

ロシア、ウクライナ、ベラルーシの三共和国がソ連邦の崩壊について合意したと夕刊が報道している。一九二二年成立したソ連邦が七〇年で歴史を閉じたことになる。三共和国の合意の骨子はおよそ次の諸点である。

1. ソ連邦の消滅を宣言する
2. 独立国家共同体を形成する
3. 共同体には他の国家も参加できる
4 非核地域、中立国を目指す
5. 核兵器の統一管理と不拡散を保障する
6. 旧ソ連邦の調印した条約・協定は順守する
7. 共同体の調整機関はミンスクに置く

ゴルバチョフ大統領の立場は苦しいものになったという。権威が全くなくなったからである。この宣言に参加したのはクラフチュク（ウクライナ）、シュシュケビッチ（ベラルーシ）、エリツィン（ロシア）三大統領で、プレスト州（ベラルーシ国）での最高会議での決定とい

う。まだまだ激震が続こう。

12 月 10 日（火）
岩崎隆次郎氏来る
夜、岩崎隆次郎氏が来て一時間余話し込んでいった。仲好旅館が崩されさら地となり、おばあちゃんが亡くなった話が出た。屏風のいいのがあって、旅館を崩す時に県立美術館に引きとってもらったとか、私が全く気づかぬことであった。彼のいうには具島先生も先日奥さんを亡くし、すっかり気力の衰えを感じておられるとか。私の知り合いの年配者が岩元、内田の両先生をはじめだんだん少くなっていくし散り散りになっていって淋しいという事も話題になった。以前の仲好会をやりましょうと彼はいう。徳本正彦氏もあれこれ荷物が多くなるので、遠くへ行きたいともらしていたという。秘書室が現実対応ばかりに意を用いなってないともいっていた。時代が違い感覚の共通性がなくなってきたことも事実。役人は目の前のことを、自分の面子だけにこだわって事に処す非人間的側面をもつと指摘していた。「大和」言葉や日本の古代史のことも話題になった。楽しい一時だった。

12 月 11 日（水）
欧州連合への一歩
夕刊に欧州共同体（EC）首脳会議が今日未明、欧州連合結成の第一歩となるローマ条約改正に合意したことを報じた。おそくとも九九年までに EC 主要国で欧州中央銀行（ECB）を設立、ECU（エキュー）という共同通貨を発行するということ、その他共通外交、安全保障の政策を樹立することになるだろうという。イギリスがかなり抵抗したらしいが、大陸諸国の十一ヵ国の仲間入りを拒むことはできなかったようである。ソ連の分解とは逆に欧州大連合ができるようにみえる（於オランダ、マーストリヒト）。軍事はいうまでもないが、まだまだ多くの問題が、統合への課題として残るだろうし、その解決融合には時間がかかるであろう。ボーダーレスという言葉が示すように、制度の国境が、既存の国境が、邪魔になってきた――そういう時代になったと解すべきであろう。ソ連側では行動や思考の自由のために巨大な領域の画一的な統一が無理になって来たのであろう。同じく人間の発展を指向しているといえる。

12 月 12 日（木）
寒さと暖房
本格的な寒さになってきた。冷い空気は、身をこわばらせ、気を緊張させる。肌に鳥班をもち歯ががたがたした少年時代を思い出す。小学校の時は帰路が北向きで小走りもした。吐く息が白く、みんな首巻きをした。手袋もつけた。そうした日がつづくと耳が霜焼けしたものだ。霜柱を踏むとかツララを取るとか。それでも毎日が楽しかったし、正月の来るのが待遠

しかった。溜池に氷が張り、その上を小石投げして距離を競ったこともある。今日、そういう光景はないだろう。ほとんどは暖房、室内と室外の差があるだけ。バスも電車も暖房してある。暖房といえば昔は火鉢、置火、消炭が思い出される。戦後は七輪、ガラ、練炭。九大教養部時代も、火鉢暖房の時代があった。教室の暖房はない。高校時代も火鉢。木炭取り火種取りは自己責任。そして、のちのちに石炭ストーブ、プロパンガスの時代を経て、建物自体に暖房という時代になる。二〇年前か、そのあたりからの暖房改造、そしてはじめから暖房つき建物ということになる。ともかくガタガタふるえる寒さがあることはよいことだ。

12 月 13 日（金）

世俗をさけて句の世界

十二月議会、一般質問が終って気持がほぐれた感じ。師走というのもむべなるかと思う程に事しげく、議会質問が終っただけでも、寒さきびしい中、気持おだやかだ。検診の結果、数日前と同様に数値はかなり悪い。緊張のせいならいいのだが。昨日につづいてストーブから離れられず、食卓に向い万燈誌をよんでいった。季節をよくうつしているので、二月号だ（平成二年）。中味は十一月にふさわしい。

終電の音ひきづり来駅夜寒	上野繁子
信者らに祢宜が育てし焚火かな	山田千恵女
秋霖に祢宜の袖濡れ地鎮祭	秦　洋子
祖母山も傾山もけふ小春	吉村道子
遠流とは昔の話島小春	武政礼子
こだまする猟銃音の次を待つ	田中正太
秋天や五岳全たき温泉の窓	江崎蛙声
噴水に北風ぐせのついてをり	宮坂和子
水涸れて仕組みあらはに下り簗	古屋和夫

12 月 14 日（土）

マスコミは奥田批判を狙っている

ひるすぎからマスコミ各社の新春報道取材に高宮別館で次々と対応した。毎日やフクニチ新聞には明らかに嫌味のある話題が予定されていた。半は冗談気味で私は取材をことわってくれと広報室の者に告げていた。新年報道なら新年らしくお互いにおめでとうという気持を底において話題を出せばいいのに奥田県政は過去二期何をしてきたか、今後どういう課題が残っているかとか、知事のリーダーシップをどう思うか等々、何か問題点がないかどうか欠点は何か引き出そうとしているのであった。毎日などウソでも平気に書いて現職知事を刺そうという過去があった。県の「住みにくさ」ワースト三という生活白書の指摘を持ち出して知事の責任だろうという狙いも見えていた。西日本にもその傾向がある。読者の投

書という材料を使って奥田批判をしようとしたので、それがわかって以来配達をことわった。佐賀、熊本、大分などにご気嫌うかがいする西日本だ。山口には北九州をこえるから断念しているが。

12 月 15 日（日）
広報課の体質
県広報課はマスコミを高く評価している。大切にしている。私が取材をやめてもらおうというと、課員達はマスコミをかばう。県広報の貴重な代役を果たしているからという理由である。私のマスコミ非難に対して彼等は私に向ってくる。一般論としてならわからないでもないが、マスコミにはその商業主義のむき出しにされる面があることを知っておかなければならない。一つの記事でも安価に、コストを少く払って作ろうとする。県庁内に張りついていると汗かくことなく取材ができる。又はそれができる範囲内の紙面をつくる。その態度には穴がある筈である。他面、マスコミも大手業界としてのつき合いがある。公平なような面を保ちながら大手業界の気嫌をそこなわないよう気をくばっている。庁内にへばり付いて記事を作り大企業に気嫌を取って記事を作る。そのようなマスコミを広報課はいつも大事に味方につけておこうと配慮しているようにみえる。マスコミ価値ありという反面、広報みずからの努力を省いている。

12 月 16 日（月）
公務の人情・非人情
県職は婦人部を女性部と改称している。今日は青年部女性部の代表との懇談夕食会をリーセントホテルで催した。農改普及所の女性が普及所の改組減は反対といった。その立場からは当然であろう。私は思った。普及所を現状のように作ったのも、それを減らそうとするのも政治だということである。制度を作った民主主義と減らそうとする民主主義の差は何だろう。県庁出先では普及員だけでなく、用地買収に取り組む者も、相手は夜が一番時間的に好都合だし、晩くまでの公用になる。超勤手当は考慮外が現状。フレックスタイムが導入できればというが、そうはできない。秘書室も似た所がある。役所にはカウントし難い勤務が少くなく、パブリックサービスというのはそこに特徴があるといってよい。公教育の場の教員にも超勤手当はない。農家の人達に直接話かけるとき、超勤など超越してしまった心境になる。そこには合理性はないといっていい。ところが都合により「当局」は合理性を真顔で主張する側に軍配をあげることがある。末端の当事者は涙するであろう。その非人情性に激怒する。台風 19 号で泣くに泣けぬ人と、幸がころげこんで笑う人があるという話も出た。

12 月 17 日（火）
芦屋町タウンリゾート問題

今日は知事保留質問ということで、商工、総務両委員会で芦屋タウンリゾート建設問題につき追及された。昨年春の統一地方選でリゾート反対住民の支持をうけて鈴木町長が当選し、計画見直しを約していて、それが既定方針に反し、中央からも県の指導に不信の声があがっているというのである。県の事務当局も鈴木町長の、見直しのため六ヵ月か一年待ってくれとの声には耳をかしても既定方針は動かせないとの立場を貫いている。漁業補償は是非早くという漁民の立場と海浜埋立ては自然破壊だから許せないという住民グループにはさまれて町長は困っている。自然破壊反対派から推され公約にもりこんで当選した町長も今は苦しいだろう。知事保留では公明、自民両派が反鈴木で、知事は早く埋立認可を出さないかとの追及なのである。芦屋町議会は議長が公明党で反町長多数派に乗っているという。私は既定路線だからということとは別に政治関係のねじれはこわいと思うし、行政の継続性ということもあって、自然保全派に推されて町長は軽く乗ってしまったものだと見ている。多数派というのはここでもこわい存在であって、鈴木町長も今気付いているだろう。

12 月 18 日（水）

部落対策どこまでも

リーセントホテルで共産党県委代表など四人と懇談中食した。相かわらず同和問題が一番にとび出した。仇敵みたいに感ずるのであろう。解同も国や自治体の地域改善政策に高すぎる依存心をもちつづけているのである。以前のような部落の様相はまずは見られなくなっている現段階であるが、福岡県で今尚八三〇億円かの残事業があるといい、どこで、何が「残」なのかと問われると、「それは秘」ということらしい。共産党が仇敵のようにいうのはこのあたりにも問題があるからである。残事業といえば、「離島・僻地」にはもっと多くの残の類似事業があるはずである。中央では自民党中心に「残」という考え方、言い方に問題を投げかけるのも肯定できる。「地域改善」という場合、これこれのことをするということを細かく登録するか事業名を明確に限定しておくべきだったのに、それがないので、「残」といういい方で延々と対策が求められ、それを共産党がきらうのである。逆差別ということもいっている。長い自民党政治のダセイの罪である。

12 月 19 日（木）

休務在宅

今日は休務、朝から又揮毫とした。小雨も降って閉じこもるのに適している。身辺はもちろん、家の中それぞれ雑然として、整理の見込みがつかない。年末なのでお歳暮が次々に配達され混乱に輪をかけている。客あって私ひとりビールを出そうとしてもどこがどうなっているのかわからない現状である。近頃とくに家庭内無頓着をきめ込んでいるので一そう混迷が深くなっている。加えて修理工事が完成しない。補修の結果、風呂、玄関まわりが新しくなり、操作になれないので、操作まちがいも起きる。朝から是松氏依頼の揮毫をすること

ができ、肩の荷がおりた思いである。しかし、この頃とくに使っている墨に不満を感ずる。ニジミが多い。中国から買って帰った人のミヤゲものとしての墨を使っているのだが、どうも質が悪いというしかない。量だけで責を果たす社会がしばらくつづいたせいだろう。これでは世界に通用することにはならない。変革すべき点だろう。

12 月 20 日（金）

新聞記事に踊らされて

芦屋町のタウンリゾートの件で知事の答弁が総務と商工の両委員会間にくい違いがあるとの指摘で昨日来執行部の対応が問題になっていた。今日の本会議での委員会報告はそのままではいけないので、執行部（知事）の統一見解を議会側に示すべきだと、午前中も、これに時間をかけて論議した。議会側も（委員会側議長側）朝から盛んに対応を論じていたらしいが、前議長の三木氏が、両委員会の知事保留のその箇所を削除すればくいちがいがなくなるではないかとの指摘で、万事平穏に、その方向でまとまったのが今日の本会議平穏終了の裏ばなし。――つまり、西日本新聞が、知事答弁の違いを大きく報道したので多くの人がそれに踊ったわけ。八まで追及されて八答え、十まで追及されて十答えただけであって、答弁のくいちがいでないのに、新聞がそのように書いた。委員会はそれぞれ OK で決をとっているので、関係ない県議は何で違った答になったのか騒いでもおかしくはない。「何事だ何事だ」という。違ったような本会議報告をしないなら問題はないという三木氏の主張はよい解答であった。

12 月 21 日（土）

「黒船」を読みながら

午前中吉村昭「黒船」を読み進めた。なかなか進まないので若干気になっている本であるが、堀達之助を主人公としてアメリカ黒船来航をめぐる話が展開される。オランダを窓口に欧州と接していたので、それだけでもショックが少なかったと思うが、何しろ開国をめぐる幕末の騒動は私にはとても及ばぬ現象ばかりがでてきて興味はつきない。安政の大獄というのも、これまでは単なる観念知識にすぎなかったのに、この本にはかなり克明にえがき出されていて驚くばかりである。以前から民主主義というものは無限の段階と色調があると思っていたのに、それが全くない幕末だから記述に想像を絶することばかりが展開されるのである。筆者はどういう人か知らないが、小説を書く人がとても勉強しているのには唯々感心させられる。常人の達しうる技ではない。一冊の本という形式は多く同じものがあっても、中味の価値、水準はとても表現しがたい違いがあると思う。以前陳舜臣氏についても、中国史や諸葛孔明を読んで同じく感動したのだった。

12 月 22 日（日）

上京雑念

私ども夫婦が明日の天皇誕生日奉祝会に皇居に招待されているので今日出発となる。又今日は来年度予算の大蔵原案の内示日でもあるというので上京。長の旅となり、二日間は夫婦二人同伴である。旅行もいいが、それだけ拘束された状態となるので私は好きでない。「自由な時間が欲しい」これが一般的な願望だのに、二人同伴となるとよけいな拘束を感ずる。勝手といえば勝手だ。若いときは逆だったであろうに。しかしまあ、皇居に出席できるチャンスを得られるのは有難いことなので、拒否反応は一つもない。ただ皇居に行くとなると、服装など気になる固くるしさがあって、嫌な面である。前回は女性秘書が同行したのに、今回は川上氏一人の同行である。節減したのであろう。上京のついでに大蔵内示状況の説明の会があり、あと、近くの食堂で事務所の人達と夕食をした。私はビーフカレーを食べた。一寸変わったものを食べるのもよいと思ったからだ。どんなメニューでもいつもおいしくたべられるのが幸せと思っている。一面健康度をあらわしているのではないだろうか。

12 月 23 日（月）

天皇誕生祝賀会

天皇誕生祝賀会で皇居に行く。二重橋を改めて見て頭に入れたつもりだが、まだ十分にわかったとはいえない。気分爽かに手入れされた環境は立派だし、これはどこにもっていっても比較で劣るまいと思う。東京ならではの雰囲気である。江戸城がこうして遺産を後世にのこしたという点をよく知っておかねばならないだろう。今の天皇制にいろいろ批判の考えもあろうが、ずいぶん民主化が進んだのではないか。昭和天皇の時とずい分違ってきたと思う。新しい天皇へ代変わりして、宮内庁もかわってきたのであろう。私は昭和天皇の言葉をきいていて、日本語には敬語、女性語があるほか、天皇語というのもあると思っていたのに、代変わりしてからは天皇語はなくなったように思う。敬語まじりの普通われわれの話す丁寧語がきかれるので、心の緊張さが違って重苦しくない。親しみがもてるといってもよい。知事になって八年間にずい分皇室と接するチャンスがあったが、戦前とは変わって来ているに違いない。宮内庁もだんだん民主主義を進めるようになったのであろう。昭和八年生まれの今の天皇、もう高齢に近い。

12 月 24 日（火）

情報を売る

「私はテレビは好きでない」と平素思っている。その理由をいくつかあげてみよう。但し、中東湾岸戦争などでソ連側はその威力の大きさに自己変革を強いられ、世界平和にかえって役立っている面がある点など、長所があるので否定するつもりはない。私が好きでないと思うのは私の今の立場からの思いである。いくつか例挙してみよう。①女の出番が強すぎ、

女のやさしさ、柔和さが乏しい例が多い。②テレビは私の選択の画面、時間と合致しない、或は若い者のシーン、忙しすぎるシーン、特異な殺伐とした――など、好きでない。クイズ番組など騒々しすぎる。③シーンと私とは、気分、呼吸、リズムがあわない。④ドラマなど、作りごと、語りごとが作為的である。⑤強いて人を笑わせようとする･･･ともあれひとに見てもらうために視聴者におもねっているのではないか。それに、一日中切れ目なしに、まちがいなしにやろうとしている点にも無理があるのではないか。「情報を売る」という点に若干の自己矛盾があるのだろう。売るにはカネになる、カネになる情報。もうかる情報屋さんにはつき合えない点も少くない。

12 月 25 日（水）

日本農業への視線

米の自由化に対する田名部農水大臣の言葉（昨日）には意を強くするところがあった。安心できるとは思えないが、あのような「農本主義」者が今の時代にいてもいいのではないかと思う。アメリカのごきげんばかりうかがい、こびている日本の政府、世論はだんだん米の自由化やむなしに傾いているのが現状だからである。社会党もその傾向に流されているし、私の周辺の県職員の中にも「自由化やむなし」の声がある。でも食管法の中で暮してきた日本の農業農村の住民の中にはそれから抜け出す準備がまだできてないのだ。政府が悪いといえばいえるが、みんなでそれをしないで、自由化してしまうと大変なことになるだろう。農村での零細兼農者は徐々に農業から、食管法から離れつつある現状、これがもっと進むであろう。あとは土地所有の制度である。そこまで踏み込んで農政を進めた上での自由化でないと、日本社会は自由化で混乱してしまう。田名部大臣はこれをきちんと指摘していた。総理はまだへつらい弱腰でアメリカを見ている。

12 月 26 日（木）

防衛庁へ妥協を

予算折衝のための上京もおおよその成果がえられたので、今日は県選出の自民党国会議員にお礼の挨拶をして帰福することになった。太田氏は古賀誠氏の部屋にいたので、一括挨拶をした。もう政府の予算大綱もきまったし、それへの影響も十分行使したとの雰囲気であり、「奥田知事」にもシンからの敵意はもたなくなっているので対話もしやすかった。新北九州空港の小月との空域調整で大きな力を発揮してくれた村上参議は、防衛庁も小月をもち出して新北の邪魔をするような事はするなと防衛庁訓練局長の前でしっかり主張してくれ、県の防衛議連の顔を立ててくれた（二十四日午前防衛庁訪問のとき）。この空域問題は昨年のこの頃にわかに持ち出された感じがする。防衛庁が自己の存在を誇示したかったからに違いない。しかし、建設省側もそれに甘んじなかったのは筋が通っていたと思う。民生を守るのが防衛で、防衛のため民生を抑えるというのは本末顚倒である。この筋を通してくれた

のだ。

12 月 27 日（金）

年末挨拶

例年とちがい、今年は今日が御用納め。人勧による差額給与追給も今日あった。公務員にとっては一週間の連休、これから始まるのである。来月四日土曜に休みをとるとすると、九日間の連休になる。今年の年末挨拶は私の分はかんたんにしてあり、社会党の幹部の林、助信、自民党の有力者浜中、三木の四人の県議を自宅訪問するに止った。以前は議長副議長、九経連その他公明党創価学会までまわっていたのに、今年は簡素だと思った。途中ミゾレが降りだして荒天の中の走行となった。年始、年末の挨拶など、拡げれば限りなく拡がるものだ。どこかで線引きするのもやむをえない。忘年会はどのレベル・クラスを問わずやっているようだが、これもきりがない。クリスマスイリューミネーションがまだ点滅して年末の雰囲気をただよわせているが、何でも取り入れてめでたい日とする日本人の傾向は是か非か、考えさせられる。何がクリスマスかといいたいのだが、これが結構意味があるらしい。逆に野趣にみちた日本の伝統（例、節句）はだんだんすたれている。

12 月 28 日（土）

高齢社会病

年がおしつまってから荒天になった。寒さもかなりだし、小雨かみぞれが降り、風が音を立てて吹きまくるようなことが少くなかった。いよいよ年末だという感じであるが、この分なら来年は荒れそうにも思う。夕方中島敏子さんが来て食事を共にしたが、一人暮らしが長く気の毒にも思う。年金は二十数年九大に勤めていて十数万円しかなく、停年後も十何年間九大病院に雑用で働いている。先だってから私も年金が気になっているが、近頃年金受給者はいよいよみじめになってきているという話がきかれる。気力、体力があるうちはとかく働いていないと生きがいに欠ける。老後の生き方がいよいよ問題になってきた。痴呆性老人、高齢者世帯、ひとりぐらし老人は急速にふえているし、政府は年金のみならず高齢者医療をいかに抑えるかに頭をいためている。反対現象が女性の結婚意欲の低下、少産状況だが、これも頭の痛い話であり、いずれにしても社会の一般的豊かさと貧困の反映であろう。早く死んでもいいのに死にたくない人が多い。手当が篤いのだ。

12 月 29 日（日）

中国製の墨に思う

書の一日になった。が中国製の墨を使っていつも不満がつきまとう。みやげ品としてあれこれの人々からいただいているので不満であるのに使いつづけることになる。一種のケチな根性のせいであろう。ヒビがはいる、ポキッと折れる、置き墨汁（余り墨汁を何日も使うケ

チぐせ）にひどいねばりが出る、さらに、太筆で書いた大きな字にニジミが出る。これを克服するのに苦労する。捨てようかと思う反面、やはり捨てないで使う。ここ二、三年とくに中国製が悪いと思うようになった。単に私が感じ体験するだけでなく、ほかの人も体験しているのではないか。社会システムが量でのみ認められ、品質管理、質が問われることがないからではないか。質を問うのはわが国の特徴、長所であるといえるように思う。アメリカだって自動車部品で日本に勝てないといわれている。労働の成果は量のみでなく質で問われる社会でなければならないと思う。質の問題はソフトといわれる分野にも及ぶ。科学技術がこれに大きくかかわると考えられる。日本人を「働き蜂」とのみ非難すると誤りが混入する。

12 月 30 日（月）

年末の掃除仕事

一日かかって雑巾がけに取組み、手がかさかさになってしまった。しかも二つほどの部屋が済んだにすぎず、あとは残ってしまった。書斎ははじめからあきらめていたが、どの部屋も時間がかかることおびただしい。平素ほとんど手つかずの状態であるからだ。顧ると、年末餅つきといって刀出に行くことにしていたこの数年であり、掃除など考えなかったわけである。自分にそれだけの時間があったとは思えないが、平素からもっと努力すれば、できないことはなかったはずである。置物のてっぺん、その周りなどホコリばかりだし、サンとか枠はよくみれば白くなっている。生活時間の一部を掃除にさくように平素から心得おくべきであろう。夕方まで動きに動いてやや疲れもしたが、快い疲れでもあった。こうした掃除があと三〜四日分残ってしまった。今年は「やった」という気分だけで、残ったのは仕方ないとせねばならないだろう。掃除のあと気分も掃除されたようになる。

12 月 31 日（火）

弱体化が進む

足の裏、さらには全身の皮膚に掻きむしったように赤くなる、そのような弱点が強く感じられる近頃。さらに同じく脚力の衰えがひどいと思う。運動はもちろんであるが、同じ姿勢で何分間かいて、次の行動に歩を移そうとする時に、どうにも動きにくく、よろよろする。歩きつづけると、その弱点を忘れることになる。ここ数ヵ月、とくにそう感ずるようになった。右も左も、スネが思うように動かず、痛いのである。坐っていても腰掛けていても、次の行動への移行に制約を感ずるのである。身体の衰えは未経験なので、これが治癒するものなのか、或いは次々に悪化していく一段階なのか自分で判断がつかない。恐らく元に戻らない進行形への自覚なんだと思っている。それからもう一つ――糖や肝のことは別として――物忘れがひどい。人名はもちろん花の名など、知っているはずなのに、連続思考発言に耐えられないほどに、途切れを止むなくするのである。また、字を書いていて、どうにも思い出せないので、いらいらして字書をくる方が早い事がよくある。ヒョッと思い出すことはあるの

に、その時に出てこない、切断されてしまう。頭も弱っているのだ。

年末所感

何ともなく一年が過ぎたようだが、四月の知事選をこえたのが今年最大の記録であろう。去年のように、国体、身スポに代表される全国レベルの行事はなかったが、トヨタ九州その他企業立地の著例があったのも今年の特徴であろう。一昨年、昨年につづいて「福岡が面白い」といわれつづけているのも事実である。内閣は今宮沢になったが、海部以来アメリカの「日本たたき」、日本からの強引なゆさぶり取りがつづいている。中東湾岸戦争以来今年も相かわらずであるが、アメリカのこの姿勢、弱点かくしは今年根づいてしまったように思う。来年正月早々ブッシュ大統領が来日するが、その押し付け姿勢が、次の大統領選、日本の参院選に反映するに違いないが、ソ連邦の崩壊＝共同体への変貌と共に米、日双方に大きな時代の変化となること間違いない。次なる時代への移行がすでに始まっていると思う。われわれはもう古い、次にバトンを渡さねばと思う。それから今年県での大問題は九月のハワイ姉妹関係十周年諸事業と台風十七号、十九号の爪跡であった。とくに十九号は風害がひどく、県境山地で何百年もの樹齢の杉が根から倒され、途中で折られ等々の被害をうけたことだ。英彦山、小石原の行者杉などが著例である。野菜は一時高騰したが年末にはほぼ元に戻ったようだ。来年は不況といわれ、日銀はアメリカに追従して公定歩合を大幅に引き下げ円高に対応しているが、さて来年はどう転ぶか。

補　遺

二月十九日　夜六時警固公園に県評系の人達が一五〇〇人ほど集って戦争反対、統一地方選勝利の気勢をあげた。私は昔の国家総動員法を思い出して挨拶において言及した。戦争と選挙をどう結びつけるか、誰しもあまり明白ではないようだが、総動員法をみると自由も私権人権も何もかも政府に捧げるようになっている。国会審議は無用の戦争政治が用意されている。この法は昭和十三年、何と五十三年前だが要するにずるずると大戦に没入していく大きな山場となるものであった。十二年に中国への侵攻を開始、すぐこの法の準備がなされたのであった。満州事変の延長でもあった。当時は地方自治がなかった。その選挙もなかった。今それらを取り上げてでも戦争をしようとするように感じられる。賃上げ争議も交渉も、組合そのものも認められなくなる。地方自治でなく首長の任命制が復活するかも知れない。そんな前兆を感ずる、予感がする。周辺の若者は平和ボケしているのではないかといわれている。国家総動員法といっても感じがしないに違いない。自民党はそのような国民をよく見ているようだ。危い。

知事選は県政の方針を争点にすればよいと思っていたのに、年明けて戦争の問題が加わってきた。それに言及せざるをえなくなった。ただ、相手予定候補は戦争の問題には全くふれようとしない。奥田を倒そうとのみ主張している。県民の気持がまだまだ反戦気分強しと読

んでいるからである。戦争のセの字もいわない。黙って戦争へ、地方自治否定を望んでいるようだ。

二月二十三日　ソ連に行ったアジス･イラク外相が湾岸和平八項目に合意したのに対し、ブッシュ米大統領は、国連安保理決議の「無条件即時撤退」を満たしていないとして拒否。二十三日正午（日本時間あす二時）までに無条件即時撤退を求める声明を出した。イラクはこの声明にかんたんに応じないはず。だったら「無条件」に「条件」をつけたイラクの立場を、国連を盾にしたアメリカの反応が無理難題ということになる。要するに何十万もの軍を向けたのだからひくにひけないのがアメリカである。地上戦必至との見方が強いが、アメリカが勝つにしても後始末の困難さ、武力では解決できない問題がイスラエル問題、国際諸関係を含めてあまりにも多いということを考えていない態度というしかない。パックスアメリカーナの最後の賭けなのであろう。

二月二十四日　湾岸地上戦が開始された。七〇万人も派遣している多国籍軍。はるばるアメリカからの兵が主力。「せっかく来たのに」という論理が働き、戦闘するために「正義」とか何とか理くつをつけてドンパチやるしかないだろう。理くつはその論理にしたがって後付けされる。現地時間今朝四時開始だが、ソ連のイラクとの条件六項目をめぐるアメリカとの接触中だのに、軍の方がまず実践に入る。そして政府がそれを跡づけて声明をする。これまでいわれている産、学、官の三つ揃いのうち、官がその論理で、政・軍をもって一歩出ている。産、学がそれにつづくに違いない。戦後処理のため、もう産も動きはじめる気配が感じられる。政･軍がもつれるようであってほしい。

二月二十五日　日本の報道は多国籍軍側アメリカ側のものが多く、あっても日本政府及び若干の反戦の運動についてであるが、もっとフセイン側のいい分、アラブとイスラエルの関係など、またここ五〇年ぐらいの歴史上のいきさつについてふれるべきではないのか。フセインが悪い、イラクはけしからん、クウェートを侵略したのが発端だというのでは、アメリカが干与する「正義」すら明らかではない。大軍を派遣した理由もわからない。アラブの事はアラブにまかせるだけのゆとりはなかったのか。それを許さない者に「正義」をいうしかくがあるだろうか。そのような疑念が私には尽きない。ともかく戦うべきでない。

三月二十一日　春分の日という休みは全く雰囲気でない。終日選挙を訴えてとびまわる。相手候補の模様は全くわからない。一目散に走ることと、自分の体力体調が気になるだけ。そして演台に立つとき短い時間で何をいおうかとちらりと考える。落ちをうまくやるのが困難。みゆきも、九一もひと前に出て演説らしくやることが多いようだが、私の何倍かの苦労をしているのではないだろうか。でもひとが注目し聴き耳を立てているのをみると有難い

ことだと思う。選挙ならばこそ、選挙でなくてこんな事はありえない。集ってくる人も政治的人間としての自己をもっているからこそ来るのであろう。話す方もそうだ。そこで心と心が結びついて会が盛り上る。

三月二十一日　九電川合が重富の後援会長とか。出陣式のときだったろう奥田を罵倒して、「一度でも」を四回くりかえし、①中央にもの申したか、②予算を分捕ってきたか、③他県にリーダーシップを発揮したか、等々大きな声で叫んだそうな。これは地方自治というものを全く知らないか、知っていて聴衆をつりこもうとしたか、いずれにせよ自治という憲法に新たにもり込まれた地方のあり方を逆に解するものである。この辺に彼等の、現憲法否定の態度がにじみ出ている。平和・民主主義への否定も同じように中東湾岸戦争に関連して出ている。自衛隊派遣、九〇億ドル問題すべてそうである。危機な傾斜が始まっているというしかない。

五月十日　知事選をはさんで激務がつづいたためか糖尿についての検診数値が血・尿ともにきわめて高かった。それが、今日は以前の「糖尿あり」という程度にさがっていた。血糖も二〇〇を下まわった。秘書室では相当気にしていたようで酷使は減って来た。今日川上（随行）氏は、数値は下ったけれど、秘書室あたりでそれを漏らさないようにして下さいと私にいう。あれも断わり、これも断っている大変な努力を今後もつづけなければいけないので、油断材料は与えられないというのである。五月の大型連休につづき、明、明後と土、日ははじめて職員同様の完全二日連休という日程になった。ゆっくりした気分で身辺整理などしていると数値も落付いていてくるだろうと思う。

五月二十日　しんしんと、又しんしんと夜床の中でひとりわが身を思いながら世界の中のこの命を考えてみる。オートバイか車をふかす音がかすかにきこえる。あれははばかることなく又自分のことだけを考え、音を楽しむ姿のようだ。さらに短いあまり意味のない行為なのに、することに意味があるといわんばかりだ。静かな中で自分ひとりで一点になって命を考えてみることはいいことだと思う。静観というが、静はしんしんとしたなかでと解することができようか。見る、考える、どちらも同じである。反省もある。しーんとした状況で目をつむって一体自分は何なのか、何だったのかをしばらく思ってみるのもいいものだ。騒音、雑音なしに。

七月二十九日　今朝からすごい豪雨。その中を予算陳情のため、辛うじて空の便を得て上京したが、東京は雨なしで心配という状況。昨年七月上旬南筑後、今回筑豊と、集中豪雨による被害が県下でおこっている。でも、それは長崎普賢岳とくらべるとまだ小さいし、近頃の中国大陸の洪水とくらべるとはるかに小さい。われわれは逆に幸いと思わなければなるま

い。中東戦争、その周辺の難民、パキスタンの水難、とても大規模のようだ。「貢献」などといって大金を投げ出した政府が、こうした大衆の苦難に対して冷淡であるように思えてならない。今日県庁からの知らせで、東京事務所で稲築町の水害をきいたが、目の前でも次々に不幸がおこっているのだ。

十月一日　ハワイとの県州姉妹関係締結十周年再調印をして民間交流の強化を誓ったが、さてこれからどうするかとなるとなかなか名案は浮んでこない。文化落差の大きい間柄では輸入受けいれ、強要・支配は、これまでの人類社会にもあったわけだが、落差の小さい両者間では、これが大変困難だ。現時点では植民地主義は薄らぎ、独立が相ついで半世紀になるが、植民地支配が困難だからある意味では支配の放棄である。独立させても混合社会ではトラブルは今以てかなり問題のようだ。植民地支配という三～四世紀間の流れは止ったものの後遺症を残している。われわれは今、こうした現実の上に立って民際国際交流ということを口にするし、心の国際交流、草の根交流などと言い直している。国レベル、政府側からは表に出しにくいがこの傾向に反撥している。国レベルでは国際収支や伝統固持や軍備の意識が棄てられない。だから試行錯誤しかない。第二次大戦後アメリカは武力のゆえに朝鮮南北問題、台湾問題、ベトナム問題そして最近では中東問題をひき起こしているし、イギリスはその尻馬に乗って過ごしてきた。日本も形は同じではないが戦後四十五年間アメリカべったりで対処してきた。まずはじめに国際理解なく敵視する政策のもとで何ができるかということになる。文部省が公立学校で頑迷な考え方を今でももっている。国益とかの概念がまかり通り教育上の人事交流ができない。

十月十八日　「九月議会」がやっと終了。議員にしろ、記者団にしろ、台風災害と県の対応とを直に結びつけて非難をあびせてくるここ数日だった。瓦がとんで県に何かせよと迫るかの如きいいぶりである。「天災である」旨一口もいわなかったが、天災への対応を非難の対象内容としている。右往左往する立場にない人たちが右往左往した人を責めているのである。県行政の立場への理解は微塵もないし、「ごくろうさん」の一言も出ない。こんな勝手な者にとり巻かれては行政の立場も意気があがろう筈はない。責任をもたない者は言うなといいたいこの数日であった。理解あっての注文ならいいが無理解の注文だから腹立たしい。言うだけ、書くだけの人間に取り囲まれていて、やっと解放された。

十二月三十日　朝刊は、意外にも、平和が期待できると思う東西融和の今日、軍事への関心を書きあおっているような記事をのせている。旧ソ連（共同体ができたばかり）では、三十日から各共同体がそれぞれ独自軍をもつ。ウクライナでは、来年七月までに十一共和国の決定に従い、戦術核を撤廃、九四年末までに戦略核も廃棄するという。これはソ連解体後、では軍はどうするかという疑問に対する一つの答であろう。まだまだ固まった方向がでたと

はいえないが、独自軍を各共和国がもち、核廃止の方向にむかっていると想像される。他方、ワシントンでは二十八日チェイニー国防長官がテレビ会見で「大量の旧ソ連軍の核兵器が米国に向けられ、しかもその生産の配備が現在もつづいている」とのべ、加えて「米国西海岸に空母機動艦隊を保持するより、日本に配備した方が安上がりで潜在的な紛争地域にも近い」とのべたという。アメリカが日本の経済力、軍備に大きな期待を寄せていることがうかがえる。五年間に二五%の軍備費削減を余儀なくされているアメリカが、太平洋方面では現状を維持し、その代替を日本に負わせようとの考えがでている。削減しか経済がもたないが、その分を日本に代わらせようとしている姿勢が読みとれる。旧ソ連から独立国家共同体への移行があっているのに、（旧）ソ連は軍事的に何をするかわからないから、それに備えねばならぬと、日本をそそのかしている風にも読みとれる。旧ソ連の大量の核が米国に向けられていると指摘する一方、アメリカの核がどこに向けられているかを全くふれないでいる。こうした調子であおられているわが国政府、国民である。今日、ブッシュ大統領は豪、韓、日などへの十二日間にわたる旅に出て、大統領選向けの国内宣伝ネタ作りに懸命だが、日本に大きな経済・軍事負担をおしつけてくることはほぼ見えている。日本の世論が、このようなアメリカの仕組みにどこまで納得するか。年末になって来年への世界的視野の問題が仕掛けられた訳だ。

【「出納録」への記載】

石川国体秋季大会開会式（10 月 12 日）

於　県立西部緑地公園グランド

12:35　陸上競技場着
　55　集団演技終了
13:09　両陛下ロイヤル席着
13:11　各県選手団入場行進
14:19　開会宣言
　21　国体旗引継ぎ　奥田 福岡　→　中西 石川
　25　炬火入場
　　各挨拶
　44　天皇陛下のおことば
　50　会式通告
15:20　集団演技開始
16:00　　同上終了
　01　両陛下退場
　05　開会式終了
　50　金沢東急ホテル到着

1991 年々末予定

12 月 20 日　　12 月議会終了

22 日　　上京　　大蔵省 4 年度予算原案内示

23 日　　県予算対策本部会議　復活要望について

天皇誕生日祝賀参内‥‥

（一彦・啓二家族とダイヤモンドホテルで夕食会）

24～25 日　各省庁復活要求

26 日　　帰福

27 日　　記者会見

28 日　　政府予算案閣議決定

31 日　　新年祝賀のため上京